

S O A I U n i v e r s i t y

Syllabus

講義要綱

令和元年度(2019)

相愛大学

講義要綱の見方

巻頭の2019年度授業科目一覧で自分の回生の配当科目を確認し、
インデックス番号で履修する授業科目をさがして講義要綱をよく読むこと。

インデックス番号



例)

1-001

ナンバリング	CC100A01	期間	前期
授業科目名	建学の精神/當相敬愛と浄土真宗 I		
英訳科目名	The Philosophy of Soai University (Shin Buddhism) /The Philosophy of Soai University within the Shin Buddhism I		
担当教員名	中平 了悟		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	○
ディプロマ・ポリシー3	○	ディプロマ・ポリシー4	◎
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>相愛大学の名称は、大乘仏教経典『仏説無量寿経』に述べられている「當相敬愛」から命名されました。「お互いに敬い慈しみあう」という意味です。この大乘仏教の精神こそ、相愛大学「建学の精神」です。</p> <p>さらに、建学の精神には「浄土真宗の精神に基づく教育により、有為な人材を育成することを目的とする」と述べられています。つまり、本講義では大乘仏教の思想と浄土真宗の精神を学ぶことで、相愛大学生としての基盤形成を目指します。</p> <p>本講義を通して、人間を深く見つめ直し、相愛大学生の自覚を涵養しましょう。</p> <p>また、この講義では月一回の「定例礼拝」をはじめ、宗教行事への参加を評価対象としています。この点はよく自覚してください。</p>		
到達目標	<p>本講義と宗教行事への参加を通して、「宗教」というものを知ることから始まり、人類の叡智の結晶である「仏教」の基礎を学ぶ。</p> <p>「大乘仏教」「日本仏教」、そして「浄土真宗」へと展開する道筋をたどっていき、本学の「建学の精神」を十分に理解できるようになる。</p>		
授業計画	<p>第1回 相愛大学で学ぶということについて</p> <p>第2回 人間と宗教 (1) 基礎</p> <p>第3回 人間と宗教 (2) 発展</p> <p>第4回 仏教を学ぶ：ブッダの生涯</p> <p>第5回 仏教を学ぶ：仏教思想の基盤</p> <p>第6回 仏教を学ぶ：大乘仏教への展開</p> <p>第7回 大乘仏教を学ぶ (1) 基礎</p> <p>第8回 大乘仏教を学ぶ (2) 発展</p> <p>第9回 親鸞聖人の教え</p> <p>第10回 浄土真宗を学ぶ (1) 基礎</p> <p>第11回 浄土真宗を学ぶ (2) 発展</p> <p>第12回 日本文化について考える</p> <p>第13回 相愛大学の歴史と精神</p> <p>第14回 相愛大学「建学の精神」について考える</p> <p>第15回 まとめ</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>講義への参加態度 (参加状況) ・宗教行事への参加 55%</p> <p>試験・レポート・課題・提出物 45%</p>		
失格条件	3分の1以上欠席した場合、失格とする。		
予習・復習の準備 学習などのアド バイス	<ul style="list-style-type: none"> ・授業時間外における予習・復習等のアドバイス 身の周りの「宗教的なもの」を観察してみよう。 一度、仏教の本を読んでみよう。 大学の宗教行事に参加して、自分自身を見つめてみよう。 ・授業時間外における予習・復習等に必要時間 講義で紹介する文献や仏教教義・宗教思想に関する参考文献を読む…予習 2時間 (90分) 講義で取り上げた問題や仏教教義・宗教思想について整理する………復習 2時間 (90分) 		
課題へのフィード バック	講義内容や宗教行事に関して提出した課題については、必要に応じて個別もしくは全体にコメントします。		
教科書	原則として指定しない。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	月に一度の「定例礼拝」へ出席し、レポートを提出した者は、適宜評価する。		
備考	僧侶としての実務経験をもとに、この授業を進めます。		
科目生への開講	あり		

目 次

◎授業科目一覽

2019年度 授業科目一覽	p.3
---------------	-----

◎講義要綱

1. 基礎科目・共通科目	p.47
2. 音楽学部 共通専門科目	p.141
3. 音楽学部 専門科目	p.285
4. 人文学部	p.621
5. 人間発達学部	p.841
6. 教職課程科目	p.1067
7. 図書館司書課程科目	p.1111
8. 留学生科目	p.1137
9. 専攻科目	p.1157
10. 大学院	p.1179

2019年度 授業科目一覧

2019(H31)年度 授業科目一覧

1. 基礎科目・共通科目

index	配当 年次	2016	2016(H28)年度入学生 IV回生用	配当 年次	2017	2017(H29)年度入学生 III回生用	配当 年次	2018	2018(H30)年度入学生 II回生用	配当 年次	2019	2019(H31)年度入学生 I回生用	区分	2019(H31)年度 担当者	H31 科目生
1-001	I	共	建学の精神	I	共	建学の精神	I	共	建学の精神	I	共	當相敬愛と浄土真宗 I	前期	中平 了悟	E
1-002	I	共	建学の精神	I	共	建学の精神	I	共	建学の精神	I	共	當相敬愛と浄土真宗 I	前期	日高 明	E
1-003	I	共	建学の精神	I	共	建学の精神	I	共	建学の精神	I	共	當相敬愛と浄土真宗 I	前期	佐々木 隆晃	E
1-004	I	共	建学の精神	I	共	建学の精神	I	共	建学の精神	I	共	當相敬愛と浄土真宗 I	後期	塚田 博教	E
1-005	I	共	建学の精神	I	共	建学の精神	I	共	建学の精神	I	共	當相敬愛と浄土真宗 I	後期	本多 彩	E
1-006	I	共	建学の精神	I	共	建学の精神	I	共	建学の精神	I	共	當相敬愛と浄土真宗 I	前期	釋 大智	E
1-007	I	共	建学の精神	I	共	建学の精神	I	共	建学の精神	I	共	當相敬愛と浄土真宗 I	前期	赤井 智顕	E
1-008	II	共	仏教思想と現代	II	共	仏教思想と現代	II	共	仏教思想と現代	II			後期	日高 明	E
1-009	II	共	仏教思想と現代	II	共	仏教思想と現代	II	共	仏教思想と現代	II			前期	本多 彩	E
1-010	II	共	仏教思想と現代	II	共	仏教思想と現代	II	共	仏教思想と現代	II			後期	多村 至恩	E
1-011	II	共	仏教思想と現代	II	共	仏教思想と現代	II	共	仏教思想と現代	II			後期	乗山 悟	E
1-012	II	共	仏教思想と現代	II	共	仏教思想と現代	II	共	仏教思想と現代	II			後期	井上 陽	E
1-013	I	共	大学と地域社会	I	共	大学と地域社会	I	共	大学と地域社会	I			前期/後期	中村 圭爾 ほか	E
1-014											全	大学と社会	前期/後期	中村 圭爾 ほか	E
1-015	II	共	大阪学入門	II	共	大阪学入門	II	共	大阪学入門	II			前期	千葉 真也・前垣 和義	
1-016	II	共	まちづくり入門	II	共	まちづくり入門	II	共	まちづくり入門	II			後期	岡田 裕	
1-017	I	共	キャリアデザイン論	I	共	キャリアデザイン論	I	共	キャリアデザイン論	I	共	キャリアデザイン	前期/後期	向井 光太郎	E
1-018	I	共	キャリアデザイン論 (子)	I	共	キャリアデザイン論 (子)	I	共	キャリアデザイン論 (子)	I	共	キャリアデザイン (子)	前期	直島正樹・木村久男・中井清津子・ 私島京	E
1-019	II	共	キャリアデザイン演習	II	共	キャリアデザイン演習	II	共	キャリアデザイン演習	II			後期	碓 ともみ	
1-020	III	共	インターンシップ実践	III	共	インターンシップ実践	III						前期	碓 ともみ	
1-021	I	共	大学生のための日本語入門	I	共	大学生のための日本語入門	I	共	大学生のための日本語入門	I			前期	千葉 真也	
1-022	I	共	大学生のための日本語入門	I	共	大学生のための日本語入門	I	共	大学生のための日本語入門	I			前期	沼田 潤	
1-023	I	共	大学生のための日本語入門(留)	I	共	大学生のための日本語入門(留)	I	共	大学生のための日本語入門(留)	I			前期	千葉 真也	
1-024	II	共	文章表現	II	共	文章表現	II	共	文章表現	II			前期/後期	千葉 真也	
1-025	I	共	世界の文学	I	共	世界の文学	I	共	世界の文学	I	全	文学概論	前期	山下 昇	E

A+Bはリレー
A+Bは共担

Index	2016 配当年次	2016(H28)年度入学生 IV回生用	2017 配当年次	2017(H29)年度入学生 III回生用	2018 配当年次	2018(H30)年度入学生 II回生用	2019 配当年次	2019(H31)年度入学生 I回生用	区分	2019(H31)年度 担当者	H31 科自生
1-026	I 共	世界の歴史	I 共	世界の歴史	I 共	世界の歴史	全 共	歴史学概論	前期	岡本 託	E
1-027	I 共	世界の地理	I 共	世界の地理	I 共	世界の地理			後期	関口 康之	E
1-028	II 共	世界の思想	II 共	世界の思想	II 共	世界の思想	全 共	倫理学概論	前期	田中 美子	E
1-029	I 共	心理学入門	I 共	心理学入門	I 共	心理学入門	全 共	心理学概論	前期/後期	渡部 美穂子	E
1-030	II 共	経済学入門	II 共	経済学入門	II 共	経済学入門	全 共	経済学概論	集中	薛 秀娟	E
1-031	I 共	日本国憲法	I 共	日本国憲法	I 共	日本国憲法	全 共	日本国憲法	前期/後期	秋元 洋祐	E
1-032	I 共	日本国憲法	I 共	日本国憲法	I 共	日本国憲法	全 共	日本国憲法	後期	奥野 浩之	E
1-033	I 共	教育原論	I 共	教育原論	I 共	教育原論	全 共	教育原論	前期/後期	長谷川 精一	E
1-034	I 共	生活の中の数学	I 共	生活の中の数学	I 共	生活の中の数学	全 共	生活の中の数学	前期/後期	魚住 義介	E
1-035	I 共	科学史入門	I 共	科学史入門	I 共	科学史入門	全 共	科学史概論	前期	池山 鋭郎	E
1-036	II 共	生物学入門	II 共	生物学入門	II 共	生物学入門			後期	太田 和孝	E
1-037	II 共	現代と医学	II 共	現代と医学	II 共	現代と医学	全 共	生活の中の医学	後期	中川 学	E
1-038	II 共	健康科学	II 共	健康科学	II 共	健康科学			前期/後期	西迫 成一郎	E
1-039	II 共	健康科学	II 共	健康科学	II 共	健康科学			後期	奥野 暢通	E
1-040	I 共	健康とスポーツ実技	I 共	健康とスポーツ実技	I 共	健康とスポーツ実技	I 共	健康とスポーツ実技	前期/後期	奥野 暢通	E
1-041	I 共	健康とスポーツ実技	I 共	健康とスポーツ実技	I 共	健康とスポーツ実技	I 共	健康とスポーツ実技	前期/後期	越智 祐光	E
1-042	I 共	健康とスポーツ実技 (健康コー ス)	I 共	健康とスポーツ実技(健康コー ス)	I 共	健康とスポーツ実技(健康コー ス)	I 共	健康とスポーツ実技(健康コー ス)	後期	越智 祐光	E
1-043	II 共	生涯健康とスポーツ実技	II 共	生涯健康とスポーツ実技	II 共	生涯健康とスポーツ実技			前期	奥野 暢通	E
1-044	I 共	情報処理演習A	I 共	情報処理演習A	I 共	情報処理演習A	I 共	情報処理演習A	前期/後期	岡本 久仁子	E
1-045	I 共	情報処理演習A	I 共	情報処理演習A	I 共	情報処理演習A	I 共	情報処理演習A	前期/後期	岡田 裕	E
1-046	I 共	情報処理演習A	I 共	情報処理演習A	I 共	情報処理演習A	I 共	情報処理演習A	前期/後期	中島 欣哉	E
1-047	I 共	情報処理演習B	I 共	情報処理演習B	I 共	情報処理演習B	I 共	情報処理演習B	後期	岡本 久仁子	E
1-048	I 共	情報処理演習B	I 共	情報処理演習B	I 共	情報処理演習B	I 共	情報処理演習B	後期	中島 欣哉	E
1-049	I 共	生涯学習概論	I 共	生涯学習概論	I 共	生涯学習概論	全 共	生涯学習概論	後期集中	鏑 純香	E
1-050	II 共	ポランティア論	II 共	ポランティア論	II 共	ポランティア論			前期	名和 月之介	
1-051	II 共	ポランティア体験	II 共	ポランティア体験	II 共	ポランティア体験			後期	名和 月之介	
1-052	II 共	人権教育	II 共	人権教育	II 共	人権教育	全 共	人権教育	後期	益田 圭	E
1-053	II 共	人権教育	II 共	人権教育	II 共	人権教育	全 共	人権教育	前期	鷗目 巳恵子	E

Index	2016 配当 年次	2016(H28)年度入学生 Ⅳ回生用	2017 配当 年次	2017(H29)年度入学生 Ⅲ回生用	2018 配当 年次	2018(H30)年度入学生 Ⅱ回生用	2019 配当 年次	2019(H31)年度入学生 Ⅰ回生用	区分	2019(H31)年度 担当者	H31 科自生
1-054	I 共	TOEIC対策ⅠA	I 共	TOEIC対策ⅠA	I 共	TOEIC対策ⅠA	全 共	ステップアップ英語A	前期	野口 昌子	E
1-055	I 共	TOEIC対策ⅠB	I 共	TOEIC対策ⅠB	I 共	TOEIC対策ⅠB	全 共	ステップアップ英語B	後期	野口 昌子	E
1-056	Ⅱ 共	TOEIC対策ⅡA	Ⅱ 共	TOEIC対策ⅡA	Ⅱ 共	TOEIC対策ⅡA			前期	森川 康子	
1-057	Ⅱ 共	TOEIC対策ⅡB	Ⅱ 共	TOEIC対策ⅡB	Ⅱ 共	TOEIC対策ⅡB			後期	相馬 沙織	
1-058	I 共	英会話Ⅰ	I 共	英会話Ⅰ	I 共	英会話Ⅰ	I 共	英会話Ⅰ	前期	森川 康子	E
1-059	I 共	英会話Ⅰ	I 共	英会話Ⅰ	I 共	英会話Ⅰ	I 共	英会話Ⅰ	前期	Alexander Morgus	E
1-060	I 共	英会話Ⅰ	I 共	英会話Ⅰ	I 共	英会話Ⅰ	I 共	英会話Ⅰ	前期	Jonathan MacNab	E
1-061	I 共	英会話Ⅰ	I 共	英会話Ⅰ	I 共	英会話Ⅰ	I 共	英会話Ⅰ	前期	Marcel Hurtado	E
1-062	I 共	英会話Ⅰ	I 共	英会話Ⅰ	I 共	英会話Ⅰ	I 共	英会話Ⅰ	前期	名和 月之介	E
1-063	I 共	英会話Ⅰ	I 共	英会話Ⅰ	I 共	英会話Ⅰ	I 共	英会話Ⅰ	前期	相馬 沙織	E
1-064	I 共	英会話Ⅱ	I 共	英会話Ⅱ	I 共	英会話Ⅱ	I 共	英会話Ⅱ	後期	森川 康子	E
1-065	I 共	英会話Ⅱ	I 共	英会話Ⅱ	I 共	英会話Ⅱ	I 共	英会話Ⅱ	後期	Alexander Morgus	E
1-066	I 共	英会話Ⅱ	I 共	英会話Ⅱ	I 共	英会話Ⅱ	I 共	英会話Ⅱ	後期	Jonathan MacNab	E
1-067	I 共	英会話Ⅱ	I 共	英会話Ⅱ	I 共	英会話Ⅱ	I 共	英会話Ⅱ	後期	Marcel Hurtado	E
1-068	I 共	英会話Ⅱ	I 共	英会話Ⅱ	I 共	英会話Ⅱ	I 共	英会話Ⅱ	後期	名和 月之介	E
1-069	I 共	英会話Ⅱ	I 共	英会話Ⅱ	I 共	英会話Ⅱ	I 共	英会話Ⅱ	後期	相馬 沙織	E
1-070	I 共	英語Ⅰ	I 共	英語Ⅰ	I 共	英語Ⅰ	I 共	英語Ⅰ	前期	飯盛 康史	E
1-071	I 共	英語Ⅰ	I 共	英語Ⅰ	I 共	英語Ⅰ	I 共	英語Ⅰ	前期	野口 昌子	E
1-072	I 共	英語Ⅰ	I 共	英語Ⅰ	I 共	英語Ⅰ	I 共	英語Ⅰ	前期	西垣 有夏	E
1-073	I 共	英語Ⅱ	I 共	英語Ⅱ	I 共	英語Ⅱ	I 共	英語Ⅱ	後期	飯盛 康史	E
1-074	I 共	英語Ⅱ	I 共	英語Ⅱ	I 共	英語Ⅱ	I 共	英語Ⅱ	後期	野口 昌子	E
1-075	I 共	英語Ⅱ	I 共	英語Ⅱ	I 共	英語Ⅱ	I 共	英語Ⅱ	後期	西垣 有夏	E
1-076	I 共	ドイツ語Ⅰ	I 共	ドイツ語Ⅰ	I 共	ドイツ語Ⅰ	I 共	ドイツ語Ⅰ	前期	田島 昭洋	E
1-077	I 共	ドイツ語Ⅱ	I 共	ドイツ語Ⅱ	I 共	ドイツ語Ⅱ	I 共	ドイツ語Ⅱ	後期	田島 昭洋	E
1-078	I 共	イタリア語Ⅰ	I 共	イタリア語Ⅰ	I 共	イタリア語Ⅰ	I 共	イタリア語Ⅰ	前期	小松 寛明	E
1-079	I 共	イタリア語Ⅱ	I 共	イタリア語Ⅱ	I 共	イタリア語Ⅱ	I 共	イタリア語Ⅱ	後期	小松 寛明	E
1-080	I 共	フランス語Ⅰ	I 共	フランス語Ⅰ	I 共	フランス語Ⅰ	I 共	フランス語Ⅰ	前期	宮脇 玲奈	E
1-081	I 共	フランス語Ⅱ	I 共	フランス語Ⅱ	I 共	フランス語Ⅱ	I 共	フランス語Ⅱ	後期	宮脇 玲奈	E

index	配当 年次	2016	2016(H28)年度入学生 Ⅳ回生用	配当 年次	2017	2017(H29)年度入学生 Ⅲ回生用	配当 年次	2018	2018(H30)年度入学生 Ⅱ回生用	配当 年次	2019	2019(H31)年度入学生 Ⅰ回生用	区分	2019(H31)年度 担当者	H31 科目生
1-082	I	共	中国語 I	I	共	中国語 I	I	共	中国語 I	I	共	中国語 I	前期	張 煜	E
1-083	I	共	中国語 II	I	共	中国語 II	I	共	中国語 II	I	共	中国語 II	後期	張 煜	E
1-084													前期	長谷川誠一・大橋忠司・生駒佳也・ 奥野浩之	E
1-085													前期	沼田潤・大橋忠司・田中敏正・奥忠憲	E
1-086													前期	千葉真也・黄樹茜・猿山隆子	E
1-087													後期	角谷・藤本・品川・竹山・田條・杉山・ 古川・今井・小野・水野・金石・上田	E
1-088													後期	川中 美津子	E
1-089													前期	岡田 大輔	E
1-090													後期	音楽学部専任教員	E
1-091													集中	J.E.Alsdorf	

2. 音楽学部 共通専門科目

index	配当 年次	2016	2016(H28)年度入学生 Ⅳ回生用	配当 年次	2017	2017(H29)年度入学生 Ⅲ回生用	配当 年次	2018	2018(H30)年度入学生 Ⅱ回生用	配当 年次	2019	2019(H31)年度入学生 Ⅰ回生用	区分	2019(H31)年度 担当者	H31 科目生
2-001	I	音	真宗礼拝音楽	I	音	真宗礼拝音楽	I	音	真宗礼拝音楽	I	音	真宗礼拝音楽	前期	萬田 一樹	
2-002	I	音	真宗礼拝音楽実習Ⅰ	I	音	真宗礼拝音楽実習Ⅰ	I	音	真宗礼拝音楽実習	I	音	真宗礼拝音楽実習	通年集中	泉 貴子	
2-003	II	音	真宗礼拝音楽実習Ⅱ	II	音	真宗礼拝音楽実習Ⅱ	II	音	真宗礼拝音楽実習	II	音	真宗礼拝音楽実習	通年集中	泉 貴子	
2-004	III	音	真宗礼拝音楽実習Ⅲ	III	音	真宗礼拝音楽実習Ⅲ	III	音	真宗礼拝音楽実習	III	音	真宗礼拝音楽実習	通年集中	泉 貴子	
2-005	II	音	西洋音楽史 A	II	音	西洋音楽史 A	II	音	西洋音楽史 (中世・ルネッサン ス・バロック)	II	音	西洋音楽史 (中世・ルネッサン ス・バロック)	前期	黒坂 俊昭	
2-006													前期	黒坂 俊昭	
2-007	II	音	西洋音楽史 B	II	音	西洋音楽史 B	II	音	西洋音楽史 (古典派・ロマン派)	II	音	西洋音楽史 (古典派・ロマン派)	後期	黒坂 俊昭	
2-008													後期	黒坂 俊昭	
2-009	II	音	音楽心理学	II	音	音楽心理学	II	音	音楽心理学	II	音	音楽心理学	集中	河瀬 諭	
2-010	II	音	楽器論	II	音	楽器論	II	音	楽器論	II	音	楽器論	前期	井上 ハルカ	E
2-011	II	音	諸民族の音楽	II	音	諸民族の音楽	II	音	諸民族の音楽	II	音	諸民族の音楽	前期/後期	由比 邦子	E
2-012	II	音	アレクサンダー・テクニク	II	音	アレクサンダー・テクニク	II	音	アレクサンダー・テクニク	II	音	アレクサンダー・テクニク	集中	畑田 日出美	
2-013	III	音	西洋音楽史各論 A	III	音	西洋音楽史各論 A	III	音	西洋音楽史各論 A	III	音	西洋音楽史各論 A	前期	村井 晶子	
2-014	III	音	西洋音楽史各論 B	III	音	西洋音楽史各論 B	III	音	西洋音楽史各論 B	III	音	西洋音楽史各論 B	後期	村井 晶子	
2-015	III	音	管弦楽概説	III	音	管弦楽概説	III	音	管弦楽概説	III	音	管弦楽概説	前期/後期	上田 真紀郎	E

Index	配当 年次	2016	2016(H28) IV回生用	2017	2017(H29) III回生用	配当 年次	2018	2018(H30) II回生用	配当 年次	2019	2019(H31) I回生用	区分	2019(H31)年度 担当者	H31 科自生
2-016	III	音	日本音楽史	II	音	II						集中	榎本 康之	
2-017	IV	音	音楽社会学									前期	小林 昌廣	E
2-018	I	音	音楽基礎演習A	I	音	音楽基礎演習A						前期	石井 尚子	E
2-019	I	音	音楽基礎演習B	I	音	音楽基礎演習B						後期	石井 尚子	E
2-020	I	音	和声法演習I A	I	音	和声法演習I A	I	音	I	音	和声法演習I	前期	大慈弥 恵麻	E
2-021	I	音	和声法演習I A	I	音	和声法演習I A	I	音	I	音	和声法演習I	前期	奥西 千壽	E
2-022	I	音	和声法演習I A	I	音	和声法演習I A	I	音	I	音	和声法演習I	前期	丹羽 あゆみ	E
2-023	I	音	和声法演習I A	I	音	和声法演習I A	I	音	I	音	和声法演習I	前期	赤石 敏夫	E
2-024	I	音	和声法演習I A	I	音	和声法演習I A	I	音	I	音	和声法演習I	前期	中野 佳代子	E
2-025	I	音	和声法演習I A	I	音	和声法演習I A	I	音	I	音	和声法演習I	前期	吉澤 ゆかり	E
2-026	I	音	和声法演習I B	I	音	和声法演習I B	I	音	I	音	和声法演習II	後期	大慈弥 恵麻	E
2-027	I	音	和声法演習I B	I	音	和声法演習I B	I	音	I	音	和声法演習II	後期	奥西 千壽	E
2-028	I	音	和声法演習I B	I	音	和声法演習I B	I	音	I	音	和声法演習II	後期	丹羽 あゆみ	E
2-029	I	音	和声法演習I B	I	音	和声法演習I B	I	音	I	音	和声法演習II	後期	赤石 敏夫	E
2-030	I	音	和声法演習I B	I	音	和声法演習I B	I	音	I	音	和声法演習II	後期	中野 佳代子	E
2-031	I	音	和声法演習I B	I	音	和声法演習I B	I	音	I	音	和声法演習II	後期	吉澤 ゆかり	E
2-032	II	音	和声法演習II A	II	音	和声法演習II A						前期	赤石 敏夫	E
2-033							II	音	II	音	和声法演習III	前期	赤石 敏夫	E
2-034	II	音	和声法演習II A	II	音	和声法演習II A						前期	小西 円子	
2-035							II	音	II	音	和声法演習III	前期	小西 円子	
2-036							II	音	II	音	和声法演習III	前期	吉澤 ゆかり	
2-037							II	音	II	音	和声法演習III	前期	大慈弥 恵麻	
2-038	II	音	和声法演習II B	II	音	和声法演習II B						後期	赤石 敏夫	E
2-039							II	音	II	音	和声法演習IV	後期	赤石 敏夫	E
2-040	II	音	和声法演習II B	II	音	和声法演習II B						後期	小西 円子	
2-041							II	音	II	音	和声法演習IV	後期	小西 円子	
2-042							II	音	II	音	和声法演習IV	後期	吉澤 ゆかり	
2-043							II	音	II	音	和声法演習IV	後期	大慈弥 恵麻	

Index	配当 年次	2016(H28)年度入学生 Ⅳ回生用	2017 配当 年次	2017(H29)年度入学生 Ⅲ回生用	配当 年次	2018 配当 年次	2018(H30)年度入学生 Ⅱ回生用	2019 配当 年次	2019(H31)年度入学生 Ⅰ回生用	区分	2019(H31)年度 担当者	H31 科自生
2-044	I	ソルフエージュA	I	ソルフエージュA	I	I	ソルフエージュⅠ	I	ソルフエージュⅠ	前期	赤石 敏夫	E
2-045	I	ソルフエージュA	I	ソルフエージュA	I	I	ソルフエージュⅠ	I	ソルフエージュⅠ	前期	山本 京子	E
2-046	I	ソルフエージュA	I	ソルフエージュA	I	I	ソルフエージュⅠ	I	ソルフエージュⅠ	前期	山本 京子	E
2-047	I	ソルフエージュA	I	ソルフエージュA	I	I	ソルフエージュⅠ	I	ソルフエージュⅠ	前期	中野 佳代子	E
2-048	I	ソルフエージュA	I	ソルフエージュA	I					前期	稲谷 育子	
2-049	I	ソルフエージュB	I	ソルフエージュB	I	I	ソルフエージュⅡ	I	ソルフエージュⅡ	後期	赤石 敏夫	E
2-050	I	ソルフエージュB	I	ソルフエージュB	I	I	ソルフエージュⅡ	I	ソルフエージュⅡ	後期	山本 京子	E
2-051	I	ソルフエージュB	I	ソルフエージュB	I	I	ソルフエージュⅡ	I	ソルフエージュⅡ	後期	山本 京子	E
2-052	I	ソルフエージュB	I	ソルフエージュB	I	I	ソルフエージュⅡ	I	ソルフエージュⅡ	後期	中野 佳代子	E
2-053	I	ソルフエージュB	I	ソルフエージュB	I					後期	稲谷 育子	
2-054	II	ソルフエージュC	II	ソルフエージュC	II					前期	赤石 敏夫	E
2-055						II	ソルフエージュⅢ			前期	赤石 敏夫	E
2-056	II	ソルフエージュC	II	ソルフエージュC	II					前期	稲谷 育子	E
2-057						II	ソルフエージュⅢ			前期	稲谷 育子	E
2-058						II	ソルフエージュⅢ			前期	中野 佳代子	
2-059						II	ソルフエージュⅢ			前期	山本 京子	
2-060	II	ソルフエージュD	II	ソルフエージュD	II					後期	赤石 敏夫	E
2-061						II	ソルフエージュⅣ			後期	赤石 敏夫	E
2-062	II	ソルフエージュD	II	ソルフエージュD	II					後期	稲谷 育子	E
2-063						II	ソルフエージュⅣ			後期	稲谷 育子	E
2-064						II	ソルフエージュⅣ			後期	中野 佳代子	
2-065						II	ソルフエージュⅣ			後期	山本 京子	
2-066	II	楽曲分析A	II	楽曲分析A	II					前期	松本 直祐樹	
2-067	II	楽曲分析B	II	楽曲分析B	II		楽曲分析			後期	松本 直祐樹	
2-068	I	歌唱法	I	歌唱法	I					前期	井岡 潤子	
2-069	I	合唱A	I	合唱A	I	I	合唱Ⅰ	I	合唱Ⅰ	前期	田末 勝志	
2-070	I	合唱B	I	合唱B	I					後期	田末 勝志	
2-071						I	合唱Ⅱ	I	合唱Ⅱ	後期	田末 勝志	

index	2016 配当年次	2016(H28)年度入学生 IV回生用	2017 配当年次	2017(H29)年度入学生 III回生用	2018 配当年次	2018(H30)年度入学生 II回生用	2019 配当年次	2019(H31)年度入学生 I回生用	区分	2019(H31)年度 担当者	H31 科目生
2-072	II 音	コンピュータ・ミュージック演習A	II 音	コンピュータ・ミュージック演習A	II 音	コンピュータ・ミュージック(ノーテーション)			前期	山田 夏	E
2-073	II 音	コンピュータ・ミュージック演習B	II 音	コンピュータ・ミュージック演習B	II 音	コンピュータ・ミュージック(エディット)			後期	山田 夏	E
2-074	III 音	対位法	III 音	対位法					前期	奥西 千壽	
2-075	III 音	対位法(作曲専攻)	III 音	対位法(作曲専攻)					前期	奥西 千壽	
2-076	III 音	作・編曲法A	III 音	作・編曲法A					前期	檜垣 智也	E
2-077	III 音	作・編曲法B	III 音	作・編曲法B					後期	檜垣 智也	E
2-078	II 音	キーボード・ハーモニー基礎A	II 音	キーボード・ハーモニー基礎A					前期	丹羽 あゆみ	
2-079	II 音	キーボード・ハーモニー基礎A	II 音	キーボード・ハーモニー基礎A					前期	内尾 恵美	
2-080	II 音	キーボード・ハーモニー基礎B	II 音	キーボード・ハーモニー基礎B					後期	丹羽 あゆみ	
2-081	II 音	キーボード・ハーモニー基礎B	II 音	キーボード・ハーモニー基礎B					後期	内尾 恵美	
2-082	II 音	キーボード・ハーモニー応用A	II 音	キーボード・ハーモニー応用A					前期	丹羽 あゆみ	
2-083	II 音	キーボード・ハーモニー応用B	II 音	キーボード・ハーモニー応用B					後期	丹羽 あゆみ	
2-084	III 音	指揮法IA	III 音	指揮法IA					前期	上田 真紀郎	E
2-085	III 音	指揮法IB	III 音	指揮法IB					後期	上田 真紀郎	E
2-086	IV 音	指揮法II							前期	上田 真紀郎	E
2-087	I 音	雅楽I	I 音	雅楽I	I 音	雅楽I	I 音	雅楽I	前期/後期	小野 真龍+林 絹代+高木 了慧	E
2-088	II 音	雅楽II	II 音	雅楽II	I 音	雅楽II	I 音	雅楽II	前期	小野 真龍+林 絹代+高木 了慧	E
2-089	II 音	雅楽III	II 音	雅楽III					後期	小野 真龍+林 絹代+高木 了慧	E
2-090	III 音	雅楽IV	III 音	雅楽IV					前期	小野 真龍+林 絹代+高木 了慧	E
2-091	III 音	雅楽V	III 音	雅楽V					後期	小野 真龍+林 絹代+高木 了慧	E
2-092	IV 音	雅楽VI							前期	小野 真龍+林 絹代+高木 了慧	E
2-093	IV 音	雅楽VII							後期	小野 真龍+林 絹代+高木 了慧	E
2-094	II 音	器楽合奏	II 音	器楽合奏	II 音	器楽合奏			前期/後期	橋詰 智章	
2-095	I 音	近世歌謡	I 音	近世歌謡	II 音	近世歌謡			前期/後期	田淵 雅子	E
2-096	I 音	地歌・箏曲I	I 音	地歌・箏曲I	I 音	地歌・箏曲I	I 音	地歌・箏曲I	前期/後期	田淵 雅子	E
2-097	II 音	地歌・箏曲II	II 音	地歌・箏曲II	I 音	地歌・箏曲II	I 音	地歌・箏曲II	前期/後期	田淵 雅子	E
2-098	II 音	地歌・箏曲III	II 音	地歌・箏曲III	II 音	地歌・箏曲III			後期	田淵 雅子	
2-099	III 音	地歌・箏曲IV	III 音	地歌・箏曲IV					前期	田淵 雅子	

index	2016 配当年次	2016(H28)年度入学生 IV回生用	2017 配当年次	2017(H29)年度入学生 III回生用	2018 配当年次	2018(H30)年度入学生 II回生用	2019 配当年次	2019(H31)年度入学生 I回生用	区分	2019(H31)年度 担当者	H31 科目生
2-100	III 音	地歌・箏曲V	III 音	地歌・箏曲V					後期	田淵 雅子	
2-101	IV 音	地歌・箏曲VI							前期	田淵 雅子	
2-102	IV 音	地歌・箏曲VII							後期	田淵 雅子	
2-103	I 音	常磐津I	I 音	常磐津I	II 音	常磐津I			前期/後期	常磐津 都筑蔵	E
2-104	II 音	常磐津III	II 音	常磐津III					後期	常磐津 都筑蔵	
2-105	III 音	常磐津V	III 音	常磐津V					後期	常磐津 都筑蔵	
2-106	IV 音	常磐津VII							後期	常磐津 都筑蔵	
2-107	III 音	伴奏法演習A	III 音	伴奏法演習A					前期	小野田 富美子	
2-108	III 音	伴奏法演習A	III 音	伴奏法演習A					前期	末岡 智子	
2-109	III 音	伴奏法演習B	III 音	伴奏法演習B					後期	末岡 智子	
2-110	III 音	副科声楽I	III 音	副科声楽I					通年	(声楽部門)	
2-111	IV 音	副科声楽II							通年	(声楽部門)	
2-112	I 音	副科ピアノI	I 音	副科ピアノI	I 音	副科ピアノI	I 音	副科ピアノI	通年	(ピアノ部門)	
2-113	II 音	副科ピアノII	II 音	副科ピアノII	II 音	副科ピアノII			通年	(ピアノ部門)	
2-114	III 音	副科ピアノIII	III 音	副科ピアノIII					通年	(ピアノ部門)	
2-115	IV 音	副科ピアノIV							通年	(ピアノ部門)	
2-116	III 音	副科オルガンI	III 音	副科オルガンI					通年	(オルガン部門)	
2-117	IV 音	副科オルガンII							通年	(オルガン部門)	
2-118	II 音	副科管弦打古楽器I	II 音	副科管弦打古楽器I					通年	(管弦打部門)	
2-119	III 音	副科管弦打古楽器II	III 音	副科管弦打古楽器II					通年	(管弦打部門)	
2-120	I 音	海外研修I(ワルツ)	I 音	海外研修I(ワルツ)	I 音	海外研修I(ワルツ)	I 音	海外研修I(ワルツ)	集中	井上 麻紀	
2-121	I 音	海外研修I(列挙)	I 音	海外研修I(列挙)					集中	泉 貴子	
2-122	II 音	海外研修II(ワルツ)	II 音	海外研修II(ワルツ)	II 音	海外研修II(ワルツ)			集中	井上 麻紀	
2-123	II 音	海外研修II(列挙)	II 音	海外研修II(列挙)					集中	泉 貴子	
2-124			I 音	海外研修事前・事後指導	I 音	海外研修事前・事後指導	I 音	海外研修事前・事後指導	集中	泉 貴子・井上 麻紀	
2-125			I 音	音楽キャリアデザイン	I 音	音楽キャリアデザイン	I 音	音楽キャリアデザイン	前期	赤石 敬夫 他	
2-126			I 音	音楽総合研究A	I 音	音楽総合研究A	I 音	音楽総合研究A	集中	稲垣 聡	
2-127			I 音	音楽基礎演習I	I 音	音楽基礎演習I	I 音	音楽基礎演習I	前期	石井 尚子	E

index	配当 年次	2016	2016(H28)年度入学生 Ⅳ回生用	配当 年次	2017	2017(H29)年度入学生 Ⅲ回生用	配当 年次	2018	2018(H30)年度入学生 Ⅱ回生用	配当 年次	2019	2019(H31)年度入学生 Ⅰ回生用	区分	2019(H31)年度 担当者	H31 科目生
2-128				I	音	音楽基礎演習Ⅱ	I	音	音楽基礎演習Ⅱ	I	音	音楽基礎演習Ⅱ	後期	石井 尚子	E
2-129				I	音	和声法基礎演習Ⅰ	I	音	和声法基礎演習Ⅰ	I	音	和声法基礎演習Ⅰ	前期	赤石 敏夫	
2-130				I	音	和声法基礎演習Ⅱ	I	音	和声法基礎演習Ⅱ	I	音	和声法基礎演習Ⅱ	後期	赤石 敏夫	
2-131				Ⅱ	音	楽式論	Ⅱ	音					前期	松本 直祐樹	
2-132				I	音	ソルフェージュ基礎Ⅰ	I	音	ソルフェージュ基礎Ⅰ	I	音	ソルフェージュ基礎Ⅰ	前期	粕谷 育子	
2-133				I	音	ソルフェージュ基礎Ⅱ	I	音	ソルフェージュ基礎Ⅱ	I	音	ソルフェージュ基礎Ⅱ	後期	粕谷 育子	
2-134				Ⅱ	音	音楽総合研究B	Ⅱ	音	音楽総合研究B	Ⅱ			集中	稲垣 聡	
2-135				Ⅱ	音	室内楽Ⅰ	Ⅱ	音	室内楽Ⅰ	Ⅱ			集中	音楽学科教員	
2-136				I	音	コレギウム・ムジカムⅠ	I	音	コレギウム・ムジカムⅠ	I	音	コレギウム・ムジカムⅠ	前期	頼田 麗・中村 洋彦	
2-137				I	音	コレギウム・ムジカムⅡ	I	音	コレギウム・ムジカムⅡ	I	音	コレギウム・ムジカムⅡ	後期	頼田 麗・中村 洋彦	
2-138				I	音	コミュニケーションと交渉術	I	音	コミュニケーションと交渉術	I	音	コミュニケーションと交渉術	後期	神殿 織江	
2-139				I	音	キャリアアップ研究	I	音	キャリアアップ研究	I	音	キャリアアップ研究	前期	神殿 織江	
2-140				Ⅱ	音	プレゼンテーション	Ⅱ	音	プレゼンテーション	Ⅱ			後期	甲斐 隆浩	
2-141				Ⅱ	音	現代日本の音楽カルチャー	Ⅱ	音	現代日本の音楽カルチャー	Ⅱ			後期	角家 千恵	

3. 音楽学部 専門科目

index	配当 年次	2016	2016(H28)年度入学生 Ⅳ回生用	配当 年次	2017	2017(H29)年度入学生 Ⅲ回生用	配当 年次	2018	2018(H30)年度入学生 Ⅱ回生用	配当 年次	2019	2019(H31)年度入学生 Ⅰ回生用	区分	2019(H31)年度 担当者	H31 科目生
3-001				I	声	専攻実技Ⅰ (声楽)	I	声	専攻実技Ⅰ (声楽)	I	声	専攻実技Ⅰ (声楽)	前期	(声楽部門)	
3-002				I	声	専攻実技Ⅱ (声楽)	I	声	専攻実技Ⅱ (声楽)	I	声	専攻実技Ⅱ (声楽)	後期	(声楽部門)	
3-003				Ⅱ	声	専攻実技Ⅲ (声楽)	Ⅱ	声	専攻実技Ⅲ (声楽)	Ⅱ			前期	(声楽部門)	
3-004				Ⅱ	声	専攻実技Ⅳ (声楽)	Ⅱ	声	専攻実技Ⅳ (声楽)	Ⅱ			後期	(声楽部門)	
3-005	Ⅲ	声	専攻実技Ⅴ (声楽)	Ⅲ	声	専攻実技Ⅴ (声楽)	Ⅲ			Ⅲ			前期	(声楽部門)	
3-006	Ⅲ	声	専攻実技Ⅵ (声楽)	Ⅲ	声	専攻実技Ⅵ (声楽)	Ⅲ			Ⅲ			後期	(声楽部門)	
3-007	Ⅳ	声	専攻実技Ⅶ (声楽)										前期	(声楽部門)	
3-008	Ⅳ	声	専攻実技Ⅷ (声楽)										後期	(声楽部門)	
3-009	I	声	イタリア歌曲研究Ⅰ	I	声	イタリア歌曲研究Ⅰ	I	声	イタリア歌曲研究Ⅰ	I	声	イタリア歌曲研究Ⅰ	前期	木澤 佐江子	B
3-010	I	声	イタリア歌曲研究Ⅱ	I	声	イタリア歌曲研究Ⅱ	I	声	イタリア歌曲研究Ⅱ	I	声	イタリア歌曲研究Ⅱ	後期	木澤 佐江子	B
3-011	Ⅲ	声	日本歌曲研究Ⅰ	Ⅲ	声	日本歌曲研究Ⅰ							前期	畑田 弘美	B

Index	配当 年次	2016 2016(H28)年度入学生 Ⅳ回生用	配当 年次	2017 2017(H29)年度入学生 Ⅲ回生用	配当 年次	2018 2018(H30)年度入学生 Ⅱ回生用	配当 年次	2019 2019(H31)年度入学生 Ⅰ回生用	区分	2019(H31)年度 担当者	H31 科目生
3-012	Ⅲ	声 日本歌曲研究Ⅱ	Ⅲ	声 日本歌曲研究Ⅱ					後期	畑田 弘美	B
3-013	Ⅲ	声 オラトリオ・カンタータ研究Ⅱ	Ⅲ	声 オラトリオ・カンタータ研究Ⅱ					後期	松原 友	B
3-014	Ⅲ	声 オペラ演習Ⅰ	Ⅲ	声 オペラ演習Ⅰ					前期	馬場 清孝・中村 ゆみ	
3-015	Ⅲ	声 オペラ演習Ⅱ	Ⅲ	声 オペラ演習Ⅱ					後期	馬場 清孝・出口 武・藤田 一樹	
3-016	Ⅳ	声 オペラ演習Ⅲ							前期	<オペラ部門>	
3-017	Ⅳ	声 オペラ演習Ⅳ							後期	<オペラ部門>	
3-018	Ⅳ	声 オペラ舞台実習							集中	泉 真子・岡坊 久美子	
3-019	Ⅳ	声 ミュージカル演習Ⅰ			Ⅱ	声 ミュージカル演習Ⅰ			前期	村井 幹子	
3-020	Ⅳ	声 ミュージカル演習Ⅱ			Ⅱ	声 ミュージカル演習Ⅱ			後期	村井 幹子・中村 ゆみ	
3-021	Ⅱ	声 ドイツ歌曲研究Ⅰ	Ⅱ	声 ドイツ歌曲研究Ⅰ	Ⅱ	声 ドイツ歌曲研究			前期	岡坊 久美子	B
3-022	Ⅱ	声 ドイツ歌曲研究Ⅱ	Ⅱ	声 ドイツ歌曲研究Ⅱ					後期	岡坊 久美子	B
3-023	Ⅱ	声 フランス歌曲研究Ⅱ	Ⅱ	声 フランス歌曲研究Ⅱ					後期	福田 清美	B
3-024	Ⅲ	声 童謡・唱歌研究Ⅱ	Ⅲ	声 童謡・唱歌研究Ⅱ					後期	高橋 侑子	B
3-025	Ⅱ	声 イタリア語会話A	Ⅱ	声 イタリア語会話A	Ⅱ	声 イタリア語会話A			前期	Edomondo Filippini	B
3-026	Ⅱ	声 イタリア語会話B	Ⅱ	声 イタリア語会話B	Ⅱ	声 イタリア語会話B			後期	Edomondo Filippini	B
3-027	Ⅲ	声 声楽特別研究Ⅰ	Ⅲ	声 声楽特別研究Ⅰ					前期	(声楽部門)	
3-028	Ⅲ	声 声楽特別研究Ⅱ	Ⅲ	声 声楽特別研究Ⅱ					後期	(声楽部門)	
3-029	Ⅳ	声 声楽特別研究Ⅲ							前期	(声楽部門)	
3-030	Ⅳ	声 声楽特別研究Ⅳ							後期	(声楽部門)	
3-031					Ⅰ	声 専攻実技Ⅰ(ピアノ)	Ⅰ	声 専攻実技Ⅰ(ピアノ)	前期	(ピアノ部門)	
3-032					Ⅰ	声 専攻実技Ⅱ(ピアノ)	Ⅰ	声 専攻実技Ⅱ(ピアノ)	後期	(ピアノ部門)	
3-033					Ⅱ	声 専攻実技Ⅲ(ピアノ)			前期	(ピアノ部門)	
3-034					Ⅱ	声 専攻実技Ⅳ(ピアノ)			後期	(ピアノ部門)	
3-035	Ⅲ	声 専攻実技Ⅴ(ピアノ)	Ⅲ	声 専攻実技Ⅴ(ピアノ)					前期	(ピアノ部門)	
3-036	Ⅲ	声 専攻実技Ⅵ(ピアノ)	Ⅲ	声 専攻実技Ⅵ(ピアノ)					後期	(ピアノ部門)	
3-037	Ⅳ	声 専攻実技Ⅶ(ピアノ)							前期	(ピアノ部門)	
3-038	Ⅳ	声 専攻実技Ⅷ(ピアノ)							後期	(ピアノ部門)	
3-039	Ⅲ	声 伴奏法Ⅰ	Ⅲ	声 伴奏法Ⅰ					通年	稲垣 聡・宮本 聖子	

Index	配当 年次	2016(H28) IV回生用	2016(H28)年度 IV回生用	2017 配当 年次	2017(H29) III回生用	2018 配当 年次	2018(H30) II回生用	2019 配当 年次	2019(H31) I回生用	区分	2019(H31)年度 担当者	H31 科目生
3-040	IV	ピ	伴奏法Ⅱ							通年	井上 麻紀・小堀 由美子・稲垣 聡	
3-041	III	ピ	ピアノ/音楽史A	III	ピアノ/音楽史A	II	ピアノ/音楽史A			前期	田尻 洋一	E
3-042	III	ピ	ピアノ/音楽史B	III	ピアノ/音楽史B	II	ピアノ/音楽史B			後期	田尻 洋一	E
3-043	III	ピ	ピアノ/室内楽I	III	ピアノ/室内楽I					通年	山本 英二	
3-044	III	ピ	ピアノ/室内楽I	III	ピアノ/室内楽I					通年	萩野 洋介	
3-045	IV	ピ	ピアノ/室内楽II							通年	山本 英二	
3-046	II	ピ	室内楽I	II	室内楽I					通年集中	音楽学科教員	
3-047	III	ピ	室内楽II	III	室内楽II					通年集中	音楽学科教員	
3-048	IV	ピ	室内楽III							通年集中	音楽学科教員	
3-049	III	ピ	ピアノ/特別研究I	III	ピアノ/特別研究I					前期	(ピアノ/部門)	
3-050	III	ピ	ピアノ/特別研究II	III	ピアノ/特別研究II					後期	(ピアノ/部門)	
3-051	IV	ピ	ピアノ/特別研究III							前期	(ピアノ/部門)	
3-052	IV	ピ	ピアノ/特別研究IV							後期	(ピアノ/部門)	
3-053	IV	ピ	ピアノ/教授法A							前期	辰巳 友紀	
3-054	IV	ピ	ピアノ/教授法B							後期	辰巳 友紀	
3-055	II	ピ	リトミックA	II	リトミックA	II	リトミックA			前期	長井 典子	
3-056	II	ピ	リトミックB	II	リトミックB	II	リトミックB			後期	長井 典子	
3-057	II	ピ	電子オルガンI	II	電子オルガンI	II	電子オルガンI			通年	(創作演奏部門)	
3-058	III	ピ	電子オルガンII	III	電子オルガンII					通年	(創作演奏部門)	
3-059	II	ピ	演奏研究A	II	演奏研究A	II	演奏研究A			通年集中	堀見 亮	
3-060	II	ピ	演奏研究B	II	演奏研究B	II	演奏研究B			通年集中	山口 博明	
3-061	III	ピ	演奏研究C	III	演奏研究C					通年集中	小坂 圭太	
3-062	III	ピ	演奏研究D	III	演奏研究D					通年集中	小坂 圭太	
3-063	II	ピ	アンサンブル演習II A	II	アンサンブル演習II A	II	アンサンブル演習II A			前期	稲垣 聡・堀見 亮	
3-064	II	ピ	アンサンブル演習II B	II	アンサンブル演習II B	II	アンサンブル演習II B			後期	稲垣 聡・堀見 亮	
3-065	III	ピ	アンサンブル演習III A	III	アンサンブル演習III A					前期	井上 麻紀	
3-066	III	ピ	アンサンブル演習III B	III	アンサンブル演習III B					後期	稲垣 聡	
3-067	IV	ピ	アンサンブル演習IV A							前期	稲垣 聡	

Index	配当 年次	2016(H28)年度入学生 IV回生用	2017 配当 年次	2017(H29)年度入学生 III回生用	配当 年次	2018	2018(H30)年度入学生 II回生用	配当 年次	2019	2019(H31)年度入学生 I回生用	区分	2019(H31)年度 担当者	H31 科目生
3-068	IV	ピ									後期	井上 麻紀	
3-069	I	ピ	I	指導基礎演習	I	ピ	指導基礎演習	I	ピ	指導基礎演習	通年	山本 英二・植田 味香子	
3-070	III	ピ	III	ピアノ/教材研究							前期	釈迦郡 洋介	
3-071	III	ピ	III	ピアノ/指導法研究							後期	宮本 聖子	
3-072	III	ピ	III	鍵盤楽器アンサンブル							通年	山本 英二・釈迦郡 洋介	
3-073	I	創	I	専攻実技 I (創作演奏)	I	創	専攻実技 I (創作演奏)	I	創	専攻実技 I (創作演奏)	前期	(創作演奏部門)	
3-074	I	創	I	専攻実技 II (創作演奏)	I	創	専攻実技 II (創作演奏)	I	創	専攻実技 II (創作演奏)	後期	(創作演奏部門)	
3-075	II	創	II	専攻実技 III (創作演奏)	II	創	専攻実技 III (創作演奏)	II			前期	(創作演奏部門)	
3-076	II	創	II	専攻実技 IV (創作演奏)	II	創	専攻実技 IV (創作演奏)	II			後期	(創作演奏部門)	
3-077	III	創	III	専攻実技 V (創作演奏)							前期	(創作演奏部門)	
3-078	III	創	III	専攻実技 VI (創作演奏)							後期	(創作演奏部門)	
3-079	IV	創		専攻実技 VII (創作演奏)							前期	(創作演奏部門)	
3-080	IV	創		専攻実技 VIII (創作演奏)							後期	(創作演奏部門)	
3-081	I	創	I	創作演奏基礎演習	I	創	創作演奏基礎演習	I	創	創作演奏基礎演習	前期	藤村 亘	
3-082	I	創	I	制作演習 I	I	創	制作演習 I	I	創	制作演習 I	後期	藤村 亘	
3-083	II	創	II	アナリーゼ演習	II						前期	佐井 孝彰	
3-084	II	創	II	制作演習 II	II						後期	佐井 孝彰	
3-085	III	創	III	サウンド制作演習	III						前期	山田 夏	
3-086	III	創	III	スコア制作演習	III						後期	佐井 孝彰	
3-087	IV	創		作品研究 I							前期	(創作演奏部門)	
3-088	IV	創		作品研究 II							後期	(創作演奏部門)	
3-089	I	創	I	副科実技 I	I	創	副科実技 I	I	創	副科実技 I	通年	(創作演奏部門)	
3-090	II	創	II	副科実技 II	II						通年	(創作演奏部門)	
3-091	III	創	III	副科研究 I	III						通年	(創作演奏部門)	
3-092	IV	創		副科研究 II							通年	(創作演奏部門)	
3-093	III	創	III	アンサンブル I A	III	創	アンサンブル I A	III	創	アンサンブル I A	前期	藤村 亘	
3-094	III	創	III	アンサンブル I B	III	創	アンサンブル I B	III	創	アンサンブル I B	後期	藤村 亘	
3-095	IV	創		アンサンブル II A							前期	藤村 亘	

Index	配当 年次	2016 2016(H28)年度入学生 Ⅳ回生用	配当 年次	2017 2017(H29)年度入学生 Ⅲ回生用	配当 年次	2018 2018(H30)年度入学生 Ⅱ回生用	配当 年次	2019 2019(H31)年度入学生 Ⅰ回生用	区分	2019(H31)年度 担当者	H31 科目生
3-096	Ⅳ	創 アンサンブルⅡB							後期	藤村 亘	
3-097	Ⅰ	オ 専攻実技Ⅰ(オルガン)	Ⅰ	オ 専攻実技Ⅰ(オルガン)	Ⅰ	オ 専攻実技Ⅰ(オルガン)	Ⅰ	オ 専攻実技Ⅰ(オルガン)	前期	山本 真希	
3-098	Ⅰ	オ 専攻実技Ⅱ(オルガン)	Ⅰ	オ 専攻実技Ⅱ(オルガン)	Ⅰ	オ 専攻実技Ⅱ(オルガン)	Ⅰ	オ 専攻実技Ⅱ(オルガン)	後期	山本 真希	
3-099	Ⅰ	オ オルガン基礎理論ⅠA	Ⅰ	オ オルガン基礎理論ⅠA	Ⅰ	オ オルガン基礎理論ⅠA	Ⅰ	オ オルガン基礎理論ⅠA	前期	山本 真希	
3-100	Ⅰ	オ オルガン基礎理論ⅠB	Ⅰ	オ オルガン基礎理論ⅠB	Ⅰ	オ オルガン基礎理論ⅠB	Ⅰ	オ オルガン基礎理論ⅠB	後期	山本 真希	
3-101					Ⅰ	管 専攻実技Ⅰ(管弦打楽器)	Ⅰ	管 専攻実技Ⅰ(管弦打楽器)	前期	(管弦打部門)	
3-102					Ⅰ	管 専攻実技Ⅱ(管弦打楽器)	Ⅰ	管 専攻実技Ⅱ(管弦打楽器)	後期	(管弦打部門)	
3-103					Ⅱ	管 専攻実技Ⅲ(管弦打楽器)			前期	(管弦打部門)	
3-104					Ⅱ	管 専攻実技Ⅳ(管弦打楽器)			後期	(管弦打部門)	
3-105	Ⅲ	管 専攻実技Ⅴ(管弦打楽器)	Ⅲ	管 専攻実技Ⅴ(管弦打楽器)					前期	(管弦打部門)	
3-106	Ⅲ	管 専攻実技Ⅵ(管弦打楽器)	Ⅲ	管 専攻実技Ⅵ(管弦打楽器)					後期	(管弦打部門)	
3-107	Ⅳ	管 専攻実技Ⅶ(管弦打楽器)							前期	(管弦打部門)	
3-108	Ⅳ	管 専攻実技Ⅷ(管弦打楽器)							後期	(管弦打部門)	
3-109					Ⅰ	管 オーケストラA	Ⅰ	管 オーケストラA	前期	(管弦打部門)	
3-110					Ⅰ	管 オーケストラB	Ⅰ	管 オーケストラB	後期	(管弦打部門)	
3-111					Ⅱ	管 オーケストラC			前期	(管弦打部門)	
3-112					Ⅱ	管 オーケストラD			後期	(管弦打部門)	
3-113	Ⅲ	管 オーケストラE	Ⅲ	管 オーケストラE					前期	(管弦打部門)	
3-114	Ⅲ	管 オーケストラF	Ⅲ	管 オーケストラF					後期	(管弦打部門)	
3-115	Ⅳ	管 オーケストラG							前期	(管弦打部門)	
3-116	Ⅳ	管 オーケストラH							後期	(管弦打部門)	
3-117					Ⅰ	管 管弦打楽器アンサンブル演習A	Ⅰ	管 管弦打楽器アンサンブル演習A	前期	(管弦打部門) + 近藤 孝司	
3-118					Ⅰ	管 管弦打楽器アンサンブル演習B	Ⅰ	管 管弦打楽器アンサンブル演習B	後期	(管弦打部門) + 近藤 孝司	
3-119					Ⅱ	管 管弦打楽器アンサンブル演習C			前期	(管弦打部門) + 近藤 孝司	
3-120					Ⅱ	管 管弦打楽器アンサンブル演習D			後期	(管弦打部門) + 近藤 孝司	
3-121	Ⅲ	管 管弦打楽器アンサンブル演習E	Ⅲ	管 管弦打楽器アンサンブル演習E					前期	(管弦打部門) + 近藤 孝司	
3-122	Ⅲ	管 管弦打楽器アンサンブル演習F	Ⅲ	管 管弦打楽器アンサンブル演習F					後期	(管弦打部門) + 近藤 孝司	
3-123	Ⅳ	管 管弦打楽器アンサンブル演習G							前期	(管弦打部門) + 近藤 孝司	

Index	2016 配当 年次	2016(H28)年度入学生 Ⅳ回生用	2017 配当 年次	2017(H29)年度入学生 Ⅲ回生用	2018 配当 年次	2018(H30)年度入学生 Ⅱ回生用	2019 配当 年次	2019(H31)年度入学生 Ⅰ回生用	区分	2019(H31)年度 担当者	H31 科目生
3-124	Ⅳ	管 管弦打楽器アンサンブル演習H							後期	(管弦打部門) 十近藤 孝司	
3-125	Ⅲ	管 管弦打楽器特別研究Ⅰ	Ⅲ	管 管弦打楽器特別研究Ⅰ					前期	(管弦打部門)	
3-126	Ⅲ	管 管弦打楽器特別研究Ⅱ	Ⅲ	管 管弦打楽器特別研究Ⅱ					後期	(管弦打部門)	
3-127	Ⅳ	管 管弦打楽器特別研究Ⅲ							前期	(管弦打部門)	
3-128	Ⅳ	管 管弦打楽器特別研究Ⅳ							後期	(管弦打部門)	
3-129	Ⅱ	管 室内楽Ⅰ	Ⅱ	管 室内楽Ⅰ					通年集中	音楽学科教員	
3-130	Ⅲ	管 室内楽Ⅱ	Ⅲ	管 室内楽Ⅱ					通年集中	音楽学科教員	
3-131	Ⅳ	管 室内楽Ⅲ							通年集中	音楽学科教員	
3-132	Ⅲ	管 弦楽器指導法A	Ⅲ	管 弦楽器指導法A					前期	斎藤 建寛・曾我部 千恵子・林 俊武	E
3-133	Ⅲ	管 アンサンブル指導法実習	Ⅲ	管 アンサンブル指導法実習					後期	森田 玲子・池川 章子	
3-134	Ⅲ	管 オーケストラ特別研究A	Ⅲ	管 オーケストラ特別研究A					通年集中	(管弦打部門)	
3-135	Ⅲ	管 オーケストラ特別研究B	Ⅲ	管 オーケストラ特別研究B					通年集中	(管弦打部門)	
3-136	Ⅲ	管 オーケストラ特別実習A	Ⅲ	管 オーケストラ特別実習A					通年集中	(管弦打部門)	
3-137	Ⅲ	管 オーケストラ特別実習B	Ⅲ	管 オーケストラ特別実習B					通年集中	(管弦打部門)	
3-138					Ⅰ	古 専攻実技Ⅰ(古楽器)	Ⅰ	古 専攻実技Ⅰ(古楽器)	前期	(古楽器部門)	
3-139					Ⅰ	古 専攻実技Ⅱ(古楽器)	Ⅰ	古 専攻実技Ⅱ(古楽器)	後期	(古楽器部門)	
3-140					Ⅰ	古 鍵盤実技Ⅰ	Ⅰ	古 鍵盤実技Ⅰ	通年	(古楽器部門)	
3-141					Ⅰ	古 古楽器研究Ⅰ	Ⅰ	古 古楽器研究Ⅰ	前期	頼田 麗・中村 洋彦・青木 好美	
3-142					Ⅰ	古 古楽器研究Ⅱ	Ⅰ	古 古楽器研究Ⅱ	後期	頼田 麗・中村 洋彦・青木 好美	
3-143	Ⅰ	古 コレギウム・ムジクムⅠA	Ⅰ	古 コレギウム・ムジクムⅠA					前期	頼田 麗・中村 洋彦	
3-144	Ⅰ	古 コレギウム・ムジクムⅠB	Ⅰ	古 コレギウム・ムジクムⅠB					後期	頼田 麗・中村 洋彦	
3-145	Ⅰ	古 コレギウム・ムジクムⅡA	Ⅰ	古 コレギウム・ムジクムⅡA					前期	頼田 麗・中村 洋彦	
3-146	Ⅰ	古 コレギウム・ムジクムⅡB	Ⅰ	古 コレギウム・ムジクムⅡB					後期	頼田 麗・中村 洋彦	
3-147	Ⅲ	作 専攻実技Ⅳ(作曲)	Ⅲ	作 専攻実技Ⅳ(作曲)					前期	(作曲部門)	
3-148	Ⅲ	作 専攻実技Ⅵ(作曲)	Ⅲ	作 専攻実技Ⅵ(作曲)					後期	(作曲部門)	
3-149	Ⅲ	作 音響学A	Ⅲ	作 音響学A	Ⅰ	作 音響学A	Ⅰ	作 音響学A	前期	能美 亮士	
3-150	Ⅲ	作 音響学B	Ⅲ	作 音響学B	Ⅰ	作 音響学B	Ⅰ	作 音響学B	後期	能美 亮士	
3-151	Ⅱ	作 現代音楽概説Ⅰ	Ⅱ	作 現代音楽概説Ⅰ	Ⅱ	作 現代音楽概説A			前期	梶垣 智也	B

Index	配当 年次	2016(H28) IV回生用	2017(H29) Ⅲ回生用	2018 配当 年次	2018(H30) Ⅱ回生用	2019 配当 年次	2019(H31) I回生用	区分	2019(H31)年度 担当者	H31 科目生
3-152	Ⅱ	作 現代音楽概説Ⅱ	作 現代音楽概説Ⅱ	Ⅱ	作 現代音楽概説B			後期	山根 明季子	B
3-153	Ⅱ	作 ポピュラー・ミュージック概説Ⅰ	作 ポピュラー・ミュージック概説Ⅰ	Ⅱ	作 ポピュラー・ミュージック概説A			前期	藤村 亘	
3-154	Ⅱ	作 ポピュラー・ミュージック概説Ⅱ	作 ポピュラー・ミュージック概説Ⅱ	Ⅱ	作 ポピュラー・ミュージック概説B			後期	藤村 亘	
3-155	Ⅱ	作 音楽情報処理入門	作 音楽情報処理入門	Ⅱ	作 音楽情報処理A			前期	橋田 光代	
3-156	Ⅱ	作 音楽情報処理	作 音楽情報処理	Ⅱ	作 音楽情報処理B			後期	橋田 光代	
3-157				Ⅰ	作 作曲演習Ⅱ	Ⅰ	作 作曲演習Ⅱ	後期	樽垣 智也	
3-158				Ⅱ	作 作曲実技Ⅰ			前期	(作曲部門)	
3-159				Ⅱ	作 作曲実技Ⅱ			後期	(作曲部門)	
3-160				Ⅰ	作 作曲理論Ⅰ	Ⅰ	作 作曲理論Ⅰ	前期	(作曲部門)	
3-161				Ⅰ	作 作曲理論Ⅱ	Ⅰ	作 作曲理論Ⅱ	後期	(作曲部門)	
3-162				Ⅱ	作 作曲理論Ⅲ			前期	(作曲部門)	
3-163				Ⅱ	作 作曲理論Ⅳ			後期	(作曲部門)	
3-164				Ⅰ	作 管弦楽法	Ⅰ	作 管弦楽法	後期	山根 明季子	
3-165	Ⅱ	楽 西洋音楽史演習A	楽 西洋音楽史演習A	Ⅱ				前期	黒坂 俊昭	
3-166				Ⅱ	楽 音楽の歴史と文化A			前期	黒坂 俊昭	
3-167	Ⅲ	楽 音楽学演習ⅠA	楽 音楽学演習ⅠA	Ⅲ				前期	黒坂 俊昭	
3-168	Ⅲ	楽 音楽学演習ⅠB	楽 音楽学演習ⅠB	Ⅲ				後期	黒坂 俊昭	
3-169	Ⅲ	楽 音楽学研究A	楽 音楽学研究A	Ⅲ				前期	大谷 紀美子	
3-170	Ⅲ	楽 音楽学研究B	楽 音楽学研究B	Ⅲ				後期	大谷 紀美子	
3-171	Ⅲ	楽 楽書講読(英語)Ⅰ	楽 楽書講読(英語)Ⅰ	Ⅲ	楽 楽書講読(英語)ⅠA			前期	黒坂 俊昭	
3-172	Ⅲ	楽 楽書講読(英語)Ⅱ	楽 楽書講読(英語)Ⅱ	Ⅲ	楽 楽書講読(英語)ⅠB			後期	黒坂 俊昭	
3-173				Ⅰ	楽 音楽学概説A	Ⅰ	楽 音楽学概説A	前期	黒坂 俊昭	
3-174				Ⅰ	楽 音楽学概説B	Ⅰ	楽 音楽学概説B	後期	黒坂 俊昭	
3-175				Ⅰ	楽 音楽構造研究ⅠA	Ⅰ	楽 音楽構造研究ⅠA	前期	三鬼 尚味	
3-176				Ⅰ	楽 音楽構造研究ⅠB	Ⅰ	楽 音楽構造研究ⅠB	後期	三鬼 尚味	
3-177				Ⅱ	楽 音楽構造研究ⅡA			前期	三鬼 尚味	
3-178				Ⅱ	楽 音楽構造研究ⅡB			後期	三鬼 尚味	
3-179				Ⅱ	楽 音楽学基礎研究A			前期	黒坂 俊昭	

Index	配当 年次	2016(H28) IV回生用	2016 配当 年次	2017(H29) III回生用	2017 配当 年次	2018(H30) II回生用	2018 配当 年次	2018(H30) II回生用	2019 配当 年次	2019(H31) I回生用	2019 区分	2019(H31) 年度 担当者	H31 科目生
3-180						II 楽	II	音楽学基礎研究 B			後期	黒坂 俊昭	
3-181						II 楽	II	ポピュラー・ミュージック概説 A			前期	藤村 亘	
3-182						II 楽	II	ポピュラー・ミュージック概説 B			後期	藤村 亘	
3-183	I 療	音楽療法の基礎 A	I 療	音楽療法の基礎 A	I 療	I 療	I	音楽療法の基礎 A	I 療	音楽療法の基礎 A	前期	石村 真紀	E
3-184	I 療	音楽療法の基礎 B	I 療	音楽療法の基礎 B	I 療	I 療	I	音楽療法の基礎 B	I 療	音楽療法の基礎 B	後期	石村 真紀	E
3-185	II 療	臨床即興 I	II 療	臨床即興 I	II 療	II 療	II	臨床即興 I			前期	石村 真紀	E
3-186	II 療	臨床即興 II	II 療	臨床即興 II	II 療	II 療	II	臨床即興 II			後期	石村 真紀	
3-187	III 療	臨床即興 III	III 療	臨床即興 III	III 療						前期	石村 真紀	
3-188	III 療	音楽療法演習	III 療	音楽療法演習	III 療						後期	石村 真紀	
3-189	IV 療	卒業研究									通年	[音楽療法部門]	
3-190	III 療	音楽療法実習 I	III 療	音楽療法実習 I	III 療						集中	石村 真紀	
3-191	III 療	音楽療法実習 II	III 療	音楽療法実習 II	III 療						後期	石村 真紀	
3-192	IV 療	音楽療法実習 III									前期	石村 真紀	
3-193	I 療	音楽構造研究 I A	I 療	音楽構造研究 I A	I 療	I 療	I	音楽構造研究 I A	I 療	音楽構造研究 I A	前期	三鬼 尚味	
3-194	I 療	音楽構造研究 I B	I 療	音楽構造研究 I B	I 療	I 療	I	音楽構造研究 I B	I 療	音楽構造研究 I B	後期	三鬼 尚味	
3-195						II 療	II	音楽療法概論			前期	後藤 浩子	E
3-196						II 療	II	音楽療法名論 A			前期	阿部 優里	
3-197						II 療	II	音楽療法名論 B			後期	石原 興子	
3-198						I 療	I	声楽演習 I	I 療	声楽演習 I	前期	片桐 直樹	
3-199						I 療	I	声楽演習 II	I 療	声楽演習 II	後期	片桐 直樹	
3-200						II 療	II	臨床医学名論 I			前期	島中 剛久	
3-201						II 療	II	臨床医学名論 II			後期	島中 剛久	
3-202						II 療	II	臨床心理学 I			前期	後藤 浩子	
3-203						II 療	II	臨床心理学 II			後期	後藤 浩子	
3-204						II 療	II	社会福祉論			前期	名和 月之介	
3-205	IV 特管	専攻実技Ⅷ (特演・管弦打)									前期	<管弦打部門>	
3-206	IV 特管	専攻実技Ⅷ (特演・管弦打)									後期	<管弦打部門>	
3-207	III 特管	管弦打楽器特別研究 V	III 特管	管弦打楽器特別研究 V	III 特管	I 特管	I	特別演奏研究 A	I 特管	特別演奏研究 A	前期	<管弦打部門>	

Index	配当年次	2016(H28)年度入学生 IV回生用	2017	2017(H29)年度入学生 III回生用	配当年次	2018	2018(H30)年度入学生 II回生用	2019	2019(H31)年度入学生 I回生用	区分	2019(H31)年度 担当者	H31 科目生
3-208	III	特管 管弦打楽器特別研究VI	特管 III	管弦打楽器特別研究VI	I	特管 I	特別演奏研究B	特管 I	特別演奏研究B	後期	<管弦打部門>	
3-209	IV	特管 管弦打楽器特別研究VII			II	特管 II	特別演奏研究C			前期	<管弦打部門>	
3-210	IV	特管 管弦打楽器特別研究VIII			II	特管 II	特別演奏研究D			後期	<管弦打部門>	
3-211	II	特管 特別演奏実習B	II	特別演奏実習B	II	特管 II	特別演奏実習B			通年集中	<管弦打部門>	
3-212	II	特管 特別演奏実習C	II	特別演奏実習C	II	特管 II	特別演奏実習C			通年集中	<管弦打部門>	
3-213	IV	特管 卒業演奏								通年集中	<管弦打部門>	
3-214	IV	特管 オーケストラG								通年集中	<管弦打部門>	
3-215	IV	特管 オーケストラH								通年集中	<管弦打部門>	
3-216	IV	特管 管弦打楽器アンサンブル演習G								通年集中	<管弦打部門>	
3-217	IV	特管 管弦打楽器アンサンブル演習H								通年集中	<管弦打部門>	
3-218	III	特管 室内楽II	III	室内楽II						通年集中	音楽学科教員	
3-219	IV	特管 室内楽III								通年集中	音楽学科教員	
3-220	III	特管 弦楽器指導法A								前期	齋藤 建寛・曾我部 千恵子・林 俊武	
3-221	III	特管 オーケストラ特別研究A								通年集中	<管弦打部門>	
3-222	III	特管 オーケストラ特別研究B								通年集中	<管弦打部門>	
3-223	III	特管 オーケストラ特別実習A								通年集中	<管弦打部門>	
3-224	III	特管 オーケストラ特別実習B								通年集中	<管弦打部門>	
3-225					I	特管 I	専攻実技I(特演・管弦打)	特管 I	専攻実技I(特演・管弦打)	前期	<管弦打部門>	
3-226					I	特管 I	専攻実技II(特演・管弦打)	特管 I	専攻実技II(特演・管弦打)	後期	<管弦打部門>	
3-227					II	特管 II	専攻実技III(特演・管弦打)			前期	<管弦打部門>	
3-228					II	特管 II	専攻実技IV(特演・管弦打)			後期	<管弦打部門>	
3-229					I	特管 I	演奏会演習	特管 I	演奏会演習	通年集中	<管弦打部門>	
3-230					I	特管 I	特別演奏実習A	特管 I	特別演奏実習A	通年集中	<管弦打部門>	
3-231					I	特管 I	重奏研究A	特管 I	重奏研究A	通年集中	<音楽学科教員>	
3-232					I	特管 I	重奏研究B	特管 I	重奏研究B	通年集中	<音楽学科教員>	
3-233					II	特管 II	重奏研究C			通年集中	<音楽学科教員>	
3-234					II	特管 II	重奏研究D			通年集中	<音楽学科教員>	

Index	配当 年次	2016(H28) Ⅳ回生用	2017(H29) Ⅲ回生用	配当 年次	2018 特管	2018(H30) Ⅱ回生用	配当 年次	2019 特管	2019(H31) Ⅰ回生用	区分	2019(H31)年度 担当者	H31 科目生
3-235				I	特管	オーケストラA	I	特管	オーケストラA	前期	(管弦打部門)	
3-236				I	特管	オーケストラB	I	特管	オーケストラB	後期	(管弦打部門)	
3-237				II	特管	オーケストラC				前期	(管弦打部門)	
3-238				II	特管	オーケストラD				後期	(管弦打部門)	
3-239				I	特管	管弦打楽器アンサンブル演習A	I	特管	管弦打楽器アンサンブル演習A	前期	(管弦打部門)	
3-240				I	特管	管弦打楽器アンサンブル演習B	I	特管	管弦打楽器アンサンブル演習B	後期	(管弦打部門)	
3-241				II	特管	管弦打楽器アンサンブル演習C				前期	(管弦打部門)	
3-242				II	特管	管弦打楽器アンサンブル演習D				後期	(管弦打部門)	
3-243	I	音楽基礎演習A	音楽基礎演習A	I						前期	石井 尚子	E
3-244	I	音楽基礎演習B	音楽基礎演習B	I						後期	石井 尚子	E
3-245	I	合唱	合唱	I						後期	田末 勝志	
3-246	II	諸民族の音楽	諸民族の音楽	II						前期	由比 邦子	E
3-247	III	音楽と社会	音楽と社会	III						前期	角家 千恵	
3-248	II	コード・プロレッション	コード・プロレッション	II						前期	柏木 玲子	
3-249	II	和声学	和声学	II						後期	赤石 敏夫	
3-250	III	作・編曲法基礎	作・編曲法基礎	III						前期	吉澤 ゆかり	
3-251	III	作・編曲法応用	作・編曲法応用	III						後期	吉澤 ゆかり	
3-252	III	楽器学	楽器学	III						前期	檜垣 智也	
3-253	IV	楽曲分析								前期	橋田 光代	
3-254	II	音楽演習ⅡA	音楽演習ⅡA	II						前期	山本 英二・中川 亨	
3-255	II	音楽演習ⅡB	音楽演習ⅡB	II						後期	山本 英二・中川 亨	
3-256	III	音楽演習ⅢA	音楽演習ⅢA	III						前期	山本 英二・中川 亨	
3-257	III	音楽演習ⅢB	音楽演習ⅢB	III						後期	山本 英二・中川 亨	
3-258	IV	音楽演習ⅣA								前期	山本 英二・中川 亨	
3-259	IV	音楽演習ⅣB								後期	山本 英二・中川 亨	
3-260	I	台奏ⅠA	台奏ⅠA	I						前期	角家 千恵・平尾 多美納	
3-261	I	台奏ⅠB	台奏ⅠB	I						後期	角家 千恵・平尾 多美納	
3-262	II	台奏ⅡA	台奏ⅡA	II						前期	角家 千恵・平尾 多美納	

Index	配当 年次	2016(H28)年度入学生 Ⅳ回生用	配当 年次	2017(H29)年度入学生 Ⅲ回生用	配当 年次	2018 年度	2018(H30)年度入学生 Ⅱ回生用	配当 年次	2019(H31)年度入学生 Ⅰ回生用	区分	2019(H31)年度 担当者	H31 科目生
3-263	Ⅱ	ⅴ 台奏Ⅱ B	Ⅱ	ⅴ 台奏Ⅱ B						後期	角家 千恵・平尾 多美納	
3-264	Ⅲ	ⅴ 台奏Ⅲ A	Ⅲ	ⅴ 台奏Ⅲ A						前期	角家 千恵・平尾 多美納	
3-265	Ⅲ	ⅴ 台奏Ⅲ B	Ⅲ	ⅴ 台奏Ⅲ B						後期	角家 千恵・平尾 多美納	
3-266	Ⅳ	ⅴ 台奏Ⅳ A								前期	角家 千恵・平尾 多美納	
3-267	Ⅳ	ⅴ 台奏Ⅳ B								後期	角家 千恵・平尾 多美納	
3-268	Ⅱ	ⅴ 歌唱法	Ⅱ	ⅴ 歌唱法						後期	高田 一樹	
3-269	Ⅱ	ⅴ コンピューターミュージック基礎	Ⅱ	ⅴ コンピューターミュージック基礎						前期	山田 夏	
3-270	Ⅰ	ⅴ コンテンツ制作概論 A	Ⅰ	ⅴ コンテンツ制作概論 A						前期	橋田 光代	
3-271	Ⅰ	ⅴ コンテンツ制作概論 B	Ⅰ	ⅴ コンテンツ制作概論 B						後期	橋田 光代	
3-272	Ⅱ	ⅴ webデザイン	Ⅱ	ⅴ webデザイン						後期	甲斐 隆浩	
3-273	Ⅲ	ⅴ CGプログラミング	Ⅲ	ⅴ CGプログラミング						前期	甲斐 隆浩	
3-274	Ⅳ	ⅴ 国際文化関係論								前期	藤岡 巧	
3-275	Ⅲ	ⅴ 音楽とライブラリ構築	Ⅲ	ⅴ 音楽とライブラリ構築						前期	谷村 要	
3-276	Ⅳ	ⅴ 音楽出版と広告メディア論								前期	川崎 弘二	
3-277	Ⅲ	ⅴ ゲーム・ミュージック文化論								前期	尾鼻 崇	E
3-278	Ⅳ	ⅴ 映像と音楽と放送								後期	畑 祥雄・畑 由美子	
3-279	Ⅳ	ⅴ マンガ・アニメ音楽文化論								集中	江崎 慎平	
3-280	Ⅰ	ⅴ コミュニケーションと交渉術	Ⅰ	ⅴ コミュニケーションと交渉術						後期	神殿 織江	
3-281	Ⅰ	ⅴ 自己の探求	Ⅰ	ⅴ 自己の探求						前期	神殿 織江	
3-282	Ⅱ	ⅴ プレゼンテーション	Ⅱ	ⅴ プレゼンテーション						後期	甲斐 隆浩	
3-283	Ⅱ	ⅴ インターンシップ研究	Ⅱ	ⅴ インターンシップ研究						後期	松谷 葉子	
3-284	Ⅲ	ⅴ インターンシップ実習	Ⅲ	ⅴ インターンシップ実習						前期	志村 聖子・橋田 光代	
3-285	Ⅱ	ⅴ 音楽マネジメント演習 A	Ⅱ	ⅴ 音楽マネジメント演習 A						後期	橋田 光代	
3-286	Ⅲ	ⅴ 音楽マネジメント演習 B	Ⅲ	ⅴ 音楽マネジメント演習 B						前期	橋田 光代	
3-287	Ⅲ	ⅴ 音楽マネジメント演習 B	Ⅲ	ⅴ 音楽マネジメント演習 B						前期	志村 聖子	
3-288	Ⅲ	ⅴ 音楽マネジメント演習 B	Ⅲ	ⅴ 音楽マネジメント演習 B						前期	松谷 葉子	
3-289	Ⅲ	ⅴ 音楽マネジメント演習 C	Ⅲ	ⅴ 音楽マネジメント演習 C						後期	橋田 光代	
3-290	Ⅲ	ⅴ 音楽マネジメント演習 C	Ⅲ	ⅴ 音楽マネジメント演習 C						後期	志村 聖子	



1. 基礎科目・共通科目



1-001

ナンバリング	CC100A01	期間	前期
授業科目名	建学の精神/當相敬愛と浄土真宗 I		
英訳科目名	The Philosophy of Soai University (Shin Buddhism) /The Philosophy of Soai University within the Shin Buddhism I		
担当教員名	中平 了悟		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	○
ディプロマ・ポリシー3	○	ディプロマ・ポリシー4	◎
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>相愛大学の名称は、大乘仏教経典『仏説無量寿経』に述べられている「當相敬愛」から命名されました。「お互いに敬い慈しみあう」という意味です。この大乘仏教の精神こそ、相愛大学「建学の精神」です。</p> <p>さらに、建学の精神には「浄土真宗の精神に基づく教育により、有為な人材を育成することを目的とする」と述べられています。つまり、本講義では大乘仏教の思想と浄土真宗の精神を学ぶことで、相愛大学生としての基盤形成を目指します。</p> <p>本講義を通して、人間を深く見つめ直し、相愛大学生の自覚を涵養しましょう。</p> <p>また、この講義では月一回の「定例礼拝」をはじめ、宗教行事への参加を評価対象としています。この点はよく自覚してください。</p>		
到達目標	<p>本講義と宗教行事への参加を通して、「宗教」というものを知ることから始まり、人類の叡智の結晶である「仏教」の基礎を学ぶ。</p> <p>「大乘仏教」「日本仏教」、そして「浄土真宗」へと展開する道筋をたどっていき、本学の「建学の精神」を十分に理解できるようになる。</p>		
授業計画	<p>第1回 相愛大学で学ぶということについて</p> <p>第2回 人間と宗教 (1) 基礎</p> <p>第3回 人間と宗教 (2) 発展</p> <p>第4回 仏教を学ぶ：ブッダの生涯</p> <p>第5回 仏教を学ぶ：仏教思想の基盤</p> <p>第6回 仏教を学ぶ：大乘仏教への展開</p> <p>第7回 大乘仏教を学ぶ (1) 基礎</p> <p>第8回 大乘仏教を学ぶ (2) 発展</p> <p>第9回 親鸞聖人の教え</p> <p>第10回 浄土真宗を学ぶ (1) 基礎</p> <p>第11回 浄土真宗を学ぶ (2) 発展</p> <p>第12回 日本文化について考える</p> <p>第13回 相愛大学の歴史と精神</p> <p>第14回 相愛大学「建学の精神」について考える</p> <p>第15回 まとめ</p>		
評価方法 (合計100%)	講義への参加態度 (参加状況) ・ 宗教行事への参加 55% 試験・レポート・課題・提出物 45%		
失格条件	3分の1以上欠席した場合、失格とする。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業時間外における予習・復習等のアドバイス 身の周りの「宗教的なもの」を観察してみよう。 一度、仏教の本を読んでみよう。 大学の宗教行事に参加して、自分自身を見つめてみよう。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業時間外における予習・復習等に必要時間 講義で紹介する文献や仏教教義・宗教思想に関する参考文献を読む…予習 2時間 (90分) 講義で取り上げた問題や仏教教義・宗教思想について整理する……復習 2時間 (90分) 		
課題へのフィードバック	講義内容や宗教行事に関して提出した課題については、必要に応じて個別もしくは全体にコメントします。		
教科書	原則として指定しない。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	月に一度の「定例礼拝」へ出席し、レポートを提出した者は、適宜評価する。		
備考	僧侶としての実務経験をもとに、この授業を進めます。		
科目生への開講	あり		

ナンバリング	CC100A01	期間	前期
授業科目名	建学の精神/當相敬愛と浄土真宗 I		
英訳科目名	The Philosophy of Soai University (Shin Buddhism) /The Philosophy of Soai University within the Shin Buddhism I		
担当教員名	日高 明		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	○
ディプロマ・ポリシー3	○	ディプロマ・ポリシー4	◎
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>相愛大学の名称は、大乘仏教経典『仏説無量寿経』に述べられている「當相敬愛」から命名されました。「お互いに敬い慈しみあう」という意味です。この大乘仏教の精神こそ、相愛大学「建学の精神」です。</p> <p>さらに、建学の精神には「浄土真宗の精神に基づく教育により、有為な人材を育成することを目的とする」と述べられています。つまり、本講義では大乘仏教の思想と浄土真宗の精神を学ぶことで、相愛大学生としての基盤形成を目指します。</p> <p>本講義を通して、人間を深く見つめ直し、相愛大学生の自覚を涵養しましょう。</p> <p>また、この講義では月一回の「定例礼拝」をはじめ、宗教行事への参加を評価対象としています。この点はよく自覚してください。</p>		
到達目標	<p>本講義と宗教行事への参加を通して、「宗教」というものを知ることから始まり、人類の叡智の結晶である「仏教」の基礎を学ぶ。</p> <p>「大乘仏教」「日本仏教」、そして「浄土真宗」へと展開する道筋をたどっていき、本学の「建学の精神」を十分に理解できるようになる。</p>		
授業計画	<p>第1回 相愛大学で学ぶということについて</p> <p>第2回 人間と宗教（1）基礎</p> <p>第3回 人間と宗教（2）発展</p> <p>第4回 仏教を学ぶ：ブッダの生涯</p> <p>第5回 仏教を学ぶ：仏教思想の基盤</p> <p>第6回 仏教を学ぶ：大乘仏教への展開</p> <p>第7回 大乘仏教を学ぶ（1）基礎</p> <p>第8回 大乘仏教を学ぶ（2）発展</p> <p>第9回 親鸞聖人の教え</p> <p>第10回 浄土真宗を学ぶ（1）基礎</p> <p>第11回 浄土真宗を学ぶ（2）発展</p> <p>第12回 日本文化について考える</p> <p>第13回 相愛大学の歴史と精神</p> <p>第14回：相愛大学「建学の精神」について考える</p> <p>第15回 まとめ</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>講義への参加態度（参加状況）・宗教行事への参加 55%</p> <p>試験・レポート・課題・提出物 45%</p>		
失格条件	3分の1以上欠席した場合、失格とする。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>・授業時間外における予習・復習等のアドバイス 身の周りの「宗教的なもの」を観察してみよう。 一度、仏教の本を読んでみよう。 大学の宗教行事に参加して、自分自身を見つめてみよう。</p> <p>・授業時間外における予習・復習等に必要時間 講義で紹介する文献や仏教教義・宗教思想に関する参考文献を読む…予習 2時間（90分） 講義で取り上げた問題や仏教教義・宗教思想について整理する……復習 2時間（90分）</p>		
課題へのフィード バック	講義内容や宗教行事に関して提出した課題については、必要に応じて個別もしくは全体にコメントします。		
教科書	原則として指定しない。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	月に一度の「定例礼拝」へ出席し、レポートを提出した者は、適宜評価する。		
備考	僧侶としての実務経験をもとに、この授業を進めます。		
科目生への開講	あり		

1-003

ナンバリング	CC100A01	期間	前期
授業科目名	建学の精神/當相敬愛と浄土真宗 I		
英訳科目名	The Philosophy of Soai University (Shin Buddhism) /The Philosophy of Soai University within the Shin Buddhism I		
担当教員名	佐々木 隆晃		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	○
ディプロマ・ポリシー3	○	ディプロマ・ポリシー4	◎
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>相愛大学の名称は、大乘仏教経典『仏説無量寿経』に述べられている「當相敬愛」から命名されました。「お互いに敬い慈しみあう」という意味です。この大乘仏教の精神こそ、相愛大学「建学の精神」です。</p> <p>さらに、建学の精神には「浄土真宗の精神に基づく教育により、有為な人材を育成することを目的とする」と述べられています。つまり、本講義では大乘仏教の思想と浄土真宗の精神を学ぶことで、相愛大学生としての基盤形成を目指します。</p> <p>本講義を通して、人間を深く見つめ直し、相愛大学生の自覚を涵養しましょう。</p> <p>また、この講義では月一回の「定例礼拝」をはじめ、宗教行事への参加を評価対象としています。この点はよく自覚してください。</p>		
到達目標	<p>本講義と宗教行事への参加を通して、「宗教」というものを知ることから始まり、人類の叡智の結晶である「仏教」の基礎を学ぶ。</p> <p>「大乘仏教」「日本仏教」、そして「浄土真宗」へと展開する道筋をたどっていき、本学の「建学の精神」を十分に理解できるようになる。</p>		
授業計画	<p>第1回 相愛大学で学ぶということについて</p> <p>第2回 人間と宗教（1）基礎</p> <p>第3回 人間と宗教（2）発展</p> <p>第4回 仏教を学ぶ：ブッダの生涯</p> <p>第5回 仏教を学ぶ：仏教思想の基盤</p> <p>第6回 仏教を学ぶ：大乘仏教への展開</p> <p>第7回 大乘仏教を学ぶ（1）基礎</p> <p>第8回 大乘仏教を学ぶ（2）発展</p> <p>第9回 親鸞聖人の教え</p> <p>第10回 浄土真宗を学ぶ（1）基礎</p> <p>第11回 浄土真宗を学ぶ（2）発展</p> <p>第12回 日本文化について考える</p> <p>第13回 相愛大学の歴史と精神</p> <p>第14回：相愛大学「建学の精神」について考える</p> <p>第15回 まとめ</p>		
評価方法 (合計100%)	講義への参加態度（参加状況）・宗教行事への参加 55% 試験・レポート・課題・提出物 45%		
失格条件	3分の1以上欠席した場合、失格とする。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<ul style="list-style-type: none"> ・授業時間外における予習・復習等のアドバイス 身の周りの「宗教的なもの」を観察してみよう。 一度、仏教の本を読んでみよう。 大学の宗教行事に参加して、自分自身を見つめてみよう。 <ul style="list-style-type: none"> ・授業時間外における予習・復習等に必要時間 講義で紹介する文献や仏教教義・宗教思想に関する参考文献を読む…予習 2時間（90分） 講義で取り上げた問題や仏教教義・宗教思想について整理する……復習 2時間（90分） 		
課題へのフィードバック	講義内容や宗教行事に関して提出した課題については、必要に応じて個別もしくは全体にコメントします。		
教科書	原則として指定しない。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	月に一度の「定例礼拝」へ出席し、レポートを提出した者は、適宜評価する。		
備考	僧侶としての実務経験をもとに、この授業を進めます。		
科目生への開講	あり		

ナンバリング	CC100A01	期間	後期
授業科目名	建学の精神/當相敬愛と浄土真宗 I		
英訳科目名	The Philosophy of Soai University (Shin Buddhism) /The Philosophy of Soai University within the Shin Buddhism I		
担当教員名	塚田 博教		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	○
ディプロマ・ポリシー3	○	ディプロマ・ポリシー4	◎
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>相愛大学の名称は、大乘仏教經典『仏説無量寿經』に述べられている「當相敬愛」から命名されました。「お互いに敬い慈しみあう」という意味です。この大乘仏教の精神こそ、相愛大学「建学の精神」です。</p> <p>さらに、建学の精神には「浄土真宗の精神に基づく教育により、有為な人材を育成することを目的とする」と述べられています。つまり、本講義では大乘仏教の思想と浄土真宗の精神を学ぶことで、相愛大学生としての基盤形成を目指します。</p> <p>本講義を通して、人間を深く見つめ直し、相愛大学生の自覚を涵養しましょう。</p> <p>また、この講義では月一回の「定例礼拝」をはじめ、宗教行事への参加を評価対象としています。この点はよく自覚してください。</p>		
到達目標	<p>本講義と宗教行事への参加を通して、「宗教」というものを知ることから始まり、人類の叡智の結晶である「仏教」の基礎を学ぶ。</p> <p>「大乘仏教」「日本仏教」、そして「浄土真宗」へと展開する道筋をたどっていき、本学の「建学の精神」を十分に理解できるようになる。</p>		
授業計画	<p>第1回 相愛大学で学ぶということについて</p> <p>第2回 人間と宗教 (1) 基礎</p> <p>第3回 人間と宗教 (2) 発展</p> <p>第4回 仏教を学ぶ：ブッダの生涯</p> <p>第5回 仏教を学ぶ：仏教思想の基盤</p> <p>第6回 仏教を学ぶ：大乘仏教への展開</p> <p>第7回 大乘仏教を学ぶ (1) 基礎</p> <p>第8回 大乘仏教を学ぶ (2) 発展</p> <p>第9回 親鸞聖人の教え</p> <p>第10回 浄土真宗を学ぶ (1) 基礎</p> <p>第11回 浄土真宗を学ぶ (2) 発展</p> <p>第12回 日本文化について考える</p> <p>第13回 相愛大学の歴史と精神</p> <p>第14回 相愛大学「建学の精神」について考える</p> <p>第15回 まとめ</p>		
評価方法 (合計100%)	講義への参加態度 (参加状況) ・ 宗教行事への参加 55% 試験・レポート・課題・提出物 45%		
失格条件	3分の1以上欠席した場合、失格とする。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>・ 授業時間外における予習・復習等のアドバイス 身の周りの「宗教的なもの」を観察してみよう。 一度、仏教の本を読んでみよう。 大学の宗教行事に参加して、自分自身を見つめてみよう。</p> <p>・ 授業時間外における予習・復習等に必要な時間 講義で紹介する文献や仏教教義・宗教思想に関する参考文献を読む…予習 2時間 (90分) 講義で取り上げた問題や仏教教義・宗教思想について整理する……復習 2時間 (90分)</p>		
課題へのフィードバック	講義内容や宗教行事に関して提出した課題については、必要に応じて個別もしくは全体にコメントします。		
教科書	原則として指定しない。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	月に一度の「定例礼拝」へ出席し、レポートを提出した者は、適宜評価する。		
備考	僧侶としての実務経験をもとに、この授業を進めます。		
科目生への開講	あり		

1-005

ナンバリング	CC100A01	期間	後期
授業科目名	建学の精神/當相敬愛と浄土真宗 I		
英訳科目名	The Philosophy of Soai University (Shin Buddhism) /The Philosophy of Soai University within the Shin Buddhism I		
担当教員名	本多 彩		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	○
ディプロマ・ポリシー3	○	ディプロマ・ポリシー4	◎
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>相愛大学の名称は、大乘仏教経典『仏説無量寿経』に述べられている「當相敬愛」から命名されました。「お互いに敬い慈しみあう」という意味です。この大乘仏教の精神こそ、相愛大学「建学の精神」です。</p> <p>さらに、建学の精神には「浄土真宗の精神に基づく教育により、有為な人材を育成することを目的とする」と述べられています。つまり、本講義では大乘仏教の思想と浄土真宗の精神を学ぶことで、相愛大学生としての基盤形成を目指します。</p> <p>本講義を通して、人間を深く見つめ直し、相愛大学生の自覚を涵養しましょう。</p> <p>また、この講義では月一回の「定例礼拝」をはじめ、宗教行事への参加を評価対象としています。この点はよく自覚してください。</p>		
到達目標	<p>本講義と宗教行事への参加を通して、「宗教」というものを知ることから始まり、人類の叡智の結晶である「仏教」の基礎を学ぶ。</p> <p>「大乘仏教」「日本仏教」、そして「浄土真宗」へと展開する道筋をたどっていき、本学の「建学の精神」を十分に理解できるようになる。</p>		
授業計画	<p>第1回 相愛大学で学ぶということについて</p> <p>第2回 人間と宗教 (1) 基礎</p> <p>第3回 人間と宗教 (2) 発展</p> <p>第4回 仏教を学ぶ：ブッダの生涯</p> <p>第5回 仏教を学ぶ：仏教思想の基盤</p> <p>第6回 仏教を学ぶ：大乘仏教への展開</p> <p>第7回 大乘仏教を学ぶ (1) 基礎</p> <p>第8回 大乘仏教を学ぶ (2) 発展</p> <p>第9回 親鸞聖人の教え</p> <p>第10回 浄土真宗を学ぶ (1) 基礎</p> <p>第11回 浄土真宗を学ぶ (2) 発展</p> <p>第12回 日本文化について考える</p> <p>第13回 相愛大学の歴史と精神</p> <p>第14回 相愛大学「建学の精神」について考える</p> <p>第15回 まとめ</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>講義への参加態度 (参加状況) ・ 宗教行事への参加 55%</p> <p>試験 ・ レポート ・ 課題 ・ 提出物 45%</p>		
失格条件	3分の1以上欠席した場合、失格とする。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>・ 授業時間外における予習・復習等のアドバイス 身の周りの「宗教的なもの」を観察してみよう。 一度、仏教の本を読んでみよう。 大学の宗教行事に参加して、自分自身を見つめてみよう。</p> <p>・ 授業時間外における予習・復習等に必要時間 講義で紹介する文献や仏教教義・宗教思想に関する参考文献を読む…予習 2時間 (90分) 講義で取り上げた問題や仏教教義・宗教思想について整理する……復習 2時間 (90分)</p>		
課題へのフィード バック	講義内容や宗教行事に関して提出した課題については、必要に応じて個別もしくは全体にコメントします。		
教科書	原則として指定しない。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	月に一度の「定例礼拝」へ出席し、レポートを提出した者は、適宜評価する。		
備考	僧侶としての実務経験をもとに、この授業を進めます。		
科目生への開講	あり		

ナンバリング	CC100A01	期間	前期
授業科目名	建学の精神/當相敬愛と浄土真宗 I		
英訳科目名	The Philosophy of Soai University (Shin Buddhism) /The Philosophy of Soai University within the Shin Buddhism I		
担当教員名	釋 大智		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	○
ディプロマ・ポリシー3	○	ディプロマ・ポリシー4	◎
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>相愛大学の名称は、大乘仏教経典『仏説無量寿経』に述べられている「當相敬愛」から命名されました。「お互いに敬い慈しみあう」という意味です。この大乘仏教の精神こそ、相愛大学「建学の精神」です。</p> <p>さらに、建学の精神には「浄土真宗の精神に基づく教育により、有為な人材を育成することを目的とする」と述べられています。つまり、本講義では大乘仏教の思想と浄土真宗の精神を学ぶことで、相愛大学生としての基盤形成を目指します。</p> <p>本講義を通して、人間を深く見つめ直し、相愛大学生の自覚を涵養しましょう。</p> <p>また、この講義では月一回の「定例礼拝」をはじめ、宗教行事への参加を評価対象としています。この点はよく自覚してください。</p>		
到達目標	<p>本講義と宗教行事への参加を通して、「宗教」というものを知ることから始まり、人類の叡智の結晶である「仏教」の基礎を学ぶ。</p> <p>「大乘仏教」「日本仏教」、そして「浄土真宗」へと展開する道筋をたどっていき、本学の「建学の精神」を十分に理解できるようになる。</p>		
授業計画	<p>第1回 相愛大学で学ぶということについて</p> <p>第2回 人間と宗教（1）基礎</p> <p>第3回 人間と宗教（2）発展</p> <p>第4回 仏教を学ぶ：ブッダの生涯</p> <p>第5回 仏教を学ぶ：仏教思想の基盤</p> <p>第6回 仏教を学ぶ：大乘仏教への展開</p> <p>第7回 大乘仏教を学ぶ（1）基礎</p> <p>第8回 大乘仏教を学ぶ（2）発展</p> <p>第9回 親鸞聖人の教え</p> <p>第10回 浄土真宗を学ぶ（1）基礎</p> <p>第11回 浄土真宗を学ぶ（2）発展</p> <p>第12回 日本文化について考える</p> <p>第13回 相愛大学の歴史と精神</p> <p>第14回：相愛大学「建学の精神」について考える</p> <p>第15回 まとめ</p>		
評価方法 (合計100%)	講義への参加態度（参加状況）・宗教行事への参加 55% 試験・レポート・課題・提出物 45%		
失格条件	3分の1以上欠席した場合、失格とする。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>・授業時間外における予習・復習等のアドバイス 身の周りの「宗教的なもの」を観察してみよう。 一度、仏教の本を読んでみよう。 大学の宗教行事に参加して、自分自身を見つめてみよう。</p> <p>・授業時間外における予習・復習等に必要時間 講義で紹介する文献や仏教教義・宗教思想に関する参考文献を読む…予習 2時間（90分） 講義で取り上げた問題や仏教教義・宗教思想について整理する……復習 2時間（90分）</p>		
課題へのフィードバック	講義内容や宗教行事に関して提出した課題については、必要に応じて個別もしくは全体にコメントします。		
教科書	原則として指定しない。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	月に一度の「定例礼拝」へ出席し、レポートを提出した者は、適宜評価する。		
備考	僧侶としての実務経験をもとに、この授業を進めます。		
科目生への開講	あり		

1-007

ナンバリング	CC100A01	期間	前期
授業科目名	建学の精神/當相敬愛と浄土真宗 I		
英訳科目名	The Philosophy of Soai University (Shin Buddhism) /The Philosophy of Soai University within the Shin Buddhism I		
担当教員名	赤井 智顕		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	○
ディプロマ・ポリシー3	○	ディプロマ・ポリシー4	◎
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>相愛大学の名称は、大乘仏教経典『仏説無量寿経』に述べられている「當相敬愛」から命名されました。「お互いに敬い慈しみあう」という意味です。この大乘仏教の精神こそ、相愛大学「建学の精神」です。</p> <p>さらに、建学の精神には「浄土真宗の精神に基づく教育により、有為な人材を育成することを目的とする」と述べられています。つまり、本講義では大乘仏教の思想と浄土真宗の精神を学ぶことで、相愛大学生としての基盤形成を目指します。</p> <p>本講義を通して、人間を深く見つめ直し、相愛大学生の自覚を涵養しましょう。</p> <p>また、この講義では月一回の「定例礼拝」をはじめ、宗教行事への参加を評価対象としています。この点はよく自覚してください。</p>		
到達目標	<p>本講義と宗教行事への参加を通して、「宗教」というものを知ることから始まり、人類の叡智の結晶である「仏教」の基礎を学ぶ。</p> <p>「大乘仏教」「日本仏教」、そして「浄土真宗」へと展開する道筋をたどっていき、本学の「建学の精神」を十分に理解できるようになる。</p>		
授業計画	<p>第1回 相愛大学で学ぶということについて</p> <p>第2回 人間と宗教（1）基礎</p> <p>第3回 人間と宗教（2）発展</p> <p>第4回 仏教を学ぶ：ブッダの生涯</p> <p>第5回 仏教を学ぶ：仏教思想の基盤</p> <p>第6回 仏教を学ぶ：大乘仏教への展開</p> <p>第7回 大乘仏教を学ぶ（1）基礎</p> <p>第8回 大乘仏教を学ぶ（2）発展</p> <p>第9回 親鸞聖人の教え</p> <p>第10回 浄土真宗を学ぶ（1）基礎</p> <p>第11回 浄土真宗を学ぶ（2）発展</p> <p>第12回 日本文化について考える</p> <p>第13回 相愛大学の歴史と精神</p> <p>第14回：相愛大学「建学の精神」について考える</p> <p>第15回 まとめ</p>		
評価方法 (合計100%)	講義への参加態度（参加状況）・宗教行事への参加 55% 試験・レポート・課題・提出物 45%		
失格条件	3分の1以上欠席した場合、失格とする。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>・授業時間外における予習・復習等のアドバイス 身の周りの「宗教的なもの」を観察してみよう。 一度、仏教の本を読んでみよう。 大学の宗教行事に参加して、自分自身を見つめてみよう。</p> <p>・授業時間外における予習・復習等に必要時間 講義で紹介する文献や仏教教義・宗教思想に関する参考文献を読む…予習 2時間（90分） 講義で取り上げた問題や仏教教義・宗教思想について整理する……復習 2時間（90分）</p>		
課題へのフィード バック	講義内容や宗教行事に関して提出した課題については、必要に応じて個別もしくは全体にコメントします。		
教科書	原則として指定しない。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	月に一度の「定例礼拝」へ出席し、レポートを提出した者は、適宜評価する。		
備考	僧侶としての実務経験をもとに、この授業を進めます。		
科目生への開講	あり		

ナンバリング	CC100B01	期間	後期
授業科目名	仏教思想と現代		
英訳科目名	The Teachings of the Buddha and Modern Society		
担当教員名	日高 明		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	○
ディプロマ・ポリシー3	○	ディプロマ・ポリシー4	◎
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>仏教のみならず、およそ宗教は人々の生活や社会と深く結びついて展開してきました。本学の建学の精神である仏教・浄土真宗は、日本の文化・思想・生活に大きな影響を与えています。授業では、宗教とは何かという問いから出発して、世界の宗教を概観し、仏教の特色や広がり、浄土思想、そして親鸞聖人の教えの意義などを学びます。この授業を通して、現代社会のあり方と私たちの生き方について深く見詰め、宗教的情操の涵養をめざしましょう。</p> <p>また、月一回の「定例礼拝」をはじめ、宗教行事への参加を評価対象としています。この点はよく自覚してください。</p>		
到達目標	<p>宗教・仏教・浄土真宗の概要を理解し、それらを現代に生きる自己とのかかわりで考えることができるようになる。また、宗教・仏教に隣接する心理学や社会学など諸分野との関連について知り、仏教の視点をもとに自らの人生の課題を見つめることができるようになる。</p>		
授業計画	<p>第1回 現代に生きる仏教思想 第2回 宗教とは何か 第3回 宗教の種々相 第4回 ブッダの生涯と苦の自覚 第5回 縁起思想について 第6回 空の思想について 第7回 浄土思想：阿弥陀仏と極楽浄土 第8回 浄土思想：中国浄土教思想 第9回 浄土思想：日本浄土教の流れ 第10回 親鸞聖人の教え：親鸞聖人の生涯 第11回 親鸞聖人の教え：他力について 第12回 現代社会と仏教：概説 第13回 現代社会と仏教：「教」の側面から 第14回 現代社会と仏教：「行」の側面から 第15回 まとめ</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>講義への参加態度（参加状況）・宗教行事への参加 50% 試験・レポート・課題・提出物 50%</p>		
失格条件	3分の1以上欠席した場合、失格とする。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<ul style="list-style-type: none"> 講義時間外における予習・復習等のアドバイス 講義中に質問することがあるので復習をしておこう。 身のまわりにある「宗教的視点」を観察してみよう。 現代社会にみられる課題を考えてみよう。 講義時間外における予習・復習等に必要時間 講義で紹介する文献や仏教教義・宗教思想に関する参考文献を読む…予習 2時間（90分） 講義で取り上げた問題や仏教教義・宗教思想について整理する……復習 2時間（90分） 		
課題へのフィード バック	提出した課題については、必要に応じてコメントをつけて返却、もしくは授業中にコメントします。		
教科書	教科書は使用しない。必要に応じてプリントを配布する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	月に一度の「定例礼拝」へ出席し、レポートを提出した者は、適宜評価します。 担当者から個別に注意事項が伝達される場合があります。		
備考	僧侶としての実務経験をもとに、この授業を進めます。		
科目生への開講	あり		

1-009

ナンバリング	CC100B01	期間	前期
授業科目名	仏教思想と現代		
英訳科目名	The Teachings of the Buddha and Modern Society		
担当教員名	本多 彩		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	○
ディプロマ・ポリシー3	○	ディプロマ・ポリシー4	◎
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>仏教のみならず、およそ宗教は人々の生活や社会と深く結びついて展開してきました。本学の建学の精神である仏教・浄土真宗は、日本の文化・思想・生活に大きな影響を与えています。授業では、宗教とは何かという問いから出発して、世界の宗教を概観し、仏教の特色や広がり、浄土思想、そして親鸞聖人の教えの意義などを学びます。この授業を通して、現代社会のあり方と私たちの生き方について深く見つめ、宗教的情操の涵養をめざしましょう。</p> <p>また、月一回の「定例礼拝」をはじめ、宗教行事への参加を評価対象としています。この点はよく自覚してください。</p>		
到達目標	<p>宗教・仏教・浄土真宗の概要を理解し、それらを現代に生きる自己とのかかわりで考えることができるようになる。また、宗教・仏教に隣接する心理学や社会学など諸分野との関連について知り、仏教の視点をもとに自らの人生の課題を見つめることができるようになる。</p>		
授業計画	<p>第1回 現代に生きる仏教思想 第2回 宗教とは何か 第3回 宗教の種々相 第4回 ブッダの生涯と苦の自覚 第5回 縁起思想について 第6回 空の思想について 第7回 浄土思想：阿弥陀仏と極楽浄土 第8回 浄土思想：中国浄土教思想 第9回 浄土思想：日本浄土教の流れ 第10回 親鸞聖人の教え：親鸞聖人の生涯 第11回 親鸞聖人の教え：他力について 第12回 現代社会と仏教：概説 第13回 現代社会と仏教：「教」の側面から 第14回 現代社会と仏教：「行」の側面から 第15回 まとめ</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>講義への参加態度（参加状況）・宗教行事への参加 50% 試験・レポート・課題・提出物 50%</p>		
失格条件	3分の1以上欠席した場合、失格とする。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<ul style="list-style-type: none"> ・講義時間外における予習・復習等のアドバイス 講義中に質問することがあるので復習をしておこう。 身のまわりにある「宗教的視点」を観察してみよう。 現代社会にみられる課題を考えてみよう。 ・講義時間外における予習・復習等に必要時間 講義で紹介する文献や仏教教義・宗教思想に関する参考文献を読む…予習 2時間（90分） 講義で取り上げた問題や仏教教義・宗教思想について整理する……復習 2時間（90分） 		
課題へのフィード バック	提出した課題については、必要に応じてコメントをつけて返却、もしくは授業中にコメントします。		
教科書	教科書は使用しない。必要に応じてプリントを配布する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	月に一度の「定例礼拝」へ出席し、レポートを提出した者は、適宜評価します。 担当者から個別に注意事項が伝達される場合があります。		
備考			
科目生への開講	あり		

1-010

ナンバリング	CC100B01	期間	後期
授業科目名	仏教思想と現代		
英訳科目名	The Teachings of the Buddha and Modern Society		
担当教員名	多村 至恩		
ディプロマ・ポリシー-1		ディプロマ・ポリシー-2	○
ディプロマ・ポリシー-3	○	ディプロマ・ポリシー-4	◎
ディプロマ・ポリシー-5		ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	<p>仏教のみならず、およそ宗教は人々の生活や社会と深く結びついて展開してきました。本学の建学の精神である仏教・浄土真宗は、日本の文化・思想・生活に大きな影響を与えています。授業では、宗教とは何かという問いから出発して、世界の宗教を概観し、仏教の特色や広がり、浄土思想、そして親鸞聖人の教えの意義などを学びます。この授業を通して、現代社会のあり方と私たちの生き方について深く見つめ、宗教的情操の涵養をめざしましょう。</p> <p>また、月一回の「定例礼拝」をはじめ、宗教行事への参加を評価対象としています。この点はよく自覚してください。</p>		
到達目標	<p>宗教・仏教・浄土真宗の概要を理解し、それらを現代に生きる自己とのかかわりで考えることができるようになる。また、宗教・仏教に隣接する心理学や社会学など諸分野との関連について知り、仏教の視点をもとに自らの人生の課題を見つめることができるようになる。</p>		
授業計画	<p>第1回 現代に生きる仏教思想 第2回 宗教とは何か 第3回 宗教の種々相 第4回 ブッダの生涯と苦の自覚 第5回 縁起思想について 第6回 空の思想について 第7回 浄土思想：阿弥陀仏と極楽浄土 第8回 浄土思想：中国浄土教思想 第9回 浄土思想：日本浄土教の流れ 第10回 親鸞聖人の教え：親鸞聖人の生涯 第11回 親鸞聖人の教え：他力について 第12回 現代社会と仏教：概説 第13回 現代社会と仏教：「教」の側面から 第14回 現代社会と仏教：「行」の側面から 第15回 まとめ</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>講義への参加態度（参加状況）・宗教行事への参加 50% 試験・レポート・課題・提出物 50%</p>		
失格条件	3分の1以上欠席した場合、失格とする。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<ul style="list-style-type: none"> ・講義時間外における予習・復習等のアドバイス 講義中に質問することがあるので復習をしておこう。 身のまわりにある「宗教的視点」を観察してみよう。 現代社会にみられる課題を考えてみよう。 ・講義時間外における予習・復習等に必要時間 講義で紹介する文献や仏教教義・宗教思想に関する参考文献を読む…予習 2時間 (90分) 講義で取り上げた問題や仏教教義・宗教思想について整理する……復習 2時間 (90分) 		
課題へのフィード バック	提出した課題については、必要に応じてコメントをつけて返却、もしくは授業中にコメントします。		
教科書	教科書は使用しない。必要に応じてプリントを配布する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	月に一度の「定例礼拝」へ出席し、レポートを提出した者は、適宜評価します。 担当者から個別に注意事項が伝達される場合があります。		
備考			
科目生への開講	あり		

1-011

ナンバリング	CC100B01	期間	後期
授業科目名	仏教思想と現代		
英訳科目名	The Teachings of the Buddha and Modern Society		
担当教員名	乗山 悟		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	○
ディプロマ・ポリシー3	○	ディプロマ・ポリシー4	◎
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>仏教のみならず、およそ宗教は人々の生活や社会と深く結びついて展開してきました。本学の建学の精神である仏教・浄土真宗は、日本の文化・思想・生活に大きな影響を与えています。授業では、宗教とは何かという問いから出発して、世界の宗教を概観し、仏教の特色や広がり、浄土思想、そして親鸞聖人の教えの意義などを学びます。この授業を通して、現代社会のあり方と私たちの生き方について深く見つめ、宗教的情操の涵養をめざしましょう。</p> <p>また、月一回の「定例礼拝」をはじめ、宗教行事への参加を評価対象としています。この点はよく自覚してください。</p>		
到達目標	<p>宗教・仏教・浄土真宗の概要を理解し、それらを現代に生きる自己とのかかわりで考えることができるようになる。また、宗教・仏教に隣接する心理学や社会学など諸分野との関連について知り、仏教の視点をもとに自らの人生の課題を見つめることができるようになる。</p>		
授業計画	<p>第1回 現代に生きる仏教思想 第2回 宗教とは何か 第3回 宗教の種々相 第4回 ブッダの生涯と苦の自覚 第5回 縁起思想について 第6回 空の思想について 第7回 浄土思想：阿弥陀仏と極楽浄土 第8回 浄土思想：中国浄土教思想 第9回 浄土思想：日本浄土教の流れ 第10回 親鸞聖人の教え：親鸞聖人の生涯 第11回 親鸞聖人の教え：他力について 第12回 現代社会と仏教：概説 第13回 現代社会と仏教：「教」の側面から 第14回 現代社会と仏教：「行」の側面から 第15回 まとめ</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>講義への参加態度（参加状況）・宗教行事への参加 50% 試験・レポート・課題・提出物 50%</p>		
失格条件	3分の1以上欠席した場合、失格とする。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<ul style="list-style-type: none"> ・講義時間外における予習・復習等のアドバイス 講義中に質問することがあるので復習をしておこう。 身のまわりにある「宗教的視点」を観察してみよう。 現代社会にみられる課題を考えてみよう。 ・講義時間外における予習・復習等に必要時間 講義で紹介する文献や仏教教義・宗教思想に関する参考文献を読む…予習 2時間（90分） 講義で取り上げた問題や仏教教義・宗教思想について整理する……復習 2時間（90分） 		
課題へのフィード バック	提出した課題については、必要に応じてコメントをつけて返却、もしくは授業中にコメントします。		
教科書	教科書は使用しない。必要に応じてプリントを配布する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	月に一度の「定例礼拝」へ出席し、レポートを提出した者は、適宜評価します。 担当者から個別に注意事項が伝達される場合があります。		
備考			
科目生への開講	あり		

1-012

ナンバリング	CC100B01	期間	後期
授業科目名	仏教思想と現代		
英訳科目名	The Teachings of the Buddha and Modern Society		
担当教員名	井上 陽		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	○
ディプロマ・ポリシー3	○	ディプロマ・ポリシー4	◎
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>仏教のみならず、およそ宗教は人々の生活や社会と深く結びついて展開してきました。本学の建学の精神である仏教・浄土真宗は、日本の文化・思想・生活に大きな影響を与えています。授業では、宗教とは何かという問いから出発して、世界の宗教を概観し、仏教の特色や広がり、浄土思想、そして親鸞聖人の教えの意義などを学びます。この授業を通して、現代社会のあり方と私たちの生き方について深く見詰め、宗教的情操の涵養をめざしましょう。</p> <p>また、月一回の「定例礼拝」をはじめ、宗教行事への参加を評価対象としています。この点はよく自覚してください。</p>		
到達目標	<p>宗教・仏教・浄土真宗の概要を理解し、それらを現代に生きる自己とのかかわりで考えることができるようになる。また、宗教・仏教に隣接する心理学や社会学など諸分野との関連について知り、仏教の視点をもとに自らの人生の課題を見つめることができるようになる。</p>		
授業計画	<p>第1回 現代に生きる仏教思想 第2回 宗教とは何か 第3回 宗教の種々相 第4回 ブッダの生涯と苦の自覚 第5回 縁起思想について 第6回 空の思想について 第7回 浄土思想：阿弥陀仏と極楽浄土 第8回 浄土思想：中国浄土教思想 第9回 浄土思想：日本浄土教の流れ 第10回 親鸞聖人の教え：親鸞聖人の生涯 第11回 親鸞聖人の教え：他力について 第12回 現代社会と仏教：概説 第13回 現代社会と仏教：「教」の側面から 第14回 現代社会と仏教：「行」の側面から 第15回 まとめ</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>講義への参加態度（参加状況）・宗教行事への参加 50% 試験・レポート・課題・提出物 50%</p>		
失格条件	3分の1以上欠席した場合、失格とする。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<ul style="list-style-type: none"> 講義時間外における予習・復習等のアドバイス 講義中に質問することがあるので復習をしておこう。 身のまわりにある「宗教的視点」を観察してみよう。 現代社会にみられる課題を考えてみよう。 講義時間外における予習・復習等に必要時間 講義で紹介する文献や仏教教義・宗教思想に関する参考文献を読む…予習 2時間（90分） 講義で取り上げた問題や仏教教義・宗教思想について整理する……復習 2時間（90分） 		
課題へのフィード バック	提出した課題については、必要に応じてコメントをつけて返却、もしくは授業中にコメントします。		
教科書	教科書は使用しない。必要に応じてプリントを配布する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	月に一度の「定例礼拝」へ出席し、レポートを提出した者は、適宜評価します。 担当者から個別に注意事項が伝達される場合があります。		
備考	僧侶としての実務経験をもとに、この授業を進めます。		
科目生への開講	あり		

ナンバリング		期間	前期/後期
授業科目名	大学と地域社会		
英訳科目名	University and Regional Society		
担当教員名	中村 圭爾		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	○
ディプロマ・ポリシー3	○	ディプロマ・ポリシー4	◎
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>いま、日本の大学は、大学の中だけで教育や研究を行うだけではなく、そのことを通して、社会や地域に対して貢献することが大きな役割であるとされるようになってきました。大学にたくわえられた豊かな知識や技術を広く世界や日本全体、とくにそれぞれの大学が位置する地域社会に提供し、それぞれの地域社会の発展や振興に寄与するのが、現在の大学の重要な使命となっているのです。</p> <p>それでは、私たち相愛大学は、大学が位置している大阪府や大阪市、そして実際にキャンパスがある住之江区や中央区に対して、これまでどのような役割を果たしてきているのでしょうか、またどのような役割をこれから果たしていこうとしているのでしょうか。</p> <p>このようなことを考える時には、まず相愛大学がどのような精神で設立され、どのような方針で大学の使命を果たそうとしているのかを正しく理解したうえで、相愛大学の教育や研究、地域貢献の考え方と、具体的な内容を知るとともに、地元大阪府大阪市、そして中央区や住之江区の現状、地元と大学の現在の関係について認識を広めていくことが重要となります。</p> <p>この科目は、相愛大学の歴史、相愛大学の地域社会に関する教育・研究・地域貢献の現状を、大学の立場から学ぶとともに、地元地域の実情と、地元のさまざまな立場からの大学に対する見方や考え方を認識し、大学と地域とのよりよい共生や連携を発展させるために、地元の方々の協力も得て、提供されるものです。</p>		
到達目標	相愛大学の歴史と地域への貢献、地域の経済・社会・文化のさまざまな現状や課題について十分に理解でき、そのことを自分で他者に対して正しく説明できるようになる。		
授業計画	第1回 授業内容と進め方の説明 第2回 相愛大学のあゆみ 第3回 日本の大学と社会 第4回 相愛大学と社会 第5回 相愛大学の研究と社会 第6回 相愛大学の社会貢献 第7回 音楽学部の教育研究と地域社会 第8回 人文学部の教育研究と地域社会 第9回 人間発達学部の教育研究と地域社会 第10回 大阪の経済社会文化の現状と課題 第11回 地元自治体の経済社会文化の現状と課題Ⅰ 第12回 地元自治体の経済社会文化の現状と課題Ⅱ 第13回 地元の保育・教育界の現状Ⅰ 第14回 地元の保育・教育界の現状Ⅱ 第15回 まとめ		
評価方法 (合計100%)	毎回、授業の後で復習としてレポートを作成することにします。 各回のレポートの評価点を合計した点数を成績とします。 ・授業への参加態度 20% ・授業内容の理解度 80%		
失格条件	欠席回数が5回をこえた場合（6回欠席すれば失格です）。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	この授業は、復習を重視します。毎回、授業の後で、所定の用紙に、授業のまとめ（約100字）と授業の感想（よく分かった所、印象に残った所、難しかった点、気付いた点など、約100字）、あわせて約200字を記し、提出してください（所要時間4時間）。提出日時、提出場所等詳細については、1回目の授業時に説明します。		
課題へのフィード バック	毎回提出するレポートについて、それぞれの回の担当者から、到達目標とその達成度、理解不足の部分の内容などの意見を出して頂き、その概要を最終授業日のまとめで紹介するとともに、ポータルサイトで履修者に向けて周知します。		
教科書	不使用。基本的に毎回授業資料を配布します。		
著者名			
出版社			
参考書	各回の授業中に、必要があれば紹介します。		
その他	特になし		
備考	この授業の第10回、第11回、第12回は自治体の管理職（住之江区長、中央区長、大阪市経済戦略局の局長）を外部講師として招き、行政責任者としての実務経験をもとに授業を進めます。		
科目生への開講	あり		

ナンバリング	CC100A02	期間	前期/後期
授業科目名	大学と社会		
英訳科目名	Soai University and Society		
担当教員名	中村 圭爾		
ディプロマ・ポリシー-1		ディプロマ・ポリシー-2	○
ディプロマ・ポリシー-3	○	ディプロマ・ポリシー-4	◎
ディプロマ・ポリシー-5		ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	<p>この科目には、二つの大きな目的があります。一つ目は、相愛大学はどのような大学なのかを在學生に皆さんに正しく理解していただき、相愛大学生であることの自覚をもって大学生生活を有意義に過ごしていただく一助とすることです。二つ目は、相愛大学をふくめ、日本の大学は今どのような状況にあり、どのような役割を期待されているかを社会との関係でとらえ、大学生としてどのように社会と関わるのかを、受講生一人一人に考えていただくことです。</p> <p>いま、日本の大学は、大学の中だけで教育や研究を行うだけではなく、そのことを通して、社会や地域に対して貢献することが大きな役割であるとされるようになってきています。大学にたくわえられた豊かな知識や技術を広く世界や日本全体、とくにそれぞれの大学が位置する地域社会に提供し、それぞれの地域社会の発展や振興に寄与するのが、現在の大学の重要な使命となっているのです。</p> <p>そのために、まず相愛大学がどのような精神で設立され、どのような歴史をもっているのか、教育や研究、社会貢献についてどのような体制と方針で大学の使命を果たそうとしているのかを正しく理解していただく必要があります。それと同時に、今日本の社会全体はもちろん、相愛大学が位置する地元大阪府大阪市、そして中央区や住之江区の現状、地元と大学の現在の関係について認識を広めていくことが重要となります。</p> <p>この科目は、相愛大学の建学の精神と歴史、現在の教育・研究・地域貢献の具体的な現状を、大学の立場から学ぶとともに、地元の実情と、地元のさまざまな立場からの大学に対する見方や考え方を認識し、大学と地域とのよりよい共生や連携を進展させるために、地元の方々の協力も得て、提供されるものです。</p>		
到達目標	相愛大学の歴史と現在および社会に果たしている役割、地域の経済・社会・文化のさまざまな現状や課題について十分に理解でき、そのことを自分で他者に対して正しく説明できるようになる。		
授業計画	第1回 授業内容と進め方の説明 第2回 相愛大学のあゆみ 第3回 日本の大学と社会 第4回 相愛大学と社会 第5回 相愛大学の研究と社会 第6回 相愛大学の社会貢献 第7回 音楽学部の教育研究と地域社会 第8回 人文学部の教育研究と地域社会 第9回 人間発達学部の教育研究と地域社会 第10回 大阪の経済社会文化の現状と課題 第11回 地元自治体の経済社会文化の現状と課題Ⅰ 第12回 地元自治体の経済社会文化の現状と課題Ⅱ 第13回 地元の保育・教育界の現状Ⅰ 第14回 地元の保育・教育界の現状Ⅱ 第15回 まとめ		
評価方法 (合計100%)	毎回、授業の後で復習としてレポートを作成することにします。 各回のレポートの評価点を合計した点数を成績とします。 ・授業への参加態度 20% ・授業内容の理解度 80%		
失格条件	欠席回数が5回をこえた場合（6回欠席すれば失格です）。		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	この授業は、復習を重視します。毎回、授業の後で、所定の用紙に、授業のまとめ（約100字）と授業の感想（よく分かった所、印象に残った所、難しかった点、気付いた点など、約100字）、あわせて約200字を記し、提出してください（所要時間4時間）。提出日時、提出場所等詳細については、1回目の授業時に説明します。		
課題へのフィード バック	毎回提出するレポートについて、それぞれの回の担当者から、到達目標とその達成度、理解不足の部分の内容などの意見を出して頂き、その概要を最終授業日のまとめで紹介するとともに、ポータルサイトで履修者に向けて周知します。		
教科書	不使用。基本的に毎回授業資料を配布します。		
著者名			
出版社			
参考書	各回の授業中に、必要があれば紹介します。		
その他	特になし		
備考	この授業の第10回、第11回、第12回は自治体の管理職（住之江区長、中央区長、大阪市経済戦略局の局長）を外務講師として招き、行政責任者としての実務経験をもとに授業を進めます。		
科目生への開講	あり		

ナンバリング		期間	前期															
授業科目名	大阪学入門																	
英訳科目名	Introduction to Osaka Studies																	
担当教員名	千葉 真也、前垣 和義																	
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2																
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4																
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6																
授業概要・ポイント	<p>前垣は主に現代の大阪についてお話しします。今やカレーライスは国民食ですが、その歴史に、大阪企業が果たした役割をご存じですか。授業は、このように身近なものをテーマに取り上げ、大阪の視点から興味深く分析を図っていきます。(前垣)</p> <p>千葉は古代から江戸時代までの大阪についてお話しします。大阪の歴史とその背景となる地理的条件について基礎知識を身につけましょう。(千葉)</p> <p>江戸時代の大阪の生んだ作家・文人(西鶴、近松、契沖、秋成など)は、新しい領域の開拓者であり第一人者でした。キーワードは新しさです。(千葉)</p>																	
到達目標	<p>大阪という地域を多様な視点から考察することができる。</p> <p>大阪について自分の言葉で表現できる。</p>																	
授業計画	<p>第1回 大阪の地理的条件(千葉)</p> <p>第2回 「コンビニ」で出会える食の大阪学(前垣)</p> <p>第3回 『広辞苑』から見えてくる東西文化比較(前垣)</p> <p>第4回 「カレーライス」から大阪のビジネスを考える(前垣)</p> <p>第5回 「大阪のおばちゃん」から考察する大阪経済学(前垣)</p> <p>第6回 「大阪の地名」から、ことば、文化、歴史を探る(前垣)</p> <p>第7回 クイズで読み解く、「水都大阪」(前垣)</p> <p>第8回 「大阪のしゃれ」考察&まとめ(前垣)</p> <p>第9回 大阪の歴史(1)―古代～中世(千葉)</p> <p>第10回 大阪の歴史(2)―近世～現代(千葉)</p> <p>第11回 井原西鶴(千葉)</p> <p>第12回 近松門左衛門(千葉)</p> <p>第13回 契沖(千葉)</p> <p>第14回 上田秋成(千葉)</p> <p>第15回 与謝蕪村(千葉)</p>																	
評価方法 (合計100%)	<p>二人の担当者の評価を平均して算出します。</p> <p>前垣 授業への参加意欲度、レポート、課題などによって評価します。</p> <table border="1"> <tr> <td>評価比率</td> <td>授業への参加態度、意欲度(授業後提出のコメントを含む)</td> <td>30%</td> </tr> <tr> <td></td> <td>レポート</td> <td>50%</td> </tr> <tr> <td></td> <td>課題</td> <td>20%</td> </tr> </table> <p>千葉 授業への参加態度と小テストによって評価します。</p> <table border="1"> <tr> <td>評価比率</td> <td>授業への参加態度</td> <td>40%</td> </tr> <tr> <td></td> <td>小テスト</td> <td>60%</td> </tr> </table>			評価比率	授業への参加態度、意欲度(授業後提出のコメントを含む)	30%		レポート	50%		課題	20%	評価比率	授業への参加態度	40%		小テスト	60%
評価比率	授業への参加態度、意欲度(授業後提出のコメントを含む)	30%																
	レポート	50%																
	課題	20%																
評価比率	授業への参加態度	40%																
	小テスト	60%																
失格条件	なし																	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>・次の授業のテーマを捉え、関連情報を探し、家族や友人等と、ディスカッション等を重ねる。(予習時間 1時間)</p> <p>・授業中に配布されたプリントをもとに参考文献や関連するサイトを調べ、小テストやレポートの準備をすること。(3時間)</p>																	
課題へのフィードバック	<p>レポート、課題、授業後のコメントに関しては、提出物受領後、全体に向けコメントします。ポータルサイトを使う場合もあります。(前垣)</p> <p>小テストについては、原則的に実施した次の授業の時に全体に向けてコメントします。また個々の答えは採点后、できるだけ速やかに返却します。(千葉)</p>																	
教科書	プリントを使用します。																	
著者名																		
出版社																		
参考書																		
その他																		
備考																		
科目生への開講	なし																	

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	まちづくり入門		
英訳科目名	Introduction to Community Building		
担当教員名	岡田 裕		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>いま、日本の大学は、大学の中だけで教育や研究を行うだけではなく、そのことを通して、社会や地域に対して貢献することが大きな役割であるとされるようになってきています。大学にたくわえられた豊かな知識や技術を広く世界や日本全体、とくにそれぞれの大学が位置する地域社会に提供し、それぞれの地域社会の発展や振興に寄与するのが、現在の大学の重要な使命となっているのです。</p> <p>それでは、私たちが生まれ育ってきた地域社会、私たちが学んでいる相愛大学が位置する地域社会は現在どのような姿をしていて、その姿の中で私たちはこれからどのように生活していくのでしょうか。そのような疑問を解決していくためのとっかかりとして「幼老共生」について考え、「人口減少社会」・「まちづくり」、さらに「ライフサイクル」という3つの視点について学習します。そしてこれら3つの視点を持って私たちが生まれ育ってきた地域社会、私たちが学んでいる相愛大学が位置する地域社会の姿を見つめ直します。そして自分自身が地域社会の中でこれからどのように生きて行こうとしているのかを仲間とのグループワークやディスカッションを通してより明確にしていきたいと考えています。</p> <p>この科目は、地域を眺め自分の地域生活を見つめ直すことを通して、大学と地域と自分とのよりよい共生や連携を発展させるために、地元の方々の協力も得て、提供されるものです。</p>		
到達目標	地域を「コミュニティ」「まちづくり」という視点から眺め、さらに「ライフサイクル」という視点でもって今後の自分の生き方と地域とのかかわり方について他者に対して自信を持って説明できるようになる。		
授業計画	<p>第1回 授業内容と進め方の説明</p> <p>第2回 「人口減少社会」が意味するもの①</p> <p>第3回 「人口減少社会」が意味するもの②(グループワーク中心)</p> <p>第4回 「人口減少社会」が意味するもの③(プレゼン制作中心)</p> <p>第5回 「人口減少社会」が意味するものについてのグループワークとディスカッション</p> <p>第6回 幼老共生と「ライフサイクル」の意味するもの①</p> <p>第7回 幼老共生と「ライフサイクル」の意味するもの②(グループワーク中心)</p> <p>第8回 幼老共生と「ライフサイクル」の意味するもの③(プレゼン制作中心)</p> <p>第9回 「ライフサイクル」についてのグループワークとディスカッション</p> <p>第10回 「まちづくり」が意味するもの①</p> <p>第11回 「まちづくり」が意味するもの②(グループワーク中心)</p> <p>第12回 「まちづくり」が意味するもの③(プレゼン制作中心)</p> <p>第13回 「まちづくり」についてのグループワークとディスカッション</p> <p>第14回 「今後の自分と地域とのかかわり方」についてのプレゼンテーション</p> <p>第15回 まとめ</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>授業への積極的参加 30%</p> <p>2回のプレゼン及びレポート 20%</p> <p>最終プレゼン及び最終レポート 50%</p>		
失格条件	<p>出席回数が3分の2を超えない者(遅刻3回で欠席1回とカウントする)</p> <p>レポートを1つでも未提出の者(レポートはすべて提出しないと失格となる)</p>		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	<p>この授業は、授業中のグループワークとディスカッションを重視します。欠席が続くと授業についていけなくなります。ですからクラスの中に友人(学習ペア)を作っておいて、もし欠席した時には授業中にどんなグループワークしたか、また次回までに個人作業として準備しておくべきことは何かを相互に教え合って、欠席した時間分を必ず自分で補習しておきましょう。(最初の授業オリエンテーションで学習ペアづくりをします)</p> <p>1回の授業(2時間)に予習・復習の時間を4時間充てましょう。</p>		
課題へのフィードバック	課題やプレゼンに対して、学生同士で相互評価したり、教員がコメントする。		
教科書	使用しません。ただ内容によってプリントを配布することがあります。		
著者名			
出版社			
参考書	各回の授業中に、必要があれば紹介します。		
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	CC300A01	期間	前期/後期
授業科目名	キャリアデザイン論/キャリアデザイン		
英訳科目名	Career Design Theory/Career Design		
担当教員名	向井 光太郎		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	◎	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	この講義は、建学の精神を在学生活の中で行動によって表現し、いずれ社会に出て活躍する「プロフェッショナル」のフィールドでも踏襲して実践する人物になるための要素を体系的に学びます。講義形式の授業の中に、教員と学生または学生同士のコミュニケーションなどを取り入れ、社会との関わりを強く意識します。		
到達目標	周囲に対する働きかけを行えること いろいろなコミュニケーションを実践できること 教養を得る人格を備えること 思考と洞察の能力を高めること これらの素養を通して、卒業後の進路（働くフィールド）を設計すること		
授業計画	第1回 イントロダクション 第2回 変化について -変化をとらえる、変化のあとの世界を描く 第3回 洞察について -物事を見極める、複眼で考える 第4回 コミュニケーションについて -優れたコミュニケーション 第5回 自分の魅力について -自分自身、人間的魅力 第6回 将来を考えることについて* -ディスカッション（全体） 第7回 リーダーシップについて -スタイル、役目、課題など 第8回 決断について -情報、知識 第9回 ネットワーク・人脈について -仕事、人物、接点、他者 第10回 モラル・ルールについて -道徳、正義 第11回 現場感覚について -情報、アイデア、理論と実践 第12回 これからの仕事について* -ディスカッション（全体） 第13回 教養について -学力、学業、語学 第14回 私の役目について -将来のフィールドとは 第15回 周囲と他者への関わり -プロフェッショナルとして		
評価方法 (合計100%)	本授業の意義を理解し、授業への参加態度、授業内課題・レポート、発表等を含め、積極的に取り組んだかを総合的に評価します。具体的な評価割合は以下のとおりです。 1. 授業内パフォーマンス評価（コミュニケーション、課題、発言、リアクションなど） 50% 2. レポート評価（レポート作成への取組み姿勢や文章力など） 50%		
失格条件	1. 欠席5回以上は失格とします。 2. 30分超の遅刻は欠席とし、20分以内の遅刻は3回で1回の欠席とします。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	1. 各回のテーマについて理解を深め、自身の将来設計に役立てること。課題について調べること。（1時間） 2. 自分が社会とどのように関わっていくのかという視点を持つために、世の中のトピックや身の回りの生活環境から情報を常にインプットしておくこと。（1時間）		
課題へのフィードバック	・リアクションペーパーの返却 ・リアクションペーパーに関するフィードバックやコミュニケーション ・質疑に対する受講者シェア型の応答など		
教科書	指定する教科書はありません。板書などに必要なノートやファイルは各自準備してください。		
著者名			
出版社			
参考書	適宜、授業内で指示します。また、ポータルで公開する場合がありますので、常にアクセスできるようにしておいてください。		
その他	ポータルによる教材配信をする場合があります。ポータルへのアクセスが常にできる状態にしておいてください。		
備考	ビジネスコンサルティングとしての実務経験をもとに、この授業を進めます。		
科目生への開講	あり		

ナンバリング	CC300A01	期間	前期
授業科目名	キャリアデザイン論(子)/キャリアデザイン(子)		
英訳科目名	Career Design Theory/Career Design		
担当教員名	直島 正樹、木村 久男、中井 清津子、松島 京		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	子どもを支援する専門職である保育士・幼稚園教諭・小学校教諭をめざすにあたり、基本的な知識を身につけ、感性を養う。子ども発達学科での4年間の学びの第一段階として、将来の進路選択について考える契機として欲しい。		
到達目標	①保育士・幼稚園教諭・小学校教諭の仕事・役割に関する基本的な知識を習得できる。 ②将来の進路選択のために必要な基本的知識を身につけ、今後の学びの姿勢についての考えを深めることができる。		
授業計画	第1回 オリエンテーション：授業の進め方・留意点・評価方法等 第2回 子どもと自然①：相愛大学の自然環境を活用した学習（概要） 第3回 子どもと自然②：相愛大学の自然環境を体験 第4回 子どもと自然③：自然環境を活用した学習に関するまとめ 第5回 分野別学習①（幼稚園）：幼稚園教諭の仕事・資質について 第6回 分野別学習②（保育所）：保育所における保育士の仕事・資質について 第7回 分野別学習③（施設）：施設における保育士の仕事・資質について 第8回 分野別学習④（小学校）：小学校教諭の仕事・資質について 第9回 分野別学習⑤：分野別学習のまとめ 第10回 今後の現場実習に向けて①：実習について（概要・目的） 第11回 今後の現場実習に向けて②：書類作成について 第12回 今後の現場実習に向けて③：実習先の理解（実習先別） 第13回 今後の現場実習に向けて④：実習記録について（文章作成上の基本的事項） 第14回 今後の現場実習に向けて⑤：実習記録について（実習先別） 第15回 まとめ（半期の振り返り）		
評価方法 (合計100%)	受講状況【積極的参加、マナー等】40% 課題【授業内課題等】60%		
失格条件	以下、2つのいずれかにあてはまる場合、失格とする。 ①出席回数が3分の2（10回）以上に満たない場合 *20分以上の遅刻は欠席とし、20分未満の遅刻は3回で1回の欠席とする。 ②課題等が指定通りに提出できなかった場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業内で学んだ内容および関連するものについて、自身で積極的に調べ、意見をまとめておくこと（予習時間：2時間・復習時間：2時間）。		
課題へのフィード バック	・授業内課題については、必要に応じて個別もしくは全体にコメントする。 ・最終課題については、ポータルサイト等を通じて、全体に向けてコメントする。		
教科書	①『保育所保育指針解説』（厚生労働省） ②『幼稚園教育要領解説』（文部科学省） ③『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』（内閣府・文部科学省・厚生労働省） *その他、必要に応じてプリント類を配布する。		
著者名	①厚生労働省②文部科学省③内閣府・文部科学省・厚生労働省		
出版社	①②③すべてフレーベル館		
参考書	適宜紹介する。		
その他	①私語等は謹んで意欲的に授業に参加すること。授業態度等の改善が見られない場合、単位認定を行わない場合もある。 ②今後の現場実習に向けての基本的な学習も行う。1年次開講科目（集中講義）である「保育・教育実践学習」も必ず履修すること。 ③指定したテキストは、他の授業でも使用するため、必ず購入すること。		
備考	社会福祉施設職員・社会福祉協議会職員としての実務経験をもとに、この授業を進めます。（直島） 小学校教諭としての実務経験をもとに、この授業を進めます。（木村） 幼稚園教諭としての実務経験をもとに、この授業を進めます。（中井）		
科目生への開講	あり		

ナンバリング	期間	後期
授業科目名	キャリアデザイン演習	
英訳科目名	Career Design Practices	
担当教員名	碓 ともみ	
ディプロマ・ポリシー1	ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	社会で大切な「社会人基礎力」を養い、個々人が「なぜ働くのか、どう生きていくのか」を自立的にキャリア形成が出来る様になることを目標とする。自己分析で自分の強みを把握し自己理解を探索し、計画的に将来に向けた準備をする。また、他者との協働作業から人との関わりを学び考えていく。更に、労働市場や雇用形態を学び、職業理解を深めていく。	
到達目標	自立的・主体的にキャリアつくり上げていくことを学ぶ。 単に個々人やグループで考えるだけでなく、パフォーマンスを組み入れ協働意識を高めていくことで、自己理解と共に他者理解を深めていくことのできる。 また、社会に出るためのビジネスマナーを体得できる。	
授業計画	第1回 プロローグ キャリアデザインとは何か 第2回 社会人基礎力 第3回 企業のしくみ（大企業・中小企業・ベンチャー企業） 第4回 現在の労働市場・雇用形態（職業理解） 第5回 働く意義 第6回 自己理解（自分の強みを知ろう） 第7回 他者理解（他者の考えを知る） 第8回 モチベーション論とリーダーシップ論 第9回 ビジネスマナー（丁寧な挨拶、日本語、一般教養） 第10回 多様な働き方（ワーク・ライフ・バランスとダイバーシティ） 第11回 キャリア理論（計画された偶発性） 第12回 グループワーク①（ケースから学ぶ課題解決型学習） 第13回 キャリアアンカー 第14回 キャリアプランニング（アクションプランをつくる） 第15回 理解度確認チェックとまとめ	
評価方法 (合計100%)	理解度(40%) 授業の参加態度 (20%) 中間レポート (20%) グループワーク・プレゼンテーション(20%) 総合的に判断します。	
失格条件	1.全授業の3分の1以上の欠席(4回まで) 2.30分超の遅刻は欠席とし、遅刻は3回で1回の欠席と考える。（早退も遅刻と同様） 3.評価基準の割合が単位認定割合に満たない場合	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	毎回の授業で発言やコメントを求めることがあります。新聞などで労働市場に関心を持って生活してください。 また、講義中に取り上げる項目に対して、自分の考えを発表できるようにまとめておくこと。 1.課題のレポートへの事前準備（予習時間 3時間） 2.グループワークでの課題に対しても学習（予習・復習時間 3時間） 3.理解度確認テストのための学習（復習時間 3時間）	
課題へのフィードバック	・授業理解度や課題のフィードバックは、授業中もしくはポータルサイトを使用して全体にコメントします。	
教科書	特に使用しません。	
著者名		
出版社		
参考書	「受かる」就活女子レッスン 碓ともみ 幻冬舎ルネッサンス ISBN978-4-7790-0844-3	
その他	1.ワーク、発表には積極的に参加すること（ワークはグループごとに評価）。 2.ワークなど指示以外の私語・携帯電話使用 厳禁。 3.アクティブラーニング実施。 4.中間レポートなどの提出期日は厳守。 5.授業の流れは1回目に説明。必要に応じプリントを配布します。 6.理解度テストは参考書からも出題予定です。	
備考	キャリアコンサルタントとしての実務経験をもとに、この授業を進めます。	
科目生への開講	なし	

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	インターンシップ実践		
英訳科目名	Internship Practice		
担当教員名	碓 ともみ		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	満足いく就職をするためにインターンシップ（就業体験）を経験しておくことは、「働く意義」や「志望企業」を明確にするものとして有意義である。インターンシップの必要性、業界研究、エントリーシートの書き方、ビジネスマナーまで幅広く知ることができ、グループワークやアクティブラーニングを通して、インターンシップに行く前の準備に役立つ実践的な授業を展開する。		
到達目標	インターンシップを応募する前に意義を知り、準備をしていくことで、自信を持って志望企業先に応募することができ、その後の自律的な就職活動を円滑に進めていくための礎となる。また、自己表現力を磨きをかけ、社会人としての振る舞い（ビジネスマナー）を学ぶことができる。		
授業計画	第1回 インターンシップの目的と必要性 第2回 組織と個人（社会との関わり） 第3回 業界・業種を知る（情報収集力） 第4回 インターンシップへの応募書類 第5回 エントリーシートの書き方 第6回 自己表現力①（自己PR） 第7回 自己表現力②（志望動機） 第8回 企業が求める人材 第9回 採用管理(面接を知る) 第10回 ビジネスマナー（服装・身だしなみ・あいさつ） 第11回 ビジネスマナー（会話術、自己紹介） 第12回 ビジネスマナー（会社でのマナー） 第13回 ビジネスマナー（丁寧な日本語） 第14回 インターンシップ計画書 第15回 まとめと総括		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 20% グループワーク・発表 20% 中間レポート 20% 課題レポート 20% インターンシップ計画書 20%		
失格条件	1.全授業の3分の1以上の欠席(4回まで) 2.30分超の遅刻は欠席とし、遅刻は3回で1回の欠席と考える。（早退も遅刻と同様） 3.評価基準の割合が単位認定割合に満たない場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	志望する企業をホームページなどで情報収集をすること（90分） 参考書を予習として事前に目を通しておくこと。（90分） 自己の経験を棚卸して自己理解をしておくこと。（90分）		
課題へのフィード バック	毎時の授業の振り返り、レポートなどについては、授業中もしくはポータルサイトを通じて全体にコメントします。		
教科書	特に使用しません。		
著者名			
出版社			
参考書	「受かる」就活女子レッスン 碓ともみ 幻冬舎ルネッサンス ISBN978-4-7790-0844-3		
その他	1.授業の流れは第1回目に説明します。 2.授業は基本的にパワーポイントを使用して進めていきます。 3.中間レポート・課題レポート・インターンシップ計画書の提出期限厳守。期限や形式は授業中に説明します。4.アクティブラーニング実施。 5.インターンシップは「自分で決める」「大学学生支援センター活用」などご自身で決めてください。 6.課題レポートのテーマは参考書を使用します。		
備考	キャリアコンサルタントとしての実務経験をもとに、この授業を進めます。		
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	大学生のための日本語入門		
英訳科目名	Introduction to Japanese for University Students		
担当教員名	千葉 真也		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	すべての学習の基礎としての日本語学習を今一度見直し、大学での学習につなげるとともに就業力に発展させるのが本クラスの目的である。新聞記事を題材として用いて、日本語の読解力と表現力を向上させ、同時に時事問題への理解を深める。また、読解の基礎となる漢字の読み書き訓練を並行して行う。		
到達目標	新聞記事の内容を理解して他の受講生と議論でき、記事内容およびそれに関する自分の意見（考え）を小レポートとしてまとめることができる。新聞記事のなかで用いられている漢字や用語の意味を調べて理解できる。漢字検定3級模擬問題で、合格ラインとなる140点を獲得できる。		
授業計画	<p>各回の授業は3部構成で行う。第1部は、漢字学習（5分間のテスト、採点、解説）。第2部は、新聞を題材とした文章の読解。記事に含まれる漢字、用語を確認し、記事内容の理解に努める。また、音読を積極的に用いる。第3部は担当教員による説明や指示および前回のレポートの提出など。</p> <p>第1回 授業の進め方などの説明および漢字検定3級模擬問題を用いた到達度の測定。 第2～5回 新聞記事を用いた授業の展開の仕方の練習。担当教員が選んだ最近の記事を用いて、記事の読解、用語の理解、記事内容の把握に努める。 第6～14回 学生自身の興味・関心に基づいて、グループで新聞記事を選び、学習と発表を行う。 記事はなるべく複数準備し、どの記事を用いるかについて担当教員と相談する。準備や発表の方法についてはグループ内でよく相談する。必要に応じて数種類の新聞記事を比較してみる。 第15回 小テストを行い、授業中に学習した漢字や用語などがどれくらい身についているかを確認する。 また、漢字検定模擬問題を用いて到達度の測定を行い、どれくらい漢字力が伸びたかを見る。</p>		
評価方法 (合計100%)	漢字小テスト	30%	
	小レポート	40%	
	グループ発表	30%	
失格条件	欠席5回で失格とする。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>予習について 毎回、授業の冒頭に小テストを行うので、事前に（家または学校での空き時間に）該当する回の問題を全問解いて、解答と照らしあわせて採点し、間違ったところの正解を確認する（予習時間120分）。</p> <p>復習について 大事なところに線を引きながら、当日の授業で用いられた記事を再読し、全部理解できているかどうか確認する。理解できていない点があれば調べたり、友人に教えてもらう。ポイントを整理して記事内容のまとめを書く。記事内容についての自分の考えを整理して、レポートに意見として書く。できれば一度下書きをして、見直し、それでよければ清書する（復習時間120分）。</p>		
課題へのフィードバック	漢字小テストは、実施した次の週に採点して返却する。その際、受講者全体への講評も行う。 小レポートは受領後、すみやかに評価を行い、コメントや採点表をつけて返却する。 グループ発表には、その場でコメントする。		
教科書	模試形式 漢検予想問題集 3級		
著者名	旺文社 編		
出版社	旺文社		
参考書			
その他	特になし		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	大学生のための日本語入門		
英訳科目名	Introduction to Japanese for University Students		
担当教員名	沼田 潤		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	すべての学習の基礎としての日本語学習を今一度見直し、大学での学習につなげるとともに就業力に発展させるのが本クラスの目的である。新聞記事を題材として用いて、日本語の読解力と表現力を向上させ、同時に時事問題への理解を深める。また、読解の基礎となる漢字の読み書き訓練を並行して行う。		
到達目標	新聞記事の内容を理解して他の受講生と議論でき、記事内容およびそれに関する自分の意見（考え）を小レポートとしてまとめることができる。新聞記事のなかで用いられている漢字や用語の意味を調べて理解できる。漢字検定3級模擬問題で、合格ラインとなる140点を獲得できる。		
授業計画	<p>各回の授業は3部構成で行う。第1部は、漢字学習（5分間のテスト、採点、解説）。第2部は、新聞を題材とした文章の読解。記事に含まれる漢字、用語を確認し、記事内容の理解に努める。また、音読を積極的に用いる。第3部は担当教員による説明や指示および前回のレポートの提出など。</p> <p>第1回 授業の進め方などの説明および漢字検定3級模擬問題を用いた到達度の測定。 第2～5回 新聞記事を用いた授業の展開の仕方の練習。担当教員が選んだ最近の記事を用いて、記事の読解、用語の理解、記事内容の把握に努める。 第6～14回 学生自身の興味・関心に基づいて、グループで新聞記事を選び、学習と発表を行う。記事はなるべく複数準備し、どの記事を用いるかについて担当教員と相談する。準備や発表の方法についてはグループ内でよく相談する。必要に応じて数種類の新聞記事を比較してみる。 第15回 小テストを行い、授業中に学習した漢字や用語などがどれくらい身についているかを確認する。また、漢字検定模擬問題を用いて到達度の測定を行い、どれくらい漢字力が伸びたかを見る。</p>		
評価方法 (合計100%)	漢字小テスト 30% 小レポート 40% グループ発表 30%		
失格条件	欠席5回で失格とする。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>予習について 毎回、授業の冒頭に小テストを行うので、事前に（家または学校での空き時間に）該当する回の問題を全問解いて、解答と照らしあわせて採点し、間違ったところの正解を確認する（予習時間120分）。</p> <p>復習について 大事などころに線を引きながら、当日の授業で用いられた記事を再読し、全部理解できているかどうか確認する。理解できていない点があれば調べたり、友人に教えてもらう。ポイントを整理して記事内容のまとめを書く。記事内容についての自分の考えを整理して、レポートに意見として書く。できれば一度下書きをして、見直し、それでよければ清書する（復習時間120分）。</p>		
課題へのフィードバック	授業で課題へのフィードバックを行う。		
教科書	模試形式 漢検予想問題集 3級		
著者名	旺文社 編		
出版社	旺文社		
参考書			
その他	5～6人でグループを構成し、グループで記事選びと発表をしてもらうので、グループ活動がしやすいように互いに連絡できる体制をつくるのが大切。グループ分けと発表順が決まったら直ぐに一度集まり、どのような手順で準備するかを決めておくことも必要。いずれにしろ、時間的余裕をもって、3週間前ぐらいには取り組みを始めるのが賢明。		
備考			
科目生への開講	なし		

1-023

ナンバリング	期間	前期
授業科目名	大学生のための日本語入門 (留)	
英訳科目名	Introduction to Japanese for University Students	
担当教員名	千葉 真也	
ディプロマ・ポリシー1	ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	すべての学習の基礎としての日本語学習を今一度見直し、大学での学習につなげるとともに就業力に発展させるのが本クラスの目的である。新聞記事を題材として用いて、日本語の読解力を向上させ、同時に時事問題への理解を深める。また、留学生にとって最も困難な漢字のよみについてとくに丁寧な指導を行う。	
到達目標	新聞記事を正確に音読し、内容が理解できる。漢字検定4級程度の漢字が正確に読める。	
授業計画	<p>各回の授業は3部構成で行う。第1部は、漢字検定の問題集からの小テストと解説を行う。第2部は、前回は配布した新聞を用いて文章を音読させ、漢字・用語の確認、記事内容の理解を図る。第3部は、第2部で音読した記事に出てくる語句についての小テストを行う。</p> <p>第1回 漢字検定4級模擬問題を用いて到達度を測定し、授業の進行についての説明を行う。</p> <p>第2～14回 漢字検定4級程度の漢字の理解を深めさせ、さらに、授業担当者が選んだ記事をもとにして、用いられた用語や取り上げられた問題を理解させる。</p> <p>第15回 漢字検定4級模擬問題を用いて到達度を測定し、さらに、これまでの授業で学習した漢字・用語などがどれくらい身についているかを確認する。</p>	
評価方法 (合計100%)	音読	40%
	漢字検定問題集からのテスト	30%
	新聞記事の漢字のテスト	30%
失格条件	欠席5回で失格とする。	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>予習について</p> <p>毎回の授業で小テストを行うので、問題集の該当する回の問題を全問解き、解答と照らしあわせて採点をし、正解を確認する。配布された新聞記事の漢字を確認し、難しい語句の意味を調べ、正確に音読できるように練習する (180分)。</p> <p>復習について</p> <p>授業で用いられた記事を再読し、全部理解できているかどうか確認する。理解できていない点があれば調べたり、友人に教えてもらったりして、学習した内容を定着させる (60分)。</p>	
課題へのフィードバック	小テストは採点を、原則的に次回の授業の時に返却します。また、小テスト返却時に、受講者全体に対するコメントを口頭で発表します。	
教科書	模試形式 漢検予想問題集 4級	
著者名	旺文社 編	
出版社	旺文社	
参考書		
その他	特になし	
備考		
科目生への開講	なし	

1-024

ナンバリング		期間	前期/後期
授業科目名	文章表現		
英訳科目名	Japanese Writing		
担当教員名	千葉 真也		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>文章を書く力を実践的に向上させることが狙いです。メールを使って、同窓会のお知らせをしたり、欠席した授業の課題を友だちに聞いたりするのも、本当は文章の力が必要です。大学で提出するレポートや企業に提出するエントリーシートは、とくに文章の力が必要です。「どんな情報をどんな順序で書けばよいか」（「この本を読んでくださるかたへ」から）を一緒に考えてゆきましょう。授業の前後、授業中に教科書の課題にしたがって、いくつかの文章を作成してもらいます。また課題をめぐっての話し合いにも積極的に参加することが望まれます。</p>		
到達目標	<p>読み手を意識した文章を書くことができる。 正確な文章を書くことができる。 文章を簡単に書くことができる。</p>		
授業計画	<p>第1回 はじめに 第2回 お知らせのメール 第3回 レストランのメニュー 第4回 問い合わせのメール 第5回 注意書きやサービス案内 第6回 お願いのメール 第7回 レポートや論文を書く① 第8回 レポートや論文を書く② 第9回 お店やイベントの広告 第10回 わかりやすいマニュアル 第11回 ニュースレターを作る 第12回 アンケート用紙を作る 第13回 日本語弱者のことを考えて書く 第14回 自己アピールする① 第15回 自己アピールする②</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>授業への参加態度50% 提出物50%</p>		
失格条件	欠席が3分の1を超える場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>毎回、課題が与えられます。与えられた課題に対して、自分自身で考えて文章を書いてもらいます（予習時間 2時間） また、授業の後、授業をふまえて読み手を念頭に置いた文章を作成してもらいます（復習時間 2時間）</p>		
課題へのフィードバック	提出された課題は、できるだけ速やかに一つ一つに採点表をつけて返却します。採点表によって自分の長所や短所がわかるようにしています。		
教科書	日本語を書くトレーニング 第2版		
著者名	野田尚史・森口稔		
出版社	ひつじ書房		
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

1-025

ナンバリング	CC200A03	期間	前期
授業科目名	世界の文学/文学概論		
英訳科目名	World Literature/Introduction to Literature		
担当教員名	山下 昇		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	◎
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	さまざま国や地方の文学をなるべく多く取り上げて、その特徴について考える。また代表的な作品を通して人間や社会について考える。世界文学の代表的なものとともに、なるべく現代的なものも取り上げることによって、「今を生きる私たち」に栄養となり、問題提起となる授業を目指す。		
到達目標	世界のさまざまな国や地方の文学について広い知識を身に付けることができる。 実際に作品を読み、文学作品の読み方を習得することができる。 あらすじをまとめたり、意見を述べて、レポートを書けるようになる。		
授業計画	第1回 世界の文学について 第2回 日本の文学 大江健三郎を中心に 第3回 アジアの文学1 韓国・朝鮮の文学 第4回 アジアの文学2 中国 莫言を中心に 第5回 アジアの文学3 ベトナム バオ・ニンを中心に 第6回 アジアの文学4 インドの文学 第7回 アフリカの文学 チヌア・アチェベを中心に 第8回 中東・アラブの文学 ガッサン・カナファアーニを中心に 第9回 ヨーロッパの文学1 フランス アルベール・カミュを中心に 第10回 ヨーロッパの文学2 ドイツ フランツ・カフカを中心に 第11回 ヨーロッパの文学3 ロシア ドストエフスキーを中心に 第12回 ヨーロッパの文学4 イギリス シェークスピアを中心に 第13回 カリブの文学 マリーズ・コンデを中心に 第14回 ラテンアメリカの文学 ガルシア・マルケスを中心に 第15回 アメリカの文学 ウィリアム・フォークナーを中心に		
評価方法 (合計100%)	ワーク（毎回の授業コメント） 30% レポート(2回) 70%		
失格条件	5回以上の欠席		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	その時間に取り上げる作品を読んでくる。(3時間) その日の授業で学習したことを整理する。(1時間)		
課題へのフィード バック	前回授業へのコメントのを講義冒頭で紹介し、疑問などに答える。 レポートの特徴的な点を講義で紹介し、受講生全体で共有する。 不十分なレポート等は難点を指摘して、再提出させる。		
教科書	使用しない（プリント配布）		
著者名			
出版社			
参考書	宮下志朗、小野正嗣編「世界文学への招待」NHK出版		
その他			
備考	特になし		
科目生への開講	あり		

ナンバリング	CC200A05	期間	前期
授業科目名	世界の歴史/歴史学概論		
英訳科目名	World History/Introduction to History		
担当教員名	岡本 託		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	◎
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>近現代ヨーロッパ（フランス）の歴史をさまざまなトピックに分けて学んでいきます。現在、EUの主要国であるフランスは、教育、家族、宗教、移民、言語、政治において多様な問題を抱えています。しかし、これらの問題は現代に突然発生したものではなく、その起源と本質を知るためには19世紀にまで遡らなければなりません。そこで、本講義では、これらの問題が19世紀から現代へと、どのように受け継がれていったのかを考えていきます。</p> <p>また、ヨーロッパの事例だけではなく、日本の歴史との比較と関連性の解明も随時おこなっていきます。そのことにより、ヨーロッパの歴史と日本の歴史において異なる点と共通する点とを明らかにしながら、近現代の歴史についてグローバルに学んでいきます。</p>		
到達目標	<p>1.外国の歴史を知ることで、時間と空間の双方で自分の立ち位置を認識できる能力を養います。それは、自分が、過去から現在に至る時間の流れの中で生きている一個人であることを知り、そして、世界の中で生きる一個人であることを知ることです。これらの認識を深めることで、歴史と世界の中で、一個人として自立した人間になる能力を養います。同時に、日本（＝自分）とは異なる国の価値観や社会的・文化的背景を理解することで、グローバルな価値観を身につけることを目指します。</p> <p>2.各項目に対して自分なりの意見をもてるようにします。</p>		
授業計画	<p>第1回 オリエンテーション：どのようにすれば歴史を正確に理解できるのか 外国の歴史を知ることによどのような意味があるのか 第2回 宗教の歴史：政教分離とは何か／現在の宗教問題との関わりとは 第3回 少子化と移民の歴史：200年前からの少子化国フランス／移民の統合 第4回 ジェンダーの歴史：女性の就業／子育て／議会への女性の進出 第5回 社会福祉の歴史：貧困救済の歴史／国家権力の介入 第6回 スポーツの歴史：娯楽としてのスポーツ／国民的アイデンティティとしてのスポーツ 第7回 教育の歴史：十字架（教会）から三色旗（公教育）へ／ナポレオンがつくった近代的大学 第8回 言語政策の歴史：近代「フランス語」の誕生とグローバリズムの中の地方言語 第9回 近代議会と民衆の政治参加の歴史：万人の代表となるまで／なぜ選挙に行くべきなのか 第10回 音楽の歴史と近代社会：音楽の歴史からみる19世紀の社会 第11回 軍隊と社会の歴史①：国民とは？国家とは？／科学技術が社会に与えた影響 第12回 軍隊と社会の歴史②：江戸のナポレオン伝説／日本の近代軍隊制度と国際社会 第13回 戦争と社会の歴史①：世界初の総力戦（第一次世界大戦）の衝撃／ 兵庫県青野ヶ原捕虜収容所の記憶 第14回 戦争と社会の歴史②：新たな総力戦（第二次世界大戦）の勃発と展開 第15回 植民地の歴史：フランス植民地帝国とその後／異文明間の反発と交流</p> <p>なお、学生の理解度や授業の進行状況により、若干内容を変更することもあります。</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>1.コメントペーパーの作成30% (毎回の授業終了時に感想や質問などを記入してもらいます。担当教員は次回授業時の冒頭にそれらの質問に答えます。)</p> <p>2.授業への参加態度20% (担当教員の質問に対する積極性)</p> <p>3.試験50%</p>		
失格条件	全授業の3分の1を超えて欠席した場合、あるいは学期末筆記試験を受けなかった場合には原則として単位認定いたしません。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>・歴史上の出来事を年代順に説明していくスタイルの授業ではありません。また、授業で取り上げるテーマは、現代を生きるみなさんの日常に関係する項目も多くあり、自らとそれらの項目との関係性を常に意識しながら受講してください。</p> <p>授業の際に示す参考文献などを中心に、フランスの文化・歴史に関する文献を読んでください。さらに、授業で取り上げるテーマに対して、自分なりの意見を考えてみてください。</p> <p>・復習及び授業ノートの整理（復習時間 1時間） ・授業中に紹介した参考文献を読むこと（復習時間 2時間）</p>		
課題へのフィード バック	毎講義時に作成されるコメントペーパーを利用し、受講生の疑問・感想に対して担当教員が回答をおこなう。		
教科書	適宜プリントを配布します。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	世界の地理		
英訳科目名	World Geography		
担当教員名	関口 靖之		
ディプロマ・ポリシー1	◎	ディプロマ・ポリシー2	○
ディプロマ・ポリシー3	○	ディプロマ・ポリシー4	○
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	地理学は、地表面にみられる様々な現象を観察・検討し、地域の特性を解明する。自然環境や人間の活動で形成された文化が相互関連して地域に及ぼした影響を検討してその特性を解明する。授業では地理学の基礎的な内容を確認した後に、世界各地の自然環境と主要都市を中心に地域の特性や課題を検討する。受講者の質問は歓迎する。また、シラバスはよく読むこと。		
到達目標	地理の基礎的な内容を理解すること、各地の様子を描いた地図を適切に使用する能力を養うことができる。世界各地域の概要を理解し、地域の特性について観察と判断する視点を養うことができる。世界各地の特徴を自然環境と主要都市の確認や検討することから、地理学的な理解が進み、今後の課題についても検討できる。		
授業計画	第1回 地理学の概要 第2回 世界の地域区分 第3回 ヨーロッパの自然環境 第4回 ヨーロッパの主要都市 第5回 アジアの自然環境 第6回 アジアの主要都市 第7回 アフリカの自然環境 第8回 アフリカの主要都市 第9回 北アメリカの自然環境 第10回 北アメリカの主要都市 第11回 南アメリカの自然環境 第12回 南アメリカの主要都市 第13回 オセアニアの自然環境 第14回 オセアニアの主要都市 第15回 まとめ、学習成果の確認		
評価方法 (合計100%)	試験70%、授業中課題30%で総合的に評価する。		
失格条件	全授業を3回以上欠席した場合 最終授業を欠席した場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	各回授業に関する地図や文献を探し、それらに目を通す努力が必要。(60分) 各回授業で学習した事象や地域の特性について整理するとともに、身近に観察できる地域との比較検討をして、理解を深めること。(60分)		
課題へのフィード バック	授業中課題は、基本的に次回の授業で解説する。 試験の概要は試験終了後に掲示する予定。		
教科書	使用せず、ほぼ毎回資料を配布する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	各種地図・地図帳を授業に持参することが望ましい。 その他の参考図書は授業中に紹介するが、各自で探す努力を求める。		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	CC200A06	期間	前期
授業科目名	世界の思想/倫理学概論		
英訳科目名	Modern Thoughts of the World/Introduction to Ethics		
担当教員名	田中 美子		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	◎
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	「人間はいかに生きるべきか」という古くて新しい問題を考えます。「何のために働くのか」や「中絶の是非」など、身近なテーマから入り、哲学的な議論へと考えを深めていきます。講義が中心になりますが、みなさんが授業中に議論したり、自分の考えを文章にまとめたりできるようなワークも取り入れたいと思います。		
到達目標	社会生活のなかで生じる身近な問題に対して、深いレベル（「人間はいかに生きるべきか」という哲学的なレベル）から、捉え直せるようになる。		
授業計画	第1回 事実判断と価値判断 — 倫理学で学ぶこと 第2回 いつか死ぬのに、なぜ生きねばならないの？ — ハイデガーの実存思想 第3回 これが人生か、ではもう一度！ — ニーチェの生の哲学 第4回 生きる目的が決まっている人生は楽か？ — サルトルの実存思想 第5回 女の子は女装して女になる！？ — ジェンダー論（ボーヴォワールの思想） 第6回 なぜか嫌いな人、なぜか魅かれる人 — 無意識の心理学（フロイトとユングの思想） 第7回 いい男／女がない！ — 鷲田清一の恋愛論 第8回 中間まとめ、ディスカッション 第9回 儲けてなんぼ？ — ビジネス倫理学 第10回 下心のある善行と良心にもとづいた善行 — カントの倫理思想 第11回 だれのための仕事 — 鷲田清一の仕事論 第12回 パターナリズムとインフォームド・コンセント — 医療倫理（1） 第13回 赤ちゃんをデザインする？ — 医療倫理（2） 第14回 安楽死と優生思想 — 医療倫理（3） 第15回 正義の味方アンパンマンの孤独 — 正義論		
評価方法 (合計100%)	授業への積極的な参加	約30%	
	学期末レポート	約70%	
失格条件	学期末レポートの未提出		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	自習がしやすいように、教科書を指定しました。復習として、授業で扱った範囲の教科書を読み直しましょう。 （教科書の読解にかかる復習時間 約1時間、ノートなどのまとめ直しにかかる復習時間 約1時間）		
課題へのフィード バック	毎授業で提出するリフレクションシートに対し、次の授業でコメントを返します。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書	南部ヤスヒロ・相原コージ『4コマ哲学教室』イースト・プレス、2006年、ISBN978-4-87257-651-1 小坂国継他編『倫理学概説』ミネルヴァ書房、2005年、ISBN978-4-623-04141-1 村松茂美他編『はじめて学ぶ西洋思想』ミネルヴァ書房、2005年、ISBN978-4-623-04152-7 岡田安弘『生命科学 ただいま講義中』金芳堂、2016年、ISBN978-4-7653-1677-4		
その他	授業内容は、多少変更することがあります。		
備考			
科目生への開講	あり		

1-029

ナンバリング	CC200A04	期間	前期/後期
授業科目名	心理学入門/心理学概論		
英訳科目名	Introduction to Psychology		
担当教員名	渡部 美穂子		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	◎
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	心理学には様々な方法論的立場があるが、本講義では、人間の行動や心の働きに関して、経験科学的な心理学がもたらした知見を紹介する。入門の講義なので、知覚、学習、記憶、発達、社会心理など、心の働きの広範な側面について最も基礎的な事柄を取り上げ、心に関する全般的な理解を図る。また、心という非実体的な対象を扱う上での、経験科学的心理学独特の観点や研究方法についての理解を目指す。		
到達目標	日常生活で経験する自分の心の働きや他者の行動を、心理学の知見に基づいて、科学的に理解できる。		
授業計画	第1回 心理学的研究の対象と方法 第2回 感覚 第3回 知覚 第4回 学習 第5回 記憶 第6回 発達(1) 乳幼児期、学童期 第7回 発達(2) 青年期 第8回 発達(3) 成人以降 第9回 性格 第10回 臨床 第11回 社会心理(1) 自己認知 第12回 社会心理(2) 対人認知 第13回 社会心理(3) 援助、攻撃 第14回 社会心理(4) 同調、服従 第15回 内容理解の確認		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 (授業内に指示する課題への取り組みを含む) 30% 試験の評価 70%		
失格条件	試験を受験しなかった場合 出席回数が3分の2に満たない場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	指示された課題について積極的に取り組む (予習1時間)。 配布した資料や板書したものをもとに、授業内容を復習しながらノートにまとめる (復習3時間)。		
課題へのフィード バック	授業において、課題へのフィードバックを行う。		
教科書	イラストレート心理学入門		
著者名	齊藤 勇		
出版社	誠信書房		
参考書			
その他	特になし		
備考			
科目生への開講	あり		

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

1-030

ナンバリング	CC200A09	期間	集中
授業科目名	経済学入門/経済学概論		
英訳科目名	Introduction to Economics		
担当教員名	薛 秀娟		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	◎
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	経済学はマクロ経済学とミクロ経済学の2つ分野に大別される。この経済学入門では、2つ分野のうちマクロ経済の基礎的な内容について、講義して行きたい。この講義を通じて、マクロ経済学の基本経済用語及び基礎理論を習得することが授業のポイントである。		
到達目標	マクロ経済学の基本用語と基礎理論を習得し、今まで関心なく聞き流していた経済ニュースについて、理論的に考察できるようになること。		
授業計画	第1回 インTRODクシヨン 第2回 市場における需要と供給 第3回 GDPとは何か 第4回 GDPの構成要素 第5回 消費者物価指数とインフレーション 第6回 長期の実物経済 第7回 消費関数 第8回 投資関数 第9回 乗数理論 第10回 貨幣と為替レート 第11回 貨幣の需要と供給 第12回 IS曲線とIM曲線 第13回 金融政策の効果 第14回 失業と自然失業 第15回 まとめ		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 30% レポート 20% 試験 50%		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	講義で紹介する参考文献を次回までに読んでおくこと。(予習時間 1時間) 講義終了時に講義の内容を復習し、課題を完成すること。(復習時間 3時間)		
課題へのフィード バック	小テストは授業時間内に返却し、解説します。		
教科書	なし		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	CC200A07	期間	前期/後期
授業科目名	日本国憲法		
英訳科目名	The Japanese Constitution		
担当教員名	秋元 洋祐		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	◎
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>憲法の役割は、基本的人権の保障にある。人権には、公立学校における生徒の髪型の自由から、商売を始める際の営業の自由まで様々な保障が認められている。もっとも、これらの人権は、完全な自由を保障するものではなく、学校の校則や商店の開設を制限する法律によって規制を受ける。この法的な規制に対して、憲法が保障する自由は、どこまで認められるのが最も重要な問題となる。そのため、憲法を学ぶうえでの視点は、法的な規制に対峙する人権保障の限界を探ることにあるので、その限界について考えていきたい。</p> <p>憲法の人権保障と制限について、裁判例を題材にして学ぶ。平等権や表現の自由といった各人権規定について、毎回の授業で1つずつ裁判例を踏まえることで、社会での憲法の役割を明確にする。とりわけ、実際に起こった事例に触れることで、憲法を含めた法律の身近さを体感し、法学一般への興味をもってもらいたい。</p>		
到達目標	<p>①憲法の人権保障を理解できる。</p> <p>②人権を規制する法律の問題点を説明できる。</p> <p>③主要な裁判例について条文を参照しながら、解決方法を考えることができる。</p>		
授業計画	<p>第1回 法学の基礎①：オリエンテーション、憲法と法律</p> <p>第2回 法学の基礎②：社会における法の役割</p> <p>第3回 法学の基礎③：法解釈や法と慣習・道徳の差異</p> <p>第4回 憲法の基礎：憲法の構造と歴史的な経緯</p> <p>第5回 人権の享有主体：在留期間の更新が認められなかった事案を題材に、外国人や子供の人権</p> <p>第6回 幸福追求権：男子生徒の髪型で丸刈り校則を制定された事案を題材に、一般的・包括的人権</p> <p>第7回 法の下での平等①：形式的平等と実質的平等の区別</p> <p>第8回 法の下での平等②・到達度の確認（小テスト）：法定相続分が問題になった事案を題材に、法の下での平等</p> <p>第9回 法の下での平等③：女性の再婚禁止期間が問題になった事案を題材に、平等権と合理的な区別</p> <p>第10回 精神的自由①：高校受験の際に不適切な内申書を記載された事案を題材に、思想・良心の自由</p> <p>第11回 精神的自由②：剣道の不受講によって退学処分を受けた事案を題材に、信教の自由</p> <p>第12回 精神的自由③：少年事件の匿名報道が問題になった事案を題材に、推知報道と表現の自由</p> <p>第13回 経済的自由①：既存の小売市場からの距離制限が問題になった事案を題材に、営業の自由</p> <p>第14回 経済的自由②：予防接種によって健康被害を受けた事案を題材に、財産権の保障</p> <p>第15回 教育権：学力テストを実力で妨害した事案を題材に、国家と国民の教育権の所在</p>		
評価方法 (合計100%)	<ul style="list-style-type: none"> ・定期試験 70% ・小テスト 30% 		
失格条件	<ul style="list-style-type: none"> ・定期試験を受験しなかった場合 ・私語など、他の学生の受講に妨げのある行為をした場合 		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<ul style="list-style-type: none"> ・受講の際には、事前に教科書の該当範囲を伝えるので、一読しておく（予習2時間）。 ・区切りごとに復習問題を配布するので、授業用プリントを参考に取り組む（復習2時間）。 		
課題へのフィード バック	<ul style="list-style-type: none"> ・復習問題で2・3回の授業内容を顧みる。 ・小テストを授業中に返却するので、間違いを復習問題で確認する。 		
教科書	いちばんやさしい憲法入門〔第5版〕		
著者名	初宿正典・高橋正俊・米沢広一・棟居快行		
出版社	有斐閣		
参考書	授業中に適宜紹介する。		
その他	毎回授業用プリントを配布する。		
備考			
科目生への開講	あり		

1-032

ナンバリング	CC200A07	期間	後期
授業科目名	日本国憲法		
英訳科目名	The Japanese Constitution		
担当教員名	奥野 浩之		
ディプロマ・ポリシー-1		ディプロマ・ポリシー-2	◎
ディプロマ・ポリシー-3		ディプロマ・ポリシー-4	
ディプロマ・ポリシー-5		ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	「憲法とは何か」から始まり、国民主権、基本的人権、平和主義、統治機構（国会・内閣・裁判所の作用）、地方自治、憲法の改正、といった憲法全体の主要事項の内容について概説する。また、それぞれの項目に関連する基本問題や主要判例を提示し、憲法理念と現実社会の動向について考察する。		
到達目標	国民主権、基本的人権、平和主義、統治機構、地方自治、憲法の改正といった憲法全体の主要事項について理解し、憲法理念と現実社会の動向について考える力を身につける。		
授業計画	第1回 オリエンテーション 第2回 憲法とは何か 第3回 日本の憲法 第4回 基本的人権の原理 第5回 基本的人権の限界 第6回 包括的基本権 第7回 内容理解の確認 第8回 精神的自由権 第9回 経済的自由権 第10回 社会権 第11回 平和主義 第12回 統治機構 第13回 地方自治 第14回 憲法の改正 第15回 到達度確認		
評価方法 (合計100%)	試験 60% 授業への参加状況 20% 小テスト 20%		
失格条件	試験を受験しなかった場合 出席が授業回数の2/3を満たさない場合 (20分以上の遅刻は欠席とし、20分以内の遅刻は3回で1回の欠席とする) 私語など、他の学生の受講に妨げのある行為をした場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	・授業の中で出す予習課題に取り組み各回の授業に臨むこと。 ・各回配布したプリントはファイリングし、次の授業までに前回の復習をしておくこと。 ・次の授業までに、予習1時間、復習3時間を目標として学習に取り組むこと。		
課題へのフィード バック	課題に対する評価規準を明確に示すとともに、提出課題の講評を行う。		
教科書	ここから始める『憲法学習』の授業 ー児童生徒の深く豊かな学びのためにー		
著者名	長瀬・杉浦・奥野・渡辺・松森		
出版社	ミネルヴァ書房		
参考書	授業の中で適宜紹介する。		
その他			
備考			
科目生への開講	あり		

1-033

ナンバリング	CC200A08	期間	前期/後期
授業科目名	教育原論		
英訳科目名	Pedagogics		
担当教員名	長谷川 精一		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	◎
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	この科目は、教育の基礎理論に関する科目であり、教育思想の歴史を振り返り、教育の理念、目的に関してこれまで蓄積されてきた知見に関して思想史的な考察を行なうこと、及び、現在の学校教育が抱える様々な問題について、教育改革の歴史や諸外国との比較も視野に入れつつ、その背景にある社会状況の現代的変容を検討すること、の2点を通じて、子どもの発達、成長を促す営みとしての教育の意義と課題について原理的な理解を深めることを目指す。		
到達目標	人間の発達、成長を促す営みとしての教育の意義と課題について、また、その思想史的な展開について、原理的な理解を深め、自らの教育観、人間観を築いていく上での基本的な視座を得ること。		
授業計画	第1回 授業の概要と導入 第2回 教育の理念：人間の成長・発達と教育 第3回 教育的価値の歴史的多様性 第4回 教育思想の歴史：近代教育思想の誕生 第5回 教育思想の歴史：子どもの発見 第6回 教育思想の歴史：近代公教育思想の展開 第7回 社会の変容と教育格差問題 第8回 これまでの授業に対する内容理解の確認 第9回 学校教育の諸問題：教師の力量の問題 第10回 学校教育の諸問題：学力問題とゆとり教育 第11回 学校教育の諸問題：学級崩壊 第12回 学校教育の諸問題：不登校 第13回 学校教育の諸問題：いじめ 第14回 教育改革の歴史 第15回 授業のまとめと内容理解の確認		
評価方法 (合計100%)	課題レポート（60%）、グループワークや発表などへの参加の積極性（40%）などを総合して評価を行う。		
失格条件	授業中に課したすべてのレポートを期限内に提出しなかった場合 担当日時の決定した発表等を正当な理由なく行なわなかった場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業中に、その回の授業の内容に基づいて、また、次回の授業の準備として、各自自宅を書くようにと指定した課題レポート、あるいは、読むようにと指定した参考文献に関しては十分な時間（大学設置基準の定めによれば、1回の授業に対して4時間（大学の1時間は45分として考えることとなっているため、180分）以上）をかけて取り組むこと。		
課題へのフィードバック	授業で課題へのフィードバックを行う。		
教科書	特定の教科書は用いず、必要に応じてプリント等を配布する。		
著者名			
出版社			
参考書	文部科学省 中学校学習指導要領（平成29年3月告示） 文部科学省 高等学校学習指導要領		
その他			
備考			
科目生への開講	あり		

1-034

ナンバリング	CC200A10	期間	前期/後期
授業科目名	生活の中の数学		
英訳科目名	Mathematics in Daily Life		
担当教員名	魚住 義介		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	◎
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>数学の考え方や基本的構造を学びます。</p> <p>話題の中心は整数の性質です。数学の得意な学生や反対に苦手な学生でも数学に興味を持てるように話し進めたいと思います。</p>		
到達目標	<p>人々のこれまでの暮らしの中から数や数学が生まれて来たことに気付くこと。</p> <p>また、数学の考え方の合理性を学ぶこと。</p>		
授業計画	<p>第1回 数の誕生</p> <p>第2回 一対一対応</p> <p>第3回 整数の基本的な性質</p> <p>第4回 分数や小数の誕生</p> <p>第5回 合同式その1</p> <p>第6回 合同式その2</p> <p>第7回 合同式その3</p> <p>第8回 合同式その4</p> <p>第9回 合同式その5</p> <p>第10回 合同式その6</p> <p>第11回 集合論の初歩</p> <p>第12回 確率の考え方</p> <p>第13回 テストの実施</p> <p>第14回 順列・組み合わせ</p> <p>第15回 予備</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>①試験 (60%) ②小テスト (30%) ③授業への参加態度 (10%)</p> <p>試験は授業の13回目に予定しています。</p> <p>小テストは毎回の授業で実施します。</p> <p>授業への参加態度は授業中の発言や発表を評価します。</p>		
失格条件	出席回数が10回未満の場合は失格とします。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	問題意識をもって授業に臨んでください。復習を十分におこなって試験に臨んで下さい。		
課題へのフィード バック	小テスト(10回または5回)実施の予定。 その返却時にそれまでの内容を再説明することで理解の充実を図りたい。		
教科書	授業で配布するプリントを使用するので教科書は指定しません。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	特に無し		
備考	教師としての実務経験をもとに、この授業を進めます。		
科目生への開講	あり		

ナンバリング	CC200A11	期間	前期
授業科目名	科学史入門/科学史概論		
英訳科目名	Introduction to History of Science/Introduction to Science History		
担当教員名	池山 説郎		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	◎
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>世界各地（エジプト・メソポタミア・中国・ギリシア・インド・イスラーム圏など）の昔の算数や暦の話から、面白そうなトピックを選んで紹介する。</p> <p>算数は、中学くらいの数学がわかれば十分。ただし、私たちとは異なった文明圏の、しかも大昔の人たちの考えの流れについてゆくことはそれほどやさしくはないかもしれない。問題を解きながら、「なんでそんな風に考えるの?!」という驚き、戸惑いを楽しんでいただきたいと思う。</p> <p>暦はあたりまえに使っているがそのしくみとなると予想外に難しい。いろいろな予備知識が必要になるので、それらをそのつど解説しながら進めたいと思う。</p>		
到達目標	古代文明のさまざまな算数を知ることで、複眼的な、柔軟なものの見方を身につける。		
授業計画	<p>授業の順番や時間数、確認テストの実施日は変更することがある。</p> <p>第1回 イントロダクション / 足し算・引き算・掛け算・割り算①</p> <p>第2回 足し算・引き算・掛け算・割り算②</p> <p>第3回 足し算・引き算・掛け算・割り算③</p> <p>第4回 さまざまな問題①（アハ問題、財産相続問題など）</p> <p>第5回 さまざまな問題②（盈不足算、三量法など）/ 確認テスト①</p> <p>第6回 ピュタゴラスの定理①</p> <p>第7回 ピュタゴラスの定理②</p> <p>第8回 ピュタゴラスの定理③</p> <p>第9回 円の面積①</p> <p>第10回 円の面積②/確認テスト②</p> <p>第11回 暦①（暦の種類、基礎知識、グレゴリオ暦の確認）</p> <p>第12回 暦②（グレゴリオ暦の歴史①）</p> <p>第13回 暦③（グレゴリオ暦の歴史②）</p> <p>第14回 暦④（グレゴリオ暦の歴史③）/ 確認テスト③</p> <p>第15回 暦⑤ 確認テスト③の振り返りとまとめ</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>内容の区切りごとに確認テストを行なう。勉強しないで点が取れるほど甘いテストではない。確認テスト3回の平均点で評価するので、各確認テストの配分は33%ということになる。</p> <p>1度でも、確認テストを受験しなかったものは単位不認定とする。ただし正当な理由があると担当が認めた場合はその限りではない。必ず申し出て、指示を仰ぐように。</p> <p>出席は毎回確認する。</p>		
失格条件	いい加減な受講姿勢（私語、居眠り、授業中のスマホ使用など）には、単位不認定など厳しい態度で臨む。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>予習として、中学で習った数学や天文の知識を、復習しておくことよい。（各回1時間（45分））</p> <p>授業中は話をよく聞き、その内容をまとめてしっかりノートを取る。授業概略や資料のプリントを配ることもあるが、それだけを見ても授業内容はわからない。また、板書をぼんやり書き写しても理解していかなくては意味がない。</p> <p>初めて聞く事柄が多いと思うので、授業内容をしっかり復習しておくこと。（各回3時間（135分））</p>		
課題へのフィードバック	確認テストは、次週に答案を返却し、正答を示しながら解説をする。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	授業中の私語など「他の学生の邪魔になる行為」には厳しく対処する。その場で退室命令をする場合もある。留意されたい。		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	生物学入門		
英訳科目名	Introduction to Biology		
担当教員名	太田 和孝		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>現在、地球上には、未知の生物も含めて約10003000万種の生物が生息しているといわれています。その生物の半分以上は皆が忌み嫌う昆虫です。昆虫に対し、嫌いだからいなくなればいいと考える人は多くいますが、もしいなくなれば地球上の半分の生物が消失します。地球上に棲む生物、それが昆虫であれ哺乳類であれ、我々と決して無関係ではありません。彼らが本当にいなくなるとどうなるか想像できますか？このような多種多様な生物は、元々地球上に存在していたわけではなく、全ては約40億年前に地球に誕生した原始生命体から進化してきたものです。皆さんは、この進化という言葉テレビ、新聞、雑誌など見聞きしたことがあるはずですが、日常で使う言葉かもしれません。しかし、殆どの人は進化の意味を勘違いしており、正しく理解できていません。本講義では、生物と我々との関わりや生物の面白い生態を通じて、生物多様性及び生物の進化について解説していきたくと考えています。</p>		
到達目標	本講義では、生物の進化について理解し、生き物を正しく見る目を養うことを目標とします。		
授業計画	<p>第1回 オリエンテーション この講義内で学べる内容、評価方法などを説明 本講義を受講する意思のある場合、必ず出席すること</p> <p>第2回 生物多様性1 社会問題である生物多様性の減少について、現状を交えながら解説</p> <p>第3回 生物多様性2 社会問題である生物多様性の減少について、現状を交えながら解説</p> <p>第4回 生命の誕生 地球上にいかにして生命が誕生したのかについて、現在の知見をもとに解説</p> <p>第5回 分類、種概念 生物を分けるという作業の意味を説明</p> <p>第6回 多様性と進化1 ダーウィンの進化論を説明</p> <p>第7回 多様性と進化2 ダーウィンの進化論を実例とともに説明</p> <p>第8回 多様性と進化3 最新の知見を交えて進化論をさらに詳しく解説。小テスト実施</p> <p>第9回 生物間相互作用1 生き物同士の関わり合いとその進化について説明</p> <p>第10回 生物間相互作用2 生き物同士の関わり合いとその進化について説明</p> <p>第11回 生物間相互作用3 生き物同士の関わり合いとその進化について説明</p> <p>第12回 性と進化1 性とは何か、性があることでどんな進化が起こるかを説明</p> <p>第13回 性と進化2 ダーウィンの進化論を実例とともに説明</p> <p>第14回 生物の社会 生物間相互作用とは異なる着物同士のつながりについて説明</p> <p>第15回 まとめ</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>授業への参加態度と参加意欲 30%</p> <p>試験 70%</p>		
失格条件	<p>総合点（授業への参加度と参加意欲の点数＋試験の点数）で評価する。</p> <p>試験を受けなかったものは失格とする。</p>		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>参考図書を事前に読んでおくことは、本講義内容を理解する上で役に立ちます。また、TVで放送されている生物系ドキュメンタリーも本講義内容を理解する上で役立つでしょう。登下校、休み時間に回りにいる生物に目を向ければ、その面白い生態を見ることが出来るでしょう。そのような簡単なことから生物についての見識を深めることができます。</p>		
課題へのフィードバック	<p>小テスト、期末試験を実施しますが、いずれも終了後全体に向けてコメントします。</p> <p>各人の希望があれば個別にコメントすることもできます。</p>		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書	<p>進化のなぜを解明する、ジェリー・A・コイン 著、日経BP社</p> <p>生物多様性と生態学—遺伝子・種・生態系、宮下直・井鷲裕司・千葉聡著、朝倉書店</p> <p>生命の意味、桑村哲生 著、裳華房</p> <p>フィンチの嘴—ガラパゴスで起きている種の変貌、ジョナサン・ワイナー 著、ハヤカワ・ノンフィクション</p> <p>クジャクの雄はなぜ美しい？増補改訂版、長谷川真理子 著、紀伊国屋書店</p>		
その他			
備考			
科目生への開講	あり		

1-037

ナンバリング	CC200A12	期間	後期
授業科目名	現代と医学/生活の中の医学		
英訳科目名	Medical Science and Modern Society/Medical Science in Daily Life		
担当教員名	中川 学		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	◎
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	現代に生きる人間にとって、医学（医療）は生活を営む上でなくてはならない存在になっている。本講義においては、その歴史や最新のトピックス等を題材に、現代における医学について考える。		
到達目標	現代において利用されている治療手法や薬剤などは、有名、無名の先人達の大いなる努力と犠牲のもとに確立されてきたものである。 また、技術の進歩により優れた治療法が生まれる一方で、新たな問題点も生じている。 これらを理解することで、生命に対する考え方が深まる。		
授業計画	第1回 医学のあゆみ（医学史概略） 第2回 古代の医療 第3回 中世～近代の医療 第4回 代謝（栄養素の働き） 第5回 薬と臨床 第6回 精神衛生 第7回 生活習慣病①(糖尿病) 第8回 生活習慣病②（脂質異常症） 第9回 公衆衛生 第10回 出産と性 第11回 死とは（脳死、臓器移植） 第12回 医学と工学① 第13回 医学と工学② 第14回 医療崩壊 第15回 内容理解の確認		
評価方法 (合計100%)	最終試験(約70%)を中心に評価する。 その他、授業への参加態度(約30%)等を考慮して総合的に評価する。		
失格条件	3分の1より多く欠席した場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	この講義は本学オリジナルであり、各回の内容はそれぞれ独立しています。 また、教科書は使用しません。 日常生活を過ごす際にシラバスに記載されたテーマに関連するニュースなどに興味を持ち、自分なりに健康や生命について考える習慣を身につけましょう。（予習 約1時間に相当） そして各回の講義終了後は、配布資料、板書ノートなどを利用して、各自十分に復習し、自分なりの考えをまとめるように心がけてください。（復習 約2時間）		
課題へのフィード バック	試験終了後、全体に向けてコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	適宜、プリント資料を配布します。		
備考			
科目生への開講	あり		

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

ナンバリング	CC300A03	期間	前期/後期
授業科目名	健康科学		
英訳科目名	Health Science		
担当教員名	西迫 成一郎		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	◎	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	健康的な生活はわれわれの幸福の源であり、生活の質を高める基本的な条件である。そして、健康的な生活を維持するためには日常的に積極的な取り組みが必要でもある。健康科学の授業では、その方途の基礎となる栄養と健康との関係についての問題や運動・スポーツを通じて如何に健康的な生活を維持していくのかといった問題、また飲酒・喫煙が健康に及ぼす悪影響の問題、さらにリラクセーションと健康の問題などを取り上げていく。		
到達目標	健康的で質の高い生活を送るために必要な知識を獲得し、実生活において健康的な生活習慣を実践できること。		
授業計画	第1回 健康科学とは 第2回 食生活と健康(1)食生活の変遷 第3回 食生活と健康(2)現代社会における食生活上の問題点 第4回 食生活と健康(3)各栄養成分の働き 第5回 喫煙と健康(1)喫煙による害 第6回 喫煙と健康(2)禁煙への取り組み 第7回 飲酒と健康(1)飲酒による害 第8回 飲酒と健康(2)アルコール依存 第9回 リラクセーション 第10回 運動と健康(1)運動の効用 第11回 運動と健康(2)スポーツ 第12回 運動と健康(3)運動と疲労 第13回 現代社会と薬物(1)薬の人類への貢献 第14回 現代社会と薬物(2)薬の副作用と薬物乱用問題 第15回 授業のまとめ・理解度の確認		
評価方法 (合計100%)	試験の評価 70% 授業への参加態度 (授業に出席することだけでなく、質問されたことや課題への取り組み度合いなどを含め総合的に評価します) 30%		
失格条件	次のいずれかに該当した場合は失格となる。 1. 5回を超えて欠席した場合 (20分以上遅れて来た場合は欠席に数えます。20分以内の遅刻3回で1回の欠席と数えます) 2. 試験を受験しなかった場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	指示された予習については、積極的に資料を検索して行うこと。(予習時間 1時間) また、授業後の復習は欠かさず行い、授業で示された各用語をしっかりと理解したうえで覚えること。(復習時間 3時間)		
課題へのフィード バック	試験終了後、必要に応じて、全体に向けポータルを通じコメントします。		
教科書	適宜プリントを配布する		
著者名			
出版社			
参考書	『健康科学』 前橋明監修 明研図書		
その他	試験は、ノート、プリントなど一切持ち込み不可という条件で行う。原則、座席を指定する。		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	CC300A03	期間	後期
授業科目名	健康科学		
英訳科目名	Health Science		
担当教員名	奥野 暢通		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	◎	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	健康的な生活はわれわれの幸福の源であり、生活の質を高める基本的な条件である。そして、健康的な生活を維持するためには積極的な取り組みが必要でもある。健康科学の授業では、その方途の基礎となる栄養と健康との関係についての問題や運動・スポーツを通じて如何に健康的な生活を維持していくのかといった問題、また飲酒・喫煙が健康に及ぼす悪影響の問題、さらにリラクセーションと健康の問題などを取り上げていく。		
到達目標	健康的で質の高い生活を送るために必要な知識を獲得し、実生活において健康的な生活習慣を実践できること。		
授業計画	第1回 健康とは・健康科学とは 第2回 食生活と健康 第3回 5大栄養素とは 第4回 各栄養素の働き (1) 糖・タンパク質 第5回 各栄養素の働き (2) 脂質・ミネラル・ビタミン 第6回 体力とは 第7回 健康と体力 第8回 健康の増進について 第9回 トレーニングの基礎概念 第10回 筋収縮のエネルギー源 第11回 有酸素運動と無酸素運動 第12回 筋と運動 第13回 アルコール・喫煙の影響 第14回 薬物・睡眠・ストレスの影響 第15回 授業のまとめ		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度と学習態度の総合評価 30% レポート 70%		
失格条件	次のいずれかに該当した場合は失格となる。 1.5回を超えて欠席した場合 (20分以上遅れて来た場合は欠席に数えます。20分以内の遅刻3回で1回の欠席と数えます) 2.レポートを提出しなかった場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	指示された予習については、積極的に資料を検索して行うこと。(予習時間 1時間) また、授業後の復習は欠かさず行い、授業で示された各用語をしっかりと理解したうえで覚えること。(復習時間 3時間)		
課題へのフィード バック	毎時間前時までの学習内容の確認を行う。		
教科書	適宜プリントを配布する		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	あり		

1-040

ナンバリング	CC300A04	期間	前期/後期
授業科目名	健康とスポーツ実技		
英訳科目名	Health and Physical Practices		
担当教員名	奥野 暢通		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	◎	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	これまでの体育科の授業を基礎にして、体力・運動能力のいっそうの向上を目指します。楽しいスポーツの在り方を学び、健康的で充実した学生生活がおくれるよう、各種のスポーツ実習を通して理解を深め、健康とスポーツ実施の意義を学びます。スポーツ種目としては、「バドミントン」、「卓球」、「テニス」等の中から1種目を選択することになります。ただし、みなさんが希望により1または2種目を決定し同一種目を授業期間を通して実施します。偏りがあった場合、希望した種目になるとは限りません。1回目の授業で実施の種目を決めます。欠席しないようにしてください。		
到達目標	スポーツを楽しむことのできる態度ならびに能力の獲得		
授業計画	第1回 オリエンテーション、実施種目の選択 第2回 ウォーミングアップとクーリングダウンの意義 第3回 基本のサーブ 第4回 ためしのゲーム（1：簡易ルールで） 第5回 フォアハンドでの打法 第6回 フォアハンドを中心としたラリー 第7回 バックハンドでの打法 第8回 ラリー（バックハンドも含める） 第9回 ためしのゲーム（2：正規のルールで） 第10回 リーグ戦（シングル）①前回までに獲得した技術をうまく利用して 第11回 リーグ戦（シングル）②ゲームの組み立てを工夫 第12回 種々のサーブ 第13回 ダブルス練習 第14回 リーグ戦（ダブルス）①ゲームに反映させる打ち方の工夫 第15回 リーグ戦（ダブルス）②試合の流れ、陣形の工夫		
評価方法 (合計100%)	授業時における技能評価50% 授業への取り組み方50%		
失格条件	全授業の1/4以上欠席したもの		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	スポーツの実施可能な体調の維持・管理を心がけること。 授業以外での身体活動を積極的に行うこと。		
課題へのフィード バック	技能向上の毎時間の確認		
教科書	授業中に適宜プリント等を配布する		
著者名			
出版社			
参考書	授業中に適宜示す		
その他			
備考			
科目生への開講	あり		

1-041

ナンバリング	CC300A04	期間	前期/後期
授業科目名	健康とスポーツ実技		
英訳科目名	Health and Physical Practices		
担当教員名	越智 祐光		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	◎	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	これまでの体育科の授業を基礎にして、体力・運動能力のいっそうの向上を目指します。楽しいスポーツの在り方を学び、健康的で充実した学生生活がおくれるよう、各種のスポーツ実習を通して理解を深め、健康とスポーツ実施の意義を学びます。スポーツ種目としては、「バドミントン」「卓球」のいずれか1種目を開講することになります。1回目の授業で実施の種目を決めます。欠席しないようにしてください。		
到達目標	スポーツを楽しむことのできる態度ならびに能力の獲得		
授業計画	第1回 オリエンテーション、実施種目の選択 第2回 ウォーミングアップとクーリングダウンの意義 第3回 基本のサーブ 第4回 ためしのゲーム（1：簡易ルールで） 第5回 フォアハンドでの打法 第6回 フォアハンドを中心としたラリー 第7回 バックハンドでの打法 第8回 ラリー（バックハンドも含める） 第9回 ためしのゲーム（2：正規のルールで） 第10回 リーグ戦（シングル）①前回までに獲得した技術をうまく利用して 第11回 リーグ戦（シングル）②ゲームの組み立てを工夫 第12回 種々のサーブ 第13回 ダブルス練習 第14回 リーグ戦（ダブルス）①ゲームに反映させる打ち方の工夫 第15回 リーグ戦（ダブルス）②試合の流れ、陣形の工夫		
評価方法 (合計100%)	授業時における技能評価50% 授業への取り組み方50%		
失格条件	全授業の1/4以上欠席したもの		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	スポーツの実施可能な維持・管理を心がけること。 授業以外での身体活動を積極的に行うこと。		
課題へのフィード バック	実技の取り組みに対して、全体、または個別にコメントする。		
教科書	授業中に適宜プリント等を配布する		
著者名			
出版社			
参考書	授業中に適宜示す		
その他			
備考			
科目生への開講	あり		

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

1-042

ナンバリング	CC300A04	期間	後期
授業科目名	健康とスポーツ実技 (健康コース)		
英訳科目名	Health and Physical Practices		
担当教員名	越智 祐光		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	◎	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	これまでの体育科の授業を基礎にして、体力・運動能力のいっそうの向上を目指します。楽しいスポーツの在り方を学び、健康的で充実した学生生活がおくれるよう、各種のスポーツ実習を通して理解を深め、健康とスポーツ実施の意義を学びます。スポーツ種目としては、「バドミントン」、「卓球」等を予定しています。各クラスでの実施種目はこのうち指定された2種目あるいは3種目となり、その中から1種目を選択することになります（担当者が1名のクラスの場合には1種目しか指定されません）。ただし、みなさんが希望した（選択した）種目に偏りがあった場合、希望した種目になるとは限りません。1回目の授業で実施の種目を決めます。欠席しないようにしてください。		
到達目標	スポーツを楽しむことのできる態度ならびに能力の獲得		
授業計画	第1回 オリエンテーション、実施種目の選択 第2回 ウォーミングアップとクーリングダウンの意義 第3回 基本のサーブ 第4回 ためしのゲーム（1：簡易ルールで） 第5回 フォアハンドでの打法 第6回 フォアハンドを中心としたラリー 第7回 バックハンドでの打法 第8回 ラリー（バックハンドも含める） 第9回 ためしのゲーム（2：正規のルールで） 第10回 リーグ戦（シングル）①前回までに獲得した技術をうまく利用して 第11回 リーグ戦（シングル）②ゲームの組み立てを工夫 第12回 種々のサーブ 第13回 ダブルス練習 第14回 リーグ戦（ダブルス）①ゲームに反映させる打ち方の工夫 第15回 リーグ戦（ダブルス）②試合の流れ、陣形の工夫		
評価方法 (合計100%)	授業時における技能評価50% 授業への取り組み方50%		
失格条件	全授業の1/4以上欠席したもの		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	スポーツの実施可能な維持・管理を心がけること。 授業以外での身体活動を積極的に行うこと。		
課題へのフィード バック	実技の取り組みに対して、全体、または個別にコメントする。		
教科書	授業中に適宜プリント等を配布する		
著者名			
出版社			
参考書	授業中に適宜示す		
その他			
備考			
科目生への開講	あり		

1-043

ナンバリング	CC300B02	期間	前期
授業科目名	生涯健康とスポーツ実技		
英訳科目名	Sports and Fitness Maintenance (Physical Education)		
担当教員名	奥野 暢通		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	◎	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	これまでの体育科の授業を基礎にして、体力・運動能力のいっそうの向上を目指します。楽しいスポーツの在り方を学び、健康的で充実した学生生活がおくれるよう、各種のスポーツ実習を通して理解を深め、健康とスポーツ実施の意義を学びます。スポーツ種目としては、「バドミントン」、「卓球」、「テニス」、「ゴルフ」等の中から1種目を選択することになります。ただし、みなさんが希望により1または2種目を決定し同一種目を授業期間を通して実施します。偏りがあった場合、希望した種目になるとは限りません。1回目の授業で実施の種目を決めます。欠席しないようにしてください。		
到達目標	スポーツを楽しむことのできる態度ならびに能力の獲得		
授業計画	第1回 オリエンテーション、実施種目の選択 第2回 ウォーミングアップとクーリングダウンの意義 第3回 基本のサーブ 第4回 ためしのゲーム（1：簡易ルールで） 第5回 フォアハンドでの打法 第6回 フォアハンドを中心としたラリー 第7回 バックハンドでの打法 第8回 ラリー（バックハンドも含める） 第9回 ためしのゲーム（2：正規のルールで） 第10回 リーグ戦（シングル）①前回までに獲得した技術をうまく利用して 第11回 リーグ戦（シングル）②ゲームの組み立てを工夫 第12回 種々のサーブ 第13回 ダブルス練習 第14回 リーグ戦（ダブルス）①ゲームに反映させる打ち方の工夫 第15回 リーグ戦（ダブルス）②試合の流れ、陣形の工夫		
評価方法 (合計100%)	授業時における技能評価50% 授業への取り組み方50%		
失格条件	全授業の1/4以上欠席したもの		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	スポーツの実施可能な維持・管理を心がけること。 授業以外での身体活動を積極的に行うこと。		
課題へのフィード バック	技能向上の毎時間の確認		
教科書	授業中に適宜プリント等を配布する		
著者名			
出版社			
参考書	授業中に適宜示す		
その他			
備考			
科目生への開講	あり		

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

ナンバリング	CC300A02	期間	前期/後期
授業科目名	情報処理演習 A		
英訳科目名	Data Processing A		
担当教員名	岡本 久仁子		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	◎	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	この授業では、大学における授業・研究に最低限必要なコンピュータの基礎的運用技術の習得を目標とします。		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ワープロソフトを使って文書を作成できるようになること。 ・インターネットで情報を収集できるようになること。 ・表計算ソフトを使って数値データを処理しグラフを作成できるようにすること。 ・プレゼンテーションソフトを使って発表できるようになること。 		
授業計画	第1回 オリエンテーション 情報機器の基本操作とタッチタイピング 第2回 Word(1) 日本語の入力 第3回 情報検索 インターネット 第4回 Word(2) 文字の編集とページ設定 第5回 Word(3) 罫線を使った表の作成 印刷 第6回 Word(4) 図形描画 第7回 Word(5) 課題A作成 (ワードの課題) 第8回 Excel(1) エクセルの基本操作 表の作成 第9回 Excel(2) 計算と関数 第10回 Excel(3) グラフ作成 印刷 第11回 Excel(4) データ統合 課題B作成 (エクセルの課題) 第12回 PowerPoint(1) パワーポイントの基本操作 第13回 PowerPoint(2) 課題C作成 (パワーポイントの課題) アウトラインの作成 第14回 PowerPoint(3) 課題C作成 (パワーポイントの課題) 仕上げと配布資料の作成 第15回 PowerPoint(4) プレゼンテーション 評価表の作成		
評価方法 (合計100%)	課題 (3回) : 60% タッチタイピング能力および練習態度 : 10% 受講態度および授業への参加態度 : 30%		
失格条件	<ul style="list-style-type: none"> ・全授業の3分の1以上欠席した者 (遅刻は3回で1欠席とします) ・課題未提出の者 		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業は大学の環境 (Windows 10、Office2016) で行うので、自宅での環境について調べておくこと。 また、授業中に配布するプリント類はOffice2016を使った内容のものです。バージョンによる操作の違いなどは質問してください。 ・シラバスに基づいた機能のチェック。(予習時間1時間) ・授業で行ったことについてレポートを作成すること。(復習時間1時間)		
課題へのフィード バック	<ul style="list-style-type: none"> ・提出されたワード課題・エクセル課題については、提出された印刷物にコメントをつけて個別に返却します。 ・パワーポイントの課題については、総評として全体に対してコメントします。 		
教科書	不使用。プリントを配布。		
著者名			
出版社			
参考書	30時間でマスターOffice2016		
その他	授業を遅刻、欠席した場合は自分でその内容を学習しておくこと。 配布プリントはポータルサイトにアップしてあります。		
備考			
科目生への開講	あり		

1-045

ナンバリング	CC300A02	期間	前期/後期
授業科目名	情報処理演習 A		
英訳科目名	Data Processing A		
担当教員名	岡田 裕		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	◎	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	この授業では、大学における授業・研究に最低限必要なコンピュータ技術の習得を目標とする。 情報機器の基本操作(Windows)、タッチタイピングの練習、インターネットでの情報収集(Internet Explorer)、レポートの作成方法(Word)、データの分析の仕方(Excel)、プレゼンテーションと資料作成(PowerPoint)などを行う。		
到達目標	大学における授業・研究に最低限必要なコンピュータリテラシーを習得し、レポート作成やゼミ発表等に役立てることができる。		
授業計画	第1回 オリエンテーション 情報機器の基本操作 第2回 Office365とOneDrive（クラウドメモリー）の利用 第3回 Word(1) 日本語の入力 第4回 Word(2) 文字の編集・ページ設定・印刷 第5回 Word(3) 表の作成・文書編集 第6回 Word(4) 課題作成 第7回 Excel(1) 基本操作・表の作成 第8回 Excel(2) 計算と関数 第9回 Excel(3) グラフ作成 第10回 Excel(4) 課題作成 第11回 PowerPoint(1) 基本操作 第12回 PowerPoint(2) プレゼンテーションの基礎知識 第13回 PowerPoint(3) 課題作成 第14回 PowerPoint(4) プレゼンテーション 第15回 まとめ		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 30% 課題とプレゼンテーション 70%（タッチタイピング30%を含む）		
失格条件	出席回数が3分の2を超えない者（遅刻3回で欠席1回とカウントする） 課題を1つでも未提出の者（課題をすべて提出しないと失格になります）		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	パソコンは慣れることが重要なので、家庭や自習室で必ず復習をしておきましょう。 またもし休んだ場合は、その日の学習内容を友人から聞いて必ず確認・習得しておきましょう。 1回の授業（2時間）に予習・復習の時間を4時間充てましょう。		
課題へのフィード バック	課題やプレゼンに対して、学生同士で相互評価したり、教員がコメントする。		
教科書	学生のためのOffice2016&情報モラル		
著者名			
出版社	noa出版		
参考書	必要に応じて指示します		
その他			
備考			
科目生への開講	あり		

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

ナンバリング	CC300A02	期間	前期/後期
授業科目名	情報処理演習 A		
英訳科目名	Data Processing A		
担当教員名	中島 欣哉		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解>◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能>◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力>◎	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度>○
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>パソコンの基本的な使い方を学び、さらに、各自の興味・能力に応じて好きな課題に取り組んでもらいます。ワープロWord、表計算ソフトExcel、プレゼンソフトPowerPointやネット検索の技術について基本を学び、レポートは次の2つを作成します。</p> <p>●基本課題：ワープロ文書作成。案内状や自己紹介など、好きなものを作る。</p> <p>●応用課題：Word、Excel、PowerPoint、音楽ソフト、動画作成ソフトなど、どんなソフトを使ってもよいから、何か自由課題に取り組む。</p> <p>課題例</p> <p>◎文章や絵の作品製作。カレンダー、絵本、ミュージシャン紹介など。</p> <p>◎PowerPointでプレゼンや簡単なアニメなどを作成。</p> <p>◎動画、アニメ制作 ◎ゲーム制作 ◎プログラミング ◎ホームページ制作</p> <p>◎楽譜作成（既存曲の打ち込み、耳コピ、自作の作曲・編曲）</p> <p>◎「打ち込み」による音楽制作</p> <p>◎Excelで家計簿、カロリー計算表などを作成。</p> <p>◎アンケート調査。アンケート用紙を作って配り、データを集計・分析。</p>		
到達目標	ワープロ、表計算ソフト、プレゼンソフトやネット検索を自力で使いこなせ、さらにそれらを組み合わせて比較的長期間にわたって規模の大きな製作物を作り上げられるようになること。		
授業計画	<p>第1回 ガイダンス、パソコンの基本操作</p> <p>第2回 ワープロの基本編集操作、タッチタイプの練習</p> <p>第3回 ワープロ文書の装飾、タッチタイプの練習</p> <p>第4回 ワープロ文書作成練習（見本通りのビジネス文書作成）</p> <p>第5回 ワープロで各自オリジナルの文書作成（基本課題）、ネットの情報収集のコツ</p> <p>第6回 基本課題の続き、ネットの情報収集の練習</p> <p>第7回 Excelによるデータ処理：基本操作、関数、データ分析</p> <p>第8回 Excelによるデータ処理：データ分析、グラフ作成</p> <p>第9回 PowerPointの基本操作、プレゼンテーション作成</p> <p>第10回 PowerPointによるプレゼンテーション作成、発表のコツ</p> <p>第11回 応用課題（各自の選んだ課題に応じて、使用するソフトの勉強、製作開始）</p> <p>第12回 応用課題（ソフトの勉強、製作続き）</p> <p>第13回 応用課題（製作続き）</p> <p>第14回 応用課題（製作続き、報告書の作成について）</p> <p>第15回 応用課題（作品の完成。報告書まとめ、または発表）</p>		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 20% レポート 80%		
失格条件	6回以上欠席した者（遅刻3回で、欠席1回分にカウントします。） また、最初の3回（第1～3回）を全て欠席した者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	次回までに予習が必要な事項はその都度指示するので予習すること。（予習時間 1時間） その日に学んだパソコン技術の練習と、レポートの作成をすること。（復習時間 3時間）		
課題へのフィード バック	授業内小課題については、適宜個別もしくは全体にコメントします。 提出物の作成は授業内に行うことが多いので、提出までに個別に何度もコメントやアドバイスを与え、修正・改善してもらい、教師・学生双方が納得したうえで提出してもらいます。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	★★★ 注意 ★★★ 文字入力やワープロの基本操作などの初歩的な事柄はすでに習得している人は、「情報処理演習B」（担当教員：中島欣哉）の方を選んでください。そちらはこの科目と似た内容ですが、初歩的な事柄は省略して、少し進んだ内容で、応用課題（自由に好きなものを作る）に多くの時間をかけてもらいます。		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	CC300B01	期間	後期
授業科目名	情報処理演習B		
英訳科目名	Data Processing B		
担当教員名	岡本 久仁子		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	◎	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	この授業では、大学における授業・研究に必要なコンピュータの発展的な運用技術の習得を目標とします。		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ワープロソフトを使って文書を作成できるようになること。 ・インターネット上のデータベースからデータをダウンロードし加工することができるようになること。 ・表計算ソフトを使って数値データを目的に合わせて処理しグラフを作成できるようにすること。 ・グラフや図表などを使ったレポートが作成できるようになること。 		
授業計画	第1回 Wordの基礎 ワードの基礎（復習） ページ設定・文字書式・段落書式 第2回 Wordの基礎 表の作成 第3回 Wordの基礎 図形描画 第4回 Excelの基礎 エクセルの基礎（復習） 第5回 Excelの応用 順位と絶対参照 第6回 Excelの応用 IF関数による条件判定 第7回 Excelの応用 グラフ作成 ExcelとWordの連携 第8回 Excelの応用 インターネットからのデータベース検索 第9回 Wordの応用 レポート演習（表紙・脚注など） 第10回 Wordの応用 レポート演習（長文練習） 第11回 Wordの応用 レポート演習（図・表の入ったレポートの作成） 第12回 Wordの応用 レポート演習（グラフの入ったレポートの作成） 第13回 総合練習(1) 資料検索とアウトラインの作成 第14回 総合練習(2) 最終課題レポート作成（表、グラフ、図の作成） 第15回 総合練習(3) 最終課題レポート作成（形式にのったレポートの作成）		
評価方法 (合計100%)	タッチタイピング能力及び練習態度10% 受講態度および授業への参加態度40% 最終課題レポート50%		
失格条件	<ul style="list-style-type: none"> ・全授業の3分の1以上欠席した者（遅刻は3回で1欠席とします） ・最終課題未提出の者 		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業は大学の環境（Windows10、Office2016）で行うので、自宅の環境について調べておくこと。 また授業中に使用するプリント類はOffice2016を使った内容のものになるので、バージョンによる操作の違いについては質問してください。 シラバスに基づいた機能のチェック。（予習時間1時間） 授業内容に関するレポート作成。（復習時間1時間）		
課題へのフィード バック	<ul style="list-style-type: none"> ・授業内課題については、注意点などを全体に向けてコメントします。 ・最終課題は、ポータルサイトを通じコメントします。 		
教科書	不使用。プリントを配布。		
著者名			
出版社			
参考書	30時間でマスターOffice2016		
その他	授業を遅刻、欠席した場合は自分でその内容を学習しておくこと。 配布プリントはポータルサイトにアップしてあるので参照すること。		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	CC300B01	期間	後期
授業科目名	情報処理演習B		
英訳科目名	Data Processing B		
担当教員名	中島 欣哉		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解>◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能>◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力>◎	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度>○
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>パソコンの基本的な使い方を学び（★注： 文字入力やワープロの基本操作などの初歩的な事柄は省略します。下の「その他」欄の注意を参照）、さらに、各自の興味・能力に応じて好きな課題に取り組んでもらいます。ワープロWord、表計算ソフトExcel、プレゼンソフトPowerPointやネット検索の技術について基本を学び、レポートは次の2つを作成します。</p> <p>●基本課題：ワープロ文書作成。案内状や自己紹介など、好きなものを作る。</p> <p>●応用課題：Word、Excel、PowerPoint、音楽ソフト、動画作成ソフトなど、どんなソフトを使ってもよいから、何か自由課題に取り組む。</p> <p>課題例</p> <p>◎文章や絵の作品製作。カレンダー、絵本、ミュージシャン紹介など。</p> <p>◎PowerPointでプレゼンや簡単なアニメなどを作成。</p> <p>◎動画、アニメ制作 ◎ゲーム制作 ◎プログラミング ◎ホームページ制作</p> <p>◎楽譜作成（既存曲の打ち込み、耳コピ、自作の作曲・編曲）</p> <p>◎「打ち込み」による音楽制作</p> <p>◎Excelで家計簿、カロリー計算表などを作成。</p> <p>◎アンケート調査。アンケート用紙を作って配り、データを集計・分析。</p>		
到達目標	ワープロ、表計算ソフト、プレゼンソフトやネット検索を自力で使いこなせ、さらにそれらを組み合わせて比較的長期間にわたって規模の大きな製作物を作り上げられるようになること。		
授業計画	<p>第1回 ガイダンス、パソコンの操作、ワープロの操作</p> <p>第2回 ワープロで各自オリジナルの文書作成（基本課題）、ネットの情報収集のコツ</p> <p>第3回 基本課題の続き、ネットの情報収集の練習</p> <p>第4回 Excelによるデータ処理：基本操作、関数、データ分析</p> <p>第5回 Excelによるデータ処理：データ分析、グラフ作成</p> <p>第6回 PowerPointの基本操作、プレゼンテーション作成</p> <p>第7回 PowerPointによるプレゼンテーション作成、発表のコツ</p> <p>第8回 応用課題（各自の選んだ課題に応じて、使用するソフトの勉強、製作開始）</p> <p>第9回 応用課題（ソフトの勉強、製作続き）</p> <p>第10回 応用課題（製作続き）</p> <p>第11回 応用課題（製作続き、課題の経過報告）</p> <p>第12回 応用課題（製作続き、報告書の作成について）</p> <p>第13回 応用課題（製作続き）、プレゼン課題選択者の発表会</p> <p>第14回 応用課題（製作続き）、プレゼン課題選択者の発表会続き</p> <p>第15回 応用課題（作品の完成。報告書まとめ、または発表）</p>		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 20% レポート 80%		
失格条件	6回以上欠席した者（遅刻3回で、欠席1回分にカウントします。） また、最初の3回（第1～3回）を全て欠席した者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	次回までに予習が必要な事項はその都度指示するので予習すること。（予習時間 1時間） その回に学んだパソコン技術の練習と、レポートの作成をすること。（復習時間 3時間）		
課題へのフィード バック	授業内小課題については、適宜個別もしくは全体にコメントします。 提出物の作成は授業内に行うことが多いので、提出までに個別に何度もコメントやアドバイスを与え、修正・改善してもらい、教師・学生双方が納得したうえで提出してもらいます。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	★★★ 注意 ★★★ 文字入力やワープロの基本操作などの初歩的な事柄から学習したい人は、「情報処理演習A」（担当教員：中島欣哉）の方を選んでください。そちらはこの科目と似た内容ですが、初歩的な事柄から教えます。		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	CC200A01	期間	後期集中
授業科目名	生涯学習概論		
英訳科目名	Lifelong Learning/Introduction to Lifelong Learning		
担当教員名	鍔 純香		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	◎
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	この授業では、司書課程の学習に関連して「生涯学習」という考え方を紹介し、具体的な活動を紹介しながら、理論的・実践的に考えていく。生涯学習とは、誰もが「いつでも・どこでも」、自分の人生（仕事・趣味・生活…）を充実させるために、また積極的に市民として社会に参加していくために、それぞれが興味と能力を高めていくことを意味する。授業ではこれを推進する、図書館を中心とした社会教育施設や学校、地域などの活動について、映像や資料を使って紹介しながら、背景にある考え方を理解し、実際に生涯学習に参加し、なおかつそれを支援するための情報や考え方を提供したい。		
到達目標	学習目標は次の3つである。①生涯学習概念について具体的な実践から考え、その理論を理解できる。②自らが生涯学習者として自身の学びを計画、評価できる。③図書館などの社会教育施設において、人を育てる、人の学びを支援する専門職として学び続けることができる。		
授業計画	第1回 ガイダンス—生涯学習とは何か 第2回 生涯学習入門① 学びを学びほぐす「unlearn」の可能性 第3回 生涯学習入門② 生涯学習の理念について—その系譜と社会的背景 第4回 生涯学習入門③ 生涯学習の「空間」—社会教育施設について（図書館を中心に） 第5回 生涯学習入門④ 生涯学習の「時間」—ライフスタイルと学習 第6回 生涯学習における学びの方法1—事例から考える 第7回 生涯学習における学びの方法2—計画と実践 第8回 生涯学習支援者の役割—司書を中心に 第9回 図書館における生涯学習1—国内の実践事例から 第10回 図書館における生涯学習2—国外の実践事例から 第11回 図書館における生涯学習3—学習支援の在り方について考える 第12回 生涯学習と学校・地域・社会 第13回 生涯学習支援と評価 第14回 生涯学習における学びを企画する 第15回 まとめ—生涯学習支援のこれから		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度及び小レポート：60% 最終レポート：40%		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	身近な図書館・博物館・公民館の講座や取り組みについて関心を持ち、ある程度知っておくこと（予習） 授業内で紹介した参考文献等をもとに課題を考える（復習）		
課題へのフィード バック	小レポートに関しては、授業内で適宜行うが、最終レポートに関しては成績評価後コメントをつけて返却する。		
教科書	使用しない		
著者名			
出版社			
参考書	授業中に適宜指示する		
その他			
備考			
科目生への開講	あり		

1-050

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	ボランティア論		
英訳科目名	Volunteer Theory		
担当教員名	名和 月之介		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	ボランティアは、障がい者、高齢者、児童という社会福祉の分野を中心に、地域や地域を越えて、国際協力に至るまで、様々な分野への広がりを見せている。ボランティアの担い手も、一部の有志者から、企業人や一般市民にまで及んでいる。授業計画に沿って、基礎的なボランティアに関する知見を得ることによって、学生自身による自発的・主体的なボランティア活動への発展を意図して授業を進めてゆく。		
到達目標	ボランティアに関する基本的な知識の習得と活動展開への基盤を構築する。		
授業計画	第1回 ボランティアとは何か(1)ボランティアの考え方 第2回 ボランティアとは何か(2)ボランティアの目的 第3回 地域の問題とボランティア 第4回 地域福祉とボランティア 第5回 障がい者福祉におけるボランティア 第6回 障がい者の活動と参加のためのボランティア 第7回 高齢社会のボランティア 第8回 高齢者の社会参加とボランティア 第9回 児童問題とボランティア 第10回 児童養護とボランティア 第11回 地域の子育て支援とボランティア 第12回 社会貢献・募金活動とボランティア 第13回 外国人との共生社会におけるボランティア 第14回 ボランティアの新しい展開 第15回 授業のまとめ		
評価方法 (合計100%)	期末レポート50% 授業への参加態度50%		
失格条件	期末レポートを提出しなかった場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	配布プリントを30分～1時間読んでおくことが望ましい。		
課題へのフィード バック	レポート提出時授業において全体に向けてコメントします。		
教科書	関連プリントを配布する。		
著者名			
出版社			
参考書	早瀬昇『「参加の力」が創る共生社会』ミネルヴァ書房 (ISBN978-4-623-08338-1)		
その他	特になし		
備考			
科目生への開講	なし		

1-051

ナンバリング	期間	後期
授業科目名	ボランティア体験	
英訳科目名	Volunteer Experience	
担当教員名	名和 月之介	
ディプロマ・ポリシー1	ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	履修者自身が、ボランティア活動を計画・実践し、さらに評価・反省することによって、ボランティア活動についてPLAN-DO-SEEという方法論の習得を図る。	
到達目標	ボランティア活動に関するPLAN-DO-SEEという方法論の習得。	
授業計画	<ul style="list-style-type: none"> ・第1回～2回 事前指導（教室で2回） ・中間指導（教室で2回） ・ボランティア体験活動のレポート発表提出（教室で1回） なお中間指導とボランティア体験活動発表提出の日時については事前指導時に通知する。	
評価方法 (合計100%)	ボランティア体験活動のレポート(400字4枚計1600字相当)発表提出(70%) 事前・中間指導への参加態度(30%) なおボランティア体験活動は、授業がない時（平日の空き時間、日曜祝日、長期休暇等）合計18時間以上、または終日3日間以上行うこととする。	
失格条件	事前・中間指導を1回も出席しなかった場合、あるいはボランティア体験活動のレポート発表提出をしなかった場合。	
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	授業において適宜アドバイスする。	
課題へのフィード バック	レポート提出時授業において全員にコメントします。	
教科書	不使用	
著者名		
出版社		
参考書		
その他		
備考		
科目生への開講	なし	

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

1-052

ナンバリング	CC200B01	期間	前期/後期
授業科目名	人権教育		
英訳科目名	Human Rights Education		
担当教員名	葛目 巴恵子		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	◎
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>子どもたちは社会の不安定な中で、自分の存在を否定されかねない状況におかれています。子どもたちに自分を大切にできる力を育てるのが人権教育の最大のテーマです。具体的には、仲間を大切にできる力を育て、人々が誠実に生きている姿を伝え、子ども達の自尊感情を育てる教育を、現実の学校教育の場の実践から学び、人々の生きている姿から学びます。</p> <p>さらに、学校だけでなくさまざまな場面で子どもと出会い指導者となっていく皆さんの、人権感覚を高めていく授業を目指します。</p>		
到達目標	<p>人権とは何かを具体的課題につなげて説明できる。</p> <p>人権教育の課題を説明できる</p> <p>学習課題である人権上のテーマについて自分の考えで述べる事が出来る。</p>		
授業計画	<p>第1回 シラバス アンケートをとる</p> <p>第2回 NHKスペシャルのビデオを観る</p> <p>第3回 スペシャルのいきさつ</p> <p>第4回 6年2組の子どもたち</p> <p>第5回 好きな先生、嫌いな先生について</p> <p>第6回 いじめ・体罰</p> <p>第7回 いじめの問題と子どもの人権のDVDを観る</p> <p>第8回 名前の由来を考える</p> <p>第9回 障害児教育についてのDVDを観る</p> <p>第10回 被爆者への暴言平和への願い</p> <p>第11回 中国（小皇帝の涙）を観る（DVD）</p> <p>第12回 子どもへのメッセージ七夕の願い</p> <p>第13回 子どもの問題行動</p> <p>第14回 保護者との関係</p> <p>第15回 まとめ、テスト</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>授業への参加態度（発言、聴く姿勢、資料ノートの整理）50%</p> <p>試験 50%</p>		
失格条件	<p>欠席は4回まで</p> <p>試験を受けない場合</p>		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>予習プリントを配られたときはあらかじめ読んで、自分なりの考えをノートに記入しておくこと。（毎週1時間）</p> <p>配布プリントは整理し、講義ごとに、自分なりの考えをまとめておくこと。（毎週1時間）</p> <p>新聞等で講座のテーマに関連すること、自分とのかかわりで問題意識を持っていることは整理しておくこと。（毎週1時間）</p> <p>建前でなく本音でものを考える習慣をつけてください。</p>		
課題へのフィードバック	<p>今起こっている社会の出来事の中で、授業で取り上げた課題を通して、人権について考えてみる。</p> <p>毎授業の感想を書き、それぞれの意見を出し合う。</p>		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考	教師としての実務経験をもとに、この授業を進めます。		
科目生への開講	あり		

1-053

ナンバリング	CC200B01	期間	前期
授業科目名	人権教育		
英訳科目名	Human Rights Education		
担当教員名	葛目 巴恵子		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	◎
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>子どもたちは社会の不安定な中で、自分の存在を否定されかねない状況におかれています。子どもたちに自分を大切にできる力を育てるのが人権教育の最大のテーマです。</p> <p>具体的には、仲間を大切にできる力を育て、人々が誠実に生きている姿を伝え、子ども達の自尊感情を育てる教育を、現実の学校教育の場の実践から学び、人々の生きている姿から学びます。</p> <p>さらに、学校だけでなくさまざまな場面で子どもと出会い指導者となっていく皆さんの、人権感覚を高めていく授業を目指します。</p>		
到達目標	<p>人権とは何かを具体的課題につなげて説明できる。</p> <p>人権教育の課題を説明できる</p> <p>学習課題である人権上のテーマについて自分の考えで述べる事が出来る。</p>		
授業計画	<p>第1回 シラバス アンケートをとる</p> <p>第2回 NHKスペシャルのビデオを観る</p> <p>第3回 スペシャルのいきさつ</p> <p>第4回 6年2組の子どもたち</p> <p>第5回 好きな先生、嫌いな先生について</p> <p>第6回 いじめ・体罰</p> <p>第7回 いじめの問題と子どもの人権のDVDを観る</p> <p>第8回 名前の由来を考える</p> <p>第9回 障害児教育についてのDVDを観る</p> <p>第10回 被爆者への暴言平和への願い</p> <p>第11回 中国（小皇帝の涙）を観る（DVD）</p> <p>第12回 子どもへのメッセージ七夕の願い</p> <p>第13回 子どもの問題行動</p> <p>第14回 保護者との関係</p> <p>第15回 まとめ、テスト</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>授業への参加態度（発言、聴く姿勢、資料ノートの整理）50%</p> <p>試験 50%</p>		
失格条件	<p>欠席は4回まで</p> <p>試験を受けない場合</p>		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>予習プリントを配られたときはあらかじめ読んで、自分なりの考えをノートに記入しておくこと。（毎週1時間）</p> <p>配布プリントは整理し、講義ごとに、自分なりの考えをまとめておくこと。（毎週1時間）</p> <p>新聞等で講座のテーマに関連すること、自分とのかかわりで問題意識を持っていることは整理しておくこと。（毎週1時間）</p> <p>建前でなく本音でものを考える習慣をつけてください。</p>		
課題へのフィードバック	<p>今起こっている社会の出来事の中で、授業で取り上げた課題を通して、人権について考えてみる。</p> <p>毎授業の感想を書き、それぞれの意見を出し合う。</p>		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考	教師としての実務経験をもとに、この授業を進めます。		
科目生への開講	あり		

1-054

ナンバリング	CC300C02	期間	前期
授業科目名	TOEIC対策 I A/ステップアップ英語 A		
英訳科目名	Preparation for TOEIC I A/Step-up English A (TOEIC Preparation 1)		
担当教員名	野口 昌子		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	◎	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	TOEIC Listening & Reading Testのスコアアップを図るため、出題形式に慣れ、リスニングとリーディングの力を磨くタスクを行います。		
到達目標	TOEICスコア400以上を目指して、次の項目を達成目標とします。 1.音声変化などの発音に慣れ、聴き、音読してリスニング力を上げる 2. 語彙を増やし、英文を読んで内容をより正確に理解できる 3.文法・語法・口語表現をよりよく理解し、認識できる		
授業計画	第1回 オリエンテーション Unit 1 Traffic 現在時制 第2回 Unit 2 Weather & Events 過去時制 第3回 Unit 3 Lunchtime 進行形・完了形 第4回 Unit 4 Hotels 冠詞・代名詞 第5回 Unit 5 Health 名詞 第6回 Unit 6 A New Life 形容詞・副詞 第7回 Unit 7 Mini Test 第8回 Unit 8 Job Hunting 比較 第9回 Unit 9 Workplaces & Products 不定詞・動名詞 第10回 Unit 10 Customer Service & Office Crime 受動態・助動詞 第11回 Unit 11 Office Messages 使役動詞・知覚動詞 第12回 Unit 12 Ordering & Shipping 関係代名詞・関係副詞 第13回 Unit 13 Business Trips 接続詞・前置詞 第14回 Unit 14 Success in Business 仮定法 第15回 まとめ 達成度の確認		
評価方法 (合計100%)	出席率(10%) 授業への参加態度・内容(30%) 小テスト・提出課題(10%) 試験(50%)		
失格条件	欠席回数が5回又は5回を超えた場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業は毎回テキストの1課を消化していきます。前もって問題に目を通し、解らない語や語句に印をつけ、辞書で意味を確認する形の予習をして下さい。(1時間～2時間) 授業後に間違った箇所は重点的に復習をしましょう。又テキストのリスニング問題はCDが添付されているので、リスニング問題の復習もしっかり続けて下さい。(2時間～3時間)		
課題へのフィードバック	提出された課題や小テストは次回の授業でコメントをつけ個別に返却します。		
教科書	Totally TOEIC L & R Test: Challenge 400 TOEICテスト：チャレンジ400		
著者名	Terry O'Brien/三原 京/塩谷 直史/木村 博是		
出版社	南雲堂		
参考書			
その他	第1回目の授業からテキストを使用します。遅刻・欠席をしないで、筆記用具も忘れず持参すること。		
備考			
科目生への開講	あり		

1-055

ナンバリング	CC300C03	期間	後期
授業科目名	TOEIC対策 I B/ステップアップ英語 B		
英訳科目名	Preparation for TOEIC I B/Step-up English B (TOEIC Preparation 2)		
担当教員名	野口 昌子		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	◎	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	基本的な英語力の強化に努め、近年就職に役立つTOEICのスコアアップを目指す。		
到達目標	TOEICで500点以上のスコアを取得できることを目標とする。		
授業計画	第1回 オリエンテーション Unit 1 Let's One's Hair Down 名詞 第2回 Unit 2 In the Pink 前置詞 第3回 Unit 3 Let the Cat Out of the Bag 接続詞 第4回 Unit 4 Sell like Hotcakes 5文型 第5回 Unit 5 Have Feet of Clay 受動態 第6回 Unit 6 It's Fishy 時制 第7回 Unit 7 No ifs, Ands or Buts 関係詞 第8回 Unit 8 Jump the Gun 不定詞 第9回 Unit 9 Eat Someone Up 動名詞 第10回 Unit 10 Have the World by the Tail 仮定法 第11回 Unit 11 Cool as a Cucumber 否定 第12回 Unit 12 Turn Purple with Rage 比較 第13回 Unit 13 Have It Made 完了形 第14回 Unit 14 Get Out from Under 助動詞 第15回 まとめと理解度の確認		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度・内容 30% 小テスト、提出課題など 20% 試験 50%		
失格条件	5回またはそれ以上の欠席を失格とする。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業は毎回テキストの1単元を消化していきます。前もって問題に目を通し、解らない語や語句に印をつけ、辞書で意味を確認する形の予習をして下さい。(1時間～2時間) 間違った箇所は重点的に復習をしましょう。又テキストのリスニング問題は無料でダウンロードできるので、リスニング問題の復習をしっかりと続けて下さい。(2時間～3時間)		
課題へのフィード バック	提出課題や小テストは次回の授業でコメントをつけ個別に返却します。		
教科書	TOEIC L & R Test: 500 Power Phrases 使える英語フレーズ500ではじめるTOEICテスト		
著者名	竹村 日出夫/永田 喜文/小田井 勝彦/大谷 多摩貴		
出版社	南雲堂		
参考書			
その他	第1回目の授業からテキストを使用します。遅刻・欠席をしないで、筆記用具も忘れず持参すること。		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	TOEIC対策ⅡA		
英訳科目名	Preparation for TOEICⅡA		
担当教員名	森川 康子		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	近年、多くの会社や企業がTOEICの試験を社員教育の一環として推奨するようになってきた。このクラスはTOEIC対策のための問題演習を行い、会社や、企業など社会の一員として求められるであろうTOEICのスコアを目指すとともに、限られた時間内に問題を解く処理能力、またその為に必要とされる英語力を身につけることを目標とする。		
到達目標	できる限り多くのTOEICの問題に触れ、その傾向と対策を学ぶことで、450点以上を取得できることを目標とする。		
授業計画	第1回 Pre-test 第2回 Pre-test Review 第3回 Unit1 and Unit2 第4回 Unit3 and Unit4 第5回 Unit5 and Unit6 第6回 Unit7 and Unit8 第7回 Unit9 and Unit10 第8回 Unit11 and Unit 12 第9回 Unit 13 and Unit 14 第10回 Post-test 第11回 Post-test Review 第12回 演習① 第13回 演習② 第14回 演習③ 第15回 学期末試験		
評価方法 (合計100%)	試験50% 問題演習への取り組み・課題提出など30% 授業への参加態度(参加状況)20% 20分以上の遅刻は欠席とする。 3回の遅刻を1回の欠席とする。		
失格条件	学期を通じて1/3以上欠席すると失格する。 学期末試験を受けなかった場合、失格とする。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	各ユニットに入る前に不明な英単語の意味を調べておくこと。また、文法、リーディングの問題はできる範囲で解いておき、不明な単語や分からない文章などをマークしておくこと。 (予習時間 1時間) 学んだユニットのリスニングを自習用CDで聞き返し、また、シャドーイングをしておく。 間違った文法、リーディングの問題を見直すこと。ポイントになる英語表現、難しいと感じた英単語などを書き出しておくこと。(復習時間 3時間)		
課題へのフィードバック	Comments will be made in class after submission and check of homework assignments. At times, it will be made on an individual basis.		
教科書	Power-up Practice for the TOEIC Listening and Reading Test		
著者名	Kazumichi Enokida,Satoshi Hiramoto,Simon Fraser		
出版社	Eihosha		
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

1-057

ナンバリング	期間	後期
授業科目名	TOEIC対策ⅡB	
英訳科目名	Preparation for TOEICⅡB	
担当教員名	相馬 沙織	
ディプロマ・ポリシー1	ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	資格英語ⅡAに続いて、後期はさらに難度の高いTOEICの問題に挑戦する。多様なシーンでの問題に触れるとともに、細かく文法・語彙の確認をする。テキスト以外にもプリントを使う。	
到達目標	前期で学んだTOEICの問題の傾向と対策を踏まえて、450点以上を取得することができる。	
授業計画	第1回 Introduction 第2回 Unit1 Food and Restaurant 第3回 Unit2 Entertainment 第4回 Unit3 Travel 第5回 Unit4 Sports & Health 第6回 Unit5 Purchasing 第7回 Unit6 Housing & Accommodations 第8回 Unit7 Office Work (1) 日常業務 第9回 Unit8 Office Work (2) クレーム処理 第10回 Unit9 Employment 第11回 Unit10 Lectures & Presentations 第12回 Unit11 Business Affairs 交渉 第13回 Unit12 Business Affairs 市場調査 第14回 Review 第15回 Final Exam (到達度確認テスト)	
評価方法 (合計100%)	試験50% 問題演習への取り組み・課題提出など30% 授業への参加態度(参加状況)20% 20分以上の遅刻は欠席とする。 3回の遅刻を1回の欠席とする。	
失格条件	学期を通じて1/3以上欠席すると失格する。 学期末試験を受けなかった場合、失格とする。	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	各ユニットに入る前に不明な英単語の意味を調べておくこと。また、文法、リーディングの問題はできる範囲で解いておき、不明な単語や分からない文章などをマークしておくこと。 (予習時間 1時間) 学んだユニットのリスニングを自習用CDで聞き返し、また、シャドーイングをしておく。 間違った文法、リーディングの問題を見直すこと。ポイントになる英語表現、難しいと感じた英単語などを書き出しておくこと。(復習時間 3時間)	
課題へのフィードバック	課題提出後、コメントをつけて個別に返却し、また、全体に向けコメントします。	
教科書	Fast Pass for the TOEIC L&R Test、Revised Edition	
著者名	Ritsuko Uenaka and Seiko Korechika	
出版社	センゲージラーニング株式会社	
参考書		
その他		
備考		
科目生への開講	なし	

1-058

ナンバリング	CC300A05	期間	前期
授業科目名	英会話 I		
英訳科目名	English Conversation I		
担当教員名	森川 康子		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	◎	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>The primary goal of this course is to develop students' communicative skills in English. The course covers the four primary skills of English: listening, speaking, reading and writing. Students will also learn the importance of eye-contact and facial and bodily expressions in intercultural communication.</p> <p>英語の4つの基本技能（聞く、話す、読む、書く）を学ぶ。また対話において、相手の目を見て話すことや、顔・身体で表現することの大切さを学ぶ。</p>		
到達目標	To develop students' communicative English skills.		
授業計画	<p>Lessons will proceed according to Units 1-10 of the textbook. There will be homework and writing assignments.</p> <p>教科書に沿って授業を進める。適宜、クイズや小テストを行う。</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>1)Class participation 授業への参加態度 30%</p> <p>2)Homework and essays 課題 50%</p> <p>3)Evaluation of achievement 到達度評価 20%</p>		
失格条件	<p>Absence from 8 or more classes will result in denial of credit. Students who are more than 20 minutes late are considered absent. Coming to class 1 to 20 minutes late is counted as "lateness". Three latenesses equal one absence.</p> <p>8回の欠席で失格となる。20分以上の遅刻は欠席とみなす。3回の遅刻は1回の欠席と計算する。</p>		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>Students should read the text aloud at least 5 times to familiarize themselves with the wording and sentence structure of the text. They are also recommended to make notes of vocabulary that might come in use when discussing the text or answering questions.</p> <p>If there is a sentence or phrase that is difficult to understand, the student should ask the teacher. (予習1時間・復習1時間)</p>		
課題へのフィード バック	Comments will be made in class after submission and check of homework assignments. At times, it will be made on an individual basis.		
教科書	Reading Pass 1		
著者名	Andrew Bennett		
出版社	Nan'un-do		
参考書	University-level dictionaries		
その他	<p>The class size is limited within 20. (20名以下限定のクラス) Students are expected to actively participate in class activities.</p> <p>If a student is absent, he/she must check with classmates as to the homework assignment and come to class prepared.</p> <p>All homework assignments must be handed in on the due date.</p>		
備考			
科目生への開講	あり		

1-059

ナンバリング	CC300A05	期間	前期
授業科目名	英会話 I		
英訳科目名	English Conversation I		
担当教員名	Alexander Morgus		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	◎	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	The course covers the four skills of English: listening, speaking, reading and writing. Students will also learn the importance of eye-contact and facial and bodily expressions in intercultural communication. 英語の4つの基本技能（聞く、話す、読む、書く）を学ぶ。また対話において、相手の目を見て話すことや、顔・身体で表現することの大切さを学ぶ。		
到達目標	The primary goal of this course is to develop students' communicative skills in English. この授業の第一の目標は、英語コミュニケーション能力を向上できることである。		
授業計画	Lessons will proceed according to the contents of the textbook. Occasionally there will be written quizzes and conversation tests. テキストの7ユニットを15回で終える予定なので、1ユニットを2週で終えることになる。適宜クイズや小テストを行う。 第1回 Introduction 第2～3回 Unit 1 第4～5回 Unit 2 第6～7回 Unit 3 第8～9回 Unit 4 第10～11回 Unit 5 第12～13回 Unit 6 第14回 Unit 7 第15回 Review Unit 1～7		
評価方法 (合計100%)	class participation	授業への参加態度	40%
	quizzes (conversation check)	クイズ	30%
	evaluation of achievement	到達度評価	30%
失格条件	Absence from 8 or more classes will result in denial of credit. Students who are more than 20 minutes late are considered absent. Coming to class 1 to 20 minutes late is counted as "lateness." Three latenesses equal one absence. 前期の授業のうち、8回もしくはそれ以上欠席したものは失格する。20分以上の遅刻は欠席と見なす。また3回の遅刻を1回の欠席と計算する。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	At home students should consult their dictionary and listen to the class CD as preparation. They should speak English with each other as much as possible during the lesson and after the lesson. At home they should listen to the CD and copy the pronunciation as a review. 予習として、知らない単語の意味を辞書で調べる。学習範囲のCDを聞いてくる。(1時間) 授業中はお互いのできるだけ英語で話す努力をすること。復習として、家でもCDを聞いて理解し、音をまね、発音練習をすること。(1時間)		
課題へのフィードバック	Homework and assignments will be returned with comments. 宿題や提出物はコメントをつけて返却します。		
教科書	TOP Notch: Fundamentals with Active Book (3rd edition)		
著者名	Joan Saelow and Allen Ascher		
出版社	ピアソン・ロングマン出版		
参考書	University-level dictionaries 大学レベルの英英、英和、和英辞書		
その他	Students are expected to actively participate in class activities. 積極的な授業参加を期待する。		
備考			
科目生への開講	あり		

1-060

ナンバリング	CC300A05	期間	前期
授業科目名	英会話 I		
英訳科目名	English Conversation I		
担当教員名	Jonathan MacNab		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	◎	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>The course covers the four skills of English: listening, speaking, reading and writing. Students will also learn the importance of eye-contact and facial and bodily expressions in intercultural communication.</p> <p>英語の4つの基本技能（聞く、話す、読む、書く）を学ぶ。また対話において、相手の目を見て話すことや、顔・身体で表現することの大切さを学ぶ。</p>		
到達目標	<p>The primary goal of this course is to develop students' communicative skills in English.</p> <p>この授業の第一の目標は、英語コミュニケーション能力を向上できることである。</p>		
授業計画	<p>Lessons will proceed according to the contents of the textbook. Occasionally there will be written quizzes and conversation tests. テキストの7ユニットを15週で終える予定なので、1ユニットを2週で終えることになる。適宜クイズや小テストを行う。</p> <p>第1回 Introduction 第2～3回 Unit 1 第4～5回 Unit 2 第6～7回 Unit 3 第8～9回 Unit 4 第10～11回 Unit 5 第12～13回 Unit 6 第14回 Unit 7 第15回 Review Unit 1～7</p>		
評価方法 (合計100%)	class participation	授業への参加態度	40%
	quizzes (conversation check)	クイズ	30%
	evaluation of achievement	到達度評価	30%
失格条件	<p>Absence from 8 or more classes will result in denial of credit. Students who are more than 20 minutes late are considered absent. Coming to class 1 to 20 minutes late is counted as "lateness." Three latenesses equal one absence.</p> <p>前期の授業のうち、8回もしくはそれ以上欠席したものは失格する。20分以上の遅刻は欠席と見なす。また3回の遅刻を1回の欠席と計算する。</p>		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>At home students should consult their dictionary and listen to the class CD as preparation. They should speak English with each other as much as possible during the lesson and after the lesson. At home they should listen to the CD and copy the pronunciation as a review.</p> <p>予習として、知らない単語の意味を辞書で調べる。学習範囲のCDを聞いてくる。(1時間) 授業中はお互いのできるだけ英語で話す努力をすること。復習として、家でもCDを聞いて理解し、音をまね、発音練習をすること。(1時間)</p>		
課題へのフィードバック	<p>Homework and assignments will be returned with comments.</p> <p>宿題や提出物はコメントをつけて返却します。</p>		
教科書	TOP Notch: Fundamentals with Active Book (3rd edition)		
著者名	Joan Saelow and Allen Ascher		
出版社	ピアソン・ロングマン出版		
参考書	University-level dictionaries 大学レベルの英英、英和、和英辞書		
その他	Students are expected to actively participate in class activities. 積極的な授業参加を期待する。		
備考			
科目生への開講	あり		

1-061

ナンバリング	CC300A05	期間	前期
授業科目名	英会話 I		
英訳科目名	English Conversation I		
担当教員名	Marcel Hurtado		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	◎	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>The course covers the four skills of English: listening, speaking, reading and writing. Students will also learn the importance of eye-contact and facial and bodily expressions in intercultural communication.</p> <p>英語の4つの基本技能（聞く、話す、読む、書く）を学ぶ。また対話において、相手の目を見て話すことや、顔・身体で表現することの大切さを学ぶ。</p>		
到達目標	<p>The primary goal of this course is to develop students' communicative skills in English.</p> <p>この授業の第一の目標は、英語コミュニケーション能力を向上できることである。</p>		
授業計画	<p>Lessons will proceed according to the contents of the textbook. Occasionally there will be written quizzes and conversation tests. テキストの7ユニットを15回で終える予定なので、1ユニットを2週で終えることになる。適宜クイズや小テストを行う。</p> <p>第1回 Introduction 第2～3回 Unit 1 第4～5回 Unit 2 第6～7回 Unit 3 第8～9回 Unit 4 第10～11回 Unit 5 第12～13回 Unit 6 第14回 Unit 7 第15回 Review Unit 1～7</p>		
評価方法 (合計100%)	class participation	授業への参加態度	40%
	quizzes (conversation check)	クイズ	30%
	evaluation of achievement	到達度評価	30%
失格条件	<p>Absence from 8 or more classes will result in denial of credit. Students who are more than 20 minutes late are considered absent. Coming to class 1 to 20 minutes late is counted as "lateness." Three latenesses equal one absence.</p> <p>前期の授業のうち、8回もしくはそれ以上欠席したものは失格する。20分以上の遅刻は欠席と見なす。また3回の遅刻を1回の欠席と計算する。</p>		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>At home students should consult their dictionary and listen to the class CD as preparation. They should speak English with each other as much as possible during the lesson and after the lesson. At home they should listen to the CD and copy the pronunciation as a review.</p> <p>予習として、知らない単語の意味を辞書で調べる。学習範囲のCDを聞いてくる。(1時間) 授業中はお互いのできるだけ英語で話す努力をすること。復習として、家でもCDを聞いて理解し、音をまね、発音練習をすること。(1時間)</p>		
課題へのフィードバック	<p>Homework and assignments will be returned with comments.</p> <p>宿題や提出物はコメントをつけて返却します。</p>		
教科書	TOP Notch: Fundamentals with Active Book (3rd edition)		
著者名	Joan Saelow and Allen Ascher		
出版社	ピアソン・ロングマン出版		
参考書	University-level dictionaries 大学レベルの英英、英和、和英辞書		
その他	Students are expected to actively participate in class activities. 積極的な授業参加を期待する。		
備考			
科目生への開講	あり		

1-062

ナンバリング	CC300A05	期間	前期
授業科目名	英会話 I		
英訳科目名	English Conversation I		
担当教員名	名和 月之介		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	◎	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	The course covers the four skills of English: listening, speaking, reading and writing. Students will also learn the importance of eye-contact and facial and bodily expressions in intercultural communication. 英語の4つの基本技能（聞く、話す、読む、書く）を学ぶ。また対話において、相手を見て話すことや、顔・身体で表現することの大切さを学ぶ。		
到達目標	The primary goal of this course is to develop students' communicative skills in English.この授業の第一の目標は、英語コミュニケーション能力を向上できることである。		
授業計画	Lessons will proceed according to the contents of the textbook. There will be quizzes. テキストの6ユニットを15回で終える予定なので、1ユニットを2回で終えることになる。随時クイズを行う。 第1回 Introduction 第2～3回 Unit 1 第4～5回 Unit 2 第6～7回 Unit 3 第8回 Review Unit 1～3 第9～10回 Unit 4 第11～12回 Unit 5 第13～14回 Unit 6 第15回 Review Unit 4～6		
評価方法 (合計100%)	class participation	授業への参加態度	40%
	quizzes	クイズ	40%
	evaluation of achievement	到達度評価	20%
失格条件	Absence from 8 or more classes will result in denial of credit. Students who are more than 20 minutes late are considered absent. Coming to class 1 to 20minutes late is counted as "lateness." Three latenesses equal one absence. 前期の授業のうち、8回もしくはそれ以上欠席したものは失格する。20分以上の遅刻は欠席とみなす。3回の遅刻は1回の欠席とみなす。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	At home students should consult their dictionary and listen to the class CD as preparation. (2hours) At home they should listen to the CD and copy the pronunciation as a review. (2hours) 予習として、知らない単語の意味を辞書で調べる。学習範囲のCDを聞いてくる。(2時間) 復習として、家でもCDを聞いて理解し、音をまね、発音練習をすること。(2時間)		
課題へのフィードバック	After the review test in class, all the students will be informed about it .授業内試験後、履修者全員に向けてコメントします。		
教科書	Four Corners Student' s Book 1		
著者名	Jack C. Richards・David Bohlke		
出版社	Cambridge University Press		
参考書	University-level dictionaries 大学レベルの英英、英和、和英辞書		
その他			
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	CC300A05	期間	前期
授業科目名	英会話 I		
英訳科目名	English Conversation I		
担当教員名	相馬 沙織		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	◎	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	The course covers the four skills of English: listening, speaking, reading and writing. Students will also learn the importance of eye-contact and facial and bodily expressions in intercultural communication. 英語の4つの基本技能(聞く、話す、読む、書く)を学ぶ。また対話において、相手の目を見て話すことや、顔・身体で表現することの大切さを学ぶ。		
到達目標	The primary goal of this course is to develop students' communicative skills in English. 授業の第一の目標は、英語コミュニケーション能力を向上できることである。		
授業計画	第1回 Unit 1 Introductions 第2回 Unit 1 Introductions: personal information 第3回 Unit 1 Introductions: short talk 第4回 Unit 2 Daily Life 第5回 Unit 2 Daily Life:routines 第6回 Unit 2 Daily Life:break fast 第7回 Unit 3 Weekend Events 第8回 Unit 3 Weekend Events:interests 第9回 Unit 3 Weekend Events:Favorites 第10回 Unit 4 Small Talk 第11回 Unit 4 Small Talk:Greeting 第12回 Unit 4 Small Talk:Part time 第13回 Unit 5 Likes and Dislikes 第14回 Unit 5 Likes and Dislikes:preferences 第15回 Unit 5 Likes and Dislikes:Activities 第16回 Unit 6 Student Life 第17回 Unit 6 Student Life:needs 第18回 Unit 6 Student Life:events 第19回 Unit 7 Family 第20回 Unit 7 Family:appearance 第21回 Unit 7 Family:future image 第22回 Unit 8 Friends 第23回 Unit 8 Friends:examples 第24回 Unit 8 Friends:personality 第25回 Unit 9 Going out 第26回 Unit 9 Going out:schedules 第27回 Unit 9 Going out:favorite places 第28回 Review: Unit 1~4 第29回 Review: Unit 5~9 第30回 Final Exam (到達度確認テスト)		
評価方法 (合計100%)	Class participation 授業への参加態度 30% Quizzes and Assignments 小テスト・課題 20% Evaluation of achievement 到達度評価 50%		
失格条件	Absences from 8 or more classes will result in denial of credit. Students who are more than 20 minutes late are considered absent. 8回またはそれ以上の欠席で失格となる。20分以上の遅刻は欠席とみなす。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	At home students should consult their dictionary and listen to the class CD as preparation. (2hours) At home they should listen to the CD and copy the pronunciation as a review. (2hours) 予習として、知らない意味の単語を辞書で調べ、学習範囲のCDを聞いてくること。(2時間) 復習として、自習用CDを聞いて発音を再度確認し、練習すること。(2時間)		
課題へのフィード バック	I will return students' homework individually and give comments to all the students in class. 課題提出後、コメントをつけて個別に返却し、また、全体に向けコメントします。		
教科書	Free Talking-Basic Strategies for Building Communication		
著者名	Matthew Guay/Lauren Eldekvist/長谷川 由貴		
出版社	センゲージラーニング株式会社		
参考書	University-level Dictionaries 大学レベルの英英、英和、和英辞書		
その他			
備考			
科目生への開講	あり		

1-064

ナンバリング	CC300B03	期間	後期
授業科目名	英会話Ⅱ		
英訳科目名	English Conversation Ⅱ		
担当教員名	森川 康子		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	◎	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>This course is the follow-up course of English Conversation I. This course will help students develop communicative skills in English. Since classes will be smaller than in the first semester, students are encouraged to participate in the class activities more actively than in the first semester.</p> <p>英語の4つの基本技能（聞く、話す、読む、書く）を学ぶ。また対話において、相手の目を見て話すことや、顔・身体で表現することの大切さを学ぶ。</p>		
到達目標	To develop students' communicative English skills.		
授業計画	<p>Lessons will proceed according to Units 11-20 of the textbook. Occasionally there will be written assignments and quizzes.</p> <p>教科書に沿って授業を進める。適宜、クイズや小テストを行う。</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>1)Class participation 授業への参加態度 30%</p> <p>2)Homework and essays 課題 50%</p> <p>3)Evaluation of achievement 到達度評価 20%</p>		
失格条件	<p>Absence from 8 or more classes will result in denial of credit. Students who are more than 20 minutes late are considered absent. Coming to class 1 to 20 minutes late is counted as "lateness". Three latenesses equal one absence.</p> <p>8回の欠席で失格となる。20分以上の遅刻は欠席とみなす。3回の遅刻は1回の欠席と計算する。</p>		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>Students should read the text aloud at least 5 times to familiarize themselves with the wording and sentence structure of the text. They are also recommended to make notes of vocabulary that might come in use when discussing the text or answering questions.</p> <p>If there is a sentence or phrase that is difficult to understand, the student should ask the teacher. (予習1時間・復習1時間)</p>		
課題へのフィード バック	Comments will be made in class after submission and check of homework assignments. At times, it will be made on an individual basis.		
教科書	Reading Pass 1		
著者名	Andrew Bennett		
出版社	Nan'un-do		
参考書	University-level dictionaries		
その他	<p>The class size is limited within 20. (20名以下限定のクラス) Students are expected to actively participate in class activities.</p> <p>If a student is absent, he/she must check with classmates as to the homework assignment and come to class prepared.</p> <p>All homework assignments must be handed in on the due date.</p>		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	CC300B03	期間	後期
授業科目名	英会話Ⅱ		
英訳科目名	English Conversation II		
担当教員名	Alexander Morgus		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	◎	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	The course covers the four skills of English: listening, speaking, reading and writing. Students will also learn the importance of eye-contact and facial and bodily expressions in intercultural communication. 英語の4つの基本技能（聞く、話す、読む、書く）を学ぶ。また対話において、相手の目を見て話すことや、顔・身体で表現することの大切さを学ぶ。		
到達目標	The primary goal of this course is to develop students' communicative skills in English. この授業の第一の目標は、英語コミュニケーション能力を向上できることである。		
授業計画	Lessons will proceed according to the contents of the textbook. Occasionally there will be written quizzes and conversation tests. テキストの7ユニットを15回で終える予定なので、1ユニットを2週で終えることになる。適宜クイズや小テストを行う。 第1～2回 Unit 8 第3～4回 Unit 9 第5～6回 Unit 10 第7～8回 Unit 11 第9～10回 Unit 12 第11～12回 Unit 13 第13～14回 Unit 14 第15回 Review Unit 8～14		
評価方法 (合計100%)	class participation	授業への参加態度	40%
	quizzes (conversation check)	クイズ	30%
	evaluation of achievement	到達度評価	30%
失格条件	Absence from 8 or more classes will result in denial of credit. Students who are more than 20 minutes late are considered absent. Coming to class 1 to 20 minutes late is counted as "lateness." Three latenesses equal one absence. 前期の授業のうち、8回もしくはそれ以上欠席したものは失格する。20分以上の遅刻は欠席と見なす。また3回の遅刻を1回の欠席と計算する。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	At home students should consult their dictionary and listen to the class CD as preparation. They should speak English with each other as much as possible during the lesson and after the lesson. At home they should listen to the CD and copy the pronunciation as a review. 予習として、知らない単語の意味を辞書で調べる。学習範囲のCDを聞いてくる。(1時間) 授業中はお互いのできるだけ英語で話す努力をすること。復習として、家でもCDを聞いて理解し、音をまね、発音練習をすること。(1時間)		
課題へのフィードバック	Homework and assignments will be returned with comments. 宿題や提出物はコメントをつけて返却します。		
教科書	Top Notch		
著者名	Joan Saeloe and Allen Ascher		
出版社	ピアソン・ロングマン出版		
参考書	University-level dictionaries 大学レベルの英英、英和、和英辞書		
その他	Students are expected to actively participate in class activities. 積極的な授業参加を期待する。		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	CC300B03	期間	後期
授業科目名	英会話Ⅱ		
英訳科目名	English Conversation II		
担当教員名	Jonathan MacNab		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	◎	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>The course covers the four skills of English: listening, speaking, reading and writing. Students will also learn the importance of eye-contact and facial and bodily expressions in intercultural communication.</p> <p>英語の4つの基本技能（聞く、話す、読む、書く）を学ぶ。また対話において、相手の目を見て話すことや、顔・身体で表現することの大切さを学ぶ。</p>		
到達目標	<p>The primary goal of this course is to develop students' communicative skills in English.</p> <p>この授業の第一の目標は、英語コミュニケーション能力を向上できることである。</p>		
授業計画	<p>Lessons will proceed according to the contents of the textbook. Occasionally there will be written quizzes and conversation tests. テキストの7ユニットを15回で終える予定なので、1ユニットを2週で終えることになる。適宜クイズや小テストを行う。</p> <p>第1～2回 Unit 8 第3～4回 Unit 9 第5～6回 Unit 10 第7～8回 Unit 11 第9～10回 Unit 12 第11～12回 Unit 13 第13～14回 Unit 14 第15回 Review Unit 8～14</p>		
評価方法 (合計100%)	class participation	授業への参加態度	40%
	quizzes (conversation check)	クイズ	30%
	evaluation of achievement	到達度評価	30%
失格条件	<p>Absence from 8 or more classes will result in denial of credit. Students who are more than 20 minutes late are considered absent. Coming to class 1 to 20 minutes late is counted as "lateness." Three latenesses equal one absence.</p> <p>前期の授業のうち、8回もしくはそれ以上欠席したものは失格する。20分以上の遅刻は欠席と見なす。また3回の遅刻を1回の欠席と計算する。</p>		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>At home students should consult their dictionary and listen to the class CD as preparation. They should speak English with each other as much as possible during the lesson and after the lesson. At home they should listen to the CD and copy the pronunciation as a review.</p> <p>予習として、知らない単語の意味を辞書で調べる。学習範囲のCDを聞いてくる。(1時間) 授業中はお互いのできるだけ英語で話す努力をすること。復習として、家でもCDを聞いて理解し、音をまね、発音練習をすること。(1時間)</p>		
課題へのフィードバック	<p>Homework and assignments will be returned with comments.</p> <p>宿題や提出物はコメントをつけて返却します。</p>		
教科書	Top Notch		
著者名	Joan Saeloe and Allen Ascher		
出版社	ピアソン・ロングマン出版		
参考書	<p>University-level dictionaries</p> <p>大学レベルの英英、英和、和英辞書</p>		
その他	<p>Students are expected to actively participate in class activities.</p> <p>積極的な授業参加を期待する。</p>		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	CC300B03	期間	後期
授業科目名	英会話Ⅱ		
英訳科目名	English Conversation II		
担当教員名	Marcel Hurtado		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	◎	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	The course covers the four skills of English: listening, speaking, reading and writing. Students will also learn the importance of eye-contact and facial and bodily expressions in intercultural communication. 英語の4つの基本技能（聞く、話す、読む、書く）を学ぶ。また対話において、相手の目を見て話すことや、顔・身体で表現することの大切さを学ぶ。		
到達目標	The primary goal of this course is to develop students' communicative skills in English. この授業の第一の目標は、英語コミュニケーション能力を向上できることである。		
授業計画	Lessons will proceed according to the contents of the textbook. Occasionally there will be written quizzes and conversation tests. テキストの7ユニットを15回で終える予定なので、1ユニットを2週で終えることになる。適宜クイズや小テストを行う。 第1～2回 Unit 8 第3～4回 Unit 9 第5～6回 Unit 10 第7～8回 Unit 11 第9～10回 Unit 12 第11～12回 Unit 13 第13～14回 Unit 14 第15回 Review Unit 8～14		
評価方法 (合計100%)	class participation	授業への参加態度	40%
	quizzes (conversation check)	クイズ	30%
	evaluation of achievement	到達度評価	30%
失格条件	Absence from 8 or more classes will result in denial of credit. Students who are more than 20 minutes late are considered absent. Coming to class 1 to 20 minutes late is counted as "lateness." Three latenesses equal one absence. 前期の授業のうち、8回もしくはそれ以上欠席したものは失格する。20分以上の遅刻は欠席と見なす。また3回の遅刻を1回の欠席と計算する。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	At home students should consult their dictionary and listen to the class CD as preparation. They should speak English with each other as much as possible during the lesson and after the lesson. At home they should listen to the CD and copy the pronunciation as a review. 予習として、知らない単語の意味を辞書で調べる。学習範囲のCDを聞いてくる。(1時間) 授業中はお互いのできるだけ英語で話す努力をすること。復習として、家でもCDを聞いて理解し、音をまね、発音練習をすること。(1時間)		
課題へのフィードバック	Homework and assignments will be returned with comments. 宿題や提出物はコメントをつけて返却します。		
教科書	Top Notch		
著者名	Joan Saeloe and Allen Ascher		
出版社	ピアソン・ロングマン出版		
参考書	University-level dictionaries 大学レベルの英英、英和、和英辞書		
その他	Students are expected to actively participate in class activities. 積極的な授業参加を期待する。		
備考			
科目生への開講	あり		

1-068

ナンバリング	CC300B03	期間	後期
授業科目名	英会話Ⅱ		
英訳科目名	English Conversation II		
担当教員名	名和 月之介		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	◎	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>The course covers the four skills of English: listening, speaking, reading and writing. Students will also learn the importance of eye-contact and facial and bodily expressions in intercultural communication.</p> <p>英語の4つの基本技能（聞く、話す、読む、書く）を学ぶ。また対話において、相手を見て話すことや、顔・身体で表現することの大切さを学ぶ。</p>		
到達目標	<p>The primary goal of this course is to develop students' communicative skills in English.この授業の第一の目標は、英語コミュニケーション能力を向上できることである。</p>		
授業計画	<p>Lessons will proceed according to the contents of the textbook. There will be quizzes.</p> <p>テキストの6ユニットを15回で終える予定なので、1ユニットを2回で終えることになる。随時クイズを行う。</p> <p>第1回 Introduction 第2～3回 Unit 7 第4～5回 Unit 8 第6～7回 Unit 9 第8回 Review Unit 7～9 第9～10回 Unit 10 第11～12回 Unit 11 第13～14回 Unit 12 第15回 Review Unit 10～12</p>		
評価方法 (合計100%)	class participation	授業への参加態度	40%
	quizzes	クイズ	40%
	evaluation of achievement	到達度評価	20%
失格条件	<p>Absence from 8 or more classes will result in denial of credit. Students who are more than 20 minutes late are considered absent. Coming to class 1 to 20 minutes late is counted as "lateness." Three latenesses equal one absence.</p> <p>前期の授業のうち、8回もしくはそれ以上欠席したものは失格する。20分以上の遅刻は欠席と見なす。また3回の遅刻を1回の欠席と計算する。</p>		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>At home students should consult their dictionary and listen to the class CD as preparation. (2hours) At home they should listen to the CD and copy the pronunciation as a review. (2hours)</p> <p>予習として、知らない単語の意味を辞書で調べる。学習範囲のCDを聞いてくる。(2時間)</p> <p>復習として、家でもCDを聞いて理解し、音をまね、発音練習をすること。(2時間)</p>		
課題へのフィードバック	<p>After the review test in class, all the students will be informed about it.</p> <p>授業内テスト終了後、全体に向けてコメントします。</p>		
教科書	Four Corners Student's Book 1		
著者名	Jack C. Richards ・ David Bohlke		
出版社	Cambridge University Press		
参考書	University-level dictionaries 大学レベルの英英、英和、和英辞書		
その他			
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	CC300B03	期間	後期
授業科目名	英会話Ⅱ		
英訳科目名	English ConversationⅡ		
担当教員名	相馬 沙織		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	◎	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	The course covers the four skills of English: listening, speaking, reading and writing. Students will also learn the importance of eye-contact and facial and bodily expressions in intercultural communication. 英語の4つの基本技能(聞く、話す、読む、書く)を学ぶ。また対話において、相手の目を見て話すことや、顔・身体で表現することの大切さを学ぶ。		
到達目標	The primary goal of this course is to develop students' communicative skills in English. 授業の第一の目標は、英語コミュニケーション能力を向上させることである。		
授業計画	第1回 Unit 10.Restaurants 第2回 Unit 10.Restaurants:Ordering 第3回 Unit 10.Restaurants:Short talk 第4回 Unit 11.Shopping 第5回 Unit 11.Shopping:Shopping places 第6回 Unit 11.Shopping:Opinions 第7回 Unit 12.Strengths and weaknesses 第8回 Unit 12.Strengths and weaknesses:abilities 第9回 Unit 12.Strengths and weaknesses:Personal skills 第10回 Unit 13.Places 第11回 Unit 13.Places:features 第12回 Unit 13.Places:Hometown 第13回 Unit 14.Vacations 第14回 Unit 14.Vacations:travel plans 第15回 Unit 14.Vacations:plans 第16回 Unit 15.Experiences 第17回 Unit 15.Experiences:feelings 第18回 Unit 15.Experiences:Memories 第19回 Unit 16.Opinions 第20回 Unit 16.Opinions:comparisons 第21回 Unit 16.Opinions:relax 第22回 Unit 17.Health and Illness 第23回 Unit 17.Health and Illness:health problems 第24回 Unit 17.Health and Illness:habits 第25回 Unit 18.The Future 第26回 Unit 18.The Future:Dreams 第27回 Unit 18.The Future:Future plans 第28回 Review Unit 10~14 第29回 Review Unit 15~18 第30回 Final Exam (到達度確認テスト)		
評価方法 (合計100%)	Class participation 授業への参加態度 30% Quizzes and Assignments 小テスト・課題 20% Evaluation of achievement 到達度評価 50%		
失格条件	Absences from 8 or more classes will result in denial of credit. Students who are more than 20 minutes late are considered absent. 8回またはそれ以上の欠席で失格となる。20分以上の遅刻は欠席とみなす。		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	At home students should consult their dictionary and listen to the class CD as preparation. (2hours) At home they should listen to the CD and copy the pronunciation as a review. (2hours) 予習として、知らない意味の単語を辞書で調べ、学習範囲のCDを聞いてくること。(2時間) 復習として、自習用CDを聞いて発音を再度確認し、練習すること。(2時間)		
課題へのフィード バック	I will return students' homework individually and give comments to all the students in class. 課題提出後、コメントをつけて個別に返却し、また、全体に向けコメントします。		
教科書	Free Talking-Basic Strategies for Building Communication		
著者名	Matthew Guay、Lauren Eldevkist、長谷川由貴		
出版社	センゲージラーニング株式会社		
参考書	University-level Dictionaries 大学レベルの英英、英和、和英辞書		
その他			
備考			
科目生への開講	あり		

1-070

ナンバリング	CC300A06	期間	前期
授業科目名	英語 I		
英訳科目名	English I		
担当教員名	飯盛 康史		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	◎	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	主にTOEICテスト対策を目的とした教材を用いて、TOEIC試験に主眼を置いた授業を行う。ただ講義を行うだけでなく実際に文を読み上げる、訳を行うなどの内容も取り入れ、総合的な英語力の養成を目的とする。		
到達目標	TOEICテスト350程度の英語力を身につけ、日常的な英語の文章やスピーチに対応できる。		
授業計画	<p>第1回 インTRODクション 授業の説明を行います。履修者は必ず出席してください。</p> <p>第2回 Unit 1前半</p> <p>第3回 Unit 1後半</p> <p>第4回 Unit 2前半</p> <p>第5回 Unit 2後半</p> <p>第6回 Unit 3前半</p> <p>第7回 Unit 3後半</p> <p>第8回 Unit 4前半</p> <p>第9回 Unit 4後半</p> <p>第10回 Unit 5前半</p> <p>第11回 Unit 5後半</p> <p>第12回 Unit 6前半</p> <p>第13回 Unit 6後半</p> <p>第14回 Unit 7前半</p> <p>第15回 Unit 7後半</p> <p>第16回 Unit 8前半</p> <p>第17回 Unit 8後半</p> <p>第18回 Unit 9前半</p> <p>第19回 Unit 9後半</p> <p>第20回 Unit 10前半</p> <p>第21回 Unit 10後半</p> <p>第22回 Unit 11前半</p> <p>第23回 Unit 11後半</p> <p>第24回 Unit 12前半</p> <p>第25回 Unit 12後半</p> <p>第26回 Unit 13前半</p> <p>第27回 Unit 13後半</p> <p>第28回 Unit 14前半</p> <p>第29回 Unit 14後半</p> <p>第30回 前期内容のまとめ</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>試験 60%</p> <p>小テスト (毎回、単語テストを実施します) 20%</p> <p>課題 (その回の内容に関連した課題を課します) 20%</p>		
失格条件	8回以上の理由なき欠席、および試験を受けないものは失格となります。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>毎回、辞書で分からない単語は調べておくなどの準備が必要です。(予習目安：1時間)</p> <p>また、章が終わっても必ず問題を復習する必要があります。特にリスニングに関しては授業で一度聞いただけで学習できるものではありませんので、指定のサイトより音声ダウンロードし、復習するようにしてください。(復習目安：3時間)</p>		
課題へのフィード バック	試験終了後、全体に向けてコメントします。		
教科書	SUCCESSFUL KEYS TO THE TOEIC TEST INTRO		
著者名	水本篤・Mark D. Stafford		
出版社	桐原書店		
参考書			
その他	原則として、20名以下の限定クラスとする。 TOEIC学内団体試験を必ず受験すること。		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	CC300A06	期間	前期
授業科目名	英語 I		
英訳科目名	English I		
担当教員名	野口 昌子		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	◎	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	英文法の基礎を固め、英語でのコミュニケーション能力の向上を目的とします。練習問題だけでなく、パラグラフリーディングも取り入れ読解力の向上も目指します。		
到達目標	基礎的な英文法が理解でき、表現を正しく使うことができる。 パラグラフリーディングに慣れ、内容をよりよく読みとれることができる。		
授業計画	第1回 オリエンテーション 履修者は必ず出席してください 第2回 Unit 1 名詞 前半 第3回 Unit 1 名詞 後半 第4回 Unit 2 冠詞 前半 第5回 Unit 2 冠詞 後半 第6回 Unit 3 代名詞 (1)前半 第7回 Unit 3 代名詞 (1)後半 第8回 Unit 4 代名詞 (2)前半 第9回 Unit 4 代名詞 (2)後半 第10回 Unit 5 時制 前半 第11回 Unit 5 時制 後半 第12回 Unit 6 進行形 前半 第13回 Unit 6 進行形 後半 第14回 Unit 1～Unit 6 復習 第15回 Unit 7 完了形 (1)前半 第16回 Unit 7 完了形 (1)後半 第17回 Unit 8 完了形 (2)前半 第18回 Unit 8 完了形 (2)後半 第19回 Unit 9 助動詞 (1)前半 第20回 Unit 9 助動詞 (1)後半 第21回 Unit 10 助動詞 (2)前半 第22回 Unit 10 助動詞 (2)後半 第23回 Unit 11 態 (1)前半 第24回 Unit 11 態 (1)後半 第25回 Unit 12 態 (2)前半 第26回 Unit 12 態 (2)後半 第27回 Unit 13 不定詞 (1)前半 第28回 Unit 13 不定詞 (1)後半 第29回 Unit 7～Unit 13の復習 第30回 前期のまとめ 達成度の確認		
評価方法 (合計100%)	試験 50% 提出課題・小テスト 20% 授業への参加態度・内容 30%		
失格条件	8回を超える欠席をした場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	毎回、辞書で分からない単語は調べておくなどの準備が必要です。(予習目安：1時間) 授業の後は必ず問題を復習し、間違えたり解らなかつたところはそのままにせず、しっかり確認し直します。パラグラフは読み誤りがないか注意して、ゆっくり読み直します。(復習目安：3時間)		
課題へのフィード バック	提出課題や小テストは、次回の授業でコメントをつけて個別に返却します。		
教科書	Fundamental English Grammar with Short Readings 読解力につなげるコア英文法		
著者名	福井 慶一郎/山中 マーガレット/北山 長貴		
出版社	朝日出版社		
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	CC300A06	期間	前期
授業科目名	英語 I		
英訳科目名	English I		
担当教員名	西垣 有夏		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	◎	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	本授業ではテキスト中心に授業を進めていくが、英検やTOEICといった検定試験についても解説する。テキスト本文の重要単語・熟語を用いた英作文に取り組むことで語彙を増やし、文法説明を取り入れながら精読することによって正確に英文を読み進める実力を養う。語学には反復学習が欠かせないので定期的に復習する。		
到達目標	1.文法事項の理解、語彙を確認して英文構造を把握し、英文を正しく読み進めることができる。 2.英単語についてはそれらの意味の理解にとどまらず、単語を利用して英作文ができる。		
授業計画	以下に授業計画を記すが、学生の理解度によって変更する可能性があるなのでその都度担当者の指示を聞くように。 第1回 Unit1:From Outer Space, To Your Space—Keywords and Keyphrases 第2回 Unit1:From Outer Space, To Your Space—Writing 第3回 Unit1:From Outer Space, To Your Space—Reading 第4回 Unit1:From Outer Space, To Your Space—Exercises 第5回 Unit2:Injuries Hurt Football's Popularity—Keywords and Keyphrases 第6回 Unit2:Injuries Hurt Football's Popularity—Writing 第7回 Unit2:Injuries Hurt Football's Popularity—Reading 第8回 Unit2:Injuries Hurt Football's Popularity—Exercises 第9回 Unit3:Gaining Popularity Fast—Keywords and Keyphrases 第10回 Unit3:Gaining Popularity Fast—Writing 第11回 Unit3:Gaining Popularity Fast—Reading 第12回 Unit3:Gaining Popularity Fast—Exercises 第13回 Unit4:The Klondike Gold Rush—Keywords and Keyphrases 第14回 Unit4:The Klondike Gold Rush—Writing 第15回 Unit4:The Klondike Gold Rush—Reading 第16回 Unit4:The Klondike Gold Rush—Exercises 第17回 Unit1～Unit4までの復習 第18回 Unit5:Are You Shy?—Keywords and Keyphrases 第19回 Unit5:Are You Shy?—Writing 第20回 Unit5:Are You Shy?—Reading 第21回 Unit5:Are You Shy?—Exercises 第22回 Unit6:Pet Profits—Keywords and Keyphrases 第23回 Unit6:Pet Profits—Writing 第24回 Unit6:Pet Profits —Reading 第25回 Unit6:Pet Profits—Exercises 第26回 Unit7:Eating the Mediterranean Way—Keywords and Keyphrases 第27回 Unit7:Eating the Mediterranean Way—Writing 第28回 Unit7:Eating the Mediterranean Way—Reading 第29回 Unit7:Eating the Mediterranean Way—Exercises 第30回 Unit5～Unit7までの復習、期末試験の説明		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度15%、課題プリント25%、定期試験60%		
失格条件	欠席8回で失格、なお遅刻3回で欠席1回とカウントする。遅刻は授業開始30分以内、それ以降は欠席とする。なお、クラブの公式戦、教育実習、その他やむを得ない事情があると判明できる場合は証明書提出で公欠とする。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	毎回授業終了時に次回の授業について説明するのであらかじめ辞書で単語を調べて読んでおくこと。(予習時間1時間) 復習を兼ねた課題プリントを配布するので次回の授業時に仕上げ提出すること。また、課題プリントを仕上げることだけに専念せず、授業で読んだテキストの箇所を読み直しておくこと。(復習時間3時間)		
課題へのフィード バック	毎回の授業で、その時間で行った授業内容に関する復習を兼ねた課題プリントを配布し、次の時間に提出してもらおう。課題プリントはチェックはもちろん、一人ひとりにコメントを記入して返却する。		
教科書	Comprehensive Reading: Getting Key Skills through 15 Topics		
著者名	Tom Dillon, Michael Schauerte, Koji Nishiya		
出版社	音羽書房鶴見書店		
参考書	必ず授業では英和辞典を持ってくること。		
その他	TOEICや英検などの資格に関心のある学生は個別に相談に応じる。各種英語関係の検定試験の公式問題集や過去問題集は各自で購入すること。テキスト中心で授業を進めるが、合間に資格検定についての説明も取り入れる。		
備考			
科目生への開講	あり		

1-073

ナンバリング	CC300B04	期間	後期
授業科目名	英語Ⅱ		
英訳科目名	EnglishⅡ		
担当教員名	飯盛 康史		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	◎	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	前期よりやや高度のテキストを用い、TOEIC試験に主眼を置いた授業を行う。ただ講義を行うだけでなく実際に文を読み上げる、訳を行うなどの内容も取り入れ、総合的な英語力の養成を目的とする。		
到達目標	TOEICテスト400程度の英語力を身につけ、日常的な英語の文章やスピーチに対応できる。		
授業計画	<p>第1回 インTRODakション 授業の説明を行います。履修者は必ず出席してください。</p> <p>第2回 Unit 1前半</p> <p>第3回 Unit 1後半</p> <p>第4回 Unit 2前半</p> <p>第5回 Unit 2後半</p> <p>第6回 Unit 3前半</p> <p>第7回 Unit 3後半</p> <p>第8回 Unit 4前半</p> <p>第9回 Unit 4後半</p> <p>第10回 Unit 5前半</p> <p>第11回 Unit 5後半</p> <p>第12回 Unit 6前半</p> <p>第13回 Unit 6後半</p> <p>第14回 Unit 7前半</p> <p>第15回 Unit 7後半</p> <p>第16回 Unit 8前半</p> <p>第17回 Unit 8後半</p> <p>第18回 Unit 9前半</p> <p>第19回 Unit 9後半</p> <p>第20回 Unit 10前半</p> <p>第21回 Unit 10後半</p> <p>第22回 Unit 11前半</p> <p>第23回 Unit 11後半</p> <p>第24回 Unit 12前半</p> <p>第25回 Unit 12後半</p> <p>第26回 Unit 13前半</p> <p>第27回 Unit 13後半</p> <p>第28回 Unit 14前半</p> <p>第29回 Unit 14後半</p> <p>第30回 後期内容のまとめ</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>試験 60%</p> <p>小テスト (毎回、単語テストを実施します) 20%</p> <p>課題 (その回の内容に関連した課題を課します) 20%</p>		
失格条件	8回以上の理由なき欠席、および試験を受けないものは失格となります。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>毎回、辞書で分からない単語は調べておくなどの準備が必要です。(予習目安：1時間)</p> <p>また、章が終わっても必ず問題を復習する必要があります。特にリスニングに関しては授業で一度聞いただけで学習できるものではありませんので、指定のサイトより音声ダウンロードし、復習するようにしてください。(復習目安：3時間)</p>		
課題へのフィード バック	試験終了後、全体に向けてコメントします。		
教科書	SUCCESSFUL KEYS TO THE TOEIC TEST 1 Goal 500		
著者名	水本篤・Mark D. Stafford		
出版社	桐原書店		
参考書			
その他	原則として、20名以下の限定クラスとする。 TOEIC学内団体試験を必ず受験すること。		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	CC300B04	期間	後期
授業科目名	英語Ⅱ		
英訳科目名	EnglishⅡ		
担当教員名	野口 昌子		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	◎	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	英文法の基礎を固め、英語でのコミュニケーション能力の向上を目的とします。練習問題だけでなく、パラグラフリーディングも取り入れ読解力の向上も目指します。		
到達目標	基礎的な英文法が理解でき、表現を正しく使うことができる。 パラグラフリーディングに慣れ、内容をよりよく読みとれることができる。		
授業計画	第1回 オリエンテーション Unit 1～Unit 13の復習 第2回 Unit 14 不定詞 (2)前半 第3回 Unit 14 不定詞 (2)後半 第4回 Unit 15 分詞 (1)前半 第5回 Unit 15 分詞 (1)後半 第6回 Unit 16 分詞 (2)前半 第7回 Unit 16 分詞 (2)後半 第8回 Unit 17 動名詞 (1)前半 第9回 Unit 17 動名詞 (1)後半 第10回 Unit 18 動名詞 (2)前半 第11回 Unit 18 動名詞 (2)後半 第12回 Unit 19 形容詞・副詞 前半 第13回 Unit 19 形容詞・副詞 後半 第14回 Unit 14～Unit 19 復習 第15回 Unit 20 比較 (1)前半 第16回 Unit 20 比較 (1)後半 第17回 Unit 21 比較 (2)前半 第18回 Unit 21 比較 (2)後半 第19回 Unit 22 前置詞 前半 第20回 Unit 22 前置詞 後半 第21回 Unit 23 関係詞 (1)前半 第22回 Unit 23 関係詞 (1)後半 第23回 Unit 24 関係詞 (2)前半 第24回 Unit 24 関係詞 (2)後半 第25回 Unit 25 仮定法 (1)前半 第26回 Unit 25 仮定法 (1)後半 第27回 Unit 26 仮定法 (2)前半 第28回 Unit 26 仮定法 (2)後半 第29回 Unit 20～Unit 26の復習 第30回 後期のまとめ 達成度の確認		
評価方法 (合計100%)	試験 50% 提出課題・小テスト 20% 授業への参加態度・内容 30%		
失格条件	8回を超える欠席をした場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	毎回、辞書で分からない単語は調べておくなどの準備が必要です。(予習目安：1時間) 授業の後は必ず問題を復習し、間違えたり解らなかつたところはそのままにせず、しっかり確認し直します。パラグラフは読み誤りがないか注意して、ゆっくり読み直します。(復習目安：3時間)		
課題へのフィードバック	提出課題や小テストは、次回の授業でコメントをつけて個別に返却します。		
教科書	Fundamental English Grammar with Short Readings 読解力につなげるコア英文法		
著者名	福井 慶一郎/山中 マーガレット/北山 長貴		
出版社	朝日出版社		
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	CC300B04	期間	後期
授業科目名	英語Ⅱ		
英訳科目名	EnglishⅡ		
担当教員名	西垣 有夏		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	◎	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	基本的に授業運営は前期開講の英語Ⅰ(3)と同様だが、本授業では精読だけでなく多読にも力を入れるので授業ペースは英語Ⅰ(3)より速くなる。英文を正確に読み進める実力を養う。語学には反復学習が肝心なので定期的に復習する。		
到達目標	1.多読を通じて英文を正確に読むことができる。 2.英単語・熟語についてはそれらの意味の理解にとどまらず、その語句を利用して英作ができる。		
授業計画	以下に授業計画を記すが、学生の理解度によって変更する可能性があるなのでその都度担当者の指示を聞くように。 第1回 Unit8:New York as Artistic Hub—Reading 第2回 Unit8:New York as Artistic Hub—Exercises 第3回 Unit8:New York as Artistic Hub—Writing 第4回 Unit9:John Dillinger, Public Enemy No.1—Reading 第5回 Unit9:John Dillinger, Public Enemy No.1—Exercises 第6回 Unit9:John Dillinger, Public Enemy No.1—Writing 第7回 Unit8, 9の復習 第8回 Unit10:The Attraction of Kealakekua Bay—Reading 第9回 Unit10:The Attraction of Kealakekua Bay—Exercises 第10回 Unit10:The Attraction of Kealakekua Bay—Writing 第11回 Unit11:Cyber-Bullying—Reading 第12回 Unit11:Cyber-Bullying—Exercises 第13回 Unit11:Cyber-Bullying—Writing 第14回 Unit10,11の復習 第15回 Unit8～Unit11までの復習 第16回 Unit12:A Job for Fast Talkers and Fast Thinkers—Reading 第17回 Unit12:A Job for Fast Talkers and Fast Thinkers—Exercises 第18回 Unit12:A Job for Fast Talkers and Fast Thinkers—Writing 第19回 Unit13:Graphic Novels—Reading 第20回 Unit13:Graphic Novels—Exercises 第21回 Unit13:Graphic Novels—Writing 第22回 Unit12,13の復習 第23回 Unit14:Canal Houses—Reading 第24回 Unit14:Canal Houses—Exercises 第25回 Unit14:Canal Houses—Writing 第26回 Unit15:Road Rage—Reading 第27回 Unit15:Road Rage—Exercises 第28回 Unit15:Road Rage—Writing 第29回 Unit14,15の復習 第30回 Unit12～Unit15の復習、期末試験の説明		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度15%、課題プリント25%、定期試験60%		
失格条件	欠席8回で失格、なお遅刻3回で欠席1回とカウントする。遅刻は授業開始30分以内、それ以降は欠席とする。なお、クラブの公式戦、教育実習、その他やむを得ない事情があると判明できる場合は証明書提出で公欠とする。		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	毎回授業終了時に次回の授業について説明するのであらかじめ辞書で単語を調べて読んでおくこと。(予習時間1時間) 復習を兼ねた課題プリントを配布するので次回の授業時に仕上げ提出すること。また、課題プリントを仕上げることだけに専念せず、授業で読んだテキストの箇所を読み直しておくこと。(復習時間3時間)		
課題へのフィード バック	毎回の授業で、その時間で行った授業内容に関する復習を兼ねた課題プリントを配布し、次の時間に提出してもらう。課題プリントはチェックはもちろん、一人ひとりにコメントを記入して返却する。		
教科書	Comprehensive Reading: Getting Key Skills through 15 Topics		
著者名	Tom Dillon, Michael Schauerte, Koji Nishiya		
出版社	音羽書房鶴見書店		
参考書	必ず授業では英和辞典を持ってくること。		
その他	TOEICや英検などの資格に関心のある学生は個別に相談に応じる。各種英語関係の検定試験の公式問題集や過去問題集は各自で購入すること。テキスト中心で授業を進めるが、合間に資格検定についての説明も取り入れる。		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	CC300A07	期間	前期
授業科目名	ドイツ語 I		
英訳科目名	German I		
担当教員名	田島 昭洋		
ディプロマ・ポリシー-1		ディプロマ・ポリシー-2	
ディプロマ・ポリシー-3	◎	ディプロマ・ポリシー-4	
ディプロマ・ポリシー-5		ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	本科目は、ドイツ語を初めて学習する学生に向けられたものである。基本的な文法をもとに、ドイツ語理解（読解、聴解）、ドイツ語表現（会話、作文）をバランスよく学び、ドイツ語能力の基礎を身につけ、それによりまた、自国の客観的な理解を深めていくことを目標とする。授業は、教科書（および補助プリント）を中心として進む。合わせて、視聴覚教材（CDやDVD）を用いたり担当者の体験談や拙唱をこころみたりしながら、音楽や演劇、映画、文学、食文化などに広く触れることをとおして感覚的により深く、語学学習にとどまらないドイツ語圏の文化と社会を学ぶ。		
到達目標	1.読解、聴解において初歩的な文章を大まかに理解できるようにする。 2.会話と作文において動詞の現在形を使って基礎的なコミュニケーションがはかれるようにする。 3.ドイツ語圏の文化と社会についての知識を深める。		
授業計画	第1回 ガイダンスとアンケート、ドイツ語の紹介 第2回 文字と発音、あいさつ 第3回 人称の種類 第4回 動詞の現在人称変化① 第5回 性の前につける敬称 第6回 決定疑問文 第7回 理解度の確認 第8回 名詞の性 第9回 冠詞と名詞の格変化 第10回 duとSieの使い分け 第11回 人称代名詞の格変化 第12回 理解度の確認 第13回 不定冠詞 第14回 所有冠詞 第15回 動詞の現在人称変化② 第16回 理解度の確認 第17回 名詞の複数形 第18回 命令形① 第19回 否定表現 第20回 理解度の確認 第21回 命令形② 第22回 前置詞 第23回 zu不定詞 第24回 否定冠詞kein 第25回 理解度の確認 第26回 形容詞① 第27回 形容詞② 第28回 形容詞③ 第29回 理解度の確認 第30回 到達度の確認		
評価方法 (合計100%)	本授業の意義を理解し、習熟度（学習内容の理解度と到達度）、積極性（授業への参加度、自主的な発表など）を担当者が総合的に判断する。 授業参加態度（出席と参加の度合）：40% 到達度（試験）：30% 理解度（小テスト、課題提出、発表）：30%		
失格条件	(次のいずれかに該当すれば失格となるので注意されたい) 1.出席回数が3分の2以上に満たない場合 2.欠席が連続3回になった場合 30分以上の遅刻は欠席とし、30分までの遅刻は3回で1回の欠席とする。 (公共交通機関の遅延や演奏会出演などやむをえない特別な場合を除く。交通機関の遅延の場合は教室に入り次第その旨報告すること。演奏会出演の場合は事前に連絡を入れること。) 3.授業の理解度と到達度の確認ができなかった場合（小テストと試験の欠席者）		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	初めて学ぶ外国語は感覚が身に付くまでに時間と努力を要します。準備学習においては予習よりも復習に力を入れることが大事です。（予習・復習を合わせて2時間）		
課題へのフィード バック	・準備学習用課題については、必要に応じて個別もしくは全体にコメントします。 ・小テストは授業時間内に返却し、解説します。 ・授業内での個別発表の取り組みに対して個別にコメントします。		
教科書	楽しいドイツ語の旅 ― ベア練習で学ぶ初級ドイツ語 ―		
著者名	神竹道士・田島昭洋		
出版社	朝日出版社		
参考書	第1回授業時に「すすめる辞書」（とあまりお勧めしない辞書）を紹介します。特に指定した辞書ではなくてもかまわないが、独和辞典は必携なので、各自、毎回用意しておくように。 辞書と教科書を含めた準備物（プリントなど）に関しては、最初のガイダンスで説明します。		
その他	ドイツ語は学習初期に覚える規則が多い言語です。その規則はその後新しい言葉のきまり（文法）を学習するたびに应用でき、面白くなってきます。とりわけ「基礎」を大事にして、前進しながらもくりかえし基本に立ちかえることを心がけましょう。		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	CC300B05	期間	後期
授業科目名	ドイツ語Ⅱ		
英訳科目名	GermanⅡ		
担当教員名	田島 昭洋		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	◎	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>本科目は、ドイツ語Ⅰの単位取得者に向けられたものである。基本的な文法をもとに、ドイツ語理解（読解、聴解）、ドイツ語表現（会話、作文）をバランスよく学び、日常生活に必要なドイツ語能力の基礎を身につけることを目標とする。授業は、教科書（および補助プリント）を中心として進む。合わせて、視聴覚教材（CDやDVD）を用いたり担当者の体験談や拙唱をこころみたりしながら、音楽や演劇、映画、文学、食文化、（本場と言われるドイツの）クリスマスに広く触れることをとおして感覚的により深く、語学学習にとどまらないドイツ語圏の文化と社会を学ぶ。</p>		
到達目標	<p>1.読解、聴解において平易な文章を大まかに理解できるようにする。 2.会話と作文において基礎的なコミュニケーションがはかれるようにする。 3.上記1.2を踏まえて、ドイツ語圏で（一人でも）旅行と生活ができるドイツ語運用能力を目指し、異文化理解を養う。</p>		
授業計画	<p>第1回 前期の復習① 第2回 理解度の確認 第3回 前期の復習② 第4回 理解度の確認 第5回 比較表現 第6回 語順 第7回 理解度の確認 第8回 話法の助動詞 第9回 従属接続詞① 第10回 分離動詞 第11回 理解度の確認 第12回 動詞の3基本形 第13回 過去形 第14回 従属接続詞② 第15回 理解度の確認 第16回 現在完了形① 第17回 現在完了形② 第18回 再帰動詞 第19回 理解度の確認 第20回 関係代名詞 第21回 関係代名詞と指示代名詞 第22回 理解度の確認 第23回 受動文 第24回 理解度の確認 第25回 接続法第1式 第26回 理解度の確認 第27回 接続法第2式① 第28回 接続法第2式② 第29回 理解度の確認 第30回 到達度の確認</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>本授業の意義を理解し、習熟度（学習内容の理解度と到達度）、積極性（授業への参加度、自主的な発表など）を担当者が総合的に判断する。 授業参加態度（参加状況）：40% 到達度（試験）：30% 理解度（小テスト、課題提出、発表）：30%</p>		
失格条件	<p>（次のいずれかに該当すれば失格となるので注意されたい） 1.出席回数が3分の2以上に満たない場合 2.欠席が連続3回になった場合 30分以上の遅刻は欠席とし、30分までの遅刻は3回で1回の欠席とする。 （公共交通機関の遅延や演奏会出演などやむをえない特別な場合を除く。交通機関の遅延の場合は教室に入り次第その旨報告すること。演奏会出演の場合は事前に連絡を入れること。） 3.授業の理解度と到達度の確認ができなかった場合（小テストと試験の欠席者）</p>		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>初めて学ぶ外国語は感覚が身に付くまでに時間と努力を要します。準備学習においては予習よりも復習に力を入れることが大事です。（予習・復習を合わせて2時間）</p>		
課題へのフィード バック	<ul style="list-style-type: none"> ・準備学習用課題については、必要に応じて個別もしくは全体にコメントします。 ・小テストは授業時間内に返却し、解説します。 ・授業内での個別発表の取り組みに対して個別にコメントします。 		
教科書	楽しいドイツ語の旅 ― ペア練習で学ぶ初級ドイツ語 ―		
著者名	神竹道士・田島昭洋		
出版社	朝日出版社		
参考書	独和辞典、教科書は授業に必ず持ってくること。		
その他	ドイツ語は学習初期に覚える規則が多い言語であり、ドイツ語Ⅰで学んだ規則はその後新しい言葉のきまり（文法）を学習するたびに応用でき、面白くなってきます。とりわけ「基礎」を大事にして、くりかえし基本に立ちかえりながら、新しい表現を学んで前へ進んでいきましょう。		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	CC300A08	期間	前期
授業科目名	イタリア語 I		
英訳科目名	Italian I		
担当教員名	小松 寛明		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	◎	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	アルファベットの読み方、つづり字の読み方の習得、文法の初歩の習得（名詞とその関連事項、基本動詞と一般動詞(現在形)）、基本語彙の習得が主な内容です。イタリアをめぐる諸情勢にも言及します。		
到達目標	発音についてはつづり字を正確に発音できることを目標とします。名詞とその関連領域（冠詞、形容詞）については男性形・女性形の区別、単数形・複数形の区別があるので、その判別ができることとします。最重要事項は動詞の活用です。動詞の活用で主語や時制が判断されるからです。なお、日本語の動詞などの「活用」とは意味が違い、英語ではあまり意識されません。まずは基本動詞（英語のbe動詞やhaveに相当）の変化と用法（現在形）、ついで一般動詞の変化と用法（現在形）を習得し、ごく基本的な内容を理解し表現できるようになることを到達点とします。		
授業計画	第1回 アルファベットの読み方① 第2回 アルファベットの読み方② 第3回 基本的なつづり字の読み方① 第4回 基本的なつづり字の読み方② 第5回 注意すべきつづり字の読み方① 第6回 注意すべきつづり字の読み方② 第7回 名詞の種類と変化① 第8回 名詞の種類と変化② 第9回 冠詞の種類と変化① 第10回 冠詞の種類と変化② 第11回 主語の代名詞、基本動詞（essere）の変化と用法(現在形) ①-1 第12回 主語の代名詞、基本動詞（essere）の変化と用法(現在形) ②-2 第13回 形容詞の変化と用法① 第14回 形容詞の変化と用法② 第15回 基本動詞（avere）の変化と用法(現在形)① 第16回 基本動詞（avere）の変化と用法(現在形)② 第17回 一般動詞の変化と用法(現在形) ① 第18回 一般動詞の変化と用法(現在形) ② 第19回 注意すべき一般動詞の変化と用法(現在形) ①-1 第20回 注意すべき一般動詞の変化と用法(現在形) ①-2 第21回 注意すべき一般動詞の変化と用法(現在形) ②-1 第22回 注意すべき一般動詞の変化と用法(現在形) ②-2 第23回 不規則動詞（現在形）①-1 第24回 不規則動詞（現在形）①-2 第25回 不規則動詞（現在形）②-1 第26回 不規則動詞（現在形）②-2 第27回 不規則動詞（現在形）③-1 第28回 不規則動詞（現在形）③-2 第29回 時刻の表現① 第30回 時刻の表現②		
評価方法 (合計100%)	前期学科試験（40%） 授業中の小テスト（30%） 課題など（30%）		
失格条件	前期学科試験、授業中に行う小テストを受験しなかった場合、課題の提出がなかった場合。小テストと課題は、受験指定日、提出締め切り期日より遅れて受験・提出の場合には減点します。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業の復習は各回徹底すること。項目ごとに小テストを行い、課題提出を求めます。予習（単語調べなど）と課題に毎週1時間30分、復習に2時間30分を目安とすること。辞書や参考書は大学図書館や公共図書館でも利用できます。各種情報端末も利用可能ですが、情報が膨大過ぎたり、不適切なものも相当見受けられるので、警戒してください。		
課題へのフィードバック	課題は添削の上、評価を記載し解答例を付して返却します。小テストは採点の上、解答（配点を明示）を付して返却します。いずれも授業内で復習・自己点検をしていただきます。		
教科書	『イタリアーノ・イタリアーノ』		
著者名	マッテオ・カスターニャ、吉富 文		
出版社	朝日出版社		
参考書	秋山余思監修『フリーモ伊和辞典・和伊付き』（白水社）		
その他	B5(普通のノートの大きさ)のファイルノートを用意してください。（応用問題、課題のプリント、単語・表現集のプリントの保管に使用します。）		
備考	なし		
科目生への開講	あり		

ナンバリング	CC300B06	期間	後期
授業科目名	イタリア語Ⅱ		
英訳科目名	ItalianⅡ		
担当教員名	小松 寛明		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	◎	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	イタリア語には過去時制が3つありますが、このうち近過去と半過去とを取り上げて、現在形を含めて時制の使い分けを徹底して指導します。日本文化圏における「時」のとらえ方とは異なるからです。日常的な範囲の内容を理解し、かつ表現できる程度までの文法、単語・語彙の習得を目標とします。		
到達目標	動詞についてはまず補助動詞（「…出来る」「…したい」「…すべきだ」のように言えば「気持ち」を加える表現）を習得します。ついで再帰動詞と一般的な動詞との区別（例えば「起こす」と「起きる」違い）ができるようになることとします。時制については過去時制が重要です。過去の事柄をどのように捉えるかに違いがあるからです。（「近過去」と「半過去」）動詞の変化を含めて、この違いを理解し使いこなせることを最大の目標とします。発音については文の抑揚を意識して文を聞き取り表現できることを到達点とします。		
授業計画	第1回 二重子音について① 第2回 二重子音について② 第3回 補助動詞①-1 第4回 補助動詞①-2 第5回 補助動詞②-1 第6回 補助動詞②-2 第7回 再帰動詞①-1 第8回 再帰動詞②-2 第9回 近過去①-1 第10回 近過去①-2 第11回 近過去②-1 第12回 注意すべき近過去① 第13回 注意すべき近過去② 第14回 近過去②-2 第15回 半過去①-1 第16回 半過去①-2 第17回 半過去②-1 第18回 半過去②-2 第19回 時制（現在形・近過去・半過去）の使い分け①-1 第20回 時制（現在形・近過去・半過去）の使い分け①-2 第21回 過去時制（現在形・近過去・半過去）の使い分け②-1 第22回 過去時制（現在形・近過去・半過去）の使い分け②-2 第23回 直接目的語代名詞①-1 第24回 直接目的語代名詞①-2 第25回 直接目的語代名詞②-1 第26回 直接目的語代名詞②-2 第27回 命令法① 第28回 命令法② 第29回 比較表現① 第30回 比較表現②		
評価方法 (合計100%)	後期学科試験（40%） 授業中の小テスト（30%） 課題など（30%）		
失格条件	後期学科試験、授業中に行う小テストを受験しなかった場合、課題の提出がなかった場合。小テストと課題は、受験指定日、提出締め切り日より遅れて受験・提出の場合には減点します。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業の復習は各回徹底すること。項目ごとに小テストを行い、課題提出を求めます。予習（単語調べなど）と課題に毎週1時間30分、復習に2時間30分を目安とすること。辞書や参考書は大学図書館や公共図書館でも利用できます。各種情報端末も利用可能ですが、情報が膨大過ぎたり、不適切な解説や間違いも相当見受けられるので、警戒してください。		
課題へのフィード バック	課題は添削の上、評価を記載し解答例を付して返却します。小テストは採点の上、解答（配点を明示）を付して返却します。いずれも授業内で復習・自己点検をしていただきます。		
教科書	『イタリアーノ・イタリアーノ』（イタリア語Ⅰと同じ）		
著者名	マッテオ・カスターニャ、吉富 文		
出版社	朝日出版社		
参考書	秋山余思監修『プリーモ伊和辞典・和伊付き』（白水社）		
その他	B5(普通のノートの大きさ)のファイルノートを用意してください。(応用問題、課題プリント、単語・表現集のプリントの保管に使用します。)		
備考	なし		
科目生への開講	あり		

ナンバリング	CC300A09	期間	前期
授業科目名	フランス語 I		
英訳科目名	French I		
担当教員名	宮脇 玲奈		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	◎	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	あいさつや自己紹介などの基本的な日常のフランス語会話を身につけることを中心に学びます。各授業でペアワークを取り入れ、会話の中からフランス語を習得することを目指します。		
到達目標	実用フランス語能力試験5級程度のフランス語運用能力を身につけること		
授業計画	<p>第1回 インTRODクシヨン、アルファベットの読み方 第2回 アルファベットの読み方・フランス語のあいさつ 第3回 自己紹介の仕方 第4回 元気かどうか尋ねる表現・数字 (0~20) 第5回 Lesson1のまとめ (まとめでは、その課で習った表現を使ってペアワークをします) 第6回 自分の住んでいるところを伝える表現 第7回 職業・数字(21~30) 第8回 Lesson2のまとめ 第9回 国籍と言語 第10回 「私は~人です」「私は~語を話します」 第11回 数字(30~69)・注文の仕方 第12回 Lesson3のまとめ 第13回 身の回りのもの・「~を持っている」という表現 第14回 否定の表現・数字(0~69) 第15回 到達度の確認 第16回 兄弟・年齢 第17回 Lesson4のまとめ 第18回 「誰ですか?」と尋ねる表現と答え方 第19回 人物の描写の仕方 第20回 疑問詞・所有形容詞 第21回 Lesson5のまとめ 第22回 「これはなんですか?」の尋ね方と答え方 第23回 「~はどこですか?」の尋ね方と答え方 第24回 数字(70~100)・電話番号の読み方 第25回 Lesson6のまとめ 第26回 好き嫌いの尋ね方と答え方1 第27回 「~があります、~がいます」の表現 第28回 Lesson7のまとめ 第29回 色と洋服 第30回 到達度の確認</p>		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度：30% 小テスト：40% 到達度の確認：30%		
失格条件	授業全体の前半に4回、後半に4回を超えて理由もなく欠席した場合 (初習の言語は一度の欠席の影響がとても大きい)		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	復習2時間。付属CDを使って、毎日音声を聞くことが望ましい。内容が大体把握できるようになれば、シャドーイングをすること。最終的には意味を理解した上で、文法上の誤りなく聞き取れるか確認するため、ディクテーションをすること。		
課題へのフィード バック	毎回小テストがあり、その都度小テストの間違ったところにコメントをする。 また、15回目には中間テストがあるが、16回目の授業では、中間テストの問題の解説をする。		
教科書	Café Français : nouveau		
著者名	Nicaolas Gaillard, Toyoko Kato, Takayuki Nakagawa, Florence Yoko Sudre, Shu Yanagishima		
出版社	朝日出版社		
参考書	なし		
その他	教科書は必ず購入すること (教科書がない場合は宿題などの平常点に大きく影響します) 毎週1度小テストがあり、必ず宿題が出されます。 新しい言語を学ぶ場合、一度の欠席で付いていけなくなってしまいます。 やむを得ない事情がある場合を除いて欠席しないこと。		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	CC300B07	期間	後期
授業科目名	フランス語Ⅱ		
英訳科目名	FrenchⅡ		
担当教員名	宮脇 玲奈		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	◎	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	前期に引き続き、基本的なフランス語の文法や表現を身につけます。また、各授業でペアワークをすることで、話せるフランス語を身につけます。		
到達目標	実用フランス語能力試験4級程度のフランス語運用能力を身につけること		
授業計画	<p>第1回 前期の復習：フランス語の文の作り方・読み方</p> <p>第2回 L8:色と洋服の復習・比較の表現</p> <p>第3回 L8:天気表現</p> <p>第4回 Lesson8のまとめ</p> <p>第5回 L9:「私は～をします」という表現・頻度</p> <p>第6回 L9:「朝食に～を取ります」という表現</p> <p>第7回 Lesson9のまとめ</p> <p>第8回 L10:「～へ行きましょう」の伝え方・曜日</p> <p>第9回 L10:「どのくらい時間がかかりますか?」という表現と答え方</p> <p>第10回 L10:疑問詞combien(どれくらい)の使い方</p> <p>第11回 Lesson10のまとめ</p> <p>第12回 L11:時間表現「～時に…します」・代名動詞se coucherについて</p> <p>第13回 L11:時間表現「今何時ですか?」</p> <p>第14回 Lesson11のまとめ</p> <p>第15回 到達度の確認</p> <p>第16回 L12:「～を知っていますか?」という尋ね方・代名詞</p> <p>第17回 L12:自分のアルバイトについて話す</p> <p>第18回 Lesson12のまとめ</p> <p>第19回 L13:レストランでの注文の仕方</p> <p>第20回 L13:料理の感想を相手に伝える</p> <p>第21回 L13:複合過去形(avoir+過去分詞)</p> <p>第22回 L13:半過去形</p> <p>第23回 Lesson13のまとめ</p> <p>第24回 L14:代名詞onの使い方</p> <p>第25回 L14:複合過去形(tre+過去分詞)</p> <p>第26回 L14:複合過去形を使って冬休みの思い出を書く</p> <p>第27回 L14:半過去形を使って冬休みの思い出を書く</p> <p>第28回 L14:複合過去形と半過去形を使って冬休みの思い出を書く</p> <p>第29回 Lesson14のまとめ</p> <p>第30回 到達度の確認</p>		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度：30% 小テスト：40% 到達度の確認：30%		
失格条件	授業全体の前半に4回、後半に4回を超えて理由もなく欠席した場合 (初習の言語は一度の欠席の影響がとても大きい)		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	復習2時間。付属CDを使って、毎日音声聞くことが望ましい。内容が大体把握できるようになれば、シャドーイングをすること。最終的には意味を理解した上で、文法上の誤りなく聞き取れるか確認するため、ディクテーションをすること。		
課題へのフィードバック	毎回小テストがあり、その都度小テストの間違ったところにコメントをする。 また、15回目には中間テストがあるが、16回目の授業では、中間テストの問題の解説をする。		
教科書	Café Français : nouveau		
著者名	Nicaolas Gaillard, Toyoko Kato, Takayuki Nakagawa, Florence Yoko Sudre, Shu Yanagishima		
出版社	朝日出版社		
参考書	なし		
その他	教科書は必ず購入すること(教科書がない場合は宿題などの平常点に大きく影響します) ※ただし、前期に購入済みの場合は購入の必要はありません 毎週1度小テストがあり、必ず宿題が出されます。 新しい言語を学ぶ場合、一度の欠席で付いていけなくなってしまいます。 やむを得ない事情がある場合を除いて欠席しないこと。		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	CC300A10	期間	前期
授業科目名	中国語 I		
英訳科目名	Chinese I		
担当教員名	張 煜		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	◎	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	中国語学習における最初の難関ともいえる発音の学習を重視しながら、基本的な文法が身につくよう、学習を進めていく。この授業は初級中国語として位置づけられ、中国語の発音、単語、簡単な日常会話の確乎とした基礎造りを目指す。		
到達目標	1.中国語の音に慣れ、ピンインがついていれば中国語の文章を音読できる。 2.教室における教師の中国語による指示を聞いて理解できる。 3.自分に関する簡単な情報(姓名、年齢、居住地、所属団体、家族のことなど)を中国語で表現できる。 4.日常的な事柄を簡単な中国語で表現できる。		
授業計画	第1回 第1課 (声調、単母音) 第2回 第1課 (複母音) 第3回 第2課 (声母表、無気音と有気音、他) 第4回 第3課 (鼻音を伴う母音、他) 第5回 第4課 (声調変化、他) 第6回 復習 第7回 第5課 (本文の学習、練習) 第8回 第5課 (前回の復習、文法の学習、練習) 第9回 第5課 (会話と単語) 第10回 第6課 (前回の復習、本文の学習、練習) 第11回 第6課 (前回の復習、文法の学習、練習) 第12回 第6課 (会話と単語) 第13回 第7課 (前回の復習、本文の学習、練習) 第14回 第7課 (前回の復習、文法の学習、練習) 第15回 第7課 (会話と単語) 第16回 復習 第17回 第8課 (本文の学習、練習) 第18回 第8課 (前回の復習、文法の学習、練習) 第19回 第8課 (会話と単語) 第20回 第9課 (前回の復習、本文の学習、練習) 第21回 第9課 (前回の復習、文法の学習、練習) 第22回 第9課 (会話と単語) 第23回 第10課 (前回の復習、本文の学習、練習) 第24回 第10課 (前回の復習、文法の学習、練習) 第25回 第10課 (会話と単語) 第26回 第11課 (前回の復習、本文の学習、練習) 第27回 第11課 (前回の復習、文法の学習、練習) 第28回 第11課 (会話と単語) 第29回 総復習 第30回 到達度の確認 注：一年を通じて、「発音」と「基礎知識」、「自己紹介」「私の家族」「一日の生活」「趣味」「病気」「食事に行く」「スーパーに行く」「遊びに行く」「中国の観光スポット」「中国の交通」などの話題についての説明文、会話文、および翻訳について学ぶ。		
評価方法 (合計100%)	最終試験 (50%)、小テスト等 (20%)、授業への参加態度 (30%) などの各評価の合計により、総合的に判断する		
失格条件	次のいずれかに該当する場合、失格とする。 正当な理由がなく授業数の1/3以上欠席した場合 最終授業試験を受けなかった場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	・授業の前に、前回学習した内容を確認し、その日学習する予定の箇所に目を通しておくこと。特に新出単語はチェックして、CD等で発音を確認しておくこと。(予習時間 1時間) ・学習したことは、できるだけその日のうちに復習しておくこと。習った単語はピンインがなくても読めるように、また、漢字(簡体字)が正しく書けるように練習しておくこと。発音に関しては、テキスト付属のCDを使って繰り返し練習しよう。(復習時間 1時間) ・日頃から中国語を見たり聞いたりして慣れ親しみ、また中国に関連のあるものに対して、常に関心を持つことも大切である。		
課題へのフィードバック	小テストについては次回授業でコメント、解説する。 前期の期末試験については後期授業の初回でコメント、解説する。		
教科書	初級テキスト 日中いぶこみ広場		
著者名	相原茂・陳淑梅・飯田敦子		
出版社	朝日出版社		
参考書			
その他	2011年出版		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	CC300B08	期間	後期
授業科目名	中国語Ⅱ		
英訳科目名	ChineseⅡ		
担当教員名	張 焜		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	◎	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>1.中国語の音に慣れ、ピンインがついていれば中国語の文章を音読できる。 2.教室における教師の中国語による指示を聞いて理解できる。 3.自分に関する簡単な情報(姓名、年齢、居住地、所属団体、家族のことなど)を中国語で表現できる。 4.日常的な事柄を簡単な中国語で表現できる。</p>		
到達目標	<p>1.文章を朗読し、内容が正確に伝わるレベルまで中国語の発音に習熟する。 2.語句の意味と用法、文化や風俗に関する簡単な談話を聞いて理解できるようになると同時に、それらについて教師に中国語で質問できるようになる。 3.日常的な事柄を簡単な中国語で表現できるようになる。 4.短い文章を読んで大意を理解し、それを中国語で表現できるようになる。</p>		
授業計画	<p>第1回 前期の復習 第2回 第12課 (本文の学習、練習) 第3回 第12課 (前回の復習、文法の学習、練習) 第4回 第12課 (会話と単語) 第5回 第13課 (前回の復習、本文の学習、練習) 第6回 第13課 (前回の復習、文法の学習、練習) 第7回 第13課 (会話と単語) 第8回 第14課 (前回の復習、本文の学習、練習) 第9回 第14課 (前回の復習、文法の学習、練習) 第10回 第14課 (会話と単語) 第11回 第15課 (前回の復習、本文の学習、練習) 第12回 第15課 (前回の復習、文法の学習、練習) 第13回 第15課 (会話と単語) 第14回 第16課 (前回の復習、本文の学習、練習) 第15回 第16課 (前回の復習、文法の学習、練習) 第16回 第16課 (会話と単語) 第17回 会話練習1 第18回 会話の話題に関して単語、言葉の練習 第19回 該話題の復習 第20回 会話練習2 第21回 会話の話題に関して単語、言葉の練習 第22回 該話題の復習 第23回 会話の練習3 第24回 会話の話題に関して単語、言葉の練習 第25回 該話題の復習 第26回 会話の練習4 第27回 会話の話題に関して単語、言葉の練習 第28回 該話題の復習 第29回 総復習 第30回 到達度の確認 注：一年を通じて、「発音」と「基礎知識」、「自己紹介」「私の家族」「一日の生活」「趣味」「病気」「食事に行く」「スーパーに行く」「遊びに行く」「中国の観光スポット」「中国の交通」などの話題についての説明文、会話文、および翻訳について学ぶ。</p>		
評価方法 (合計100%)	最終試験 (50%)、小テスト等 (20%)、授業への参加態度 (30%) などの各評価の合計により、総合的に判断する		
失格条件	次のいずれかに該当する場合、失格とする。 正当な理由がなく授業数の1/3以上欠席した場合 最終授業試験を受けなかった場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の前に、前回学習した内容を確認し、その日学習する予定の箇所に目を通しておくこと。特に新出単語はチェックして、CD等で発音を確認しておくこと。(予習時間 1時間) ・学習したことは、できるだけその日のうちに復習しておこう。習った単語はピンインがなくても読めるように、また、漢字(簡体字)が正しく書けるように練習しておくこと。発音に関しては、テキスト付属のCDを使って繰り返し練習しよう。(復習時間 1時間) ・日頃から中国語を見たり聞いたりして慣れ親しみ、また中国に関連のあるものに対して、常に関心を持つことも大切である。 		
課題へのフィードバック	小テストについては次回授業でコメント、解説する。		
教科書	初級テキスト 日中いぶこみ広場		
著者名	相原茂・陳淑梅・飯田敦子		
出版社	朝日出版社		
参考書			
その他	特になし。		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	CC200B03	期間	前期
授業科目名	市民性（シティズンシップ）育成論		
英訳科目名	Citizenship Education		
担当教員名	長谷川 精一、奥野 浩之、大橋 忠司、生駒 佳也		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>従来より、日本社会は均質性が高いとされ、近年では一部の人々によって、日本「固有」の美点を自画自賛するような説が声高に叫ばれている。しかし、そのような説とは逆に、社会的経済的变化の中で、日本社会には異文化の要素が入るとともに、地域的、社会的、経済的な格差が拡大し、社会の多様化、複合化が進んでいる。このような状況の下で、様々な背景をもつ人々が差別・偏見を許さない社会的公平への信念をもち、互いの人権・人格を尊重し合うことが、今後の社会を展望する上で不可欠である。地球規模で人類全体の状況を理解し考慮するユニバーサルな視点と、自分が今そこで生きる地域の状況を理解し考慮するローカルな視点との両方もち、複眼的な思考ができる市民の存在が重要となっているのである。</p> <p>本講義では、4人の教員によるオムニバス形式で授業を展開し、批判的思考に基づいて、真摯な対話を通じて新しい社会の形成に積極的に参加するという、能動的な意味での市民性をどのように育成していくべきかについて、受講生のみなさんと共に考えていきたい。</p>		
到達目標	<p>①市民性（シティズンシップ）とその育成に関する課題が理解できる。</p> <p>②社会的・倫理的責任を担う主体的・能動的な市民として、どのように行動するべきかを説明できる。</p>		
授業計画	<p>第1回 授業のガイダンス（長谷川）</p> <p>第2回 現代的課題としての市民性（シティズンシップ）育成（長谷川）</p> <p>第3回 生涯学習者としての市民（生駒）</p> <p>第4回 地域社会構成者としての市民（生駒）</p> <p>第5回 生涯学習社会と地域社会への参加（生駒）</p> <p>第6回 市民としての社会参加：具体例から考える（生駒）</p> <p>第7回 日本国憲法における人権保障と市民性（奥野）</p> <p>第8回 日本国憲法の国民主権主義とポリティカル・リテラシーの育成（奥野）</p> <p>第9回 学校教育における市民性（シティズンシップ）育成（大橋）</p> <p>第10回 教科教育と市民性育成（大橋）</p> <p>第11回 「総合的な学習の時間」と市民性育成（大橋）</p> <p>第12回 「特別活動」と市民性育成（大橋）</p> <p>第13回 「特別の教科 道徳」と市民性育成（大橋）</p> <p>第14回 これからの教育への展望と市民性育成（大橋）</p> <p>第15回 授業のまとめ（長谷川）</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>提出課題60%</p> <p>授業への参加態度40%</p>		
失格条件	<p>①出席が授業回数の2/3を満たさない場合 (20分以上の遅刻は欠席とし、20分以内の遅刻は3回で1回の欠席とする)</p> <p>②私語など、他の学生の受講に妨げのある行為をした場合</p>		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>授業内容に基づいた、提出課題の作成を、十分な時間（大学設置基準の定めによれば、1回の授業に対して4時間）をかけた取り組みを、（大学の1時間は45分として考えることとなっているため、180分）以上）をかけて取り組むこと。</p>		
課題へのフィード バック	<p>授業で課題へのフィードバックを行う。</p>		
教科書	<p>特定の教科書は用いず、必要に応じてプリント等を配布する。</p>		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	<p>本授業では、講義形式に加えて、グループワークを行う。また、受講者の関心と理解度、受講生数に応じて計画を一部変更することがある。</p>		
備考	<p>教師としての実務経験をもとに、この授業を進めます。（大橋）</p>		
科目生への開講	あり		

ナンバリング	CC200B04	期間	前期
授業科目名	共生社会論		
英訳科目名	Inclusive Society		
担当教員名	沼田 潤、大橋 忠司、田中 敏正、奥 忠憲		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	人間は様々な文化的・社会的背景を有している。例えば、民族、使用言語、ジェンダー、出身地、障がいの有無、病気の有無、経済的状況などが挙げられる。そして、多様な文化的・社会的背景を有する他者と共に、安心して生きていくことができる共生社会を実現していくことが今日的な重要課題として考えられるようになってきている。共生社会の実現に向けて、どのような問題があるのか、どのような取り組みが行われているのかを理解して、自らがどのように行動すべきかを考えていくことが欠かせない。本講義では、4人の教員によるオムニバス形式で授業を展開し、共生に関して多角的な観点から考察し、今後どのように共生社会を実現していくべきなのかを考える上での視点について受講生のみなさんと共に考えていきたい。		
到達目標	①共生に関する課題が理解できる。 ②共生社会の実現に向けてどのように行動すべきか説明できる。		
授業計画	第1回 授業のガイダンス（沼田） 第2回 共生とは：偏見・差別を越えた共生社会に向けて（沼田） 第3回 心身の障がいに対する理解（田中） 第4回 障がいのある人々が直面する諸課題（田中） 第5回 障がいのある人々と共生する社会を目指して（田中） 第6回 共生社会の構築における基本的人権の重要性（奥） 第7回 日本国憲法における基本的人権の保障（奥） 第8回 現在の日本社会における労働をめぐる諸問題と共生社会への展望（奥） 第9回 学校教育における共生への課題と取り組み（大橋） 第10回 共生社会を目指す学校教育：教科教育に焦点を当てて（大橋） 第11回 共生社会を目指す学校教育：総合的な学習の時間・特別活動に焦点を当てて（大橋） 第12回 共生社会を目指す学校教育：「特別の教科 道徳」に焦点を当てて（大橋） 第13回 共生社会を目指す学校教育：インクルーシブ教育の理念と実践（大橋） 第14回 共生社会を目指す教育への展望（大橋） 第15回 授業のまとめ（沼田）		
評価方法 (合計100%)	提出課題60%、授業への参加態度40%		
失格条件	①出席が授業回数の2/3を満たさない場合（20分以上の遅刻は欠席とし、20分以内の遅刻は3回で1回の欠席とする） ②私語など、他の学生の受講に妨げのある行為をした場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業内容に基づいた、提出課題の作成を、十分な時間（大学設置基準の定めによれば、1回の授業に対して4時間）をかけた取り組み（大学の1時間は45分として考えることとなっているため、180分）以上）をかけて取り組むこと。		
課題へのフィードバック	授業で課題へのフィードバックを行う。		
教科書	特定の教科書は用いず、必要に応じてプリント等を配布する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	本授業では、講義形式に加えて、グループワークを行う。また、受講者の関心と理解度、受講生数に応じて計画を一部変更することがある。		
備考	教師としての実務経験をもとに、この授業を進めます。（大橋） 社会福祉施設での実務経験をもとに、この授業を進めます。（田中）		
科目生への開講	あり		

ナンバリング	CC200B05	期間	前期
授業科目名	現代社会とリテラシー		
英訳科目名	Literacies in Modern Society		
担当教員名	千葉 真也、黄 琬茜、猿山 隆子		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>「リテラシー」という語は、もともとは「読み書きができる能力」（読解記述力）を意味していたが、今では単に言葉に関してだけでなく、表現されたものを理解して活用する力、分析して判断する総合的な力を表している。現代社会が直面する問題の中には、既存の学問では十分にとらえきれないもの、一つの学問分野には収まらない広がりを持つものも多い。本講義では、3人の教員によるオムニバス形式で、異文化、ジェンダー、言語、環境などの現代的問題について、多角的な観点から考察し、問題を正しく理解し、対処する方法としてのリテラシーという点から考察していく。</p>		
到達目標	<p>異文化・ジェンダー・言語・環境などの現代的問題について、理解、活用、分析、判断する力としてのリテラシーという点から、現代の社会が直面する多様な問題について対処する方法を主体的に考えることができる。</p>		
授業計画	<p>第1回 授業のガイダンス：リテラシー概念と現代社会における様々なリテラシー（千葉） 第2回 「読み」のリテラシー（千葉） 第3回 異文化リテラシー（1）異文化リテラシーとは何か（黄） 第4回 異文化リテラシー（2）グローバル化における異文化リテラシーの現状（黄） 第5回 異文化リテラシー（3）母語習得と外国語活用能力（黄） 第6回 ジェンダーリテラシー（1）ジェンダー・リテラシーとは何か（黄） 第7回 ジェンダーリテラシー（2）ライフ・コースと結婚・出産（黄） 第8回 ジェンダーリテラシー（3）国際結婚とジェンダー・リテラシー（黄） 第9回 言語リテラシー（1）生活に根ざした教育—生活綴方教育（猿山） 第10回 言語リテラシー（2）おとなの自己教育運動—生活記録運動（猿山） 第11回 言語リテラシー（3）自己に直面するものとしての記録—自分史（猿山） 第12回 環境リテラシー（1）環境問題と記録（猿山） 第13回 環境リテラシー（2）水俣の記録とその意味を事例として（猿山） 第14回 環境リテラシー（3）水俣にみる自治と共生の思想を事例として（猿山） 第15回 まとめ（千葉）</p>		
評価方法 (合計100%)	提出課題60%、授業への参加度40%		
失格条件	<p>①出席が授業回数の2/3を満たさない場合（20分以上の遅刻は欠席とし、20分以内の遅刻は3回で1回の欠席とする） ②私語など、他の学生の受講に妨げのある行為をした場合</p>		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>授業内容に基づいた、提出課題の作成を、十分な時間（大学設置基準の定めによれば、1回の授業に対して4時間）をかけて取り組むこと。 （大学の1時間は45分として考えることとなっているため、180分）以上）をかけて取り組むこと。</p>		
課題へのフィードバック	授業中で課題へのフィードバックを行う。		
教科書	特定の教科書は用いず、必要に応じてプリント等を配布する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	CC200B06	期間	後期
授業科目名	食と健康		
英訳科目名	General Introductions to the Food and Health		
担当教員名	庄條 愛子、角谷 勲、藤本 繁夫、品川 英朗、上田 秀樹、竹山 育子、杉山 文、古川 和子、今井 ももこ、小野 くに子、金石 智津子、水野 淨子		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	「抗酸化食品」、「スーパーフード」、「アンチエイジングフード」など食と健康に関連するキーワードが、SNSやwebでも日常的に使われています。これらの食品の詳しい内容や身体で働きは、難しそうだから何か良さそうと思ってしまいます。本講義は、毎日食べる「食べ物」や身体の中での働きについて、「食と健康」をテーマに総合的に学ぶことを目的とします。		
到達目標	食と健康に関する正しい知識を身に付け、自らの生活に反映させることができる。		
授業計画	<p>第1回 食べ物と健康分野：食品の意義・目的と健康との関連性について(庄條)</p> <p>第2回 食べ物と健康分野：SNSやWebで人気の食品について(庄條)</p> <p>第3回 食べ物と健康分野：食品加工と発酵食品について(庄條)</p> <p>第4回 食べ物と健康分野：調理と健康について(杉山)</p> <p>第5回 人体の構造と機能及び疾病の成り立ち分野：食べ物と身体を構成する物質について(水野)</p> <p>第6回 人体の構造と機能及び疾病の成り立ち分野：食べ物と身体について(藤本)</p> <p>第7回 基礎栄養学分野：身体の中での食べ物の変化について(今井)</p> <p>第8回 応用栄養学分野：様々な年齢のヒトの身体と食べ物について(品川)</p> <p>第9回 栄養教育論分野：第三者への食べ物と健康の指導方法について(小野)</p> <p>第10回 臨床栄養学分野：健康・疾病と食べ物について(竹山)</p> <p>第11回 臨床栄養学分野：健康・疾病と食べ物について(金石)</p> <p>第12回 公衆栄養学分野：健康・疾病と食べ物に関する政策について(古川)</p> <p>第13回 公衆栄養学分野：健康・疾病と食べ物に関する政策について(上田)</p> <p>第14回 給食経営管理分野：健康・疾病と食べ物と給食について(角谷)</p> <p>第15回 まとめ：「食と健康」とは？発達栄養学科の取り組みを紹介(庄條)</p>		
評価方法 (合計100%)	<ul style="list-style-type: none"> ・欠席・遅刻、居眠り、スマートフォン使用や講義中の私語などの授業の参加態度：50% ・課題・レポートの提出：50% 		
失格条件	<ul style="list-style-type: none"> ・全授業回数の3分の1以上欠席したものは失格 ・5分以上の遅刻は欠席 ・5分以内の遅刻は3回で1回の欠席 ※電車遅延は、遅刻理由として考慮しません ・レポート・課題など未提出 ※本やWebの内容を丸写ししたレポートや課題は、認めない ※※居眠りやスマートフォンの使用、他講義の課題などを目立って実施している場合には、失格とすることがあります 		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<ul style="list-style-type: none"> ・毎日の生活における「食と健康」と運動・行動内容を関連付けて考える ・日常生活の食や栄養、健康についての話題に関心を持ち、講義前後で講義内容の予習・復習として各2時間の学習を実施すること 		
課題へのフィード バック	提出された課題・レポート、ミニッツペーパーは教員が点検・添削し、効果的な学習のための指導を行う		
教科書	なし		
著者名			
出版社			
参考書	各教員が、講義の際に指定します		
その他	講義に出るだけでなく、講義ごとの学習内容をノートにまとめたり、図書館で関連する資料を借りて読むことなど理解を深める努力をすること		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	CC200B07	期間	後期
授業科目名	生活文化を知る		
英訳科目名	Life Culture in Society		
担当教員名	川中 美津子		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	◎
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>日本の文化は日本人の社会生活の中で生まれ育ってきました。このように、文化は、ある社会における共通認識、共通言語ということが出来ます。</p> <p>戦後の物資の乏しかった時期から高度経済成長期、バブル期そしてバブルの崩壊、経済の変動と科学技術の進展により、私たちを取り巻く社会は60年余りの間に大きく変化してきました。それに伴い、私たちの生活も大きく変化しました。</p> <p>本講義では、経済成長と共に変化してきた私たちの生活を通して、私たちの文化の移り変わりについて考察すると共に、日本の特徴的な時代における生活文化を概観します。</p>		
到達目標	生活に見られる文化の諸相について、知ることができる。		
授業計画	<p>第1回 本授業について</p> <p>第2回 日本人の生活と文化はどのようなものだったの？</p> <p>第3回 戦後の都市生活と文化</p> <p>第4回 高度経済成長期の生活と文化</p> <p>第5回 東京オリンピックと大阪万博</p> <p>第6回 ファーストフードと歩行者天国</p> <p>第7回 バブル期の社会と生活文化</p> <p>第8回 バブル崩壊後の社会と生活文化</p> <p>第9回 これからの社会生活と文化</p> <p>第10回 まとめと理解の確認1</p> <p>第11回 平安時代の生活と文化</p> <p>第12回 江戸時代の生活と文化</p> <p>第13回 明治時代の生活と文化</p> <p>第14回 大正から昭和初期の生活と文化</p> <p>第15回 まとめと理解の確認2</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>授業への参加態度 30%</p> <p>小レポート 30%</p> <p>最終レポート 40%</p>		
失格条件	<p>1.最終レポートを提出していない場合</p> <p>2.実授業回数の2/3以上の出席回数がない場合 (30分未満の遅刻は3回で1回の欠席とし、30分以上の遅刻は欠席とします。)</p>		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p><予習></p> <p>図書館やパソコン演習室を活用して、食に係わる新聞記事や関連資料を調べるなど、積極的に情報を取り入れるように務めて下さい。(予習 2時間)</p> <p><復習></p> <p>授業で取り上げた内容をまとめて下さい。(復習 2時間)</p>		
課題へのフィードバック	<p>小レポートについては、授業時間内に個別もしくは全体にコメントします。</p> <p>最終レポートについては、ポータルサイトを通じて、全体に向けてコメントします。</p>		
教科書	使用しない		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	CC200A02	期間	前期
授業科目名	図書館概論		
英訳科目名	Introduction to Library and Information Science		
担当教員名	岡田 大輔		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	◎
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>この科目は図書館司書の資格を取りたい人が最初に受ける科目です。ただ、2019年度に1回生の人は、共通教育科目として、司書の資格を目指していない人も受けることができます。1回生の人はこの授業を受けていく中で、司書の資格を取るかどうか決めてもらえればと思います。</p> <p>まず、「図書館の思い出」を思い出してもらいます。学校の図書室以外は全く思い出せない人がいるかもしれません。</p> <p>次に司書になるにはどうすればいいかを説明します。実は終身雇用の司書になるのは簡単ではありません。図書館で働いている司書はパートやいわゆる契約社員が多いのです。なぜそのような状況になっているのか、日本の図書館の状況を説明します。</p> <p>その後、「なぜ税金を使って図書館を無料で使えるようにしているのか、図書館とは何なのか」や「マンガを図書館でどの程度買うべきか」「電子書籍の時代に図書館は何をしようとしているのか」などを説明し、「図書館は今後どうなっていくのか」を皆さんといっしょに考えていきます。</p>		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・公共図書館・学校図書館(図書室)・大学図書館の違いを説明することができる。 ・図書館司書の資格を取るには、司書として働くにはどうすればいいか説明することができる。 ・図書館が無料で利用できる理由を説明することができる。 ・司書がどのようなところに注意しながら仕事をしているか、一般人の判断と司書の判断の違いを説明することができる。 		
授業計画	<p>第1回 図書館の体験の共有</p> <p>第2回 司書になるには</p> <p>第3回 図書館の意義と役割</p> <p>第4回 図書館の歴史</p> <p>第5回 図書館の機能と種類</p> <p>第6回 図書館のサービス</p> <p>第7回 図書館のコレクション</p> <p>第8回 図書館の情報組織化</p> <p>第9回 図書館のネットワーク</p> <p>第10回 電子書籍時代の図書館</p> <p>第11回 図書館利用教育と情報リテラシー</p> <p>第12回 図書館経営</p> <p>第13回 図書館と博物館の違い</p> <p>第14回 知的自由と図書館の自由</p> <p>第15回 まとめと到達度の確認</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>毎回の小テストまたは大福帳：10%</p> <p>学期途中でのレポート課題：50%</p> <p>試験：40%</p>		
失格条件	3分の1以上欠席した者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>大学に来るたびに相愛の図書館の中に入ってください。図書館について学ぶのですから、本を読むことの他に、図書館内のどこに何があるのかや、司書さんはどういう仕事をしているのか、など、図書館の仕組みを週に1回は観察してみてください。また、市立図書館など、他の図書館に実際に行って見てくることも必要です。図書館が出てくる小説やマンガを見て、現実との違いを考えるのもいいことです。こういうことも十分な予習復習です。</p> <p>予習復習・図書館の見学・レポートの作成・テスト勉強などで、授業の他に平均すると1週間あたり3時間の学習時間が必要です。</p>		
課題へのフィード バック	<ul style="list-style-type: none"> ・小テストは毎回時間内に答え合わせをします。 ・大福帳はコメントをつけて個別に返却するとともに、共有する意義のある内容は次回の授業で振り返ります。 ・レポート課題提出後の授業では、全体に向けてコメントします。 		
教科書	不使用。毎回プリントを配布する。		
著者名			
出版社			
参考書	今まど子・小山 憲司 編著『図書館情報学基礎資料』樹村房, 2016, 978-4883672660		
その他	授業の中ではただ聞くだけでなく、指示に応じて隣の人と話したり、自分の考えを言ったりすることが求められます。		
備考	大学図書館での勤務・中学校での専任司書教諭の実務経験をもとに、この授業を進めます。		
科目生への開講	あり		

ナンバリング	CC200B08	期間	後期
授業科目名	音楽の楽しみ		
英訳科目名	Introduction to music		
担当教員名	黒坂 俊昭、稲垣 聡、赤石 敏夫、中谷 満、前田 昌宏、松本 直祐樹、清水 信貴、斎藤 建寛、石村 真紀、井上 麻紀、橋田 光代、大谷 玲子、志村 聖子、岡坊 久美子		
ディプロマ・ポリシー-1		ディプロマ・ポリシー-2	
ディプロマ・ポリシー-3		ディプロマ・ポリシー-4	
ディプロマ・ポリシー-5		ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	西洋クラシック音楽と一口に言っても、その内容は極めて広範である。時代、作曲家、国や地域にとらわれず、音楽学部教員がオムニバス形式で、これまでの音楽生活の中で着目した楽曲、学生諸君に聴かせたいと感ずる楽曲を個々の視点から選び、解説を交えて音源(CD、DVD等)を試聴、あるいは生演奏を披露し「音楽の感動」を求めていく。		
到達目標	クラシック音楽の個々の作品に接する機会を通じて、音楽の読み解き方を理解することができる。		
授業計画	<p>各回、以下の教員による授業を予定する（急遽変更の可能性あり）。</p> <p>内容についてはポータル等で追って発表する。</p> <p>第1回 授業内容と進め方の説明 コーディネーター：橋田光代</p> <p>第2回 斎藤建寛（チェロ）</p> <p>第3回 大谷玲子（ヴァイオリン）</p> <p>第4回 赤石敏夫（音楽理論）</p> <p>第5回 松本直祐樹（作曲）</p> <p>第6回 中谷満（打楽器）</p> <p>第7回 井上麻紀（ピアノ）</p> <p>第8回 黒坂俊昭（音楽学）</p> <p>第9回 前田昌宏（サクソフォン）</p> <p>第10回 志村聖子（音楽マネジメント）</p> <p>第11回 橋田光代（音楽情報学）</p> <p>第12回 清水信貴（フルート）</p> <p>第13回 石村真紀（音楽療法）</p> <p>第14回 岡坊久美子（声楽）</p> <p>第15回 稲垣聡（ピアノ）</p>		
評価方法 (合計100%)	毎回、授業の後で復習としてレポートを作成する。 15回分の合計を100%に換算（7%×15回÷1.05）して、成績とする。		
失格条件	6回の欠席に到達した場合、失格とする。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	この授業は、復習を重視する。毎回、授業の後で、レポートとして、所定の用紙に、授業のまとめ（約200字）と授業の感想（よく分かった所、印象に残った所、難しかった点、気付いた点など、約200字）、あわせて約400字を記し、提出すること。（所要時間4時間）。 提出日時、提出場所等詳細については、1回目の授業時に説明する。		
課題へのフィード バック	必要に応じて、個別または授業時に全体に向けてフィードバックする。		
教科書	不使用。授業によって、プリントを配布することがある。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	あり		

1-091

ナンバリング	CC200B09	期間	集中
授業科目名	異文化を知る (海外研修実践)		
英訳科目名	Cross-Cultural Training (Short-Term Study Abroad Program)		
担当教員名	J.E.Alsdorf		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	◎
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	この科目の受講者は、8月に実施される本学の「海外研修」に参加し、帰国後に課題を提出することが求められる。「海外研修」では、ハワイ大学マノア校または英国バンガー大学で実施される3週間の夏期語学研修プログラムに参加し、英語によるコミュニケーション力を養うとともに、米国の文化や自然を体験する。 なお、渡航の手続きを含め、「海外研修」のための事前指導を6～7回、また帰国後も事後指導と報告会をキャンパスタイムに行う。受講者は、この事前・事後指導にも原則として毎回出席するものとする。 また、最後に課題を提出する。		
到達目標	渡航に必要なさまざまな手続きを行うことができる。 英語でコミュニケーションを図ることができる。 異なる文化・習慣を持つ人々とのコミュニケーションとはどういうものかを知ることができる。 米国または英国の文化の一端を知ることができる。		
授業計画	木曜日5限に67回事前指導を行う。 その中で、渡航の手続きを行ったり、渡航・研修における注意点を確認したり、さらには研修中に行われる「交流会」におけるプレゼンテーションの準備なども行う。 事前指導にはe-ラーニングも利用する。 8月末 出国 海外研修期間3週間 9月下旬頃 帰国 帰国後、キャンパスタイムに事後指導と報告会を行う。		
評価方法 (合計100%)	事前・事後指導への参加態度30% 「海外研修」40% 報告会・課題30%		
失格条件	以下のいずれかに該当する場合 1.事前・事後指導を正当な理由なく4回以上欠席した場合 2.夏期語学プログラムに参加しなかった場合 3.報告会への参加、課題の提出のいずれかを行わなかった場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	予習： 8月の海外研修のための事前指導に参加し、自分ですべき必要な手続きや準備を期限内にきちんと行う。 米国または英国での研修に備えて、英語のリスニングの練習や英語の表現の暗記などをする。 復習： ハワイ大学マノア校または英国バンガー大学のプログラムで出された宿題をこなし、クラスや日常生活の中で覚えた単語や表現、異文化体験を書き留める。 (帰国後) 米国または英国で学んだことを、自分なりに振り返り、まとめる(報告会で発表・課題として提出)		
課題へのフィードバック	実技、実習の取り組みに対して個別にコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	事前・事後指導には、辞書を持参すること。		
備考			
科目生への開講	なし		



2. 音楽学部 共通専門科目



2-001

ナンバリング	DC200N01	期間	前期
授業科目名	真宗礼拝音楽		
英訳科目名	Shin-shu Worship Music Exercise		
担当教員名	萬田 一樹		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	大学の式典、及び宗教行事における礼拝音楽の内容、歌唱法を実習を通して研究する。 声楽専攻生は必修となっているが、他学部・他専攻の声楽に興味のある学生も、聖歌以外に声楽の発声と愛唱歌も授業に取り入れているので積極的に受講して下さい。		
到達目標	この授業の単位を取得することにより、礼拝音楽を発声を含め、しっかりと歌う事が出来る。		
授業計画	<p>聖歌集より次の19曲を習得する。</p> <p>①真宗宗歌 ②献花偈 ③三奉請 ④献香偈 ⑤敬礼文 ⑥三帰依 ⑦讃佛偈 ⑧重誓偈 ⑨なもあみだ ⑩念仏 ⑪恩徳讃 ⑫恩徳讃（新） ⑬四弘誓願 ⑭花祭りの歌 ⑮成道の歌 ⑯み佛に抱かれて ⑰われなくも ⑱追悼の歌 ⑲さんだんのうた</p>		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 80% 実習への取り組み 20%		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	その都度、次回歌う曲を与えるので、しっかりと準備して授業に参加すること。 又、授業で与えられた課題を次回まで繰り返し練習すること。 (1週間にかける予習・復習の学修時間の目安 2時間譜読み、歌詞の意味調べ、作品内容の理解)		
課題へのフィード バック	<ul style="list-style-type: none"> ・試験終了後、全体に向けてコメントします。 ・課題提出後、コメントをつけて個別に返却します。 ・課題提出後の授業で、全体に向けコメントします。 ・実技、実習の取り組みに対して個別にコメントします。 		
教科書	聖歌集、プリント配布		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	特になし		
備考			
科目生への開講	なし		

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

2-002

ナンバリング	DC200N02	期間	通年集中
授業科目名	真宗礼拝音楽実習 I /真宗礼拝音楽実習		
英訳科目名	Shin-shu Worship Applied Music I /Shin-shu Worship Applied Music		
担当教員名	泉 貴子		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	大学の宗教行事に参加して、式典及び礼拝における礼拝音楽を声楽の学生として率先して歌う役目を担う。又、他学部・他専攻で声楽及び礼拝音楽に興味がある学生は、積極的に受講して下さい。		
到達目標	この授業単位を取ることにより、礼拝音楽で学習した宗歌を実際の行事で歌う事により、式典の大きな役割を担う事を実感できる。		
授業計画	年間を通して12回の行事に出席する。 第1回 入学式 (4月) 第2回 新入生本山参拝 (4月) 第3回 仏生会法要 (4月) 第4回 親鸞聖人降誕会法要 (5月) 第5回 定例礼拝 (6月) 第6回 定例礼拝 (7月) 第7回 定例礼拝 (10月) 第8回 報恩講法要 (11月) 第9回 成道会法要 (12月) 第10回 成人の集い (1月) 第11回 親鸞聖人御正忌法要 (1月) 第12回 卒業式 (3月)		
評価方法 (合計100%)	授業の参加態度 (参加状況) 100%		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	その都度、式典における宗歌を前もって準備しておくこと。法要において先唱等担当することがあるので積極的に譜読みをしておくこと。		
課題へのフィード バック	毎回重要な式典・法要での歌唱となるので緊張感のある実習となるが、1回1回の歌唱機会を大切に、次回の法要での改善点を直前の稽古で見直すようにしている。		
教科書	聖歌集		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講			

2-003

ナンバリング		期間	通年集中
授業科目名	真宗礼拝音楽実習Ⅱ		
英訳科目名	Shin-shu Worship Applied Music Ⅱ		
担当教員名	泉 貴子		
ディプロマ・ポリシー1	◎	ディプロマ・ポリシー2	◎
ディプロマ・ポリシー3	◎	ディプロマ・ポリシー4	◎
ディプロマ・ポリシー5	◎	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	大学の宗教行事に参加して、式典及び礼拝における礼拝音楽を声楽の学生として率先して歌う役目を担う。又、他学部・他専攻で声楽及び礼拝音楽に興味がある学生は積極的に受講して下さい。尚、この実習はⅠの単位を取得した者に限ります。		
到達目標	この授業単位を取ることで、礼拝音楽で学習した宗歌を実際の行事で歌う事により、式典の大きな役割を担う事を実感できる。		
授業計画	年間を通して12回の行事に出席する。 第1回 入学式（4月） 第2回 新入生本山参拝（4月） 第3回 仏生会法要（4月） 第4回 親鸞聖人降誕会法要（5月） 第5回 定例礼拝（6月） 第6回 定例礼拝（7月） 第7回 定例礼拝（10月） 第8回 報恩講法要（11月） 第9回 成道会法要（12月） 第10回 成人の集い（1月） 第11回 親鸞聖人御正忌法要（1月） 第12回 卒業式（3月）		
評価方法 (合計100%)	授業の参加態度（参加状況） 100%		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	その都度、式典における宗歌を前もって準備しておくこと。		
課題へのフィード バック	毎時礼拝での課題をあたえ、その次の礼拝までに個別、または全体を通してクリアーできるよう解説していきます。		
教科書	聖歌集		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

2-004

ナンバリング		期間	通年集中
授業科目名	真宗礼拝音楽実習Ⅲ		
英訳科目名	Shin-shu Worship Applied Music Ⅲ		
担当教員名	泉 貴子		
ディプロマ・ポリシー1	◎	ディプロマ・ポリシー2	◎
ディプロマ・ポリシー3	◎	ディプロマ・ポリシー4	◎
ディプロマ・ポリシー5	◎	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	大学の宗教行事に参加して、式典及び礼拝における礼拝音楽を声楽の学生として率先して歌う役目を担う。又、他学部・他専攻で声楽及び礼拝音楽に興味がある学生は積極的に受講して下さい。尚、この実習はⅠ・Ⅱの単位を取得した者に限ります。		
到達目標	この授業単位を取るにより、礼拝音楽で学習した宗歌を実際の行事で歌う事により、式典の大きな役割を担う事を実感できる。		
授業計画	年間を通して12回の行事に出席する。 第1回 入学式（4月） 第2回 新入生本山参拝（4月） 第3回 仏生会法要（4月） 第4回 親鸞聖人降誕会法要（5月） 第5回 定例礼拝（6月） 第6回 定例礼拝（7月） 第7回 定例礼拝（10月） 第8回 報恩講法要（11月） 第9回 成道会法要（12月） 第10回 成人の集い（1月） 第11回 親鸞聖人御正忌法要（1月） 第12回 卒業式（3月）		
評価方法 (合計100%)	授業の参加態度（参加状況） 100%		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	その都度、式典における宗歌を前もって準備しておくこと。		
課題へのフィード バック	毎時礼拝での課題をあたえ、その次の礼拝までにその課題をクリアーできるよう個別、または全体を通して解説し、実践していきます。		
教科書	聖歌集		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	西洋音楽史 A		
英訳科目名	History of Western music A		
担当教員名	黒坂 俊昭		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	後期に開講する「西洋音楽史B」と併せて、ヨーロッパ音楽の歴史を全般に渡って概観する。ヨーロッパ音楽の歴史は、西暦400年頃に始まり、現在にまで到っているが、それを時代様式概念によっていくつかの時代に区分し、歴史の大きな流れを捉えていきたい。それぞれの時期に活躍した代表的な作曲家の作品を取り上げ、その楽曲がどのような特徴を持ち、それがヨーロッパ音楽の歴史においてどのような意義を有するかについて考察する。本講義はそのヨーロッパ音楽の歴史において、中世・ルネサンス期・バロック期の音楽に言及する。		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ ヨーロッパ音楽の歴史的全体像を知ることができる。 ・ ヨーロッパ音楽の歴史的な大きな流れを理解できるようになる。 ・ ヨーロッパ音楽の代表的作曲家や代表的作品の歴史的な位置づけができるようになる。 		
授業計画	第1回 ヨーロッパ音楽の歴史的概観 第2回 グレゴリウス聖歌 第3回 初期多声音楽の発展 第4回 中世吟遊詩人の音楽 第5回 アルス・ノヴァの音楽とトレチェントの音楽 第6回 ブルゴーニュ楽派とフランドル楽派 第7回 16世紀イタリア音楽 第8回 オペラの誕生とバロックオペラの展開 第9回 器楽の自立と器楽の発展（教会ソナタと室内ソナタ） 第10回 トリオ・ソナタと古典組曲 第11回 協奏曲の流行（合奏協奏曲から独奏協奏曲へ） 第12回 オラトリオとカンタータ 第13回 17・18世紀の宗教音楽 第14回 前期授業内容の確認 第15回 前期授業内容の理解		
評価方法 (合計100%)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 最終確認テスト：60% ・ 授業内小テスト（3回）：40% ・ 授業を欠席すれば、1回あたり5%を減じる。 		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<ul style="list-style-type: none"> ・ 内容については、適宜、授業内で指示する。 ・ 講義で解説する事項について考察しておくこと。（予習時間：1時間） ・ 講義で検討した内容をまとめておくこと。（復習時間：3時間） 		
課題へのフィード バック	現在クラシック音楽と呼ばれている音楽の源流を辿り、自らの演奏に役立てる。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	教材は、必要に応じて、レジュメ・コピーを配付する。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	DC101A04	期間	前期
授業科目名	西洋音楽史（中世・ルネッサンス・バロック）		
英訳科目名	History of Western music(Medieval,Renaissance,Baroque)		
担当教員名	黒坂 俊昭		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	後期に開講する「西洋音楽史（古典派・ロマン派）」と併せて、ヨーロッパ音楽の歴史を全般に渡って概観する。ヨーロッパ音楽の歴史は、西暦400年頃に始まり、現在にまで到っているが、それを時代様式概念によっていくつかの時代に区分し、歴史の大きな流れを捉えていきたい。それぞれの時期に活躍した代表的な作曲家の作品を取り上げ、その楽曲がどのような特徴を持ち、それがヨーロッパ音楽の歴史においてどのような意義を有するかについて考察する。本講義はそのヨーロッパ音楽の歴史において、中世・ルネサンス期・バロック期の音楽に言及する。		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ ヨーロッパ音楽の歴史的全体像を知るようになる。 ・ ヨーロッパ音楽の歴史的な大きな流れを理解できるようになる。 ・ ヨーロッパ音楽の代表的作曲家や代表的作品の歴史的な位置づけができるようになる。 		
授業計画	第1回 ヨーロッパ音楽の歴史的概観 第2回 グレゴリウス聖歌 第3回 初期多声音楽の発展 第4回 中世吟遊詩人の音楽 第5回 アルス・ノヴァの音楽とトレチェントの音楽 第6回 ブルゴーニュ楽派とフランドル楽派 第7回 16世紀イタリア音楽 第8回 オペラの誕生とバロックオペラの展開 第9回 器楽の自立と器楽の発展（教会ソナタと室内ソナタ） 第10回 トリオ・ソナタと古典組曲 第11回 協奏曲の流行（合奏協奏曲から独奏協奏曲へ） 第12回 オラトリオとカンタータ 第13回 17・18世紀の宗教音楽 第14回 前期授業内容の確認 第15回 前期授業内容の理解		
評価方法 (合計100%)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 最終確認テスト：60% ・ 授業内小テスト（3回）：40% ・ 授業を欠席すれば、1回あたり5%を減じる。 		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<ul style="list-style-type: none"> ・ 内容については、適宜、授業内で指示する。 ・ 講義で解説する事項について考察しておくこと。（予習時間：1時間） ・ 講義で検討した内容をまとめておくこと。（復習時間：3時間） 		
課題へのフィード バック	現在クラシック音楽と呼ばれている音楽の源流を辿り、自らの演奏に役立てる。		
教科書	教科書は不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	教材は、必要に応じて、レジュメ・コピーを配付する。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	西洋音楽史 B		
英訳科目名	History of Western music B		
担当教員名	黒坂 俊昭		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	前期に開講する「西洋音楽史A」と併せて、ヨーロッパ音楽の歴史を全般に渡って概観する。ヨーロッパ音楽の歴史は、西暦400年頃に始まり、現在にまで到っているが、それを時代様式概念によっていくつかの時代に区分し、歴史の大きな流れを捉えていきたい。それぞれの時期に活躍した代表的な作曲家の作品を取り上げ、その楽曲がどのような特徴を持ち、それがヨーロッパ音楽の歴史においてどのような意義を有するかについて考察する。本講義はそのヨーロッパ音楽の歴史において、古典派とロマン派の音楽に言及する。		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ ヨーロッパ音楽の歴史的全体像を知ることができる。 ・ ヨーロッパ音楽の歴史的な大きな流れを理解できるようになる。 ・ ヨーロッパ音楽の代表的作曲家や代表的作品の歴史的な位置づけができるようになる。 		
授業計画	第1回 バロック音楽から古典派音楽へ 第2回 古典派音楽の器楽曲 第3回 古典派音楽の声楽曲 第4回 古典派音楽からロマン派音楽へ 第5回 ロマン派音楽の芽生え 第6回 キャラクター・ピースと標題音楽の発展 第7回 演奏会用序曲と標題交響曲 第8回 イタリア初期ロマン派オペラ 第9回 ロマン派オペラ (ヴェルディとヴァグナー) 第10回 ピアノ音楽の流行 第11回 ドイツ・オーストリア音楽の地域的拡大 (国民楽派の音楽) 第12回 絶対音楽の価値 第13回 調性の崩壊と新しい音組織 (20世紀初頭の音楽) 第14回 後期授業内容の確認 第15回 後期授業内容の理解		
評価方法 (合計100%)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 最終確認テスト：60% ・ 授業内小テスト(3回)：40% ・ 授業を欠席すれば、1回あたり5%を減じる。 		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<ul style="list-style-type: none"> ・ 内容については、適宜、授業内で指示する。 ・ 講義で解説する事項について考察しておくこと。(予習時間：1時間) ・ 講義で検討した内容をまとめておくこと。(復習時間：3時間) 		
課題へのフィード バック	現在クラシック音楽と呼ばれている音楽の本質を歴史的に辿り、自らの演奏に役立てる。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	教材は、必要に応じて、レジュメ・コピーを配付する。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	DC101B04	期間	後期
授業科目名	西洋音楽史（古典派・ロマン派）		
英訳科目名	History of Western music(Classical period,Romantic period)		
担当教員名	黒坂 俊昭		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	前期に開講する「西洋音楽史（中世・ルネサンス・バロック）」と併せて、ヨーロッパ音楽の歴史を全般に渡って概観する。ヨーロッパ音楽の歴史は、西暦400年頃に始まり、現在にまで到っているが、それを時代様式概念によっていくつかの時代に区分し、歴史の大きな流れを捉えていきたい。それぞれの時期に活躍した代表的な作曲家の作品を取り上げ、その楽曲がどのような特徴を持ち、それがヨーロッパ音楽の歴史においてどのような意義を有するかについて考察する。本講義はそのヨーロッパ音楽の歴史において、古典派とロマン派の音楽に言及する。		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ ヨーロッパ音楽の歴史的全体像を知るようになる。 ・ ヨーロッパ音楽の歴史的な大きな流れを理解できるようになる。 ・ ヨーロッパ音楽の代表的作曲家や代表的作品の歴史的な位置づけができるようになる。 		
授業計画	第1回 バロック音楽から古典派音楽へ 第2回 古典派音楽の器楽曲 第3回 古典派音楽の声楽曲 第4回 古典派音楽からロマン派音楽へ 第5回 ロマン派音楽の芽生え 第6回 キャラクター・ピースと標題音楽の発展 第7回 演奏会用序曲と標題交響曲 第8回 イタリア初期ロマン派オペラ 第9回 ロマン派オペラ（ヴェルディとヴァグナー） 第10回 ピアノ音楽の流行 第11回 ドイツ・オーストリア音楽の地域的拡大（国民楽派の音楽） 第12回 絶対音楽の価値 第13回 調性の崩壊と新しい音組織（20世紀初頭の音楽） 第14回 後期授業内容の確認 第15回 後期授業内容の理解		
評価方法 (合計100%)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 最終確認テスト：60% ・ 授業内小テスト（3回）：40% ・ 授業を欠席すれば、1回あたり5%を減じる。 		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<ul style="list-style-type: none"> ・ 内容については、適宜、授業内で指示する。 ・ 講義で解説する事項について考察しておくこと。（予習時間：1時間） ・ 講義で検討した内容をまとめておくこと。（復習時間：3時間） 		
課題へのフィード バック	現在クラシック音楽と呼ばれている音楽の本質を歴史的に辿り、自らの演奏に役立てる。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	教材は、必要に応じて、レジュメ・コピーを配付する。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	DC202A01	期間	後期
授業科目名	音楽心理学		
英訳科目名	Psychology of Music		
担当教員名	河瀬 諭		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>人はなぜ音楽を感じることができるのか?芸術的な演奏とはどういうものなのか?演奏家の思いは観客に伝わっているのか?絶対音感とは何か?演奏前の不安なドキドキはなんとかならないのか?合奏がうまくいくにはどうすればよいのだろうか?聴くことだけでなく「観る」ことも音楽に影響するのか?本講では、これらの疑問をはじめとした音楽に関する様々な事柄について、心理学が明らかにしてきた知見を幅広く紹介する。最終的には、音楽には心の動きが深くかかわっていることを知り、実際の演奏や鑑賞場面にも応用できる知識を身につけることを目標とする。</p> <p>講義では様々な視聴覚教材を用いる。演習や実験なども通じ、音楽がわれわれの心と深く結びついていることを体験する。</p>		
到達目標	音楽や音に関する心理学的知見について理解を深めるとともに、演奏や聴取についての新たな見方を身につけることができる。		
授業計画	<p>第1回 演奏不安① (あがりのメカニズム)</p> <p>第2回 演奏不安② (対処法)</p> <p>第3回 音楽的知覚① (音の知覚と認知)</p> <p>第4回 音楽的知覚② (高さ・大きさ・音色)</p> <p>第5回 音楽的表現の心理学① (メロディ)</p> <p>第6回 音楽的表現の心理学② (リズム)</p> <p>第7回 作曲・演奏・聴取の心理学① (作曲・演奏と創造的活動)</p> <p>第8回 作曲・演奏・聴取の心理学② (音楽聴取の心理学)</p> <p>第9回 演奏技能の発達 (音楽能力を身につける)</p> <p>第10回 音楽とコミュニケーション① (音楽は何を伝えるのか)</p> <p>第11回 音楽とコミュニケーション② (演奏を見る)</p> <p>第12回 映画音楽</p> <p>第13回 絶対音感① (身につける)</p> <p>第14回 絶対音感② (長所と短所)</p> <p>第15回 アンサンブル演奏 (集団の成功と失敗)</p>		
評価方法 (合計100%)	レポート (50%) 授業への参加態度 (50%)		
失格条件	レポートの不提出、または出席が授業日数の2/3以下の者。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業中に適宜指示する。		
課題へのフィード バック	課題提出後、全体に向けてコメントする。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書	<p>「音楽の心理学」(上下) D.ドイチュ編著 寺西立年 他監訳 西村書店</p> <p>「演奏を支える心と科学」 R.パーンカット、G.E.マクファーソン編 安達真由美・小川容子監訳 誠信書房</p> <p>「音は心の中で音楽になる」 谷口高士著 北大路書房</p> <p>「音楽と感情の心理学」 P.N.ジュスリン・J.A.スロボダ編 大串健吾・星野悦子・山田真司監訳 誠信書房</p>		
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

2-010

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	楽器論		
英訳科目名	Musical Instruments Study		
担当教員名	井上 ハルカ		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>《授業概要》 主に管弦楽曲に使用される楽器を対象とする。楽器の歴史、機能、奏法、記譜法、音色などへの理解を深め、さらに各楽器の曲例分析から、管弦楽へのアプローチとなることを目的とする。</p> <p>《ポイント》 ・各楽器の変遷の歴史 ・各楽器の機能、技法、音色 ・各楽器の記譜法 ・管弦楽曲における各楽器の役割</p>		
到達目標	管弦楽法へのアプローチとして、各楽器の理解を深めることができる。		
授業計画	第1回 楽器の歴史と分類／弦楽器全体の説明 第2回 ヴァイオリン・ヴィオラについて 第3回 チェロ・コントラバスについて 第4回 弦楽器の振動（特別講師） 第5回 管楽器全体の説明／木管楽器全体の説明 第6回 フルート・ピッコロについて 第7回 ダブルリード楽器（オーボエ・ファゴット）について 第8回 シングルリード楽器（クラリネット・サクソフォン）について 第9回 金管楽器全体の説明／ホルンについて 第10回 トランペット・トロンボーンについて 第11回 ユーフォニアム・チューバ／その他の管・弦楽器について 第12回 打楽器について 第13回 鍵盤楽器について 第14回 ピアノについて／期末レポート課題配布 第15回 管弦楽曲で使用される楽器について／期末レポート提出		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 30% 毎時間の小レポート提出 40% 期末レポート 30%		
失格条件	6回以上の欠席		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	毎時間提出する授業内容についてのプリントをファイルに綴じ、復習すること。（復習2時間）		
課題へのフィード バック	課題提出後、コメントをつけて個別に返却します。		
教科書	使用しない。プリント等を配布する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	DC305A14	期間	前期/後期
授業科目名	諸民族の音楽		
英訳科目名	Basics for Ethnic Music		
担当教員名	由比 邦子		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> -
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	さまざまな地域・民族における音楽のあり方について論じながら、それぞれの音楽（音現象）を当該文化の担い手および文化外の者の目がどうとらえているのかについて考察する。諸民族の音楽に関する普遍的な研究方法の諸例を紹介しつつ、ある一つの地域そしてそこに居住する民族の歴史的・文化的背景をふまえた音楽慣習の事例として、インドネシアの音楽と上演芸術を取り上げる。本講義を通じて、私たちがどのような音現象を自明の理として「音楽」と認識しているのか、学生諸君に考えてもらいたい。		
到達目標	学生は、場合によってはカルチャーショックともなりうるさまざまな音楽文化の習得を通じて、異文化理解とは何かを考える能力と同時に、文化相対主義的な思考を身につけることができる。		
授業計画	第1回 音・音楽の認識 第2回 音の組織化 第3回 音階と旋法 第4回 リズムの考え方 第5回 リズムの組み合わせ 第6回 音の視覚化の方法 第7回 民族楽器とその分類 第8回 東南アジアの代表的な器楽合奏（インドネシアのガムラン） 第9回 ガムランの音楽構造と独自の時間感覚 第10回 インドネシアの上演芸術 第11回 宗教儀礼と音楽 第12回 職能としての音楽 第13回 部外者の目がもたらす伝統の変容 第14回 世相を反映する音楽 第15回 内容理解の確認		
評価方法 (合計100%)	学期末に実施する試験	70%	
	授業時に不定期に計5回課すミニテスト	30%	
失格条件	次のいずれかに該当すれば失格となる。 (1) 学期末に実施する試験を受験しなかった場合 (2) 授業時に課すミニテスト提出数が3回に満たない場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<予習> 授業ノートを読み返し、次回の授業に備える。（予習時間 1時間） <復習> 授業で取り上げる音楽芸能の映像視聴は、授業内では短時間に限られるので、図書館所蔵資料やネットを使ってさらに映像を確認する。（復習時間 3時間）		
課題へのフィードバック	(1) ミニテストについて 実施した回の次の授業で正解を発表する。また、第14回授業時に総得点を各個人に告知する、 (2) 試験について 最終授業時に実施後、その場で模範解答を提示し、解説を行なう。		
教科書	特に使用しないが、必要に応じてプリントを配布する。		
著者名			
出版社			
参考書	授業時に適宜紹介する。		
その他	特になし。		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	DC204A01	期間	後期
授業科目名	アレクサンダー・テクニク		
英訳科目名	Alexander Technique		
担当教員名	畑田 日出美		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>「音楽」を学ぶ上での技能（楽器の弾き方、使い方、歌い方等）を今まで身につけてきた中で、</p> <ul style="list-style-type: none"> * 技術が” 習慣的 ” になってしまっていないか、 * ” 習慣的 ” である為、または不明の原因の 為からくる体の痛み、不調等に気付き、それをどうやって治していくか、また自分に合った解決法をどう見つけていくか、 * 自分の体の使い方を、どう自分なりに客観的に見れるようになるか、 * 演奏や練習時、技能の上達、技巧向上のうえで、” 新しい癖 ” をどうやって身につけていくかを、 <p>Self-helping methodであるアレクサンダー・テクニクを通して身体的に、また、精神的な部分も含めて体験していただきます。</p> <p>こういった体の使い方を知る方法として、集中講義の最初の日と最後の日に自分達で選んだ曲を演奏をし、いろいろなエクササイズをして体の仕組みを知っていき、自分に合った手段、方法等での自分の体の使い方を見つけていきます。</p>		
到達目標	<p>音楽を演奏する上でのからだの使い方を知って行く、気づいていく、また興味を持つことができる。</p> <p>講義1日目と最後の日の演奏、実技レッスンでの、各自の経験を共有することができる。</p> <p>自分の体をいろいろ違って使いえることに気付く目を持つ（鏡を使う）、又、気付ける感覚を持つことができる。</p>		
授業計画	<p>1日目（午前）： アレクサンダー・テクニクの説明、各自の演奏（録画する）</p> <p>1日目（午後）： 解剖学を使って、体の構成の説明</p> <p>2日目（全日）、3日目（午前）： 1人、15分～20分の実技レッスン（全員）を通して、皆んなでアレクサンダー・テクニクを学んでいく。</p> <ul style="list-style-type: none"> * 頭と脊骨の関係 * 身体の構造 * 呼吸の機能 * 手足、上体の動かし方、 * 体の使い方への気付き etc <p>3日目（午後）： 1日目に演奏した曲をもう一度演奏（録画する）。アレクサンダー・テクニクを学んだ後で、自分の演奏がどう変わったかを、録画を見て、再考してみる。</p> <p>各自、自分の気付いたことを発表。</p> <p>注意： この集中講義は3日間、通して来て学べるプログラムになっています。半日でもぬけると授業がわかりにくくなります。</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>体をよく動かして、身体の構造の面からみた体の使い方の実践、発見に意欲的、自発的に取り組む。（40%）</p> <p>グループワークに活発的に参加し（聞く力を含む）、自分達の体験を話し合う。（35%）</p> <p>講義の最初と最後の日に演奏し（3～5分）、その結果をまとめる。（25%）</p>		
失格条件	3日間、半日でも休んだ場合、失格。（もし、何か理由があれば、申し出る事。）		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	3～5分の曲を演奏出来るようにしておく事。曲は何でもいいですが、何故、その曲を選んだのか、その曲の歴史、背景等の質問に答えられるようにしておいてください。 体を動かして学んでいく講習なので、動きやすい服装で来てください。		
課題へのフィード バック	<ul style="list-style-type: none"> ・実技を受けたとき、その場その場でフィードバックを受けることが出来ます。 ・3日目の最終コマで、自分で気付いたことを発表したときに、フィードバック・コメントします。 		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	<p>定員：24名 実技を中心とした授業です。自分の楽器を持ってきてください。</p> <p>自分の演奏を録画してもらいますので、スマートフォン等、録画出来る物を持参してください。</p> <p>A4のコピーが教材となります。それらのコピーを、自分の教材としてまとめられるノート、ファイル等、持参してください。</p>		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	DC202B01	期間	前期
授業科目名	西洋音楽史各論A		
英訳科目名	History Particulars of Western Music A		
担当教員名	村井 晶子		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>「楽曲形式や楽器など、演奏実技の背景にある重要な要素の原点を探ること」 それが本講義の狙いである。その目的は、各自の演奏解釈に際して、演奏するために作品を解釈する際に、作品の音楽史上の背景を確実に理解しておけるようになることである。そのため、本講義では、様々なジャンルの始まりについて概説し、演奏例を多く紹介する。各論Aでは、西洋音楽の始まりから、古典派音楽に至るまでを扱う。</p>		
到達目標	音楽の修得の際に重要な基本的な知識を得て、各々の演奏に活かすことができる。		
授業計画	<p>第1回 ポリフォニーの始まり：序論：グレゴリオ聖歌、モノフォニー 第2回 ポリフォニー：響きの発見：オルガヌム 第3回 ポリフォニー：パレストリーナに至るまで 第4回 楽譜の始まり：文字譜、ネウマ譜から五線譜へ 第5回 オペラの始まり：調性の成立、カメラータ 第6回 オペラ：モンテヴェルディ「オルフェオ」1、2幕 第7回 オペラ：モンテヴェルディ「オルフェオ」3,4,5幕 第8回 オペラ：18世紀のオペラ 第9回 ソナタ形式の始まり：三部形式、ダ・カーポアリア 第10回 ソナタ形式：ピアノ・ソナタ 第11回 ソナタ形式：実習（モーツァルトのピアノ・ソナタの分析） 第12回 交響曲の始まり：オペラの序曲 第13回 交響曲：前古典派 第14回 交響曲：ウィーン古典派（ハイドン、モーツァルト）（レポート提出） 第15回 交響曲：ベートーヴェン（レポートへのフィードバックを含む）</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>前期末のレポート 70% 授業への参加態度 30%</p>		
失格条件	<p>下記の条件のいずれか一方（あるいは両方）に該当する場合： 1. 出席回数が3分の2に達しなかった 2. 前期末にレポートを提出しなかった</p>		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>授業では、西洋音楽の重要な基礎的事項について、演奏実践への応用を視野に入れて講義する。 予習：配布資料に記載した内容に関連する音楽史の領域について1時間程度予習する。 復習：毎週、講義終了後、1時間程度の配布資料の復習を行い、 2時間程度、テーマとなった領域の音楽を聞き、学習した内容を具体的な演奏で確認することが望ましい。 音楽を聴くにあたっては、楽譜を参照することが望まれる。 なお、テレビ放送で、関連する音楽の演奏番組があれば、それを視聴することを強く推奨する。</p>		
課題へのフィードバック	<p>14回目の授業の際に提出したレポートに関して、全体の講評を最後の授業時に行う。 講義で紹介した西洋音楽史の知識を、各自の実技に活用することが、本科目の目的の一つであるから、レポートの評価においては、各自のそのような姿勢が反映されていることを重視する。</p>		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書	<p>講義中に適宜紹介する。予習のための西洋音楽史の参考書の選択は、各学生がすでに所有している書籍などを用いても良いが、新たに入手したければ 「西洋音楽史100エピソード：久保田慶一著 教育芸術社 ISBN978-4-87788-579-6 を推奨する。</p>		
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	DC202B02	期間	後期
授業科目名	西洋音楽史各論B		
英訳科目名	History Particulars of Western Music B		
担当教員名	村井 晶子		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	「楽曲形式や楽器など、演奏実技の背景にある重要な要素の原点を探ること」 それが本講義の狙いである。その目的は、各自の演奏解釈に際して、演奏するために作品を解釈する際に、作品の音楽史上の背景を確実に理解しておけるようになることである。 そのため、本講義では、様々なジャンルの始まりについて概説し、演奏例を多く紹介する。 各論Bでは、古典派音楽から現代音楽に至るまでを扱う。		
到達目標	音楽の修得の際に重要な基本的な知識を得て、各々の演奏に活かすことができる。		
授業計画	第1回 弦楽四重奏曲の始まり：ハイドンへの流れ 第2回 弦楽四重奏曲の始まり：モーツァルトへの流れ 第3回 弦楽四重奏曲：ハイドンとモーツァルトによる完成へ（ハイドン・セット） 第4回 ピアノの始まり：楽器としてのピアノの誕生 第5回 ピアノ：ワルターピアノ；限界を目指したモーツァルト、ベートーヴェン 第6回 ピアノ：ショパン（表現の豊かさへ） 第7回 ピアノ：超絶技巧（リスト）；ピアノ教育者の流れ 第8回 標題音楽の始まり：バロック、古典派音楽 第9回 標題音楽：ロマン派（擬音；感情；象徴として） 第10回 職業指揮者の誕生（ハンス・フォン・ビューロー） 第11回 機能と声の崩壊～現代音楽の始まり：序論 第12回 機能と声の極限：ワグナー（トリスタン和音） 第13回 新たな構造の探求：ワグナー（ライトモチーフ）；マイスタージンガー 第14回 フランス近代音楽：ラヴェル（レポート提出） 第15回 フランス近代音楽：ドビュッシー（レポートへのフィードバックを含む）		
評価方法 (合計100%)	後期末のレポート 70% 授業への参加態度 30%		
失格条件	下記の条件のいずれか一方（あるいは両方）に該当する場合： 1. 出席回数が3分の2に達しなかった 2. 後期末にレポートを提出しなかった		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業では、西洋音楽の重要な基礎的事項について、演奏実践への応用を視野に入れて講義する。 予習：配布資料に記載した内容に関連する音楽史の領域について1時間程度予習する。 復習：毎週、講義終了後、1時間程度の配布資料の復習を行い、 2時間程度、テーマとなった領域の音楽を聞き、学習した内容を具体的な演奏で確認することが望ましい。 音楽を聴くにあたっては、楽譜を参照することが望まれる。 なお、テレビ放送で、関連する音楽の演奏番組があれば、それを視聴することを強く推奨する。		
課題へのフィードバック	14回目の授業の際に提出したレポートに関して、全体の講評を最後の授業時に行う。 講義で紹介した西洋音楽史の知識を、各自の実技に活用することが、本科目の目的の一つであるから、レポートの評価においては、各自のそのような姿勢が反映されていることを重視する。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書	講義中に適宜紹介する。予習のための西洋音楽史の参考書の選択は、各学生がすでに所有している書籍などを用いても良いが、新たに入手したければ 「西洋音楽史100エピソード：久保田慶一著 教育芸術社 ISBN978-4-87788-579-6 を推奨する。		
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	DC305A15	期間	前期/後期
授業科目名	管弦楽概説		
英訳科目名	Survey of Orchestral Music		
担当教員名	上田 真紀郎		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> -
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	器楽の高度な集合体である管弦楽。その歴史、楽器の特性、記譜法など多角的に解説する。 管弦楽における色彩感、スケール、音楽的感動を得る為には、上記の知識のみならず、総譜を読みながら沢山の楽曲に触れることも必須である。従って本講義では、解説と同時に可能な限り読譜、試聴を行う。		
到達目標	総譜の読み方を理解し、楽器の音色をイメージ出来ること。		
授業計画	第1回 管弦楽の歴史 (1) モンテヴェルディ：オルフェオより 第2回 管弦楽の歴史 (2) ビゼー：カルメンより ヘルク：ヴォツェックより 第3回 管弦楽の歴史 (3) マラー：交響曲第五番 第4回 楽器法 (1) 弦楽器群：その音域、音色、特性、記譜法 第5回 楽器法 (2) 木管楽器群：その音域、音色、特性、記譜法 第6回 楽器法 (3) 金管楽器群：その音域、音色、特性、記譜法 第7回 楽器法 (4) 打楽器群：その音域、音色、特性、記譜法 第8回 総譜 (スコア) の読み方：移調楽器、ハ音記号が混在した弦楽器群の読み方など 第9回 管弦楽曲の種類について 第10回 管弦楽曲の分析 (1) 交響曲 モーツァルト：交響曲第41番より 第11回 管弦楽曲の分析 (2) 標題音楽 ベルリオーズ：幻想交響曲より 第12回 管弦楽曲の分析 (3) 交響詩 スメタナ：「我が祖国」より 第13回 管弦楽曲の分析 (4) バレエ音楽 ストラヴィンスキー：「春の祭典」より 第14回 オーケストラの仕事、教育について 第15回 まとめ		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度30% レポートと授業への取り組み度70%		
失格条件	欠席回数が6回以上の場合。レポートが未提出の場合。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業で取り上げる楽曲のみならず、沢山の管弦楽曲を、可能な限り総譜を見ながら試聴すること。 復習を推奨します (復習時間の目安：授業時間の3倍)。		
課題へのフィード バック	レポートについて、必要に応じて個別もしくは全体にコメントします。		
教科書	なし		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	管弦打楽器の学生には、楽器を持参していただくことがあります。		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	DC305A13	期間	前期
授業科目名	日本音楽史		
英訳科目名	History of Japanese Music		
担当教員名	福本 康之		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	本講では、日本の伝統音楽を題材に、その具体的なあり方や日本人の音楽観を学ぶことを目的とする。 具体的には、単に音楽そのものにとどまらず、関連する様々な文化ジャンル（演劇や宗教儀礼など）にも視野を広げ、可能な限り日本の伝統文化という枠組みのなかで、日本の伝統音楽というものについて、今日的視点をも加えて考えてみたい。		
到達目標	現代日本において非日常的な文化となってしまった日本の伝統音楽が、自らの音楽活動の一助となることができ る。		
授業計画	第1回 「日本音楽」について考える 第2回 日本音楽の歴史1ー古代 第3回 日本音楽の歴史2ー中世 第4回 日本音楽の歴史3ー近世 第5回 日本音楽の歴史4ー現代 第6回 日本音楽のジャンル1ー宗教音楽：雅楽・声明など 第7回 日本音楽のジャンル2ー舞台音楽：能楽・歌舞伎・文楽など 第8回 日本音楽のジャンル3ー声の世界 第9回 日本音楽のジャンル4ー楽器の世界 第10回 日本音楽のジャンル5ー伝統邦楽の枠組みを超えて 第11回 日本音楽の理論について 第12回 日本音楽の記譜法について 第13回 日本音楽を取り巻く社会状況について 第14回 現代の日本音楽を考えるー西洋音楽が日常の音楽言語となった現代における 日本音楽の諸相について 第15回 再び「日本音楽」について考えるー授業で得た知識や経験をもとに、もう一度 「日本音楽」とは何かを考える		
評価方法 (合計100%)	以下の2点による。 1) 授業への参加態度（出席、参加状況）：40% 2) 試験：60%		
失格条件	試験を受けなかった者は失格とします。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	はじめて聴くことになる楽曲が多いと思いますので、授業の前後、楽曲が耳に馴染むよう、繰り返し聴くことを おすすめします。日本音楽全般を対象とするので、予習段階では、各回の講義内容について、基礎的な予備知識 について確認することが理解の助けになると思います（約30分）。 授業の後の復習では、映像や音源を用いて、日本音楽に馴染むことを心がけてください（約150分）。なお、機 会があれば実際に、コンサートなどの現場に足を運ぶことをおすすめします。		
課題へのフィード バック	課題提出後の授業で全体に向けてコメントします。		
教科書	図解 日本音楽史		
著者名	田中健次		
出版社	東京堂出版		
参考書			
その他			
備考	僧侶としての実務経験をもとに、この授業を進めます。		
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	音楽社会学		
英訳科目名	Sociology of Music		
担当教員名	小林 昌廣		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> -
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	音楽に関わる人は必ず自覚的にならなければいけない音楽と社会の関わり、人類の歴史や科学との関係、資本主義社会と音楽産業の関係など、音楽系大学でこの科目は必要と考えます。マックス・ウェーバーの「合理化論」からヴァルター・ベンヤミンの「複製技術時代による集中的聴取の終焉」、T.W.アドルノの「音楽の社会的位置について」などの説に触れ、音楽と社会の変遷とのかかわりを考察することは学生にとって重要な経験となるでしょう。		
到達目標	音楽と社会との関係のみならず、芸術表現が社会にもたらす影響、表現と社会との邂逅／葛藤などについてのまなざしを鋭敏にすることができる。 また、音楽がもつ社会的機能や哲学的・美学的意味について考察する能力を身につけることができる。		
授業計画	第1回 音楽社会学とは何か①～社会学的視点というもの 第2回 音楽社会学とは何か②～音楽社会学の対象領域 第3回 音楽社会学とは何か③～音楽社会学の周辺分野 第4回 音楽社会学の先駆者①～マックス・ヴェーバー『音楽社会学』 第5回 音楽社会学の先駆者②～テオドール・アドルノ『音楽社会学序説』 第6回 音楽社会学の先駆者③～ヴァルター・ベンヤミン『複製技術時代の芸術作品』 第7回 音楽社会学の先駆者④～ジャック・アタリ『ノイズ——音楽・貨幣・雑音』 第8回 音楽社会学の隣接領域①～サウンド・スケープ論 第9回 音楽社会学の隣接領域②～音楽療法論 第10回 音楽社会学の隣接領域③～民族音楽論 第11回 音楽社会学の主題①～クラシック音楽と現代音楽 第12回 音楽社会学の主題②～ポピュラー音楽と資本主義 第13回 音楽社会学の主題③～歌謡曲と日本文化論 第14回 音楽社会学の主題④～純邦楽と古典芸能 第15回 音楽社会学とは何か④～音楽社会学の未来		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 50% レポート提出 30% 小レポートなど 20%		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	音楽を演奏すること、音楽を聴取することを通して、自身がつねに「社会」と関わっていることを意識するようにしてください。		
課題へのフィード バック	ごく日常的に聴取している音楽とはどのようなメディアなのか、またどのように選び聴くのが適当なのか、音楽に対する「態度」に対して自覚的になるようにしてください。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書	授業のなかで紹介いたします。		
その他	特になし		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	音楽基礎演習 A		
英訳科目名	Basic Music Theory A		
担当教員名	石井 尚子		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	音楽を学ぶものにとって、楽譜を正しく「読む」「書く」ということは必要不可欠なことである。この講義では、これらの事柄がスムーズに行えるように、最も基本的な理論の習得を中心に、様々な時代の作品に触れ、実際の音と結びつけながら幅広い知識を養う。		
到達目標	基本的な理論を習得することにより楽譜を読み取る力を養い、楽曲を総合的に分析できる。		
授業計画	第1回 オリエンテーション/譜表・日本音名 第2回 ドイツ音名/変化記号/音符と休符 第3回 連符/リズムと拍子 第4回 音程(1)単音程 幹音による音程 第5回 音程(2)単音程 幹音による音程の復習/転回音程/複音程 第6回 音程(3)単音程 派生音による音程 第7回 音程(4)単音程 派生音による音程の復習・複音程・異名同音的音程 第8回 音階(1)長音階・調号 第9回 音階(2)自然短音階・調号 第10回 音階(3)和声短音階 第11回 音階(4)旋律短音階 第12回 調(1)近親調 第13回 調(2)調関係 第14回 音階と調の総合的まとめ 第15回 到達度の確認		
評価方法 (合計100%)	・ 授業への参加態度 20% ・ 提出物/小テスト 20% ・ 定期試験 60%		
失格条件	授業を4回以上欠席した者、及び定期試験を受けなかった者。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	予習 毎授業時の最後に次回授業の予告をするので、教科書に目を通しておく。(予習時間1時間) 復習 教科書の課題及びプリント等を宿題にするので、必ずそれらを実施し理解しておく。(復習時間3時間)		
課題へのフィード バック	・ 提出物及び小テストは返却時に個別にコメントし、その後、全体に解説します。 ・ 定期試験については、試験終了後、全体に向けてコメントします。		
教科書	楽典問題集		
著者名	赤石敏夫、石井尚子、小西円子、中野佳代子、丹羽あゆみ		
出版社	相愛大学刊		
参考書			
その他	毎回の授業終了後、必ず復習し課題を実施しておくこと		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	音楽基礎演習 B		
英訳科目名	Basic Music Theory B		
担当教員名	石井 尚子		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> -
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	〔音楽基礎演習A〕で習得した基本的な知識をもとに、引き続き幅広い理論の習得を目指すとともに、色々な視点から楽譜を読み取る力を養い、「楽譜」についてより深く総合的に考察する。		
到達目標	〔音楽基礎演習A〕で習得した知識を、より充実発展させ実際の音楽活動に役立てることができる。		
授業計画	第1回 オリエンテーション／和音の概要 第2回 和音 (1) 三和音の種類 第3回 和音 (2) 七の和音の種類 第4回 和音 (3) 三和音の転回形 第5回 和音 (4) 七の和音の転回形 第6回 和音 (5) 三和音の所属調 第7回 和音 (6) 七の和音の所属調 / コードネーム 第8回 和音のまとめ 第9回 調判定／和音外音 第10回 調判定の実践 第11回 移調 第12回 移調楽器 第13回 記号・その他の事柄 第14回 楽曲分析 第15回 到達度の確認		
評価方法 (合計100%)	・授業への参加態度 20% ・提出物／小テスト 20% ・定期試験 60%		
失格条件	授業を4回以上欠席した者、及び定期試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	予習 毎授業時の最後に次回授業の予告をするので教科書に目を通しておく。(予習時間1時間) 復習 教科書の課題、及びプリント等を宿題にするので、必ず、それらを実施し理解しておく。(復習時間3時間)		
課題へのフィードバック	・提出物及び小テストは返却時に個別にコメントし、その後全体に解説します。 ・定期試験については、試験終了後、全体に向けてコメントします。		
教科書	楽典問題集		
著者名	赤石敏夫、石井尚子、小西円子、中野佳代子、丹羽あゆみ		
出版社	相愛大学刊		
参考書			
その他	毎回の授業終了後、必ず復習し課題を実施しておくこと。		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	DC101A03	期間	前期
授業科目名	和声法演習 I A / 和声法演習 I		
英訳科目名	Harmony I A / Harmony I		
担当教員名	大慈弥 恵麻		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> -
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	和声法とは和音や和音外音の組み合わせ方を学び、音楽の仕組みや構造を理解するための重要な音楽理論。世界中の音楽学校で必修として行われる。 和音の配置から連結へ。まずは「バス課題」で和声学の基礎を学ぶ。また、終止形（カデンツ）についても学ぶ。		
到達目標	属七の和音を含む第一転回形までのバス課題が実施できる。		
授業計画	<p>主に「バス課題」で演習する。</p> <p>第1回 和音の基礎知識の確認及び四声体書式の実習 第2回 基本形三和音の配置「密集・開離」主要三和音 第3回 基本形三和音の連結（1）「共通音の保留」 第4回 基本形三和音の連結（2）「共通音のない和音の連結」 第5回 基本形三和音の連結（3）「II-Vの連結」 第6回 基本形三和音の連結（4）「V-VIの連結」 第7回 基本形三和音の連結（5）終止形（全・半・偽・変）+終止におけるV7の使い方（Iの四六を含む） 第8回 基本形三和音の連結（6）基本形のみで作るバス課題実習 第9回 第1転回形三和音（1）導入I、II、IV、V、V7の「1転」配置と連結 第10回 第1転回形三和音（2）II「1転」の最適配置及びII6-V、II6-V7の連結 第11回 基本形・第1転回形によるバス課題の実習（1）和音設定（iv度上、vi度上の和音設定） 第12回 基本形・第1転回形によるバス課題の実習（2）各種の調-1 第13回 基本形・第1転回形によるバス課題の実習（3）各種の調-2 第14回 基本形・第1転回形によるバス課題の実習（4）総括 第15回 総括</p>		
評価方法 (合計100%)	試験期間中に試験を行う。試験50%、授業への参加態度50%。		
失格条件	4回以上欠席した場合及び試験を受けなかった場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業での説明は必ず理解して帰ること。その後必ずノートを見直し、できれば課題を鍵盤で弾いてみること。 わからなくなったら教材を見る。次回の部分は必ず目を通してから授業に臨むこと。 次の授業までに予習1時間、復習3時間程度を取ること。		
課題へのフィード バック	授業内において行われる小テストは、授業時間内または次の時間に解説します。		
教科書	授業内で冊子やプリントを配布する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	和声法演習I～IVまでグレードによって系統だってカリキュラムが組まれるので順番に履修すること。例えば前期開講のIを落とすと後期開講のIIは履修できず翌年のIから取り直しとなる。また、教職課程を履修したい場合はIII・IVが教職必修科目となるため、和声法演習Iから2年間で滞ることなくIVまで単位を取得することが望ましい。		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	DC101A03	期間	前期
授業科目名	和声法演習 I A / 和声法演習 I		
英訳科目名	Harmony I A / Harmony I		
担当教員名	奥西 千壽		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> -
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	和声法とは和音や和音外音の組み合わせ方を学び、音楽の仕組みや構造を理解するための重要な音楽理論。世界中の音楽学校で必修として行われる。 和音の配置から連結へ。まずは「バス課題」で和声学の基礎を学ぶ。また、終止形（カデンツ）についても学ぶ。		
到達目標	属七の和音を含む第一転回形までのバス課題が実施できる。		
授業計画	<p>主に「バス課題」で演習する。</p> <p>第1回 和音の基礎知識の確認及び四声体書式の実習 第2回 基本形三和音の配置「密集・開離」主要三和音 第3回 基本形三和音の連結（1）「共通音の保留」 第4回 基本形三和音の連結（2）「共通音のない和音の連結」 第5回 基本形三和音の連結（3）「II-Vの連結」 第6回 基本形三和音の連結（4）「V-VIの連結」 第7回 基本形三和音の連結（5）終止形（全・半・偽・変）+終止におけるV7の使い方（Iの四六を含む） 第8回 基本形三和音の連結（6）基本形のみで作るバス課題実習 第9回 第1転回形三和音（1）導入 I、II、IV、V、V7の「1転」配置と連結 第10回 第1転回形三和音（2）II「1転」の最適配置及びII6-V、II6-V7の連結 第11回 基本形・第1転回形によるバス課題の実習（1）和音設定（iv度上、vi度上の和音設定） 第12回 基本形・第1転回形によるバス課題の実習（2）各種の調-1 第13回 基本形・第1転回形によるバス課題の実習（3）各種の調-2 第14回 基本形・第1転回形によるバス課題の実習（4）総括 第15回 総括</p>		
評価方法 (合計100%)	試験期間中に試験を行う。試験50%、授業への参加態度50%。		
失格条件	4回以上欠席した場合及び試験を受けなかった場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業での説明は必ず理解して帰ること。その後必ずノートを見直し、できれば課題を鍵盤で弾いてみる。わからなくなったら教材を見る。次回の部分は必ず目を通してから授業に臨むこと。次の授業までに予習1時間、復習3時間程度を取ること。		
課題へのフィードバック	授業内において行われる小テストは、授業時間内または次の時間に解説します。		
教科書	授業内で冊子やプリントを配布する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	和声法演習 I～IVまでグレードによって系統だってカリキュラムが組まれるので順番に履修すること。例えば前期開講のIを落とすと後期開講のIIは履修できず翌年のIから取り直しとなる。また、教職課程を履修したい場合はIII・IVが教職必修科目となるため、和声法演習 I から2年間で滞ることなくIVまで単位を取得することが望ましい。		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	DC101A03	期間	前期
授業科目名	和声法演習 I A / 和声法演習 I		
英訳科目名	Harmony I A / Harmony I		
担当教員名	丹羽 あゆみ		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> -
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	和声法とは和音や和音外音の組み合わせ方を学び、音楽の仕組みや構造を理解するための重要な音楽理論。世界中の音楽学校で必修として行われる。 和音の配置から連結へ。まずは「バス課題」で和声学の基礎を学ぶ。また、終止形（カデンツ）についても学ぶ。		
到達目標	属七の和音を含む第一転回形までのバス課題が実施できる。		
授業計画	<p>主に「バス課題」で演習する。</p> <p>第1回 和音の基礎知識の確認及び四声体書式の実習 第2回 基本形三和音の配置「密集・開離」主要三和音 第3回 基本形三和音の連結（1）「共通音の保留」 第4回 基本形三和音の連結（2）「共通音のない和音の連結」 第5回 基本形三和音の連結（3）「II-Vの連結」 第6回 基本形三和音の連結（4）「V-VIの連結」 第7回 基本形三和音の連結（5）終止形（全・半・偽・変）+終止におけるV7の使い方（Iの四六を含む） 第8回 基本形三和音の連結（6）基本形のみで作るバス課題実習 第9回 第1転回形三和音（1）導入I、II、IV、V、V7の「1転」配置と連結 第10回 第1転回形三和音（2）II「1転」の最適配置及びII6-V、II6-V7の連結 第11回 基本形・第1転回形によるバス課題の実習（1）和音設定（iv度上、vi度上の和音設定） 第12回 基本形・第1転回形によるバス課題の実習（2）各種の調-1 第13回 基本形・第1転回形によるバス課題の実習（3）各種の調-2 第14回 基本形・第1転回形によるバス課題の実習（4）総括 第15回 総括</p>		
評価方法 (合計100%)	試験期間中に試験を行う。試験50%、授業への参加態度50%。		
失格条件	4回以上欠席した場合及び試験を受けなかった場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業での説明は必ず理解して帰ること。その後必ずノートを見直し、できれば課題を鍵盤で弾いてみる。わからなくなったら教材を見る。次回の部分は必ず目を通してから授業に臨むこと。次の授業までに予習1時間、復習3時間程度を取ること。		
課題へのフィードバック	授業内において行われる小テストは、授業時間内または次の時間に解説します。		
教科書	授業内で冊子やプリントを配布する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	和声法演習I～IVまでグレードによって系統だってカリキュラムが組まれるので順番に履修すること。例えば前期開講のIを落とすと後期開講のIIは履修できず翌年のIから取り直しとなる。また、教職課程を履修したい場合はIII・IVが教職必修科目となるため、和声法演習Iから2年間で滞ることなくIVまで単位を取得することが望ましい。		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	DC101A03	期間	前期
授業科目名	和声法演習 I A / 和声法演習 I		
英訳科目名	Harmony I A / Harmony I		
担当教員名	赤石 敏夫		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> -
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	和声法とは和音や和音外音の組み合わせ方を学び、音楽の仕組みや構造を理解するための重要な音楽理論。世界中の音楽学校で必修として行われる。 和音の配置から連結へ。まずは「バス課題」で和声学の基礎を学ぶ。また、終止形（カデンツ）についても学ぶ。		
到達目標	属七の和音を含む第一転回形までのバス課題が実施できる。		
授業計画	<p>主に「バス課題」で演習する。</p> <p>第1回 和音の基礎知識の確認及び四声体書式の実習 第2回 基本形三和音の配置「密集・開離」主要三和音 第3回 基本形三和音の連結（1）「共通音の保留」 第4回 基本形三和音の連結（2）「共通音のない和音の連結」 第5回 基本形三和音の連結（3）「II-Vの連結」 第6回 基本形三和音の連結（4）「V-VIの連結」 第7回 基本形三和音の連結（5）終止形（全・半・偽・変）+終止におけるV7の使い方（Iの四六を含む） 第8回 基本形三和音の連結（6）基本形のみで作るバス課題実習 第9回 第1転回形三和音（1）導入I、II、IV、V、V7の「1転」配置と連結 第10回 第1転回形三和音（2）II「1転」の最適配置及びII6-V、II6-V7の連結 第11回 基本形・第1転回形によるバス課題の実習（1）和音設定（iv度上、vi度上の和音設定） 第12回 基本形・第1転回形によるバス課題の実習（2）各種の調-1 第13回 基本形・第1転回形によるバス課題の実習（3）各種の調-2 第14回 基本形・第1転回形によるバス課題の実習（4）総括 第15回 総括</p>		
評価方法 (合計100%)	試験期間中に試験を行う。試験50%、授業への参加態度50%。		
失格条件	4回以上欠席した場合及び試験を受けなかった場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業での説明は必ず理解して帰ること。その後必ずノートを見直し、できれば課題を鍵盤で弾いてみる。わからなくなったら教材を見る。次回の部分は必ず目を通してから授業に臨むこと。次の授業までに予習1時間、復習3時間程度を取ること。		
課題へのフィードバック	授業内において行われる小テストは、授業時間内または次の時間に解説します。		
教科書	授業内で冊子やプリントを配布する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	和声法演習I～IVまでグレードによって系統だってカリキュラムが組まれるので順番に履修すること。例えば前期開講のIを落とすと後期開講のIIは履修できず翌年のIから取り直しとなる。また、教職課程を履修したい場合はIII・IVが教職必修科目となるため、和声法演習Iから2年間で滞ることなくIVまで単位を取得することが望ましい。		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	DC101A03	期間	前期
授業科目名	和声法演習 I A / 和声法演習 I		
英訳科目名	Harmony I A / Harmony I		
担当教員名	中野 佳代子		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> -
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	和声法とは和音や和音外音の組み合わせ方を学び、音楽の仕組みや構造を理解するための重要な音楽理論。世界中の音楽学校で必修として行われる。 和音の配置から連結へ。まずは「バス課題」で和声学の基礎を学ぶ。また、終止形（カデンツ）についても学ぶ。		
到達目標	属七の和音を含む第一転回形までのバス課題が実施できる。		
授業計画	<p>主に「バス課題」で演習する。</p> <p>第1回 和音の基礎知識の確認及び四声体書式の実習 第2回 基本形三和音の配置「密集・開離」主要三和音 第3回 基本形三和音の連結（1）「共通音の保留」 第4回 基本形三和音の連結（2）「共通音のない和音の連結」 第5回 基本形三和音の連結（3）「II-Vの連結」 第6回 基本形三和音の連結（4）「V-VIの連結」 第7回 基本形三和音の連結（5）終止形（全・半・偽・変）+終止におけるV7の使い方（Iの四六を含む） 第8回 基本形三和音の連結（6）基本形のみで作るバス課題実習 第9回 第1転回形三和音（1）導入 I、II、IV、V、V7の「1転」配置と連結 第10回 第1転回形三和音（2）II「1転」の最適配置及びII6-V、II6-V7の連結 第11回 基本形・第1転回形によるバス課題の実習（1）和音設定（iv度上、vi度上の和音設定） 第12回 基本形・第1転回形によるバス課題の実習（2）各種の調-1 第13回 基本形・第1転回形によるバス課題の実習（3）各種の調-2 第14回 基本形・第1転回形によるバス課題の実習（4）総括 第15回 総括</p>		
評価方法 (合計100%)	試験期間中に試験を行う。試験50%、授業への参加態度50%。		
失格条件	4回以上欠席した場合及び試験を受けなかった場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業での説明は必ず理解して帰ること。その後必ずノートを見直し、できれば課題を鍵盤で弾いてみること。 わからなくなったら教材を見る。次回の部分は必ず目を通してから授業に臨むこと。 次の授業までに予習1時間、復習3時間程度を取ること。		
課題へのフィード バック	授業内において行われる小テストは、授業時間内または次の時間に解説します。		
教科書	授業内で冊子やプリントを配布する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	和声法演習 I～IVまでグレードによって系統だってカリキュラムが組まれるので順番に履修すること。例えば前期開講の I を落とすと後期開講の II は履修できず翌年の I から取り直しとなる。また、教職課程を履修したい場合は III・IV が教職必修科目となるため、和声法演習 I から2年間で滞ることなく IV まで単位を取得することが望ましい。		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	DC101A03	期間	前期
授業科目名	和声法演習 I A / 和声法演習 I		
英訳科目名	Harmony I A / Harmony I		
担当教員名	吉澤 ゆかり		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> -
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	和声法とは和音や和音外音の組み合わせ方を学び、音楽の仕組みや構造を理解するための重要な音楽理論。世界中の音楽学校で必修として行われる。 和音の配置から連結へ。まずは「バス課題」で和声学の基礎を学ぶ。また、終止形（カデンツ）についても学ぶ。		
到達目標	属七の和音を含む第一転回形までのバス課題が実施できる。		
授業計画	<p>主に「バス課題」で演習する。</p> <p>第1回 和音の基礎知識の確認及び四声体書式の実習 第2回 基本形三和音の配置「密集・開離」主要三和音 第3回 基本形三和音の連結（1）「共通音の保留」 第4回 基本形三和音の連結（2）「共通音のない和音の連結」 第5回 基本形三和音の連結（3）「II-Vの連結」 第6回 基本形三和音の連結（4）「V-VIの連結」 第7回 基本形三和音の連結（5）終止形（全・半・偽・変）+終止におけるV7の使い方（Iの四六を含む） 第8回 基本形三和音の連結（6）基本形のみで作るバス課題実習 第9回 第1転回形三和音（1）導入I、II、IV、V、V7の「1転」配置と連結 第10回 第1転回形三和音（2）II「1転」の最適配置及びII6-V、II6-V7の連結 第11回 基本形・第1転回形によるバス課題の実習（1）和音設定（iv度上、vi度上の和音設定） 第12回 基本形・第1転回形によるバス課題の実習（2）各種の調-1 第13回 基本形・第1転回形によるバス課題の実習（3）各種の調-2 第14回 基本形・第1転回形によるバス課題の実習（4）総括 第15回 総括</p>		
評価方法 (合計100%)	試験期間中に試験を行う。試験50%、授業への参加態度50%。		
失格条件	4回以上欠席した場合及び試験を受けなかった場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業での説明は必ず理解して帰ること。その後必ずノートを見直し、できれば課題を鍵盤で弾いてみること。 わからなくなったら教材を見る。次回の部分は必ず目を通してから授業に臨むこと。 次の授業までに予習1時間、復習3時間程度を取ること。		
課題へのフィード バック	授業内において行われる小テストは、授業時間内または次の時間に解説します。		
教科書	授業内で冊子やプリントを配布する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	和声法演習I～IVまでグレードによって系統だってカリキュラムが組まれるので順番に履修すること。例えば前期開講のIを落とすと後期開講のIIは履修できず翌年のIから取り直しとなる。また、教職課程を履修したい場合はIII・IVが教職必修科目となるため、和声法演習Iから2年間で滞ることなくIVまで単位を取得することが望ましい。		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	DC101B03	期間	後期
授業科目名	和声法演習 I B/和声法演習 II		
英訳科目名	Harmony I B/Harmony II		
担当教員名	大慈弥 恵麻		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	書式の学習で非常に重要な「ソプラノ課題」を学ぶ。決められたソプラノの下3声（アルト・テノール・バス）をバスの転回形も含めて最適な位置に配置し連結する。和音設定の段階でのカデンツの学習を行う。また、ソプラノの修飾を学び、次に学ぶ転位音へとつなげる。		
到達目標	三和音第2転回形、属七の和音の第3転回形を含むバス・ソプラノ課題		
授業計画	<p>「バス課題」と「ソプラノ課題」で演習する。</p> <p>第1回 基本形・第1転回形によるバス課題復習及びソプラノ課題の導入</p> <p>第2回 相性の良い両外声（断片）の実習（V+4→I6の連結含む）属七の3転</p> <p>第3回 ソプラノにあらわれる装飾音（8分音符で2度、3・6度、4・5度）の実習</p> <p>第4回 8分音符で動くソプラノ課題の実習（1）</p> <p>第5回 8分音符で動くソプラノ課題の実習（2）</p> <p>第6回 第2転回形の実習（1） V46とIV46</p> <p>第7回 第2転回形の実習（2） [IV（II6）→I46-V7→I]</p> <p>第8回 基本形・第1・第2転回形によるバス課題の実習</p> <p>第9回 基本形・第1・第2転回形によるソプラノ課題の実習</p> <p>第10回 基本形・第1・第2転回形によるバス・ソプラノ課題の実習</p> <p>第11回 各種調でのバス・ソプラノ課題実習（1）※クラスにより終止直前のドッベルの学習</p> <p>第12回 各種調でのバス・ソプラノ課題実習（2）※クラスにより終止直前のドッベルの学習</p> <p>第13回 各種調でのバス・ソプラノ課題実習（3）※クラスにより終止直前のドッベルの学習</p> <p>第14回 各種調でのバス・ソプラノ課題実習（4）※クラスにより終止直前のドッベルの学習</p> <p>第15回 総括</p>		
評価方法 (合計100%)	試験期間中に試験を行う。試験50%、授業への参加態度50%。		
失格条件	4回以上欠席した場合及び試験を受けなかった場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業での説明は必ず理解して帰ること。その後必ずノートを見直し、できれば課題を鍵盤で弾いてみる。わからなくなったら教材を見る。次回の部分は必ず目を通してから授業に臨むこと。 和声法演習 I がよく分かっていないためにこの授業でつまづくことがある。もう一度復習してみよう。 次の授業までに予習1時間、復習3時間程度を取ること。		
課題へのフィード バック	授業内において行われる課題、小テストは、授業時間内または次の授業時に解説する。		
教科書	授業内で冊子やプリントを配布する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	和声法演習 I～IVまでグレードによって系統だってカリキュラムが組まれるので順番に履修すること。例えば前期開講の I を落とすと後期開講の II は履修できず翌年の I から取り直しとなる。また、教職課程を履修したい場合は III・IV が教職必修科目となるため、和声法演習 I から2年間で滞ることなく IV まで単位を取得することが望ましい。		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	DC101B03	期間	後期
授業科目名	和声法演習 I B/和声法演習 II		
英訳科目名	Harmony I B/Harmony II		
担当教員名	奥西 千壽		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	書式の学習で非常に重要な「ソプラノ課題」を学ぶ。決められたソプラノの下3声（アルト・テノール・バス）をバスの転回形も含めて最適な位置に配置し連結する。和音設定の段階でのカデンツの学習を行う。また、ソプラノの修飾を学び、次に学ぶ転位音へとつなげる。		
到達目標	三和音第2転回形、属七の和音の第3転回形を含むバス・ソプラノ課題		
授業計画	<p>「バス課題」と「ソプラノ課題」で演習する。</p> <p>第1回 基本形・第1転回形によるバス課題復習及びソプラノ課題の導入</p> <p>第2回 相性の良い両外声（断片）の実習（V+4→I6の連結含む）属七の3転</p> <p>第3回 ソプラノにあらわれる装飾音（8分音符で2度、3・6度、4・5度）の実習</p> <p>第4回 8分音符で動くソプラノ課題の実習（1）</p> <p>第5回 8分音符で動くソプラノ課題の実習（2）</p> <p>第6回 第2転回形の実習（1） V46とIV46</p> <p>第7回 第2転回形の実習（2） [IV（II6）→I46-V7→I]</p> <p>第8回 基本形・第1・第2転回形によるバス課題の実習</p> <p>第9回 基本形・第1・第2転回形によるソプラノ課題の実習</p> <p>第10回 基本形・第1・第2転回形によるバス・ソプラノ課題の実習</p> <p>第11回 各種調でのバス・ソプラノ課題実習（1）※クラスにより終止直前のドッベルの学習</p> <p>第12回 各種調でのバス・ソプラノ課題実習（2）※クラスにより終止直前のドッベルの学習</p> <p>第13回 各種調でのバス・ソプラノ課題実習（3）※クラスにより終止直前のドッベルの学習</p> <p>第14回 各種調でのバス・ソプラノ課題実習（4）※クラスにより終止直前のドッベルの学習</p> <p>第15回 総括</p>		
評価方法 (合計100%)	試験期間中に試験を行う。試験50%、授業への参加態度50%。		
失格条件	4回以上欠席した場合及び試験を受けなかった場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業での説明は必ず理解して帰ること。その後必ずノートを見直し、できれば課題を鍵盤で弾いてみる。わからなくなったら教材を見る。次回の部分は必ず目を通してから授業に臨むこと。 和声法演習 I がよく分かっていないためにこの授業でつまづくことがある。もう一度復習してみよう。 次の授業までに予習1時間、復習3時間程度を取ること。		
課題へのフィード バック	授業内において行われる課題、小テストは、授業時間内または次の授業時に解説する。		
教科書	授業内で冊子やプリントを配布する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	和声法演習 I～IVまでグレードによって系統だてカリキュラムが組まれるので順番に履修すること。例えば前期開講の I を落とすと後期開講の II は履修できず翌年の I から取り直しとなる。また、教職課程を履修したい場合は III・IV が教職必修科目となるため、和声法演習 I から2年間で滞ることなく IV まで単位を取得することが望ましい。		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	DC101B03	期間	後期
授業科目名	和声法演習 I B/和声法演習 II		
英訳科目名	Harmony I B/Harmony II		
担当教員名	丹羽 あゆみ		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> -
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	書式の学習で非常に重要な「ソプラノ課題」を学ぶ。決められたソプラノの下3声（アルト・テノール・バス）をバスの転回形も含めて最適な位置に配置し連結する。和音設定の段階でのカデンツの学習を行う。また、ソプラノの修飾を学び、次に学ぶ転位音へとつなげる。		
到達目標	三和音第2転回形、属七の和音の第3転回形を含むバス・ソプラノ課題		
授業計画	<p>「バス課題」と「ソプラノ課題」で演習する。</p> <p>第1回 基本形・第1転回形によるバス課題復習及びソプラノ課題の導入</p> <p>第2回 相性の良い両外声（断片）の実習（V+4→I6の連結含む）属七の3転</p> <p>第3回 ソプラノにあらわれる装飾音（8分音符で2度、3・6度、4・5度）の実習</p> <p>第4回 8分音符で動くソプラノ課題の実習（1）</p> <p>第5回 8分音符で動くソプラノ課題の実習（2）</p> <p>第6回 第2転回形の実習（1） V46とIV46</p> <p>第7回 第2転回形の実習（2） [IV（II6）→I46-V7→I]</p> <p>第8回 基本形・第1・第2転回形によるバス課題の実習</p> <p>第9回 基本形・第1・第2転回形によるソプラノ課題の実習</p> <p>第10回 基本形・第1・第2転回形によるバス・ソプラノ課題の実習</p> <p>第11回 各種調でのバス・ソプラノ課題実習（1）※クラスにより終止直前のドッベルの学習</p> <p>第12回 各種調でのバス・ソプラノ課題実習（2）※クラスにより終止直前のドッベルの学習</p> <p>第13回 各種調でのバス・ソプラノ課題実習（3）※クラスにより終止直前のドッベルの学習</p> <p>第14回 各種調でのバス・ソプラノ課題実習（4）※クラスにより終止直前のドッベルの学習</p> <p>第15回 総括</p>		
評価方法 (合計100%)	試験期間中に試験を行う。試験50%、授業への参加態度50%。		
失格条件	4回以上欠席した場合及び試験を受けなかった場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業での説明は必ず理解して帰ること。その後必ずノートを見直し、できれば課題を鍵盤で弾いてみる。わからなくなったら教材を見る。次回の部分は必ず目を通してから授業に臨むこと。 和声法演習 I がよく分かっていないためにこの授業でつまづくことがある。もう一度復習してみよう。 次の授業までに予習1時間、復習3時間程度を取ること。		
課題へのフィード バック	授業内において行われる課題、小テストは、授業時間内または次の授業時に解説する。		
教科書	授業内で冊子やプリントを配布する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	和声法演習 I～IVまでグレードによって系統だってカリキュラムが組まれるので順番に履修すること。例えば前期開講の I を落とすと後期開講の II は履修できず翌年の I から取り直しとなる。また、教職課程を履修したい場合は III・IV が教職必修科目となるため、和声法演習 I から2年間で滞ることなく IV まで単位を取得することが望ましい。		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	DC101B03	期間	後期
授業科目名	和声法演習 I B / 和声法演習 II		
英訳科目名	Harmony I B / Harmony II		
担当教員名	赤石 敏夫		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	書式の学習で非常に重要な「ソプラノ課題」を学ぶ。決められたソプラノの下3声（アルト・テノール・バス）をバスの転回形も含めて最適な位置に配置し連結する。和音設定の段階でのカデンツの学習を行う。また、ソプラノの修飾を学び、次に学ぶ転位音へとつなげる。		
到達目標	三和音第2転回形、属七の和音の第3転回形を含むバス・ソプラノ課題ができる。		
授業計画	<p>「バス課題」と「ソプラノ課題」で演習する。</p> <p>第1回 基本形・第1転回形によるバス課題復習及びソプラノ課題の導入</p> <p>第2回 相性の良い両外声（断片）の実習（V+4→I6の連結含む）属七の3転</p> <p>第3回 ソプラノにあらわれる装飾音（8分音符で2度、3・6度、4・5度）の実習</p> <p>第4回 8分音符で動くソプラノ課題の実習（1）</p> <p>第5回 8分音符で動くソプラノ課題の実習（2）</p> <p>第6回 第2転回形の実習（1） V46とIV46</p> <p>第7回 第2転回形の実習（2） [IV（II6）→I46-V7→I]</p> <p>第8回 基本形・第1・第2転回形によるバス課題の実習</p> <p>第9回 基本形・第1・第2転回形によるソプラノ課題の実習</p> <p>第10回 基本形・第1・第2転回形によるバス・ソプラノ課題の実習</p> <p>第11回 各種調でのバス・ソプラノ課題実習（1）※クラスにより終止直前のドッベルの学習</p> <p>第12回 各種調でのバス・ソプラノ課題実習（2）※クラスにより終止直前のドッベルの学習</p> <p>第13回 各種調でのバス・ソプラノ課題実習（3）※クラスにより終止直前のドッベルの学習</p> <p>第14回 各種調でのバス・ソプラノ課題実習（4）※クラスにより終止直前のドッベルの学習</p> <p>第15回 総括</p>		
評価方法 (合計100%)	試験期間中に試験を行う。試験50%、授業への参加態度50%。		
失格条件	4回以上欠席した場合及び試験を受けなかった場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業での説明は必ず理解して帰ること。その後必ずノートを見直し、できれば課題を鍵盤で弾いてみる。わからなくなったら教材を見る。次回の部分は必ず目を通してから授業に臨むこと。 和声法演習 I がよく分かっていないためにこの授業でつまづくことがある。もう一度復習してみよう。 次の授業までに予習1時間、復習3時間程度を取ること。		
課題へのフィード バック	授業内において行われる課題、小テストは、授業時間内または次の授業時に解説する。		
教科書	授業内で冊子やプリントを配布する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	和声法演習 I～IVまでグレードによって系統だってカリキュラムが組まれるので順番に履修すること。例えば前期開講の I を落とすと後期開講の II は履修できず翌年の I から取り直しとなる。また、教職課程を履修したい場合は III・IV が教職必修科目となるため、和声法演習 I から2年間で滞ることなく IV まで単位を取得することが望ましい。		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	DC101B03	期間	後期
授業科目名	和声法演習 I B/和声法演習 II		
英訳科目名	Harmony I B/Harmony II		
担当教員名	中野 佳代子		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> -
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	書式の学習で非常に重要な「ソプラノ課題」を学ぶ。決められたソプラノの下3声（アルト・テノール・バス）をバスの転回形も含めて最適な位置に配置し連結する。和音設定の段階でのカデンツの学習を行う。また、ソプラノの修飾を学び、次に学ぶ転位音へとつなげる。		
到達目標	三和音第2転回形、属七の和音の第3転回形を含むバス・ソプラノ課題		
授業計画	<p>「バス課題」と「ソプラノ課題」で演習する。</p> <p>第1回 基本形・第1転回形によるバス課題復習及びソプラノ課題の導入</p> <p>第2回 相性の良い両外声（断片）の実習（V+4→I6の連結含む）属七の3転</p> <p>第3回 ソプラノにあらわれる装飾音（8分音符で2度、3・6度、4・5度）の実習</p> <p>第4回 8分音符で動くソプラノ課題の実習（1）</p> <p>第5回 8分音符で動くソプラノ課題の実習（2）</p> <p>第6回 第2転回形の実習（1） V46とIV46</p> <p>第7回 第2転回形の実習（2） [IV（II6）→I46-V7→I]</p> <p>第8回 基本形・第1・第2転回形によるバス課題の実習</p> <p>第9回 基本形・第1・第2転回形によるソプラノ課題の実習</p> <p>第10回 基本形・第1・第2転回形によるバス・ソプラノ課題の実習</p> <p>第11回 各種調でのバス・ソプラノ課題実習（1）※クラスにより終止直前のドッベルの学習</p> <p>第12回 各種調でのバス・ソプラノ課題実習（2）※クラスにより終止直前のドッベルの学習</p> <p>第13回 各種調でのバス・ソプラノ課題実習（3）※クラスにより終止直前のドッベルの学習</p> <p>第14回 各種調でのバス・ソプラノ課題実習（4）※クラスにより終止直前のドッベルの学習</p> <p>第15回 総括</p>		
評価方法 (合計100%)	試験期間中に試験を行う。試験50%、授業への参加態度50%。		
失格条件	4回以上欠席した場合及び試験を受けなかった場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業での説明は必ず理解して帰ること。その後必ずノートを見直し、できれば課題を鍵盤で弾いてみる。わからなくなったら教材を見る。次回の部分は必ず目を通してから授業に臨むこと。 和声法演習 I がよく分かっていないためにこの授業でつまづくことがある。もう一度復習してみよう。 次の授業までに予習1時間、復習3時間程度を取ること。		
課題へのフィード バック	授業内において行われる課題、小テストは、授業時間内または次の授業時に解説する。		
教科書	授業内で冊子やプリントを配布する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	和声法演習 I～IVまでグレードによって系統だってカリキュラムが組まれるので順番に履修すること。例えば前期開講の I を落とすと後期開講の II は履修できず翌年の I から取り直しとなる。また、教職課程を履修したい場合は III・IV が教職必修科目となるため、和声法演習 I から2年間で滞ることなく IV まで単位を取得することが望ましい。		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	DC101B03	期間	後期
授業科目名	和声法演習 I B / 和声法演習 II		
英訳科目名	Harmony I B / Harmony II		
担当教員名	吉澤 ゆかり		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> -
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	書式の学習で非常に重要な「ソプラノ課題」を学ぶ。決められたソプラノの下3声（アルト・テノール・バス）をバスの転回形も含めて最適な位置に配置し連結する。和音設定の段階でのカデンツの学習を行う。また、ソプラノの修飾を学び、次に学ぶ転位音へとつなげる。		
到達目標	三和音第2転回形、属七の和音の第3転回形を含むバス・ソプラノ課題		
授業計画	<p>「バス課題」と「ソプラノ課題」で演習する。</p> <p>第1回 基本形・第1転回形によるバス課題復習及びソプラノ課題の導入</p> <p>第2回 相性の良い両外声（断片）の実習（V+4→I6の連結含む）属七の3転</p> <p>第3回 ソプラノにあらわれる装飾音（8分音符で2度、3・6度、4・5度）の実習</p> <p>第4回 8分音符で動くソプラノ課題の実習（1）</p> <p>第5回 8分音符で動くソプラノ課題の実習（2）</p> <p>第6回 第2転回形の実習（1） V46とIV46</p> <p>第7回 第2転回形の実習（2） [IV（II6）→I46-V7→I]</p> <p>第8回 基本形・第1・第2転回形によるバス課題の実習</p> <p>第9回 基本形・第1・第2転回形によるソプラノ課題の実習</p> <p>第10回 基本形・第1・第2転回形によるバス・ソプラノ課題の実習</p> <p>第11回 各種調でのバス・ソプラノ課題実習（1）※クラスにより終止直前のドッベルの学習</p> <p>第12回 各種調でのバス・ソプラノ課題実習（2）※クラスにより終止直前のドッベルの学習</p> <p>第13回 各種調でのバス・ソプラノ課題実習（3）※クラスにより終止直前のドッベルの学習</p> <p>第14回 各種調でのバス・ソプラノ課題実習（4）※クラスにより終止直前のドッベルの学習</p> <p>第15回 総括</p>		
評価方法 (合計100%)	試験期間中に試験を行う。試験50%、授業への参加態度50%。		
失格条件	4回以上欠席した場合及び試験を受けなかった場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業での説明は必ず理解して帰ること。その後必ずノートを見直し、できれば課題を鍵盤で弾いてみる。わからなくなったら教材を見る。次回の部分は必ず目を通してから授業に臨むこと。 和声法演習 I がよく分かっていないためにこの授業でつまづくことがある。もう一度復習してみよう。 次の授業までに予習1時間、復習3時間程度を取ること。		
課題へのフィード バック	授業内において行われる課題、小テストは、授業時間内または次の授業時に解説する。		
教科書	授業内で冊子やプリントを配布する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	和声法演習 I～IVまでグレードによって系統だってカリキュラムが組まれるので順番に履修すること。例えば前期開講の I を落とすと後期開講の II は履修できず翌年の I から取り直しとなる。また、教職課程を履修したい場合は III・IV が教職必修科目となるため、和声法演習 I から2年間で滞ることなく IV まで単位を取得することが望ましい。		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	和声法演習Ⅱ A		
英訳科目名	Harmony Ⅱ A		
担当教員名	赤石 敏夫		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	和声法演習Ⅰの内容に加えて、属七の和音のすべての転回形、副七の和音（Ⅱ7）、さらに借用和音（副属和音、準固有和音）、属九の和音を学ぶ。 クラスによっては、ドリア、ナポリも取り上げ、また転調についても学ぶ。		
到達目標	属七の和音のすべての転回形を使えるようにする。副属和音、準固有和音など様々な種類の和音を使うことができる。		
授業計画	<p>様々な種類の和音を学びます。クラスによっては内容が前後したり回数が変わったりします。</p> <p>第1回 授業の概要説明。和声法演習ⅠA・ⅠBの復習</p> <p>第2回 属七の和音（全転回形）</p> <p>第3回 バス・ソプラノ課題（属七全転回形を含む）</p> <p>第4回 構成音の装飾的な動き</p> <p>第5回 ここまでの問題演習</p> <p>第6回 小テスト（調内和音）</p> <p>第7回 ドッペルドミナント（属調のV・V7） 1</p> <p>第8回 ドッペルドミナント（属調のV・V7） 2</p> <p>第9回 準固有和音（同主短調からの借用） 1</p> <p>第10回 準固有和音（同主短調からの借用） 2</p> <p>第11回 ドリア、ナポリの和音</p> <p>第12回 副属和音（属調のV（7）、下屬調のV（7）、平行調のV（7））近親調</p> <p>第13回 副七（Ⅱ7）の和音、属九の和音</p> <p>第14回 様々な和音を含む、バス・ソプラノ課題。小テスト</p> <p>第15回 内容理解の確認</p>		
評価方法 (合計100%)	試験期間中に試験を行う。試験50%、授業への参加態度50%。		
失格条件	4回以上欠席した場合及び試験を受けなかった場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>授業での説明は必ず理解して帰ること。その後必ずノートを見直し、できれば課題を鍵盤で弾いてみる。このあたりになると響がどういふものか音で確認することも重要。宿題は必ずやり、それを見てもらうこと。次回復習に1時間、予習に3時間ほどかけること。</p>		
課題へのフィードバック	授業内において行われる課題、小テストは、授業時間内または次の授業時に解説する。		
教科書	授業内で冊子やプリントを配布する。 和声法演習Ⅰで配布したものは引き続きそれを使う。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	和声法演習Ⅰから系統だてカリキュラムが組まれるので和声法演習Ⅱから逆に受講することはできない。 また、和声法演習ⅡAの単位を取得せずⅡBを受講することは望ましくない。		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	DC301B01	期間	前期
授業科目名	和声法演習Ⅲ		
英訳科目名	Harmony Ⅲ		
担当教員名	赤石 敏夫		
ディプロマ・ポリシー1	◎	ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	和声法演習Ⅰ・Ⅱの内容に加えて、属七の和音のすべての転回形、副七の和音（Ⅱ7）、さらに借用和音（副属和音、準固有和音）、属九の和音を学ぶ。 クラスによっては、ドリア、ナポリも取り上げ、また転調についても学ぶ。		
到達目標	属七の和音のすべての転回形を使えるようにする。副属和音、準固有和音など様々な種類の和音を使うことができる。		
授業計画	<p>様々な種類の和音を学びます。クラスによっては内容が前後したり回数が変わったりします。</p> <p>第1回 授業の概要説明。和声法演習Ⅰ・Ⅱの復習 第2回 属七の和音（全転回形） 第3回 バス・ソプラノ課題（属七全転回形を含む） 第4回 構成音の装飾的な動き（ソプラノ及びバス） 第5回 ここまでの問題演習 第6回 小テスト（調内和音） 第7回 ドッペルドミナント（属調のV・V7）1 第8回 ドッペルドミナント（属調のV・V7）2 第9回 準固有和音（同主短調からの借用）1 第10回 準固有和音（同主短調からの借用）2 第11回 ドリア、ナポリの和音 第12回 副属和音（属調のV（7）、下屬調のV（7）、平行調のV（7））近親調 第13回 副七（Ⅱ7）の和音、属九の和音 第14回 様々な和音を含む、バス・ソプラノ課題。小テスト 第15回 内容理解の確認</p>		
評価方法 (合計100%)	試験期間中に試験を行う。試験50%、授業への参加態度50%。		
失格条件	4回以上欠席した場合及び試験を受けなかった場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業での説明は必ず理解して帰ること。その後必ずノートを見直し、できれば課題を鍵盤で弾いてみる。このあたりになると響がどういふものか音で確認することも重要。宿題は必ずやり、それを見てもらうこと。次回部分は必ず目を通してから授業に臨むこと。 復習に1時間、予習に3時間ほどかけること。		
課題へのフィード バック	授業内において行われる課題、小テストは、授業時間内または次の授業時に解説する。		
教科書	授業内で冊子やプリントを配布する。 和声法演習Ⅰ・Ⅱで配布したものは引き続きそれを使う。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考	和声法演習Ⅰ～Ⅳまでグレードによって系統だっカリキュラムが組まれるので順番に履修すること。Ⅰ・Ⅱの単位取得がされていないとⅢ以降は受講できない。また、前期開講のⅢを落とすと後期開講のⅣは履修できず翌年のⅢから取り直しとなる。また、教職課程を履修したい場合はⅢ・Ⅳが教職必修科目となるため、和声法演習Ⅰから2年間で滞ることなくⅣまで単位を取得することが望ましい。		
科目生への開講	あり		

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	和声法演習Ⅱ A		
英訳科目名	Harmony Ⅱ A		
担当教員名	小西 円子		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	和声法演習Ⅰの内容に加えて、属七の和音のすべての転回形、副七の和音（Ⅱ7）、さらに借用和音（副属和音、準固有和音）、属九の和音を学ぶ。 クラスによっては、ドリア、ナポリも取り上げ、また転調についても学ぶ。		
到達目標	属七の和音のすべての転回形を使えるようにする。副属和音、準固有和音など様々な種類の和音を使えるようにする。		
授業計画	<p>様々な種類の和音を学びます。クラスによっては内容が前後したり回数が変わったりします。</p> <p>第1回 授業の概要説明。和声法演習ⅠA・ⅠBの復習</p> <p>第2回 属七の和音（全転回形）</p> <p>第3回 バス・ソプラノ課題（属七全転回形を含む）</p> <p>第4回 構成音の装飾的な動き</p> <p>第5回 ここまでの問題演習</p> <p>第6回 小テスト（調内和音）</p> <p>第7回 ドッペルドミナント（属調のV・V7） 1</p> <p>第8回 ドッペルドミナント（属調のV・V7） 2</p> <p>第9回 準固有和音（同主短調からの借用） 1</p> <p>第10回 準固有和音（同主短調からの借用） 2</p> <p>第11回 ドリア、ナポリの和音</p> <p>第12回 副属和音（属調のV（7）、下屬調のV（7）、平行調のV（7））近親調</p> <p>第13回 副七（Ⅱ7）の和音、属九の和音</p> <p>第14回 様々な和音を含む、バス・ソプラノ課題。小テスト</p> <p>第15回 内容理解の確認</p>		
評価方法 (合計100%)	試験期間中に試験を行う。試験50%、授業への参加態度50%。		
失格条件	4回以上欠席した場合及び試験を受けなかった場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>授業での説明は必ず理解して帰ること。その後必ずノートを見直し、できれば課題を鍵盤で弾いてみる。このあたりになると響がどういふものか音で確認することも重要。宿題は必ずやり、それを見てもらうこと。次回復習に1時間、予習に3時間ほどかけること。</p>		
課題へのフィードバック	授業内において行われる課題、小テストは、授業時間内または次の授業時に解説する。		
教科書	授業内で冊子やプリントを配布する。 和声法演習Ⅰで配布したものは引き続きそれを使う。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	和声法演習Ⅰから系統だてカリキュラムが組まれるので和声法演習Ⅱから逆に受講することはできない。 また、和声法演習ⅡAの単位を取得せずⅡBを受講することは望ましくない。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	DC301B01	期間	前期
授業科目名	和声法演習Ⅲ		
英訳科目名	Harmony Ⅲ		
担当教員名	小西 円子		
ディプロマ・ポリシー1	◎	ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	和声法演習Ⅰ・Ⅱの内容に加えて、属七の和音のすべての転回形、副七の和音（Ⅱ7）、さらに借用和音（副属和音、準固有和音）、属九の和音を学ぶ。 クラスによっては、ドリア、ナポリも取り上げ、また転調についても学ぶ。		
到達目標	属七の和音のすべての転回形を使えるようにする。副属和音、準固有和音など様々な種類の和音を使えるようにする。		
授業計画	<p>様々な種類の和音を学びます。クラスによっては内容が前後したり回数が変わったりします。</p> <p>第1回 授業の概要説明。和声法演習Ⅰ・Ⅱの復習 第2回 属七の和音（全転回形） 第3回 バス・ソプラノ課題（属七全転回形を含む） 第4回 構成音の装飾的な動き（ソプラノ及びバス） 第5回 ここまでの問題演習 第6回 小テスト（調内和音） 第7回 ドッペルドミナント（属調のV・V7） 1 第8回 ドッペルドミナント（属調のV・V7） 2 第9回 準固有和音（同主短調からの借用） 1 第10回 準固有和音（同主短調からの借用） 2 第11回 ドリア、ナポリの和音 第12回 副属和音（属調のV（7）、下屬調のV（7）、平行調のV（7））近親調 第13回 副七（Ⅱ7）の和音、属九の和音 第14回 様々な和音を含む、バス・ソプラノ課題。小テスト 第15回 内容理解の確認</p>		
評価方法 (合計100%)	試験期間中に試験を行う。試験50%、授業への参加態度50%。		
失格条件	4回以上欠席した場合及び試験を受けなかった場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業での説明は必ず理解して帰ること。その後必ずノートを見直し、できれば課題を鍵盤で弾いてみる。このあたりになると響がどういふものか音で確認することも重要。宿題は必ずやり、それを見てもらうこと。次回部分は必ず目を通してから授業に臨むこと。 復習に1時間、予習に3時間ほどかけること。		
課題へのフィード バック	授業内において行われる課題、小テストは、授業時間内または次の授業時に解説する。		
教科書	授業内で冊子やプリントを配布する。 和声法演習Ⅰ・Ⅱで配布したものは引き続きそれを使う。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考	和声法演習Ⅰ～Ⅳまでグレードによって系統だっカリキュラムが組まれるので順番に履修すること。Ⅰ・Ⅱの単位取得がされていないとⅢ以降は受講できない。また、前期開講のⅢを落とすと後期開講のⅣは履修できず翌年のⅢから取り直しとなる。また、教職課程を履修したい場合はⅢ・Ⅳが教職必修科目となるため、和声法演習Ⅰから2年間で滞ることなくⅣまで単位を取得することが望ましい。		
科目生への開講	なし		

ナンバリング	DC301B01	期間	前期
授業科目名	和声法演習Ⅲ		
英訳科目名	Harmony Ⅲ		
担当教員名	吉澤 ゆかり		
ディプロマ・ポリシー1	◎	ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	和声法演習Ⅰ・Ⅱの内容に加えて、属七の和音のすべての転回形、副七の和音（Ⅱ7）、さらに借用和音（副属和音、準固有和音）、属九の和音を学ぶ。 クラスによっては、ドリア、ナポリも取り上げ、また転調についても学ぶ。		
到達目標	属七の和音のすべての転回形を使えるようにする。副属和音、準固有和音など様々な種類の和音を使えるようにする。		
授業計画	<p>様々な種類の和音を学びます。クラスによっては内容が前後したり回数が変わったりします。</p> <p>第1回 授業の概要説明。和声法演習Ⅰ・Ⅱの復習 第2回 属七の和音（全転回形） 第3回 バス・ソプラノ課題（属七全転回形を含む） 第4回 構成音の装飾的な動き（ソプラノ及びバス） 第5回 ここまでの問題演習 第6回 小テスト（調内和音） 第7回 ドッペルドミナント（属調のV・V7）1 第8回 ドッペルドミナント（属調のV・V7）2 第9回 準固有和音（同主短調からの借用）1 第10回 準固有和音（同主短調からの借用）2 第11回 ドリア、ナポリの和音 第12回 副属和音（属調のV（7）、下屬調のV（7）、平行調のV（7））近親調 第13回 副七（Ⅱ7）の和音、属九の和音 第14回 様々な和音を含む、バス・ソプラノ課題。小テスト 第15回 内容理解の確認</p>		
評価方法 (合計100%)	試験期間中に試験を行う。試験50%、授業への参加態度50%。		
失格条件	4回以上欠席した場合及び試験を受けなかった場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業での説明は必ず理解して帰ること。その後必ずノートを見直し、できれば課題を鍵盤で弾いてみる。このあたりになると響がどういふものか音で確認することも重要。宿題は必ずやり、それを見てもらうこと。次回部分は必ず目を通してから授業に臨むこと。 復習に1時間、予習に3時間ほどかけること。		
課題へのフィード バック	授業内において行われる課題、小テストは、授業時間内または次の授業時に解説する。		
教科書	授業内で冊子やプリントを配布する。 和声法演習Ⅰ・Ⅱで配布したものは引き続きそれを使う。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考	和声法演習Ⅰ～Ⅳまでグレードによって系統だつてカリキュラムが組まれるので順番に履修すること。Ⅰ・Ⅱの単位取得がされていないとⅢ以降は受講できない。また、前期開講のⅢを落とすと後期開講のⅣは履修できず翌年のⅢから取り直しとなる。また、教職課程を履修したい場合はⅢ・Ⅳが教職必修科目となるため、和声法演習Ⅰから2年間で滞ることなくⅣまで単位を取得することが望ましい。		
科目生への開講	なし		

ナンバリング	DC301B01	期間	前期
授業科目名	和声法演習Ⅲ		
英訳科目名	Harmony Ⅲ		
担当教員名	大慈弥 恵麻		
ディプロマ・ポリシー1	◎	ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	和声法演習Ⅰ・Ⅱの内容に加えて、属七の和音のすべての転回形、副七の和音（Ⅱ7）、さらに借用和音（副属和音、準固有和音）、属九の和音を学ぶ。 クラスによっては、ドリア、ナポリも取り上げ、また転調についても学ぶ。		
到達目標	属七の和音のすべての転回形を使えるようにする。副属和音、準固有和音など様々な種類の和音を使えるようにする。		
授業計画	様々な種類の和音を学びます。クラスによっては内容が前後したり回数が変わったりします。 第1回 授業の概要説明。和声法演習Ⅰ・Ⅱの復習 第2回 属七の和音（全転回形） 第3回 バス・ソプラノ課題（属七全転回形を含む） 第4回 構成音の装飾的な動き（ソプラノ及びバス） 第5回 ここまでの問題演習 第6回 小テスト（調内和音） 第7回 ドッペルドミナント（属調のⅤ・Ⅴ7） 1 第8回 ドッペルドミナント（属調のⅤ・Ⅴ7） 2 第9回 準固有和音（同主短調からの借用） 1 第10回 準固有和音（同主短調からの借用） 2 第11回 ドリア、ナポリの和音 第12回 副属和音（属調のⅤ（7）、下屬調のⅤ（7）、平行調のⅤ（7））近親調 第13回 副七（Ⅱ7）の和音、属九の和音 第14回 様々な和音を含む、バス・ソプラノ課題。小テスト 第15回 内容理解の確認		
評価方法 (合計100%)	試験期間中に試験を行う。試験50%、授業への参加態度50%。		
失格条件	4回以上欠席した場合及び試験を受けなかった場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業での説明は必ず理解して帰ること。その後必ずノートを見直し、できれば課題を鍵盤で弾いてみる。このあたりになると響がどういふものか音で確認することも重要。宿題は必ずやり、それを見てもらうこと。次回部分は必ず目を通してから授業に臨むこと。 復習に1時間、予習に3時間ほどかけること。		
課題へのフィード バック	授業内において行われる課題、小テストは、授業時間内または次の授業時に解説する。		
教科書	授業内で冊子やプリントを配布する。 和声法演習Ⅰ・Ⅱで配布したものは引き続きそれを使う。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考	和声法演習Ⅰ～Ⅳまでグレードによって系統だっカリキュラムが組まれるので順番に履修すること。Ⅰ・Ⅱの単位取得がされていないとⅢ以降は受講できない。また、前期開講のⅢを落とすと後期開講のⅣは履修できず翌年のⅢから取り直しとなる。また、教職課程を履修したい場合はⅢ・Ⅳが教職必修科目となるため、和声法演習Ⅰから2年間で滞ることなくⅣまで単位を取得することが望ましい。		
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	和声法演習ⅡB		
英訳科目名	HarmonyⅡB		
担当教員名	赤石 敏夫		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	バス課題に対して美しい旋律をつける、また旋律への和声付けを学ぶ。和音構成音と和音外音の区別、旋律への和音設定等。和声法の集大成とも云える内容で、ここまで来て様々な応用ができるようになる。		
到達目標	和音外音（非和声音）を含むソプラノ課題、転調課題が実施できる。		
授業計画	<p>様々な種類の和音と和音外音を学びます。旋律課題を実施。ラスによっては内容が前後したり回数が変わったりする。</p> <p>第1回 授業の概要説明 第2回 和声法の全体確認（復習） 基本形、転回形、バス課題、ソプラノ課題 第3回 様々な種類の和音 第4回 転調①近親調、副属和音 第5回 転調②離脱・転入 第6回 転調③課題演習 第7回 増六・増五六の和音 第8回 和音外音（非和声音）、構成音の転位（定位、修飾、転位の考え方）1 第9回 和音外音（非和声音）、構成音の転位（定位、修飾、転位の考え方）2 第10回 和音外音（非和声音）、構成音の転位（定位、修飾、転位の考え方）3 第11回 和音外音、副属和音を含むバス。ソプラノ課題 第12回 旋律課題の導入、バス課題に美しい旋律を作る 第13回 旋律課題の演習（転調を含む）。様々な課題の演習。 第14回 様々な和音を含む旋律課題の学習。美しいバスの設定 第15回 内容理解の確認</p>		
評価方法 (合計100%)	試験期間中に試験を行う。試験50%、授業への参加態度50%。		
失格条件	4回以上欠席した場合及び試験を受けなかった場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>授業での説明は必ず理解して帰ること。その後必ずノートを見直し、できれば課題を鍵盤で弾いてみる。このあたりになると響がどういふものか音で確認することも重要。宿題は必ずやり、それを見てもらうこと。次回の部分には必ず目を通してから授業に臨むこと。このあたりは和声法の集大成である。2年間の学習を果のあるものにすべく真摯に取り組むこと。音楽の専門教育を受けたとするのは、このあたりが理解できて課題が実施できるかにかかっている。</p> <p>復習に2時間、予習に3時間ほど時間をかけること。</p>		
課題へのフィードバック	授業内において行われる課題、小テストは、授業時間内または次の授業時に解説する。		
教科書	授業内で冊子やプリントを配布する。 和声法演習ⅡAで配布したものは引き続きそれを使う。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考	和声法演習Ⅰから系統だっカリキュラムが組まれるので和声法演習Ⅱから逆に受講することはできない。 また、和声法演習ⅡAの単位を取得せずⅡBを受講することは望ましくない。		
科目生への開講	あり		

ナンバリング	DC301C01	期間	後期
授業科目名	和声法演習Ⅳ		
英訳科目名	Harmony Ⅳ		
担当教員名	赤石 敏夫		
ディプロマ・ポリシー1	◎	ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	バス課題に対して美しい旋律をつける、また旋律への和声付けを学ぶ。和音構成音と和音外音の区別、旋律への和音設定等。和声法の集大成とも云える内容で、ここまで来て様々な応用ができるようになる。		
到達目標	和音外音（非和声音）を含むソプラノ課題、転調課題が実施できる。		
授業計画	<p>様々な種類の和音と和音外音を学びます。旋律課題を実施。クラスによっては内容が前後したり回数が変わったりする。</p> <p>第1回 授業の概要説明 第2回 和声法の全体確認（復習） 基本形、転回形、バス課題、ソプラノ課題 第3回 様々な種類の和音 第4回 転調①近親調、副属和音 第5回 転調②離脱・転入 第6回 転調③課題演習 第7回 増六・増五六の和音 第8回 和音外音（非和声音）、構成音の転位（定位、修飾、転位の考え方）1 第9回 和音外音（非和声音）、構成音の転位（定位、修飾、転位の考え方）2 第10回 和音外音（非和声音）、構成音の転位（定位、修飾、転位の考え方）3 第11回 和音外音、副属和音を含むバス。ソプラノ課題 第12回 旋律課題の導入、バス課題に美しい旋律を作る 第13回 旋律課題の演習（転調を含む）。様々な課題の演習。 第14回 様々な和音を含む旋律課題の学習。美しいバスの設定 第15回 内容理解の確認</p>		
評価方法 (合計100%)	試験期間中に試験を行う。試験50%、授業への参加態度50%。		
失格条件	4回以上欠席した場合及び試験を受けなかった場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>授業での説明は必ず理解して帰ること。その後必ずノートを見直し、できれば課題を鍵盤で弾いてみる。このあたりになると響がどういふものか音で確認することも重要。宿題は必ずやり、それを見てもらうこと。次回の部分には必ず目を通してから授業に臨むこと。このあたりは和声法の集大成である。2年間の学習を果のあるものにすべく真摯に取り組むこと。音楽の専門教育を受けたとするのは、このあたりが理解できて課題が実施できるかにかかっている。</p> <p>復習に2時間、予習に3時間ほど時間をかけること。</p>		
課題へのフィードバック	授業内において行われる課題、小テストは、授業時間内または次の授業時に解説する。		
教科書	授業内で冊子やプリントを配布する。 和声法演習Ⅲで配布したものは引き続きそれを使う。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考	和声法演習Ⅰ～Ⅳまでグレードによって系統だっカリキュラムが組まれるので順番に履修すること。Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの単位取得がされていないと和声法演習Ⅳは受講できない。また、前期開講のⅢを落とすと後期開講のⅣは履修できず翌年のⅢから取り直しとなる。また、教職課程を履修したい場合はⅢ・Ⅳが教職必修科目となるため、和声法演習Ⅰから2年間で滞ることなくⅣまで単位を取得することが望ましい。		
科目生への開講	あり		

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	和声法演習ⅡB		
英訳科目名	HarmonyⅡB		
担当教員名	小西 円子		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	バス課題に対して美しい旋律をつける、また旋律への和声付けを学ぶ。和音構成音と和音外音の区別、旋律への和音設定等。和声法の集大成とも云える内容で、ここまで来て様々な応用ができるようになる。		
到達目標	和音外音（非和声音）を含むソプラノ課題、転調課題が実施できるようにする。		
授業計画	<p>様々な種類の和音と和音外音を学びます。旋律課題を実施。クラスによっては内容が前後したり回数が変わったりする。</p> <p>第1回 授業の概要説明 第2回 和声法の全体確認（復習） 基本形、転回形、バス課題、ソプラノ課題 第3回 様々な種類の和音 第4回 転調①近親調、副属和音 第5回 転調②離脱・転入 第6回 転調③課題演習 第7回 増六・増五六の和音 第8回 和音外音（非和声音）、構成音の転位（定位、修飾、転位の考え方）1 第9回 和音外音（非和声音）、構成音の転位（定位、修飾、転位の考え方）2 第10回 和音外音（非和声音）、構成音の転位（定位、修飾、転位の考え方）3 第11回 和音外音、副属和音を含むバス。ソプラノ課題 第12回 旋律課題の導入、バス課題に美しい旋律を作る 第13回 旋律課題の演習（転調を含む）。様々な課題の演習。 第14回 様々な和音を含む旋律課題の学習。美しいバスの設定 第15回 内容理解の確認</p>		
評価方法 (合計100%)	試験期間中に試験を行う。試験50%、授業への参加態度50%。		
失格条件	4回以上欠席した場合及び試験を受けなかった場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>授業での説明は必ず理解して帰ること。その後必ずノートを見直し、できれば課題を鍵盤で弾いてみる。このあたりになると響がどういふものか音で確認することも重要。宿題は必ずやり、それを見てもらうこと。次回の部分には必ず目を通してから授業に臨むこと。このあたりは和声法の集大成である。2年間の学習を果のあるものにすべく真摯に取り組むこと。音楽の専門教育を受けたとするのは、このあたりが理解できて課題が実施できるかにかかっている。</p> <p>復習に2時間、予習に3時間ほど時間をかけること。</p>		
課題へのフィードバック	授業内において行われる課題、小テストは、授業時間内または次の授業時に解説する。		
教科書	授業内で冊子やプリントを配布する。 和声法演習ⅡAで配布したものは引き続きそれを使う。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考	和声法演習Ⅰから系統だっカリキュラムが組まれるので和声法演習Ⅱから逆に受講することはできない。 また、和声法演習ⅡAの単位を取得せずⅡBを受講することは望ましくない。		
科目生への開講	なし		

ナンバリング	DC301C01	期間	後期
授業科目名	和声法演習Ⅳ		
英訳科目名	Harmony Ⅳ		
担当教員名	小西 円子		
ディプロマ・ポリシー1	◎	ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	バス課題に対して美しい旋律をつける、また旋律への和声付けを学ぶ。和音構成音と和音外音の区別、旋律への和音設定等。和声法の集大成とも云える内容で、ここまで来て様々な応用ができるようになる。		
到達目標	和音外音（非和声音）を含むソプラノ課題、転調課題が実施できる。		
授業計画	<p>様々な種類の和音と和音外音を学びます。旋律課題を実施。クラスによっては内容が前後したり回数が変わったりする。</p> <p>第1回 授業の概要説明 第2回 和声法の全体確認（復習） 基本形、転回形、バス課題、ソプラノ課題 第3回 様々な種類の和音 第4回 転調①近親調、副属和音 第5回 転調②離脱・転入 第6回 転調③課題演習 第7回 増六・増五六の和音 第8回 和音外音（非和声音）、構成音の転位（定位、修飾、転位の考え方）1 第9回 和音外音（非和声音）、構成音の転位（定位、修飾、転位の考え方）2 第10回 和音外音（非和声音）、構成音の転位（定位、修飾、転位の考え方）3 第11回 和音外音、副属和音を含むバス。ソプラノ課題 第12回 旋律課題の導入、バス課題に美しい旋律を作る 第13回 旋律課題の演習（転調を含む）。様々な課題の演習。 第14回 様々な和音を含む旋律課題の学習。美しいバスの設定 第15回 内容理解の確認</p>		
評価方法 (合計100%)	試験期間中に試験を行う。試験50%、授業への参加態度50%。		
失格条件	4回以上欠席した場合及び試験を受けなかった場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>授業での説明は必ず理解して帰ること。その後必ずノートを見直し、できれば課題を鍵盤で弾いてみる。このあたりになると響がどういふものか音で確認することも重要。宿題は必ずやり、それを見てもらうこと。次回の部分には必ず目を通してから授業に臨むこと。このあたりは和声法の集大成である。2年間の学習を果のあるものにすべく真摯に取り組むこと。音楽の専門教育を受けたとするのは、このあたりが理解できて課題が実施できるかにかかっている。</p> <p>復習に2時間、予習に3時間ほど時間をかけること。</p>		
課題へのフィードバック	授業内において行われる課題、小テストは、授業時間内または次の授業時に解説する。		
教科書	授業内で冊子やプリントを配布する。 和声法演習Ⅲで配布したものは引き続きそれを使う。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考	和声法演習Ⅰ～Ⅳまでグレードによって系統だってカリキュラムが組まれるので順番に履修すること。Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの単位取得がされていないと和声法演習Ⅳは受講できない。また、前期開講のⅢを落とすと後期開講のⅣは履修できず翌年のⅢから取り直しとなる。また、教職課程を履修したい場合はⅢ・Ⅳが教職必修科目となるため、和声法演習Ⅰから2年間で滞ることなくⅣまで単位を取得することが望ましい。		
科目生への開講	なし		

ナンバリング	DC301C01	期間	後期
授業科目名	和声法演習Ⅳ		
英訳科目名	Harmony Ⅳ		
担当教員名	吉澤 ゆかり		
ディプロマ・ポリシー-1	◎	ディプロマ・ポリシー-2	
ディプロマ・ポリシー-3		ディプロマ・ポリシー-4	
ディプロマ・ポリシー-5		ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	バス課題に対して美しい旋律をつける、また旋律への和声付けを学ぶ。和音構成音と和音外音の区別、旋律への和音設定等。和声法の集大成とも云える内容で、ここまで来て様々な応用ができるようになる。		
到達目標	和音外音（非和声音）を含むソプラノ課題、転調課題が実施できる。		
授業計画	<p>様々な種類の和音と和音外音を学びます。旋律課題を実施。クラスによっては内容が前後したり回数が変わったりする。</p> <p>第1回 授業の概要説明 第2回 和声法の全体確認（復習） 基本形、転回形、バス課題、ソプラノ課題 第3回 様々な種類の和音 第4回 転調①近親調、副属和音 第5回 転調②離脱・転入 第6回 転調③課題演習 第7回 増六・増五六の和音 第8回 和音外音（非和声音）、構成音の転位（定位、修飾、転位の考え方）1 第9回 和音外音（非和声音）、構成音の転位（定位、修飾、転位の考え方）2 第10回 和音外音（非和声音）、構成音の転位（定位、修飾、転位の考え方）3 第11回 和音外音、副属和音を含むバス。ソプラノ課題 第12回 旋律課題の導入、バス課題に美しい旋律を作る 第13回 旋律課題の演習（転調を含む）。様々な課題の演習。 第14回 様々な和音を含む旋律課題の学習。美しいバスの設定 第15回 内容理解の確認</p>		
評価方法 (合計100%)	試験期間中に試験を行う。試験50%、授業への参加態度50%。		
失格条件	4回以上欠席した場合及び試験を受けなかった場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>授業での説明は必ず理解して帰ること。その後必ずノートを見直し、できれば課題を鍵盤で弾いてみる。このあたりになると響がどういふものか音で確認することも重要。宿題は必ずやり、それを見てもらうこと。次回の部分には必ず目を通してから授業に臨むこと。このあたりは和声法の集大成である。2年間の学習を果のあるものにすべく真摯に取り組むこと。音楽の専門教育を受けたとするのは、このあたりが理解できて課題が実施できるかにかかっている。</p> <p>復習に2時間、予習に3時間ほど時間をかけること。</p>		
課題へのフィードバック	授業内において行われる課題、小テストは、授業時間内または次の授業時に解説する。		
教科書	授業内で冊子やプリントを配布する。 和声法演習Ⅲで配布したものは引き続きそれを使う。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考	和声法演習Ⅰ～Ⅳまでグレードによって系統だってカリキュラムが組まれるので順番に履修すること。Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの単位取得がされていないと和声法演習Ⅳは受講できない。また、前期開講のⅢを落とすと後期開講のⅣは履修できず翌年のⅢから取り直しとなる。また、教職課程を履修したい場合はⅢ・Ⅳが教職必修科目となるため、和声法演習Ⅰから2年間で滞ることなくⅣまで単位を取得することが望ましい。		
科目生への開講	なし		

ナンバリング	DC301C01	期間	後期
授業科目名	和声法演習Ⅳ		
英訳科目名	Harmony Ⅳ		
担当教員名	大慈弥 恵麻		
ディプロマ・ポリシー1	◎	ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	バス課題に対して美しい旋律をつける、また旋律への和声付けを学ぶ。和音構成音と和音外音の区別、旋律への和音設定等。和声法の集大成とも云える内容で、ここまで来て様々な応用ができるようになる。		
到達目標	和音外音（非和声音）を含むソプラノ課題、転調課題が実施できる。		
授業計画	<p>様々な種類の和音と和音外音を学びます。旋律課題を実施。クラスによっては内容が前後したり回数が変わったりする。</p> <p>第1回 授業の概要説明 第2回 和声法の全体確認（復習） 基本形、転回形、バス課題、ソプラノ課題 第3回 様々な種類の和音 第4回 転調①近親調、副属和音 第5回 転調②離脱・転入 第6回 転調③課題演習 第7回 増六・増五六の和音 第8回 和音外音（非和声音）、構成音の転位（定位、修飾、転位の考え方）1 第9回 和音外音（非和声音）、構成音の転位（定位、修飾、転位の考え方）2 第10回 和音外音（非和声音）、構成音の転位（定位、修飾、転位の考え方）3 第11回 和音外音、副属和音を含むバス。ソプラノ課題 第12回 旋律課題の導入、バス課題に美しい旋律を作る 第13回 旋律課題の演習（転調を含む）。様々な課題の演習。 第14回 様々な和音を含む旋律課題の学習。美しいバスの設定 第15回 内容理解の確認</p>		
評価方法 (合計100%)	試験期間中に試験を行う。試験50%、授業への参加態度50%。		
失格条件	4回以上欠席した場合及び試験を受けなかった場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>授業での説明は必ず理解して帰ること。その後必ずノートを見直し、できれば課題を鍵盤で弾いてみる。このあたりになると響がどういふものか音で確認することも重要。宿題は必ずやり、それを見てもらうこと。次回の部分には必ず目を通してから授業に臨むこと。このあたりは和声法の集大成である。2年間の学習を果のあるものにすべく真摯に取り組むこと。音楽の専門教育を受けたとするのは、このあたりが理解できて課題が実施できるかにかかっている。</p> <p>復習に2時間、予習に3時間ほど時間をかけること。</p>		
課題へのフィードバック	授業内において行われる課題、小テストは、授業時間内または次の授業時に解説する。		
教科書	授業内で冊子やプリントを配布する。 和声法演習Ⅲで配布したものは引き続きそれを使う。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考	和声法演習Ⅰ～Ⅳまでグレードによって系統だってカリキュラムが組まれるので順番に履修すること。Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの単位取得がされていないと和声法演習Ⅳは受講できない。また、前期開講のⅢを落とすと後期開講のⅣは履修できず翌年のⅢから取り直しとなる。また、教職課程を履修したい場合はⅢ・Ⅳが教職必修科目となるため、和声法演習Ⅰから2年間で滞ることなくⅣまで単位を取得することが望ましい。		
科目生への開講	なし		

ナンバリング	DC103A02	期間	前期
授業科目名	ソルフェージュA/ソルフェージュI		
英訳科目名	Solfege A/Solfege I		
担当教員名	赤石 敏夫		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>ソルフェージュとは、本来は母音または階名・音名等を用いて読譜を正確に行なうための歌唱訓練のことをさす。しかし近年には「読譜」についての見解が深まり、聴音、音楽理論、キーボード・ハーモニー（鍵盤を用いた伴奏付け、弾き歌い、即興演奏、スコア・リーディングなどを学習する科目）等もソルフェージュの範囲だと定義されている。つまり読譜訓練だけでなく、楽譜や音楽理論の知識、また音楽表現についての必然性の根拠を示すことなどもこの能力だと考えられている。</p> <p>ソルフェージュ力は専攻実技にそのまま反映するので積極的な取り組みを期待する。</p> <p>ヨーロッパのソルフェージュ教育の手法も取り入れながら訓練を行なう。</p>		
到達目標	基本的な読譜、音の書き取り、視唱などができる。		
授業計画	<p>能力別（+専攻別）のクラスによって行う。下記は中程度のクラスの例。クラスによっては内容が前後することがある。また、Routineが大切なため同じことを繰り返すことがある。</p> <p>第1回 ソルフェージュとは（クラス毎の授業計画の説明）</p> <p>第2回 様々なソルフェージュの体験1（視唱、聴音）</p> <p>第3回 様々なソルフェージュの体験2（聴音＝旋律・2声・和声）</p> <p>第4回 様々なソルフェージュの体験3（聴音＝暗記、書き取りなど）</p> <p>第5回 上記に加えて、鍵盤によるカデンツを実施（「弾き歌い練習曲集」使用）</p> <p>第6回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練1（到達状況を見て課題を提示）</p> <p>第7回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練2（楽譜の美しい書き方なども指導）</p> <p>第8回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練3（発声法や姿勢についても指導）</p> <p>第9回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練4（効率の良い聴音の取り方を指導）</p> <p>第10回 上記に加えて視唱を要素的に発展。聴音は二声、和声聴音、ピアノ小品など多彩に。</p> <p>第11回 視唱は発声法や音楽表現にも注意、聴音は多彩に、弾き歌いは教材を進める</p> <p>第12回 授業の到達目標に向かって総合的に訓練</p> <p>第13回 過去の試験問題などを練習</p> <p>第14回 視唱・弾き歌いなどの個人試験（クラス別）</p> <p>第15回 期末試験（聴音、合同クラス）</p>		
評価方法 (合計100%)	試験50%、授業への参加態度50%。 ソルフェージュは日常の訓練Routineが重要な意味をもつため、授業への参加態度を重視する。		
失格条件	授業を4回以上欠席した者、及び試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	特に教材「視唱ステップアップ」についてはほぼ毎回宿題を出すので必ずやってくること。 また、市販の教材などで不得意部分を自宅学習しながら、授業でその成果を確認するという方法も良い。 次の授業までに予習1時間、復習3時間程度を取ること。		
課題へのフィード バック	授業内において行われる課題は、授業時間内に正答を提示し解説する。		
教科書	「視唱 ステップ・アップ」（全音楽譜出版社刊） 「弾き歌い練習曲集」（学内制作）期の途中で販売するので購入すること（800円程度）。		
著者名	赤石敏夫、鈴木博子、中島理依子、中野佳代子、山本京子、粕谷育子		
出版社	（株）全音楽譜出版社		
参考書	特になし		
その他	ソルフェージュⅠ～Ⅳまでグレードによって系統だってカリキュラムが組まれるので順番に履修すること。例えば前期開講のⅠを落とすと後期開講のⅡは履修できず翌年のⅠから取り直しとなる。また、教職課程を履修した場合はⅢ・Ⅳが教職必修科目となるため、ソルフェージュⅠから2年間で滞ることなくⅣまで単位を取得することが望ましい。		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	DC103A02	期間	前期
授業科目名	ソルフェージュA/ソルフェージュI		
英訳科目名	Solfege A/Solfege I		
担当教員名	山本 京子		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> -	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>ソルフェージュとは、本来は母音または階名・音名等を用いて読譜を正確に行なうための歌唱訓練のことをさす。しかし近年には「読譜」についての見解が深まり、聴音、音楽理論、キーボード・ハーモニー（鍵盤を用いた伴奏付け、弾き歌い、即興演奏、スコア・リーディングなどを学習する科目）等もソルフェージュの範囲だと定義されている。つまり読譜訓練だけでなく、楽譜や音楽理論の知識、また音楽表現についての必然性の根拠を示すことなどもこの能力だと考えられている。</p> <p>ソルフェージュ力は専攻実技にそのまま反映するので積極的な取り組みを期待する。</p> <p>ヨーロッパのソルフェージュ教育の手法も取り入れながら訓練を行なう。</p>		
到達目標	基本的な読譜、音の書き取り、視唱などができる。		
授業計画	<p>能力別（+専攻別）のクラスによって行なう。下記は中程度のクラスの例。クラスによっては内容が前後することがある。また、Routineが大切なため同じことを繰り返すことがある。</p> <p>第1回 ソルフェージュとは（クラス毎の授業計画の説明）</p> <p>第2回 様々なソルフェージュの体験1（視唱、聴音）</p> <p>第3回 様々なソルフェージュの体験2（聴音＝旋律・2声・和声）</p> <p>第4回 様々なソルフェージュの体験3（聴音＝暗記、書き取りなど）</p> <p>第5回 上記に加えて、鍵盤によるカデンツを実施（「弾き歌い練習曲集」使用）</p> <p>第6回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練1（到達状況を見て課題を提示）</p> <p>第7回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練2（楽譜の美しい書き方なども指導）</p> <p>第8回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練3（発声法や姿勢についても指導）</p> <p>第9回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練4（効率の良い聴音の取り方を指導）</p> <p>第10回 上記に加えて視唱を要素的に発展。聴音は二声、和声聴音、ピアノ小品など多彩に</p> <p>第11回 視唱は発声法や音楽表現にも注意、聴音は多彩に、弾き歌いは教材を進める</p> <p>第12回 授業の到達目標に向かって総合的に訓練</p> <p>第13回 過去の試験問題などを練習</p> <p>第14回 視唱・弾き歌いなどの個人試験（クラス別）</p> <p>第15回 期末試験（聴音、合同クラス）</p>		
評価方法 (合計100%)	試験50%、授業への参加態度50%。 ソルフェージュは日常の訓練Routineが重要な意味をもつため、授業への参加態度を重視する。		
失格条件	授業を4回以上欠席した者、及び試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	特に教材「視唱ステップアップ」についてはほぼ毎回宿題を出すので必ずやってくること。 また、市販の教材などで不得意部分を自宅学習しながら、授業でその成果を確認するという方法も良い。 次の授業までに予習1時間、復習3時間程度を取る。		
課題へのフィード バック	授業内において行われる課題は、授業時間内に正答を提示し解説する。		
教科書	「視唱 ステップ・アップ」(全音楽譜出版社刊) 「弾き歌い練習曲集」(学内制作) 期の途中で販売するので購入すること(800円程度)。		
著者名	赤石敏夫、鈴木博子、中島理依子、中野佳代子、山本京子、粕谷育子		
出版社	(株) 全音楽譜出版社		
参考書	特になし		
その他	ソルフェージュI～IVまでグレードによって系統だってカリキュラムが組まれるので順番に履修すること。例えば前期開講のIを落とすと後期開講のIIは履修できず翌年のIから取り直しとなる。また、教職課程を履修した場合はIII・IVが教職必修科目となるため、ソルフェージュIから2年間で滞ることなくIVまで単位を取得することが望ましい。		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	DC103A02	期間	前期
授業科目名	ソルフェージュA/ソルフェージュI		
英訳科目名	Solfege A/Solfege I		
担当教員名	山本 京子		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>ソルフェージュとは、本来は母音または階名・音名等を用いて読譜を正確に行なうための歌唱訓練のことをさす。しかし近年には「読譜」についての見解が深まり、聴音、音楽理論、キーボード・ハーモニー（鍵盤を用いた伴奏付け、弾き歌い、即興演奏、スコア・リーディングなどを学習する科目）等もソルフェージュの範囲だと定義されている。つまり読譜訓練だけでなく、楽譜や音楽理論の知識、また音楽表現についての必然性の根拠を示すことなどもこの能力だと考えられている。</p> <p>ソルフェージュ力は専攻実技にそのまま反映するので積極的な取り組みを期待する。</p> <p>ヨーロッパのソルフェージュ教育の手法も取り入れながら訓練を行なう。</p>		
到達目標	基本的な読譜、音の書き取り、視唱などができる。		
授業計画	<p>能力別（+専攻別）のクラスによって行う。下記は中程度のクラスの例。クラスによっては内容が前後することがある。また、Routineが大切なため同じことを繰り返すことがある。</p> <p>第1回 ソルフェージュとは（クラス毎の授業計画の説明）</p> <p>第2回 様々なソルフェージュの体験1（視唱、聴音）</p> <p>第3回 様々なソルフェージュの体験2（聴音＝旋律・2声・和声）</p> <p>第4回 様々なソルフェージュの体験3（聴音＝暗記、書き取りなど）</p> <p>第5回 上記に加えて、鍵盤によるカデンツを実施（「弾き歌い練習曲集」使用）</p> <p>第6回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練1（到達状況を見て課題を提示）</p> <p>第7回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練2（楽譜の美しい書き方なども指導）</p> <p>第8回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練3（発声法や姿勢についても指導）</p> <p>第9回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練4（効率の良い聴音の取り方を指導）</p> <p>第10回 上記に加えて視唱を要素的に発展。聴音は二声、和声聴音、ピアノ小品など多彩に。</p> <p>第11回 視唱は発声法や音楽表現にも注意、聴音は多彩に、弾き歌いは教材を進める</p> <p>第12回 授業の到達目標に向かって総合的に訓練</p> <p>第13回 過去の試験問題などを練習</p> <p>第14回 視唱・弾き歌いなどの個人試験（クラス別）</p> <p>第15回 期末試験（聴音、合同クラス）</p>		
評価方法 (合計100%)	試験50%、授業への参加態度50%。 ソルフェージュは日常の訓練Routineが重要な意味をもつため、授業への参加態度を重視する。		
失格条件	授業を4回以上欠席した者、及び試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	特に教材「視唱ステップアップ」についてはほぼ毎回宿題を出すので必ずやってくること。 また、市販の教材などで不得意部分を自宅学習しながら、授業でその成果を確認するという方法も良い。 次の授業までに予習1時間、復習3時間程度を取る。		
課題へのフィード バック	授業内において行われる課題は、授業時間内に正答を提示し解説する。		
教科書	「視唱 ステップ・アップ」（全音楽譜出版社刊） 「弾き歌い練習曲集」（学内制作）期の途中で販売するので購入すること（800円程度）。		
著者名	赤石敏夫、鈴木博子、中島理依子、中野佳代子、山本京子、粕谷育子		
出版社	(株) 全音楽譜出版社		
参考書	特になし		
その他	ソルフェージュⅠ～Ⅳまでグレードによって系統だってカリキュラムが組まれるので順番に履修すること。例えば前期開講のⅠを落とすと後期開講のⅡは履修できず翌年のⅠから取り直しとなる。また、教職課程を履修した場合はⅢ・Ⅳが教職必修科目となるため、ソルフェージュⅠから2年間で滞ることなくⅣまで単位を取得することが望ましい。		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	DC103A02	期間	前期
授業科目名	ソルフェージュA/ソルフェージュI		
英訳科目名	Solfege A/Solfege I		
担当教員名	中野 佳代子		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> -	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	ソルフェージュとは、本来は母音または階名・音名等を用いて読譜を正確に行なうための歌唱訓練のことをさす。しかし近年には「読譜」についての見解が深まり、聴音、音楽理論、キーボード・ハーモニー（鍵盤を用いた伴奏付け、弾き歌い、即興演奏、スコア・リーディングなどを学習する科目）等もソルフェージュの範囲だと定義されている。つまり読譜訓練だけでなく、楽譜や音楽理論の知識、また音楽表現についての必然性の根拠を示すことなどもこの能力だと考えられている。 ソルフェージュ力は専攻実技にそのまま反映するので積極的な取り組みを期待する。 ヨーロッパのソルフェージュ教育の手法も取り入れながら訓練を行なう。		
到達目標	基本的な読譜、音の書き取り、視唱などができる。		
授業計画	能力別（+専攻別）のクラスによって行なう。下記は中程度のクラスの例。クラスによっては内容が前後することがある。また、Routineが大切なため同じことを繰り返すことがある。 第1回 ソルフェージュとは（クラス毎の授業計画の説明） 第2回 様々なソルフェージュの体験1（視唱、聴音） 第3回 様々なソルフェージュの体験2（聴音＝旋律・2声・和声） 第4回 様々なソルフェージュの体験3（聴音＝暗記、書き取りなど） 第5回 上記に加えて、鍵盤によるカデンツを実施（「弾き歌い練習曲集」使用） 第6回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練1（到達状況を見て課題を提示） 第7回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練2（楽譜の美しい書き方なども指導） 第8回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練3（発声法や姿勢についても指導） 第9回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練4（効率の良い聴音の取り方を指導） 第10回 上記に加えて視唱を要素的に発展。聴音は二声、和声聴音、ピアノ小品など多彩に。 第11回 視唱は発声法や音楽表現にも注意、聴音は多彩に、弾き歌いは教材を進める 第12回 授業の到達目標に向かって総合的に訓練 第13回 過去の試験問題などを練習 第14回 視唱・弾き歌いなどの個人試験（クラス別） 第15回 期末試験（聴音、合同クラス）		
評価方法 (合計100%)	試験50%、授業への参加態度50%。 ソルフェージュは日常の訓練Routineが重要な意味をもつため、授業への参加態度を重視する。		
失格条件	授業を4回以上欠席した者、及び試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	特に教材「視唱ステップアップ」についてはほぼ毎回宿題を出すので必ずやってくること。 また、市販の教材などで不得意部分を自宅学習しながら、授業でその成果を確認するという方法も良い。 次の授業までに予習1時間、復習3時間程度を取ること。		
課題へのフィード バック	授業内において行われる課題は、授業時間内に正答を提示し解説する。		
教科書	「視唱 ステップ・アップ」（全音楽譜出版社刊） 「弾き歌い練習曲集」（学内制作）期の途中で販売するので購入すること（800円程度）。		
著者名	赤石敏夫、鈴木博子、中島理依子、中野佳代子、山本京子、粕谷育子		
出版社	(株) 全音楽譜出版社		
参考書	特になし		
その他	ソルフェージュⅠ～Ⅳまでグレードによって系統だってカリキュラムが組まれるので順番に履修すること。例えば前期開講のⅠを落とすと後期開講のⅡは履修できず翌年のⅠから取り直しとなる。また、教職課程を履修した場合はⅢ・Ⅳが教職必修科目となるため、ソルフェージュⅠから2年間で滞ることなくⅣまで単位を取得することが望ましい。		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	ソルフェージュA		
英訳科目名	Solfege A		
担当教員名	粕谷 育子		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>ソルフェージュとは、本来は母音または階名・音名等を用いて読譜を正確に行なうための歌唱訓練のことをさす。しかし近年には「読譜」についての見解が深まり、聴音、音楽理論、キーボード・ハーモニー（鍵盤を用いた伴奏付け、弾き歌い、即興演奏、スコア・リーディングなどを学習する科目）等もソルフェージュの範囲だと定義されている。つまり読譜訓練だけでなく、楽譜や音楽理論の知識、また音楽表現についての必然性の根拠を示すことなどもこの能力だと考えられている。</p> <p>ソルフェージュ力は専攻実技にそのまま反映するので積極的な取り組みを期待する。</p> <p>ヨーロッパのソルフェージュ教育の手法も取り入れながら訓練を行なう。</p>		
到達目標	基本的な読譜、音の書き取り、視唱などができる。		
授業計画	<p>能力別（+専攻別）のクラスによって行う。下記は中程度のクラスの例。クラスによっては内容が前後することがある。また、Routineが大切なため同じことを繰り返すことがある。</p> <p>第1回 ソルフェージュとは（クラス毎の授業計画の説明）</p> <p>第2回 様々なソルフェージュの体験1（視唱、聴音）</p> <p>第3回 様々なソルフェージュの体験2（聴音＝旋律・2声・和声）</p> <p>第4回 様々なソルフェージュの体験3（聴音＝暗記、書き取りなど）</p> <p>第5回 上記に加えて、鍵盤によるカデンツを実施（「弾き歌い練習曲集」使用）</p> <p>第6回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練1（到達状況を見て課題を提示）</p> <p>第7回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練2（楽譜の美しい書き方なども指導）</p> <p>第8回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練3（発声法や姿勢についても指導）</p> <p>第9回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練4（効率の良い聴音の取り方を指導）</p> <p>第10回 上記に加えて視唱を要素的に発展。聴音は二声、和声聴音、ピアノ小品など多彩に。</p> <p>第11回 視唱は発声法や音楽表現にも注意、聴音は多彩に、弾き歌いは教材を進める</p> <p>第12回 授業の到達目標に向かって総合的に訓練</p> <p>第13回 過去の試験問題などを練習</p> <p>第14回 視唱・弾き歌いなどの個人試験（クラス別）</p> <p>第15回 期末試験（聴音、合同クラス）</p>		
評価方法 (合計100%)	試験50%、授業への参加態度50%。 ソルフェージュは日常の訓練Routineが重要な意味をもつため、授業への参加態度を重視する。		
失格条件	授業を4回以上欠席した者、及び試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	特に教材「視唱ステップアップ」についてはほぼ毎回宿題を出すので必ずやってくること。 また、市販の教材などで不得意部分を自宅学習しながら、授業でその成果を確認するという方法も良い。 次の授業までに予習1時間、復習3時間程度を取る。		
課題へのフィード バック	授業内において行われる課題は、授業時間内に正答を提示し解説する。		
教科書	「視唱 ステップ・アップ」（全音楽譜出版社刊） 「弾き歌い練習曲集」（学内制作）期の途中で販売するので購入すること（800円程度）。		
著者名	赤石敏夫、鈴木博子、中島理依子、中野佳代子、山本京子、粕谷育子		
出版社	（株）全音楽譜出版社		
参考書	特になし		
その他	ソルフェージュAから系統だってカリキュラムが組まれるのでソルフェージュBから逆に受講することは望ましくない。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	DC103B02	期間	後期
授業科目名	ソルフェージュB/ソルフェージュII		
英訳科目名	Solfege B/Solfege II		
担当教員名	赤石 敏夫		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	ソルフェージュIの内容の再確認をしながらその応用について主に学ぶ。 聴音、視唱を基礎としながら鍵盤を用いた伴奏付け、弾き歌い、等も行ふ。 ソルフェージュ力は専攻実技にそのまま反映するので積極的な取り組みを期待する。 応用については特にヨーロッパのソルフェージュ教育の手法も取り入れながら訓練を行なう。		
到達目標	応用的な部分まで含めて聴音、視唱、弾き歌いができる。また、弾き歌いは移調してもできる。		
授業計画	能力別（+専攻別）のクラスによって行ふ。下記は中程度のクラスの例。クラスによっては内容が前後することがある。また、Routineが大切なため同じことを繰り返すことがある。 第1回 授業の概要説明。視唱、聴音、弾き歌いの進め方 第2回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練1（視唱の教材を復習しつつ進める。聴音は再確認） 第3回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練2（弾き歌いは引き続き進める。クラスによってはリズム唱） 第4回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練3（様々な派生音） 第5回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練4（各種の調） 第6回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練5（転調を含むもの） 第7回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練6（様々なリズムの演習） 第8回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練7（様々な種類の聴音＝2声・3声・ピアノ小品など） 第9回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練8（和声法演習の授業に則した和声聴音。和音の種類判別、終止形） 第10回 各要素毎の詳細訓練、簡単な楽曲による転調経路の判断1 第11回 各要素毎の詳細訓練、簡単な楽曲による転調経路の判断2 第12回 上記に加え、過去の試験問題を使って模擬試験1 第13回 上記に加え、過去の試験問題を使って模擬試験2 第14回 上記に加え、クラスによっては様々な楽器による聴音やアンサンブルの聴音を行う。 第15回 ソルフェージュ応用のまとめ		
評価方法 (合計100%)	授業終了後全クラス共通問題での試験を行う。 試験50%、授業への参加態度50%。 ソルフェージュは日常の訓練Routineが重要な意味をもつため、授業への参加態度を重視する。		
失格条件	授業を4回以上欠席した者、及び試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	教材「視唱ステップ・アップ」及び「弾き歌い曲集」の予習復習をしっかりとやること。 聴音は市販の教材などで不得意部分を自宅学習すること。 1日10分の積み重ねが大きな差になります。少しでも時間があったら視唱をやりましょう。 次の授業までに予習1時間、復習3時間程度を取ること。		
課題へのフィード バック	授業内において行われる課題は、授業時間内に正答を提示し解説する。		
教科書	「視唱 ステップ・アップ」（全音楽譜出版社刊） 「弾き歌い練習曲集」（学内制作/前期中に販売）		
著者名	赤石敏夫、鈴木博子、中島理依子、中野佳代子、山本京子、粕谷育子		
出版社	(株) 全音楽譜出版社		
参考書	Noel GALLON :50 Leçons de Solfege rythmiques		
その他			
備考	ソルフェージュI～IVまでグレードによって系統だてカリキュラムが組まれるので順番に履修すること。例えば前期開講のIを落とすと後期開講のIIは履修できず翌年のIから取り直しとなる。また、教職課程を履修した場合はIII・IVが教職必修科目となるため、ソルフェージュIから2年間で滞ることなくIVまで単位を取得することが望ましい。		
科目生への開講	あり		

ナンバリング	DC103B02	期間	後期
授業科目名	ソルフェージュB/ソルフェージュII		
英訳科目名	Solfege B/Solfege II		
担当教員名	山本 京子		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	ソルフェージュIの内容の再確認をしながらその応用について主に学ぶ。 聴音、視唱を基礎としながら鍵盤を用いた伴奏付け、弾き歌い、等も行う。 ソルフェージュ力は専攻実技にそのまま反映するので積極的な取り組みを期待する。 応用については特にヨーロッパのソルフェージュ教育の手法も取り入れながら訓練を行なう。		
到達目標	応用的な部分まで含めて聴音、視唱、弾き歌いができる。また、弾き歌いは移調してもできる。		
授業計画	能力別（+専攻別）のクラスによって行う。下記は中程度のクラスの例。クラスによっては内容が前後することがある。また、Routineが大切なため同じことを繰り返すことがある。 第1回 授業の概要説明。視唱、聴音、弾き歌いの進め方 第2回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練1（視唱の教材を復習しつつ進める。聴音は再確認） 第3回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練2（弾き歌いは引き続き進める。クラスによってはリズム唱） 第4回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練3（様々な派生音） 第5回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練4（各種の調） 第6回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練5（転調を含むもの） 第7回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練6（様々なリズムの演習） 第8回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練7（様々な種類の聴音＝2声・3声・ピアノ小品など） 第9回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練8（和声法演習の授業に則した和声聴音。和音の種類判別、終止形） 第10回 各要素毎の詳細訓練、簡単な楽曲による転調経路の判断1 第11回 各要素毎の詳細訓練、簡単な楽曲による転調経路の判断2 第12回 上記に加え、過去の試験問題を使って模擬試験1 第13回 上記に加え、過去の試験問題を使って模擬試験2 第14回 上記に加え、クラスによっては様々な楽器による聴音やアンサンブルの聴音を行う。 第15回 ソルフェージュ応用のまとめ		
評価方法 (合計100%)	授業終了後全クラス共通問題での試験を行う。 試験50%、授業への参加態度50%。 ソルフェージュは日常の訓練Routineが重要な意味をもつため、授業への参加態度を重視する。		
失格条件	授業を4回以上欠席した者、及び試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	教材「視唱ステップ・アップ」及び「弾き歌い曲集」の予習復習をしっかりとやること。 聴音は市販の教材などで不得意部分を自宅学習すること。 1日10分の積み重ねが大きな差になります。少しでも時間があったら視唱をやりましょう。 次の授業までに予習1時間、復習3時間程度を取ること。		
課題へのフィード バック	授業内において行われる課題は、授業時間内に正答を提示し解説する。		
教科書	「視唱 ステップ・アップ」（全音楽譜出版社刊） 「弾き歌い練習曲集」（学内制作/前期中に販売）		
著者名	赤石敏夫、鈴木博子、中島理依子、中野佳代子、山本京子、粕谷育子		
出版社	(株) 全音楽譜出版社		
参考書	Noel GALLON :50 Leçons de Solfege rythmiques		
その他			
備考	ソルフェージュI～IVまでグレードによって系統だてカリキュラムが組まれるので順番に履修すること。例えば前期開講のIを落とすと後期開講のIIは履修できず翌年のIから取り直しとなる。また、教職課程を履修した場合はIII・IVが教職必修科目となるため、ソルフェージュIから2年間で滞ることなくIVまで単位を取得することが望ましい。		
科目生への開講	あり		

ナンバリング	DC103B02	期間	後期
授業科目名	ソルフェージュB/ソルフェージュII		
英訳科目名	Solfege B/Solfege II		
担当教員名	山本 京子		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	ソルフェージュIの内容の再確認をしながらその応用について主に学ぶ。 聴音、視唱を基礎としながら鍵盤を用いた伴奏付け、弾き歌い、等も行う。 ソルフェージュ力は専攻実技にそのまま反映するので積極的な取り組みを期待する。 応用については特にヨーロッパのソルフェージュ教育の手法も取り入れながら訓練を行なう。		
到達目標	応用的な部分まで含めて聴音、視唱、弾き歌いができる。また、弾き歌いは移調してもできる。		
授業計画	能力別（+専攻別）のクラスによって行う。下記は中程度のクラスの例。クラスによっては内容が前後することがある。また、Routineが大切なため同じことを繰り返すことがある。 第1回 授業の概要説明。視唱、聴音、弾き歌いの進め方 第2回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練1（視唱の教材を復習しつつ進める。聴音は再確認） 第3回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練2（弾き歌いは引き続き進める。クラスによってはリズム唱） 第4回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練3（様々な派生音） 第5回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練4（各種の調） 第6回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練5（転調を含むもの） 第7回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練6（様々なリズムの演習） 第8回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練7（様々な種類の聴音＝2声・3声・ピアノ小品など） 第9回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練8（和声法演習の授業に則した和声聴音。和音の種類判別、終止形） 第10回 各要素毎の詳細訓練、簡単な楽曲による転調経路の判断1 第11回 各要素毎の詳細訓練、簡単な楽曲による転調経路の判断2 第12回 上記に加え、過去の試験問題を使って模擬試験1 第13回 上記に加え、過去の試験問題を使って模擬試験2 第14回 上記に加え、クラスによっては様々な楽器による聴音やアンサンブルの聴音を行う。 第15回 ソルフェージュ応用のまとめ		
評価方法 (合計100%)	授業終了後全クラス共通問題での試験を行う。 試験50%、授業への参加態度50%。 ソルフェージュは日常の訓練Routineが重要な意味をもつため、授業への参加態度を重視する。		
失格条件	授業を4回以上欠席した者、及び試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	教材「視唱ステップ・アップ」及び「弾き歌い曲集」の予習復習をしっかりとやること。 聴音は市販の教材などで不得意部分を自宅学習すること。 1日10分の積み重ねが大きな差になります。少しでも時間があったら視唱をやりましょう。 次の授業までに予習1時間、復習3時間程度を取ること。		
課題へのフィード バック	授業内において行われる課題は、授業時間内に正答を提示し解説する。		
教科書	「視唱 ステップ・アップ」（全音楽譜出版社刊） 「弾き歌い練習曲集」（学内制作/前期中に販売）		
著者名	赤石敏夫、鈴木博子、中島理依子、中野佳代子、山本京子、粕谷育子		
出版社	(株) 全音楽譜出版社		
参考書	Noel GALLON :50 Leçons de Solfege rythmiques		
その他			
備考	ソルフェージュI～IVまでグレードによって系統だてカリキュラムが組まれるので順番に履修すること。例えば前期開講のIを落とすと後期開講のIIは履修できず翌年のIから取り直しとなる。また、教職課程を履修した場合はIII・IVが教職必修科目となるため、ソルフェージュIから2年間で滞ることなくIVまで単位を取得することが望ましい。		
科目生への開講	あり		

ナンバリング	DC103B02	期間	後期
授業科目名	ソルフェージュB/ソルフェージュII		
英訳科目名	Solfege B/Solfege II		
担当教員名	中野 佳代子		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	ソルフェージュIの内容の再確認をしながらその応用について主に学ぶ。 聴音、視唱を基礎としながら鍵盤を用いた伴奏付け、弾き歌い、等も行ふ。 ソルフェージュ力は専攻実技にそのまま反映するので積極的な取り組みを期待する。 応用については特にヨーロッパのソルフェージュ教育の手法も取り入れながら訓練を行なう。		
到達目標	応用的な部分まで含めて聴音、視唱、弾き歌いができる。また、弾き歌いは移調してもできる。		
授業計画	能力別（+専攻別）のクラスによって行ふ。下記は中程度のクラスの例。クラスによっては内容が前後することがある。また、Routineが大切なため同じことを繰り返すことがある。 第1回 授業の概要説明。視唱、聴音、弾き歌いの進め方 第2回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練1（視唱の教材を復習しつつ進める。聴音は再確認） 第3回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練2（弾き歌いは引き続き進める。クラスによってはリズム唱） 第4回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練3（様々な派生音） 第5回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練4（各種の調） 第6回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練5（転調を含むもの） 第7回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練6（様々なリズムの演習） 第8回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練7（様々な種類の聴音＝2声・3声・ピアノ小品など） 第9回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練8（和声法演習の授業に則した和声聴音。和音の種類判別、終止形） 第10回 各要素毎の詳細訓練、簡単な楽曲による転調経路の判断1 第11回 各要素毎の詳細訓練、簡単な楽曲による転調経路の判断2 第12回 上記に加え、過去の試験問題を使って模擬試験1 第13回 上記に加え、過去の試験問題を使って模擬試験2 第14回 上記に加え、クラスによっては様々な楽器による聴音やアンサンブルの聴音を行う。 第15回 ソルフェージュ応用のまとめ		
評価方法 (合計100%)	授業終了後全クラス共通問題での試験を行う。 試験50%、授業への参加態度50%。 ソルフェージュは日常の訓練Routineが重要な意味をもつため、授業への参加態度を重視する。		
失格条件	授業を4回以上欠席した者、及び試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	教材「視唱ステップ・アップ」及び「弾き歌い曲集」の予習復習をしっかりとやること。 聴音は市販の教材などで不得意部分を自宅学習すること。 1日10分の積み重ねが大きな差になります。少しでも時間があったら視唱をやりましょう。 次の授業までに予習1時間、復習3時間程度を取ることを。		
課題へのフィード バック	授業内において行われる課題は、授業時間内に正答を提示し解説する。		
教科書	「視唱 ステップ・アップ」（全音楽譜出版社刊） 「弾き歌い練習曲集」（学内制作/前期中に販売）		
著者名	赤石敏夫、鈴木博子、中島理依子、中野佳代子、山本京子、粕谷育子		
出版社	(株) 全音楽譜出版社		
参考書	Noel GALLON :50 Leçons de Solfege rythmiques		
その他			
備考	ソルフェージュI～IVまでグレードによって系統だてカリキュラムが組まれるので順番に履修すること。例えば前期開講のIを落とすと後期開講のIIは履修できず翌年のIから取り直しとなる。また、教職課程を履修した場合はIII・IVが教職必修科目となるため、ソルフェージュIから2年間で滞ることなくIVまで単位を取得することが望ましい。		
科目生への開講	あり		

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	ソルフェージュ B		
英訳科目名	Solfege B		
担当教員名	粕谷 育子		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	ソルフェージュAの内容の再確認をしながらその応用について主に学ぶ。 聴音、視唱を基礎としながら鍵盤を用いた伴奏付け、弾き歌い、等も行う。 ソルフェージュ力は専攻実技にそのまま反映するので積極的な取り組みを期待する。 応用については特にヨーロッパのソルフェージュ教育の手法も取り入れながら訓練を行なう。		
到達目標	応用的な部分まで含めて聴音、視唱、弾き歌いができること。また、弾き歌いは移調してもできる。		
授業計画	能力別（+専攻別）のクラスによって行う。下記は中程度のクラスの例。クラスによっては内容が前後することがある。また、Routineが大切なため同じことを繰り返すことがある。 第1回 授業の概要説明。視唱、聴音、弾き歌いの進め方 第2回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練1（視唱の教材を復習しつつ進める。聴音は再確認） 第3回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練2（弾き歌いは引き続き進める。クラスによってはリズム唱） 第4回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練3（様々な派生音） 第5回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練4（各種の調） 第6回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練5（転調を含むもの） 第7回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練6（様々なリズムの演習） 第8回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練7（様々な種類の聴音＝2声・3声・ピアノ小品など） 第9回 視唱、聴音、弾き歌いの訓練8（和声法演習の授業に則した和声聴音。和音の種類判別、終止形） 第10回 各要素毎の詳細訓練、簡単な楽曲による転調経路の判断1 第11回 各要素毎の詳細訓練、簡単な楽曲による転調経路の判断2 第12回 上記に加え、過去の試験問題を使って模擬試験1 第13回 上記に加え、過去の試験問題を使って模擬試験2 第14回 上記に加え、クラスによっては様々な楽器による聴音やアンサンブルの聴音を行う。 第15回 ソルフェージュ応用のまとめ		
評価方法 (合計100%)	授業終了後全クラス共通問題での試験を行う。 試験50%、授業への参加態度50%。 ソルフェージュは日常の訓練Routineが重要な意味をもつため、授業への参加態度を重視する。		
失格条件	授業を4回以上欠席した者、及び試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	教材「視唱ステップ・アップ」及び「弾き歌い曲集」の予習復習をしっかりとやること。 聴音は市販の教材などで不得意部分を自宅学習すること。 1日10分の積み重ねが大きな差になります。少しでも時間があったら視唱をやりましょう。 次の授業までに予習1時間、復習3時間程度を取ること。		
課題へのフィード バック	授業内において行われる課題は、授業時間内に正答を提示し解説する。		
教科書	「視唱 ステップ・アップ」(全音楽譜出版社刊) 「弾き歌い練習曲集」(学内制作/前期中に販売)		
著者名	赤石敏夫、鈴木博子、中島理依子、中野佳代子、山本京子、粕谷育子		
出版社	(株) 全音楽譜出版社		
参考書	Noel GALLON :50 Leçons de Solfege rythmiques		
その他	ソルフェージュAから系統だっってカリキュラムが組まれるのでソルフェージュBから逆に受講することは望ましくない。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	ソルフェージュC		
英訳科目名	Solfege C		
担当教員名	赤石 敏夫		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	ソルフェージュA・Bで培った内容を更に発展させ音楽家として必要な音楽能力を高める。ソルフェージュA・Bで十分に実力アップが出来なかった人は必ず選択することを薦める。ソルフェージュCでは専攻別の内容を強化し、クラスによりキーボード・ソルフェージュやスコア・リーディングを実施する。また、フォルマシオン・ミュージカルの考え方を取り入れ、室内楽やオーケストラによる既存曲を材料に様々な楽器音による聴音なども行う。ヨーロッパのソルフェージュ教育の手法を更に積極的に取り入れ、音楽全体をつかむための多彩な音感訓練を行う。		
到達目標	ピアノだけでなく様々なオーケストラ楽器による音色の聴音もできること。楽曲の旋律・和声・低音など音楽全体を聴き取り、更に既存曲の特徴や時代様式なども考えられるように他の学習との連携も考えることができる。弾き歌いは即興伴奏もできるように。専攻によりスコア・リーディングができる。		
授業計画	能力別（+専攻別）のクラスによって行う。下記は中程度のクラスの例。クラスによっては内容が前後することがある。また、Routineが大切なため同じことを繰り返すことがある。 第1回 授業内容の概要説明 第2回 様々な種類の視唱と聴音1（視唱＝要素訓練1。聴音＝暗記・書き取り） 第3回 様々な種類の視唱と聴音2（視唱＝要素訓練2。聴音＝少ない回数で。旋律・2声・和声） 第4回 様々な種類の視唱と聴音3（視唱＝要素訓練3。聴音＝ピアノ小品） 第5回 様々な種類の視唱と聴音4（視唱＝要素訓練4。聴音＝和音の種類） 第6回 様々な種類の視唱と聴音5（視唱＝要素訓練5。聴音＝転調経路） 第7回 様々な種類の視唱と聴音6（視唱＝要素訓練6。聴音＝演奏法、形態など多彩に） 第8回 様々な種類の視唱と聴音7（視唱＝要素訓練7。聴音＝演奏法、形態など多彩に） 第9回 様々な種類の視唱と聴音8（視唱＝要素訓練8。聴音＝音楽表現の聞き分け） 第10回 上記に加えて、伴奏付けやスコア・リーディング(受講学生の専攻による) 第11回 既存曲の初見視唱、2声の視唱、ピアノ以外の楽器音、声楽曲などの聴音 第12回 即興伴奏による弾き歌い。既存曲の音楽表現の聴音 第13回 上記内容に加えて、過去の試験問題を使って模擬試験（1） 第14回 過去の試験問題を使って模擬試験（2） 第15回 期末試験（クラス毎）		
評価方法 (合計100%)	試験50%、授業への参加態度50%。 ソルフェージュは日常の訓練Routineが重要な意味をもつため、授業への参加態度を重視する。		
失格条件	授業を4回以上欠席した者、及び試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	教材「視唱ステップ・アップ」、授業で配布される各種プリントなどは必ず予習や復習をすること。また、市販の教材などを活用して不得意部分を自宅学習し、その成果を授業で確認するという方法も良い。 次の授業までに予習1時間、復習3時間程度を取る。		
課題へのフィード バック	授業内において行われる課題は、授業時間内に正答を提示し解説する。また宿題は次の授業で確認する。		
教科書	「視唱 ステップ・アップ」(全音楽譜出版社刊)		
著者名	赤石敏夫、鈴木博子、中島理依子、中野佳代子、山本京子、粕谷育子		
出版社	(株) 全音楽譜出版社		
参考書	特になし		
その他			
備考	ソルフェージュCから系統だってカリキュラムが組まれるのでソルフェージュDから逆に受講することは望ましくない。また、ソルフェージュA・Bを履修していない者がC・Dを履修することは望ましくない。		
科目生への開講	あり		

ナンバリング	DC303B01	期間	前期
授業科目名	ソルフェージュⅢ		
英訳科目名	Solfege Ⅲ		
担当教員名	赤石 敏夫		
ディプロマ・ポリシー-1		ディプロマ・ポリシー-2	◎
ディプロマ・ポリシー-3		ディプロマ・ポリシー-4	
ディプロマ・ポリシー-5		ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	ソルフェージュⅠ?Ⅱで培った内容を更に発展させ音楽家として必要な音楽能力を高める。ソルフェージュⅠ?Ⅱで十分に実力アップが出来なかった人は必ず選択することを薦める。ソルフェージュCでは専攻別の内容を強化し、クラスによりキーボード・ソルフェージュやスコア・リーディングを実施する。また、フォルマシオン・ミュージカルの考え方を取り入れ、室内楽やオーケストラによる既存曲を材料に様々な楽器音による聴音なども行う。ヨーロッパのソルフェージュ教育の手法を更に積極的に取り入れ、音楽全体をつかむための多彩な音感訓練を行う。		
到達目標	音楽を聴いたら楽譜が頭の中に見える「見える耳」、楽譜を見たら頭の中で音楽が鳴る「聴こえる目」をめざす。ピアノだけでなく様々なオーケストラ楽器による音色の聴音もできる。楽曲の旋律・和声・低音など音楽全体を聴き取り、更に既存曲の特徴や時代様式なども考えられるように他の学習との連携も考える。弾き歌いは即興伴奏もできる。専攻によりスコア・リーディングができる。		
授業計画	能力別（+専攻別）のクラスによって行う。下記は中程度のクラスの例。クラスによっては内容が前後することがある。また、Routineが大切なため同じことを繰り返すことがある。 第1回 授業内容の概要説明 第2回 様々な種類の視唱と聴音1（視唱＝要素訓練1。聴音＝暗記・書き取り） 第3回 様々な種類の視唱と聴音2（視唱＝要素訓練2。聴音＝少ない回数で。旋律・2声・和声） 第4回 様々な種類の視唱と聴音3（視唱＝要素訓練3。聴音＝ピアノ小品） 第5回 様々な種類の視唱と聴音4（視唱＝要素訓練4。聴音＝和音の種類） 第6回 様々な種類の視唱と聴音5（視唱＝要素訓練5。聴音＝転調経路） 第7回 様々な種類の視唱と聴音6（視唱＝要素訓練6。聴音＝演奏法、形態など多彩に） 第8回 様々な種類の視唱と聴音7（視唱＝要素訓練7。聴音＝演奏法、形態など多彩に） 第9回 様々な種類の視唱と聴音8（視唱＝要素訓練8。聴音＝音楽表現の聞き分け） 第10回 上記に加えて、伴奏付けやスコア・リーディング(受講学生の専攻による) 第11回 既存曲の初見視唱、2声の視唱、ピアノ以外の楽器音、声楽曲などの聴音 第12回 即興伴奏による弾き歌い。既存曲の音楽表現の聴音 第13回 上記内容に加えて、過去の試験問題を使って模擬試験（1） 第14回 過去の試験問題を使って模擬試験（2） 第15回 期末試験（クラス毎）		
評価方法 (合計100%)	試験50%、授業への参加態度50%。 ソルフェージュは日常の訓練Routineが重要な意味をもつため、授業への参加態度を重視する。		
失格条件	授業を4回以上欠席した者、及び試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	教材「視唱ステップ・アップ」、授業で配布される各種プリントなどは必ず予習や復習をすること。また、市販の教材などを活用して不得意部分を自宅学習し、その成果を授業で確認するという方法も良い。次の授業までに予習1時間、復習3時間程度を取ること。		
課題へのフィード バック	授業内において行われる課題は、授業時間内に正答を提示し解説する。また宿題は次の授業で確認する。		
教科書	「視唱 ステップ・アップ」(全音楽譜出版社刊)		
著者名	赤石敏夫、鈴木博子、中島理依子、中野佳代子、山本京子、粕谷育子		
出版社	(株) 全音楽譜出版社		
参考書	特になし		
その他			
備考	ソルフェージュⅠ～Ⅳまでグレードによって系統だってカリキュラムが組まれるので順番に履修すること。例えば前期開講のⅢを落とすと後期開講のⅣは履修できず翌年のⅢから取り直しとなる。また、教職課程を履修した場合はⅢ・Ⅳが教職必修科目となるため、ソルフェージュⅠから2年間で滞ることなくⅣまで単位を取得することが望ましい。		
科目生への開講	あり		

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	ソルフェージュC		
英訳科目名	Solfege C		
担当教員名	粕谷 育子		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	ソルフェージュA・Bで培った内容を更に発展させ音楽家として必要な音楽能力を高める。ソルフェージュA・Bで十分に実力アップが出来なかった人は必ず選択することを薦める。ソルフェージュCでは専攻別の内容を強化し、クラスによりキーボード・ソルフェージュやスコア・リーディングを実施する。また、フォルマシオン・ミュージカルの考え方を取り入れ、室内楽やオーケストラによる既存曲を材料に様々な楽器音による聴音なども行う。ヨーロッパのソルフェージュ教育の手法を更に積極的に取り入れ、音楽全体をつかむための多彩な音感訓練を行う。		
到達目標	ピアノだけでなく様々なオーケストラ楽器による音色の聴音もできること。楽曲の旋律・和声・低音など音楽全体を聴き取り、更に既存曲の特徴や時代様式なども考えられるように他の学習との連携も考える。弾き歌いは即興伴奏もできるように。専攻によりスコア・リーディングができるようにする。		
授業計画	能力別（+専攻別）のクラスによって行う。下記は中程度のクラスの例。クラスによっては内容が前後することがある。また、Routineが大切なため同じことを繰り返すことがある。 第1回 授業内容の概要説明 第2回 様々な種類の視唱と聴音1（視唱＝要素訓練1。聴音＝暗記・書き取り） 第3回 様々な種類の視唱と聴音2（視唱＝要素訓練2。聴音＝少ない回数で。旋律・2声・和声） 第4回 様々な種類の視唱と聴音3（視唱＝要素訓練3。聴音＝ピアノ小品） 第5回 様々な種類の視唱と聴音4（視唱＝要素訓練4。聴音＝和音の種類） 第6回 様々な種類の視唱と聴音5（視唱＝要素訓練5。聴音＝転調経路） 第7回 様々な種類の視唱と聴音6（視唱＝要素訓練6。聴音＝演奏法、形態など多彩に） 第8回 様々な種類の視唱と聴音7（視唱＝要素訓練7。聴音＝演奏法、形態など多彩に） 第9回 様々な種類の視唱と聴音8（視唱＝要素訓練8。聴音＝音楽表現の聞き分け） 第10回 上記に加えて、伴奏付けやスコア・リーディング(受講学生の専攻による) 第11回 既存曲の初見視唱、2声の視唱、ピアノ以外の楽器音、声楽曲などの聴音 第12回 即興伴奏による弾き歌い。既存曲の音楽表現の聴音 第13回 上記内容に加えて、過去の試験問題を使って模擬試験（1） 第14回 過去の試験問題を使って模擬試験（2） 第15回 期末試験（クラス毎）		
評価方法 (合計100%)	試験50%、授業への参加態度50%。 ソルフェージュは日常の訓練Routineが重要な意味をもつため、授業への参加態度を重視する。		
失格条件	授業を4回以上欠席した者、及び試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	教材「視唱ステップ・アップ」、授業で配布される各種プリントなどは必ず予習や復習をすること。また、市販の教材などを活用して不得意部分を自宅学習し、その成果を授業で確認するという方法も良い。 次の授業までに予習1時間、復習3時間程度を取ること。		
課題へのフィード バック	授業内において行われる課題は、授業時間内に正答を提示し解説する。また宿題は次の授業で確認する。		
教科書	「視唱 ステップ・アップ」(全音楽譜出版社刊)		
著者名	赤石敏夫、鈴木博子、中島理依子、中野佳代子、山本京子、粕谷育子		
出版社	(株) 全音楽譜出版社		
参考書	特になし		
その他			
備考	ソルフェージュCから系統だってカリキュラムが組まれるのでソルフェージュDから逆に受講することは望ましくない。また、ソルフェージュA/Bを履修していない者がC/Dを履修することは望ましくない。		
科目生への開講	あり		

ナンバリング	DC303B01	期間	前期
授業科目名	ソルフェージュⅢ		
英訳科目名	Solfege Ⅲ		
担当教員名	粕谷 育子		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	◎
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	ソルフェージュⅠ?Ⅱで培った内容を更に発展させ音楽家として必要な音楽能力を高める。ソルフェージュⅠ?Ⅱで十分に実力アップが出来なかった人は必ず選択することを薦める。ソルフェージュCでは専攻別の内容を強化し、クラスによりキーボード・ソルフェージュやスコア・リーディングを実施する。また、フォルマシオン・ミュージカルの考え方を取り入れ、室内楽やオーケストラによる既存曲を材料に様々な楽器音による聴音なども行う。ヨーロッパのソルフェージュ教育の手法を更に積極的に取り入れ、音楽全体をつかむための多彩な音感訓練を行う。		
到達目標	音楽を聴いたら楽譜が頭の中に見える「見える耳」、楽譜を見たら頭の中で音楽が鳴る「聴こえる目」をめざす。ピアノだけでなく様々なオーケストラ楽器による音色の聴音もできる。楽曲の旋律・和声・低音など音楽全体を聴き取り、更に既存曲の特徴や時代様式なども考えられるように他の学習との連携も考える。弾き歌いは即興伴奏もできる。専攻によりスコア・リーディングができる。		
授業計画	能力別（+専攻別）のクラスによって行う。下記は中程度のクラスの例。クラスによっては内容が前後することがある。また、Routineが大切なため同じことを繰り返すことがある。 第1回 授業内容の概要説明 第2回 様々な種類の視唱と聴音1（視唱＝要素訓練1。聴音＝暗記・書き取り） 第3回 様々な種類の視唱と聴音2（視唱＝要素訓練2。聴音＝少ない回数で。旋律・2声・和声） 第4回 様々な種類の視唱と聴音3（視唱＝要素訓練3。聴音＝ピアノ小品） 第5回 様々な種類の視唱と聴音4（視唱＝要素訓練4。聴音＝和音の種類） 第6回 様々な種類の視唱と聴音5（視唱＝要素訓練5。聴音＝転調経路） 第7回 様々な種類の視唱と聴音6（視唱＝要素訓練6。聴音＝演奏法、形態など多彩に） 第8回 様々な種類の視唱と聴音7（視唱＝要素訓練7。聴音＝演奏法、形態など多彩に） 第9回 様々な種類の視唱と聴音8（視唱＝要素訓練8。聴音＝音楽表現の聞き分け） 第10回 上記に加えて、伴奏付けやスコア・リーディング(受講学生の専攻による) 第11回 既存曲の初見視唱、2声の視唱、ピアノ以外の楽器音、声楽曲などの聴音 第12回 即興伴奏による弾き歌い。既存曲の音楽表現の聴音 第13回 上記内容に加えて、過去の試験問題を使って模擬試験（1） 第14回 過去の試験問題を使って模擬試験（2） 第15回 期末試験（クラス毎）		
評価方法 (合計100%)	試験50%、授業への参加態度50%。 ソルフェージュは日常の訓練Routineが重要な意味をもつため、授業への参加態度を重視する。		
失格条件	授業を4回以上欠席した者、及び試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	教材「視唱ステップ・アップ」、授業で配布される各種プリントなどは必ず予習や復習をすること。また、市販の教材などを活用して不得意部分を自宅学習し、その成果を授業で確認するという方法も良い。次の授業までに予習1時間、復習3時間程度を取ること。		
課題へのフィード バック	授業内において行われる課題は、授業時間内に正答を提示し解説する。また宿題は次の授業で確認する。		
教科書	「視唱 ステップ・アップ」(全音楽譜出版社刊)		
著者名	赤石敏夫、鈴木博子、中島理依子、中野佳代子、山本京子、粕谷育子		
出版社	(株) 全音楽譜出版社		
参考書	特になし		
その他			
備考	ソルフェージュⅠ～Ⅳまでグレードによって系統だってカリキュラムが組まれるので順番に履修すること。例えば前期開講のⅢを落とすと後期開講のⅣは履修できず翌年のⅢから取り直しとなる。また、教職課程を履修した場合はⅢ・Ⅳが教職必修科目となるため、ソルフェージュⅠから2年間で滞ることなくⅣまで単位を取得することが望ましい。		
科目生への開講	あり		

ナンバリング	DC303B01	期間	前期
授業科目名	ソルフェージュⅢ		
英訳科目名	Solfege Ⅲ		
担当教員名	中野 佳代子		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	◎
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	ソルフェージュⅠ?Ⅱで培った内容を更に発展させ音楽家として必要な音楽能力を高める。ソルフェージュⅠ?Ⅱで十分に実力アップが出来なかった人は必ず選択することを薦める。ソルフェージュCでは専攻別の内容を強化し、クラスによりキーボード・ソルフェージュやスコア・リーディングを実施する。また、フォルマシオン・ミュージカルの考え方を取り入れ、室内楽やオーケストラによる既存曲を材料に様々な楽器音による聴音なども行う。ヨーロッパのソルフェージュ教育の手法を更に積極的に取り入れ、音楽全体をつかむための多彩な音感訓練を行う。		
到達目標	音楽を聴いたら楽譜が頭の中に見える「見える耳」、楽譜を見たら頭の中で音楽が鳴る「聴こえる目」をめざす。ピアノだけでなく様々なオーケストラ楽器による音色の聴音もできる。楽曲の旋律・和声・低音など音楽全体を聴き取り、更に既存曲の特徴や時代様式なども考えられるように他の学習との連携も考える。弾き歌いは即興伴奏もできる。専攻によりスコア・リーディングができる。		
授業計画	能力別（+専攻別）のクラスによって行う。下記は中程度のクラスの例。クラスによっては内容が前後することがある。また、Routineが大切なため同じことを繰り返すことがある。 第1回 授業内容の概要説明 第2回 様々な種類の視唱と聴音1（視唱＝要素訓練1。聴音＝暗記・書き取り） 第3回 様々な種類の視唱と聴音2（視唱＝要素訓練2。聴音＝少ない回数で。旋律・2声・和声） 第4回 様々な種類の視唱と聴音3（視唱＝要素訓練3。聴音＝ピアノ小品） 第5回 様々な種類の視唱と聴音4（視唱＝要素訓練4。聴音＝和音の種類） 第6回 様々な種類の視唱と聴音5（視唱＝要素訓練5。聴音＝転調経路） 第7回 様々な種類の視唱と聴音6（視唱＝要素訓練6。聴音＝演奏法、形態など多彩に） 第8回 様々な種類の視唱と聴音7（視唱＝要素訓練7。聴音＝演奏法、形態など多彩に） 第9回 様々な種類の視唱と聴音8（視唱＝要素訓練8。聴音＝音楽表現の聞き分け） 第10回 上記に加えて、伴奏付けやスコア・リーディング(受講学生の専攻による) 第11回 既存曲の初見視唱、2声の視唱、ピアノ以外の楽器音、声楽曲などの聴音 第12回 即興伴奏による弾き歌い。既存曲の音楽表現の聴音 第13回 上記内容に加えて、過去の試験問題を使って模擬試験（1） 第14回 過去の試験問題を使って模擬試験（2） 第15回 期末試験（クラス毎）		
評価方法 (合計100%)	試験50%、授業への参加態度50%。 ソルフェージュは日常の訓練Routineが重要な意味をもつため、授業への参加態度を重視する。		
失格条件	授業を4回以上欠席した者、及び試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	教材「視唱ステップ・アップ」、授業で配布される各種プリントなどは必ず予習や復習をすること。また、市販の教材などを活用して不得意部分を自宅学習し、その成果を授業で確認するという方法も良い。次の授業までに予習1時間、復習3時間程度を取ること。		
課題へのフィード バック	授業内において行われる課題は、授業時間内に正答を提示し解説する。また宿題は次の授業で確認する。		
教科書	「視唱 ステップ・アップ」(全音楽譜出版社刊)		
著者名	赤石敏夫、鈴木博子、中島理依子、中野佳代子、山本京子、粕谷育子		
出版社	(株) 全音楽譜出版社		
参考書	特になし		
その他			
備考	ソルフェージュⅠ～Ⅳまでグレードによって系統だってカリキュラムが組まれるので順番に履修すること。例えば前期開講のⅢを落とすと後期開講のⅣは履修できず翌年のⅢから取り直しとなる。また、教職課程を履修した場合はⅢ・Ⅳが教職必修科目となるため、ソルフェージュⅠから2年間で滞ることなくⅣまで単位を取得することが望ましい。		
科目生への開講	なし		

ナンバリング	DC303B01	期間	前期
授業科目名	ソルフェージュⅢ		
英訳科目名	Solfege Ⅲ		
担当教員名	山本 京子		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	◎
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	ソルフェージュⅠ?Ⅱで培った内容を更に発展させ音楽家として必要な音楽能力を高める。ソルフェージュⅠ?Ⅱで十分に実力アップが出来なかった人は必ず選択することを薦める。ソルフェージュCでは専攻別の内容を強化し、クラスによりキーボード・ソルフェージュやスコア・リーディングを実施する。また、フォルマシオン・ミュージカルの考え方を取り入れ、室内楽やオーケストラによる既存曲を材料に様々な楽器音による聴音なども行う。ヨーロッパのソルフェージュ教育の手法を更に積極的に取り入れ、音楽全体をつかむための多彩な音感訓練を行う。		
到達目標	音楽を聴いたら楽譜が頭の中に見える「見える耳」、楽譜を見たら頭の中で音楽が鳴る「聴こえる目」をめざす。ピアノだけでなく様々なオーケストラ楽器による音色の聴音もできる。楽曲の旋律・和声・低音など音楽全体を聴き取り、更に既存曲の特徴や時代様式なども考えられるように他の学習との連携も考える。弾き歌いは即興伴奏もできる。専攻によりスコア・リーディングができる。		
授業計画	能力別（+専攻別）のクラスによって行う。下記は中程度のクラスの例。クラスによっては内容が前後することがある。また、Routineが大切なため同じことを繰り返すことがある。 第1回 授業内容の概要説明 第2回 様々な種類の視唱と聴音1（視唱＝要素訓練1。聴音＝暗記・書き取り） 第3回 様々な種類の視唱と聴音2（視唱＝要素訓練2。聴音＝少ない回数で。旋律・2声・和声） 第4回 様々な種類の視唱と聴音3（視唱＝要素訓練3。聴音＝ピアノ小品） 第5回 様々な種類の視唱と聴音4（視唱＝要素訓練4。聴音＝和音の種類） 第6回 様々な種類の視唱と聴音5（視唱＝要素訓練5。聴音＝転調経路） 第7回 様々な種類の視唱と聴音6（視唱＝要素訓練6。聴音＝演奏法、形態など多彩に） 第8回 様々な種類の視唱と聴音7（視唱＝要素訓練7。聴音＝演奏法、形態など多彩に） 第9回 様々な種類の視唱と聴音8（視唱＝要素訓練8。聴音＝音楽表現の聞き分け） 第10回 上記に加えて、伴奏付けやスコア・リーディング(受講学生の専攻による) 第11回 既存曲の初見視唱、2声の視唱、ピアノ以外の楽器音、声楽曲などの聴音 第12回 即興伴奏による弾き歌い。既存曲の音楽表現の聴音 第13回 上記内容に加えて、過去の試験問題を使って模擬試験（1） 第14回 過去の試験問題を使って模擬試験（2） 第15回 期末試験（クラス毎）		
評価方法 (合計100%)	試験50%、授業への参加態度50%。 ソルフェージュは日常の訓練Routineが重要な意味をもつため、授業への参加態度を重視する。		
失格条件	授業を4回以上欠席した者、及び試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	教材「視唱ステップ・アップ」、授業で配布される各種プリントなどは必ず予習や復習をすること。また、市販の教材などを活用して不得意部分を自宅学習し、その成果を授業で確認するという方法も良い。次の授業までに予習1時間、復習3時間程度を取ることを。		
課題へのフィード バック	授業内において行われる課題は、授業時間内に正答を提示し解説する。また宿題は次の授業で確認する。		
教科書	「視唱 ステップ・アップ」(全音楽譜出版社刊)		
著者名	赤石敏夫、鈴木博子、中島理依子、中野佳代子、山本京子、粕谷育子		
出版社	(株) 全音楽譜出版社		
参考書	特になし		
その他			
備考	ソルフェージュⅠ～Ⅳまでグレードによって系統だってカリキュラムが組まれるので順番に履修すること。例えば前期開講のⅢを落とすと後期開講のⅣは履修できず翌年のⅢから取り直しとなる。また、教職課程を履修した場合はⅢ・Ⅳが教職必修科目となるため、ソルフェージュⅠから2年間で滞ることなくⅣまで単位を取得することが望ましい。		
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	ソルフェージュD		
英訳科目名	Solfege D		
担当教員名	赤石 敏夫		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	ソルフェージュCで培った内容を更に発展させ音楽家として必要な音楽能力を高める。ソルフェージュDでは専攻別の内容を強化し、クラスによりキーボード・ソルフェージュやスコア・リーディングを実施する。また、Formation Musicalフォルマシオン・ミュージカルの考え方を取り入れ、室内楽やオーケストラによる既存曲を材料に様々な楽器音による聴音なども行う。ヨーロッパのソルフェージュ教育の手法を更に積極的に取り入れ、音楽全体をつかむための多彩な音感訓練を行う。		
到達目標	音楽を聴いたら楽譜が頭の中に見える「見える耳」、楽譜を見たら頭の中で音楽が鳴る「聴こえる目」をめざす。ピアノだけでなく様々なオーケストラ楽器による音色の聴音もできること。楽曲の旋律・和声・低音など音楽全体を聴き取り、更に既存曲の特徴や時代様式なども考えられるように他の学習との連携も考えることができる。弾き歌いは即興伴奏もできるように。専攻によりスコア・リーディングができる。		
授業計画	能力別（+専攻別）のクラスによって行う。下記は中程度のクラスの例。クラスによっては内容が前後することがある。また、Routineが大切なため同じことを繰り返すことがある。 第1回 授業内容の概要説明。ピアノでの聴音は常に行う 第2回 視唱は2声の視唱、既存曲の視唱など。聴音は単一楽器と伴奏、室内楽など 第3回 伴奏付けと弾き歌い。様々な楽器音での聴音。スコア・リーディング（専攻による） 第4回 上記2, 3回目の内容を繰り返す。木管楽器 第5回 上記2, 3回目の内容を繰り返す。金管楽器 第6回 上記2, 3回目の内容を繰り返す。弦楽器 第7回 上記2, 3回目の内容を繰り返す。弦楽四重奏曲 第8回 上記2, 3回目の内容を繰り返す。歌曲 第9回 上記2, 3回目の内容を繰り返す。アンサンブル曲 第10回 上記に加えて和声聴音は声部が動くコラール風に、既存曲はオーケストラ曲 第11回 上記内容の演習（例「転調するパッセージの調性判断」「フレーズの終止形の判断」） 第12回 専攻別特性による各種訓練。音楽家として十分な音楽力を学ぶ。 第13回 視唱能力、聴音能力、鍵盤和声、即興伴奏、スコア・リーディングなど総合訓練 1 第14回 視唱能力、聴音能力、鍵盤和声、即興伴奏、スコア・リーディングなど総合訓練 2 第15回 視唱能力、聴音能力、鍵盤和声、即興伴奏、スコア・リーディングなど総合訓練 3		
評価方法 (合計100%)	期末試験は授業時間以外に共通試験とクラス毎の試験を行う。 試験50%、授業への参加態度50%。 ソルフェージュは日常の訓練Routineが重要な意味をもつため、授業への参加態度を重視する。		
失格条件	授業を4回以上欠席した者、及び試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業で配布される各種プリントなどは必ず予習や復習をすること。また、市販の教材などを活用して不得意部分を自宅学習し、その成果を授業で確認するという方法も良い。 次の授業までに予習1時間、復習3時間程度を取ること。		
課題へのフィード バック	授業内において行われる課題は、授業時間内に正答を提示し解説する。また宿題は次の授業で確認する。		
教科書	適宜プリントなどを配布する		
著者名			
出版社			
参考書	“A NEW APPROACH TO SIGHT SINGING”		
その他			
備考	ソルフェージュCから系統だつてカリキュラムが組まれるのでソルフェージュDから逆に受講することは望ましくない。また、ソルフェージュA・Bを履修していない者がC・Dを履修することは望ましくない。		
科目生への開講	あり		

ナンバリング	DC303C01	期間	後期
授業科目名	ソルフェージュⅣ		
英訳科目名	Solfege Ⅳ		
担当教員名	赤石 敏夫		
ディプロマ・ポリシー-1		ディプロマ・ポリシー-2	◎
ディプロマ・ポリシー-3		ディプロマ・ポリシー-4	
ディプロマ・ポリシー-5		ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	ソルフェージュⅢで培った内容を更に発展させ音楽家として必要な音楽能力を高める。ソルフェージュⅣでは専攻別の内容を強化し、クラスによりキーボード・ソルフェージュやスコア・リーディングを実施する。また、Formation Musicalフォルマシオン・ミュージカルの考え方を取り入れ、室内楽やオーケストラによる既存曲を材料に様々な楽器音による聴音なども行う。ヨーロッパのソルフェージュ教育の手法を更に積極的に取り入れ、音楽全体をつかむための多彩な音感訓練を行う。		
到達目標	音楽を聴いたら楽譜が頭の中に見える「見える耳」、楽譜を見たら頭の中で音楽が鳴る「聴こえる目」をめざす。ピアノだけでなく様々なオーケストラ楽器による音色の聴音もできる。楽曲の旋律・和声・低音など音楽全体を聴き取り、更に既存曲の特徴や時代様式なども考えられるように他の学習との連携も考える。弾き歌いは即興伴奏もできる。専攻によりスコア・リーディングができる。		
授業計画	能力別（+専攻別）のクラスによって行う。下記は中程度のクラスの例。クラスによっては内容が前後することがある。また、Routineが大切なため同じことを繰り返すことがある。 第1回 授業内容の概要説明。ピアノでの聴音は常に行う 第2回 視唱は2声の視唱、既存曲の視唱など。聴音は単一楽器と伴奏、室内楽など 第3回 伴奏付けと弾き歌い。様々な楽器音での聴音。スコア・リーディング（専攻による） 第4回 上記2, 3回目の内容を繰り返す。木管楽器 第5回 上記2, 3回目の内容を繰り返す。金管楽器 第6回 上記2, 3回目の内容を繰り返す。弦楽器 第7回 上記2, 3回目の内容を繰り返す。弦楽四重奏曲 第8回 上記2, 3回目の内容を繰り返す。歌曲 第9回 上記2, 3回目の内容を繰り返す。アンサンブル曲 第10回 上記に加えて和声聴音は声部が動くコラール風に、既存曲はオーケストラ曲 第11回 上記内容の演習（例「転調するパッセージの調性判断」「フレーズの終止形の判断」） 第12回 専攻別特性による各種訓練。音楽家として十分な音楽力を学ぶ。 第13回 視唱能力、聴音能力、鍵盤和声、即興伴奏、スコア・リーディングなど総合訓練 1 第14回 視唱能力、聴音能力、鍵盤和声、即興伴奏、スコア・リーディングなど総合訓練 2 第15回 視唱能力、聴音能力、鍵盤和声、即興伴奏、スコア・リーディングなど総合訓練 3		
評価方法 (合計100%)	期末試験は授業時間以外に共通試験とクラス毎の試験を行う。 試験50%、授業への参加態度50%。 ソルフェージュは日常の訓練Routineが重要な意味をもつため、授業への参加態度を重視する。		
失格条件	授業を4回以上欠席した者、及び試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業で配布される各種プリントなどは必ず予習や復習をすること。また、市販の教材などを活用して不得意部分を自宅学習し、その成果を授業で確認するという方法も良い。 次の授業までに予習1時間、復習3時間程度を取ること。		
課題へのフィード バック	授業内において行われる課題は、授業時間内に正答を提示し解説する。また宿題は次の授業で確認する。		
教科書	適宜プリントなどを配布する		
著者名			
出版社			
参考書	“A NEW APPROACH TO SIGHT SINGING”		
その他			
備考	ソルフェージュⅠ～Ⅳまでグレードによって系統だってカリキュラムが組まれるので順番に履修すること。ソルフェージュⅠ・Ⅱ・Ⅲの単位を取得済みでなければⅣを履修することはできない。また、教職課程を履修したい場合はⅢ・Ⅳが教職必修科目となるため、ソルフェージュⅠから2年間で滞ることなくⅣまで単位を取得することが望ましい。		
科目生への開講	あり		

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	ソルフェージュD		
英訳科目名	Solfege D		
担当教員名	粕谷 育子		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> -	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	ソルフェージュCで培った内容を更に発展させ音楽家として必要な音楽能力を高める。ソルフェージュDでは専攻別の内容を強化し、クラスによりキーボード・ソルフェージュやスコア・リーディングを実施する。また、Formation Musicalフォルマシオン・ミュージカルの考え方を取り入れ、室内楽やオーケストラによる既存曲を材料に様々な楽器音による聴音なども行う。ヨーロッパのソルフェージュ教育の手法を更に積極的に取り入れ、音楽全体をつかむための多彩な音感訓練を行う。		
到達目標	音楽を聴いたら楽譜が頭の中に見える「見える耳」、楽譜を見たら頭の中で音楽が鳴る「聴こえる目」をめざす。ピアノだけでなく様々なオーケストラ楽器による音色の聴音もできること。楽曲の旋律・和声・低音など音楽全体を聴き取り、更に既存曲の特徴や時代様式なども考えられるように他の学習との連携も考える。弾き歌いは即興伴奏もできるように。専攻によりスコア・リーディングができるようにする。		
授業計画	能力別（+専攻別）のクラスによって行う。下記は中程度のクラスの例。クラスによっては内容が前後することがある。また、Routineが大切なため同じことを繰り返すことがある。 第1回 授業内容の概要説明。ピアノでの聴音は常に行う 第2回 視唱は2声の視唱、既存曲の視唱など。聴音は単一楽器と伴奏、室内楽など 第3回 伴奏付けと弾き歌い。様々な楽器音での聴音。スコア・リーディング（専攻による） 第4回 上記2, 3回目の内容を繰り返す。木管楽器 第5回 上記2, 3回目の内容を繰り返す。金管楽器 第6回 上記2, 3回目の内容を繰り返す。弦楽器 第7回 上記2, 3回目の内容を繰り返す。弦楽四重奏曲 第8回 上記2, 3回目の内容を繰り返す。歌曲 第9回 上記2, 3回目の内容を繰り返す。アンサンブル曲 第10回 上記に加えて和声聴音は声部が動くコラール風に、既存曲はオーケストラ曲 第11回 上記内容の演習（例「転調するパッセージの調性判断」「フレーズの終止形の判断」） 第12回 専攻別特性による各種訓練。音楽家として十分な音楽力を学ぶ。 第13回 視唱能力、聴音能力、鍵盤和声、即興伴奏、スコア・リーディングなど総合訓練 1 第14回 視唱能力、聴音能力、鍵盤和声、即興伴奏、スコア・リーディングなど総合訓練 2 第15回 視唱能力、聴音能力、鍵盤和声、即興伴奏、スコア・リーディングなど総合訓練 3		
評価方法 (合計100%)	期末試験は授業時間以外に共通試験とクラス毎の試験を行う。 試験50%、授業への参加態度50%。 ソルフェージュは日常の訓練Routineが重要な意味をもつため、授業への参加態度を重視する。		
失格条件	授業を4回以上欠席した者、及び試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業で配布される各種プリントなどは必ず予習や復習をすること。また、市販の教材などを活用して不得意部分を自宅学習し、その成果を授業で確認するという方法も良い。 次の授業までに予習1時間、復習3時間程度を取ること。		
課題へのフィード バック	授業内において行われる課題は、授業時間内に正答を提示し解説する。また宿題は次の授業で確認する。		
教科書	適宜プリントなどを配布する		
著者名			
出版社			
参考書	“A NEW APPROACH TO SIGHT SINGING”		
その他			
備考	ソルフェージュCから系統だっってカリキュラムが組まれるのでソルフェージュDから逆に受講することは望ましくない。また、ソルフェージュA・Bを履修していない者がC・Dを履修することは望ましくない。		
科目生への開講	あり		

ナンバリング	DC303C01	期間	後期
授業科目名	ソルフェージュⅣ		
英訳科目名	Solfege Ⅳ		
担当教員名	粕谷 育子		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	◎
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	ソルフェージュⅢで培った内容を更に発展させ音楽家として必要な音楽能力を高める。ソルフェージュⅣでは専攻別の内容を強化し、クラスによりキーボード・ソルフェージュやスコア・リーディングを実施する。また、Formation Musicalフォルマシオン・ミュージカルの考え方を取り入れ、室内楽やオーケストラによる既存曲を材料に様々な楽器音による聴音なども行う。ヨーロッパのソルフェージュ教育の手法を更に積極的に取り入れ、音楽全体をつかむための多彩な音感訓練を行う。		
到達目標	音楽を聴いたら楽譜が頭の中に見える「見える耳」、楽譜を見たら頭の中で音楽が鳴る「聴こえる目」をめざす。ピアノだけでなく様々なオーケストラ楽器による音色の聴音もできる。楽曲の旋律・和声・低音など音楽全体を聴き取り、更に既存曲の特徴や時代様式なども考えられるように他の学習との連携も考える。弾き歌いは即興伴奏もできる。専攻によりスコア・リーディングができる。		
授業計画	能力別（+専攻別）のクラスによって行う。下記は中程度のクラスの例。クラスによっては内容が前後することがある。また、Routineが大切なため同じことを繰り返すことがある。 第1回 授業内容の概要説明。ピアノでの聴音は常に行う 第2回 視唱は2声の視唱、既存曲の視唱など。聴音は単一楽器と伴奏、室内楽など 第3回 伴奏付けと弾き歌い。様々な楽器音での聴音。スコア・リーディング（専攻による） 第4回 上記2, 3回目の内容を繰り返す。木管楽器 第5回 上記2, 3回目の内容を繰り返す。金管楽器 第6回 上記2, 3回目の内容を繰り返す。弦楽器 第7回 上記2, 3回目の内容を繰り返す。弦楽四重奏曲 第8回 上記2, 3回目の内容を繰り返す。歌曲 第9回 上記2, 3回目の内容を繰り返す。アンサンブル曲 第10回 上記に加えて和声聴音は声部が動くコラール風に、既存曲はオーケストラ曲 第11回 上記内容の演習（例「転調するパッセージの調性判断」「フレーズの終止形の判断」） 第12回 専攻別特性による各種訓練。音楽家として十分な音楽力を学ぶ。 第13回 視唱能力、聴音能力、鍵盤和声、即興伴奏、スコア・リーディングなど総合訓練 1 第14回 視唱能力、聴音能力、鍵盤和声、即興伴奏、スコア・リーディングなど総合訓練 2 第15回 視唱能力、聴音能力、鍵盤和声、即興伴奏、スコア・リーディングなど総合訓練 3		
評価方法 (合計100%)	期末試験は授業時間以外に共通試験とクラス毎の試験を行う。 試験50%、授業への参加態度50%。 ソルフェージュは日常の訓練Routineが重要な意味をもつため、授業への参加態度を重視する。		
失格条件	授業を4回以上欠席した者、及び試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業で配布される各種プリントなどは必ず予習や復習をすること。また、市販の教材などを活用して不得意部分を自宅学習し、その成果を授業で確認するという方法も良い。 次の授業までに予習1時間、復習3時間程度を取ること。		
課題へのフィード バック	授業内において行われる課題は、授業時間内に正答を提示し解説する。また宿題は次の授業で確認する。		
教科書	適宜プリントなどを配布する		
著者名			
出版社			
参考書	“A NEW APPROACH TO SIGHT SINGING”		
その他			
備考	ソルフェージュⅠ～Ⅳまでグレードによって系統だってカリキュラムが組まれるので順番に履修すること。ソルフェージュⅠ・Ⅱ・Ⅲの単位を取得済みでなければⅣを履修することはできない。また、教職課程を履修したい場合はⅢ・Ⅳが教職必修科目となるため、ソルフェージュⅠから2年間で滞ることなくⅣまで単位を取得することが望ましい。		
科目生への開講	あり		

ナンバリング	DC303C01	期間	後期
授業科目名	ソルフェージュⅣ		
英訳科目名	Solfege Ⅳ		
担当教員名	中野 佳代子		
ディプロマ・ポリシー-1		ディプロマ・ポリシー-2	◎
ディプロマ・ポリシー-3		ディプロマ・ポリシー-4	
ディプロマ・ポリシー-5		ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	ソルフェージュⅢで培った内容を更に発展させ音楽家として必要な音楽能力を高める。ソルフェージュⅣでは専攻別の内容を強化し、クラスによりキーボード・ソルフェージュやスコア・リーディングを実施する。また、Formation Musicalフォルマシオン・ミュージカルの考え方を取り入れ、室内楽やオーケストラによる既存曲を材料に様々な楽器音による聴音なども行う。ヨーロッパのソルフェージュ教育の手法を更に積極的に取り入れ、音楽全体をつかむための多彩な音感訓練を行う。		
到達目標	音楽を聴いたら楽譜が頭の中に見える「見える耳」、楽譜を見たら頭の中で音楽が鳴る「聴こえる目」をめざす。ピアノだけでなく様々なオーケストラ楽器による音色の聴音もできる。楽曲の旋律・和声・低音など音楽全体を聴き取り、更に既存曲の特徴や時代様式なども考えられるように他の学習との連携も考える。弾き歌いは即興伴奏もできる。専攻によりスコア・リーディングができる。		
授業計画	能力別（+専攻別）のクラスによって行う。下記は中程度のクラスの例。クラスによっては内容が前後することがある。また、Routineが大切なため同じことを繰り返すことがある。 第1回 授業内容の概要説明。ピアノでの聴音は常に行う 第2回 視唱は2声の視唱、既存曲の視唱など。聴音は単一楽器と伴奏、室内楽など 第3回 伴奏付けと弾き歌い。様々な楽器音での聴音。スコア・リーディング（専攻による） 第4回 上記2, 3回目の内容を繰り返す。木管楽器 第5回 上記2, 3回目の内容を繰り返す。金管楽器 第6回 上記2, 3回目の内容を繰り返す。弦楽器 第7回 上記2, 3回目の内容を繰り返す。弦楽四重奏曲 第8回 上記2, 3回目の内容を繰り返す。歌曲 第9回 上記2, 3回目の内容を繰り返す。アンサンブル曲 第10回 上記に加えて和声聴音は声部が動くコラル風風に、既存曲はオーケストラ曲 第11回 上記内容の演習（例「転調するパッセージの調性判断」「フレーズの終止形の判断」） 第12回 専攻別特性による各種訓練。音楽家として十分な音楽力を学ぶ。 第13回 視唱能力、聴音能力、鍵盤和声、即興伴奏、スコア・リーディングなど総合訓練 1 第14回 視唱能力、聴音能力、鍵盤和声、即興伴奏、スコア・リーディングなど総合訓練 2 第15回 視唱能力、聴音能力、鍵盤和声、即興伴奏、スコア・リーディングなど総合訓練 3		
評価方法 (合計100%)	期末試験は授業時間以外に共通試験とクラス毎の試験を行う。 試験50%、授業への参加態度50%。 ソルフェージュは日常の訓練Routineが重要な意味をもつため、授業への参加態度を重視する。		
失格条件	授業を4回以上欠席した者、及び試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業で配布される各種プリントなどは必ず予習や復習をすること。また、市販の教材などを活用して不得意部分を自宅学習し、その成果を授業で確認するという方法も良い。 次の授業までに予習1時間、復習3時間程度を取ること。		
課題へのフィード バック	授業内において行われる課題は、授業時間内に正答を提示し解説する。また宿題は次の授業で確認する。		
教科書	適宜プリントなどを配布する		
著者名			
出版社			
参考書	“A NEW APPROACH TO SIGHT SINGING”		
その他			
備考	ソルフェージュⅠ～Ⅳまでグレードによって系統だってカリキュラムが組まれるので順番に履修すること。ソルフェージュⅠ・Ⅱ・Ⅲの単位を取得済みでなければⅣを履修することはできない。また、教職課程を履修したい場合はⅢ・Ⅳが教職必修科目となるため、ソルフェージュⅠから2年間で滞ることなくⅣまで単位を取得することが望ましい。		
科目生への開講	なし		

ナンバリング	DC303C01	期間	後期
授業科目名	ソルフェージュⅣ		
英訳科目名	Solfege Ⅳ		
担当教員名	山本 京子		
ディプロマ・ポリシー-1		ディプロマ・ポリシー-2	◎
ディプロマ・ポリシー-3		ディプロマ・ポリシー-4	
ディプロマ・ポリシー-5		ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	ソルフェージュⅢで培った内容を更に発展させ音楽家として必要な音楽能力を高める。ソルフェージュⅣでは専攻別の内容を強化し、クラスによりキーボード・ソルフェージュやスコア・リーディングを実施する。また、Formation Musicalフォルマシオン・ミュージカルの考え方を取り入れ、室内楽やオーケストラによる既存曲を材料に様々な楽器音による聴音なども行う。ヨーロッパのソルフェージュ教育の手法を更に積極的に取り入れ、音楽全体をつかむための多彩な音感訓練を行う。		
到達目標	音楽を聴いたら楽譜が頭の中に見える「見える耳」、楽譜を見たら頭の中で音楽が鳴る「聴こえる目」をめざす。ピアノだけでなく様々なオーケストラ楽器による音色の聴音もできる。楽曲の旋律・和声・低音など音楽全体を聴き取り、更に既存曲の特徴や時代様式なども考えられるように他の学習との連携も考える。弾き歌いは即興伴奏もできる。専攻によりスコア・リーディングができる。		
授業計画	能力別（+専攻別）のクラスによって行う。下記は中程度のクラスの例。クラスによっては内容が前後することがある。また、Routineが大切なため同じことを繰り返すことがある。 第1回 授業内容の概要説明。ピアノでの聴音は常に行う 第2回 視唱は2声の視唱、既存曲の視唱など。聴音は単一楽器と伴奏、室内楽など 第3回 伴奏付けと弾き歌い。様々な楽器音での聴音。スコア・リーディング（専攻による） 第4回 上記2, 3回目の内容を繰り返す。木管楽器 第5回 上記2, 3回目の内容を繰り返す。金管楽器 第6回 上記2, 3回目の内容を繰り返す。弦楽器 第7回 上記2, 3回目の内容を繰り返す。弦楽四重奏曲 第8回 上記2, 3回目の内容を繰り返す。歌曲 第9回 上記2, 3回目の内容を繰り返す。アンサンブル曲 第10回 上記に加えて和声聴音は声部が動くコラール風に、既存曲はオーケストラ曲 第11回 上記内容の演習（例「転調するパッセージの調性判断」「フレーズの終止形の判断」） 第12回 専攻別特性による各種訓練。音楽家として十分な音楽力を学ぶ。 第13回 視唱能力、聴音能力、鍵盤和声、即興伴奏、スコア・リーディングなど総合訓練 1 第14回 視唱能力、聴音能力、鍵盤和声、即興伴奏、スコア・リーディングなど総合訓練 2 第15回 視唱能力、聴音能力、鍵盤和声、即興伴奏、スコア・リーディングなど総合訓練 3		
評価方法 (合計100%)	期末試験は授業時間以外に共通試験とクラス毎の試験を行う。 試験50%、授業への参加態度50%。 ソルフェージュは日常の訓練Routineが重要な意味をもつため、授業への参加態度を重視する。		
失格条件	授業を4回以上欠席した者、及び試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業で配布される各種プリントなどは必ず予習や復習をすること。また、市販の教材などを活用して不得意部分を自宅学習し、その成果を授業で確認するという方法も良い。 次の授業までに予習1時間、復習3時間程度を取ること。		
課題へのフィード バック	授業内において行われる課題は、授業時間内に正答を提示し解説する。また宿題は次の授業で確認する。		
教科書	適宜プリントなどを配布する		
著者名			
出版社			
参考書	“A NEW APPROACH TO SIGHT SINGING”		
その他			
備考	ソルフェージュⅠ～Ⅳまでグレードによって系統だってカリキュラムが組まれるので順番に履修すること。ソルフェージュⅠ・Ⅱ・Ⅲの単位を取得済みでなければⅣを履修することはできない。また、教職課程を履修したい場合はⅢ・Ⅳが教職必修科目となるため、ソルフェージュⅠから2年間で滞ることなくⅣまで単位を取得することが望ましい。		
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	楽曲分析A		
英訳科目名	Music Analysis A		
担当教員名	松本 直祐樹		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>音楽を美しいと感じる時、そこには必ず規則が存在します。 数ある音楽の規則の中で、とりわけ楽曲の形式（楽式：諸要素の配置の手法）を学びます。 本講義では楽式を理解する上で必要な知識と感覚を得るために、</p> <p>1・視聴 2・作曲技法の解説 3・簡易な分析 という順で進めていきます。</p>		
到達目標	楽曲の形式（楽式）を理解することにより、演奏解釈、創作行為に反映させることができる。		
授業計画	<p>第1回 イン트로ダクション、音楽の最低条件とはなにか。 第2回 動機、楽節について：L.v.Beethovenの作品から考える。 第3回 二部形式：日本歌曲を例にとり形式を理解する。 第4回 三部形式（1）R.Schumannの作品から、二部形式と三部形式の違いを考える。 第5回 三部形式（2）F.Schubertの作品から、複合三部形式を理解する。 第6回 ロンド形式：W.A.Mozart,M.Ravelの作品から理解する。 第7回 ソナタ形式（1）主題の対比、提示部、展開部、再現部とは何か。 第8回 ソナタ形式（2）L.v.Beethovenのソナタより形式を分析する。 第9回 小テスト 第10回 変奏曲：N.Paganini,S.Rachmaninovの作品から考える。 第11回 対位法的楽曲（1）カノンについて-J.S.Bach,B.Bartokの作品を分析する。 第12回 対位法的楽曲（2）フーガについて（1）-主唱、答唱、対唱とは何か。 第13回 対位法的楽曲（3）フーガについて（2） -J.S.Bach『平均律クラヴィーア曲集第一巻』よりg mollの分析。 第14回 対位法的楽曲（4）フーガについて（3）-L.v.Beethoven,M.Ravelのフーガを考える。 第15回 前期試験</p>		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度30% 小テスト30% 前期試験40%		
失格条件	欠席回数が6回以上の場合。小テストおよび前期試験を受けなかった場合。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	音楽家には必須の知識なので、必ず復習してください（復習時間の目安：授業時間の3倍）。 また机上の空論にならないよう、ピアノ等で譜例を奏し、感覚的にも理解することに努めてください。		
課題へのフィード バック	授業中に実施する課題に対して、教室内で添削とコメントを伝えます。		
教科書	授業中にプリントを配布します。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	DC303A02	期間	後期
授業科目名	楽曲分析B/楽曲分析		
英訳科目名	Music Analysis B/Music Analysis		
担当教員名	松本 直祐樹		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> -
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	楽曲分析Aで解説した形式を理解した上で、音楽史上重要な作品を実際に分析（アナリーゼ）します。分析とは、旋律的構造および和声的構造を明らかにすることを意味します。構造を明らかにすることは、作品の持つ思想を理解する大きな手がかりになります。逆説的ですが、音楽をより感覚的に理解するための必須作業が分析です。		
到達目標	分析を通じて音楽的理解を深めることにより、演奏解釈、創作行為に反映することができる。		
授業計画	<p>第1回 歌曲の分析（1）：M.Ravel 『美しい三羽の極楽鳥』分析（1）</p> <p>第2回 歌曲の分析（2）：M.Ravel 『美しい三羽の極楽鳥』分析（2）</p> <p>第3回 歌曲の分析（3）：R.Schumann：詩人の恋より『美しい五月』の分析</p> <p>第4回 和声の「種類」について：属七と属九の諸和音、保続音 - J.S.Bach Partita No.2 よりSinfoniaを分析する。</p> <p>第5回 旋律の構成（1）：順次進行と和声外音（非和声音）、跳躍進行 - J.Haydnの作品を例に考える。</p> <p>第6回 旋律の構成（2）：半音階的進行 - F.Chopinの作品を例に考える。</p> <p>第7回 弦楽四重奏曲の分析：シューベルトの弦楽四重奏曲より（1）</p> <p>第8回 弦楽四重奏曲の分析：シューベルトの弦楽四重奏曲より（2）</p> <p>第9回 小テスト</p> <p>第10回 近現代の作品（1）C.Debyussy：前奏曲集第1集より『帆』の分析（1）</p> <p>第11回 近現代の作品（1）C.Debyussy：前奏曲集第1集より『帆』の分析（2）</p> <p>第12回 近現代の作品（2）I.Stravinsky：バレエ音楽『春の祭典』より第二部の簡易な分析（複調、複雑なリズム）</p> <p>第13回 自由な形式による楽曲の分析（1）：Beethoven Sonata No.31op.110より第1,3楽章の分析</p> <p>第14回 自由な形式による楽曲の分析（2）：Beethoven Sonata No.31op.110より第3楽章の分析</p> <p>第15回 まとめ</p>		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度30% 小テスト30% レポート40%		
失格条件	欠席回数が6回以上の場合。小テストを受けなかった場合、レポートが未提出の場合。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	楽式論で解説した楽式論、和声法とソルフェージュがすべてつながることを意識した講義です。 感覚的にも理解できるためには、本講義のみならず和声法演習およびソルフェージュの演習は極めて重要になります。 必ず復習してください（復習時間の目安：授業時間の3倍）。		
課題へのフィード バック	授業中に実施する課題に対して、その場でコメントや添削を行います。 小テストなど提出する課題に対しては、次回の授業でコメントを伝えます。		
教科書	授業中にプリントを配布します。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	期間	前期
授業科目名	歌唱法	
英訳科目名	Basic Singing	
担当教員名	井岡 潤子	
ディプロマ・ポリシー1	ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>*概要*</p> <p>声楽を勉強する人のみならず、音楽家を目指す人にとって声を出して旋律を歌うということは重要不可欠であり、演奏する上での「呼吸」「旋律を奏でる」ことに深く関係してきます。</p> <p>「歌唱法」の授業では歌う時に必要な基本的な“自然な呼吸法”と“呼吸にのせた響きの発声法”の習得を目指します。</p> <p>*ポイント*</p> <p>身体を使つての呼吸・発声</p>	
到達目標	声量の大小に関係なく、身体の必要な筋肉を使って息にのせて発声することができる積極的に歌うことができる	
授業計画	<p>第1回 「声のしくみ」「呼吸法」について 発声・腹式呼吸 ヴォカリーゼ</p> <p>第2～6回 毎回、発声練習をして練習曲（コンコーネ50番）を用いた母音唱法の練習 世界名歌曲、日本歌曲の作品</p> <p>第7～14回 発声練習 世界名歌曲、ミュージカル、重唱、オペラ作品、日本歌曲 いくつかのグループに分かれての演奏発表</p> <p>第15回 発声練習 レポート作成</p>	
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度	60%
	授業に対する姿勢	20%
	レポート	20%
失格条件	出席が2/3に満たないものは失格とみなします。	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	練習曲（コンコーネ50番の予定）、事前に配布した楽譜の譜読み 声楽は身体が楽器な為、長時間の無理な練習は禁物である。よって十分な注意が必要。 (1週間にかかる復習・予習の学修時間の目安：4時間 腹式呼吸を用いた発声の練習、譜読み、作品の解釈)	
課題へのフィード バック	必要に応じて個別もしくは全体にコメントします。	
教科書	・コンコーネ50番（各自で準備：初回授業時に詳細を指示します） ・適宜プリントを配布	
著者名		
出版社		
参考書		
その他	特になし	
備考		
科目生への開講	なし	

ナンバリング	DC103A04	期間	前期
授業科目名	合唱 A / 合唱 I		
英訳科目名	Chorus A / Chorus I		
担当教員名	田末 勝志		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> -	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	合唱という分野は、歌声を使いアンサンブルを理解するものである。もちろん、声楽における発声法を理解実践し作品に取り組んでいく訳だが、本科目はそれ以外に作品の背景、歌詞の理解を含め取り組んでいきたい。また歌唱する立場だけではなく、指揮法も少し取り入れ、音楽を創り上げアンサンブルを理解することも取り入れた。曲目は簡単な宗教曲を使用し、ミサ通常文を理解したい。また邦人曲も含め、ジャズなど様々なジャンルの曲を取り入れたい。		
到達目標	前期終了時には、作品の暗譜、アンサンブルの完成を目指したい。		
授業計画	第1回 発声の基本を理解。 第2回 作品を使用し、ユニゾンで発声の理解。 第3回 作品を使用し、ユニゾンからパート別の正確な音の表現 I 第4回 作品を使用し、ユニゾンからパート別の正確な音の表現 II 第5回 作品全体のアンサンブル実践 I 第6回 作品全体のアンサンブル実践 II 第7回 復習、実践 I 作品前半 第8回 復習、実践 II 作品中盤 第9回 復習、実践 III 作品後半 第10回 復習、実践 IV 作品全体 第11回 指揮を実践、理解 I 基礎編 第12回 指揮を実践、理解 II 応用編 第13回 作品の表現を思考し実践 I 歌詞理解 第14回 作品の表現を思考し実践 II 歌詞内容、発音練習 第15回 作品の表現を思考し実践 III 全体練習		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 60% 授業内での発表など 40%		
失格条件	4回以上欠席した場合。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	楽譜を使用して授業を行うので、必ずその時々の楽譜を整理すること。 正しい音程の予習、予告箇所の予習を必ず行うように。(予習時間90分) 前回の授業の注意点、音程リズムの復習。(復習時間90分)		
課題へのフィード バック	1課題(1曲)練習終了ごとに、楽譜上で再確認する。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	合唱 B		
英訳科目名	Chorus B		
担当教員名	田末 勝志		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	合唱という分野は、歌声を使いアンサンブルを理解するものである。もちろん、声楽における発声法を理解実践し作品に取り組んでいく訳だが、本科目はそれ以外に作品の背景、歌詞の理解を含め取り組んでいきたい。また歌唱する立場だけではなく、指揮法も少し取り入れ、音楽を創り上げアンサンブルを理解することも取り入れたい。		
到達目標	後期終了時には、前期に習得した上に、作品内容の表現、創り上げる力を表現することができる。		
授業計画	第1回 作品の音程、リズムの練習 第2回 作品歌詞の思考、理解 第3回 作品歌詞の思考、理解、実践Ⅰ 作品の流れについて 第4回 作品歌詞の思考、理解、実践Ⅱ 背景について 第5回 作品歌詞の思考、理解、実践Ⅲ 仕上げ 第6回 複数の作品の実践Ⅰ 音程確認 第7回 複数の作品の実践Ⅱ アンサンブルの確認 第8回 複数の作品の実践Ⅲ 指揮を加えてのアンサンブル 第9回 複数の作品の実践Ⅳ 音程確認 第10回 複数の作品の実践Ⅴ アンサンブルの確認 第11回 複数の作品の実践Ⅵ 指揮を加えてのアンサンブル 第12回 複数の作品の実践Ⅶ 音程確認 第13回 複数の作品の実践Ⅷ アンサンブルの確認 第14回 複数の作品の実践Ⅷ 指揮を加えての確認 第15回 アンサンブル、表現について確認		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 60% 授業内での発表など 40%		
失格条件	4回以上欠席した場合。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	楽譜を使用して授業を行うので、必ずその時々の楽譜を整理すること。 正しい音程の予習、予告箇所の予習を必ず行うように。(予習時間90分) 前回の注意点、音程リズムの復習。(復習時間90分)		
課題へのフィード バック	1課題(1曲)練習終了ごとに、注意点を楽譜上で再確認する。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	DC203B01	期間	後期
授業科目名	合唱Ⅱ		
英訳科目名	ChorusⅡ		
担当教員名	田末 勝志		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	合唱という科目は歌唱によるアンサンブルであるので、発声法をしっかり理解し表現できるようにしたい。また練習した数曲の演奏法（内容とプログラム作成）も思考し実践して、結果検討したい。		
到達目標	演奏をする為に、どれだけの過程を行っているかを理解できるようになって欲しい。また、アンサンブルによる音楽の広がりを実感してほしい。		
授業計画	第1回 発声の基礎を説明、練習。 第2回 作品を使用しユニゾンの練習Ⅰ 音程理解 第3回 作品を使用しユニゾンの練習Ⅱ リズム理解 第4回 ただしい音程を表現し、アンサンブルⅠ 少人数での表現 第5回 ただしい音程を表現し、アンサンブルⅡ 全員での表現 第6回 作品の内容、表現方法の理解、実践Ⅰ 背景の理解 第7回 作品の内容、表現方法の理解、実践Ⅱ 歌詞の理解 第8回 複数の作品を使用し実践Ⅰ 曲の表現 第9回 複数の作品を使用し実践Ⅱ 指揮を加えて 第10回 複数の作品と別課題曲の自主練習Ⅰ 音程理解 第11回 複数の作品と別課題曲の自主練習Ⅱ リズム理解 第12回 複数の作品と別課題曲の自主練習Ⅲ 歌詞の理解 第13回 複数の作品と別課題曲の自主練習Ⅳ 指揮を加えて 第14回 練習曲のプログラムを検討し発表 第15回 作品の内容、プログラムについて自主評価		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 70% 発表の内容評価 30%		
失格条件	4回以上欠席した場合。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	楽譜を使用するので、毎回の授業の楽譜を整理準備してください。 正しい音程の予習、予告箇所の予習を欠かさないように。（予習時間90分） 前回の注意点、音程リズムの復習。（復習時間90分）		
課題へのフィード バック	1課題（1曲）練習終了ごとに、注意点を楽譜上で再確認する。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	DC306A05	期間	前期
授業科目名	コンピュータ・ミュージック演習 A/コンピュータ・ミュージック (ノテーション)		
英訳科目名	Computer Music Exercise A/Computer Music(Notation)		
担当教員名	山田 夏		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>PC、タブレットなど当たり前の今、楽譜浄書（清書）もコンピュータの楽譜制作ソフトを使います。実習ではプロ、アマチュアの音楽家や教育現場などで使用されているソフトウェア「Finale」で、「楽譜制作」の基本を学びます。スキルをひとつ増やして可能性を広げましょう。</p> <p>ポイント</p> <p>1、音楽用ソフトウェアやPC操作といった技能を高め、応用していく力をつける。</p> <p>2、他授業や活動などにおいて、積極的な使用の「きっかけ」になること。</p> <p>3、「キャリア支援関連科目」として、現場での使われ方などを紹介しながら、各自のキャリアについて考える機会となることを目指しています。</p>		
到達目標	<p>1、ソフトウェアFinaleの基本操作を自身で扱える。</p> <p>2、スコア譜、パート譜を作成することができる。</p> <p>3、インターネット上での活用につながる。</p> <p>4、.本科目以外での積極的な使用ができる。</p> <p>5、各自のキャリアデザインに生かす。</p>		
授業計画	<p>第1回 オリエンテーション</p> <p>第2～4回 楽譜作成基礎（簡単な楽曲を用いての作成） ソフトウェアの基本操作とコンピュータの扱い方（ファイル管理など）を習得</p> <p>第5～9回 課題曲作成1 オーケストラスコア作成</p> <p>第10～15回 課題曲作成2 バンドスコア作成 ポピュラー曲における記譜、使用楽器などについての考察</p> <p>*手書きからコンピュータ浄書へ *様々なジャンルの「楽譜」の紹介 *音符と文字（歌詞を含む）の混合した譜面の作り方 *ネット上での楽譜のやりとり などを取り上げます。</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>授業への参加態度 50%</p> <p>作品内容 50%</p>		
失格条件	5回以上の欠席、及び提出物の未提出。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>1.授業時間外のPC貸し出しは不可のため、授業時間内に積極的にPCを使用すること。</p> <p>2.疑問点等は残さず、その都度質問しクリアしておくように。</p> <p>3、フリーのアプリなど授業中に紹介します。各自できる範囲で（ダウンロードは自己責任となります）日常的に利用して欲しいです。</p>		
課題へのフィード バック	課題等制作時には授業内で適宜個別にコメントしていきます。提出日には全体に向けてコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	DC306A06	期間	後期
授業科目名	コンピュータ・ミュージック演習B/コンピュータ・ミュージック（エディット）		
英訳科目名	Computer Music Exercise B/Computer Music(Edit)		
担当教員名	山田 夏		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>普段耳にする音楽はあらゆる工程でコンピュータが使用されているの言うまでもありません。またそれら宣伝のために、個人またはグループの演奏や情報をSNSや動画サービスなどで発信するのは当たり前となっています。</p> <p>加えてコンピュータを使用した楽曲制作（DTM）の認知度が上がってきました。ボーカロイドの登場や、スマホやタブレットで気軽に始められるようになったことなど（本格的な制作には向きませんが）、様々な要因から楽器経験の有無に関わらず多くの人がDTMを楽しみ、その世界を広げています。</p> <p>自分には関係がない分野だと思っている人も、スキルを増やして可能性を広げましょう。</p> <p>ポイント</p> <ol style="list-style-type: none"> 1、コンピュータを使用した楽曲制作の基本を学ぶこと。 2、プロミュージシャンも使用のDAWソフトウェアで基本操作を習得することで、他のDAWソフトウェア操作の予備知識となること。 3、他授業や活動などへの積極的な使用の「きっかけ」になること。 4、「キャリア支援関連科目」として、プロの現場の声などを紹介しながら、各自のキャリアデザインについて考える機会となることを目指しています。 		
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1.コンピュータを使用した楽曲制作の基本の習得。 2.DAWソフトウェアの基本操作の習得。 3.楽曲公開やデモ音源（専攻する楽器での演奏や歌唱など）を作成する方法の習得。 		
授業計画	<p>第1回 オリエンテーション、ループ素材を用いて制作体験</p> <p>第2～4回 DAWソフトウェア 基本操作</p> <p>第5～11回 制作実習</p> <p style="padding-left: 40px;">MIDI音符入力、編集、</p> <p>第12～14回 録音（歌、楽器音など）、編集、加工</p> <p style="padding-left: 40px;">SNS活用術</p> <p>第15回 Mix（音量バランス調整など）</p> <p style="padding-left: 40px;">音声ファイル作成</p> <p style="padding-left: 40px;">提出</p> <p>*最新DAW情報とシンセサイザーの歴史</p> <p>*音楽制作、教育の現場でのDTMについて</p> <p>*メディア作品鑑賞</p> <p>など取り上げます。</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>授業への参加態度 50%</p> <p>作品内容 50%</p>		
失格条件	5回以上の欠席、及び提出物の未提出。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<ol style="list-style-type: none"> 1、授業時間外のPC貸し出しは不可のため、授業時間内に積極的にPCを使用すること。 2、疑問点等は残さず、その都度質問しクリアしておくように。 3、フリーのアプリなど授業中に紹介して行きます。各自でできる範囲で（ダウンロードは自己責任となります）DTMを活用して欲しいと思います。 		
課題へのフィードバック	課題制作中は適宜個別にコメントします。提出時には全体にコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	DC303A01	期間	前期
授業科目名	対位法		
英訳科目名	Counterpoint		
担当教員名	奥西 千壽		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>音楽の3要素といわれるメロディー・ハーモニー・リズム。このうちメロディー（継時音程）とハーモニー（同時音程）はどちらも「音程」です。 この2種類の音程の使われ方を、対位法の観点より学習します。 対位法の学習にはいくつかの方式がありますが、この授業ではフランス（パリ国立音楽院）の方式により二声対位法を実習します。 授業では、与えられた定旋律（10小節前後・全音符による）に対位法の規則に従い対旋律を作ります。 限定された手法の中で、一つの音がどの様に動いていくべきか、シンプルで美しい旋律線を考えていきます。</p>		
到達目標	<p>15回の授業で対位法の書法に習熟することは困難です。ただ、15回の授業期間を通して、厳格な対位法の規則の中で1つの音の在り方を模索し、より良い旋律を作ろうとすることは、音に対する感覚を鋭敏とし、音楽に対する感性を磨く事となります。 この授業では ①対位法の書法を理解すること。 ②二声華麗対位法において、経過音・刺繍音・掛留音を正しく扱うことが出来る。 ③縦（和声的）・横（旋律的）双方の音程に対して、視覚的（楽譜上）・聴覚的（演奏上）に正確に認識し鋭敏な感覚を得ることが出来る。 ④対位法的な美しい旋律線を探求することが出来る。 を目標とし進めていきます。</p>		
授業計画	<p>第1回 授業ガイダンス。対位法の歴史と様々な対位法について。 第2回 二声対位法 第1類「全音符対旋律」上声 解説・範例分析・課題実施 第3回 二声対位法 第1類「全音符対旋律」下声 解説・範例分析・課題実施 第4回 二声対位法 第2類「二分音符対旋律」上声 解説・範例分析・課題実施 第5回 二声対位法 第2類「二分音符対旋律」下声 解説・範例分析・課題実施 第6回 二声対位法 第3類「四分音符対旋律」上声 解説・範例分析・課題実施 第7回 二声対位法 第3類「四分音符対旋律」下声 解説・範例分析・課題実施 第8回 二声対位法 第4類「移勢対旋律」上声 解説・範例分析・課題実施 第9回 二声対位法 第4類「移勢対旋律」下声 解説・範例分析・課題実施 第10回 二声対位法 第5類「華麗対旋律」上声 解説・範例分析・課題実施 第11回 二声対位法 第5類「華麗対旋律」下声 解説・範例分析・課題実施 第12回 二声華麗対位法 実習 第13回 二声華麗対位法 実習 第14回 二声華麗対位法 授業時間内で課題を実施し提出。 第15回 提出課題返却。二声対位法のまとめ。三声対位法の解説と範例分析。</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>①授業への参加態度 10% ②授業で実施した課題の清書楽譜。24% ③授業終了時に出す課題実施。 36% 上記①②は第2回～第13回まで毎回授業開始時に提出します。 ④第14回授業での提出課題。 30% ②③④は課題の内容とともに、楽譜として正しく書けているか、美しく書けているかも評価します。</p>		
失格条件	4回以上欠席した場合。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	評価方法の②と③が復習となります。しっかりと取り組んで下さい。（4時間）		
課題へのフィード バック	評価方法②③④の提出課題については、すべて添削し、コメント・評価をつけて次週の授業開始時に返却します。		
教科書	不使用。授業内でプリントを配布します。		
著者名			
出版社			
参考書	<p>「二声対位法」 池内友次郎 著 音楽之友社 「対位法」 ノエル・ギャロン / マルセル・ビッチュ 著 矢代秋雄 訳 音楽之友社 「厳格対位法」 山口博史 著 音楽之友社</p>		
その他	特になし。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	DC303A01	期間	前期
授業科目名	対位法 (作曲専攻)		
英訳科目名	Counterpoint		
担当教員名	奥西 千壽		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>音楽の3要素といわれるメロディー・ハーモニー・リズム。このうちメロディー（継時音程）とハーモニー（同時音程）はどちらも「音程」です。 この2種類の音程の使われ方を、対位法の観点より学習します。 対位法の学習にはいくつかの方式がありますが、この授業ではフランス（パリ国立音楽院）の方式により二声対位法を実習します。 授業では、与えられた定旋律（10小節前後・全音符による）に対位法の規則に従い対旋律を作ります。 限定された手法の中で、一つの音がどの様に動いていくべきか、シンプルで美しい旋律線を考えていきます。</p>		
到達目標	<p>15回の授業で対位法の書法に習熟することは困難です。ただ、15回の授業期間を通して、厳格な対位法の規則の中で1つの音の在り方を模索し、より良い旋律を作ろうとすることは、音に対する感覚を鋭敏とし、音楽に対する感性を磨く事となります。 この授業では ①対位法の書法を理解すること。 ②二声華麗対位法において、経過音・刺繍音・掛留音を正しく扱うことが出来る。 ③縦（和声的）・横（旋律的）双方の音程に対して、視覚的（楽譜上）・聴覚的（演奏上）に正確に認識し鋭敏な感覚を得ることが出来る。 ④対位法的な美しい旋律線を探求することが出来る。 を目標とし進めていきます。</p>		
授業計画	<p>第1回 授業ガイダンス。対位法の歴史と様々な対位法について。 第2回 二声対位法 第1類「全音符対旋律」上声 解説・範例分析・課題実施 第3回 二声対位法 第1類「全音符対旋律」下声 解説・範例分析・課題実施 第4回 二声対位法 第2類「二分音符対旋律」上声 解説・範例分析・課題実施 第5回 二声対位法 第2類「二分音符対旋律」下声 解説・範例分析・課題実施 第6回 二声対位法 第3類「四分音符対旋律」上声 解説・範例分析・課題実施 第7回 二声対位法 第3類「四分音符対旋律」下声 解説・範例分析・課題実施 第8回 二声対位法 第4類「移勢対旋律」上声 解説・範例分析・課題実施 第9回 二声対位法 第4類「移勢対旋律」下声 解説・範例分析・課題実施 第10回 二声対位法 第5類「華麗対旋律」上声 解説・範例分析・課題実施 第11回 二声対位法 第5類「華麗対旋律」下声 解説・範例分析・課題実施 第12回 二声華麗対位法 実習 第13回 二声華麗対位法 実習 第14回 二声華麗対位法 授業時間内で課題を実施し提出。 第15回 提出課題返却。二声対位法のまとめ。三声対位法の解説と範例分析。</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>①授業への参加態度 10% ②授業で実施した課題の清書楽譜。24% ③授業終了時に出す課題実施。 36% 上記①②は第2回～第13回まで毎回授業開始時に提出します。 ④第14回授業での提出課題。 30% ②③④は課題の内容とともに、楽譜として正しく書けているか、美しく書けているかも評価します。</p>		
失格条件	4回以上欠席した場合。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	評価方法の②と③が復習となります。しっかりと取り組んで下さい。（4時間）		
課題へのフィード バック	評価方法②③④の提出課題については、すべて添削し、コメント・評価をつけて次週の授業開始時に返却します。		
教科書	不使用。授業内でプリントを配布します。		
著者名			
出版社			
参考書	<p>「二声対位法」 池内友次郎 著 音楽之友社 「対位法」 ノエル・ギャロン / マルセル・ビッチュ 著 矢代秋雄 訳 音楽之友社 「厳格対位法」 山口博史 著 音楽之友社</p>		
その他	特になし。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	DC305A09	期間	前期
授業科目名	作・編曲法A		
英訳科目名	Composition Technique A		
担当教員名	檜垣 智也		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ◎	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ◎
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ◎	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	この授業は編曲を実践する授業です。編曲の考え方を理解し、実際に室内楽や独奏曲に編曲してみます。		
到達目標	楽器の特性を活かした編曲ができる。		
授業計画	第1回 授業ガイダンス 第2回 楽譜の書き方 第3回 編曲の考え方ー編成を変える 第4回 編曲の考え方ージャンルを変える 第5回 編曲の考え方ーオリジナリティに主眼をおく 第6回 トランスクリプションの実習 第7回 個別指導 第8回 中間合評会 第9回 編曲する作品の選択と楽器編成 第10回 楽譜制作、個別指導1 第11回 楽譜制作、個別指導2 第12回 楽譜制作、個別指導3 第13回 リハーサル 第14回 合評会 第15回 まとめ		
評価方法 (合計100%)	小課題 10% 最終課題 90%		
失格条件	6回以上欠席した場合。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業中にできなかった部分の編曲をホームワークとします。		
課題へのフィード バック	授業中にアドバイスをしていきます。		
教科書	エッセンシャル・ディクショナリー 楽器の音域・音質・奏法		
著者名	トム・ゲルー (著),デイヴ・ブラック (著),八木澤 教司 (監修),元井 夏彦 (翻訳)		
出版社	ヤマハミュージックメディア		
参考書			
その他	受講者のレベル、進捗、興味に合わせて、個別に指導内容を変えていきます。 作・編曲法Bを履修する予定の者は、まずこの授業から履修することが望ましいです。		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	DC305A10	期間	後期
授業科目名	作・編曲法B		
英訳科目名	Composition Technique B		
担当教員名	檜垣 智也		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> -
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	この授業は、作曲を実践する授業です。作・編曲法Aの発展として位置づけています。指定するテーマに基づいた作曲に挑戦します。テーマは受講生のレベルに従って決めます。授業内に合評会があります。		
到達目標	伴奏付きの歌曲（歌）の作曲ができる。		
授業計画	第1回 導入～作曲の方法 第2回 旋律の作り方（1） 第3回 旋律の作り方（2） 第4回 伴奏の作り方（1） 第5回 伴奏の作り方（2） 第6回 形式（1） 第7回 形式（2） 第8回 楽曲の分析（1） 第9回 楽曲の分析（2） 第10回 作曲の個別指導（1） 第11回 作曲の個別指導（2） 第12回 作曲の個別指導（3） 第13回 作曲の個別指導（4） 第14回 リハーサル 第15回 最終合評会		
評価方法 (合計100%)	提出作品100%		
失格条件	6回以上欠席した場合。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	作曲は基本的にホームワークとしてやってきて下さい。授業ではそれをレッスンし、学生同士で議論し合い、また新しい素材を提供します。		
課題へのフィード バック	授業中にアドバイスをしていきます。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書	エッセンシャル・ディクショナリー 楽器の音域・音質・奏法 著者名：トム・ゲルー（著）、デイヴ・ブラック（著）、八木澤 教司（監修）、元井 夏彦（翻訳） 出版社：ヤマハミュージックメディア ISBNコード：9784636923315		
その他	これまでで作った作品がある場合は初回授業に持ってきて下さい。 受講者のレベル、進捗、興味に合わせて、個別に指導内容を変えていきます。 作・編曲法Aを履修していることが望ましいですが、この授業のみ受講する学生も拒みません。		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング		期間	前期						
授業科目名	キーボード・ハーモニー基礎A								
英訳科目名	Keyboard Harmony Basic A								
担当教員名	丹羽 あゆみ								
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> -	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎						
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> -						
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー6							
授業概要・ポイント	<p><授業概要> 鍵盤上で、三和音・属七の和音を掴む練習と、各和音の和音記号、コードネームの習得をおこないながら、旋律に対して適切な機能感、和音、バスラインを選択できる力を養う。また、平行して、習得した和音を含む旋律の伴奏付けと弾き歌いの練習を実施する。</p> <p><ポイント> ・和音を、理論としてではなく、白鍵と黒鍵の位置関係、指使い、手の形などで感覚的に掴めるよう、簡単な練習を数多くおこなう。 ・各項目ごとに、項目を含む実曲を分析し、より良い伴奏付けの参考とする。 ・伴奏付け、弾き歌いともに、上記のポイントと平行するような段階的な課題を実施する。 ・属七の和音については、導音と第七音を意識した練習を数多くおこなう。 ・バスラインの選択にあたっては、旋律とバスラインの音程にポイントをおく。</p>								
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・楽譜上のコードネームを鍵盤上で演奏できること。 ・旋律に対して、適切な和音を選択し、コードネームで表示できること。 ・旋律に対して、より良いバスラインを選択できること。 ・旋律に対して、何種類かの伴奏付けができること。 ・与えられた曲の和音、コードネーム、バスライン、フレーズ等を分析し、弾き歌いを通して表現できること。 								
授業計画	<p>第1回 長・短三和音のコードネーム 三和音の転回 I・Vの和音 (鍵盤上で実施) 第2回 コードネーム(三和音、属七) 属七の和音基本形・第1転回形 (鍵盤上で実施) 第3回 I・V7を使った伴奏と弾き歌い フレーズと機能感について 非和音について 第4回 バスの選び方 I・V7を使った伴奏と弾き歌い 第5回 属七の転回形 I・属七(転回形)を使った伴奏と弾き歌い 第6回 終止形とIV・II7の第1転回形 サブドミナントを含む終止形を使った伴奏(1) 四和音のコードネーム 第7回 終止形とIV・II7の第1転回形 サブドミナントを含む終止形を使った伴奏(2) II7について。 第8回 IVの第2転回形とII7の第3転回形を使った伴奏と弾き歌い 第9回 IIの基本形・II7の第2転回形・Vの第2転回形・IVの第1転回形などを使った伴奏 バスの選び方、弾き歌い 第10回 共通三和音を使った近親調への転調 第11回 1~10のまとめ 第12回 副属七の和音1 (v度調のV度・iv度調のV度)を使った伴奏と弾き歌い 第13回 副属七の和音2 (v度調のV度・iv度調のV度)を使った伴奏と弾き歌い 第14回 総合問題1 第15回 総合問題2</p>								
評価方法 (合計100%)	<table> <tr> <td>授業への参加態度</td> <td>10%</td> </tr> <tr> <td>授業中の課題、宿題の実施状況</td> <td>30%</td> </tr> <tr> <td>試験(実技)</td> <td>60%</td> </tr> </table>			授業への参加態度	10%	授業中の課題、宿題の実施状況	30%	試験(実技)	60%
授業への参加態度	10%								
授業中の課題、宿題の実施状況	30%								
試験(実技)	60%								
失格条件	4回以上の欠席								
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<ul style="list-style-type: none"> ・授業時の課題を復習(復習時間 2~3時間) ・宿題の課題の実施(約0.5時間) ・演習終了時に配布する次回課題の予習。(予習時間 1時間) <p>※達成度について個人差があるため、各自の目標とする達成度は教師と話し合うこと。 ※評価方法の『授業中の課題、宿題の実施状況』にあたる。(評価方法 参照)</p>								
課題へのフィード バック	<ul style="list-style-type: none"> ・授業時の課題実施に際してコメントする ・宿題の課題実施に対してまとめ解説後、コメントする ・前期試験終了後、各自にコメントする <p>※コメントについては、全員に共通することは全体で、各自の実施状況については個別におこなう</p>								
教科書	不使用								
著者名									
出版社									
参考書									
その他	教材は毎時間配布するプリントを使用するため、プリントの管理に注意すること								
備考									
科目生への開講	なし								

ナンバリング	期間	前期
授業科目名	キーボード・ハーモニー基礎A	
英訳科目名	Keyboard Harmony Basic A	
担当教員名	内尾 恵美	
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> -	ディプロマ・ポリシー2 <技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー4 <関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー6
授業概要・ポイント	<p><授業概要> 鍵盤上で、三和音・属七の和音を掴む練習と、各和音の和音記号、コードネームの習得をおこないながら、旋律に対して適切な機能感、和音、バスラインを選択できる力を養う。また、平行して、習得した和音を含む旋律の伴奏付けと弾き歌いの練習を実施する。</p> <p><ポイント> ・和音を、理論としてではなく、白鍵と黒鍵の位置関係、指使い、手の形などで感覚的に掴めるよう、簡単な練習を数多くおこなう。 ・各項目ごとに、項目を含む実曲を分析し、より良い伴奏付けの参考とする。 ・伴奏付け、弾き歌いともに、上記のポイントと平行するような段階的な課題を実施する。 ・属七の和音については、導音と第七音を意識した練習を数多くおこなう。 ・バスラインの選択にあたっては、旋律とバスラインの音程にポイントをおく。</p>	
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・楽譜上のコードネームを鍵盤上で演奏できる。 ・旋律に対して、適切な和音を選択し、コードネームで表示できる。 ・旋律に対して、より良いバスラインを選択できる。 ・旋律に対して、何種類かの伴奏付けができる。 ・与えられた曲の和音、コードネーム、バスライン、フレーズ等を分析し、弾き歌いを通して表現できる。 	
授業計画	<p>第1回 長・短三和音のコードネーム 三和音の転回 I・Vの和音 (鍵盤上で実施)</p> <p>第2回 コードネーム(三和音、属七) 属七の和音基本形・第1転回形 (鍵盤上で実施)</p> <p>第3回 I・V7を使った伴奏と弾き歌い フレーズと機能感について 非和声音について</p> <p>第4回 バスの選び方 I・V7を使った伴奏と弾き歌い</p> <p>第5回 属七の転回形 I・属七(転回形)を使った伴奏と弾き歌い</p> <p>第6回 終止形とIV・II7の第1転回形 サブドミナントを含む終止形を使った伴奏(1) 四和音のコードネーム</p> <p>第7回 終止形とIV・II7の第1転回形 サブドミナントを含む終止形を使った伴奏(2) II7について。</p> <p>第8回 IVの第2転回形とII7の第3転回形を使った伴奏と弾き歌い</p> <p>第9回 IIの基本形・II7の第2転回形・Vの第2転回形・IVの第1転回形などを使った伴奏 バスの選び方、弾き歌い</p> <p>第10回 共通三和音を使った近親調への転調</p> <p>第11回 1~10のまとめ</p> <p>第12回 副属七の和音1 (v度調のV度・iv度調のV度)を使った伴奏と弾き歌い</p> <p>第13回 副属七の和音2 (v度調のV度・iv度調のV度)を使った伴奏と弾き歌い</p> <p>第14回 総合問題1</p> <p>第15回 総合問題2</p>	
評価方法 (合計100%)	<p>授業への参加態度 10%</p> <p>授業中の課題、宿題の実施状況 30%</p> <p>試験(実技) 60%</p>	
失格条件	4回以上の欠席	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<ul style="list-style-type: none"> ・授業時の課題を復習(復習時間 2~3時間) ・宿題の課題の実施(約0.5時間) ・演習終了時に配布する次回課題の予習。(予習時間 1時間) <p>※達成度について個人差があるため、各自の目標とする達成度は教師と話し合うこと。 ※評価方法の『授業中の課題、宿題の実施状況』にあたる。(評価方法 参照)</p>	
課題へのフィード バック	<ul style="list-style-type: none"> ・授業時の課題実施に際してコメントする ・宿題の課題実施に対してまとめ解説後、コメントする ・前期試験終了後、各自にコメントする <p>※コメントについては、全員に共通することは全体で、各自の実施状況については個別におこなう</p>	
教科書	不使用	
著者名		
出版社		
参考書		
その他	教材は毎時間配布するプリントを使用するため、プリントの管理に注意すること	
備考		
科目生への開講	なし	

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	キーボード・ハーモニー基礎B		
英訳科目名	Keyboard Harmony Basic B		
担当教員名	丹羽 あゆみ		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p><授業概要> 鍵盤上で、副属七(減七・半減七を含む)・MollDur・ナポリの6・増六の和音を掴む練習と、各和音の和音記号、コードネームの習得をおこないながら、旋律に対して適切な機能感、和音、バスラインを選択できる力を養う。また、平行して、習得した和音を含む旋律の伴奏付けと弾き歌いの練習を実施する。</p> <p><ポイント> ・和音を、理論としてではなく、白鍵と黒鍵の位置関係、指使い、手の形などで感覚的に掴めるよう、簡単な練習を数多くおこなう。 ・各項目ごとに、項目を含む実曲を分析し、より良い伴奏付けの参考とする。 ・伴奏付け、弾き歌いともに、上記のポイントと平行するような段階的な課題を実施する。 ・属七の和音については、導音と第七音を意識した練習を数多くおこなう。 ・バスラインの選択にあたっては、旋律とバスラインの音程にポイントをおく。</p>		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・楽譜上の和音記号、コードネームを鍵盤上で演奏できること。 ・旋律に対して、適切な和音を選択し、コードネームで表示できること。 ・旋律に対して、より良いバスラインを選択できること。 ・旋律に対して、何種類かの伴奏付けができること。(調外和音の使用を含む) ・与えられた曲の和音、バスライン、フレーズ等を分析し、弾き歌いを通して表現できること。 		
授業計画	<p>第1回 基礎Aの復習 半減七と減七・MollDurの和音を使ったカデンツ 伴奏付け 第2回 副属七(iv度調のV度、v度調のV度以外)の掴み方 カデンツ・伴奏付け 第3回 副属七・増三四の和音の掴み方 カデンツ・弾き歌い 第4回 副属七・増三四の和音を使った伴奏と弾き歌い1 第5回 副属七・増三四の和音を使った伴奏と弾き歌い2 第6回 共通和音の転義による転調(七の和音の利用)を使ったカデンツ 実曲の分析 第7回 共通和音の転義による転調(七の和音の利用)を使った伴奏付け 弾き歌い 第8回 ナポリの6と増六・増五六・増三四の和音を使ったカデンツ 実曲の分析 第9回 ナポリの6と増六・増五六・増三四の和音を使ったカデンツ 伴奏付け 弾き歌い 第10回 反復進行 反復進行による転調のカデンツ 実曲の分析 伴奏付け 第11回 偶成和音を使ったカデンツ 実曲の分析 第12回 後期のまとめ 第13回 総合課題1 第14回 総合課題2 第15回 総合課題3</p>		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度	10%	
	授業中の課題、宿題の実施状況	30%	
	試験(実技)	60%	
失格条件	4回以上の欠席		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<ul style="list-style-type: none"> ・授業時の課題を復習(復習時間 2～3時間) ・宿題の課題の実施(約0.5時間) ・演習終了時に配布する次回課題の予習。(予習時間 1時間) <p>※達成度について個人差があるため、各自の目標とする達成度は教師と話し合うこと。 ※評価方法の『授業中の課題、宿題の実施状況』にあたる。(評価方法 参照)</p>		
課題へのフィード バック	<ul style="list-style-type: none"> ・授業時の課題実施に際してコメントする ・宿題の課題実施に対してまとめ解説後、コメントする ・前期試験終了後、各自にコメントする <p>※コメントについては、全員に共通することは全体で、各自の実施状況については個別におこなう</p>		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	教材は毎時間配布するプリントを使用するため、プリントの管理に注意すること		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	期間	後期
授業科目名	キーボード・ハーモニー基礎B	
英訳科目名	Keyboard Harmony Basic B	
担当教員名	内尾 恵美	
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2 <技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー4 <関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6
授業概要・ポイント	<p><授業概要> 鍵盤上で、副属七(減七・半減七を含む)・MollDur・ナポリの6・増六の和音を掴む練習と、各和音の和音記号、コードネームの習得をおこないながら、旋律に対して適切な機能感、和音、バスラインを選択できる力を養う。また、平行して、習得した和音を含む旋律の伴奏付けと弾き歌いの練習を実施する。</p> <p><ポイント> ・和音を、理論としてではなく、白鍵と黒鍵の位置関係、指使い、手の形などで感覚的に掴めるよう、簡単な練習を数多くおこなう。 ・各項目ごとに、項目を含む実曲を分析し、より良い伴奏付けの参考とする。 ・伴奏付け、弾き歌いともに、上記のポイントと平行するような段階的な課題を実施する。 ・属七の和音については、導音と第七音を意識した練習を数多くおこなう。 ・バスラインの選択にあたっては、旋律とバスラインの音程にポイントをおく。</p>	
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・楽譜上の和音記号、コードネームを鍵盤上で演奏できる。 ・旋律に対して、適切な和音を選択し、コードネームで表示できる。 ・旋律に対して、より良いバスラインを選択できる。 ・旋律に対して、何種類かの伴奏付けができる。(調外和音の使用を含む) ・与えられた曲の和音、バスライン、フレーズ等を分析し、弾き歌いを通して表現できる。 	
授業計画	第1回 基礎Aの復習 半減七と減七・MollDurの和音を使ったカデンツ 伴奏付け 第2回 副属七(iv度調のV度、v度調のV度以外)の掴み方 カデンツ・伴奏付け 第3回 副属七・増三四の和音の掴み方 カデンツ・弾き歌い 第4回 副属七・増三四の和音を使った伴奏と弾き歌い1 第5回 副属七・増三四の和音を使った伴奏と弾き歌い2 第6回 共通和音の転義による転調(七の和音の利用)を使ったカデンツ 実曲の分析 第7回 共通和音の転義による転調(七の和音の利用)を使った伴奏付け 弾き歌い 第8回 ナポリの6と増六・増五六・増三四の和音を使ったカデンツ 実曲の分析 第9回 ナポリの6と増六・増五六・増三四の和音を使ったカデンツ 伴奏付け 弾き歌い 第10回 反復進行 反復進行による転調のカデンツ 実曲の分析 伴奏付け 第11回 偶成和音を使ったカデンツ 実曲の分析 第12回 後期のまとめ 第13回 総合課題1 第14回 総合課題2 第15回 総合課題3	
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 10% 授業中の課題、宿題の実施状況 30% 試験(実技) 60%	
失格条件	4回以上の欠席	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<ul style="list-style-type: none"> ・授業時の課題を復習(復習時間 2~3時間) ・宿題の課題の実施(約0.5時間) ・演習終了時に配布する次回課題の予習。(予習時間 1時間) <p>※達成度について個人差があるため、各自の目標とする達成度は教師と話し合うこと。 ※評価方法の『授業中の課題、宿題の実施状況』にあたる。(評価方法 参照)</p>	
課題へのフィード バック	<ul style="list-style-type: none"> ・授業時の課題実施に際してコメントする ・宿題の課題実施に対してまとめ解説後、コメントする ・前期試験終了後、各自にコメントする <p>※コメントについては、全員に共通することは全体で、各自の実施状況については個別におこなう</p>	
教科書	不使用	
著者名		
出版社		
参考書		
その他	教材は毎時間配布するプリントを使用するため、プリントの管理に注意すること	
備考		
科目生への開講	なし	

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	キーボード・ハーモニー応用 A		
英訳科目名	Keyboard Harmony Advance A		
担当教員名	丹羽 あゆみ		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p><授業概要> キーボード・ハーモニー基礎Aで習得した内容・素材を用いて、コード進行の移調奏・作成、即興、伴奏付け・和音付け、実曲の分析と実施・移調奏などをおこなう。応用では、学生の選択の幅を広げ、より自主的・自発的な学習を求める。</p> <p><ポイント> 多様な移調奏を数多く経験することで、素材の引き出しを増やし、コード進行の作成・即興、伴奏付け・和音付けについて、多種多様な引き出しの選択肢の中から、どのように取捨選択して組み合わせていくか、その理論と技術を段階を経て学習していく。実曲の分析と実施・移調奏では、多くの実曲を課題にし、各自の専攻科目との融和を図る。</p>		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・音程、カデンツなどの素材について指示する条件に基づき簡単な旋律の即興ができる ・条件に基づき、基礎的なコード進行を作成できる ・ひとつの旋律に対して何種類かの和音付けとバスラインを選択でき、伴奏として演奏できる ・実曲の分析と初見演奏ができる ・簡単なカデンツ・実曲の移調奏ができる 		
授業計画	<p>第1回 音程、音階を利用した反復進行・移調奏／旋律の装飾／トニック・ドミナントのコード進行の移調奏 第2回 前回の復習と宿題の確認／旋律の作成と装飾2／トニック・ドミナントのコード進行の作成 ／実曲の分析と移調奏 第3回 前回の復習と宿題の確認／旋律の作成と装飾3／トニック・ドミナントのコード進行の作成 とそのコード進行による即興 第4回 前回の復習と宿題の確認／旋律の作成と装飾4／サブドミナントを加えたコード進行の移調奏 ／実曲の分析と移調奏 第5回 前回の復習と宿題の確認／トニック・サブドミナント・ドミナントのコード進行作成とそのコード進行 による即興 第6回 1～5のまとめ 第7回 副属七の和音(v度調のV度・iv度調のV度)を含むコード進行の移調奏／実曲の分析と移調奏 第8回 前回の復習と宿題の確認／副属七を含むコード進行の作成とそのコード進行による即興 第9回 前回の復習と宿題の確認／伴奏付けまたは和音付け／実曲の分析と移調奏 第10回 7～9のまとめ 2部形式・3部形式の旋律作成 第11回 共通三和音を使った転調のコード進行の移調奏／実曲の分析・移調奏／伴奏付けまたは和音付け 第12回 前回の復習と宿題の確認／共通三和音を使った転調のコード進行作成とそのコード進行による即興 第13回 まとめと総合問題1 第14回 まとめと総合問題2 第15回 まとめと総合問題3</p>		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度	10%	
	復習・予習・宿題・小テストなどの実施状況	30%	
	試験(実技)	60%	
失格条件	4回以上の欠席		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	<ol style="list-style-type: none"> 1. 授業時間内の課題の復習 (復習時間 2時間) 2. 宿題の課題の実施 (1時間) 3. 次回の授業プリントの予習 (予習時間 1時間) <p>※キーボードの実技については個人差があるため、課題実施について問題があれば、相談の上、実施方法を検討することも可能 ※1・2・3は、評価方法の『復習・予習・宿題・小テストなどの実施状況』にあたり、毎回の授業で1・2・3の中からポイントを決めて評価する</p>		
課題へのフィードバック	<ul style="list-style-type: none"> ・授業中の課題実施については、項目により全体または各自にコメント ・前授業の復習については、次の時間に各自に確認してコメント ・宿題課題については、次の時間に解説後、各自にコメント ・予習課題についての質問は、授業時間内に回答 ・前期試験については、各自の試験終了後、コメント 		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	教材は毎時間配布するプリントを使用するため、プリントの管理に注意すること		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	期間	後期
授業科目名	キーボード・ハーモニー応用B	
英訳科目名		
担当教員名	丹羽 あゆみ	
ディプロマ・ポリシー1	ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p><授業概要> キーボード・ハーモニー基礎A・B、応用Aで習得した内容・素材と、新たに学習する近親3度による転調、異名同音を使った転調などの素材を用いて、伴奏付け・和音付け、コード進行の作成・即興、実曲の分析と実施・移調奏などをおこなう。応用Bでは、さらに学生の選択の幅を広げ、より自主的・自発的な学習を求めると同時に、学生相互の学習体験を取り入れる。</p> <p><ポイント> 多様な移調奏を数多く経験することで、素材の引き出しを増やし、コード進行の作成・即興、伴奏付け・和音付けについて、多種多様な引き出しの選択肢の中から、どのように取捨選択して組み合わせるのか、その理論と技術を段階を経て学習していく。また取捨選択のプロセスを他の学生に説明することで、より一層の理解を深める。実曲の分析と実施・移調奏では、多くの実曲を課題にし、各自の専攻科目との融和を図る。</p>	
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・簡単な2部形式・3部形式の即興ができる ・基礎的なコード進行を作成し、さらに変化させることができる ・旋律に対して、多様な和音とバスラインを選択できる ・実曲に和音付けをして、比較することで実曲への理解を深める ・簡単な実曲の分析、移調奏ができる ・コード進行の作成、和音付けなどについて、第三者に説明することができる 	
授業計画	第1回 応用Aの復習 第2回 副属七の和音(Ⅳ度調のⅤ度、Ⅵ度調のⅤ度以外も含む)を含むコード進行の移調奏 ／実曲の分析と移調奏／伴奏付けまたは和音付け 第3回 前回の復習・宿題の確認／副属七を含むコード進行の作成とそのコード進行による即興 第4回 半減七・減七の和音を含むコード進行の移調奏／実曲の分析と移調奏／伴奏付けまたは和音付け 第5回 前回の復習・宿題の確認／半減七・減七を含むコード進行の作成とそのコード進行による即興 第6回 1～5のまとめ 2部形式・3部形式の即興 第7回 副七・増六の和音を使ったコード進行の移調奏／実曲の分析と移調奏／伴奏付け・和音付け 第8回 前回の復習・宿題の確認／副七・増六の和音を使ったコード進行の作成とそのコード進行による即興 第9回 3度近親転調を含むコード進行の移調奏／実曲の分析と移調奏／和音付け 第10回 前回の復習と宿題の確認／3度近親転調を含むコード進行の作成とそのコード進行による即興 第11回 異名同音による転調を含むコード進行の移調奏／実曲の分析と移調奏／和音付け 第12回 前回の復習と宿題の確認／異名同音による転調を含むコード進行の作成とそのコード進行による即興 第13回 まとめと総合問題1 第14回 まとめと総合問題2 第15回 まとめと総合問題3	
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 10% 復習・予習・宿題・小テストなどの実施状況 30% 試験(実技) 60%	
失格条件	4回以上の欠席	
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	1. 授業時間内の課題の復習 (復習時間 2時間) 2. 宿題の課題の実施 (1時間) 3. 次回の授業プリントの予習 (予習時間 1時間) ※キーボードの実技については個人差があるため、課題実施について問題があれば、相談の上、実施方法を検討することも可能 ※1・2・3は、評価方法の『復習・予習・宿題・小テストなどの実施状況』にあたり、毎回の授業で1・2・3の中からポイントを決めて評価する	
課題へのフィードバック	<ul style="list-style-type: none"> ・授業中の課題実施については、項目により全体または各自にコメント ・前授業の復習については、次の時間に各自に確認してコメント ・宿題課題については、次の時間に解説後、各自にコメント ・予習課題についての質問は、授業時間内に回答 ・後期試験については、各自の試験終了後、コメント 	
教科書	不使用	
著者名		
出版社		
参考書		
その他	教材は毎時間配布するプリントを使用するため、プリントの管理に注意すること	
備考		
科目生への開講	なし	

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	指揮法 I A		
英訳科目名	Conducting Technique I A		
担当教員名	上田 真紀郎		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	斎藤秀雄著の指揮法教程をテキストとし、指揮の観点から合奏における種々の問題を考え解決する授業。腕の動かし方から簡単なスコアリーダーディングまで、課題の楽曲を用いて考察し実践する。		
到達目標	指揮の図形を自ら設定する能力を身につけられる。 指揮することで音楽の成り立ちを深く理解することができる。		
授業計画	第1回 ガイダンス 指揮法の講義内容等について説明を行う 第2回 基本動作 第3回 基本動作と図形（拍子） 第4回 基本動作とtempo・強弱 第5回 基本動作のまとめ 第6回 指揮法教程練習課題第1番 第7回 練習課題第1番 第8回 練習課題第2番 第9回 練習課題第2番 第10回 練習課題第3番 第11回 練習課題第3番 第12回 練習課題第4番 第13回 練習課題第4番 第14回 練習課題第1番から第4番までのまとめ 第15回 練習課題第1番から第4番までのまとめ		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度30% 授業内実習状況20% 試験50%		
失格条件	欠席回数が6回以上の場合 試験を受けなかった場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	教科書・楽曲を必ず読んで予習してくる事（90分） 次回の講義につながるよう授業内容を復習する事（90分）		
課題へのフィード バック	課題について、必要に応じて個別にコメントします。		
教科書	指揮法教程【改訂新版】		
著者名	斎藤秀雄		
出版社	音楽之友社		
参考書			
その他	授業に必要なもの：教科書および筆記用具（鉛筆は2B） 授業は継続して成立します。 欠席者は必ず欠席時の授業内容について復習して参加すること。		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	指揮法 I B		
英訳科目名	Conducting Technique I B		
担当教員名	上田 真紀郎		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> -	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	斎藤秀雄著の指揮法教程をテキストとし、指揮の観点から合奏における種々の問題を考え解決する授業。腕の動かし方から簡単なスコアリーディングまで、課題の楽曲を用いて考察し実践する。		
到達目標	指揮の図形を自ら設定する能力を身につけられる。 指揮することで音楽の成り立ちを深く理解することができる。		
授業計画	指揮法 A の後継授業として 第1回 練習課題第5番 管弦楽曲について 第2回 練習課題第5番 第3回 練習課題第5番 第4回 練習課題第7番 複合拍子について 第5回 練習課題第7番 第6回 練習課題第7番 第7回 練習課題第8番 ワルツ打法 第8回 練習課題第8番 第9回 練習課題第8番 第10回 練習課題第6番 アダージョ (Tempo の遅い曲) 第11回 練習課題第6番 第12回 練習課題第6番 第13回 練習課題5, 7, 8, 6番のまとめ 第14回 練習課題まとめ 第15回 練習課題まとめ		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度30% 授業内実習状況20% 試験50%		
失格条件	欠席回数が6回以上の場合 試験を受けなかった場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	教科書・楽曲を必ず読んで予習してくる事 (90分) 次回の講義につながるよう授業内容を復習する事 (90分)		
課題へのフィード バック	課題について、必要に応じて個別にコメントします。		
教科書	指揮法教程		
著者名	斎藤秀雄		
出版社	音楽之友社		
参考書			
その他	授業に必要なもの：教科書および筆記用具 (鉛筆は2B) 授業は継続して成立します。 欠席者は必ず欠席時の授業内容について復習して参加すること。		
備考			
科目生への開講	あり		

2-086

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	指揮法Ⅱ		
英訳科目名	Conducting Technique Ⅱ		
担当教員名	上田 真紀郎		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	指揮法Ⅰの上級課程として、実践に生かせる課題などを取り上げ、演奏解釈や指導の方法にも踏み込む。		
到達目標	指揮の観点から音楽の構造を読み解き演奏の表現力を高める 合奏の現場で起こりうる問題点を解決できる能力を身につける		
授業計画	第1～12回 合唱や吹奏楽、オーケストラなどの楽曲分析と指揮 第13～14回 鑑賞 第15回 まとめ		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度30% 授業内実習状況20% 試験50%		
失格条件	欠席回数が6回以上の場合 試験を受けなかった場合		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	配布資料・スコアを必ず読んで予習してくる事 (90分) 次回の講義につながるよう授業内容を復習する事 (90分)		
課題へのフィード バック	課題について、必要に応じて個別にコメントします。		
教科書	ベートーベン 交響曲第九番 二短調 作品125 [合唱付] 全音スコア		
著者名			
出版社	全音楽譜出版社		
参考書			
その他	授業に必要なもの：指揮法Ⅰで使用した教科書「指揮法教程」、配布資料および筆記用具（鉛筆は2B） 欠席者は必ず欠席時の授業内容について復習して参加すること。		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	DC305A02	期間	前期/後期
授業科目名	雅楽 I		
英訳科目名	Court Music of Japan I		
担当教員名	小野 真龍、林 絹代、高木 了慧		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	雅楽器を演奏することによって、雅楽の基本を理解する。 三種類の管楽器より一管を選んで練習し、三管の合奏に至る。さらに、打楽器・絃楽器を加えて雅楽の理解を深める。		
到達目標	自分が選んだ管楽器で、最も有名な雅楽曲である平調越天楽の声歌（ソルフェージュ）と器楽演奏ができる。		
授業計画	第1～3回 雅楽についてのガイダンスと楽器の選択基礎練習 第4～6回 平調越殿楽の唱歌と吹奏 第7～9回 平調越殿楽の唱歌と吹奏 第10～12回 平調越殿楽の唱歌と吹奏さらに打楽器と絃楽器を加える 第13～15回 平調越殿楽の唱歌と吹奏と到達度の確認		
評価方法 (合計100%)	日常の取り組み姿勢と進歩の度合と試験		
失格条件	全授業時数の三分の一以上の欠席		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	最初の数回は、非常に基礎的なことを指導するために、万難を排して出席すること。 休まれると、繰り返し基礎的なことを指導するための時間を割かねばならなくなり、他の受講者に迷惑がかかる。 また、最初の数回で集中的に稽古をすれば、雅楽楽器の運指自体は困難なものではないので、後半の合奏に十分ついていける。 なお、一回の授業に対して、予習1時間、復習3時間の授業時間外の学修が必要である。		
課題へのフィードバック	合奏形態に移行してからは、それぞれに主管（ソロを吹く役）を担当してもらい、そのつど達成度を指摘し、次回までにクリアすべき課題を提示します。 最終試験の際に、個別に次のステップへ進む課題を提示します。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	20分以上の遅刻は欠席と見なします。 遅刻三回で欠席一回に算定します。		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	DC305B02	期間	前期
授業科目名	雅楽Ⅱ		
英訳科目名	Court Music of Japan Ⅱ		
担当教員名	小野 真龍、林 絹代、高木 了慧		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	雅楽Ⅰで修得した楽器の演奏技術を更に高め、他の楽器の役割も理解し、演奏作法を身に付けると共に、幅広い音楽性を目指す。		
到達目標	既に獲得した雅楽の知識、技術を深め、レパートリーを増やすことを通じて、西洋音楽とはまったく異なった雅楽の音楽性の本質への理解を深めることができる。 12月に催される古楽実習発表会でのよき演奏をめざす。この授業をを選択する者は出演が必須である。		
授業計画	第1回 オリエンテーション 第2～3回 管別にて雅楽Ⅰで修得した演奏技術を確認し更に磨く 第4～8回 管別にて「越天楽」・「音取」の復習と「五常楽急」その他楽曲の唱歌と吹奏 第9～15回 絃楽器、打楽器を加えて同上の合奏		
評価方法 (合計100%)	日常の練習における進歩の度合い(30%)と試験(70%)		
失格条件	1、全授業時数の三分の一以上の欠席 2、試験を受けなかった場合		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	雅楽は経験値が大切なので、自分の持ち管には毎日少しでもいいから触れるようにすること。 声歌の修練も日々怠らないこと。 なお、一回の授業に対して、予習1時間、復習3時間の授業時間外の学修が必要である。		
課題へのフィード バック	合奏形態においては、それぞれに主管(ソロを吹く役)を担当してもらい、そのつど達成度を指摘し、次回までにクリアすべき課題を提示します。 最終試験の際に、個別に次のステップへ進む課題を提示します。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	20分以上の、正当な理由なき遅刻は、欠席とみなします。 遅刻3回で欠席1回に算定します。		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	期間	後期
授業科目名	雅楽Ⅲ	
英訳科目名	Court Music of Japan Ⅲ	
担当教員名	小野 真龍、林 絹代、高木 了慧	
ディプロマ・ポリシー1	ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	これまでの雅楽の授業で修得した楽器の演奏技術を更に高め、他の楽器の役割も理解し、演奏作法を身に付けると共に、幅広い音楽性を目指す。	
到達目標	既に獲得した雅楽の知識、技術を深め、レパートリーを増やすことを通じて、西洋音楽とはまったく異なった雅楽の音楽性の本質への理解を深めることができる。 12月に催される古楽実習発表会ででのよき演奏をめざす。この授業をを選択する者は出演が必須である。	
授業計画	第1回 オリエンテーション 第3～3回 管別にてこれまでの雅楽の授業で修得した演奏技術を確認し更に磨く 第4～8回 管別にて新たな雅楽曲の唱歌と吹奏 第9～15回 絃楽器、打楽器を加えて同上の合奏	
評価方法 (合計100%)	日常の練習における進歩の度合い（30%）と試験（70%）	
失格条件	1、全授業時数の三分の一以上の欠席 2、試験を受けなかった場合	
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	雅楽は経験値が大切なので、自分の持ち管には毎日少しでもいいから触れるようにすること。 声歌の修練も日々怠らないこと。 また、12月に催される「古楽実習発表会」には極力参加していただきたい。 なお、一回の授業に対して、予習1時間、復習3時間の授業時間外の学修が必要である。	
課題へのフィードバック	合奏形態において、それぞれに主管（ソロを吹く役）を担当してもらい、そのつど達成度を指摘し、次回までにクリアすべき課題を提示します。 最終試験の際に、個別に次のステップへ進む課題を提示します。	
教科書	不使用	
著者名		
出版社		
参考書		
その他	20分以上の、正当な理由なき遅刻は、欠席とみなします。 遅刻3回で欠席1回に算定します。	
備考		
科目生への開講	あり	

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	雅楽Ⅳ		
英訳科目名	Court Music of Japan Ⅳ		
担当教員名	小野 真龍、林 絹代、高木 了慧		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	これまでの雅楽授業で修得した楽器の演奏技術を更に高め、他の楽器の役割も理解し、演奏作法を身に付けると共に、幅広い音楽性を目指す。		
到達目標	既に獲得した雅楽の知識、技術を深め、レパートリーを増やすことを通じて、西洋音楽とはまったく異なった雅楽の音楽性の本質への理解を深めることができる。 12月に催される古楽実習発表会でのよき演奏をめざす。この授業をを選択する者は出演が必須である。		
授業計画	第1回 オリエンテーション 第2～3回 管別にてこれまでの雅楽の授業で修得した演奏技術を確認し更に磨く 第4～8回 管別にて新たな雅楽曲の唱歌と吹奏 第9～15回 絃楽器、打楽器を加えて同上の合奏		
評価方法 (合計100%)	日常の練習における進歩の度合い(30%)と試験(70%)		
失格条件	1、全授業時数の三分の一以上の欠席 2、試験を受けなかった場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	雅楽は経験値が大切なので、自分の持ち管には毎日少しでもいいから触れるようにすること。 声歌の修練も日々怠らないこと。 なお、一回の授業に対して、予習1時間、復習3時間の授業時間外の学修が必要である。		
課題へのフィードバック	合奏形態においては、それぞれに主管(ソロを吹く役)を担当してもらい、そのつど達成度を指摘し、次回までにクリアすべき課題を提示します。 最終試験の際に、個別に次のステップへ進む課題を提示します。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	20分以上の、正当な理由なき遅刻は、欠席とみなします。 遅刻3回で欠席1回に算定します。		
備考			
科目生への開講	あり		

2-091

ナンバリング	期間	後期
授業科目名	雅楽Ⅴ	
英訳科目名	Court Music of Japan Ⅴ	
担当教員名	小野 真龍、林 絹代、高木 了慧	
ディプロマ・ポリシー1	ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	これまでの雅楽の授業で修得した楽器の演奏技術を更に高め、他の楽器の役割も理解し、演奏作法を身に付けると共に、幅広い音楽性を目指す。	
到達目標	既に獲得した雅楽の知識、技術を深め、レパートリーを増やすことを通じて、西洋音楽とはまったく異なった雅楽の音楽性の本質への理解を深めることができる。 12月に催される古楽実習発表会でのよき演奏をめざす。この授業をを選択する者は出演が必須である。	
授業計画	第1回 オリエンテーション 第2～3回 管別にてこれまでの雅楽の授業で修得した演奏技術を確認し更に磨く 第4～8回 管別にて新たな雅楽曲の唱歌と吹奏 第9～15回 絃楽器、打楽器を加えて同上の合奏	
評価方法 (合計100%)	日常の練習における進歩の度合い (30%) と試験 (70%)	
失格条件	1、全授業時数の三分の一以上の欠席 2、試験を受けなかった場合	
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	雅楽は経験値が大切なので、自分の持ち管には毎日少しでもいいから触れるようにすること。 声歌の修練も日々怠らないこと。 また、12月に催される「古楽実習発表会」には極力参加していただきたい。 なお、一回の授業に対して、予習1時間、復習3時間の授業時間外の学修が必要である。	
課題へのフィードバック	合奏形態において、それぞれに主管（ソロを吹く役）を担当してもらい、そのつど達成度を指摘し、次回までにクリアすべき課題を提示します。 最終試験の際に、個別に次のステップへ進む課題を提示します。	
教科書	不使用	
著者名		
出版社		
参考書		
その他	20分以上の、正当な理由なき遅刻は、欠席とみなします。 遅刻3回で欠席1回に算定します。	
備考		
科目生への開講	あり	

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	雅楽Ⅵ		
英訳科目名	Court Music of Japan Ⅵ		
担当教員名	小野 真龍、林 絹代、高木 了慧		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	これまでの雅楽の授業で修得した楽器の演奏技術を更に高め、他の楽器の役割も理解し、演奏作法を身に付けると共に、幅広い音楽性を目指す。		
到達目標	既に獲得した雅楽の知識、技術を深め、レパートリーを増やすことを通じて、西洋音楽とはまったく異なった雅楽の音楽性の本質への理解を深めることができる。 12月に催される古楽実習発表会でのよき演奏をめざす。この授業をを選択する者は出演が必須である。		
授業計画	第1回 オリエンテーション 第2～3回 管別にてこれまでの雅楽の授業で修得した演奏技術を確認し更に磨く 第4～8回 管別にて新たな雅楽曲の唱歌と吹奏 第9～15回 絃楽器、打楽器を加えて同上の合奏		
評価方法 (合計100%)	日常の練習における進歩の度合い (30%) と試験 (70%)		
失格条件	1、全授業時数の三分の一以上の欠席 2、試験を受けなかった場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	雅楽は経験値が大切なので、自分の持ち管には毎日少しでもいいから触れるようにすること。 声歌の修練も日々怠らないこと。 なお、一回の授業に対して、予習1時間、復習3時間の授業時間外の学修が必要である。		
課題へのフィード バック	合奏形態においては、それぞれに主管（ソロを吹く役）を担当してもらい、そのつど達成度を指摘し、次回までにクリアすべき課題を提示します。 最終試験の際に、個別に次のステップへ進む課題を提示します。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	20分以上の、正当な理由なき遅刻は、欠席とみなします。 遅刻3回で欠席1回に算定します。		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	期間	後期
授業科目名	雅楽Ⅶ	
英訳科目名	Court Music of Japan Ⅶ	
担当教員名	小野 真龍、林 絹代、高木 了慧	
ディプロマ・ポリシー1	ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	これまでの雅楽の授業で修得した楽器の演奏技術を更に高め、他の楽器の役割も理解し、演奏作法を身に付けると共に、幅広い音楽性を目指す。	
到達目標	既に獲得した雅楽の知識、技術を深め、レパートリーを増やすことを通じて、西洋音楽とはまったく異なった雅楽の音楽性の本質への理解を深めることができる。 12月に催される古楽実習発表会ででのよき演奏をめざす。この授業をを選択する者は出演が必須である。	
授業計画	第1回 オリエンテーション 第2～3回 管別にてこれまでの雅楽の授業で修得した演奏技術を確認し更に磨く 第4～8回 管別にて新たな雅楽曲の唱歌と吹奏 第9～15回 絃楽器、打楽器を加えて同上の合奏	
評価方法 (合計100%)	日常の練習における進歩の度合い (30%) と試験 (70%)	
失格条件	1、全授業時数の三分の一以上の欠席 2、試験を受けなかった場合	
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	雅楽は経験値が大切なので、自分の持ち管には毎日少しでもいいから触れるようにすること。 声歌の修練も日々怠らないこと。 また、12月に催される「古楽実習発表会」には極力参加していただきたい。 なお、一回の授業に対して、予習1時間、復習3時間の授業時間外の学修が必要である。	
課題へのフィードバック	合奏形態において、それぞれに主管（ソロを吹く役）を担当してもらい、そのつど達成度を指摘し、次回までにクリアすべき課題を提示します。 最終試験の際に、個別に次のステップへ進む課題を提示します。	
教科書	不使用	
著者名		
出版社		
参考書		
その他	20分以上の、正当な理由なき遅刻は、欠席とみなします。 遅刻3回で欠席1回に算定します。	
備考		
科目生への開講	あり	

ナンバリング	DC305A11	期間	前期/後期
授業科目名	器楽合奏		
英訳科目名	School Instrumental Music(Recorder)		
担当教員名	橋詰 智章		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	学校教育楽器として長い間愛されて続けている「リコーダー」の魅力に迫り、その歴史の考察と技術の習得、合奏演習を行う。		
到達目標	リコーダーの歴史、教材、様々なテクニックを知ることができる。 また、アルトリコーダーとソプラノリコーダーのスムーズな持ち替えと正確な運指が習得できる。		
授業計画	第1回 リコーダーの昨今について 第2回 リコーダーの基礎知識について 第3回 リコーダーの基本的な演奏法を学ぶ 第4回 アルトリコーダー演習① 運指の確認 第5回 アルトリコーダー演習② 低音域、高音域の発音 第6回 アルトリコーダー演習③ タンギングと息の入れ方 第7回 アルトリコーダー演習④ タイミングと音程 第8回 ソプラノリコーダー演習① 運指の確認 第9回 ソプラノリコーダー演習② 低音域、高音域の発音 第10回 ソプラノ、アルトリコーダーを使用した合奏① 記譜法の違い 第11回 ソプラノ、アルトリコーダーを使用した合奏② 合奏における注意点 第12回 ソプラノ、アルトリコーダーを使用した合奏③ 合奏における教材の扱い方 第13回 ソプラノ、アルトリコーダーを使用した合奏④ ピアノとの合わせ方 第14回 ソプラノ、アルトリコーダーを使用した合奏⑤ 復習と運指の確認 第15回 ソプラノ、アルトリコーダーを使用した合奏⑥ 内容理解、到達度の確認		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 50% 到達度 (小テスト) 50%		
失格条件	出席回数が3分の2以上に満たない場合は失格とする。 20分以上の遅刻は欠席とし、20分以内の遅刻は3回で一回の欠席とする。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	アルトリコーダー、ソプラノリコーダーの運指を実音で覚えること。 正しい音が正しい運指で鳴っているか、よく音を聴くこと。(主に派生音) 【復習】(復習時間2時間) スムーズに指が運べるようになり、より音楽的に演奏できるようになるまで復習を心がけること。 【予習】(予習時間1時間) 次の課題曲の譜読みと、運指の確認をすること。		
課題へのフィード バック	実技、実習の取り組みに対して、その都度全体に向けて、また個別にコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	実習に必要なリコーダーは、初回の授業中に指示。		
備考			
科目生への開講	なし		

2-095

ナンバリング	DC305A06	期間	前期/後期
授業科目名	近世歌謡		
英訳科目名	Japanese Song of Early Modern Period		
担当教員名	田淵 雅子		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	江戸時代の歌を中心に、箏あるいは三味線に合わせて歌います。古謡「さくらさくら」などの平易な曲から始め、小・中・高校の音楽科教育に対応できる日本音楽の基礎知識と歌唱の理解を深めます。		
到達目標	平易な日本古謡の歌唱を楽器の演奏と合わせて出来る。		
授業計画	第1回 授業ガイダンスと楽器のグループ分け 第2～3回 楽器とそれぞれの道具の扱い方を説明 第4～7回 楽器の基礎練習と日本音階の学習 第8～10回 楽器の弾き歌いの基礎練習 第11～14回 平易な小曲の弾き歌い練習。プリント資料を参考に日本音楽（主に地歌箏曲）の学習 第15回 弾き歌い曲の完成と披露		
評価方法 (合計100%)	出席時数 50% 授業への取り組み姿勢・習得状況 30% 曲の披露時の完成度 20%		
失格条件	1.出席時数が開講時数の3分の2に達しない場合。 2.「曲の完成・披露」の欠席。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	楽器の道具と楽譜をしっかりと保管し、授業時には忘れずに必ず持参すること。		
課題へのフィード バック	楽器の扱い方等の質問については、各回に個別、もしくは全体にコメント対応します。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	あり		

2-096

ナンバリング	DC305A03	期間	前期/後期
授業科目名	地歌・箏曲 I		
英訳科目名	Japanese Traditional Music (Jiuta and Soukyoku I)		
担当教員名	田淵 雅子		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> -	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	お箏か三味線の練習をしながら日本音楽を学習します。授業は、楽器の未経験を前提に進めます。また教職課程での日本音楽授業における対応にも重点を置きます。		
到達目標	平易な日本の曲が演奏できる。		
授業計画	第1回 授業ガイダンスと楽器のグループ分け 第2～3回 楽器とその扱い方を説明 第4～10回 基本的な弾き方の練習 第11～14回 やさしい曲の練習。資料プリントを参照しながら、地歌箏曲の基礎知識を学習する。 第15回 曲の完成・披露		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度（参加状況） 50% 授業の取り組み姿勢・習得状況 30% 曲の披露時の完成度 20%		
失格条件	1. 総授業時間の3分の1以上の欠席 2. 「曲の完成・披露」の欠席		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	各道具と楽譜を各自でしっかりと保管し、授業時には忘れずに持参すること。		
課題へのフィード バック	楽器の扱い方等の質問に対しては、各回個別もしくは全体にコメント対応します。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	特になし		
備考			
科目生への開講	あり		

2-097

ナンバリング	DC305B03	期間	前期/後期
授業科目名	地歌・箏曲Ⅱ		
英訳科目名	Japanese Traditional Music (Jiuta and Soukyoku Ⅱ)		
担当教員名	田淵 雅子		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	「地歌箏曲Ⅰ」で学習した内容・技術をさらに進める。		
到達目標	簡単な地歌小品の演奏が出来る。		
授業計画	第1～2回 前年時の復習 第3～10回 やさしい曲を課題に、演奏技術を向上させる 第11～14回 演奏会のための曲を練習 第15回 曲の完成・披露		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度（参加状況） 50% 授業の取り組み姿勢・習得状況 30% 演奏会の参加 20%		
失格条件	1. 総授業時間3分の1以上の欠席 2. 演奏会の欠席		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	各道具と楽譜を各自でしっかりと保管し、授業時には忘れずに必ず持参すること。		
課題へのフィード バック	演奏曲に関する質問については、各回個別もしくは全体にコメント対応します。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	特になし		
備考			
科目生への開講	あり		

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

2-098

ナンバリング	期間	後期
授業科目名	地歌・箏曲Ⅲ	
英訳科目名	Japanese Traditional Music (Jiuta and Soukyoku Ⅲ)	
担当教員名	田淵 雅子	
ディプロマ・ポリシー1	ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	「地歌箏曲Ⅱ」で学習した内容・技術をさらに進める。	
到達目標	簡単な地歌小品の演奏が出来る。	
授業計画	第1～2回 前授業の復習 第3～10回 小曲を課題に、演奏技術を進める 第11～14回 演奏会のための曲を練習 第15回 曲の完成・披露	
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度（参加状況） 50% 授業の取り組み姿勢・習得状況 30% 演奏会の参加 20%	
失格条件	1. 総授業時間3分の1以上の欠席 2. 演奏会の欠席	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	各道具と楽譜を各自でしっかりと保管し、授業時には忘れずに必ず持参すること。	
課題へのフィード バック	演奏曲に関する質問については、各回個別もしくは全体にコメント対応します。	
教科書	不使用	
著者名		
出版社		
参考書		
その他	特になし	
備考		
科目生への開講	なし	

2-099

ナンバリング	期間	前期
授業科目名	地歌・箏曲Ⅳ	
英訳科目名	Japanese Traditional Music (Jiuta and Soukyoku IV)	
担当教員名	田淵 雅子	
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2 <技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4 <関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6
授業概要・ポイント	「地歌箏曲Ⅲ」で学習した内容・技術をさらに進める。	
到達目標	簡単な地歌小品の演奏が出来る。	
授業計画	第1～2回 前授業の復習 第3～10回 小曲を課題に、演奏技術を進める 第11～14回 演奏会のための曲を練習 第15回 曲の完成・披露	
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度（参加状況） 50% 授業の取り組み姿勢・習得状況 30% 演奏会の参加 20%	
失格条件	1. 総授業時間3分の1以上の欠席 2. 演奏会の欠席	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	各道具と楽譜を各自でしっかりと保管し、授業時には忘れずに必ず持参すること。	
課題へのフィード バック	演奏曲に関する質問については、各回個別もしくは全体にコメント対応します。	
教科書	不使用	
著者名		
出版社		
参考書		
その他	特になし	
備考		
科目生への開講	なし	

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

ナンバリング	期間	後期
授業科目名	地歌・箏曲Ⅴ	
英訳科目名	Japanese Traditional Music (Jiuta and Soukyoku Ⅴ)	
担当教員名	田淵 雅子	
ディプロマ・ポリシー1	ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	「地歌箏曲Ⅳ」で学習した内容・技術をさらに進める。	
到達目標	地歌の古典小品の演奏が出来る。	
授業計画	第1～2回 前授業の復習 第3～10回 古典曲を課題に、演奏技術を進める 第11～14回 演奏会のための曲を練習 第15回 曲の完成・披露	
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度（参加状況） 50% 授業の取り組み姿勢・習得状況 30% 演奏会の参加 20%	
失格条件	1. 総授業時間3分の1以上の欠席 2. 演奏会の欠席	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	各道具と楽譜を各自でしっかりと保管し、授業時には忘れずに必ず持参すること。	
課題へのフィード バック	演奏曲に関する質問については、各回個別もしくは全体にコメント対応します。	
教科書	不使用	
著者名		
出版社		
参考書		
その他	特になし	
備考		
科目生への開講	なし	

ナンバリング	期間	前期
授業科目名	地歌・箏曲Ⅵ	
英訳科目名	Japanese Traditional Music (Jiuta and Soukyoku Ⅵ)	
担当教員名	田淵 雅子	
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2 <技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4 <関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6
授業概要・ポイント	「地歌箏曲Ⅴ」で学習した内容・技術をさらに進める。	
到達目標	地歌の有名曲の演奏が出来る。	
授業計画	第1～2回 前授業の復習 第3～10回 古典曲を課題に、演奏技術を進める 第11～14回 演奏会のための曲を練習 第15回 曲の完成・披露	
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度（参加状況） 50% 授業の取り組み姿勢・習得状況 30% 演奏会の参加 20%	
失格条件	1. 総授業時間3分の1以上の欠席 2. 演奏会の欠席	
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	各道具と楽譜を各自でしっかりと保管し、授業時には忘れずに必ず持参すること。	
課題へのフィード バック	演奏曲に関する質問については、各回個別もしくは全体にコメント対応します。	
教科書	不使用	
著者名		
出版社		
参考書		
その他		
備考		
科目生への開講	なし	

ナンバリング	期間	後期
授業科目名	地歌・箏曲Ⅶ	
英訳科目名	Japanese Traditional Music (Jiuta and Soukyoku Ⅶ)	
担当教員名	田淵 雅子	
ディプロマ・ポリシー1	ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	「地歌箏曲Ⅶ」で学習した内容・技術をさらに進める。	
到達目標	地歌の有名曲の演奏が出来る。	
授業計画	第1～2回 前授業の復習 第3～10回 古典曲を課題に、演奏技術を進める 第11～14回 演奏会のための曲を練習 第15回 曲の完成・披露	
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度（参加状況） 50% 授業の取り組み姿勢・習得状況 30% 演奏会の参加 20%	
失格条件	1. 総授業時間3分の1以上の欠席 2. 演奏会の欠席	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	各道具と楽譜を各自でしっかりと保管し、授業時には忘れずに必ず持参すること。	
課題へのフィード バック	演奏曲に関する質問については、各回個別もしくは全体にコメント対応します。	
教科書	不使用	
著者名		
出版社		
参考書		
その他	特になし	
備考		
科目生への開講	なし	

ナンバリング	DC305A04	期間	前期/後期
授業科目名	常磐津 I		
英訳科目名	Japanese Traditional Music (Tokiwazu I)		
担当教員名	常磐津 都琉蔵		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> -	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>【概要】</p> <p>①三味線音楽の1ジャンルである「常磐津」という流派を通して「三味線音楽」を総括して進めていく。</p> <p>②日本の文化の1つ、三味線音楽を外国の人々に紹介できる人材をも養成する講義でありたい。</p> <p>【ポイント】</p> <p>①三味線音楽は西洋の音楽のように楽譜は使わない。では、どうして歌えるのか。練習を通してその基本を教える。</p> <p>②中世の能、近世の歌舞伎等も常識程度は理解を深めておきたい。</p>		
到達目標	日本の三味線音楽の歌唱は、洋楽のように譜面によって歌うものではなく、ある一定の法則をマスターして歌うものですが、この授業では初歩的ながらその状態を必ず熟練します。		
授業計画	<p>第1回 イ、歌の練習 口、三味線音楽の歴史①</p> <p>第2回 イ、歌の練習 口、三味線音楽の歴史②</p> <p>第3回 イ、歌の練習 口、三味線音楽の歴史③</p> <p>第4回 イ、歌の練習 口、三味線音楽の緒流派①</p> <p>第5回 イ、歌の練習 口、三味線音楽の緒流派②</p> <p>第6回 イ、歌の練習 口、三味線音楽の緒流派③</p> <p>第7回 イ、歌の練習 口、楽器の説明①</p> <p>第8回 イ、歌の練習 口、楽器の説明②</p> <p>第9回 イ、歌の練習 口、楽器の説明③</p> <p>第10回 イ、歌の練習 口、調絃の仕方①</p> <p>第11回 イ、歌の練習 口、調絃の仕方②</p> <p>第12回 イ、歌の練習 口、調絃の仕方③</p> <p>第13回 イ、歌の練習 口、歌と三味線の関係</p> <p>第14回 イ、歌の練習 口、三味線音楽と現代社会</p> <p>第15回 イ、歌の練習とアンケート提出</p> <p>※前期、後期共</p>		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 60% 試験(実技) 40%		
失格条件	<ul style="list-style-type: none"> ・講義全日数の1/3以上欠席したもの ・テストを受けなかったもの 		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<ul style="list-style-type: none"> ・三味線の音に反応して歌うことを目的とするため、予習として家で歌章を記憶してくることを義務づける。 ・教室では100%音に反応することを目的とする。 		
課題へのフィード バック	だいたいシラバス通りの授業は出来たと思います。最終日のテストも三味線の音をとれて歌えたと思うが、もっと解らないことを質問してくれると深いところで理解を得られるのだが、どうすればよいか課題です。		
教科書	歌本あるいは符本コピーしたものを提供します		
著者名			
出版社			
参考書	なし		
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽はすべて感性の世界ですが三味線音楽は楽譜を使わないため、より感性を求めます。 それは、反復練習してのみ養われるもののため出席を最重視します。 ・三味線の練習をする人は、本講の期間中左の人差し指、中指、薬指の爪を長く伸ばさないように。 		
備考	常磐津節での実務経験をもとに、この授業を進めます。		
科目生への開講	あり		

ナンバリング	期間	後期
授業科目名	常磐津Ⅲ	
英訳科目名	Japanese Traditional Music (Tokiwazu Ⅲ)	
担当教員名	常磐津 都琉蔵	
ディプロマ・ポリシー1	ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	この時間は日本の三味線について理解を深めていきたい。 【ポイント】 ①三味線の歴史と楽器の説明 ②三味線の練習 ③三味線の音とその歌唱法	
到達目標	日本の三味線音楽の歌唱は、洋楽のように譜面によって歌うものでなく、ある一定の法則をマスターして歌うものですが、この授業では初歩的ながらその状態を必ず熟練します。	
授業計画	第1回 イ、三味線の練習 口、三味線と歌との関係① 第2回 イ、三味線の練習 口、三味線と歌との関係② 第3回 イ、三味線の練習 口、三味線と歌との関係③ 第4回 イ、三味線の練習 口、三味線と歌との関係④ 第5回 イ、三味線の練習 口、三味線と歌との関係⑤ 第6回 イ、三味線の練習 口、三味線と歌との関係⑥ 第7回 イ、三味線の練習 口、三味線と歌との関係⑦ 第8回 イ、三味線の練習 口、三味線と歌との関係⑧ 第9回 イ、三味線の練習 口、三味線と歌との関係⑨ 第10回 イ、三味線の練習 口、三味線と歌との関係⑩ 第11回 イ、三味線の練習 口、三味線と歌との関係⑪ 第12回 イ、三味線の練習 口、三味線と歌との関係⑫ 第13回 イ、三味線の練習 口、三味線と歌との関係⑬ 第14回 イ、三味線の練習 口、アンケート提出 第15回 イ、三味線の練習 口、発表会のリハーサル (発表会)	
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 60% 試験(実技) 40%	
失格条件	・最終日の試験を受けなかったもの。 ・講義全日数の1/3以上欠席したもの。	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	三味線の音に反応して歌うことを目的とするため、予習として家で歌章を記憶していただくことを義務づける。 教室では、100%音に反応することを目的とする。	
課題へのフィード バック	だいたいシラバス通りの授業は出来たと思います。最終日のテストも三味線の音をとれて歌えたと思うが、もっと解らないことを質問してくれると深いところで理解を得られるのだが、どうすればよいか課題です。	
教科書	歌本あるいは符本コピーしたものを提供します	
著者名		
出版社		
参考書	なし	
その他	・音楽はすべて感性の世界ですが、三味線音楽は楽譜を使わない為、より感性を求めます。 それは、反復練習してのみ養われるもののため出席を最重視します。 ・三味線の練習をする人は、本講の期間中左の人差指、中指、薬指の爪を長く伸ばさないように。	
備考	常磐津節での実務経験をもとに、この授業を進めます。	
科目生への開講	なし	

ナンバリング	期間	後期
授業科目名	常磐津 V	
英訳科目名	Japanese Traditional Music (Tokiwazu V)	
担当教員名	常磐津 都琉蔵	
ディプロマ・ポリシー1	ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>この時間は日本の三味線について理解を深めていきたい。</p> <p>【ポイント】</p> <p>①三味線の歴史と楽器の説明</p> <p>②三味線の練習</p> <p>③三味線の音とその歌唱法</p>	
到達目標	日本の三味線音楽の歌唱は、洋楽のように譜面によって歌うものでなく、ある一定の法則をマスターして歌うものですが、この授業では初歩的ながらその状態を必ず熟練します。	
授業計画	<p>第1回 イ、三味線の練習 口、三味線と歌との関係①</p> <p>第2回 イ、三味線の練習 口、三味線と歌との関係②</p> <p>第3回 イ、三味線の練習 口、三味線と歌との関係③</p> <p>第4回 イ、三味線の練習 口、三味線と歌との関係④</p> <p>第5回 イ、三味線の練習 口、三味線と歌との関係⑤</p> <p>第6回 イ、三味線の練習 口、三味線と歌との関係⑥</p> <p>第7回 イ、三味線の練習 口、三味線と歌との関係⑦</p> <p>第8回 イ、三味線の練習 口、三味線と歌との関係⑧</p> <p>第9回 イ、三味線の練習 口、三味線と歌との関係⑨</p> <p>第10回 イ、三味線の練習 口、三味線と歌との関係⑩</p> <p>第11回 イ、三味線の練習 口、三味線と歌との関係⑪</p> <p>第12回 イ、三味線の練習 口、三味線と歌との関係⑫</p> <p>第13回 イ、三味線の練習 口、三味線と歌との関係⑬</p> <p>第14回 イ、三味線の練習 口、アンケート提出</p> <p>第15回 イ、三味線の練習 口、発表会のリハーサル (発表会)</p>	
評価方法 (合計100%)	<p>授業への参加態度 60%</p> <p>試験(実技) 40%</p>	
失格条件	<ul style="list-style-type: none"> ・最終日の試験を受けなかったもの。 ・講義全日数の1/3以上欠席したもの。 	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	三味線の音に反応して歌うことを目的とするため、予習として家で歌章を記憶してやることを義務づける。教室では、100%音に反応することを目的とする。	
課題へのフィード バック	だいたいシラバス通りの授業は出来たと思います。最終日のテストも三味線の音をとれて歌えたと思うが、もっと解らないことを質問してくれると深いところで理解を得られるのだが、どうすればよいか課題です。	
教科書	歌本あるいは符本コピーしたものを提供します	
著者名		
出版社		
参考書	なし	
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽はすべて感性の世界ですが、三味線音楽は楽譜を使わない為、より感性を求めます。それは、反復練習してのみ養われるもののため出席を最重視します。 ・三味線の練習をする人は、本講の期間中左の人差指、中指、薬指の爪を長く伸ばさないように。 	
備考	常磐津節での実務経験をもとに、この授業を進めます。	
科目生への開講	なし	

ナンバリング	期間	後期
授業科目名	常磐津Ⅶ	
英訳科目名	Japanese Traditional Music (Tokiwazu Ⅶ)	
担当教員名	常磐津 都琉蔵	
ディプロマ・ポリシー1	ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	この時間は日本の三味線について理解を深めていきたい。 【ポイント】 ①三味線の歴史と楽器の説明 ②三味線の練習 ③三味線の音とその歌唱法	
到達目標	日本の三味線音楽の歌唱は、洋楽のように譜面によって歌うものでなく、ある一定の法則をマスターして歌うものですが、この授業では初歩的ながらその状態を必ず熟練します。	
授業計画	第1回 イ、三味線の練習 口、三味線と歌との関係① 第2回 イ、三味線の練習 口、三味線と歌との関係② 第3回 イ、三味線の練習 口、三味線と歌との関係③ 第4回 イ、三味線の練習 口、三味線と歌との関係④ 第5回 イ、三味線の練習 口、三味線と歌との関係⑤ 第6回 イ、三味線の練習 口、三味線と歌との関係⑥ 第7回 イ、三味線の練習 口、三味線と歌との関係⑦ 第8回 イ、三味線の練習 口、三味線と歌との関係⑧ 第9回 イ、三味線の練習 口、三味線と歌との関係⑨ 第10回 イ、三味線の練習 口、三味線と歌との関係⑩ 第11回 イ、三味線の練習 口、三味線と歌との関係⑪ 第12回 イ、三味線の練習 口、三味線と歌との関係⑫ 第13回 イ、三味線の練習 口、三味線と歌との関係⑬ 第14回 イ、三味線の練習 口、アンケート提出 第15回 イ、三味線の練習 口、発表会のリハーサル (発表会)	
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 60% 試験(実技) 40%	
失格条件	・最終日の試験を受けなかったもの。 ・講義全日数の1/3以上欠席したもの。	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	三味線の音に反応して歌うことを目的とするため、予習として家で歌章を記憶していただくことを義務づける。 教室では、100%音に反応することを目的とする。	
課題へのフィード バック	だいたいシラバス通りの授業は出来たと思います。最終日のテストも三味線の音をとれて歌えたと思うが、もっと解らないことを質問してくれると深いところで理解を得られるのだが、どうすればよいか課題です。	
教科書	歌本あるいは符本コピーしたものを提供します	
著者名		
出版社		
参考書	なし	
その他	・音楽はすべて感性の世界ですが、三味線音楽は楽譜を使わない為、より感性を求めます。 それは、反復練習してのみ養われるもののため出席を最重視します。 ・三味線の練習をする人は、本講の期間中左の人差指、中指、薬指の爪を長く伸ばさないように。	
備考	常磐津節での実務経験をもとに、この授業を進めます。	
科目生への開講	なし	

ナンバリング	期間	前期
授業科目名	伴奏法演習 A	
英訳科目名	Piano Accompaniment Exercise A	
担当教員名	小野田 富美子	
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> -	ディプロマ・ポリシー-2 <技能> ◎
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー-4 <関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー-6
授業概要・ポイント	声楽および器楽のピアノ伴奏を通して、伴奏の役割とアンサンブルの大切さを考察、実践する。実際に楽曲を演奏するとともに、必要に応じて簡単な楽曲の構造と分析、初見なども行う。	
到達目標	伴奏における基礎的な技術と知識を習得し、簡単な伴奏付けができる。	
授業計画	第1回 伴奏における基礎技術、知識として簡単な伴奏付け (1) 和音練習、カデンツ 第2回 伴奏における基礎技術、知識として簡単な伴奏付け (2) 弾き歌い、伴奏形の種類、カデンツ 第3回 伴奏における基礎技術、知識として簡単な伴奏付け (3) コードネーム 第4回 唱歌、童謡などより数曲を課題として与える (1) 楽曲概論、分析、両手伴奏 第5回 唱歌、童謡などより数曲を課題として与える (2) 歌と伴奏の合わせ 第6回 唱歌、童謡などの課題まとめ、メロディーのコード付け 第7回 合唱曲(中高の教科書)より数曲を課題として与える (1) 楽曲概論、分析、両手伴奏 第8回 合唱曲(中高の教科書)より数曲を課題として与える (2) 合唱と伴奏の合わせ 第9回 合唱曲(中高の教科書)課題のまとめ、伴奏リズム形及び編曲的要素 第10回 イタリア歌曲を課題として与える 第11回 ドイツ歌曲を課題として与える 第12回 イタリア歌曲、ドイツ歌曲のまとめ、伴奏の移調 第13回 まとめ及び演奏の発表を含む到達度の確認 (1) カデンツ、伴奏形のまとめ 第14回 まとめ及び演奏の発表を含む到達度の確認 (2) コードネームのまとめ 及び演奏の発表 第15回 まとめ及び演奏の発表を含む到達度の確認 (3) 演奏の発表	
評価方法 (合計100%)	・積極的な授業への参加態度 (出席状況・遅刻の有無等) 40% ・授業中での実践 (課題に取り組む姿勢等) 60%	
失格条件	出席が2/3に満たない場合は失格となる。	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	・まず、基礎として、カデンツを繰り返し練習することは大切である。 ・又、伴奏する楽曲を練習する際には、ピアノ伴奏部分を練習するだけでなく、ソロの部分・あるいはアンサンブルする相手の部分をよく知ること。 例えば、フレーズや和音進行・曲の構造を知ること、歌の場合は歌詞をよく読み内容を知ること。 (予習1時間、復習1時間)	
課題へのフィードバック	実技、実習の取り組みに対して、全体または個別にコメントします。	
教科書	不使用	
著者名		
出版社		
参考書		
その他		
備考		
科目生への開講	なし	

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	伴奏法演習 A		
英訳科目名	Piano Accompaniment Exercise A		
担当教員名	末岡 智子		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	声楽および器楽のピアノ伴奏を通して、伴奏の役割とアンサンブルの大切さを考察、実践する。実際に楽曲を演奏するとともに、必要に応じて簡単な楽曲の構造と分析、初見なども行う。		
到達目標	伴奏における基礎的な技術と知識を習得できる。		
授業計画	<p>第1回 伴奏における基礎技術、知識として簡単な伴奏付け (1) 和音練習、カデンツ</p> <p>第2回 伴奏における基礎技術、知識として簡単な伴奏付け (2) 弾き歌い、伴奏形の種類、カデンツ</p> <p>第3回 伴奏における基礎技術、知識として簡単な伴奏付け (3) コードネーム</p> <p>第4回 唱歌、童謡などより数曲を課題として与える (1) 楽曲概論、分析、両手伴奏</p> <p>第5回 唱歌、童謡などより数曲を課題として与える (2) 歌と伴奏の合わせ</p> <p>第6回 唱歌、童謡などの課題まとめ、メロディーのコード付け</p> <p>第7回 合唱曲(中高の教科書)より数曲を課題として与える (1) 楽曲概論、分析、両手伴奏</p> <p>第8回 合唱曲(中高の教科書)より数曲を課題として与える (2) 合唱と伴奏の合わせ</p> <p>第9回 合唱曲(中高の教科書)課題のまとめ、伴奏リズム形及び編曲的要素</p> <p>第10回 イタリア歌曲を課題として与える</p> <p>第11回 ドイツ歌曲を課題として与える</p> <p>第12回 イタリア歌曲、ドイツ歌曲のまとめ、伴奏の移調</p> <p>第13回 まとめ及び演奏の発表を含む到達度の確認 (1) カデンツ、伴奏形のまとめ</p> <p>第14回 まとめ及び演奏の発表を含む到達度の確認 (2) コードネームのまとめ 及び演奏の発表</p> <p>第15回 まとめ及び演奏の発表を含む到達度の確認 (3) 演奏の発表</p>		
評価方法 (合計100%)	<ul style="list-style-type: none"> ・積極的な授業への参加態度 (出席状況・遅刻の有無等) 40% ・授業中での実践 (課題に取り組む姿勢等) 60% 		
失格条件	出席が2/3に満たない場合は失格となる。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<ul style="list-style-type: none"> ・ まず、基礎として、カデンツを繰り返し練習することは大切である。 ・ 又、伴奏する楽曲を練習する際には、ピアノ伴奏部分を練習するだけでなく、ソロの部分・あるいはアンサンブルする相手の部分をよく知ること。例えば、フレーズや和音進行・曲の構造を知ること、歌の場合は歌詞をよく読み内容を知ること。 <p>(予習1時間、復習1時間)</p>		
課題へのフィードバック	実技、実習の取り組みに対して、全体または個別にコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	期間	後期
授業科目名	伴奏法演習B	
英訳科目名	Piano Accompaniment Exercise B	
担当教員名	末岡 智子	
ディプロマ・ポリシー1	ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	声楽および器楽のピアノ伴奏を通して、伴奏の役割とアンサンブルの大切さを考察、実践する。 実際に楽曲を演奏するとともに、必要に応じて簡単な楽曲の構造と分析、初見なども行う。	
到達目標	伴奏における基礎的な技術と知識を習得できる。	
授業計画	<p>第1回 受講者の能力に応じて伴奏法Aの内容と重複して課題を与える (1) 和音練習、伴奏形、カデンツ</p> <p>第2回 受講者の能力に応じて伴奏法Aの内容と重複して課題を与える (2) 伴奏付け、移調奏、編曲的要素</p> <p>第3回 受講者の能力に応じて伴奏法Aの内容と重複して課題を与える (3) コードネーム</p> <p>第4回 歌曲、ミュージカル、オペラより数曲を課題として与える (1) 概論、資料視聴</p> <p>第5回 歌曲、ミュージカル、オペラより数曲を課題として与える (2) 両手伴奏</p> <p>第6回 歌曲、ミュージカル、オペラより数曲を課題として与える (3) 歌と伴奏の合わせ</p> <p>第7回 器楽曲・連弾曲より数曲を課題として与える (1) 楽曲概論、分析</p> <p>第8回 器楽曲・連弾曲より数曲を課題として与える (2) 両手伴奏、あるいは連弾の実践</p> <p>第9回 器楽曲・連弾曲より数曲を課題として与える (3) 楽器と伴奏の合わせ、あるいは連弾の実践</p> <p>第10回 学生自身でテーマを決めて選曲させる (1) 楽曲選択</p> <p>第11回 学生自身でテーマを決めて選曲させる (2) 楽曲研究発表、合わせ</p> <p>第12回 学生自身でテーマを決めて選曲させる (3) 演奏発表</p> <p>第13回 まとめ及び演奏の発表を含む到達度の確認 (1) カデンツ、伴奏形、伴奏付けのまとめ</p> <p>第14回 まとめ及び演奏の発表を含む到達度の確認 (2) 移調奏のまとめ、演奏発表</p> <p>第15回 まとめ及び演奏の発表を含む到達度の確認 (3) コードネームのまとめ、演奏発表</p>	
評価方法 (合計100%)	<ul style="list-style-type: none"> ・積極的な授業への参加態度 (出席状況・遅刻の有無等) 40% ・授業中での実践 (課題に取り組む姿勢等) 60% 	
失格条件	出席が2/3に満たない場合は失格となる。	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<ul style="list-style-type: none"> ・まず、基礎として、カデンツを繰り返し練習することは大切である。 ・又、伴奏する楽曲を練習する際には、ピアノ伴奏部分を練習するだけでなく、ソロの部分・あるいはアンサンブルする相手の部分をよく知ること。 <p>例えば、フレーズや和音進行・曲の構造を知ること、歌の場合は歌詞をよく読み内容を知ること。 (予習1時間、復讐1時間)</p>	
課題へのフィード バック	実技、実習の取り組みに対して、全体または個別にコメントします。	
教科書	不使用	
著者名		
出版社		
参考書		
その他		
備考		
科目生への開講	なし	

ナンバリング	期間	通年
授業科目名	副科声楽 I	
英訳科目名	Secondary Vocal I	
担当教員名	声楽部門	
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ○	ディプロマ・ポリシー-2 <技能> ◎
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> ◎	ディプロマ・ポリシー-4 <関心・意欲・態度> ◎
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー-6
授業概要・ポイント	音楽教育者として、声楽の発声技術と明瞭な発音技術の併存を基礎に、練習曲及び歌曲等を用いて実践的表現を学ぶ。	
到達目標	1年間で発声の基礎を確立するのは難しいが、美しい声を出す為の身体の動きを理解し、声を響かせるポジションを会得ことができる。 日本歌曲,イタリア歌曲等指定された試験課題曲を歌唱し、声で芸術表現する難しさと喜びを体感することにより、将来音楽教育者としての音楽的な礎を獲得することも目標とする。	
授業計画	呼吸法、音域の拡張、音量・音色のコントロール等声の出し方、合唱指導者としての心得等を受講者の能力・適性に応じて指導する。 第1回 顔合わせ・オリエンテーション (各担当指導者と) 第2回 課題曲のイタリア歌曲の譜読み 第3回 課題曲のイタリア歌曲の譜読み・イタリア語の読み方 第3回 音楽稽古 第4回 音楽稽古 第5回 音楽稽古 第6回 音楽稽古 第7回 音楽稽古 第8回 音楽稽古 第9回 音楽稽古 第10回 演奏解釈 第11回 演奏解釈 第12回 作品分析 第13回 作品分析 第14回 まとめ 第15回 まとめ 第16回 音楽稽古 第17回 音楽稽古 第18回 音楽稽古 第19回 試験曲選択 第20回 試験曲選択 第21回 試験曲選択 第22回 試験曲 第23回 試験曲 第24回 試験曲 第25回 試験曲 第26回 試験曲 第27回 試験曲 第28回 試験曲 (まとめ) 第29回 試験曲 (まとめ) 第30回 試験	
評価方法 (合計100%)	100点法。試験は後期のみとする。 実技試験： 100%	
失格条件	出席日数が2/3に満たないもの、及び試験を受けなかったもの。	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	イタリア歌曲等外国歌曲を歌唱する際、訳詞の内容を理解する為の予習が必要。 (1週間にかかる予習・復習の学修時間の目安： 6時間 原語の朗読、歌詞の内容理解、譜読み)	
課題へのフィード バック	最初は初めてイタリア語やドイツ語に触れることになる受講生も多いと考えられるので、一語一語正確に正しく発音することをレッスン毎に繰り返し行っていく、慣れてきてからは次回レッスンまでの課題を解説し、クリアしていくようにする。	
教科書	中学校・高等学校の教材及びイタリア歌曲他、受講者の力量に応じたものを与える。	
著者名		
出版社		
参考書		
その他	副科声楽Iの試験成績により、副科声楽IIの受講者を決定する	
備考		
科目生への開講	なし	

ナンバリング	期間	通年
授業科目名	副科声楽Ⅱ	
英訳科目名	Secondary Vocal Ⅱ	
担当教員名	声楽部門	
ディプロマ・ポリシー1	◎	ディプロマ・ポリシー2 ◎
ディプロマ・ポリシー3	◎	ディプロマ・ポリシー4 ◎
ディプロマ・ポリシー5	◎	ディプロマ・ポリシー6
授業概要・ポイント	音楽教育者として、声楽の発声技術と明瞭な発音技術の併存を基礎に、練習曲及び歌曲等を用いて実践的表現を学ぶ。 副科声楽Ⅰの試験で優秀な成績を修め、認められた者が履修できる。	
到達目標	副科声楽Ⅰの目標である、美しい声を出す為の身体の働きを理解し、声を響かせるポジションを会得することを更に発展させていく。 日本歌曲、イタリア歌曲、ドイツ歌曲、オペラ・アリア等を歌唱し、声で芸術表現する難しさと喜びを体感することにより、将来音楽教育者としての音楽的な礎を獲得することができる。	
授業計画	呼吸法、音域の拡張、音量・音色のコントロール等声の出し方、合唱指導者としての心得等を受講者の能力・適性に応じて指導する。 第1回 前期課題曲決め 第2回 課題曲の演習 第3回 課題曲の演習 第3回 音楽稽古 第4回 音楽稽古 第5回 音楽稽古 第6回 音楽稽古 第7回 音楽稽古 第8回 音楽稽古 第9回 音楽稽古 第10回 演奏解釈 第11回 演奏解釈 第12回 作品分析 第13回 作品分析 第14回 まとめ 第15回 まとめ 第16回 音楽稽古 第17回 音楽稽古 第18回 音楽稽古 第19回 試験曲選択 第20回 試験曲選択 第21回 試験曲選択 第22回 試験曲 第23回 試験曲 第24回 試験曲 第25回 試験曲 第26回 試験曲 第27回 試験曲 第28回 試験曲（まとめ） 第29回 試験曲（まとめ） 第30回 試験	
評価方法 (合計100%)	100点法。試験は後期のみとする。 実技試験： 100%	
失格条件	出席日数が2/3に満たないもの、及び試験を受けなかったもの。	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	外国歌曲を歌唱する際、譜読み、正しい発音、訳詞の内容を理解する為の予習が必要。 (1週間にかかる予習・復習の学修時間の目安： 6時間 正しい発音、歌詞・作品の内容の理解、譜読み)	
課題へのフィード バック	副科声楽Ⅱになると試験曲は自由曲となるため、曲の難易度も高くなる。そうなった場合に正しいディクショ ン、作品の解釈を重点的に復習をしてくるよう、毎回のレッスンで確認・解説する。	
教科書	中学校・高等学校の教材及び日本歌曲、イタリア歌曲、ドイツ歌曲、フランス歌曲、オペラ・アリア他、受講者の力量に応じたものを与える。	
著者名		
出版社		
参考書		
その他	特になし	
備考		
科目生への開講	なし	

ナンバリング	DC103A03	期間	通年
授業科目名	副科ピアノ I		
英訳科目名	Secondary Piano I		
担当教員名	ピアノ部門		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> -	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	基礎楽器としての学習を目的とし、個人の能力に応じて技術の基礎及び幅広い知識と表現力を養成する。練習曲・バロック・古典派・ロマン派・近現代の作品に接することの出来る様に組み立てて演習する。		
到達目標	上記に述べたポイント等を踏まえながら演奏できるようになること。		
授業計画	<p>第1回 基本的要素の理解、課題曲の決定</p> <p>第2回 課題曲の実技指導 1 譜読みの確認</p> <p>第3回 課題曲の実技指導 1 バランス</p> <p>第4回 課題曲の実技指導 1 表情・表現</p> <p>第5回 課題曲の実技指導 1 より深い音楽表現を求めて</p> <p>第6回 課題曲の仕上げと、次の課題曲決め</p> <p>第7回 課題曲の実技指導 2 譜読みの確認</p> <p>第8回 課題曲の実技指導 2 バランス</p> <p>第9回 課題曲の実技指導 2 表情・表現</p> <p>第10回 課題曲の実技指導 2 より深い音楽表現を求めて</p> <p>第11回 課題曲の仕上げと、次の課題曲決め</p> <p>第12回 課題曲の実技指導 3 譜読みの確認</p> <p>第13回 課題曲の実技指導 3 バランス</p> <p>第14回 課題曲の実技指導 3 表情・表現</p> <p>第15回 課題曲の実技指導 3 より深い音楽表現を求めて</p> <p>第16回 課題曲の仕上げと、次の課題曲決め</p> <p>第17回 課題曲の実技指導 4 譜読みの確認</p> <p>第18回 課題曲の実技指導 4 バランス</p> <p>第19回 課題曲の実技指導 4 表情・表現</p> <p>第20回 課題曲の実技指導 4 より深い音楽表現を求めて</p> <p>第21回 課題曲の仕上げと、次の課題曲決め</p> <p>第22回 課題曲の実技指導 5 譜読みの確認</p> <p>第23回 課題曲の実技指導 5 バランス</p> <p>第24回 課題曲の実技指導 5 表情・表現</p> <p>第25回 課題曲の実技指導 5 より深い音楽表現を求めて</p> <p>第26回 年度末の試験曲の決定</p> <p>第27回 試験曲の実技指導 譜読みの確認</p> <p>第28回 試験曲の実技指導 バランス</p> <p>第29回 試験曲の実技指導 表情・表現</p> <p>第30回 試験曲の実技指導 より深い音楽表現を求めて</p> <p>*進度により曲数が変わることがある</p>		
評価方法 (合計100%)	実技試験 100%		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者、及び試験を受けなかった者。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	有意義な実技レッスンを行うために、日頃からの十分な練習が必要です。		
課題へのフィード バック	課題へのフィードバックはレッスン中に随時 行っています。		
教科書	楽譜を使用するが、必要な時はその都度指示する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	DC103B03	期間	通年
授業科目名	副科ピアノⅡ		
英訳科目名	Secondary PianoⅡ		
担当教員名	ピアノ部門		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> -	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	基礎楽器としての学習を目的とし、個人の能力に応じて技術の基礎及び幅広い知識と表現力を養成する。練習曲・バロック・古典派・ロマン派・近現代の作品に接することの出来る様に組み立てて演習する。		
到達目標	上記に述べたポイント等を踏まえながら演奏できるようになること。		
授業計画	<p>第1回 基本的要素の理解、課題曲の決定</p> <p>第2回 課題曲の実技指導 1 譜読みの確認</p> <p>第3回 課題曲の実技指導 1 バランス</p> <p>第4回 課題曲の実技指導 1 表情・表現</p> <p>第5回 課題曲の実技指導 1 より深い音楽表現を求めて</p> <p>第6回 課題曲の仕上げと、次の課題曲決め</p> <p>第7回 課題曲の実技指導 2 譜読みの確認</p> <p>第8回 課題曲の実技指導 2 バランス</p> <p>第9回 課題曲の実技指導 2 表情・表現</p> <p>第10回 課題曲の実技指導 2 より深い音楽表現を求めて</p> <p>第11回 課題曲の仕上げと、次の課題曲決め</p> <p>第12回 課題曲の実技指導 3 譜読みの確認</p> <p>第13回 課題曲の実技指導 3 バランス</p> <p>第14回 課題曲の実技指導 3 表情・表現</p> <p>第15回 課題曲の実技指導 3 より深い音楽表現を求めて</p> <p>第16回 課題曲の仕上げと、次の課題曲決め</p> <p>第17回 課題曲の実技指導 4 譜読みの確認</p> <p>第18回 課題曲の実技指導 4 バランス</p> <p>第19回 課題曲の実技指導 4 表情・表現</p> <p>第20回 課題曲の実技指導 4 より深い音楽表現を求めて</p> <p>第21回 課題曲の仕上げと、次の課題曲決め</p> <p>第22回 課題曲の実技指導 5 譜読みの確認</p> <p>第23回 課題曲の実技指導 5 バランス</p> <p>第24回 課題曲の実技指導 5 表情・表現</p> <p>第25回 課題曲の実技指導 5 より深い音楽表現を求めて</p> <p>第26回 年度末の試験曲の決定</p> <p>第27回 試験曲の実技指導 譜読みの確認</p> <p>第28回 試験曲の実技指導 バランス</p> <p>第29回 試験曲の実技指導 表情・表現</p> <p>第30回 試験曲の実技指導 より深い音楽表現を求めて</p> <p>*進度により曲数が変わることがある</p>		
評価方法 (合計100%)	実技試験 100%		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者、及び試験を受けなかった者。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	有意義な実技レッスンを行うために、日頃からの十分な練習が必要です。		
課題へのフィード バック	課題へのフィードバックはレッスン中に随時 行っています。		
教科書	楽譜を使用するが、必要な時はその都度指示する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	DC203C01	期間	通年
授業科目名	副科ピアノⅢ		
英訳科目名	Secondary Piano Ⅲ		
担当教員名	ピアノ部門		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	基礎楽器としての学習を目的とし、個人の能力に応じて技術の基礎及び幅広い知識と表現力を養成する。練習曲・バロック・古典派・ロマン派・近現代の作品に接することの出来る様に組み立てて演習する。		
到達目標	上記に述べたポイント等を踏まえながら演奏できるようになること。		
授業計画	<p>第1回 基本的要素の理解、課題曲の決定</p> <p>第2回 課題曲の実技指導 1 譜読みの確認</p> <p>第3回 課題曲の実技指導 1 バランス</p> <p>第4回 課題曲の実技指導 1 表情・表現</p> <p>第5回 課題曲の実技指導 1 より深い音楽表現を求めて</p> <p>第6回 課題曲の仕上げと、次の課題曲決め</p> <p>第7回 課題曲の実技指導 2 譜読みの確認</p> <p>第8回 課題曲の実技指導 2 バランス</p> <p>第9回 課題曲の実技指導 2 表情・表現</p> <p>第10回 課題曲の実技指導 2 より深い音楽表現を求めて</p> <p>第11回 課題曲の仕上げと、次の課題曲決め</p> <p>第12回 課題曲の実技指導 3 譜読みの確認</p> <p>第13回 課題曲の実技指導 3 バランス</p> <p>第14回 課題曲の実技指導 3 表情・表現</p> <p>第15回 課題曲の実技指導 3 より深い音楽表現を求めて</p> <p>第16回 課題曲の仕上げと、次の課題曲決め</p> <p>第17回 課題曲の実技指導 4 譜読みの確認</p> <p>第18回 課題曲の実技指導 4 バランス</p> <p>第19回 課題曲の実技指導 4 表情・表現</p> <p>第20回 課題曲の実技指導 4 より深い音楽表現を求めて</p> <p>第21回 課題曲の仕上げと、次の課題曲決め</p> <p>第22回 課題曲の実技指導 5 譜読みの確認</p> <p>第23回 課題曲の実技指導 5 バランス</p> <p>第24回 課題曲の実技指導 5 表情・表現</p> <p>第25回 課題曲の実技指導 5 より深い音楽表現を求めて</p> <p>第26回 年度末の試験曲の決定</p> <p>第27回 試験曲の実技指導 譜読みの確認</p> <p>第28回 試験曲の実技指導 バランス</p> <p>第29回 試験曲の実技指導 表情・表現</p> <p>第30回 試験曲の実技指導 より深い音楽表現を求めて</p> <p>*進度により曲数が変わることがある</p>		
評価方法 (合計100%)	実技試験 100%		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者、及び試験を受けなかった者。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	有意義な実技レッスンを行うために、日頃からの十分な練習が必要です。		
課題へのフィード バック	課題へのフィードバックはレッスン中に随時 行っています。		
教科書	楽譜を使用するが、必要な時はその都度指示する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	期間	通年
授業科目名	副科ピアノⅣ	
英訳科目名	Secondary Piano Ⅳ	
担当教員名	ピアノ部門	
ディプロマ・ポリシー-1	ディプロマ・ポリシー-2	
ディプロマ・ポリシー-3	ディプロマ・ポリシー-4	
ディプロマ・ポリシー-5	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	基礎楽器としての学習を目的とし、個人の能力に応じて技術の基礎及び幅広い知識と表現力を養成する。 練習曲・バロック・古典派・ロマン派・近現代の作品に接することの出来る様に組み立てて演習する。	
到達目標	上記に述べたポイント等を踏まえながら演奏できるようになること。	
授業計画	<p>第1回 基本的要素の理解、課題曲の決定</p> <p>第2回 課題曲の実技指導 1 譜読みの確認</p> <p>第3回 課題曲の実技指導 1 バランス</p> <p>第4回 課題曲の実技指導 1 表情・表現</p> <p>第5回 課題曲の実技指導 1 より深い音楽表現を求めて</p> <p>第6回 課題曲の仕上げと、次の課題曲決め</p> <p>第7回 課題曲の実技指導 2 譜読みの確認</p> <p>第8回 課題曲の実技指導 2 バランス</p> <p>第9回 課題曲の実技指導 2 表情・表現</p> <p>第10回 課題曲の実技指導 2 より深い音楽表現を求めて</p> <p>第11回 課題曲の仕上げと、次の課題曲決め</p> <p>第12回 課題曲の実技指導 3 譜読みの確認</p> <p>第13回 課題曲の実技指導 3 バランス</p> <p>第14回 課題曲の実技指導 3 表情・表現</p> <p>第15回 課題曲の実技指導 3 より深い音楽表現を求めて</p> <p>第16回 課題曲の仕上げと、次の課題曲決め</p> <p>第17回 課題曲の実技指導 4 譜読みの確認</p> <p>第18回 課題曲の実技指導 4 バランス</p> <p>第19回 課題曲の実技指導 4 表情・表現</p> <p>第20回 課題曲の実技指導 4 より深い音楽表現を求めて</p> <p>第21回 課題曲の仕上げと、次の課題曲決め</p> <p>第22回 課題曲の実技指導 5 譜読みの確認</p> <p>第23回 課題曲の実技指導 5 バランス</p> <p>第24回 課題曲の実技指導 5 表情・表現</p> <p>第25回 課題曲の実技指導 5 より深い音楽表現を求めて</p> <p>第26回 年度末の試験曲の決定</p> <p>第27回 試験曲の実技指導 譜読みの確認</p> <p>第28回 試験曲の実技指導 バランス</p> <p>第29回 試験曲の実技指導 表情・表現</p> <p>第30回 試験曲の実技指導 より深い音楽表現を求めて</p> <p>*進度により曲数が変わることがある</p>	
評価方法 (合計100%)	実技試験 100%	
失格条件	出席日数が2/3に満たない者、及び試験を受けなかった者。	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	有意義な実技レッスンを行うために、日頃からの十分な練習が必要です。	
課題へのフィード バック	課題へのフィードバックはレッスン中に随時 行っています。	
教科書	楽譜を使用するが、必要な時はその都度指示する。	
著者名		
出版社		
参考書		
その他		
備考		
科目生への開講	なし	

ナンバリング	期間	通年
授業科目名	副科オルガン I	
英訳科目名	Secondary Organ	
担当教員名	オルガン部門	
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー-2 <技能> ◎
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー-4 <関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー-6
授業概要・ポイント	オルガンとオルガン音楽を通して学んだことを、それぞれの専攻分野でいかせるよう、幅広い音楽の表現手段とその基礎技術の習得を目指す。	
到達目標	オルガンで学んだことを、専攻分野にいかすことができる。	
授業計画	副科オルガン I 第1～15回 アレンジを聞き取る基礎的なオルガン演奏技術の習得。 オルガンの構造、ストップ（音色）について様々な方法で学ぶ。 第16～30回 アレンジを聞き取る小規模な作品を通して演奏技術のさらなる向上を図る。 講堂の大オルガンの見学と試奏を通し、楽器についての理解を深める。	
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 30% 実技試験 70%	
失格条件	出席日数が3分の2に満たないもの及び試験を受けなかったもの。	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	レッスンで指摘されたことを充分確認すること。レッスンのため充分な準備を行うこと。	
課題へのフィード バック	課題の確認と改善	
教科書	不使用	
著者名		
出版社		
参考書		
その他		
備考		
科目生への開講	なし	

ナンバリング	期間	通年
授業科目名	副科オルガンⅡ	
英訳科目名	Secondary OrganⅡ	
担当教員名	オルガン部門	
ディプロマ・ポリシー1	ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	オルガンとオルガン音楽を通して学んだことを、それぞれの専攻分野でいかせるように、演奏基礎技術のさらなる向上を目指す。	
到達目標	上記に述べたポイント等を踏まえながら演奏できる。 オルガンで学んだことを、専攻分野にいかすことができる。	
授業計画	副科オルガンⅡ 第1～15回 アレンジを聞き取る基礎的なオルガン演奏技術の向上を目指す。 第16～30回 アレンジを聞き取るバロック時代の自由作品、コラール作品に取り組む。	
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度30% 試験70%	
失格条件	出席日数が3分の2に満たないもの及び試験を受けなかったもの。	
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	レッスンで指摘されたことを充分確認すること。レッスンのため十分な準備を行うこと。	
課題へのフィード バック	課題の確認と改善	
教科書	不使用	
著者名		
出版社		
参考書		
その他		
備考		
科目生への開講	なし	

ナンバリング		期間	通年
授業科目名	副科管弦打古楽器 I		
英訳科目名	Secondary Orchestral and Historical Instruments I		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	管楽器、弦楽器、打楽器、古楽器はそれぞれ独自のメカニズムと奏法を持ち、楽器も多種に及んでいる。学生諸君はそれぞれの目的意識に合った楽器を選択する。		
到達目標	レッスンを通じて体感して習得しながらそこで得たものを本来の専攻に生かしていくことができる。		
授業計画	最終実技試験に向け基本的な奏法や楽器の扱いを習熟度に応じマスターして行く		
評価方法 (合計100%)	学期末の試験を受け、その演奏を評価する。		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者、及び試験を受けなかった者		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	個人のレベルに応じ、主として復習を中心にすすめて行くのが望ましい		
課題へのフィード バック	実技の取り組みに対して個別にコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	期間	通年
授業科目名	副科管弦打古楽器Ⅱ	
英訳科目名	Secondary Orchestral and Historical Instruments Ⅱ	
担当教員名	管弦打部門	
ディプロマ・ポリシー1	ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	管楽器、弦楽器、打楽器、古楽器はそれぞれ独自のメカニズムと奏法を持ち、楽器も多種に及んでいる。学生諸君はそれぞれの目的意識に合った楽器を選択する。	
到達目標	レッスンを通じて体感して習得しながらそこで得たものを本来の専攻に生かしていくことができる。	
授業計画	最終実技試験に向け基本的な奏法や楽器の扱いを習熟度に応じマスターして行く	
評価方法 (合計100%)	学期末の試験を受け、その演奏を評価する。	
失格条件	出席日数が2/3に満たない者、及び試験を受けなかった者	
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	個人のレベルに応じ、主として復習を中心にすすめて行くのが望ましい	
課題へのフィード バック	実技の取り組みに対して個別にコメントします。	
教科書	不使用	
著者名		
出版社		
参考書		
その他		
備考		
科目生への開講	なし	

ナンバリング	DC304A02	期間	集中
授業科目名	海外研修 I (ワルシャワ)		
英訳科目名	Studying Abroad I		
担当教員名	井上 麻紀		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>夏期休暇を利用して、ポーランド国立ショパン音楽大学で研修を実施している。この研修の目的は、とりもなおさず、ヨーロッパの風土や民族に直接触れてヨーロッパ音楽の真髄を体得すると共に、優れた演奏技量及び研究成果を身に付けることにある。</p> <p>専攻は作曲、音楽学、声楽、鍵盤楽器、管楽器、弦楽器、打楽器、古楽器などあらゆる分野に及び、ショパン音楽大学の教授陣によって、各々レッスンが与えられる。研修では充実した個人レッスンが6回行なわれ、高度な技術および深い内容の知識が与えられる。</p>		
到達目標	与えられた課題をしっかりとこなすことは勿論、国際的な感覚も身につけることができる。		
授業計画	個人レッスン6回及び修了演奏会などが開催されることもある。		
評価方法 (合計100%)	ポーランド国立ショパン音楽大学認定の夏期講習修了証を得たものに対して、単位が与えられる。100%		
失格条件	夏期講習の行程をまっとうできなかった場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	学習内容のみならず、現地の情報も事前に調べておくこと。		
課題へのフィード バック	修了演奏会后、研修を通しての感想などを話し合い、全体に向けてコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	夏期講習の参加には、およそ50万円程度の費用が自己負担となる。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	DC304A02	期間	集中
授業科目名	海外研修 I (イタリア)		
英訳科目名	Studying Abroad I		
担当教員名	泉 貴子		
ディプロマ・ポリシー1	◎	ディプロマ・ポリシー2	◎
ディプロマ・ポリシー3	◎	ディプロマ・ポリシー4	◎
ディプロマ・ポリシー5	◎	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>夏期休暇を利用して、イタリアでの研修を隔年で実施している。研修先は年によって異なるが、提携校であるミラノG.ヴェルディ音楽院かローマS.チェチーリア音楽院になる。</p> <p>この研修の目的は、ヨーロッパの風土や民族に直接触れてヨーロッパ音楽の神髄を体得すると共に、優れた演奏技量及び豊かな表現力を身につけることにある。</p> <p>専攻は声楽に限る。</p> <p>各開催音楽院の教授によってレッスンが行われる。</p> <p>研修では45分の充実した個人レッスンが毎日行われ、修了演奏会がある。</p> <p>高度な技術及び深い内容の知識が与えられる。</p>		
到達目標	与えられた課題をしっかりとこなし、声楽の歌唱技術を習得できるようになるだけでなく、国際的な感覚も身につけることができる。		
授業計画	<p>授業計画：（予定）8月初旬開講 連日の個人レッスンと最終日に研究発表として修了演奏会が行われる。</p> <p>1日目 出発</p> <p>2日目 オリエンテーション（顔合わせ）・レッスン開始</p> <p>3日目～7日目 レッスン</p> <p>8日目 リハーサル・修了演奏会・修了証書授与式</p> <p>9日目～10日目 自由行動（市内観光）</p> <p>11日目 帰路</p> <p>12日目 到着</p>		
評価方法 (合計100%)	評価方法 イタリアでの夏期講習修了証を得たものに対して、単位が与えられる。100%。		
失格条件	失格条件 夏期講習の行程をまっとうできなかった場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	レッスン受講曲の学習内容のみならず、イタリア語の勉強もすること(イタリア語、イタリア語会話の授業を受講することが望ましい)。また現地の情報も事前に調べておくこと。		
課題へのフィード バック	夏期講習から帰国後、感想文という形で現地でのレッスンで出された課題等を見直すレポートの提出を求めている。それを各専攻実技担当者にも目を通して頂き、後期からのレッスンで実践していきましょうようにしている。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	DC304B04	期間	集中
授業科目名	海外研修Ⅱ (ワルシャワ)		
英訳科目名	Studying Abroad Ⅱ		
担当教員名	井上 麻紀		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>夏期休暇を利用して、ポーランド国立ショパン音楽大学で研修を実施している。この研修の目的は、とりもなおさず、ヨーロッパの風土や民族に直接触れてヨーロッパ音楽の真髄を体得すると共に、優れた演奏技量及び研究成果を身に付けることにある。</p> <p>専攻は作曲、音楽学、声楽、鍵盤楽器、管楽器、弦楽器、打楽器、古楽器などあらゆる分野に及び、ショパン音楽大学の教授陣によって、各々レッスンが与えられる。研修では充実した個人レッスンが6回行なわれ、高度な技術および深い内容の知識が与えられる。</p>		
到達目標	与えられた課題をしっかりとこなすことは勿論、国際的な感覚も身につけることができる。		
授業計画	個人レッスン6回及び修了演奏会などが開催されることもある。		
評価方法 (合計100%)	ポーランド国立ショパン音楽大学認定の夏期講習修了証を得たものに対して、単位が与えられる。100%。		
失格条件	夏期講習の行程をまっとうできなかった場合。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	学習内容のみならず、現地の情報も事前に調べておくこと。		
課題へのフィード バック	修了演奏会后、研修を通しての感想などを話し合い、全体に向けてコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	Iを取得したものが2回目としてⅡを履修できる。 夏期講習の参加には、およそ50万円程度の費用が自己負担となる。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	DC304B04	期間	集中
授業科目名	海外研修Ⅱ (イタリア)		
英訳科目名	Studying Abroad Ⅱ		
担当教員名	泉 貴子		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>夏期休暇を利用して、イタリアでの研修を隔年で実施している。研修先は年によって異なるが、提携校であるミラノG.ヴェルディ音楽院かローマS.チェチーリア音楽院になる。</p> <p>この研修の目的は、ヨーロッパの風土や民族に直接触れてヨーロッパ音楽の神髄を体得すると共に、優れた演奏技量及び豊かな表現力を身につけることにある。</p> <p>専攻は声楽に限る。</p> <p>各開催音楽院の教授によってレッスンが行われる。</p> <p>研修では45分の充実した個人レッスンが毎日行われ、修了演奏会がある。</p> <p>高度な技術及び深い内容の知識が与えられる。</p>		
到達目標	与えられた課題をしっかりとこなし、声楽の歌唱技術を習得できるようになるだけでなく、国際的な感覚も身につけることができる。		
授業計画	<p>(予定) 8月初旬開講 連日の個人レッスンと最終日に研究発表として修了演奏会が行われる。</p> <p>1日目 出発</p> <p>2日目 オリエンテーション (顔合わせ) ・レッスン開始</p> <p>3日目～7日目 レッスン</p> <p>8日目 リハーサル・修了演奏会・修了証書授与式</p> <p>9日目～10日目 自由行動 (市内観光)</p> <p>11日目 帰路</p> <p>12日目 到着</p>		
評価方法 (合計100%)	イタリアでの夏期講習を修了証を得たものに対して、単位が与えられる。100%。		
失格条件	夏期講習の行程をまっとうできなかった場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	レッスン受講曲の学習内容のみならず、イタリア語の勉強もすること(イタリア語、イタリア語会話の授業を受講することが望ましい)。また現地の情報も事前に調べておくこと。		
課題へのフィード バック	夏期講習から帰国後、感想文という形で現地でのレッスンで出された課題等を見直すレポートの提出を求めている。それを各専攻実技担当者にも目を通して頂き、後期からのレッスンで実践していきましょうようにしている。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	DC304A03	期間	集中
授業科目名	海外研修事前・事後指導		
英訳科目名	Guidance for Studying Abroad		
担当教員名	泉 貴子、井上 麻紀		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>8月に実施される「シヨパン音楽大学夏期講習」或いは「イタリア夏期講習」に参加する学生が、講習前に各々が講習の内容や意義、またそれぞれの国（ポーランドまたはイタリア）の文化や慣習について学び、講習の目的を明確にすることを目指している。</p> <p>講習を終えた後には、帰国後に講習期間に学んだ技量や音楽性、また海外文化の感得等を振り返ることによって、講習の成果をより高いものとするよう、海外における学修を確認する。</p> <p>尚、授業に曜限は不定期で、詳細は履修者に直接連絡する。</p> <p>また海外で危険な目に遭わないよう海外情勢についてもよく理解し、場合によっては旅行会社の担当者からの説明を聞く機会も設ける。</p>		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・「シヨパン音楽大学夏期講習」或いは「イタリア夏期講習」に向けて、準備をスムーズに行なうことができる。 ・夏期講習での学修が充実したものとなる。 ・開催地ワルシャワ或いはローマやミラノにおける文化に馴染み良さを持つことができる。 ・帰国後、思い出としてだけでなく、深く学修を習得することができる。 ・次回、個人で留学等、海外へ出向くにあたって、参考になることを修得できる。 		
授業計画	<p>[講習実施前]</p> <p>第1回 オリエンテーション</p> <p>第2～3回 講習の内容と意義</p> <p>第4回 シヨパン音楽大学とS.チェチーリア音楽院について</p> <p>第5～6回 レッスン希望曲の選曲と決定</p> <p>第7～8回 ポーランド及びイタリアの歴史と文化</p> <p>[講習終了後]</p> <p>第9～10回 講習を振り返って</p> <p>第11～15回 レポートの作成・今後への継続に向けて</p>		
評価方法 (合計100%)	平常点：100%		
失格条件	<ul style="list-style-type: none"> ・授業に先立って連絡することなく、2回以上欠席した場合 ・講習会に参加しなかった場合 ・報告レポートを提出しなかった場合 		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>[予習]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・参加する講習に合わせて、ポーランド語或いはイタリア語の学習を行なうこと ・参加する講習に合わせて、ポーランド文化或いはイタリア文化にできるだけ触れておくこと <p>[復讐]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・引き続き、参加した講習に合わせて、それぞれの言語や文化に触れ続けること 		
課題へのフィードバック	夏期講習を終えて帰国後、経験してきたことや学んできたことを専攻実技その他に活かせるよう、レポートを課すことで、自らを振り返り将来の進路も含め考えられるようにする。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	DC106A01	期間	前期
授業科目名	音楽キャリアデザイン		
英訳科目名	Career Design in Music		
担当教員名	赤石 敏夫		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> 〇
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ㊦	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>相愛大学音楽学部の演奏コース、音楽文化創造コースにご入学された皆さんはこれからその道の専門家への道を形成しようとしています。大学は長い学生生活の最後という方も多く、かつ社会に出る手前の準備をする場でもあります。そのことを踏まえてこれからの4年間を有意義に過ごしていただきたいと思います。</p> <p>大学ではその道の専門家が教員として指導しています。本学にもさまざまな分野の専門家がいます。この方々にこれからの学生生活に必要な考え方や、自らの学生時代の思いなどを語っていただきます。この先達から多くのことを学び、吸収していただきたいと思います。そのことにより、自分自身だけでは考えつかない学びのヒントが得られることになるでしょう。</p> <p>演奏コース、音楽文化創造コースの違い、あるいは同じコースでも専攻による違いなどもありますが、広く音楽を生業とする専門家として捉え、更に自分の専門分野とのつながりなども考えていただきたいと思います。もとより、音楽は1人でできるものではなくさまざまなコミュニケーション能力や協調性が必要です。そのような意味でもさまざまな分野における専門家の話を聞く機会は貴重です。有意義にご活用ください。</p>		
到達目標	学生生活をいかにも有意義に過ごすかを考え、また音楽の専門家としての心得を習得することができる。		
授業計画	<p>以下の教員による授業を行います。 内容については徐々にポータル等で発表します。</p> <p>第1回 授業内容と進め方の説明+音楽の仕事大研究 コーディネーター：赤石敏夫（ソルフェージュ・音楽理論）</p> <p>第2回 黒坂俊昭（音楽学）</p> <p>第3回 橋田光代（音楽情報学）</p> <p>第4回 前田昌宏（サクソフォン）</p> <p>第5回 柏木玲子（創作演奏）</p> <p>第6回 井上麻紀（ピアノ）</p> <p>第7回 大谷玲子（ヴァイオリン）</p> <p>第8回 清水信貴（フルート）</p> <p>第9回 斉藤建寛（チェロ）</p> <p>第10回 飯塚一朗（トランペット）</p> <p>第11回 中谷満（打楽器）</p> <p>第12回 石村真紀（音楽療法）</p> <p>第13回 松本直祐樹（作曲）</p> <p>第14回 志村聖子（音楽マネジメント）</p> <p>第15回 泉貴子（声楽）</p>		
評価方法 (合計100%)	毎回、授業の後に復習としてレポートを作成することにします。 各回のレポートの評価（7%）の15回分の合計を総計して、成績とします。		
失格条件	貴重な機会ですので全出席が望ましいのですが、6回欠席すれば失格です。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	この授業は、復習を重視します。毎回、授業の後に、レポートとして、所定の用紙に、授業のまとめ（約200字）と授業の感想（よく分かった所、印象に残った所、難しかった点、気付いた点など、約200字）、あわせて約400字を記し、提出してください（所要時間4時間）。提出日時、提出場所等詳細については、1回目の授業時に説明します。		
課題へのフィード バック	毎回提出されたレポートはそれぞれの担当者が評価します。		
教科書	使用しません。授業によって、プリントを配布することがあります。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	DC106A02	期間	集中
授業科目名	音楽総合研究 A		
英訳科目名	Research in Music synthesis A		
担当教員名	稲垣 聡		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> 〇
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ㊟	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>大学主催の演奏会や各専攻の海外招聘教授の公開レッスンなどに出席することで単位を取得します。公開レッスン受講者は対象としますが(ただし、他の受講生のレッスンも必ず聴講すること)、演奏会出演者は対象になりません。客席で聴くことが重要であり、音楽学生はそれぞれの専攻に偏らず幅広く学ぶことが大切です。なるべく他専攻の演奏会などに出席してください。</p> <p>履修方法は出席してレポートを提出するということになります。当日配布されるレポート用紙に記載して音楽学科合同研究室に指定の期間内に提出してください。</p> <p>年間スケジュールの中で該当する演奏会や公開講座・公開レッスンなど年間7回以上出席してください。7回に満たない学生は次年度に再履修ということになります。学生主催の演奏会などは対象外です。</p>		
到達目標	年間7回以上の演奏会や公開講座・公開レッスンに出席し多くの経験ができる。		
授業計画	<p>大学主催演奏会＝オーケストラ定期（秋）、ウインドオーケストラ定期（秋）、各専攻分科会主催演奏会 海外を含む招聘教授の公開講座・公開レッスンに出席すること。</p> <p>演奏会出演者は対象にならない。公開レッスン受講生は対象とする(ただし、他の受講生のレッスンも必ず聴講すること)。</p> <p>前期と後期の最初に、対象となる演奏会・公開講座の一覧をお知らせします。 また、対象となる演奏会・公開講座が追加された場合、その都度お知らせします。</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>毎回、演奏会や公開講座に参加後、復習としてレポートを作成することにします。</p> <p>各回のレポートの評価を集計してして成績とします。</p> <p>8回以上参加した場合は、さらなる評価をします。</p>		
失格条件	演奏会、公開講座・公開レッスンの参加回数とレポート提出が7回に満たしていない場合失格となり、次年度以降再履修となります。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>毎回参加後に、レポートとして所定の用紙に内容のまとめ（約200字）と感想（よく分かった所、印象に残った所、難しかった点、気付いた点など、約200字）、あわせて約400字を記し、提出すること（所要時間4時間）。</p> <p>提出締め切り日時は、実施日の1週間後17:00音楽学科合同研究室とします。</p> <p>遅れた場合は理由書を要し、理由によって受理できるかどうか判断します。</p>		
課題へのフィードバック	レポート提出後、必要に応じて指導を行う。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	演奏会プログラム、公開講座・公開レッスンなどで配布される資料などを参考にしてください。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	DC101A01	期間	前期
授業科目名	音楽基礎演習 I		
英訳科目名	Basic Theory in Music I		
担当教員名	石井 尚子		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> -
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	音楽を学ぶものにとって、楽譜を正しく「読む」「書く」ということは必要不可欠なことである。この講義では、これらの事柄がスムーズに行えるように、最も基本的な理論の習得を中心に、様々な時代の作品に触れ、実際の音と結びつけながら幅広い知識を養う。		
到達目標	基本的な理論を習得することにより楽譜を読み取る力を養い、楽曲を総合的に分析できる。		
授業計画	第1回 オリエンテーション/譜表・日本音名 第2回 ドイツ音名/変化記号/音符と休符 第3回 連符/リズムと拍子 第4回 音程(1)単音程 幹音による音程 第5回 音程(2)単音程 幹音による音程の復習/転回音程/複音程 第6回 音程(3)単音程 派生音による音程 第7回 音程(4)単音程 派生音による音程の復習・複音程・異名同音の音程 第8回 音階(1)長音階・調号 第9回 音階(2)自然短音階・調号 第10回 音階(3)和声短音階 第11回 音階(4)旋律短音階 第12回 調(1)近親調 第13回 調(2)調関係 第14回 音階と調の総合的まとめ 第15回 到達度の確認		
評価方法 (合計100%)	・授業への参加態度 20% ・提出物/小テスト 20% ・定期試験 60%		
失格条件	授業を4回以上欠席した者、及び定期試験を受けなかった者。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	予習 毎授業時の最後に次回授業の予告をするので、教科書に目を通しておく。(予習時間1時間) 復習 教科書の課題及びプリント等を宿題にするので、必ずそれらを実施し理解しておく。(復習時間3時間)		
課題へのフィード バック	・提出物及び小テストは返却時にコメントし、その後全体に解説します。 ・定期試験については、試験終了後、全体に向けてコメントします。		
教科書	楽典問題集		
著者名	赤石敏夫、石井尚子、小西円子、中野佳代子、丹羽あゆみ		
出版社	相愛大学刊		
参考書			
その他	毎回の授業終了後、必ず復習し課題を実施しておくこと		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	DC101B01	期間	後期
授業科目名	音楽基礎演習Ⅱ		
英訳科目名	Basic Theory in Music Ⅱ		
担当教員名	石井 尚子		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	〔音楽基礎演習A〕で習得した基本的な知識をもとに、引き続き幅広い理論の習得を目指すとともに、色々な視点から楽譜を読み取る力を養い、「楽譜」についてより深く総合的に考察する。		
到達目標	〔音楽基礎演習A〕で習得した知識を、より充実発展させ実際の音楽活動に役立てることができる。		
授業計画	第1回 オリエンテーション／和音の概要 第2回 和音 (1) 三和音の種類 第3回 和音 (2) 七の和音の種類 第4回 和音 (3) 三和音の転回形 第5回 和音 (4) 七の和音の転回形 第6回 和音 (5) 三和音の所属調 第7回 和音 (6) 七の和音の所属調 / コードネーム 第8回 和音のまとめ 第9回 調判定／和音外音 第10回 調判定の実践 第11回 移調 第12回 移調楽器 第13回 記号・その他の事柄 第14回 楽曲分析 第15回 到達度の確認		
評価方法 (合計100%)	・ 授業への参加態度 20% ・ 提出物／小テスト 20% ・ 定期試験 60%		
失格条件	授業を4回以上欠席した者、及び定期試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	予習 毎授業時の最後に次回授業の予告をするので教科書に目を通しておく。(予習時間1時間) 復習 教科書の課題、及びプリント等を宿題にするので、必ず、それらを実施し理解しておく。(復習時間3時間)		
課題へのフィード バック	・ 提出物及び小テストは返却時に個別にコメントし、その後全体に解説します。 ・ 定期試験については、試験終了後、全体にむけてコメントします。		
教科書	楽典問題集		
著者名	赤石敏夫、石井尚子、小西円子、中野佳代子、丹羽あゆみ		
出版社	相愛大学刊		
参考書			
その他	毎回の授業終了後、必ず復習し課題を実施しておくこと。		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	DC101A02	期間	前期
授業科目名	和声法基礎演習 I		
英訳科目名	Basic Harmony I		
担当教員名	赤石 敏夫		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	和音の連結を学ぶ演習。そのことによりその調の中での和音の機能についても理解する。演習は4声体（ソプラノ・アルト・テノール・バス）で行い、必要最低限の音での書式について理解できるようにする。		
到達目標	基本位置～転回形、七の和音などを使って和音の連結ができる。		
授業計画	<p>主に「バス課題」で演習する。時には旋律も取り扱う。</p> <p>第1回 和音の基礎知識の確認。和音の配置「密集」と「開離」</p> <p>第2回 主要三和音の連結 「配分一致」「共通音の保留」</p> <p>第3回 II-V、V-VIの連結</p> <p>第4回 各種の調（1）長調、短調</p> <p>第5回 各種の調（2）機能について</p> <p>第6回 基本位置まとめ小テスト</p> <p>第7回 まとめ小テストの解説と和声聴音で響きを聴く、基本位置の確認</p> <p>第8回 第1転回位置（1）設定と連結</p> <p>第9回 第1転回位置（2）「連続」「並達」</p> <p>第10回 第1転回位置まとめテスト</p> <p>第11回 第2転回位置（1）配置と定型</p> <p>第12回 第2転回位置（2）設定、属七の和音（1）</p> <p>第13回 属七の和音（2）、ここまで（「2転」「属七」含む）のまとめ小テスト</p> <p>第14回 「2転」「属七」小テスト解説及び総まとめ</p> <p>第15回 期末試験</p>		
評価方法 (合計100%)	開講期間中に試験を行う。 試験50%、授業への参加態度50%。		
失格条件	4回以上欠席したもの		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業での説明は必ず理解して帰ること。その後必ずノートを見直し、できれば課題を鍵盤で弾いてみること。 次の授業までに予習1時間、復習3時間程度を取ること。		
課題へのフィード バック	授業内において行われる小テストは、授業時間内または次の時間に解説します。		
教科書	市販の教材は特に使わない。必要に応じてプリントを配布する。		
著者名			
出版社			
参考書	和声～理論と実習 I（音楽之友社）		
その他	教職課程を履修希望するものは「和声法演習Ⅲ・Ⅳ」が教職必修科目となるため、この科目でなく「和声法演習Ⅰ」を履修すること。その際、音楽基礎演習を受講しなければならないものはそちらから履修すること。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	DC101B02	期間	後期
授業科目名	和声法基礎演習Ⅱ		
英訳科目名	Basic HarmonyⅡ		
担当教員名	赤石 敏夫		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	和音の連結を学ぶ演習。そのことによりその調の中での和音の機能についても理解する。演習は4声体（ソプラノ・アルト・テノール・バス）で行い、必要最低限の音での書式について理解できるようにする。また、実際の楽曲から和声の動きについて学ぶ。		
到達目標	基本位置～転回形、七の和音などを使って和音の連結ができる。		
授業計画	<p>「バス課題」に加えて「ソプラノ課題」で演習する。時には旋律も取り扱う。</p> <p>第1回 主要三和音のソプラノ課題（転回を含む）</p> <p>第2回 副三和音、属七の和音を含むソプラノ課題（転回を含む）</p> <p>第3回 各種の調（1）長調・短調</p> <p>第4回 各種の調（2）各調における和音の機能</p> <p>第5回 ソプラノ課題まとめ小テスト</p> <p>第6回 実際の楽曲における和声の使われ方・旋律と伴奏</p> <p>第7回 構成音の装飾と転位音（1）和声音と非和声音</p> <p>第8回 構成音の装飾と転位音（2）和音外音の学習</p> <p>第9回 旋律の伴奏付けとコードネーム</p> <p>第10回 和音の機能と楽曲分析（1）和声からみた楽曲構造</p> <p>第11回 和音の機能と楽曲分析（2）調のゆれと転調</p> <p>第12回 和音の機能と楽曲分析（3）2部形式と3部形式</p> <p>第13回 和音の機能と楽曲分析（4）ソナタ形式、ロンド形式</p> <p>第14回 まとめ</p> <p>第15回 期末試験</p>		
評価方法 (合計100%)	開講期間中に試験を行う。 試験50%、授業への参加態度50%。		
失格条件	4回以上欠席したもの		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業での説明は必ず理解して帰ること。その後必ずノートを見直し、できれば課題を鍵盤で弾いてみること。次の授業までに予習1時間、復習3時間程度を取ること。		
課題へのフィード バック	授業内において行われる小テストは、授業時間内または次の時間に解説します。		
教科書	市販の教材は特に使わない。必要に応じてプリントを配布する。		
著者名			
出版社			
参考書	和声～理論と実習Ⅰ（音楽之友社）、和声のしくみ・楽曲のしくみ（音楽之友社）		
その他	教職課程を履修希望するものは「和声法演習Ⅲ・Ⅳ」が教職必修科目となるため、この科目でなく「和声法演習Ⅱ」を履修すること。その際、音楽基礎演習を受講しなければならないものはそちらから履修すること。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	DC101A05	期間	前期
授業科目名	楽式論		
英訳科目名	Music format theory		
担当教員名	松本 直祐樹		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>音楽を美しいと感じる時、そこには必ず規則が存在します。 数ある音楽の規則の中で、とりわけ楽曲の形式（楽式：諸要素の配置の手法）を学びます。 本講義では楽式を理解する上で必要な知識と感覚を得るために、</p> <p>1・視聴 2・作曲技法の解説 3・簡易な分析 という順で進めていきます。</p>		
到達目標	楽曲の形式（楽式）を理解することにより、演奏解釈、創作行為に反映させることができる。		
授業計画	<p>第1回 イントロダクション、音楽の最低条件とはなにか。 第2回 動機、楽節について：L.v.Beethovenの作品から考える。 第3回 二部形式：日本歌曲を例にとり形式を理解する。 第4回 三部形式（1）R.Schumannの作品から、二部形式と三部形式の違いを考える。 第5回 三部形式（2）F.Schubertの作品から、複合三部形式を理解する。 第6回 ロンド形式：W.A.Mozart,M.Ravelの作品から理解する。 第7回 ソナタ形式（1）主題の対比、提示部、展開部、再現部とは何か。 第8回 ソナタ形式（2）L.v.Beethovenのソナタより形式を分析する。 第9回 小テスト 第10回 変奏曲：N.Paganini,S.Rachmaninovの作品から考える。 第11回 対位法的楽曲（1）カノンについて-J.S.Bach,B.Bartokの作品を分析する。 第12回 対位法的楽曲（2）フーガについて（1）-主唱、答唱、対唱とは何か。 第13回 対位法的楽曲（3）フーガについて（2） -J.S.Bach『平均律クラヴィーア曲集第一巻』よりg mollの分析。 第14回 対位法的楽曲（4）フーガについて（3）-L.v.Beethoven,M.Ravelのフーガを考える。 第15回 前期試験</p>		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度30% 小テスト30% 前期試験40%		
失格条件	欠席回数が6回以上の場合。小テストおよび前期試験を受けなかった場合。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	音楽家には必須の知識なので、必ず復習してください（復習時間の目安：授業時間の3倍）。 また机上の空論にならないよう、ピアノ等で譜例を奏し、感覚的にも理解することに努めてください。		
課題へのフィード バック	授業中に実施する課題に対して、教室内で添削とコメントを伝えます。		
教科書	授業中にプリントを配布します。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	DC103A01	期間	前期
授業科目名	ソルフェージュ基礎 I		
英訳科目名	Basic Solfege I		
担当教員名	粕谷 育子		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	視唱や聴音を通して楽譜の読み方、書き方を学ぶ。主に旋律によって行うが、平易な和音なども取り上げる。また、様々なリズム打ちを通して拍子感、拍節感の育成を行う。		
到達目標	楽譜が読める、書ける、歌える、叩くことができる。		
授業計画	ソルフェージュ初学者の訓練、並びに幅広い音楽活動の基礎を作る。また、下記の内容は理解度の状況によって前後したり、繰り返したりする。 第1回 ソルフェージュとは（クラス毎の授業計画の説明） 第2回 視唱と聴音の体験 第3回 楽譜の読み方・書き方1（階名唱） 第4回 楽譜の読み方・書き方2（正しい楽譜） 第5回 音楽活動「拍を打つ」 第6回 音楽活動「拍とリズムを打つ」 第7回 音楽活動「模唱」 第8回 音楽活動「リズムや旋律の違いを聴き分ける」 第9回 音楽活動「簡単なフレーズを歌う」 第10回 音楽活動「和音の違いを聴き分ける」 第11回 音楽活動「簡単な旋律を歌う」 第12回 音楽活動「曲の特徴を聴きとる」 第13回 音楽活動「既存曲を歌う」 第14回 音楽活動「拍の応答」「アーティキュレーション」 第15回 全般のまとめ		
評価方法 (合計100%)	試験50%、授業への参加態度50%。 ソルフェージュは日常の訓練Routineが重要な意味をもつため、授業への参加態度を重視する。		
失格条件	授業を4回以上欠席した者、及び試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業でできなかったところを自宅でやってみてまた授業で確認する、ということの繰り返し。 視唱ができると聴音もできるようになるので、毎日10分でもいいので教材を歌うこと。		
課題へのフィード バック	授業内において行われる課題は、授業時間内に正答を提示し解説する。		
教科書	「視唱 ステップ・アップ」(全音楽譜出版社刊)		
著者名	赤石敏夫、鈴木博子、中島理依子、中野佳代子、山本京子、粕谷育子		
出版社	(株) 全音楽譜出版社		
参考書	特になし		
その他	教職課程を履修希望するものは「ソルフェージュⅢ・Ⅳ」が教職必修科目となるためこちらの科目でなく「ソルフェージュⅠ・Ⅱ」を履修すること。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	DC103B01	期間	後期
授業科目名	ソルフェージュ基礎Ⅱ		
英訳科目名	Basic Solfege Ⅱ		
担当教員名	粕谷 育子		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	ソルフェージュ基礎Ⅰの内容の再確認をしながらその応用について主に学ぶ。 旋律のみならず多声や和音も取り上げ、様々な楽器音による聴音を行う。また、和音の種類判別なども行う。 そして、楽曲の和声進行、形式や構造なども聴き取ることができるようにする。 最終的には著名な楽曲を題材にコード進行も含めたレコード・コピーができるようにする。 簡単な楽曲なら音楽全般を聴くことができる（旋律・和声・バス、楽曲構造など）。		
到達目標	アンサンブル曲の特定したパートを書き取ることができる。 正しい音程とリズムで楽譜を歌うことができる。		
授業計画	基本的な読譜力と楽譜を書く能力がついた学生にさらに応用力と実践力を育成する。下記の内容は理解度の状況によって前後したり、繰り返したりする。 第1回 ソルフェージュ力とその応用について 第2回 視唱と聴音の基本の再確認 第3回 音楽を楽譜にする (1) 「簡単な旋律を書き取る1」＋視唱訓練 第4回 音楽を楽譜にする (2) 「簡単な旋律を書き取る2」＋視唱訓練 第5回 音楽を楽譜にする (3) 「簡単な和音（コード）進行を書き取る1」＋視唱訓練 第6回 音楽を楽譜にする (4) 「簡単な和音（コード）進行を書き取る2」＋視唱訓練 第7回 音楽を聴く (1) 「和声構造・楽曲構造1」＋視唱訓練 第8回 音楽を聴く (2) 「和声構造・楽曲構造2」＋視唱訓練 第9回 様々な楽器 (1) 弦楽器＋視唱訓練 第10回 様々な楽器 (2) 管楽器＋視唱訓練 第11回 様々な楽器 (3) 打楽器・その他＋視唱訓練 第12回 コード付きメロディの書き取り (1) 簡単な楽曲＋視唱訓練 第13回 コード付きメロディの書き取り (2) 既存曲も含む＋視唱訓練 第14回 簡単な既存曲のレコード・コピー＋視唱訓練 第15回 全般のまとめ		
評価方法 (合計100%)	試験50%、授業への参加態度50%。 ソルフェージュは日常の訓練Routineが重要な意味をもつため、授業への参加態度を重視する。		
失格条件	授業を4回以上欠席した者、及び試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業でできなかったところを自宅でやってみてまた授業で確認する、ということの繰り返し。 視唱ができると聴音もできるようになるので、毎日10分でいいので教材を歌うこと。 また、簡単なTVCMなどを楽譜にしてみるなどの遊びが大事。		
課題へのフィード バック	授業内において行われる課題は、授業時間内に正答を提示し解説する。		
教科書	「視唱 ステップ・アップ」(全音楽譜出版社刊)		
著者名	赤石敏夫、鈴木博子、中島理依子、中野佳代子、山本京子、粕谷育子		
出版社	(株) 全音楽譜出版社		
参考書	特になし		
その他	教職課程を履修希望するものは「ソルフェージュⅢ・Ⅳ」が教職必修科目となるためこちらの科目でなく「ソルフェージュⅠ・Ⅱ」を履修すること。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	DC206A03	期間	集中
授業科目名	音楽総合研究 B		
英訳科目名	Research in Music synthesis B		
担当教員名	稲垣 聡		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ○
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> ◎	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	<p>大学主催の演奏会や各専攻の海外招聘教授の公開レッスンなどに出席することで単位を取得します。公開レッスン受講者は対象としますが(ただし、他の受講生のレッスンも必ず聴講すること)、演奏会出演者は対象になりません。客席で聴くことが重要であり、音楽学生はそれぞれの専攻に偏らず幅広く学ぶことが大切です。なるべく他専攻の演奏会などに出席してください。</p> <p>履修方法は出席してレポートを提出するということになります。当日配布されるレポート用紙に記載して音楽学科合同研究室に指定の期間内に提出してください。</p> <p>年間スケジュールの中で該当する演奏会や公開講座・公開レッスンなど年間7回以上出席してください。7回に満たない学生は次年度に再履修ということになります。学生主催の演奏会などは対象外です。</p>		
到達目標	年間7回以上の演奏会や公開講座・公開レッスンに出席し多くの経験ができる。		
授業計画	<p>大学主催演奏会＝オーケストラ定期（秋）、ウインドオーケストラ定期（秋）、各専攻分科会主催演奏会 海外を含む招聘教授の公開講座・公開レッスンに出席すること。 演奏会出演者は対象にならない。公開レッスン受講生は対象とする(ただし、他の受講生のレッスンも必ず聴講すること)。</p> <p>前期と後期の最初に、対象となる演奏会・公開講座の一覧をお知らせします。 また、対象となる演奏会・公開講座が追加された場合、その都度お知らせします。</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>毎回、演奏会や公開講座に参加後、復習としてレポートを作成することにします。 各回のレポートの評価を集計してして成績とします。 8回以上参加した場合は、さらなる評価をします。</p>		
失格条件	演奏会、公開講座・公開レッスンの参加回数とレポート提出が7回を満たしていない者。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>毎回参加後に、レポートとして所定の用紙に内容のまとめ（約200字）と感想（よく分かった所、印象に残った所、難しかった点、気付いた点など、約200字）、あわせて約400字を記し、提出すること（所要時間4時間）。 提出締め切り日時は、実施日の1週間後17:00音楽学科合同研究室とします。 遅れた場合は理由書を要し、理由によって受理できるかどうか判断します。</p>		
課題へのフィードバック	レポート提出後、必要に応じて指導を行う。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	演奏会プログラム、公開講座などで配布される資料などを参考にしてください。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	DC304A01	期間	集中
授業科目名	室内楽 I		
英訳科目名	Chamber Music I		
担当教員名	音楽学科教員		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>学内において、また将来社会人となって演奏の場を得る場合、他の演奏者（複数）と音楽を共有する機会が多々あると思われる。室内楽はそうした環境に円滑に対応すべく、室内楽に必要な技術、すなわち正しいタイミングによる合わせ方、楽器間のバランスの取り方、ハーモニーの調和能力などを学び、習得し、演奏者にとって必要とされる“耳の良さ”を培っていく。さらに、演奏者同士が気持ちをひとつにして相互に信頼関係を築き、より高い次元の音楽性を目指していく意識を育てていくことを目標とする。</p>		
到達目標	コンサートで演奏できる。		
授業計画	<p>第1回 グループ編成と登録 第2回 学習する楽曲の設定および年間の学習計画 第3回 各人のパート練習とグループでの合わせ（練習） 第4回 レッスン受講（室内楽演奏に必要なとされる技術を習得）</p>		
評価方法 (合計100%)	学年末の試験を受け、その演奏を評価する。(100%)		
失格条件	受講時間数が、試験前の決められた期日までに12時間(45分×12)に満たなかった者、及び試験を受けなかった者		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	各グループで計画的な練習スケジュールを立て、和音感、和声進行、パート間の連携などを楽譜（スコア）から読み取り、効果的なりハーサルを重ねていく。予習・復習については、1回のレッスンのために180分（4時間）以上を必要とする。		
課題へのフィードバック	試験後に採点を行なった教員が、受験した室内楽グループ個別に講評をする。		
教科書	各グループが選んだ曲目のスコア、パート譜については、それぞれが手配する。		
著者名	(各グループにより異なる)		
出版社	(各グループにより異なる)		
参考書			
その他	授業のすすめ方については、グループ登録時に詳細を記した「室内楽実施要領」を配布する。また同時に内容を掲示する。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	DC305A05	期間	前期
授業科目名	コレギウム・ムジクム I		
英訳科目名	Collegium Musicum I		
担当教員名	中村 洋彦、頼田 麗		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> -	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	リコーダー、クルムホルン（管楽器）、ヴィオラ・ダ・ガンバ（弦楽器）等、古楽器の基本演習技術を習得する。 初級の合奏曲（ルネサンス音楽）を演習する。 演習曲を通して、音楽史におけるルネサンス音楽の位置と特徴を理解する。		
到達目標	古典派以前の西洋音楽を、古楽器の合奏により実体験出来る。 自分の専門分野以外の楽器の演奏が、ある程度出来る様に成る。		
授業計画	<p>第1回 この授業に関する説明と、各自の受講楽器の選択（管楽器もしくは弦楽器）。 2回目以降は管、弦、別クラスでの授業となります。 （以下は管楽器受講生用：中村洋彦担当）</p> <p>第2回 資料配布。リコーダーまたはクルムホルンに関する説明。（楽器の歴史を中心に） 楽器の割り当て（ソプラノ～バス）、楽器の構え方と基本奏法の概略。</p> <p>第3回 簡単なルネサンス合奏曲① 指使いの確認 第4回 簡単なルネサンス合奏曲② タンギングについて 第5回 簡単なルネサンス合奏曲③ 息のコントロールとハーモニー 第6～7回 フランスの舞曲より 第8～9回 フランドルの舞曲より 第10～11回 ドイツの舞曲① 第12回 ドイツの歌曲より 第13～14回 ドイツの舞曲② 第15回 クラス内での発表演奏 演習曲より選択</p> <p>（以下は弦楽器受講生用：頼田麗担当）</p> <p>第2回 資料配布、ヴィオラ・ダ・ガンバに関する説明 ガンバの割り当て、楽器の構え方、弓の持ち方等に関する説明 第3回 開放弦（3弦と4弦）の弾き方（押し弓と引き弓について） 第4回 開放弦（2弦から5弦）の弾き方（弓の持ち方の確認） 第5回 2～5弦の音階練習（ハ長調）と左腕、手、指の形についての確認 第6回 カデンツの弾き方 第7～8回 ドイツの器楽曲 第9～10回 イタリアの舞曲 第11～12回 フランスのシャンソン 第13～14回 イギリスの讃美歌より 第15回 クラス内での発表演奏（演習曲より選択）</p>		
評価方法 (合計100%)	授業への参加状況と参加態度 50% クラス内での発表演奏 30% 発表演奏会への参加 20%		
失格条件	演習、及び合奏を中心とした授業ですので、4回以上の欠席（公欠は除く）は失格。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	ヨーロッパの古い時代（主にルネサンス時代）の音楽史に関する本を読む。 自分の受講選択楽器に関する資料や本を読む。 受講生は、授業時間以外でも大学内に限り自分の選択楽器を借用する事が出来る。 楽器に触れていない時に、現在取り組んでいる演習曲の運指等をイメージトレーニングする。		
課題へのフィード バック	発表演奏終了後、全体に向けてコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書	「中世・ルネサンスの社会と音楽」 今谷和徳著（音楽之友社） 「中世・ルネサンスの音楽」 皆川達夫著（講談社新書） 「新版古楽のすすめ」 金沢正剛著（音楽之友社）		
その他	始業前に楽器を準備、または授業終了時に楽器を片付ける必要があります。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	DC305B05	期間	後期
授業科目名	コレギウム・ムジクムⅡ		
英訳科目名	Collegium Musicum Ⅱ		
担当教員名	中村 洋彦、頼田 麗		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	リコーダー、クルムホルン（管楽器）、ヴィオラ・ダ・ガンバ（弦楽器）等、古楽器の基本演習技術を習得する。 初級の合奏曲（ルネサンス音楽）を演習する。 演習曲を通して、音楽史におけるルネサンス音楽の位置と特徴を理解する。		
到達目標	古典派以前の西洋音楽を、古楽器の合奏により実体験出来る。 自分の専門分野以外の楽器の演奏が、ある程度出来る様に成る。		
授業計画	<p>管楽器クラス（中村洋彦担当）</p> <p>第1回 イギリスのルネサンスとバロックの音楽 ～旋法と調性の比較～ イギリスの器楽曲（バロック）より</p> <p>第2～3回 イギリスの器楽曲（ルネサンス）より</p> <p>第4～5回 イギリスのマドリガルより</p> <p>第6～8回 イタリアの声楽曲より</p> <p>第9～10回 イタリアの舞曲より</p> <p>第11～13回 イタリアの器楽曲より</p> <p>第14回 後期のまとめ。</p> <p>第15回 管、弦クラス合同での発表演奏（授業教室内）</p> <p>弦楽器クラス（頼田麗担当）</p> <p>第1回 簡単な曲のハーモニー演習</p> <p>第2～4回 バヴァーヌ、ガリヤルド</p> <p>第5～6回 アルマンド、クーラント、サラバンド</p> <p>第7～8回 イタリアのカンツォン</p> <p>第9～11回 イギリスのファンタジア</p> <p>第12～13回 イギリスの舞曲</p> <p>第14回 後期のまとめ。</p> <p>第15回 管、弦クラス合同での発表演奏（授業教室内）</p>		
評価方法 (合計100%)	授業への参加状況と参加態度 50% 授業内の発表演奏 30% 発表演奏会への参加 20%		
失格条件	演習、及び合奏を中心とした授業ですので、4回以上の欠席（公欠は除く）は失格。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	ヨーロッパの古い時代（主にルネサンス時代）の音楽史に関する本を読む。 自分の受講選択楽器に関する資料や本を読む。 受講生は、授業時間以外でも大学内に限り自分の選択楽器を借用する事が出来る。 楽器に触れていない時に、現在取り組んでいる演習曲の運指等をイメージトレーニングする。		
課題へのフィード バック	発表演奏終了後、全体に向けてコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書	「中世・ルネサンスの社会と音楽」 今谷和徳著（音楽之友社） 「中世・ルネサンスの音楽」 皆川達夫著（講談社新書） 「新版古楽のすすめ」 金沢正剛著（音楽之友社）		
その他	始業前に楽器を準備、または授業終了時に楽器を片付ける必要があります。 このクラスを受講するにはコレギウム・ムジクムⅠを修了している事が望ましい。 初めて受講する学生に対しては、コレギウム・ムジクムⅡの授業計画に沿って進めるが 授業時間外での自主練習が必要な場合もある。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	DC306A01	期間	後期
授業科目名	コミュニケーションと交渉術		
英訳科目名	Communication and Negotiation		
担当教員名	神殿 織江		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ◎
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>コミュニケーションは2人以上関わる場面では必ず必要となる。 コミュニケーションをいかにとるかで、良好な人間関係を築くことができるだけでなく、ビジネスの世界でも成果に結びつく。企業において新卒者の採用時に最も重視する力として「コミュニケーション力」がトップに挙げられている。</p> <p>本講は、コミュニケーションの基本を学び、社会で求められているコミュニケーション力とは何かを学ぶ。グループディスカッション、プレゼンテーションを繰り返し、情報収集から論理的思考、発信力を高め、交渉力につなげる。人前で発表するのが苦手な学生も得意な学生も自己向上を目指す。</p>		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションの基本 : 相手の立場を考えながらバーバル・ノンバーバルを意識したコミュニケーションを図ることができる。 ・実践力 : コミュニケーション能力を社会で求められるレベルにまで引き上げるには、学習したことを毎日の生活で意識して実践することが重要であると理解できる。 ・交渉力 : 情報の収集・蓄積と社会の流れを理解することが、一層質の高いコミュニケーションに繋がり、win-winの交渉が意識できる。 ・発表力 : 自分の考えを整理し、論理的に述べることができる。 <p>これらを実践していくことが、大学生活において人との交流を深め、豊かな大学生活に繋がることが理解できる。</p>		
授業計画	<p>第1回 オリエンテーション コミュニケーションの学びについて理解する 第2回 コミュニケーションとは ささまざまな場面で求められるコミュニケーション 第3回 コミュニケーションの基本 第4回 分かりやすく伝える 相手の立場に立つ、効果的に伝える 第5回 立場の違う人と話す 求められるマナー 第6回 意見を主張する 要求と提案 win-win 第7回 頼む、断る 第8回 意見を集約する 第9回 交渉ゲーム 第10回 グループディスカッション 第11回 ディベートに挑戦 (情報の重要性) 第12回 グループでプレゼンテーション (テーマ設定) 第13回 グループでプレゼンテーション (準備・作成) 第14回 グループでプレゼンテーション (発表) 第15回 振り返り</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>授業への参加態度 50% レポート提出 20% (提出課題は、授業中に提示) グループプレゼンテーション 30%</p>		
失格条件	<p>次のいずれかに該当する場合失格となる。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 出席回数が3分の2以上満たない場合 (授業開始時間以降の入室は遅刻とし、遅刻3回で欠席1回とする。30分以上の遅刻は欠席とする) 2. 授業中に指示した課題を提出しなかった場合 		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>授業で習ったことを毎日の生活で意識して実践していくこと</p>		
課題へのフィードバック	<p>グループ参画度、発言は、良かった点や課題があればその都度フィードバックする。 特に優秀なワークや提出課題に関しては、授業時に紹介する。</p>		
教科書	各授業時にプリントを配布		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	講義予定は、受講生の人数、及び、習得状況を見ながら柔軟に進めたい。積極的な取組みを期待している。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	DC306A02	期間	前期
授業科目名	キャリアアップ研究		
英訳科目名	Research on career improvement		
担当教員名	神殿 織江		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ◎	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>自分のキャリアをつくっていく上で、大学生からキャリア概念を形成する取り組みは決定的に重要である。責任ある仕事を継続的に体験することがない学生には、自らの判断と創造が要求されるリアルな社会をイメージしづらい。目の前の非常に狭い世界で物事をとらえ、体験的な知識も積み上げにくい。自分の広く大きな可能性に思い至る機会も見逃しがちである。この講義では、そうした課題に学生自らが気づき、これからの可能性を広げるエネルギーを持てる内容にしたい。</p> <p>大学卒業を控えた選職活動に絶大な威力を発揮するのは「大学でどんな行動を起こし、何を掴んだのか」ということを堂々と自分の言葉で語れることである。そこに至る基本的な「考え方」と「知識」を学生のうちに学ぶことには大きな意味がある。自分のキャリアをつくっていく上で、何故、そうした「考え方」や「知識」が必要であり、これから皆さんが自分でつくる学生生活を自分の言葉で語ることが重要なのかを体験的・理論的に伝えたい。</p>		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の学生生活を自己責任でつくっていく大切さを知ることが「キャリア形成」の第一歩であることを学び、実践できる。 ・キャリア形成の基本となる「考え方」を習得し、日常生活で実践的に活用できる。 		
授業計画	<p>第1回 オリエンテーション いろいろな考え方を知る</p> <p>第2回 自己紹介の意味を考えよう</p> <p>第3回 何のために大学にきたのか考えよう(目的)</p> <p>第4回 大学生活がこうなればいいな (目標)</p> <p>第5回 コミュニケーションとは</p> <p>第6回 自分を表現しよう</p> <p>第7回 協調性について考えよう</p> <p>第8回好きなことから世の中に関わろう</p> <p>第9回 失敗の意味</p> <p>第10回 キャリアマインドをもとう</p> <p>第11回 ディスカッションの大切さを学ぼう</p> <p>第12回 勉強・仕事の土台を考える</p> <p>第13回 プレゼンテーションにチャレンジ</p> <p>第14回 Willから始まる大学生活</p> <p>第15回 発表、まとめ</p> <p>習得状況を見ながら柔軟に進める。</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>授業への参加態度50%、指示されたワークシート提出50%(提出課題は、授業中に提示)</p> <p>社会で必要とされる「あたりまえのこと」をしっかりと身につける為に、遅刻・早退・課題忘れは減点対象。</p>		
失格条件	<p>次のいずれかに該当する場合失格となる。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 出席回数が3分の2以上満たない場合 (授業開始時間以降の入室は遅刻とし、遅刻3回で欠席1回とする。30分以上の遅刻は欠席とする) 2. 授業中に指示した課題を提出しなかった場合 		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>授業で習ったことを毎日の生活で意識して実践していくこと</p>		
課題へのフィード バック	<p>グループ参画度、発言は、良かった点や課題があればその都度フィードバックする。 特に優秀なワークや提出課題に関しては、授業時に紹介する。</p>		
教科書	新自分デザイン・ブックI		
著者名	東田晋三		
出版社	株式会社ドリムシップI		
参考書	授業中に紹介		
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	DC306A03	期間	後期
授業科目名	プレゼンテーション		
英訳科目名	Presentation		
担当教員名	甲斐 隆浩		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ◎
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>自分の提案を相手に受け入れて貰えるプレゼンテーションを、効率的に行う手法を学びます。ターゲットの抱える課題のヒアリング方法から、課題解決の提案を解りやすく伝えるプレゼンテーションの構成方法までを、実習を踏まえて修得を目指します。</p> <p>その為に、インターネットを活用した情報収集、画像編集ソフトでのビジュアル素材の加工、PowerPointでのスライドショーの制作、配布資料の制作について実習します。また、情報の整理手法、レイアウトとデザインの基礎手法、図解手法などの基礎知識と、プレゼンテーションの運営について学習します。</p>		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の提案を、より良く相手に受け入れてもらえるプレゼンテーションができる。 ・提案内容に適したプレゼンテーションの、企画・設計と評価ができる。 ・パソコン・ソフト・インターネット等を活用し、効率的に情報を収集・加工・編集し、相手を納得させるコンテンツが制作できる。 		
授業計画	<p>第1回 <準備>プレゼンの目的 問題解決 降ってくるプレゼン</p> <p>第2回 スライド制作実習 【基礎技能の評価】</p> <p>第3回 <準備>自分発信プレゼン Win-Winプレゼン</p> <p>第4回 <準備>ブラッシュアップ</p> <p>第5回 <シナリオ>課題解決シート作成 (課題と未来の対応)</p> <p>第6回 <シナリオ>起承転結シート作成 (ストーリーの組み立て)</p> <p>第7回 <スライド>素材の収集 取材とネット活用</p> <p>第8回 <スライド>論理図解</p> <p>第9回 <スライド>素材の収集 取材とネット活用</p> <p>第10回 プレゼン実践 【達成度の評価】</p> <p>第11回 <練習>つかみ ジェスチャー 質疑応答準備</p> <p>第12回 <練習>リハーサル 表情 アガリ対策</p> <p>第13回 <本番>コンディションの確認 運営テクニック</p> <p>第14回 プレゼン実践 【達成度の評価】</p> <p>第15回 <フォロー>担当者を自分のファンにする</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>授業への参加態度 30%</p> <p>提出課題 40%</p> <p>プレゼンテーション 30%</p>		
失格条件	<p>課題の提出率が100%に満たない場合は失格とする。</p> <p>出席回数が全体の3分の2に満たない場合は失格とする。</p> <p>20分以上の遅刻は欠席とみなす。20分以内の遅刻は3回で欠席1回とみなす。</p>		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>授業時間外の実習でプレゼンテーションを完成させます。授業時にしっかりと実習のポイントを確認することが重要であり、これに基づく実習によってプレゼン技能がマスターできます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業で指示するプレゼンテーション制作作業を完了させること。(復習時間 3時間) ・次回の講義テーマについて教科書を読んでおくこと。(予習時間 1時間) 		
課題へのフィードバック	<p>受講生をターゲットとしてプレゼンテーションを行い、その良い点・改善点を、その時点で解説します。</p>		
教科書	改訂版 小室淑恵の即効プレゼン術{ http://hon.gakken.jp/book/1340614400 }		
著者名	小室淑恵		
出版社	学研パブリッシング		
参考書	<p>パワポで極める常勝プレゼン{http://asciimw.jp/search/mode/item/cd/A1118490} (アスキー・メディアワークス)</p> <p>Microsoft Office Specialist Microsoft PowerPoint 2010 対策テキスト& 問題集 {http://www.fom.fujitsu.com/goods/officespecialist/fpt1104.html}(FOM出版)</p>		
その他	<p>実習において、パソコンでのドキュメント制作を行います。各自でのデータ保存と管理のため、USBメモリ等の記録メディアが必要です。</p>		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	DC306A04	期間	後期
授業科目名	現代日本の音楽カルチャー		
英訳科目名	Contemporary Japanese Music culture		
担当教員名	角家 千恵		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> -
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	近代音楽の歴史を知り、現代の音楽産業について考える		
到達目標	現代の日本の音楽の様相について理解できる		
授業計画	第1回 ガイダンス 第2回 ロックン・ロール創成期 ブルース、ロックンロールの誕生 第3回 1960年代 その1 ブリティッシュインヴェイジョン 第4回 1960年代 その2 ウェストコースト、ホワイトブルース、サザンロック 第5回 1960年代 その3 フォークロック、ウッドストック 第6回 1960～1970年代 ソウル、ブラックミュージック、ファンク 第7回 1970年代 その1 ハードロック 第8回 1970年代 その2 プログレッシヴ・ロック、グラムロック、パンクロック 第9回 1980年代 その1 ニューウェーブ、MTVの開始、ダンスミュージック 第10回 1980年代 その2 AOR、フュージョン、クロスオーバー 第11回 1980年代 その3 ハードロック、ヘヴィメタル 第12回 1990年代以降 ヒップホップ、コンピューターミュージック 第13回 日本における音楽の歴史と発展 その1 1950～1970年代 第14回 日本における音楽の歴史と発展 その2 1980年以降 第15回 総復習		
評価方法 (合計100%)	レポート 50% 学習に対する意欲50%		
失格条件	出席時数が開講時数の3分の2に達しない場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	準備学習用課題 (予習 1時間) 授業内容の復習 (2時間)		
課題へのフィード バック	期末レポートなど提出物には採点評価する。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		



3. 音楽学部 専門科目



3-001

ナンバリング	VM407A01	期間	前期
授業科目名	専攻実技 I (声楽)		
英訳科目名	Applied Music (Voice) I		
担当教員名	声楽部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> -
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>声楽に関する広範な技術を習得すると共に、適確な表現力を養うために、専門実技として、個人レッスンの形態をとっている。</p> <p>発声法から始まり、練習曲、歌曲（主に試験課題のイタリア歌曲）を中心に、解釈とその表現方法を学び、声楽家、あるいは音楽教育者としての基礎的課題の習得を目指す。学生の学習進捗状況によって他の外国語歌曲や日本歌曲を取り入れる場合もある。</p>		
到達目標	<p>発声の基礎を学び、身体の動きを理解しつつ、声の響くポジションを体得する。</p> <p>イタリア語を明瞭に発音することが、美しい響きのある声になることを理解する。</p> <p>イタリア古典歌曲、ロマン派等の歌曲を理解し、歌唱することができる。</p>		
授業計画	<p>基礎の発声練習を中心に練習曲、イタリア歌曲あるいは受講者の能力に応じた自由曲。</p> <p>第1回 ベル・カント唱法の発声・呼吸の会得</p> <p>第2回 発声・呼吸の会得</p> <p>第3回 練習曲</p> <p>第3回 練習曲 イタリア歌曲（音楽稽古）①</p> <p>第4回 練習曲 イタリア歌曲（音楽稽古）②</p> <p>第5回 イタリア歌曲（ディクッション中心）</p> <p>第6回 イタリア歌曲（ディクッション）</p> <p>第7回 イタリア歌曲（楽曲分析）</p> <p>第8回 イタリア歌曲（作品解釈）</p> <p>第9回 イタリア歌曲（作品解釈）</p> <p>第10回 試験曲選曲</p> <p>第11回 試験曲（ディクッション中心）</p> <p>第12回 試験曲（ディクッション中心）</p> <p>第13回 試験曲（作品解釈）</p> <p>第14回 試験曲（まとめ）</p> <p>第15回 試験</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>100点法。前期の試験。</p> <p>実技試験： 100%</p> <p>※試験課題：内規参照</p>		
失格条件	出席日数が2/3に満たないもの、及び試験を受けなかったもの。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>レッスン前には譜読みは必ず行うこと。原語の訳詞を朗読し理解しておくこと。</p> <p>歌詞は辞書で調べる習慣をつけることが大切である。 イタリア語の授業を履修するのが望ましい。</p> <p>(1週間にかける予習・復習の学修時間の目安： 9時間 譜読み、正しい発音による朗読、歌詞の内容・作品内容の理解)</p>		
課題へのフィード バック	<p>毎時レッスンにて次のレッスンに向けての課題を提示しどのように取り組んでくるかの仕方・方法も伝授する。1週間それを中心に勉強をしていく。その積み重ねを怠らず毎回レッスンにてチェックしていく。</p>		
教科書	受講者の能力に応じ担当の指導者が教材を選択して与える。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

3-002

ナンバリング	VM407A02	期間	後期
授業科目名	専攻実技Ⅱ(声楽)		
英訳科目名	Applied Music (Voice) Ⅱ		
担当教員名	声楽部門		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	<p>声楽に関する広範な技術を習得すると共に、適確な表現力を養うために、専門実技として、個人レッスンの形態をとっている。</p> <p>発声法から始まり、練習曲、歌曲（主にイタリア歌曲）の解釈とその表現方法を学び、声楽家、あるいは音楽教育者としての基礎的課題の習得を目指す。</p>		
到達目標	<p>発声の基礎を学び、身体の動きを理解しつつ、声の響くポジションを体得する。</p> <p>イタリア語を明瞭に発音することが、美しい響きのある声になることを理解する。</p> <p>イタリア古典歌曲、ロマン派等の歌曲を理解し、歌唱することができる。</p>		
授業計画	<p>専攻実技Ⅰでの学習を踏まえ、発声と練習曲、そしてイタリア歌曲を中心に受講者の能力に応じた自由曲。</p> <p>第1回 発声・自由曲① 音楽練習</p> <p>第2回 発声・自由曲① ディクッション中心</p> <p>第3回 発声・自由曲① 作品解釈</p> <p>第4回 発声・自由曲① まとめ</p> <p>第5回 発声・自由曲② 音楽練習</p> <p>第6回 発声・自由曲② ディクッション中心</p> <p>第7回 発声・自由曲② 作品解釈</p> <p>第8回 発声・自由曲② まとめ</p> <p>第9回 自由曲③④ 音楽練習</p> <p>第10回 自由曲③④ ディクッション中心</p> <p>第11回 自由曲③④ 作品解釈</p> <p>第12回 自由曲③④ まとめ</p> <p>第13回 試験曲 まとめ</p> <p>第14回 試験曲 まとめ</p> <p>第15回 試験</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>100点法。後期の試験。</p> <p>実技試験： 100%</p> <p>※試験課題：内規参照</p>		
失格条件	出席日数が2/3に満たないもの、及び試験を受けなかったもの。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>レッスン前には譜読みは必ず行うこと。イタリア語の訳詞を読み理解しておくこと。</p> <p>歌詞は辞書で調べる習慣をつけることが大切である。 イタリア語の授業を履修することが望ましい。</p> <p>(1週間にかける予習・復習の学修時間の目安： 9時間 譜読み、正しい発音による朗読、歌詞の意味・作品の内容の理解)</p>		
課題へのフィード バック	<p>毎時レッスンにて次のレッスンに向けての課題を提示しどのように取り組んでくるかの仕方・方法も伝授する。1週間それを中心に勉強をしていく。その積み重ねを怠らず毎回レッスンにてチェックしていく。</p>		
教科書	受講者の能力に応じ担当の指導者が教材を選択して与える。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

3-003

ナンバリング	VM407A03	期間	前期
授業科目名	専攻実技Ⅲ(声楽)		
英訳科目名	Applied Music (Voice) Ⅲ		
担当教員名	声楽部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>声楽に関する広範な技術を習得すると共に、適確な表現力を養うために、専門実技として、個人レッスンの形態をとっている。</p> <p>発声法から始まり、練習曲、歌曲（イタリア歌曲、ドイツ歌曲、フランス歌曲、日本歌曲等）、オペラ、オラトリオの解釈とその表現方法を学び、声楽家、あるいは音楽教育者としての基礎的課題の習得を目指す。</p>		
到達目標	<p>発声の基礎を学び、身体の動きを理解しつつ、声の響くポジションを体得する。</p> <p>外国語を正しく、明瞭に発音することが、美しい響きのある声になることを理解する。</p> <p>外国語歌曲、ロマン派等の作品を理解し、歌唱することができる。</p>		
授業計画	<p>前年度での学習を踏まえ、イタリア歌曲又は、日本歌曲以外の歌曲も学ぶ。</p> <p>例を挙げると、ドイツ歌曲あるいはフランス歌曲等々。</p> <p>それに加えて受講者の能力に応じた自由曲</p> <p>第1回 発声・自由曲① 音楽練習</p> <p>第2回 発声・自由曲① ディクッション中心</p> <p>第3回 発声・自由曲① 作品解釈</p> <p>第4回 発声・自由曲① まとめ</p> <p>第5回 発声・自由曲② 音楽練習</p> <p>第6回 発声・自由曲② ディクッション中心</p> <p>第7回 発声・自由曲② 作品解釈</p> <p>第8回 発声・自由曲② まとめ</p> <p>第9回 自由曲③④ 音楽練習</p> <p>第10回 自由曲③④ ディクッション中心</p> <p>第11回 自由曲③④ 作品解釈</p> <p>第12回 自由曲③④ まとめ</p> <p>第13回 試験曲 まとめ</p> <p>第14回 試験曲 まとめ</p> <p>第15回 試験</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>100点法。前期の試験。</p> <p>実技試験： 100%</p> <p>※試験課題：内規参照</p>		
失格条件	出席日数が2/3に満たないもの、及び試験を受けなかったもの。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>レッスン前には十分な譜読みは必ず行うこと。外国語の訳詞を読み理解しておくこと。</p> <p>歌詞は辞書で調べる習慣をつけることが大切である。必修課目だけでなく語学の授業に積極的に履修・聴講することが望ましい。</p> <p>(1週間にかける予習・復習の学修時間の目安： 9時間 譜読み、正しい発音による朗読、歌詞の意味・作品の内容の理解)</p>		
課題へのフィード バック	<p>毎時レッスンにて次のレッスンに向けての課題を提示しどのように取り組んでくるかの仕方・方法も伝授する。1週間それを中心に勉強をしてくる。その積み重ねを怠らず毎回レッスンにてチェックしていく。</p>		
教科書	受講者の能力に応じ担当の指導者が教材を選択して与える。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	VM407A04	期間	後期
授業科目名	専攻実技Ⅳ(声楽)		
英訳科目名	Applied Music (Voice) Ⅳ		
担当教員名	声楽部門		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	<p>声楽に関する広範な技術を習得すると共に、適確な表現力を養うために、専門実技として、個人レッスンの形態をとっている。</p> <p>発声法から始まり、練習曲、歌曲（イタリア歌曲、ドイツ歌曲、フランス歌曲、日本歌曲等）、オペラ、オラトリオの解釈とその表現方法を学び、声楽家、あるいは音楽教育者としての基礎的課題の習得を目指す。</p>		
到達目標	<p>発声の基礎を学び、身体の動きを理解しつつ、声の響くポジションを体得することができる。</p> <p>外国語を明瞭に発音することが、美しい響きのある声になることを理解することができる。</p>		
授業計画	<p>前年度での学習を踏まえ、イタリア歌曲又は日本歌曲以外の歌曲も課題として学ぶ。</p> <p>例を挙げると、オペラやドイツ歌曲あるいはフランス歌曲等々。</p> <p>それに加えて受講者の能力に応じた自由曲。</p> <p>第1回 発声・自由曲① 音楽練習</p> <p>第2回 発声・自由曲① ディクッション中心</p> <p>第3回 発声・自由曲① 作品解釈</p> <p>第4回 発声・自由曲① まとめ</p> <p>第5回 発声・自由曲② 音楽練習</p> <p>第6回 発声・自由曲② ディクッション中心</p> <p>第7回 発声・自由曲② 作品解釈</p> <p>第8回 発声・自由曲② まとめ</p> <p>第9回 自由曲③④ 音楽練習</p> <p>第10回 自由曲③④ ディクッション中心</p> <p>第11回 自由曲③④ 作品解釈</p> <p>第12回 自由曲③④ まとめ</p> <p>第13回 試験曲 まとめ</p> <p>第14回 試験曲 まとめ</p> <p>第15回 試験</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>100点法。後期の試験。</p> <p>実技試験： 100%</p> <p>※試験課題：内規参照</p>		
失格条件	出席日数が2/3に満たないもの、及び試験を受けなかったもの。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>レッスン前には譜読みは必ず行うこと。訳詞を読み理解しておくこと。</p> <p>歌詞は辞書で調べる習慣をつけることが大切である。費州科目に限らず、語学の授業を履修したり聴講することが望ましい。</p> <p>(1週間にかかる予習・復習の学修時間の目安： 9時間 譜読み、正しい発音による朗読、歌詞の意味・作品の内容の理解)</p>		
課題へのフィード バック	<p>毎時レッスンにて次のレッスンに向けての課題を提示しどのように取り組んでくるかの仕方・方法も伝授する。1週間それを中心に勉強をしてくる。その積み重ねを怠らず毎回レッスンにてチェックしていく。</p>		
教科書	受講者の能力に応じ担当の指導者が教材を選択して与える。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	VM407B01	期間	前期
授業科目名	専攻実技V (声楽)		
英訳科目名	Applied Music (Voice) V		
担当教員名	声楽部門		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> -
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	<p>声楽に関する広範な技術を習得すると共に、適確な表現力を養うために、専門実技として、個人レッスンの形態をとっている。</p> <p>発声法から始まり、練習曲、歌曲（イタリア歌曲、ドイツ歌曲、フランス歌曲、日本歌曲等）、オペラ、オラトリオの解釈とその表現方法を学び、声楽家、あるいは音楽教育者としての基礎的課題の習得を目指す。</p>		
到達目標	<p>より良い発声を求め、身体の動きを理解しつつ、声の響くポジションを体得する。</p> <p>外国語を正しく、明瞭に発音することが、美しい響きのある声になることを理解し、体験する。</p> <p>また日本歌曲、イタリア歌曲、ドイツ歌曲、フランス歌曲等の他、オペラアリアも学び、それぞれの言葉の違い、響きの違い、楽曲の違いを体験することにより、幅広い音楽的知識を会得することができる。</p> <p>そしてその知識と理解により、もう一段水準の高い音楽的歌唱を目標とする。</p>		
授業計画	<p>前年度での学習を踏まえ、イタリア、日本、ドイツ、フランス歌曲も課題として学ぶ。</p> <p>また声域を慎重に選びながらオペラのアリアも学ぶこともできる。</p> <p>それに加えて受講者の能力に応じた自由曲。</p> <p>第1回 発声・自由曲① 音楽練習</p> <p>第2回 発声・自由曲① ディクッション中心</p> <p>第3回 発声・自由曲① 作品解釈</p> <p>第4回 発声・自由曲① まとめ</p> <p>第5回 発声・自由曲② 音楽練習</p> <p>第6回 発声・自由曲② ディクッション中心</p> <p>第7回 発声・自由曲② 作品解釈</p> <p>第8回 発声・自由曲② まとめ</p> <p>第9回 自由曲③④ 音楽練習</p> <p>第10回 自由曲③④ ディクッション中心</p> <p>第11回 自由曲③④ 作品解釈</p> <p>第12回 自由曲③④ まとめ</p> <p>第13回 試験曲 まとめ</p> <p>第14回 試験曲 まとめ</p> <p>第15回 試験</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>100点法。前期の試験。</p> <p>実技試験： 100%</p> <p>※試験課題：内規参照</p>		
失格条件	出席日数が2/3に満たないもの、及び試験を受けなかったもの。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>イタリア語の他に、ドイツ語、あるいはフランス語と、新たな言葉が増えるので訳詞を読み辞書で調べる習慣をつけ、理解する学習時間が必要。</p> <p>そしてそれらの外国語の授業を履修し、語学を学ぶことにも力を注ぐこと。</p> <p>(1週間にかかる予習・復習の学修時間の目安： 9時間 譜読み、正しい発音による朗読、歌詞の意味・作品の内容の理解)</p>		
課題へのフィードバック	毎時レッスンにて次のレッスンに向けての課題を提示しどのように取り組んでくるか伝授する。1週間それを中心に勉強をしていく。その積み重ねを怠らず毎回レッスンにてチェックしていく。		
教科書	受講者の能力に応じ担当の指導者が教材を選択して与える。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	VM407B02	期間	後期
授業科目名	専攻実技Ⅵ (声楽)		
英訳科目名	Applied Music (Voice) Ⅵ		
担当教員名	声楽部門		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	<p>声楽に関する広範な技術を習得すると共に、適確な表現力を養うために、専門実技として、個人レッスンの形態をとっている。</p> <p>発声法から始まり、練習曲、歌曲（イタリア歌曲、ドイツ歌曲、フランス歌曲、日本歌曲等）、オペラ、オラトリオの解釈とその表現方法を学び、声楽家、あるいは音楽教育者としての基礎的課題の習得を目指す。</p>		
到達目標	<p>より良い発声を求め、身体の働きを理解しつつ、声の響くポジションを体得する。</p> <p>外国語を正しく、明瞭に発音することが、美しい響きのある声になることを理解し、体験する。</p> <p>また日本歌曲、イタリア歌曲、ドイツ歌曲、フランス歌曲等の他、オペラアリアも学び、それぞれの言葉の違い、響きの違い、楽曲の違いを体験することにより、幅広い音楽的知識を会得することができる。</p> <p>そしてその知識と理解により、もう一段水準の高い音楽的歌唱を目標とする。</p>		
授業計画	<p>前年度での学習を踏まえ、イタリア、日本、ドイツ、フランス歌曲も課題として学ぶ。</p> <p>また声域を慎重に選びながらオペラのアリアも学ぶこともできる。</p> <p>それに加えて受講者の能力に応じた自由曲。</p> <p>第1回 発声・自由曲① 音楽練習</p> <p>第2回 発声・自由曲① ディクッション中心</p> <p>第3回 発声・自由曲① 作品解釈</p> <p>第4回 発声・自由曲① まとめ</p> <p>第5回 発声・自由曲② 音楽練習</p> <p>第6回 発声・自由曲② ディクッション中心</p> <p>第7回 発声・自由曲② 作品解釈</p> <p>第8回 発声・自由曲② まとめ</p> <p>第9回 自由曲③④ 音楽練習</p> <p>第10回 自由曲③④ ディクッション中心</p> <p>第11回 自由曲③④ 作品解釈</p> <p>第12回 自由曲③④ まとめ</p> <p>第13回 試験曲 まとめ</p> <p>第14回 試験曲 まとめ</p> <p>第15回 試験</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>100点法。前期の試験。</p> <p>実技試験： 100%</p> <p>※試験課題：内規参照</p>		
失格条件	出席日数が2/3に満たないもの、及び試験を受けなかったもの。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>イタリア語の他に、ドイツ語、あるいはフランス語と、新たな言葉が増えるので訳詞を読み辞書で調べる習慣をつけ、理解する学習時間が必要。</p> <p>そしてそれらの外国語の授業を履修し、語学を学ぶことにも力を注ぐこと。</p> <p>(1週間にかかる予習・復習の学修時間の目安： 9時間 譜読み、正しい発音による朗読、歌詞の意味・作品の内容の理解)</p>		
課題へのフィードバック	<p>毎時レッスンにて次のレッスンに向けての課題を提示しどのように取り組んでくるかの仕方・方法も伝授する。1週間それを中心に勉強をしていく。その積み重ねを怠らず毎回レッスンにてチェックしていく。</p>		
教科書	受講者の能力に応じ担当の指導者が教材を選択して与える。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

3-007

ナンバリング	VM407C01	期間	前期
授業科目名	専攻実技Ⅶ(声楽)		
英訳科目名	Applied Music (Voice) Ⅶ		
担当教員名	声楽部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> -
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>声楽に関する広範な技術を習得すると共に、適確な表現力を養うために、専門実技として、個人レッスンの形態をとっている。</p> <p>発声法から始まり、練習曲、歌曲（イタリア歌曲、ドイツ歌曲、フランス歌曲、日本歌曲等）、オペラ、オラトリオの解釈とその表現方法を学び、声楽家、あるいは音楽教育者としての基礎的課題の習得を目指す。</p>		
到達目標	<p>より良い発声を求め、身体の動きを理解しつつ、声の響くポジションを体得する。</p> <p>外国語を正しく、明瞭に発音することが、美しい響きのある声になることを理解し、体験する。</p> <p>また日本歌曲、イタリア歌曲、ドイツ歌曲、フランス歌曲等の他、オペラアリアも学び、それぞれの言葉の違い、響きの違い、楽曲の違いを体験することにより、幅広い音楽的知識を会得することができる。</p> <p>そしてその知識と理解により、もう一段水準の高い音楽的歌唱を目標とする。</p>		
授業計画	<p>前年度での学習を踏まえ、イタリア、日本、ドイツ、フランス歌曲も課題として学ぶ。</p> <p>また声域を慎重に選びながらオペラのアリアも学ぶこともできる。</p> <p>それに加えて受講者の能力に応じた自由曲。</p> <p>第1回 発声・自由曲① 音楽練習</p> <p>第2回 発声・自由曲① ディクッション中心</p> <p>第3回 発声・自由曲① 作品解釈</p> <p>第4回 発声・自由曲① まとめ</p> <p>第5回 発声・自由曲② 音楽練習</p> <p>第6回 発声・自由曲② ディクッション中心</p> <p>第7回 発声・自由曲② 作品解釈</p> <p>第8回 発声・自由曲② まとめ</p> <p>第9回 自由曲③④ 音楽練習</p> <p>第10回 自由曲③④ ディクッション中心</p> <p>第11回 自由曲③④ 作品解釈</p> <p>第12回 自由曲③④ まとめ</p> <p>第13回 試験曲 まとめ</p> <p>第14回 試験曲 まとめ</p> <p>第15回 試験</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>100点法。前期の試験。</p> <p>実技試験： 100%</p> <p>※試験課題：内規参照</p>		
失格条件	出席日数が2/3に満たないもの、及び試験を受けなかったもの。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>イタリア語の他に、ドイツ語、あるいはフランス語と、新たな言葉が増えるので訳詞を読み辞書で調べる習慣をつけ、理解する学習時間が必要。</p> <p>そしてそれらの外国語の授業を履修し、語学を学ぶことにも力を注ぐこと。</p> <p>(1週間にかかる予習・復習の学修時間の目安： 9時間 譜読み、正しい発音による朗読、歌詞の意味・作品の内容の理解)</p>		
課題へのフィードバック	毎時レッスンにて次のレッスンに向けての課題を提示しどのように取り組んでいくか伝授する。1週間それを中心に勉強をしていく。その積み重ねを怠らず毎回レッスンにてチェックしていく。		
教科書	受講者の能力に応じ担当の指導者が教材を選択して与える。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	VM407C02	期間	後期
授業科目名	専攻実技Ⅷ(声楽)		
英訳科目名	Applied Music (Voice) Ⅷ		
担当教員名	声楽部門		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	<p>声楽に関する広範な技術を習得すると共に、適確な表現力を養うために、専門実技として、個人レッスンの形態をとっている。</p> <p>発声法から始まり、練習曲、歌曲（イタリア歌曲、ドイツ歌曲、フランス歌曲、日本歌曲等）、オペラ、オラトリオの解釈とその表現方法を学び、声楽家、あるいは音楽教育者としての基礎的課題の習得を目指す。</p>		
到達目標	<p>より良い発声を求め、身体の動きを理解しつつ、声の響くポジションを体得する。</p> <p>外国語を正しく、明瞭に発音することが、美しい響きのある声になることを理解し、体験する。</p> <p>また日本歌曲、イタリア歌曲、ドイツ歌曲、フランス歌曲等の他、オペラアリアも学び、それぞれの言葉の違い、響きの違い、楽曲の違いを体験することにより、幅広い音楽的知識を会得することができる。</p> <p>そしてその知識と理解により、もう一段水準の高い音楽的歌唱を目標とする。</p>		
授業計画	<p>前年度での学習を踏まえ、イタリア、日本、ドイツ、フランス歌曲も課題として学ぶ。</p> <p>また声域を慎重に選びながらオペラのアリアも学ぶこともできる。</p> <p>それに加えて受講者の能力に応じた自由曲。</p> <p>第1回 発声・自由曲① 音楽練習</p> <p>第2回 発声・自由曲① ディクッション中心</p> <p>第3回 発声・自由曲① 作品解釈</p> <p>第4回 発声・自由曲① まとめ</p> <p>第5回 発声・自由曲② 音楽練習</p> <p>第6回 発声・自由曲② ディクッション中心</p> <p>第7回 発声・自由曲② 作品解釈</p> <p>第8回 発声・自由曲② まとめ</p> <p>第9回 自由曲③④ 音楽練習</p> <p>第10回 自由曲③④ ディクッション中心</p> <p>第11回 自由曲③④ 作品解釈</p> <p>第12回 自由曲③④ まとめ</p> <p>第13回 試験曲 まとめ</p> <p>第14回 試験曲 まとめ</p> <p>第15回 卒業試験</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>100点法。前期の試験。</p> <p>実技試験： 100%</p> <p>※試験課題：内規参照</p>		
失格条件	出席日数が2/3に満たないもの、及び試験を受けなかったもの。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>イタリア語の他に、ドイツ語、あるいはフランス語と、新たな言葉が増えるので訳詞を読み辞書で調べる習慣をつけ、理解する学習時間が必要。</p> <p>そしてそれらの外国語の授業を履修し、語学を学ぶことにも力を注ぐこと。</p> <p>(1週間にかかる予習・復習の学修時間の目安： 9時間 譜読み、正しい発音による朗読、歌詞の意味・作品の内容の理解)</p>		
課題へのフィードバック	<p>毎時レッスンにて次のレッスンに向けての課題を提示しどのように取り組んでくるかの仕方・方法も伝授する。1週間それを中心に勉強をしていく。その積み重ねを怠らず毎回レッスンにてチェックしていく。</p>		
教科書	受講者の能力に応じ担当の指導者が教材を選択して与える。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

3-009

ナンバリング	VM407A05	期間	前期
授業科目名	イタリア歌曲研究 I		
英訳科目名	Study of Italian Song I		
担当教員名	木澤 佐江子		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> -
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	<p>*講義概要*</p> <p>イタリア歌曲研究では、正しい呼吸法と発音を勉強しながらベル・カント（「美しい歌」という意味で18世紀半ばにイタリアで生まれた歌唱法。声自体の美しさを高揚することに重点をおいたもの。イタリアオペラの興隆とともに全ヨーロッパの音楽に影響を与えた。）唱法の習得を目指します。イタリア歌曲研究 I では主にイタリア古典歌曲からロマン派歌曲初期あたりまで、詩の解釈も交えイタリア歌曲の変遷をたどりながらすすめていきます。</p> <p>最終授業日に内容理解の確認を含め、試演会を行います。</p> <p>*ポイント*</p> <p>学生との対話（自分の意思をはっきりと表現することで、演奏における表現することの積極性を高めていきます。）</p> <p>歌詞の朗読（正しい発音の理解）</p> <p>ベル・カント唱法（息にのせた響き）</p>		
到達目標	<p>イタリア語が正しく読める、発音できる</p> <p>音楽に必要とされる腹式呼吸を用いてベル・カント唱法を習得する</p> <p>歌曲作品を勉強するに当たり詩の解釈をすすめることができる</p>		
授業計画	<p>・全回を通しての共通課題</p> <p>呼吸法、ベル・カント唱法による発声</p> <p>第1回 イタリア歌曲集1巻</p> <p>第2回 イタリア歌曲集1巻</p> <p>第3回 イタリア歌曲集1巻2巻</p> <p>第4回 イタリア歌曲集1巻2巻</p> <p>第5回 ベッリーニ歌曲</p> <p>第6回 ベッリーニ歌曲</p> <p>第7回 ベッリーニ歌曲</p> <p>第8回 ドニゼッティ歌曲</p> <p>第9回 ドニゼッティ歌曲</p> <p>第10回 ロッシーニ歌曲</p> <p>第11回 ロッシーニ歌曲</p> <p>第12回 ヴェルディ歌曲</p> <p>第13回 ヴェルディ歌曲</p> <p>第14回 トスティ歌曲</p> <p>第15回 試演会</p>		
評価方法 (合計100%)	授業の参加状態 積極的に授業に向かう姿勢・取り組み方・レポート	30%	60% 10%
失格条件	授業日数において出席日数が2/3に満たないものを失格とする。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>音楽は身体が楽器です。いい健康状態を保つことに常に留意して、授業に出席すること。</p> <p>歌う前に歌う時と同じ身体の使い方、詩の朗読を必ずすること。</p> <p>歌詞の対訳を読んで、大意は理解しておくこと。</p> <p>音楽の練習は身体的な面から長時間無理な練習は禁物であるため、十分な注意が必要。</p> <p>(1週間にかける予習・復習の学修時間の目安：4時間 十分な発声練習を行った上で譜読み、意味調べ、内容の理解に十分な時間をかけることが望ましい。また正しいイタリア語の発音・文法を学ぶために語学の勉強を積極的にすること。</p>		
課題へのフィードバック	試演会終了後、個別にコメントします。		
教科書	<p>授業で使用する楽譜</p> <p>イタリア歌曲集 I、II</p> <p>ベッリーニ歌曲集</p> <p>ドニゼッティ歌曲集</p> <p>ロッシーニ歌曲集</p> <p>ヴェルディ歌曲集</p> <p>トスティ歌曲集</p> <p>(これ以外は暫時指定。初回授業時に詳細は発表します。)</p>		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	提示された課題は積極的に取り組むように心がけましょう。		
備考			
科目生への開講	あり（音楽専攻卒業生に限る）		

ナンバリング	VM407A06	期間	後期
授業科目名	イタリア歌曲研究Ⅱ		
英訳科目名	Study of Italian Song Ⅱ		
担当教員名	木澤 佐江子		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	<p>*講義概要*</p> <p>イタリア歌曲研究では、正しい呼吸法と発音を勉強しながらベル・カント（「美しい歌」という意味で18世紀半ばにイタリアで生まれた歌唱法。声自体の美しさを高揚することに重点をおいたもの。イタリアオペラの興隆とともに全ヨーロッパの声楽に影響を与えた。）唱法の習得を目指します。イタリア歌曲研究Ⅱではトスティ〜ロマン派歌曲以降の作品を取り上げ、詩の解釈も交えイタリア歌曲の変遷をたどりながらすすめていきます。授業最終授業日に内容理解の確認を含め、試演会を行います。</p> <p>*ポイント*</p> <p>学生との対話（自分の意思をはっきりと表現することで、演奏における表現することの積極性を高めていきます。）</p> <p>歌詞の朗読（正しい発音の理解）</p> <p>ベル・カント唱法（息にのせた響き）</p>		
到達目標	<p>イタリア語が正しく読める、発音できる</p> <p>声楽に必要なとされる腹式呼吸を用いてベル・カント唱法を習得する</p> <p>歌曲作品を勉強するに当たり詩の解釈をすすめることができる</p>		
授業計画	<p>・全回を通しての共通課題</p> <p>呼吸法、ベル・カント唱法による発声</p> <p>第1回 トスティ歌曲</p> <p>第2回 トスティ歌曲・トスティ作品のテキスト（詩）について</p> <p>第3回 トスティ歌曲・トスティ作品のテキスト（詩）について</p> <p>第4回 トスティ歌曲</p> <p>第5回 トスティ歌曲</p> <p>第6回 ドナウディ歌曲</p> <p>第7回 ドナウディ歌曲</p> <p>第8回 近代歌曲について</p> <p>第9回 近代歌曲</p> <p>第10回 近代歌曲</p> <p>第11回 近代歌曲</p> <p>第12回 試演会準備</p> <p>第13回 試演会準備</p> <p>第14回 試演会準備</p> <p>第15回 試演会</p>		
評価方法 (合計100%)	授業の参加態度	60%	
	積極的に授業に向かう姿勢・取り組み方・レポート	30%	
	試演会	10%	
失格条件	●Ⅱ（後期）の授業日数における出席日数が2/3に満たないものを失格とする。		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	<p>声楽は身体が楽器です。いい健康状態を保つことに常に留意して、授業に出席してください。</p> <p>歌う前に歌う時と同じ身体の使い方、詩の朗読を必ずしていただくこと。</p> <p>歌詞の対訳を読んで、大意は理解していただくこと。</p> <p>授業で出された課題を十分に時間をかけて譜読みしていただくこと。</p> <p>(1週間にかける予習・復習の学修時間の目安：4時間 譜読み、正しい発音による朗読、歌詞の意味・作品の内容の理解)</p>		
課題へのフィードバック	試演会終了後、個別にコメントします。		
教科書	<p>授業で使用する楽譜</p> <p>ヴェルディ歌曲集</p> <p>トスティ歌曲集</p> <p>ドナウディ歌曲集</p> <p>イタリア近代歌曲集</p> <p>(これ以外は暫時指定。初回授業時に詳細は発表します。)</p>		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	提示された課題は積極的に取り組むように心がけましょう。		
備考			
科目生への開講	あり（声楽専攻卒業生に限る）		

ナンバリング	期間	前期
授業科目名	日本歌曲研究 I	
英訳科目名	Study of Japanese Song I	
担当教員名	畑田 弘美	
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2 <技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4 <関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6
授業概要・ポイント	日本歌曲は、西洋音楽の手法から日本語独自の言葉を生かしつつ作曲することに試行錯誤しながら発展してきた。その歴史的な流れを知り、その間に作られた多くの楽曲を研究し、習得する。 演奏者として、詩を深く理解し、日本人の細やかな心の機微を感じ取り、それを美しい声で演奏できるようになる。 言葉と情感の相互作用や表現方法など、具体的に取り上げながら研究する。	
到達目標	西洋音楽から学んだ発声法を基本にして、日本語の特質を理解し、美しく日本歌曲を演奏することができるようになる。次の項目を達成目標とする。 ①日本歌曲の歴史の流れを知ることができる。 ②多くの日本歌曲を研究し、習得することができる。 ③詩の内容を読み取り、深く理解することができる。	
授業計画	第1回 授業ガイダンス 日本歌曲の歴史的な流れの解説 第2回 日本語唱法について 第3回 瀧 廉太郎作品 第4回 小松耕輔・中山晋平作品 第5回 信時 潔作品 第6回 信時 潔作品 第7回 信時 潔作品 第8回 平井康三郎作品 第9回 平井康三郎作品 第10回 平井康三郎作品 第11回 山田耕筰作品 第12回 山田耕筰作品 第13回 山田耕筰作品 第14回 試演会準備 第15回 試演会	
評価方法 (合計100%)	授業への積極的な参加態度 70% 試演会 30%	
失格条件	出席時数が開講時数の3分の2に達しない場合	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	・次回講義の提示された課題曲を練習すること（予習時間 1時間） ・受講後の楽曲を復習すること（復習時間 2時間）	
課題へのフィード バック	・授業内で発表した楽曲について、全体に向けてコメントする。 ・授業内での個別の歌唱については、その都度個別にコメントする。 ・試演会で発表した歌唱については、個別にコメントする。	
教科書	日本歌曲名歌集（原調版） プリントの配布	
著者名		
出版社	音楽之友社	
参考書		
その他	特になし	
備考		
科目生への開講	あり（声楽専攻卒業生に限る）	

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	日本歌曲研究Ⅱ		
英訳科目名	Study of Japanese SongⅡ		
担当教員名	畑田 弘美		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	前期に引き継ぎ、日本歌曲の歴史的な流れに沿って、日本の代表的な作曲者の作品を取り上げる。多くの楽曲を歌唱し、その歌唱法や詩の理解を深め、日本歌曲における読譜の力をつける。		
到達目標	前期に引き継ぎ多くの楽曲を知り、更に深く研究し日本歌曲の分野を理解することができる。次の項目を達成目標とする。 ①多くの日本歌曲を研究し、習得することができる。 ②詩の内容を読み取り、深く理解することができる。 ③1年間の学びによる歌唱技術の向上を体感することができる。		
授業計画	第1回 山田耕祐作品 第2回 山田耕祐作品 第3回 山田耕祐作品 第4回 中田喜直作品 第5回 中田喜直作品 第6回 中田喜直作品 第7回 團 伊玖磨作品 第8回 團 伊玖磨作品 第9回 團 伊玖磨作品 第10回 大中 恩作品 第11回 小林秀雄作品 第12回 小林秀雄作品 第13回 木下牧子作品 第14回 試演会準備 第15回 試演会		
評価方法 (合計100%)	授業への積極的な参加態度(参加状況) 70% 試演会 30%		
失格条件	出席時数が開講時数の3分の2に達しない場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	・次回講義の指示された課題曲を練習すること(予習時間 1時間) ・受講後の楽曲を復習すること(復習時間 2時間)		
課題へのフィード バック	・授業内で発表した楽曲について、全体に向けてコメントする。 ・授業内での個別の歌唱については、その都度個別にコメントする。 ・試演会で発表した歌唱については、個別にコメントする。		
教科書	日本歌曲名歌集(原調版) プリントの配布		
著者名			
出版社	音楽之友社		
参考書			
その他	特になし		
備考			
科目生への開講	あり(声楽専攻卒業生に限る)		

ナンバリング	期間	後期
授業科目名	オラトリオ・カンタータ研究Ⅱ	
英訳科目名	Study of Oratorio and Cantata Ⅱ	
担当教員名	松原 友	
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2 <技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4 <関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6
授業概要・ポイント	声楽家にとって重要な活動分野となる、オーケストラ・独唱・合唱による大規模声楽作品であるオラトリオ・カンタータ（宗教音楽）について演奏を通して研究する。	
到達目標	ラテン語及び諸ヨーロッパ言語の発音、作品の内容、各時代の演奏様式を身につけることができる。	
授業計画	<p>古典派以降ロマン派、近現代の作曲家による諸作品を取り上げる。</p> <p>第1～5回 モーツァルト：モテット、ミサ、</p> <p>第6～10回 ハイドン：天地創造、四季、メンデルゾーン：エリア、パウロ</p> <p>第11～15回 ブラームス、フォーレ、ヴェルディ：レクイエム等</p>	
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度（参加状況） 50% 学期末に演奏による試験 50%	
失格条件	出席日数が2/3に満たない者	
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	選曲に関しては担当教員との相談によって決める。授業で曲を通して歌えるよう、音取り、発音、言葉の意味調べを各自準備して授業に臨む。予習、復習には最低1時間ずつかけること。	
課題へのフィード バック	授業で受けたアドバイスは必ずメモを取ること。受けたアドバイスを活かし、同じことを繰り返し言われないうち注意する。	
教科書	不使用	
著者名		
出版社		
参考書		
その他	特になし	
備考		
科目生への開講	あり（声楽専攻卒業生に限る）	

3-014

ナンバリング	VM408A01	期間	前期
授業科目名	オペラ演習 I		
英訳科目名	Opera Workshop I		
担当教員名	馬場 清孝、中村 ゆみ		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> -
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	舞台上での美しい姿勢、美しい動きを会得するためのトレーニングをはじめ、ダンスを基礎から訓練することによって、舞台に立つ為の柔軟な身体を作り上げる。 オペラ歌手として舞台に立つ為には歌唱力を身につけることは勿論のこと、役者としての演技力も兼ね備えなければならない。この授業では、歌唱と関連づけつつ、役者としての基礎的な演技力をつける為の講義・演習を行う。		
到達目標	美しい姿勢と観客の目を引き付けるような役柄にあった演技の習得ができる。		
授業計画	第1回 ガイダンス・舞台機構等の説明 第2回 ストレッチ・ダンス基礎①(身体の柔軟性を養う)； 歩行(舞台入退場・挨拶)① 第3回 ストレッチ・ダンス基礎①； 歩行② 第4回 ストレッチ・ダンス基礎①； 歩行③ 第5回 ストレッチ・ダンス基礎①； 歩行④ 第6回 ストレッチ・ダンス基礎①； セッコ・レチタターヴォ①(日常会話のように話すため) 第7回 ストレッチ・ダンス基礎①； セッコ・レチタターヴォ② 第8回 ストレッチ・ダンス基礎①； セッコ・レチタターヴォ③ 第9回 ストレッチ・ダンス基礎②； セッコ・レチタターヴォ④ 第10回 ストレッチ・ダンス基礎②； セッコ・レチタターヴォ⑤ 第11回 ストレッチ・ダンス基礎②； セッコ・レチタターヴォ⑥ 第12回 ストレッチ・ダンス基礎②； セッコ・レチタターヴォ⑦ 第13回 ストレッチ・ダンス基礎②； セッコ・レチタターヴォ⑧ 第14回 ストレッチ・ダンス基礎②； セッコ・レチタターヴォ⑨ 第15回 試演会		
評価方法 (合計100%)	授業の参加態度 30% 試演会の評価 70%		
失格条件	出席日数が2/3満たないもの。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	日常生活においても舞台を鑑賞したり、自分の身体に目を向け、美しく動くことを心がけておく。 (1週間にかける予習・復習の学修時間の目安：講義で行われた歩行、言語の朗読、作品解釈、セッコ・レチタターヴォの練習 4時間)		
課題へのフィード バック	実技、実習の取り組みに対して個別にコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	特になし		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	VM408A02	期間	後期
授業科目名	オペラ演習Ⅱ		
英訳科目名	Opera Workshop Ⅱ		
担当教員名	馬場 清孝、出口 武、萬田 一樹		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	総合芸術としてのオペラにおける歌唱法と演劇的な側面からの演技法を学ぶにあたり、声楽と演劇の密接な関係をまず理解する。オペラは歌唱のみならず演技力をも駆使して舞台上の人物を演じ表現するのだが、役柄を理解することから始まり、音楽と演劇を融合させ、いかに的確に表現するか、実習を通して習得することを目指す。		
到達目標	オペラ演習Ⅱでは重唱もレチタティーヴォも日本語で行うが、これは日常使用している言葉なので感情移入し易く演劇的な面からも導入が容易である。従って到達目標としては、モーツァルトのオペラ作品の登場人物の役柄を理解し端的に表現できるようになる。日本語の明瞭かつ確かな発音ができる。歌唱と演劇的表現力、そして美しく説得力のある身体表現ができる。		
授業計画	◎モーツァルトのオペラを教材にレチタティーヴォ・セッコにおける音楽的感性と演劇的感性を高める ◎オペラにおける歌唱法 ◎登場人物の役作りとその表現法 ◎舞台上でのリアリティのある演技と自然な美しい身体表現 第1回 レチタティーヴォ・セッコにおける表現力の習得 第2回 レチタティーヴォ・セッコにおける表現力の習得 第3回 レチタティーヴォ・セッコにおける表現力の習得 第4回 レチタティーヴォと音楽練習により重唱パートの習得 第5回 レチタティーヴォと音楽練習により重唱パートの習得 第6回 レチタティーヴォと音楽練習により重唱パートの習得 第7回 演技も加え演劇的歌唱とともに登場人物のキャラクターの把握 第8回 演技も加え演劇的歌唱とともに登場人物のキャラクターの把握 第9回 演技も加え演劇的歌唱とともに登場人物のキャラクターの把握 第10回 演技も加え演劇的歌唱とともに登場人物のキャラクターの把握 第11回 演技も加え演劇的歌唱とともに登場人物のキャラクターの把握 第12回 オペラ総合演習 第13回 オペラ総合演習 第14回 オペラ総合演習 第15回 試演会		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度	50%	
	授業での理解力と表現力	40%	
	試演会	10%	
失格条件	●出席日数が2/3に満たないもの ●試演会に出演しなかったもの		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	予習としては最初の授業までに楽譜を読み込んでおくこと。授業で指摘されたことについては必ず復習と反復練習をすることが重要。また演劇的により効果的な表現はないものかと常に考え、自らのアイデアを積極的に授業で披露することが大切。 (1週間における予習・復習の学修時間の目安 : 4時間 譜読み、正しい発音による朗読、作品内容の理解)		
課題へのフィードバック	実技、実習の取り組みに対して個別にコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	特になし		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	VM408B01	期間	前期
授業科目名	オペラ演習Ⅲ		
英訳科目名	Opera Workshop Ⅲ		
担当教員名	オペラ部門		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	オペラ演習ⅠⅡで習得した基礎的歌唱を踏まえた上で、各年ごとに作品を決め、舞台歌唱を深めていく。その総括として学内オペラ公演で発表をする。 オペラ演習Ⅰ、Ⅱを履修した者の中で、その適性を認められた者のみ履修することが出来る。		
到達目標	この授業単位を取得することにより、演奏技術の向上、表現力を養うことの他、共同でオペラ制作にかかわる大切さ・責任感・協調性をもつことによって総合芸術が創り上げられるということを学ぶ。		
授業計画	年ごとに学内オペラ公演の演目を決め、その公演に出演できるように目標をたて、作品を仕上げていく。その作品全体の分析・解釈、及び各自役柄への探求を行う。 第1回 ディクシオン稽古① 第2回 ディクシオン稽古② 第3回 音楽稽古① 第4回 音楽稽古② 第5回 音楽稽古③ 第6回 音楽稽古④ 第7回 音楽稽古⑤ 台詞稽古① 第8回 音楽稽古⑥ 台詞稽古② 第9回 音楽稽古⑦ 台詞稽古③ 第10回 音楽稽古⑧ 台詞稽古④ 第11回 ディクシオンまとめ 音楽稽古⑨ 第12回 ディクシオンまとめ 音楽稽古⑩ 第13～15回 指揮者による音楽稽古		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度(参加状況) 60% 学内オペラ公演での演唱 40%		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	履修者は学内オペラ公演の演目を発表された段階で、役柄・勉強の方法を掲示するのでそれにそって準備すること。 又、その都度演習で与えられた課題を次回まで繰り返し練習すること。 1週間にかかる予習・復習の学修時間の目安 : 予習2時間・復習2時間 (譜読み、歌詞調べ、言語の朗読、作品の背景・あらすじの理解等)		
課題へのフィードバック	毎時、次回授業までの課題をあたえ、その次の授業にて個別、または全体を通して解説していきます。		
教科書	指定された楽譜購入		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	特になし		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	VM408B02	期間	後期
授業科目名	オペラ演習Ⅳ		
英訳科目名	Opera Workshop IV		
担当教員名	オペラ部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	オペラ演習ⅠⅡで習得した基礎的歌唱を踏まえた上で、各年ごとに作品を決め、舞台歌唱を深めていく。まともとして試演会でそれを発表する。 《オペラ演習Ⅲ、Ⅳ》は、オペラ演習Ⅰ、Ⅱを履修した者の中で、その適性を認められた者のみ履修することが出来る。		
到達目標	この授業単位を取得することにより、共同でオペラ制作にかかわる大切さ・責任感・技術的向上が出来る。		
授業計画	年ごとに演目を決め、その試演会を目標に作品を仕上げていく段階で、その作品全体の把握、及び各自役柄への探求 第1回 ディクシオン稽古 立ち稽古① 第2回 ディクシオン稽古 立ち稽古② 第3回 音楽稽古① 立ち稽古① 第4回 音楽稽古② 立ち稽古② 第5回 音楽稽古③ 立ち稽古③ 第6回 立ち稽古① 第7回 立ち稽古② 台詞稽古① 第8回 立ち稽古③ 台詞稽古② 第9回 立ち稽古④ 台詞稽古③ 第10回 音楽稽古④ 立ち稽古④ 第11回 総稽古 第12回 HP 第13回 オケ合わせ 第14回 GP 第15回 本番		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度(参加状況) 60% 試演会の演唱 40%		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	履修者にはオペラ公演演目の曲を発表する段階で、役柄・勉強の方法を掲示するのでそれにそって準備すること。 又、その都度演習で与えられた課題を次回まで繰り返し練習すること。 (1週間における予習・復習の学修時間の目安 : 4時間 譜読み、正しい発音による朗読、歌詞の意味・作品の内容の理解)		
課題へのフィード バック	指揮者、演出家、声楽教員からあらゆる角度から指導がある授業なので、録音や録画で記録することを勧めている。また前回の稽古で提示した改善点は繰り返し練習していくことでクリアしていくようにしている。		
教科書	指定された楽譜購入		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	特になし		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	集中
授業科目名	オペラ舞台実習		
英訳科目名	Opera Production		
担当教員名	泉 貴子、岡坊 久美子		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー-2	<技能>
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	オペラ演習Ⅲを修了し、かつオペラ演習Ⅳを履修している者のみ履修することができる。 オペラⅠⅡⅢで習得した基礎的演唱を踏まえた上で、指揮者、演出家の指導の下、舞台演唱を深めていく。 まとめとして試演会でそれを発表する。		
到達目標	この授業単位を取得することにより、共同でオペラ制作にかかわる大切さ・責任感・技術的向上が出来る。		
授業計画	<p>年ごとに演目を決め、その試演会を目標に作品を仕上げていく段階で、その作品全体の把握、及び各自役柄への探求。</p> <p>下記内容を集中で開講していく。</p> <p>第1回 ディクシオン稽古① 第2回 ディクシオン稽古② 第3回 音楽稽古① 第4回 音楽稽古② 第5回 音楽稽古③ 第6回 音楽稽古④ 第7回 音楽稽古⑤ 台詞稽古① 第8回 音楽稽古⑥ 台詞稽古② 第9回 音楽稽古⑦ 台詞稽古③ 第10回 音楽稽古⑧ 台詞稽古④ 第11回 ディクシオンまとめ 音楽稽古⑨ 第12回 ディクシオンまとめ 音楽稽古⑩ 第13～15回 指揮者による音楽稽古 第16回 ディクシオン稽古 立ち稽古 第17回 ディクシオン稽古 立ち稽古 第18回 音楽稽古 立ち稽古 第19回 音楽稽古 立ち稽古 第20回 音楽稽古 立ち稽古 第21回 立ち稽古 第22回 立ち稽古 台詞稽古 第23回 立ち稽古 台詞稽古 第24回 立ち稽古 台詞稽古 第25回 音楽稽古 立ち稽古 第26回 総稽古 第27回 HP 第28回 オケ合わせ 第29回 GP 第30回 本番</p>		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度（参加状況） 60% 試演会の演唱 40%		
失格条件	出席が2/3に満たない者。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	履修者には試演会の曲を発表する段階で、役柄・勉強の方法を掲示するのでそれにそって準備すること。 又、その都度演習で与えられた課題を次回まで繰り返し練習すること。		
課題へのフィード バック	繰り返し繰り返し稽古場でしていることを録音や映像で録画し、復習として見ることを勧めている。また次回稽古では前回の問題点を中心に授業を進めていく。		
教科書	指定された楽譜購入		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	特になし		
備考			
科目生への開講	なし		

3-019

ナンバリング	VM408A03	期間	前期
授業科目名	ミュージカル演習 I		
英訳科目名	Musical Workshop I		
担当教員名	村井 幹子		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ○
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	ミュージカルの三要素である “歌” “踊り” “芝居” を学ぶことにより ミュージカル表現の世界に触れる。 前期はミュージカルナンバー 「サウンド・オブ・ミュージック」 「マイ・フェア・レディ」 「ウエスト・サイド・ストーリー」 「キャッツ」 「キャバレー」 等のソロ曲 アンサンブル曲の中より、各自の声やキャラクターに合わせて選曲し 歌唱法 表現法の研究を行う。 併せて DVD鑑賞をし、ミュージカルの歴史にも触れる。		
到達目標	ミュージカルの世界観を高め 歌唱の表現力を身につけることができる。		
授業計画	第1回 ミュージカルの歴史 第2～5回 ミュージカルナンバー歌唱研究 (ソロ曲 アンサンブル曲の研究) 第6～8回 ダンスナンバー曲の歌唱研究 第9回 ソロ曲(1曲) ダンス曲(1曲)決め 第10～14回 ソロ曲とダンス曲の音楽表現研究 第15回 ソロ曲とダンス曲の仕上げと発表		
評価方法 (合計100%)	平常点 (授業態度・積極性) 50% 達成度 (各自の個性と能力) 50%		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	ソロ曲 アンサンブル曲 ダンス曲を決定するにあたり、多数のナンバー曲に触れてもらいたいため 予習として配布する以外に 歌ってみたい曲 気になる曲を出し合ったりして ミュージカルの世界をひろげて欲しい。 譜読みや曲の構成の把握のための予習を2時間、授業後は歌唱表現における2時間の復習が望ましい。		
課題へのフィード バック	発表時 個別又は全体にコメントします。		
教科書	随時 授業時に配布。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	特になし		
備考			
科目生への開講	なし		

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

3-020

ナンバリング	VM408A04	期間	後期
授業科目名	ミュージカル演習Ⅱ		
英訳科目名	Musical Workshop Ⅱ		
担当教員名	村井 幹子、中村 ゆみ		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ○
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	ミュージカル演習Ⅰを発展させ ダンスナンバー曲を中心に “踊り” を加え よりミュージカル的な表現方法を学び親しむ。		
到達目標	歌と踊りのコラボレーションを楽しみ、表現力を身につけることができる。 舞台上での美しい姿勢、所作、より自由な身体表現を目指すことができる。		
授業計画	第1～4回 ストレッチ ダンス曲①の振り付け (歌に動きをつけていく) 第5～6回 ストレッチ ダンス曲①の振り固め (歌唱と共にミュージカル的な表現を身につけていく) 第7～10回 ストレッチ ダンス曲②の振り付け 第11～12回 ストレッチ ダンス曲②の振り固め 第13～14回 ストレッチ ソロ曲 又はアンサンブル曲の簡単な振り付けとダンス曲①②の通し稽古 第15回 試演会		
評価方法 (合計100%)	平常点 (授業態度・積極性) 40% 達成度 (各自の個性と能力) 30% 試演会の成果 30%		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	ダンスの振り付けは 1曲につき4回に分けて振り付けする。その週に振りつけられた箇所は各自で(可能ならグループで) ダンスの振りと歌の関連性を考えながら2時間の復習、 次に繋がるよう予習として歌唱の練習を2時間が望ましい。 積極性のある姿勢を期待する。 復習＝歌の表現と身体表現が自然な形で結び付けられるよう自分のものにする。(2時間) 予習＝一回の新しい振り付けのために歌詞をよく理解し、メロディをきっちり把握しておく。(2時間)		
課題へのフィード バック	試演会で 個別又は全体にコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	動きやすい服装で受講のこと。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	VM407A09	期間	前期
授業科目名	ドイツ歌曲研究 I / ドイツ歌曲研究		
英訳科目名	Study of German Song I / Study of German Song		
担当教員名	岡坊 久美子		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> -
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	一般的に述べられるドイツ歌曲は、古典派時代に先駆的な作品が生まれ、ロマン派時代に発展したものである。ドイツ歌曲（ドイツリート）は、美しい詩にメロディを誘発された作曲家が、音楽作品としてまとめたものである。ゲーテ、シラー、メーリケ、アイヒェンドルフ、ハイネらの詩人が、作品を世に送り出し、作曲家がさまざまな表現方法を模索してそれらを芸術作品として創作したものがドイツ歌曲である。よって作曲家が感銘を受けたテキスト理解の為に、まずはドイツ語の発音に重点を置いて学習せねばならない。詩の朗読を積み重ねて、リズム感のある美しい朗読が可能となった時、はじめてドイツ歌曲への造詣を深める事が出来る。本講義では、この点を重視して授業を実施する。		
到達目標	音楽史としての時代的特徴を述べることができる。著名な歌曲の様式や特徴を述べるができる。英語と異なる発音記号を読むことができる。ドイツ語の正確な発音ができる。詩の内容を理解した表現が、歌唱によって行なえる。		
授業計画	第1回 ドイツ語の発音、発音記号の読み方、ドイツ語の基礎 第2回 ドイツ語の発音、発音記号の読み方、ドイツ語の基礎 第3回 ドイツ語の発音、発音記号の読み方、ドイツ語の基礎 第4回 ドイツ語の発音、ドイツ語の基礎、歌詞の朗読と歌唱 第5回 ドイツ語の発音、ドイツ語の基礎、歌詞の朗読と歌唱 第6回 ドイツ語の発音、ドイツ語の基礎、歌詞の朗読と歌唱 第7回 ドイツ語の発音、ドイツ語の基礎、歌詞の朗読と歌唱 第8回 ドイツ語の発音、ドイツ語の基礎、歌詞の朗読と歌唱 第9回 ドイツ語の発音、ドイツ語の基礎、歌詞の朗読と歌唱 第10回 ドイツ語の発音、歌詞の朗読と歌唱、歌曲の解釈・分析 第11回 ドイツ語の発音、歌詞の朗読と歌唱、歌曲の解釈・分析 第12回 ドイツ語の発音、歌詞の朗読と歌唱、歌曲の解釈・分析 第13回 ドイツ語の発音、歌詞の朗読と歌唱、歌曲の解釈・分析 第14回 ドイツ語の発音、歌詞の朗読と歌唱、歌曲の解釈・分析 第15回 研究発表 ・内容理解の確認		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 40% 授業での理解力と表現力 40% 演奏発表 10% レポート 10%		
失格条件	出席日数が2/3に満たないもの		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	ドイツ語の辞書は常に携帯しておくこと。 配布された歌曲の譜読みは必要不可欠。 ドイツ語を履修することが好ましい。 あるいはテレビ・ラジオ等のドイツ語を学習することは効果を高める。 ドイツ語朗読・譜読みの予習に2時間、 ドイツ語の正確な発音の定着と音楽的歌唱の復習に2時間必要。		
課題へのフィードバック	・実習・実技後、全体に向けてコメントします。 ・必要がある場合には、個別に行います。		
教科書	「ドイツ歌曲集 I」 原調版		
著者名			
出版社	全音楽譜出版社		
参考書	①歌唱のための「ドイツ語発音法」高折 續 著 音楽之友社 ②「Texte deutscher Lieder」3091 D.Fischer-Dieskau著 Deutscher Taschenbuch Verlag 出版		
その他	特になし		
備考			
科目生への開講	あり（音楽専攻卒業生に限る）		

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	ドイツ歌曲研究Ⅱ		
英訳科目名	Study of German Song Ⅱ		
担当教員名	岡坊 久美子		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>現在演奏会等で取り上げられるドイツ歌曲は、主に18世紀から20世紀の作品が多い。本年度のドイツ歌曲研究Ⅱでは、Ⅰに引き続き、18世紀後半から20世紀（シューマン・ブラームス・ヴォルフ・シュトラウス等）の作品を教材として解釈・分析を行なう。またドイツ歌曲の最大の特徴は、優れた詩に作曲されているという点から、詩への理解は必須不可欠である。Ⅰのドイツ歌曲研究からさらに一步踏み込み、詩に寄り添ったドイツリート歌唱法を目標に、ドイツ語に慣れながら更に美しいドイツ語ディクッションへの造詣を深める。その観点から毎回詩の朗読を実施し、内容理解と美しい発音から芸術的歌唱を誘う事が、この講義の最終目標とする。</p>		
到達目標	<p>音楽史としての時代的特徴を述べることができる。シューマン、ブラームス、ヴォルフ、R.シュトラウス等々の歌曲の様式、特徴を述べるができる。英語と異なる発音記号を読むことができる。ドイツ語の正確な発音ができる。詩の内容を理解した表現が、歌唱によって行なえる。</p>		
授業計画	<p>第1回 ドイツ語の発音、歌詞の朗読と歌唱、歌曲の解釈・分析 第2回 ドイツ語の発音、歌詞の朗読と歌唱、歌曲の解釈・分析 第3回 ドイツ語の発音、歌詞の朗読と歌唱、歌曲の解釈・分析 第4回 ドイツ語の発音、歌詞の朗読と歌唱、歌曲の解釈・分析 第5回 ドイツ語の発音、歌詞の朗読と歌唱、歌曲の解釈・分析 第6回 ドイツ語の発音、歌詞の朗読と歌唱、歌曲の解釈・分析 第7回 ドイツ語の発音、歌詞の朗読と歌唱、歌曲の解釈・分析 第8回 ドイツ語の発音、歌詞の朗読と歌唱、歌曲の解釈・分析 第9回 ドイツ語の発音、歌詞の朗読と歌唱、歌曲の解釈・分析 第10回 ドイツ語の発音、歌詞の朗読と歌唱、歌曲の解釈・分析 第11回 ドイツ語の発音、歌詞の朗読と歌唱、歌曲の解釈・分析 第12回 ドイツ語の発音、歌詞の朗読と歌唱、歌曲の解釈・分析 第13回 ドイツ語の発音、歌詞の朗読と歌唱、歌曲の解釈・分析 第14回 ドイツ語の発音、歌詞の朗読と歌唱、歌曲の解釈・分析 第15回 研究発表・内容理解の確認</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>授業への参加態度 40% 授業での理解力と表現力 40% 演奏発表 10% レポート 10%</p>		
失格条件	出席日数が2/3に満たないもの		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>ドイツ語の辞書は常に携帯しておくこと。 配布された歌曲の譜読みは必要不可欠。 ドイツ語を履修することが好ましい。 あるいはテレビ・ラジオ等のドイツ語を学習することは効果を高める。 ドイツ語朗読・譜読みの予習に2時間、 ドイツ語の正確な発音の定着と音楽的歌唱の復習に2時間必要。</p>		
課題へのフィードバック	<p>・実習・実技後、全体に向けてコメントします。 ・必要がある場合には、個別に行います。</p>		
教科書	「ドイツ歌曲集Ⅱ」 原調版		
著者名			
出版社	全音楽譜出版社		
参考書	<p>①歌唱のための「ドイツ語発音法」 高折 續 著 音楽之友 社 ②「Texte deutscher Lieder」 3091 D.Fischer-Dieskau著 Deutscher Taschenbuch Verlag 出版</p>		
その他	特になし		
備考			
科目生への開講	あり（音楽専攻卒業生に限る）		

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	フランス歌曲研究Ⅱ		
英訳科目名	Study of French Song Ⅱ		
担当教員名	福田 清美		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<ul style="list-style-type: none"> ・フランス語の発音に慣れる。 ・イタリア語の普通の発声の響きを基礎にして、フランス語用に加工・複合し、鼻母音までを工夫する。 ・フランス語の発音で演奏する。 ・フランス語のイントネーション、アクセントを生かした演奏を工夫する。 ・フランス語の言い回しを理解する。 ・詩、詩人、フランス語を理解し、詩人と作曲者の狙いを探る。 		
到達目標	授業で取り上げたフランス語曲を暗譜で演奏できる。		
授業計画	第1回 フランス語の特に複合母音の説明と演習 第2回 デュバルク作曲・「悲しき歌」のリズム読み 第3回 デュバルク作曲・「悲しき歌」の演奏 第4回 フランス語独特の子音の説明と演習 第5回 グーノー作曲・「セレナーデ」のリズム読み 第6回 グーノー作曲・「セレナーデ」の演奏 第7回 フランス語の現代・過去の鼻母音の説明と演習 第8回 ラヴェル作曲・「聖女」のリズム読み 第9回 ラヴェル作曲・「聖女」の演奏 第10回 フランス語の単語・文のアクセントの説明と演習 第11回 プーランク作曲・「モンバルナス」のリズム読み 第12回 プーランク作曲・「モンバルナス」の演奏 第13回 フランス語の感嘆文・疑問文のイントネーションの説明と演習 第14～15回 「悲しき歌」「セレナーデ」「聖女」「モンバルナス」の演奏		
評価方法 (合計100%)	1. 毎回授業の後に質問・感想と受講者の自己採点させる。 2. 授業中の発音・発声と演奏表現力の到達度を毎回チェックする。 3. 楽譜への書き込みやノートのとり方を確認させる。 1.(20%) 2.(60%) 3.(20%) を目安に総合的に評価する。		
失格条件	評価方法に示した総合的に 60% に満たない場合。(事情説明は受け付けます)		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	始めの内は、フランス語の発音をあまり神経質にならないようにしますが、 1回目の授業から予習の内容を必ず明確に説明しますので、 その成果を次の授業で確認し、自己採点につなげてください。		
課題へのフィード バック	・実技、実習の取り組みに対して個別にコメントします。		
教科書	シラバスに載せた曲目はもちろん、受講者の進度を考え合わせながら選曲し、その度ごとにそれぞれの演奏しやすい調性を考慮の上、コピーした楽譜を配布します。(必要に応じて訳詩や解説もコピー)		
著者名			
出版社			
参考書	「フランス歌曲の演奏と解釈」 ピエール・ベルナック著 (林田きみ子訳) 音楽之友社 (絶版のため授業でコピーを配付予定)		
その他	オペラやシャンソンも希望があれば考慮します この授業専用のファイルを用意すること		
備考			
科目生への開講	あり (声楽専攻卒業生に限る)		

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	童謡・唱歌研究Ⅱ		
英訳科目名	Study of Nursery Song Ⅱ		
担当教員名	高橋 侑子		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>前期で学んだ、唱歌・童謡を下に現代風にアレンジした楽曲も加え、老人ホーム、保育園でコンサートを行います。</p> <p>毎年、このコンサートを楽しみにしている老人や、歌唱に参加したい園児達と、楽しい時間、空間を共有することで、この分野の本質を理解して欲しいとおもいます。</p> <p>このコンサートを体験した多くの学生から、「来年も参加したい」という声が多く聞かれます。</p> <p>コンサート後の授業は、童謡作家、金子みすずの詩、生涯を振り返り、金子みすず詩、中田喜直作曲の歌曲集「ほしとたんぼぼ」から、歌唱します。</p> <p>時間的に余裕があれば、山田耕筰童謡100選も歌唱します。</p>		
到達目標	老人ホーム、保育園でのコンサートを学生主導で計画し、演奏することにより、唱歌・童謡という分野の本質を理解できる。		
授業計画	<p>第1～5回 夏休み前から（できれば）計画してきた曲目について、相談、役割を決めて、練習を始めていく。 （その間、教師は、老人ホームや、保育園の事務的な相談、段取りをすすめている）</p> <p>第5～10回 このコンサートが、老人ホーム、保育園（曲目はそれぞれ変えている）で、楽しんでもらえるか、ディスカッション、到達度の確認をしながら、動きをつけて、仕上げていく。</p> <p>第11回 本番（老人ホーム）</p> <p>第12回 本番（保育園）</p> <p>第13～15回 金子みすず童謡、生涯を学習し、金子みすず詩、中田喜直作曲の歌曲集「ほしとたんぼぼ」を演奏してみる。</p>		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 50% 課題 50%		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者 理由なく（病欠など）試験を受けなかった場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	出された課題、曲などは、次回、必ず目を通し、内容を把握しておいてください。 あらかじめ、渡された譜面の読み、内容の把握に2時間の予習、授業後は、表現工夫に2時間の復習が望ましいと思います。		
課題へのフィード バック	履修人数により、コンサートが可能になった際、練習過程で、全体、また個別にアドバイスします。 コンサートができなかった際は授業中学習した歌曲を各人個別に演奏。それに対するアドバイスをします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	履修者数により授業内容の変更あり		
備考			
科目生への開講	あり（声楽専攻卒業生に限る）		

ナンバリング	VM408A07	期間	前期
授業科目名	イタリア語会話A		
英訳科目名	Italian Conversation A		
担当教員名	Edmondo Filippini		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	イタリア語を基礎から学ぶ。授業は基本的にビデオ、CD等で話題を紹介し、教師の説明、練習、ロールプレイ等によって基礎文法、会話を習得する		
到達目標	レベルA1（ヨーロッパ言語共通参照枠）のイタリア語を使いこなすことができる（2019年度 前期～後期）		
授業計画	第1回 挨拶、紹介（丁寧語） 第2回 言葉のスペルの聞き方、答え方、挨拶（親しい）、紹介（親しい） 第3回 出身、数字（1－20）、電話番号などの交換 第4回 人に会う時によく使う表現（体調等）、他人の紹介（丁寧語） 第5回 他人の紹介（親しい）、どんな言葉が出来るかの説明 第6回 複数形、どこに勤めているのかの説明 第7回 数字（20－100）、広告の書き方、まとめのビデオ 第8回 店での注文（喫茶店）、様々な表現 第9回 店での注文（レストラン）、好みの言い方、様々な表現 第10回 相手をお願いをする表現、まとめのビデオ 第11回 休暇に関する説明（趣味など） 第12回 頻度、一週間の行動に関する説明 第13回 好みに関する言い方、イタリア語を勉強している理由の説明 第14回 時間の説明、まとめのビデオ 第15回 まとめ、補習		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度（参加状況） 50% 授業での練習、ロールプレイを積極的にすること 50%		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者 授業中に与えられた練習、ロールプレイをしないこと		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	予習は不要。授業で勉強した内容の復習はいつも必要。基礎からスタートする。授業への積極的な参加は必要。		
課題へのフィード バック	授業中や家での課題として、頻繁に文書の作成を行う。授業中はロールプレーでフィードバックも行う。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	特になし		
備考			
科目生への開講	あり（声楽専攻卒業生に限る）		

ナンバリング	VM408A08	期間	後期
授業科目名	イタリア語会話B		
英訳科目名	Italian Conversation B		
担当教員名	Edmondo Filippini		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	イタリア語を基礎から学ぶ。授業は基本的にビデオ、CD等で話題を紹介し、教師の説明、練習、ロールプレイ等によって基礎文法、会話を習得する		
到達目標	レベルA 1（ヨーロッパ言語共通参照枠）のイタリア語を使いこなすことができる（2019年度 前期～後期）		
授業計画	第1回 前期の復習、ホテルに関する用語 第2回 ホテルでの予約、期間の説明、様々な表現 第3回 ホテルやホームステイ先で使える様々なお願いの表現 第4回 月や序数の言い方、まとめのビデオ 第5回 町の説明、建物の種類や軒数に関する言い方 第6回 バスに関する表現や案内 第7回 道の案内、位置の説明 第8回 時間に関する聞き方 第9回 休暇に関するボキャブラリー 第10回 過去に何をしたかの聞き方と答え方 第11回 休暇やその他の経験に関する会話 第12回 イタリアで留学滞在に関するシミュレーション 第13回 気候の説明、友達とイタリアでの旅の計画 第14回 まとめビデオ 第15回 まとめ、補習		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度（参加状況） 50% 授業での練習、ロールプレイを積極的にすること 50%		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者 授業中に与えられた練習をしないこと		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	予習は不要。授業で勉強した内容の復習はいつも必要。基礎からスタートする。授業への積極的な参加は必要。		
課題へのフィード バック	授業中や家での課題として、頻繁に文書の作成を行う。授業中はロールプレーでフィードバックも行う。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	特になし		
備考			
科目生への開講	あり（声楽専攻卒業生に限る）		

ナンバリング	期間	前期
授業科目名	声楽特別研究 I	
英訳科目名	Advanced Study in Voice I	
担当教員名	声楽部門	
ディプロマ・ポリシー1	ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	専攻実技において成績優秀なるものが、演奏家に必要とされる高度なテクニックを習得し更に研究を深め、幅広く個性豊かな表現力を培う。担当教員と相談の上、各自が研究テーマを決め、楽曲分析、演奏解釈をする。特別研究受講資格を得た者が受講できる。	
到達目標	基礎的な学習と幅広いレパートリーを学ぶこと、また上記に述べたポイント等をふまえながら演奏できる。	
授業計画	<p>受講者の実力、希望の研究テーマを考慮にいれつつ、各担当指導者の授業計画によって課題を与えていくものとする。</p> <p>第1回 研究テーマ決め 第2回 自由曲① 音楽練習 第3回 自由曲① ディクッション中心 第4回 自由曲① 作品解釈 第5回 自由曲① まとめ 第6回 自由曲② 音楽練習 第7回 自由曲② ディクッション中心 第8回 自由曲② 作品解釈 第9回 自由曲② まとめ 第10回 自由曲③④ 音楽練習 第11回 自由曲③④ ディクッション中心 第12回 自由曲③④ 作品解釈 第13回 自由曲③④ まとめ 第14回 夏休み課題 第15回 夏休み課題</p> <p>*個人の進度により課題や曲数は変わることがある。</p>	
評価方法 (合計100%)	出席状況及び受講態度・平常点等々で評価 100% (声楽特別研究 I において実技試験は行わない)	
失格条件	出席日数が2/3に満たないもの。	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	学ぶ楽曲が多くなるので、訳詞を根気よく調べ、内容を深く理解することが大切。そのためにはその原語の習得にも時間をかけることが望ましい。 1週間の予習・復習に必要とされる学修時間の目安：9時間。	
課題へのフィードバック	毎回のレッスンで取り掛かっている作品における個々の演奏技術や表現の面での課題を取り上げ、次回以降のレッスンの中で課題への取り組み、解決にむけて解説を交えながら進めていく。	
教科書	受講者の能力に応じ、指導者が教材を選択・指定して与える。	
著者名		
出版社		
参考書		
その他	特になし	
備考		
科目生への開講	なし	

ナンバリング	期間	後期
授業科目名	声楽特別研究Ⅱ	
英訳科目名	Advanced Study in Voice Ⅱ	
担当教員名	声楽部門	
ディプロマ・ポリシー1	ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	専攻実技において成績優秀なるものが、演奏家に必要とされる高度なテクニックを習得し更に研究を深め、幅広く個性豊かな表現力を培う。担当教員と相談の上、各自が研究テーマを決め、楽曲分析、演奏解釈をする。	
到達目標	基礎的な学習と幅広いレパートリーを学ぶこと、また上記に述べたポイント等をふまえながら演奏できる。	
授業計画	<p>受講者の実力、希望の研究テーマを考慮にいれつつ、各担当指導者の授業計画によって課題を与えていくものとする。</p> <p>第1回 研究テーマ決め 第2回 自由曲① 音楽練習 第3回 自由曲① ディクッション中心 第4回 自由曲① 作品解釈 第5回 自由曲① まとめ 第6回 自由曲② 音楽練習 第7回 自由曲② ディクッション中心 第8回 自由曲② 作品解釈 第9回 自由曲② まとめ 第10回 自由曲③④ 音楽練習 第11回 自由曲③④ ディクッション中心 第12回 自由曲③④ まとめ 第13回 試験曲①②③ まとめ 第14回 試験曲①②③ まとめ 第15回 試験</p> <p>*個人の進度により課題や曲数は変わることがある。</p>	
評価方法 (合計100%)	実技試験 100%	
失格条件	出席日数が2/3に満たないもの及び試験を受けなかったもの。	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>学ぶ楽曲が多くなるので、訳詞を根気よく調べ、内容を深く理解することが大切。そのためにはその原語の習得にも時間をかけることが望ましい。</p> <p>有意義な実技レッスンをを行うために、日頃からの十分な練習が必要。</p> <p>1週間にかける予習・復習の学修時間の目安：9時間。</p>	
課題へのフィードバック	特研履修者は課題も試験も多いため、浅く広い学習にならないよう声のことも考慮して、毎回レッスンで適度な課題を与え、それを次のレッスンでこなしていけるよう個人個人にあった指導を展開する。	
教科書	受講者の能力に応じ、指導者が教材を選択・指定して与える。	
著者名		
出版社		
参考書		
その他	試験の結果、特に優秀な者はⅢに進むことができる。特別研究試験課題：自由曲3曲以上（12分前後のプログラム）内規参照	
備考		
科目生への開講	なし	

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	声楽特別研究Ⅲ		
英訳科目名	Advanced Study in Voice Ⅲ		
担当教員名	声楽部門		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	専攻実技において成績優秀なるものが、演奏家に必要とされる高度なテクニックを習得し更に研究を深め、幅広く個性豊かな表現力を培う。担当教員と相談の上、各自が研究テーマを決め、楽曲分析、演奏解釈をする。声楽特別研究ⅠⅡを履修して、試験にて特別研究履修の資格を得た者が受講できる。		
到達目標	基礎的な学習と幅広いレパートリーを学ぶこと、また上記に述べたポイント等をふまえながら演奏できる。		
授業計画	<p>受講者の実力、希望の研究テーマを考慮にいれつつ、各担当指導者の授業計画によって課題を与えていくものとする。</p> <p>第1回 研究テーマ決め 第2回 自由曲① 音楽練習 第3回 自由曲① ディクッション中心 第4回 自由曲① 作品解釈 第5回 自由曲① まとめ 第6回 自由曲② 音楽練習 第7回 自由曲② ディクッション中心 第8回 自由曲② 作品解釈 第9回 自由曲② まとめ 第10回 自由曲③④ 音楽練習 第11回 自由曲③④ ディクッション中心 第12回 自由曲③④ 作品解釈 第13回 自由曲③④ まとめ 第14回 夏休み課題 第15回 夏休み課題</p> <p>*個人の進度により課題や曲数は変わることがある。</p>		
評価方法 (合計100%)	出席状況及び受講態度・平常点等々で評価 100% (声楽特別研究Ⅲでは実技試験は行わない)		
失格条件	出席日数が2/3に満たないもの。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	学ぶ楽曲が多くなるので、訳詞を根気よく調べ、内容を深く理解することが大切。そのためにはその原語の習得にも時間をかけることが望ましい。 1週間の予習・復習に必要とされる学修時間の目安：9時間		
課題へのフィードバック	毎時レッスンにおいて個々に必要とされる課題を提示し、次回以降のレッスンにおいてその課題についてクリアーできたか、クリアーしていくためにどういった練習・勉強が必要なのかを行っていく。		
教科書	受講者の能力に応じ、指導者が教材を選択・指定して与える。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	特になし		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	期間	後期
授業科目名	声楽特別研究Ⅳ	
英訳科目名	Advanced Study in Voice Ⅳ	
担当教員名	声楽部門	
ディプロマ・ポリシー1	ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	専攻実技において成績優秀なるものが、演奏家に必要とされる高度なテクニックを習得し更に研究を深め、幅広く個性豊かな表現力を培う。担当教員と相談の上、各自が研究テーマを決め、楽曲分析、演奏解釈をする。	
到達目標	基礎的な学習と幅広いレパートリーを学ぶこと、また上記に述べたポイント等をふまえながら演奏できる。	
授業計画	<p>受講者の実力、希望の研究テーマを考慮にいれつつ、各担当指導者の授業計画によって課題を与えていくものとする。</p> <p>第1回 研究テーマ決め 第2回 自由曲① 音楽練習 第3回 自由曲① ディクッション中心 第4回 自由曲① 作品解釈 第5回 自由曲① まとめ 第6回 自由曲② 音楽練習 第7回 自由曲② ディクッション中心 第8回 自由曲② 作品解釈 第9回 自由曲② まとめ 第10回 自由曲③④ 音楽練習 第11回 自由曲③④ ディクッション中心 第12回 自由曲③④ まとめ 第13回 試験曲①②③ まとめ 第14回 試験曲①②③ まとめ 第15回 試験</p> <p>*個人の進度により課題や曲数は変わることがある。</p>	
評価方法 (合計100%)	実技試験 100%	
失格条件	出席日数が2/3に満たないもの及び試験を受けなかったもの。	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>学ぶ楽曲が多くなるので、訳詞を根気よく調べ、内容を深く理解することが大切。そのためにはその原語の習得にも時間をかけることが望ましい。</p> <p>有意義な実技レッスンを行うために、日頃からの十分な練習が必要。 1週間にかける予習・復習の学修時間の目安：9時間。</p>	
課題へのフィードバック	特研履修者は課題も試験も多いため、浅く広い学習にならないよう声のことも考慮して、毎回レッスンで適度な課題を与え、それを次のレッスンでこなしていけるよう個人個人にあった指導を展開する。	
教科書	受講者の能力に応じ、指導者が教材を選択・指定して与える。	
著者名		
出版社		
参考書		
その他	特別研究試験課題は内規参照	
備考		
科目生への開講	なし	

3-031

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	専攻実技 I (ピアノ)		
英訳科目名	Applied Music (Piano) I		
担当教員名	ピアノ部門		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> -	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	バロックから近現代に至る楽曲を幅広く学習する。 特に、基礎のテクニックを見直し、基本的な曲の習得・勉強方法の体得を心がける。		
到達目標	上記に述べたポイント等を踏まえながら演奏できる。		
授業計画	第1回 課題曲の決定 第2回 課題曲の実技指導 1 譜読みの確認 第3回 課題曲の実技指導 1 バランス 第4回 課題曲の実技指導 1 表情・表現 第5回 課題曲の実技指導 1 より深い音楽表現を求めて 第6回 課題曲の仕上げと、次の課題曲決め 第7回 課題曲の実技指導 2 譜読みの確認 第8回 課題曲の実技指導 2 バランス 第9回 課題曲の実技指導 2 表情・表現 第10回 試験曲の決定 第11回 試験曲の実技指導 譜読みの確認 第12回 試験曲の実技指導 バランス 第13回 試験曲の実技指導 表情・表現 第14回 試験曲の実技指導 より深い音楽表現を求めて 第15回 試験曲の実技指導・練習課題の決定 *進度により曲数が変わることがある		
評価方法 (合計100%)	実技試験 100%		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者、及び試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	有意義な実技レッスンを行うために、日頃からの十分な練習が必要です。		
課題へのフィード バック	課題へのフィードバックはレッスン中に随時 行っています。		
教科書	楽譜を使用するが、必要な時はその都度指示する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	専攻実技Ⅱ (ピアノ)		
英訳科目名	Applied Music (Piano) Ⅱ		
担当教員名	ピアノ部門		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	バロックから近現代に至る楽曲を幅広く学習する。 特に、基礎のテクニックを見直し、基本的な曲の習得・勉強方法の体得を心がける。		
到達目標	上記に述べたポイント等を踏まえながら演奏できる。		
授業計画	第1回 課題曲の決定 第2回 課題曲の実技指導 1 譜読みの確認 第3回 課題曲の実技指導 1 バランス 第4回 課題曲の実技指導 1 表情・表現 第5回 課題曲の実技指導 1 より深い音楽表現を求めて 第6回 課題曲の仕上げと、次の課題曲決め 第7回 課題曲の実技指導 2 譜読みの確認 第8回 課題曲の実技指導 2 バランス 第9回 課題曲の実技指導 2 表情・表現 第10回 試験曲の決定 第11回 試験曲の実技指導 譜読みの確認 第12回 試験曲の実技指導 バランス 第13回 試験曲の実技指導 表情・表現 第14回 試験曲の実技指導 より深い音楽表現を求めて 第15回 試験曲の実技指導・練習課題の決定 *進度により曲数が変わることがある		
評価方法 (合計100%)	実技試験 100%		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者、及び試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	有意義な実技レッスンを行うために、日頃からの十分な練習が必要です。		
課題へのフィード バック	課題へのフィードバックはレッスン中に随時 行っています。		
教科書	楽譜を使用するが、必要な時はその都度指示する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	専攻実技Ⅲ (ピアノ)		
英訳科目名	Applied Music (Piano) Ⅲ		
担当教員名	ピアノ部門		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> -	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	バロックから近現代に至る楽曲を幅広く学習する。 研究する楽曲の幅を、出来るだけ広げる様に計画し実行する。		
到達目標	上記に述べたポイント等を踏まえながら演奏できる。		
授業計画	第1回 課題曲の決定 第2回 課題曲の実技指導 1 譜読みの確認 第3回 課題曲の実技指導 1 バランス 第4回 課題曲の実技指導 1 表情・表現 第5回 課題曲の実技指導 1 より深い音楽表現を求めて 第6回 課題曲の仕上げと、次の課題曲決め 第7回 課題曲の実技指導 2 譜読みの確認 第8回 課題曲の実技指導 2 バランス 第9回 課題曲の実技指導 2 表情・表現 第10回 試験曲の決定 第11回 試験曲の実技指導 譜読みの確認 第12回 試験曲の実技指導 バランス 第13回 試験曲の実技指導 表情・表現 第14回 試験曲の実技指導 より深い音楽表現を求めて 第15回 試験曲の実技指導・練習課題の決定 *進度により曲数が変わることがある		
評価方法 (合計100%)	実技試験 100%		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者、及び試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	有意義な実技レッスンを行うために、日頃からの十分な練習が必要です。		
課題へのフィード バック	課題へのフィードバックはレッスン中に随時 行っています。		
教科書	楽譜を使用するが、必要な時はその都度指示する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	専攻実技Ⅳ (ピアノ)		
英訳科目名	Applied Music (Piano) Ⅳ		
担当教員名	ピアノ部門		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	バロックから近現代に至る楽曲を幅広く学習する。 研究する楽曲の幅を、出来るだけ広げる様に計画し実行する。		
到達目標	上記に述べたポイント等を踏まえながら演奏できる。		
授業計画	第1回 課題曲の決定 第2回 課題曲の実技指導 1 譜読みの確認 第3回 課題曲の実技指導 1 バランス 第4回 課題曲の実技指導 1 表情・表現 第5回 課題曲の実技指導 1 より深い音楽表現を求めて 第6回 課題曲の仕上げと、次の課題曲決め 第7回 課題曲の実技指導 2 譜読みの確認 第8回 課題曲の実技指導 2 バランス 第9回 課題曲の実技指導 2 表情・表現 第10回 試験曲の決定 第11回 試験曲の実技指導 譜読みの確認 第12回 試験曲の実技指導 バランス 第13回 試験曲の実技指導 表情・表現 第14回 試験曲の実技指導 より深い音楽表現を求めて 第15回 試験曲の実技指導・練習課題の決定 *進度により曲数が変わることがある		
評価方法 (合計100%)	実技試験 100%		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者、及び試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	有意義な実技レッスンを行うために、日頃からの十分な練習が必要です。		
課題へのフィード バック	課題へのフィードバックはレッスン中に随時 行っています。		
教科書	楽譜を使用するが、必要な時はその都度指示する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	専攻実技Ⅴ (ピアノ)		
英訳科目名	Applied Music (Piano) Ⅴ		
担当教員名	ピアノ部門		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> -	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	研究する楽曲が偏らない様に考え、広い範囲に及ぶよう計画する。 また、自分の個性についても注意深く洞察し、レパートリー拡大を図る。		
到達目標	上記に述べたポイント等を踏まえながら演奏できる。		
授業計画	第1回 課題曲の決定 第2回 課題曲の実技指導 1 譜読みの確認 第3回 課題曲の実技指導 1 バランス 第4回 課題曲の実技指導 1 表情・表現 第5回 課題曲の実技指導 1 より深い音楽表現を求めて 第6回 課題曲の仕上げと、次の課題曲決め 第7回 課題曲の実技指導 2 譜読みの確認 第8回 課題曲の実技指導 2 バランス 第9回 課題曲の実技指導 2 表情・表現 第10回 試験曲の決定 第11回 試験曲の実技指導 譜読みの確認 第12回 試験曲の実技指導 バランス 第13回 試験曲の実技指導 表情・表現 第14回 試験曲の実技指導 より深い音楽表現を求めて 第15回 試験曲の実技指導・練習課題の決定 *進度により曲数が変わることがある		
評価方法 (合計100%)	実技試験 100%		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者、及び試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	有意義な実技レッスンを行うために、日頃からの十分な練習が必要です。		
課題へのフィード バック	課題へのフィードバックはレッスン中に随時 行っています。		
教科書	楽譜を使用するが、必要な時はその都度指示する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	専攻実技Ⅵ (ピアノ)		
英訳科目名	Applied Music (Piano) Ⅵ		
担当教員名	ピアノ部門		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	研究する楽曲が偏らない様に考え、広い範囲に及ぶよう計画する。 また、自分の個性についても注意深く洞察し、レパートリー拡大を図る。		
到達目標	上記に述べたポイント等を踏まえながら演奏できる。		
授業計画	<p>第1回 課題曲の決定</p> <p>第2回 課題曲の実技指導 1 譜読みの確認</p> <p>第3回 課題曲の実技指導 1 バランス</p> <p>第4回 課題曲の実技指導 1 表情・表現</p> <p>第5回 課題曲の実技指導 1 より深い音楽表現を求めて</p> <p>第6回 課題曲の仕上げと、次の課題曲決め</p> <p>第7回 課題曲の実技指導 2 譜読みの確認</p> <p>第8回 課題曲の実技指導 2 バランス</p> <p>第9回 課題曲の実技指導 2 表情・表現</p> <p>第10回 試験曲の決定</p> <p>第11回 試験曲の実技指導 譜読みの確認</p> <p>第12回 試験曲の実技指導 バランス</p> <p>第13回 試験曲の実技指導 表情・表現</p> <p>第14回 試験曲の実技指導 より深い音楽表現を求めて</p> <p>第15回 試験曲の実技指導・練習課題の決定</p> <p>*進度により曲数が変わることがある</p>		
評価方法 (合計100%)	実技試験 100%		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者、及び試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	有意義な実技レッスンを行うために、日頃からの十分な練習が必要です。		
課題へのフィード バック	課題へのフィードバックはレッスン中に随時 行っています。		
教科書	楽譜を使用するが、必要な時はその都度指示する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	専攻実技Ⅶ(ピアノ)		
英訳科目名	Applied Music (Piano) Ⅶ		
担当教員名	ピアノ部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	楽曲の基本的研究からより高度な演奏技術の習得を目指す。 個々の能力と個性に合ったプログラムを卒業演奏に備え作成する。		
到達目標	上記に述べたポイント等を踏まえながら演奏できる。		
授業計画	第1回 課題曲の決定 第2回 課題曲の実技指導 1 譜読みの確認 第3回 課題曲の実技指導 1 バランス 第4回 課題曲の実技指導 1 表情・表現 第5回 課題曲の実技指導 1 より深い音楽表現を求めて 第6回 課題曲の仕上げと、次の課題曲決め 第7回 課題曲の実技指導 2 譜読みの確認 第8回 課題曲の実技指導 2 バランス 第9回 課題曲の実技指導 2 表情・表現 第10回 課題曲の仕上げと、次の課題曲決め 第11回 課題曲の実技指導 3 譜読みの確認 第12回 課題曲の実技指導 3 バランス 第13回 課題曲の実技指導 3 表情・表現 第14回 課題曲の実技指導 3 より深い音楽表現を求めて 第15回 卒業試験に向けて *進度により曲数が変わることがある		
評価方法 (合計100%)	平常点 100%		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	有意義な実技レッスンを行うために、日頃からの十分な練習が必要です。		
課題へのフィード バック	課題へのフィードバックはレッスン中に随時 行っています。		
教科書	楽譜を使用するが、必要な時はその都度指示する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	専攻実技Ⅷ (ピアノ)		
英訳科目名	Applied Music (Piano) Ⅷ		
担当教員名	ピアノ部門		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> -	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	個々の能力と個性に合ったプログラムを卒業演奏に備え作成し、高度な演奏技術の習得を目指す。		
到達目標	上記に述べたポイント等を踏まえながら演奏できる。		
授業計画	<p>第1回 試験曲の決定</p> <p>第2回 試験曲の実技指導 1 譜読みの確認</p> <p>第3回 試験曲の実技指導 2 譜読みの確認</p> <p>第4回 試験曲の実技指導 1 バランス</p> <p>第5回 試験曲の実技指導 2 バランス</p> <p>第6回 試験曲の実技指導 1 表情</p> <p>第7回 試験曲の実技指導 2 表情</p> <p>第8回 試験曲の実技指導 1 表現</p> <p>第9回 試験曲の実技指導 2 表現</p> <p>第10回 試験曲の実技指導 1 より深い音楽表現</p> <p>第11回 試験曲の実技指導 2 より深い音楽表現</p> <p>第12回 試験曲の実技指導 1・2 通し</p> <p>第13回 試験曲の実技指導 1・2 通し</p> <p>第14回 試験曲の実技指導 1・2 通し・仕上げ</p> <p>第15回 試験曲の実技指導 1・2 通し・仕上げ</p> <p>*実技指導は進み具合により変更する場合がある。</p>		
評価方法 (合計100%)	実技試験 100%		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者、及び試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	有意義な実技レッスンを行うために、日頃からの十分な練習が必要です。		
課題へのフィード バック	課題へのフィードバックはレッスン中に随時 行っています。		
教科書	楽譜を使用するが、必要な時はその都度指示する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	通年
授業科目名	伴奏法 I		
英訳科目名	Piano Accompanying I		
担当教員名	稲垣 聡、宮本 聖子		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> -	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	ピアノ伴奏において、アンサンブルの大切さと共演ピアニストの役割を研究する。正確な読譜を基本に、楽曲の形式と分析、歌曲においては歌詞の解釈をもとに、実際に楽曲を演奏し実践することにより、伴奏における基礎的な知識と技術を習得することを目的とする。		
到達目標	上記に述べたポイント等を踏まえながら演奏できる。		
授業計画	<p>声楽伴奏と器楽伴奏を半期ずつ受講する。</p> <p>(1) 声楽伴奏 担当：稲垣 聡 (演奏助手：メゾ・ソプラノ 阪上真知子)</p> <p>第1回 声楽伴奏の形態とピアニストの役割と責任について [イタリア古典歌曲]</p> <p>第2回 C.Monteverdi : Lasciatemi morire!</p> <p>第3回 G.Caccini : Amarilli [ドイツ歌曲]</p> <p>第4回 R.Schumann : Die Lotosblume Op.25-7</p> <p>第5～7回 F.Schubert : An die Musik Op.88-4 D.547 F.Schubert : Der Tod und das M?dchen Op.7-3 D.531</p> <p>第8～10回 F.Schubert : St?ndchen D.957-4 F.Schubert : Heiden?slein Op.3-3 D.257</p> <p>第11～12回 W.A.Mozart : Das Veilchen Kv. 476 歌曲伴奏のまとめ</p> <p>第13回 オペラ・オラトリオなど、管弦楽伴奏の作品について</p> <p>第14～15回 W.A.Mozart : Opera "Le nozze di Figaro" [Cherubino] Non so pi? cosa son, cosa faccio [Cherubino] Voi, che sapete che cosa ? amor</p> <p>(2) 器楽伴奏 担当：宮本聖子 (演奏助手：上田哲子)</p> <p>第16回 器楽伴奏の形態とピアニストの役割と責任について</p> <p>第17～20回 弦楽器の楽器奏法と記譜について 小品の伴奏 P. Sarasate : Zigeunerweisen F.Kreisler : Sch?n Rosmarin</p> <p>第21～23回 管弦楽伴奏の作品 L.v.Beethoven : Romanze F-dur op.50</p> <p>第24～25回 バロックソナタ H?ndel : Sonate Nr.1 A-dur f?r Violine und Generalbass op.1-3</p> <p>第26回 ヴァイオリンソナタにおけるピアニストの役割、伴奏時との役割の違い</p> <p>第27～28回 W.A.Mozart : Sonate f?r Klavier und Violine Kv.304第1楽章 (ソナタ形式)</p> <p>第29～30回 W.A.Mozart : Sonate f?r Klavier und Violine Kv.304 第2楽章 (ロンド形式)</p>		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 100%		
失格条件	出席が2/3に満たない者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業において学習課題を提示します。授業では演奏助手との演奏により実践的に行うため、提示された学習課題は、正確な譜読みを心掛けて、十分な準備・練習をした上で授業にのぞむこと。		
課題へのフィード バック	課題ごとに、授業内でコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	通年
授業科目名	伴奏法Ⅱ		
英訳科目名	Piano Accompanying Ⅱ		
担当教員名	井上 麻紀、小椋 由美子、稲垣 聡		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> -	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	<歌曲> 歌曲における詩とピアノパートを研究し、伴奏をするための曲の理解を目指します。 <器楽> きちんとしたソルフェージュ、強弱のバランス、アンサンブルをするという基礎をしっかりとさせ、より高度な合奏技術や相手に対する洞察力などをみかくことによって、豊かな合奏・伴奏能力を身につける。		
到達目標	上記のようなポイントをふまえ、演奏できる。		
授業計画	<p>前期後期各15回、歌曲伴奏と器楽伴奏に分け、実際に演奏しながら、それぞれの伴奏・アンサンブルの意義を学んでいく。</p> <p>(1) 歌曲伴奏 担当：長谷川美穂子 (演奏助手：メゾ・ソプラノ 阪上真知子)</p> <p>伴奏Ⅰで学んだ事を基礎に、歌手の呼吸、演奏法など、共に音楽を作る楽しさを体験します 下記の曲は授業の進行状態、能力に応じて変更することがあります。</p> <p>第1～3回 ドイツ歌曲 Mozart [Als Luise die Briefe ihres Liebhabers verbrannte] K,V.520 Schubert [Frühlingstraube] D686 [Die Forelle] D550 Schumann [Widmung] Op.25</p> <p>第4～6回 イタリア歌曲 フランス歌曲 Mascagni [M' ama, non m' ama] Donaudy [O del mio amato ben] Faur? [Clair de lune]</p> <p>第7～8回 AriaとRecitativo 曲目未定</p> <p>第9～11回 日本歌曲 山田耕柞 「鐘が鳴ります」「かやの木山」 中田善直 「かあさん はやくこい」「おやすみなさい」 團伊玖磨 「ひぐらし」「紫陽花」</p> <p>第12～14回 後期ロマン派の作曲家Wolf, Strauss 同じ詩で WolfとSchubert [Nur wer die Sehnsucht kennt] StraussとSchumann [Er ist's]</p> <p>第15回 ポピュラーな曲とまとめ 武満徹 「小さな空」 木下牧子 「さびしいカシの木」</p> <p>(2) 器楽伴奏 担当：井上麻紀、稲垣 聡 (演奏助手：ヴァイオリン奏者)</p> <p>伴奏法Ⅰで学んだ基礎を土台に、実際の演奏を通して「共に演奏する」という事に意識を運んでいく。 取り上げる分野は以下の予定。</p> <p>第1～4回 W.A.Mozart: Sonate fuer Klavier und Violin 第5～8回 L.v.Beethoven: Sonate fuer Klavier und Violin 第9～12回 J.Brahms: Sonate fuer Klavier und Violin 第13～14回 ロマン派・近代の小品 第15回 内容理解の確認</p> <p>出来る限り実践に重点を置き、お互いの演奏を聴き合うことによって、意識面からも学ぶことを考える。 また、実際の演奏会での注意点など、実践に役立つ演奏方法にも触れる。 学生の進捗状況に応じて、授業を進める。</p>		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度100%		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	事前に課題となる曲を通知するので、授業をスムーズに進めていけるよう十分な準備を行う事。		
課題へのフィード バック	課題ごとに、授業内でコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	特になし		
備考			
科目生への開講	なし		

3-041

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	ピアノ音楽史 A		
英訳科目名	Keyboard History A		
担当教員名	田尻 洋一		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	18世紀から現代に至るピアノ音楽を中心にできるだけ多くの作品を紹介しながら、それぞれの芸術性、作曲家の信念哲学を探る。同時に当時の社会情勢や伝統、作曲技術の変遷、また演奏歴史にも触れる。		
到達目標	様々な作曲家の信念や哲学を自分の力で考え、想像できる。		
授業計画	第1回 音楽史の全体像 第2回 ラモー、スカルラッチェ、ヘンデル、バッハ 第3回 舞曲、組曲について 第4回 ハイドン、ソナタ形式について 第5回 モーツァルト 第6回 モーツァルト2、オペラ 第7回 ベートーヴェン 第8回 ベートーヴェン2、交響曲 第9回 シューベルト 第10回 ウェーバー、メンデルスゾーン 第11回 ベルリオーズ 第12回 ショパン 第13回 ショパン2 第14回 歴史的演奏家 第15回 レポートへのコメント		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度：70% レポート：30% 授業への参加態度の積極性やレポート内容など総合的に評価する。		
失格条件	次のいずれかに該当すれば失格となる。 1. 出席回数が3分の1以上の欠席の場合 2. 授業期間中の課題（レポートなど）不提出の場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業時に、次回の予習などのアドバイスをします。		
課題へのフィード バック	レポートへのコメントをします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	あり		

3-042

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	ピアノ音楽史 B		
英訳科目名	Keyboard History B		
担当教員名	田尻 洋一		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	18世紀から現代に至るピアノ音楽を中心にできるだけ多くの作品を紹介しながら、それぞれの芸術性、作曲家の信念哲学を探る。同時に当時の社会情勢や伝統、作曲技術の変遷、また演奏歴史にも触れる。		
到達目標	様々な作曲家の信念や哲学を自分の力で考え、想像できる。		
授業計画	第1回 シューマン 第2回 リスト 第3回 ワーグナー 第4回 ブラームス 第5回 ヴェルディ、プッチーニ 第6回 フランク、サンサーンス 第7回 J.シュトラウス、スメタナ、ドヴォルザーク 第8回 グリーク、シベリウス、アルベニス、グラナドス 第9回 チャイコフスキー、ムソルグスキー 第10回 ドビュッシー 第11回 フォーレ、ラヴェル 第12回 その他の作曲家 第13回 歴史的演奏家 第14回 歴史的演奏家2 第15回 レポートへのコメント		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度：70% レポート：30% 授業への参加態度の積極性やレポート内容など総合的に評価する。		
失格条件	次のいずれかに該当すれば失格となる。 1. 出席回数が3分の1以上の欠席の場合 2. 授業期間中の課題（レポートなど）不提出の場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業時に、次回の予習などのアドバイスをします。		
課題へのフィード バック	レポートへのコメントをします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング		期間	通年
授業科目名	ピアノ室内楽 I		
英訳科目名	Piano Ensemble I		
担当教員名	山本 英二		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> -	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	<p>《連 弾》 連弾のピアノ重奏はソロとはまた違った要素とされる。基本的要素（相手と合わせる、互いの音を聞くこと）から、バランス・構成・表現など、作品を通して実践を伴いながら研究し、また演奏する楽しみを感じながら学ぶ。 研究発表の場を設ける。基本（互いの音を聞き、合わせること）から、演奏をよりよくするために構成・バランス・表現等にポイントをおく。</p>		
到達目標	上記に述べたポイント等を踏まえながら演奏できる。		
授業計画	<p>第1回 基本的要素の理解、課題曲の決定 第2回 課題曲の実技指導 1 譜読みの確認 第3回 課題曲の実技指導 1 バランス 第4回 課題曲の実技指導 1 表情・表現 第5回 課題曲の実技指導 1 より深い音楽表現を求めて 第6回 課題曲の仕上げと、次の課題曲決め 第7回 課題曲の実技指導 2 譜読みの確認 第8回 課題曲の実技指導 2 バランス 第9回 課題曲の実技指導 2 表情・表現 第10回 課題曲の実技指導 2 より深い音楽表現を求めて 第11回 課題曲の仕上げと、次の課題曲決め 第12回 課題曲の実技指導 3 譜読みの確認 第13回 課題曲の実技指導 3 バランス 第14回 課題曲の実技指導 3 表情・表現 第15回 課題曲の実技指導 3 より深い音楽表現を求めて 第16回 課題曲の仕上げと、次の課題曲決め 第17回 課題曲の実技指導 4 譜読みの確認 第18回 課題曲の実技指導 4 バランス 第19回 課題曲の実技指導 4 表情・表現 第20回 課題曲の実技指導 4 より深い音楽表現を求めて 第21回 課題曲の仕上げと、次の課題曲決め 第22回 課題曲の実技指導 5 譜読みの確認 第23回 課題曲の実技指導 5 バランス 第24回 課題曲の実技指導 5 表情・表現 第25回 課題曲の実技指導 5 より深い音楽表現を求めて 第26回 年度末の試験曲の決定 第27回 試験曲の実技指導 譜読みの確認 第28回 試験曲の実技指導 バランス 第29回 試験曲の実技指導 表情・表現 第30回 試験曲の実技指導 より深い音楽表現を求めて</p> <p>*進度により曲数が変わることがある</p>		
評価方法 (合計100%)	試験 90% 授業への参加態度 10%		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者、 及び試験を受けなかったもの。		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	連弾は二人で音楽を作り上げていくものである。 日頃から十分な時間をとり個人練習（予習復習）、 そして二人での練習（予習復習）が必要です。		
課題へのフィード バック	レッスン形式であるので、毎回授業の中で個別、グループ毎にコメントします。		
教科書	楽譜を使用するが、必要な時はその都度指示する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	通年
授業科目名	ピアノ室内楽 I		
英訳科目名	Piano Ensemble I		
担当教員名	釈迦郡 洋介		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> -	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	<p>《連 弾》 連弾のピアノ重奏はソロとはまた違った要素とされる。基本的要素（相手と合わせる、互いの音を聞くこと）から、バランス・構成・表現など、作品を通して実践を伴いながら研究し、また演奏する楽しみを感じながら学ぶ。 研究発表の場を設ける。基本（互いの音を聞き、合わせること）から、演奏をよりよくするために構成・バランス・表現等にポイントをおく。</p>		
到達目標	上記に述べたポイント等を踏まえながら演奏できる。		
授業計画	<p>第1回 基本的要素の理解、課題曲の決定 第2回 課題曲の実技指導 1 譜読みの確認 第3回 課題曲の実技指導 1 バランス 第4回 課題曲の実技指導 1 表情・表現 第5回 課題曲の実技指導 1 より深い音楽表現を求めて 第6回 課題曲の仕上げと、次の課題曲決め 第7回 課題曲の実技指導 2 譜読みの確認 第8回 課題曲の実技指導 2 バランス 第9回 課題曲の実技指導 2 表情・表現 第10回 課題曲の実技指導 2 より深い音楽表現を求めて 第11回 課題曲の仕上げと、次の課題曲決め 第12回 課題曲の実技指導 3 譜読みの確認 第13回 課題曲の実技指導 3 バランス 第14回 課題曲の実技指導 3 表情・表現 第15回 課題曲の実技指導 3 より深い音楽表現を求めて 第16回 課題曲の仕上げと、次の課題曲決め 第17回 課題曲の実技指導 4 譜読みの確認 第18回 課題曲の実技指導 4 バランス 第19回 課題曲の実技指導 4 表情・表現 第20回 課題曲の実技指導 4 より深い音楽表現を求めて 第21回 課題曲の仕上げと、次の課題曲決め 第22回 課題曲の実技指導 5 譜読みの確認 第23回 課題曲の実技指導 5 バランス 第24回 課題曲の実技指導 5 表情・表現 第25回 課題曲の実技指導 5 より深い音楽表現を求めて 第26回 年度末の試験曲の決定 第27回 試験曲の実技指導 譜読みの確認 第28回 試験曲の実技指導 バランス 第29回 試験曲の実技指導 表情・表現 第30回 試験曲の実技指導 より深い音楽表現を求めて *進度により曲数が変わることがある</p>		
評価方法 (合計100%)	試験 90% 授業への参加態度 10%		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者、及び試験を受けなかったもの。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	連弾は二人で音楽を作り上げていくものである。 日頃から十分な時間をとり個人練習（予習復習）、そして二人での練習（予習復習）が必要です。		
課題へのフィード バック	必要に応じて個別、全体にコメント。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	通年
授業科目名	ピアノ室内楽Ⅱ		
英訳科目名	Piano Ensemble Ⅱ		
担当教員名	山本 英二		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>《2台ピアノ》</p> <p>ピアノ室内楽Ⅰの年度末試験において、成績優秀と認められたグループのみ履修することができる。1台4手(連弾)であったⅠに対し、Ⅱでは2台ピアノの作品を学ぶ。Ⅰで取得したピアノ・デュオの基礎知識、合奏能力、表現力をさらに幅広いものとするため、正確な読譜と楽曲理解に基づき多角的な研究を行う。例年、年度末試験では、オリジナルの2台ピアノ作品、もしくは作曲家自身によるコンサート用編曲(例：ラヴェル「ラ・ヴァルス」)を課題とするが、授業ではそれ以外にも多彩なレパートリーをとりあげ、オーケストラの響きを再現することなども研究する。</p>		
到達目標	上記に述べたポイント等を踏まえながら演奏できる。		
授業計画	<p>第1回 基本的要素の理解、課題曲の決定</p> <p>第2回 課題曲の実技指導 1 譜読みの確認</p> <p>第3回 課題曲の実技指導 1 バランス</p> <p>第4回 課題曲の実技指導 1 表情・表現</p> <p>第5回 課題曲の実技指導 1 より深い音楽表現を求めて</p> <p>第6回 課題曲の仕上げと、次の課題曲決め</p> <p>第7回 課題曲の実技指導 2 譜読みの確認</p> <p>第8回 課題曲の実技指導 2 バランス</p> <p>第9回 課題曲の実技指導 2 表情・表現</p> <p>第10回 課題曲の実技指導 2 より深い音楽表現を求めて</p> <p>第11回 課題曲の仕上げと、次の課題曲決め</p> <p>第12回 課題曲の実技指導 3 譜読みの確認</p> <p>第13回 課題曲の実技指導 3 バランス</p> <p>第14回 課題曲の実技指導 3 表情・表現</p> <p>第15回 課題曲の実技指導 3 より深い音楽表現を求めて</p> <p>第16回 課題曲の仕上げと、次の課題曲決め</p> <p>第17回 課題曲の実技指導 4 譜読みの確認</p> <p>第18回 課題曲の実技指導 4 バランス</p> <p>第19回 課題曲の実技指導 4 表情・表現</p> <p>第20回 課題曲の実技指導 4 より深い音楽表現を求めて</p> <p>第21回 課題曲の仕上げと、次の課題曲決め</p> <p>第22回 課題曲の実技指導 5 譜読みの確認</p> <p>第23回 課題曲の実技指導 5 バランス</p> <p>第24回 課題曲の実技指導 5 表情・表現</p> <p>第25回 課題曲の実技指導 5 より深い音楽表現を求めて</p> <p>第26回 年度末の試験曲の決定</p> <p>第27回 試験曲の実技指導 譜読みの確認</p> <p>第28回 試験曲の実技指導 バランス</p> <p>第29回 試験曲の実技指導 表情・表現</p> <p>第30回 試験曲の実技指導 より深い音楽表現を求めて</p> <p>*進度により曲数が変わることがある</p>		
評価方法 (合計100%)	試験	90%	
	授業への参加態度	10%	
失格条件	出席日数が2/3に満たない者、及び試験を受けなかったもの。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	楽曲を正しく理解し演奏するために、必要な基礎知識を踏まえ授業で実践した内容を十分に研究し、日頃から正しい練習を心がけることが重要である。		
課題へのフィード バック	レッスン形式であるので、毎回授業の中で個別、グループ毎にコメントします。		
教科書	楽譜を使用するが、必要な時はその都度指示する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	特になし		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	通年集中
授業科目名	室内楽 I		
英訳科目名	Chamber Music I		
担当教員名	音楽学科教員		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>学内において、また将来社会人となって演奏の場を得る場合、他の演奏者（複数）と音楽を共有する機会が多々あると思われる。室内楽はそうした環境に円滑に対応すべく、室内楽に必要な技術、すなわち正しいタイミングによる合わせ方、楽器間のバランスの取り方、ハーモニーの調和能力などを学び、習得し、演奏者にとって必要とされる“耳の良さ”を培っていく。さらに、演奏者同士が気持ちをひとつにして相互に信頼関係を築き、より高い次元の音楽性を目指していく意識を育てていくことを目標とする。</p>		
到達目標	コンサートで演奏できる。		
授業計画	<p>第1回 グループ編成と登録 第2回 学習する楽曲の設定および年間の学習計画 第3回 各人のパート練習とグループでの合わせ（練習） 第4回 レッスン受講（室内楽演奏に必要なとされる技術を習得）</p>		
評価方法 (合計100%)	学年末の試験を受け、その演奏を評価する。(100%)		
失格条件	受講時間数が、試験前の決められた期日までに12時間(45分×12)に満たなかった者、及び試験を受けなかった者		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	各グループで計画的な練習スケジュールを立て、和音感、和声進行、パート間の連携などを楽譜（スコア）から読み取り、効果的なりハーサルを重ねていく。予習・復習については、1回のレッスンのために180分（4時間）以上を必要とする。		
課題へのフィードバック	試験後に採点を行なった教員が、受験した室内楽グループ個別に講評をする。		
教科書	各グループが選んだ曲目のスコア、パート譜については、それぞれが手配する。		
著者名	(各グループにより異なる)		
出版社	(各グループにより異なる)		
参考書			
その他	授業のすすめ方については、グループ登録時に詳細を記した「室内楽実施要領」を配布する。また同時に内容を掲示する。		
備考			
科目生への開講	なし		

3-047

ナンバリング		期間	通年集中
授業科目名	室内楽Ⅱ		
英訳科目名	Chamber Music Ⅱ		
担当教員名	音楽学科教員		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>「室内楽Ⅰ」で習得した技術、すなわち正しいタイミングによる合わせ方、楽器間のバランスの取り方、ハーモニーの調和能力などをもとに、さらに発展的な内容について錬磨していく。</p> <p>「室内楽Ⅰ」では基本的な合わせ方を主体にしたが、「室内楽Ⅱ」においては総譜(スコア)を綿密に読み、各パートがどのような関連性を持ちつつ、ひとつの音楽に収斂されるのか、自身がどのような役割を演じるのか、という理解を深めていくことを目的とする。</p>		
到達目標	コンサートで演奏できる。		
授業計画	<p>第1回 グループ編成と登録</p> <p>第2回 学習する楽曲の設定および年間の学習計画</p> <p>第3回 各人のパート練習とグループでの合わせ(練習)</p> <p>第4回 レッスン受講(室内楽演奏に必要とされる技術を習得)</p>		
評価方法 (合計100%)	学年末の試験を受け、その演奏を評価する。(100%)		
失格条件	受講時間数が、試験前の決められた期日までに12時間(45分×12)に充たなかった者、及び試験を受けなかった者		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	各グループで計画的な練習スケジュールを立て、和音感、和声進行、パート間の連携などを楽譜(スコア)から読み取り、効果的なりハーサルを重ねていく。予習・復習については、1回のレッスンのために180分(4時間)以上を必要とする。		
課題へのフィード バック	試験後に採点を行なった教員が、受験した室内楽グループ個別に講評をする。		
教科書	各グループが選んだ曲目のスコア、パート譜については、それぞれが手配する。		
著者名	(各グループにより異なる)		
出版社	(各グループにより異なる)		
参考書			
その他	授業のすすめ方については、グループ登録時に詳細を記した「室内楽実施要領」を配布する。また同時に内容を掲示する。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	通年集中
授業科目名	室内楽Ⅲ		
英訳科目名	Chamber Music Ⅲ		
担当教員名	音楽学科教員		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	「室内楽Ⅲ」においては「室内楽Ⅰ」および「室内楽Ⅱ」で学んだ内容をもとに、さらに次々の高いものにするを目的とする。ここまで蓄積した演奏技術を駆使して、レパートリーを広げ、室内楽各グループで選んだ室内楽曲の形式感、および時代様式に反映された演奏解釈を明確化していく。そのために楽曲分析、音楽史研究も視野にいたった総合的な学びを必要とする。また室内楽は複数の演奏者とともにひとつの音楽を構築するので、相互の個性の理解、また何より心をひとつにする調和の精神を育てていく。		
到達目標	コンサートで演奏できる。		
授業計画	第1回 グループの編成と登録 第2回 学習する楽曲の設定および年間の学習計画 第3回 各人のパート練習とグループでの合わせ（練習） 第4回 レッスン受講（室内楽演奏に必要とされる技術を習得）		
評価方法 (合計100%)	学年末の試験を受け、その演奏を評価する。(100%)		
失格条件	受講時間数が、試験前の決められた期日までに12時間(45分×12)に満たなかった者、および試験を受けなかった者		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	各グループで計画性のある練習スケジュールを立て、和音感、和声進行、パート間の連携などを楽譜(スコア)から読み取り、効果的なリハーサルを重ねていく。予習・復習については、1回のレッスンのために180分(4時間)以上を必要とする。		
課題へのフィードバック	試験後に採点を行なった教員が、受験した室内楽グループ個別に講評をする。		
教科書	各グループが選んだ曲目のスコア、パート譜については、それぞれが手配する。		
著者名	(各グループにより異なる)		
出版社	(各グループにより異なる)		
参考書			
その他	授業のすすめ方については、グループ登録時に詳細を記した「室内楽実施要領」を配布する。また同時に内容を掲示する。		
備考			
科目生への開講	なし		

3-049

ナンバリング	期間	前期
授業科目名	ピアノ 特別研究 I	
英訳科目名	Advanced Study in Piano I	
担当教員名	ピアノ 部門	
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー-2 <技能>
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー-4 <関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー-6
授業概要・ポイント	演奏家に必要とされる高度なテクニックを習得し、幅広く個性豊かな表現力を培う。 担当教員と相談の上、各自が研究のテーマを決め、楽曲分析、演奏解釈をする。	
到達目標	上記に述べたポイント等を踏まえながら演奏できる。	
授業計画	第1回 研究テーマを決め、課題を決定 第2回 課題曲の実技指導 1 譜読みの確認 第3回 課題曲の実技指導 1 バランス 第4回 課題曲の実技指導 1 表情・表現 第5回 課題曲の実技指導 1 より深い音楽表現を求めて 第6回 課題曲の仕上げと、次の課題曲決め 第7回 課題曲の実技指導 2 譜読みの確認 第8回 課題曲の実技指導 2 バランス 第9回 課題曲の実技指導 2 表情・表現 第10回 課題曲の仕上げと、次の課題曲決め 第11回 課題曲の実技指導 3 譜読みの確認 第12回 課題曲の実技指導 3 バランス 第13回 課題曲の実技指導 3 表情・表現 第14回 課題曲の実技指導 3 より深い音楽表現を求めて 第15回 夏季休暇中の課題の決定 *個人の進度により、曲数が変わることがある	
評価方法 (合計100%)	出席状況及び受講態度などを加味して評価する。	
失格条件	出席日数が2/3に満たない者。	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	有意義な実技レッスンを行うために、日頃からの十分な練習が必要	
課題へのフィード バック	課題へのフィードバックはレッスン中に随時 行っています。	
教科書	楽譜を使用するが、必要な時はその都度指示する。	
著者名		
出版社		
参考書		
その他		
備考		
科目生への開講	なし	

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

3-050

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	ピアノ 特別研究Ⅱ		
英訳科目名	Advanced Study in Piano Ⅱ		
担当教員名	ピアノ部門		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー-2	<技能>
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	演奏家としての高度なテクニックと表現力を習得し、さらに高い水準の音楽をめざす。 個性を考え、テーマを決めて研究する。		
到達目標	上記に述べたポイント等を踏まえながら演奏できる。		
授業計画	<p>第1回 研究テーマを決め、課題を決定</p> <p>第2回 課題曲の実技指導 1 譜読みの確認</p> <p>第3回 課題曲の実技指導 1 バランス</p> <p>第4回 課題曲の実技指導 1 表情・表現</p> <p>第5回 課題曲の実技指導 1 より深い音楽表現を求めて</p> <p>第6回 課題曲の仕上げと、次の課題曲決め</p> <p>第7回 課題曲の実技指導 2 譜読みの確認</p> <p>第8回 課題曲の実技指導 2 バランス</p> <p>第9回 課題曲の実技指導 2 表情・表現</p> <p>第10回 課題曲の仕上げと、次の課題曲決め</p> <p>第11回 課題曲の実技指導 3 譜読みの確認</p> <p>第12回 課題曲の実技指導 3 バランス</p> <p>第13回 課題曲の実技指導 3 表情・表現</p> <p>第14回 課題曲の実技指導 3 より深い音楽表現を求めて</p> <p>第15回 実技試験に向けて</p> <p>※個人の進度により、曲数が変わることがある</p>		
評価方法 (合計100%)	実技試験 100%		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者、及び試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	有意義な実技レッスンを行うために、日頃からの十分な練習が必要		
課題へのフィード バック	課題へのフィードバックはレッスン中に随時 行っています。		
教科書	楽譜を使用するが、必要な時はその都度指示する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	試験の結果、特に優秀な者はⅢに進むことができる。		
備考			
科目生への開講	なし		

3-051

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	ピアノ 特別研究Ⅲ		
英訳科目名	Advanced Study in Piano Ⅲ		
担当教員名	ピアノ部門		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー-2	<技能>
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	演奏家に必要とされる高度なテクニックを習得し、幅広く個性豊かな表現力を培う。 担当教員と相談の上、各自が研究のテーマを決め、楽曲分析、演奏解釈をする。		
到達目標	上記に述べたポイント等を踏まえながら演奏できる。		
授業計画	第1回 研究テーマを決め、課題を決定 第2回 課題曲の実技指導 1 譜読みの確認 第3回 課題曲の実技指導 1 バランス 第4回 課題曲の実技指導 1 表情・表現 第5回 課題曲の実技指導 1 より深い音楽表現を求めて 第6回 課題曲の仕上げと、次の課題曲決め 第7回 課題曲の実技指導 2 譜読みの確認 第8回 課題曲の実技指導 2 バランス 第9回 課題曲の実技指導 2 表情・表現 第10回 課題曲の仕上げと、次の課題曲決め 第11回 課題曲の実技指導 3 譜読みの確認 第12回 課題曲の実技指導 3 バランス 第13回 課題曲の実技指導 3 表情・表現 第14回 課題曲の実技指導 3 より深い音楽表現を求めて 第15回 夏季休暇中の課題の決定 *個人の進度により、曲数が変わることがある		
評価方法 (合計100%)	出席状況及び受講態度などを加味して評価する。		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	有意義な実技レッスンを行うために、日頃からの十分な練習が必要		
課題へのフィード バック	課題へのフィードバックはレッスン中に随時 行っています。		
教科書	楽譜を使用するが、必要な時はその都度指示する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

3-052

ナンバリング	期間	後期
授業科目名	ピアノ 特別研究Ⅳ	
英訳科目名	Advanced Study in Piano Ⅳ	
担当教員名	ピアノ 部門	
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー-2 <技能>
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー-4 <関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー-6
授業概要・ポイント	演奏家としての高度なテクニックと表現力を習得し、さらに高い水準の音楽をめざす。 個性を考え、テーマを決めて研究する。	
到達目標	上記に述べたポイント等を踏まえながら演奏できる。	
授業計画	第1回 研究テーマを決め、課題を決定 第2回 課題曲の実技指導 1 譜読みの確認 第3回 課題曲の実技指導 1 バランス 第4回 課題曲の実技指導 1 表情・表現 第5回 課題曲の実技指導 1 より深い音楽表現を求めて 第6回 課題曲の仕上げと、次の課題曲決め 第7回 課題曲の実技指導 2 譜読みの確認 第8回 課題曲の実技指導 2 バランス 第9回 課題曲の実技指導 2 表情・表現 第10回 課題曲の仕上げと、次の課題曲決め 第11回 課題曲の実技指導 3 譜読みの確認 第12回 課題曲の実技指導 3 バランス 第13回 課題曲の実技指導 3 表情・表現 第14回 課題曲の実技指導 3 より深い音楽表現を求めて 第15回 実技試験に向けて ※個人の進度により、曲数が変わることがある	
評価方法 (合計100%)	実技試験 100%	
失格条件	出席日数が2/3に満たない者、及び試験を受けなかった者	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	有意義な実技レッスンを行うために、日頃からの十分な練習が必要	
課題へのフィード バック	課題へのフィードバックはレッスン中に随時 行っています。	
教科書	楽譜を使用するが、必要な時はその都度指示する。	
著者名		
出版社		
参考書		
その他		
備考		
科目生への開講	なし	

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	ピアノ教授法A		
英訳科目名	Piano Pedagogy A		
担当教員名	辰巳 友紀		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ○
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> ◎	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	①ピアノ学習者からピアノ指導者になるにあたり、必要な能力の違いを知り、学ぶ ②多様化するテキストについて知り、特徴や活用方法を研究する ③年齢・目的・性格等、多様な生徒に対応する人間的応用力を養う ④演習を多く取り入れ、即戦力を養う		
到達目標	本授業全てを終了した学生は、単に技術的ピアノ教授スキルを身に付ける事にとどまらず、教育者としての人間的内面と多様な生徒に対応できる広い知識・応用力を持った、即戦力のピアノ指導者として活動出来る		
授業計画	【授業計画】 第1回 ピアノ講師概論 ①ピアノ指導者の仕事を具体的に知る ②ピアノ学習者ではなく指導者としての能力を考察する ③自宅教室と大手教室の違いを知る ④レッスン料・月謝の決め方を考える 第2回 レッスン導入期（前操作期）考察 ①レッスン導入期（3～5歳）の子どもの特徴を知り、発達段階に合わせた総合的なレッスンアプローチを考える ②保護者との関わり方について ③多様な導入期テキストについて知り、活用方法を研究する 第3回 導入期レッスンの演習 第4回 具体的操作期のレッスン考察 ①具体的操作期（7～11歳頃）の子どもの特徴を把握し、それを踏まえて、全操作期とは違った教授アプローチを考える ②子どものメタ認知能力を育成する意義について ③9歳の壁について ④テキストの研究と活用法について 第5回 具体的操作期のレッスン演習 第6回 形式的操作期のレッスン考察 ①形式的操作期（11歳～高校生位までとする）の発達上及びその他の特徴を知る ②塾や受験、部活などによる多忙での生活スタイルの変化への対応 ③上手なピアノのやめ方とは ④反抗期について ⑤テキストの紹介と活用法・練習方法の研究 第7回 形式的操作期のレッスン演習 第8回 ツェルニー・ブルグミュラー・ソナチネ・バロック導入 ①いわゆる「王道テキスト」について、それぞれの導入方法を考察する ②出版社や編集者による違いを知り、版による活用方法の違いを研究する 第9回 ツェルニー・ブルグミュラーのレッスン演習 第10回 ソナチネ・バロックのレッスン演習 第11回 趣味のピアノレッスンについて ①ポピュラーピアノをやりたいと言われたら ②趣味の大人レッスンについての留意点やテキストの紹介など 第12回 趣味のレッスン演習 第11回 体験レッスン概論 ①体験レッスンの留意点 ②体験レッスンの具体的な内容と進め方 第12回 体験レッスン演習 第13回 模擬レッスンに向けての課題教材研究 ①前期最後の授業で実際に子どもの生徒を招いて実戦形式で模擬レッスンを予定している。模擬レッスンに協力予定の生徒が実際に練習中の曲につき指導方法を考える。 第14回 模擬レッスンに向けての演習 ①〈第十三回〉で研究した内容をもとに模擬レッスンに向けて演習を行い、改善点などを確認する 第15回 模擬レッスン ①ピアノ習っている子どもを招き学生のレッスンを受けてもらう ②レポート提出		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 50% 演習の取り組み内容 30% レポート内容 20%		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	演習課題について、事前準備をしっかりとしておくこと。(予習時間 2時間) 授業内容についてのフィードバックを各自で行うこと。(復習時間 1時間)		
課題へのフィード バック	毎授業の最後にその日の学習・演習を振り返る小レポートを作成する事。 前期・後期の最後には、レポートの提出および、授業での演習の成果として外部生徒（ピアノを習っている子どもなど）を招き実践レッスンに取り組む事（予定）。		
教科書	不使用。必要な資料は都度配布します ただし、授業で使用する楽譜のうち学生が所有している物について持参してもらう事があるかもしれません。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	授業中、小レポートを提出してもらう事があると思います。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	ピアノ教授法B		
英訳科目名	Piano Pedagogy B		
担当教員名	辰巳 友紀		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> 〇	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> 〇
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> 〇	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> 〇	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	①ピアノ学習者からピアノ指導者になるにあたり、必要な能力の違いを知り、学ぶ ②多様化するテキストについて知り、特徴や活用方法を研究する ③年齢・目的・性格等、多様な生徒に対応する人間的応用力を養う ④演習を多く取り入れ、即戦力を養う		
到達目標	本授業全てを終了した学生は、単に技術的ピアノ教授スキルを身に付ける事にとどまらず、教育者としての人間的内面と多様な生徒に対応できる広い知識・応用力を持った、即戦力のピアノ指導者として活動出来る		
授業計画	第1回 前期の復習／ハノンの活用法・練習方法 ①前期の内容をダイジェストで振り返る ②レッスン・練習に資するメタ認知について ③生徒保護者からの質問集 ④レベルに合わせたハノンのテキスト選びについて ⑤練習のポイントについて 第2回 ハノンのレッスン演習 ①レベル別のレッスン内容をデザインする ②テクニック別に練習方法を教授出来るようになる 第3回 ソナタ形式・対位法 ①実際の楽譜を使いソナタ形式について構成を確認し、把握した上での練習方法を考察する 第10回 ソナタ形式・レッスン演習 第4回 対位法・概論 ①インベンションおよびシンフォニアを使い、楽曲分析をする ②練習方法について研究する 第5回 ロマン派・概論 ①ロマン派の作品の取り組み方について ②楽譜（邦書・洋書）の選び方 ③作品の背景や音楽的構成を踏まえた深い楽曲分析により、高度な鑑賞及び演奏表現を目指す 第6回 ロマン派・演習 第7回 近現代・概論 ①キャンパス内を散策し、聴こえる音や感じる温度、見える色などをより繊細に感じる体験をして五感を開放する。これにより近現代および印象派の表現力を感覚的・経験的に養う（内容につきまだ許可を取っていないため、予定とする） ②散策により感じたことを話し合いレポートにまとめる 第8回 近現代・概論2 ①想像力を養うために絵画や感情と音を結び付けるワークショップをする 第9回 近現代・演習 第10回 発表会・コンクールの意義と取り組み／その他、レッスン以外の活動等 ①発表会とコンクール、それぞれの意義について考える ②自分で門下の発表会を開催する場合の準備について具体的に知り実際に計画する ③指導者がレッスン以外でやるべきことについて 第11回 クレームへの対応／電子ピアノについて ①どのようなクレームがあるのかを考え予防できるようにする ②クレマーの本心を知る ③電子ピアノの種類と活用方法を知る 第12回 予備 ①次回より最後の模擬レッスンの準備に入るため、これまでの講義内容につき復習を必要とする事があればこの日に時間をとる事にする。もしなければ、次週からの模擬レッスンの準備に取り掛かることとする 第13回 模擬レッスンに向けての課題教材研究 ①後期最後の授業で実際に外部の生徒を招いて実戦形式で模擬レッスンを予定している。模擬レッスンに協力予定の生徒が実際に練習中の曲につき指導方法を考える。 第14回 模擬レッスンに向けての演習 ①〈第十三回〉で研究した内容をもとに模擬レッスンに向けて演習を行い、改善点などを確認する 第15回 模擬レッスン ①ピアノ習っている生徒を招き学生のレッスンを受けてもらう ②レポート提出		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 50% 演習の取り組み内容 30% レポート内容 20%		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	演習課題について、事前準備をしっかりとしておくこと。(予習時間 2時間) 授業内容についてのフィードバックを各自で行うこと。(復習時間 1時間)		
課題へのフィード バック	毎授業の最後にその日の学習・演習を振り返る小レポートを作成する事。 前期・後期の最後には、レポートの提出および、授業での演習の成果として外部生徒（ピアノを習っている子どもなど）を招き実践レッスンに取り組む事（予定）		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	期間	前期
授業科目名	リトミックA	
英訳科目名	Eurhythmics A	
担当教員名	長井 典子	
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> -	ディプロマ・ポリシー-2 <技能> ◎
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー-4 <関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー-6
授業概要・ポイント	エミール・ジャック=ダルクローズが創案した、音楽教育の具体的な実践方法である「リトミック」の技術習得と指導法を学ぶ。 リトミックを習得するために必要な、基礎的なリズム運動、ピアノ演奏法、指導法を学び、自身の音楽表現や演奏にいかせるようにする。 幼児の発達段階に即したリトミックの指導法を習得する。	
到達目標	リズム リズムを表現するための基礎的な動きができる ピアノ演奏 リトミックに必要な基礎的なピアノ演奏ができる 指導法 3歳児指導法の年間カリキュラムを把握し、指導できる	
授業計画	第1回 リトミックの説明と導入、リトミックの体験 第2回 拍、子どもの発達と指導に関する概要、指導法3歳-1（即時反応・あそびうた） 第3回 時間・空間・エネルギー、指導法3歳-2（拍と数・あそびうた） 第4回 基礎リズム2拍子、指導法3歳-3（動きの基礎練習・おと・あそびうた） 第5回 リトミックのためのピアノ演奏法1（音価の比較）、指導法3歳-4（即時反応・拍と数） 第6回 リズムパターン、指導法3歳-5（動きの基礎練習・おと・あそびうた） 第7回 リトミックのためのピアノ演奏法2（表現のためのピアノ） 第8回 複リズム、指導法3歳-6（拍子・ニュアンス）、課題発表の準備 第9回 課題発表、基礎リズム3・4拍子 第10回 指導法3歳-7（拍子・基礎リズム） 第11回 カノンの導入、指導法3歳-8（拍子・即時反応・ニュアンス） 第12回 ピアノレッスンのためのリトミック指導法 第13回 リズムフレーズ、補足リズム 第14回 まとめ 第15回 リトミックの理論とダルクローズについて	
評価方法 (合計100%)	授業内発表30% 筆記試験50% 授業への参加態度20%	
失格条件	・出席回数が2/3に満たない者。 ・20分以上の遅刻は欠席とし、20分以内の遅刻3回で1回の欠席とします。	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	・リトミックの実践発表で使用する楽曲は良く練習しておくこと。(予習時間1時間) ・講義と演習で知り得た知識や技術を、自身の音楽活動や指導に活かせるようノートなどにまとめておくこと。(復習時間3時間)	
課題へのフィード バック	・課題発表終了後に、個別にコメントを行います。	
教科書	「幼稚園、保育園のためのリトミック 3歳児用」(1500円+税) リズムスティック(378円)、カラーボード(648円) (リズムスティック、カラーボードはリトミックBでも共通教材として使用します)	
著者名		
出版社	リトミック研究センター出版	
参考書		
その他	授業内では歩いたり座ったり寝転がったり運動を伴います。 スカートは禁止、動きやすいパンツスタイルで、裸足または底の薄いバレエシューズなどを着用のこととする。	
備考		
科目生への開講	なし	

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	リトミックB		
英訳科目名	Eurhythmics B		
担当教員名	長井 典子		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ○
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>リトミックAを履修していることが望ましい。 エミール・ジャック=ダルクローズが創案した、音楽教育の具体的な実践方法である「リトミック」の技術習得と指導法を学ぶ。 リトミックを習得するために必要な、基礎的なリズム運動、ピアノ演奏法、指導法を学び、自身の音楽表現や演奏にいかせるようにする。 幼児の発達段階に即したリトミックの指導法を習得する。</p>		
到達目標	<p>リズム リズムを表現するための基礎的な動きができる ピアノ演奏 リトミックに必要な基礎的なピアノ演奏ができる 指導法 4歳児、5歳児の年間カリキュラムを把握し、指導できる 小学生へのリトミックを経験し、指導法を知ることができる</p>		
授業計画	<p>第1回 指揮2拍子、子どもの発達と指導に関する概要、指導法4歳-1（拍と数・おと） 第2回 指揮3拍子、指導法4歳-2（拍子・即時反応） 第3回 指揮4拍子、指導法4歳-3（拍子・即時反応・おと・ニュアンス） 第4回 リズムカノンの基礎、指導法4歳-4（即時反応・基礎リズム・拍と数・拍子） 第5回 3、4拍子のリズムカノン、指導法4歳-5（動きの基礎練習・ダンス） 第6回 指揮とリズムカノン 第7回 指導法5歳-1（拍と数・拍子・動きの基礎練習） 第8回 指導法5歳-2（おと・即時反応・基礎リズム） 第9回 指導法5歳-3（ニュアンス・リズムパターン・ダンス） 第10回 6/8拍子基礎リズム、指導法5歳-4（リズムパターン・基礎リズム・おと） 第11回 6/8拍子と補足リズム 第12回 拡大と縮小、小学生のリトミック1年生 第13回 トランスフォーメーション、小学生のリトミック2年生 第14回 まとめ 第15回 リトミック理論とダルクローズについて</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>授業内発表30% 筆記試験50% 授業への参加態度20%</p>		
失格条件	<p>・出席回数が2/3に満たない者。 ・20分以上の遅刻は欠席とし、20分以内の遅刻3回で1回の欠席とします。</p>		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>・リトミックの実践発表で使用する楽曲は良く練習しておくこと。(予習時間1時間) ・講義と演習で知り得た知識と技術を、自身の音楽活動やに指導に活かせるようノートなどにまとめておくこと。(復習時間3時間)</p>		
課題へのフィード バック	<p>課題発表終了後に、個別にコメントを行います。</p>		
教科書	<p>「幼稚園、保育園のためのリトミック 4歳児用」(1800円+税) 「幼稚園、保育園のためのリトミック 5歳児用」(1800円+税) リズムスティック(378円)、カラーボード(648円) (リズムスティック、カラーボードはリトミックAで使用したものと同一)</p>		
著者名			
出版社	リトミック研究センター出版		
参考書			
その他	<p>授業内では歩いたり座ったり寝転がったり運動を伴います。 スカートは禁止、動きやすいパンツスタイルで、裸足または底の薄いバレエシューズなどを着用のこととする。</p>		
備考			
科目生への開講	なし		

3-057

ナンバリング		期間	通年
授業科目名	電子オルガン I		
英訳科目名	Electric Organ I		
担当教員名	創作演奏部門		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> -	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	将来音楽指導者として役立てるよう、電子オルガンの基礎知識、技術、簡単なアレンジなどを身につける。 ピアノ技術の他に、より総合的な音楽力、指導力を養っていく。		
到達目標	親しみやすい日本の歌曲、世界の民謡、スタンダード作品を演奏することができる。 必要に応じて簡単な伴奏つけや、アレンジができるような技術研究を行い身につける。 簡単な電子オルガンの演奏、編曲と希望者にはヤマハ演奏グレードについても学習する。		
授業計画	第1回 オリエンテーション 第2回 課題曲の決定 第3回 課題曲の実践 第4回 ベース（足）技術の実践 第5回 各自候補曲を設定して技術の上達をはかる。 第6回 自由曲の実践① 第7回 自由曲の実践② 第8回 自由曲の研究① 第9回 自由曲の研究② 第10回 課題曲の実践③ 第11回 課題曲の実践④ 第12回 自由曲の実践③ 第13回 自由曲の実践④ 第14回 即興演奏の導入 第15回 前期のまとめ 第16回 後期授業オリエンテーション 第17回 課題曲のアレンジ① 第18回 課題曲のアレンジ② 第19回 課題曲のアレンジ③ 第20回 自由曲の演奏研究 第21回 自由曲の演奏研究応用 第22回 即興演奏の実践① 第23回 即興演奏の実践② 第24回 即興演奏の応用① 第25回 即興演奏の応用② 第26回 即興演奏の研究① 第27回 即興演奏の研究② 第28回 グレード試験について① 第29回 グレード試験について② 第30回 課題曲と即興演奏のまとめ 本人の電子オルガン経験、未経験により内容は変更する。		
評価方法 (合計100%)	平常所見50% 試験50%		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	電子オルガンに触れる機会を作るように心掛ける。 レッスンごとに毎回2時間以上の予習復習を行い 電子オルガンに親しむ時間をつくること。		
課題へのフィード バック	毎回レッスンで個別にコメントします。		
教科書	各自に応じたものを授業内で指示する。		
著者名			
出版社			
参考書	必要に応じてその都度指示する。		
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	通年
授業科目名	電子オルガンⅡ		
英訳科目名	Electric OrganⅡ		
担当教員名	創作演奏部門		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	将来音楽指導者として役立てるよう、電子オルガンの基礎知識、技術、簡単なアレンジなどを身につける。 ピアノ技術の他に、より総合的な音楽力、指導力を養っていく。		
到達目標	親しみやすい日本の歌曲、世界の民謡、スタンダード作品を演奏することができる。 必要に応じて簡単な伴奏づけや、アレンジができるような技術研究を行い身につける。 簡単な電子オルガンの演奏、編曲と希望者にはヤマハ演奏グレードについても学習する。		
授業計画	第1回 オリエンテーション 第2回 課題曲の決定 第3回 課題曲の実践 第4回 ベース（足）技術の実践 第5回 各自候補曲を設定して技術の上達をはかる。 第6回 自由曲の実践① 第7回 自由曲の実践② 第8回 自由曲の研究① 第9回 自由曲の研究② 第10回 課題曲の実践③ 第11回 課題曲の実践④ 第12回 自由曲の実践③ 第13回 自由曲の実践④ 第14回 即興演奏の導入 第15回 前期のまとめ 第16回 後期授業オリエンテーション 第17回 課題曲のアレンジ① 第18回 課題曲のアレンジ② 第19回 課題曲のアレンジ③ 第20回 自由曲の演奏研究 第21回 自由曲の演奏研究応用 第22回 即興演奏の実践① 第23回 即興演奏の実践② 第24回 即興演奏の応用① 第25回 即興演奏の応用② 第26回 即興演奏の研究① 第27回 即興演奏の研究② 第28回 グレード試験について① 第29回 グレード試験について② 第30回 課題曲と即興演奏のまとめ 本人の電子オルガン経験、未経験により内容は変更する。		
評価方法 (合計100%)	平常所見50% 試験50%		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	電子オルガンに触れる機会を作るように心掛ける。 毎回レッスンごとに予習復習を2時間以上学修すること。		
課題へのフィード バック	毎回レッスンで個別にコメントします。		
教科書	各自に応じたものを授業内で指示する。		
著者名			
出版社			
参考書	必要に応じてその都度指示する。		
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

3-059

ナンバリング		期間	通年集中
授業科目名	演奏研究A (アドヴァンス課程)		
英訳科目名	Practical Performance A		
担当教員名	塩見 亮		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	オーケストラと共に演奏するピアノ協奏曲。 L.v.Beethovenのピアノ協奏曲において、時代背景・音楽様式を通して、ピアノソロとオーケストラとの関わり、役割・仕組みなどを学ぶ。 ピアノ・パート&オーケストラ・パートピアノ、2台のピアノを使い実践的に勉強する。		
到達目標	L.v.Beethoven: ピアノ協奏曲におけるピアニストの役割を、楽譜（スコア総譜）から学び、理解できる。		
授業計画	年間で45分を15回、675分(11時間15分)を集中演習で行う。 ・授業計画・課題についての説明 ・Lv.Beethoven: ピアノ協奏曲 op.15, op.37 の演奏実践(オーケストラ・パートも含む)を中心に行う。		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 50% 授業内の演奏準備度 50%		
失格条件	出席時間が2/3に満たなかったもの		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	課題については事前に相談して決めるので、十分な準備・練習をした上で授業にのぞむこと。		
課題へのフィード バック	個別の講義に対する準備に応じた実演指導など		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

3-060

ナンバリング		期間	通年集中
授業科目名	演奏研究B (アドヴァンス課程)		
英訳科目名	Practical Performance B		
担当教員名	山口 博明		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	オーケストラと共に演奏するピアノ協奏曲。 W.A.Mozartのピアノ協奏曲において、時代背景・音楽様式を通して、ピアノソロとオーケストラとの関わり、役割・仕組みなどを学ぶ。 ピアノ・パート&オーケストラ・パートピアノ、2台のピアノを演奏し実践的に学習する。		
到達目標	W.A.Mozart：ピアノ協奏曲における独奏ピアニストの役割を、楽譜(スコア総譜)を通して理解し、表現できる。		
授業計画	年間で45分を15回、675分(11時間15分)を集中演習で行う。 ・授業計画・課題について説明 ・W.A.Mozart：ピアノ協奏曲の演奏実践(オーケストラ・パートも含む)		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 30% 授業内の演奏評価 70%		
失格条件	出席時間が2/3に満たなかったもの		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	課題については事前に相談して決めるので、十分な準備・練習をした上で授業にのぞむこと。また、他の受講生などの課題曲目についても事前に勉強しておくことを推奨する。		
課題へのフィードバック	最終回にまとめとしての試演会を行い、課題への取り組みについて個別にコメントする。		
教科書	不使用 選択曲目の楽譜（ピアノ譜とスコア譜：原典版を推奨）を各自で用意する		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	通年集中
授業科目名	演奏研究C (アドヴァンス課程)		
英訳科目名	Practical Performance C		
担当教員名	小坂 圭太		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	J.S.Bachの鍵盤楽器用作品に関する概論と演習を行う。様々なジャンルより数曲ずつを選び、受講者が分担して演奏する形をとる。通常あまり近代ピアノで演奏されることのない、バッハ以前の作品も一部取りあげ、近代音楽の父としてのバッハと、それ以前の音楽の集大成を実現したバッハとの交点を、鍵盤音楽の分野に限ってではあるが考察する。		
到達目標	ポリフォニックな耳の涵養や的確な様式感と、それを実際に音として出すテクニックの習得が出来る。		
授業計画	4ブロックに分かれての集中講義。 最初のブロックで概説の講義と曲の担当を決定、 第2、第3ブロックでは演習形式で受講者の演奏とそれに対するレッスン、および曲目に関する補足説明。 第4ブロックで成果発表ミニコンサートのGP及び本番を行う。 全行程終了後にレポート。それぞれの開催時期及び曲目の詳細に関しては後程掲示予定。		
評価方法 (合計100%)	授業への取り組み（演習時への準備など）・・・40% ミニコンサートの演奏内容・・・40% レポート・・・20%		
失格条件	3分の1を超える欠席、ミニコンサートに出演しない、レポートを期日までに提出しないのいずれかに該当する場合は失格とする		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	予習 ・楽譜を丁寧に読みこんで十分な練習を行う。 ・複数の版が出版されている場合は、版毎の差異や自分が使用している版の立ち位置を理解しておく。（予習10時間） 復習 ・（授業での）技術的注意を身体感覚として納得できるまで十分にさらいこむ。 ・（授業での）様式的・時代背景的示唆に対して、同一作曲家の他ジャンルの作品のスコアや歴史的演奏録音など参照しながら、学びを深める。（復習20時間）		
課題へのフィードバック	・各授業の中で、次の段階への留意事項を口頭で伝える。 ・2回目以降は併せて前回の留意事項に対する達成度を口頭で伝える。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社	特に指定はしませんが、なるべく原典版に近いもの（編者の主観的な書き込みの少ないもの）を選んで下さい。但し、バッハにおける原典版とは、近代の作曲者におけるそれとは、作曲者の側の概念が全く違うので、そうした意味で最低限の奏法アドヴァイスやアナリーゼが付いている版を使うことにもそれなりに意味があると思います。バッハ以外の楽曲については、最初の講義で指示します。		
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	期間	通年集中
授業科目名	演奏研究D (アドヴァンス課程)	
英訳科目名	Practical Performance D	
担当教員名	小坂 圭太	
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> -	ディプロマ・ポリシー-2 <技能> ◎
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー-4 <関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー-6
授業概要・ポイント	Beethovenが西洋近代音楽の理念を一代で築き上げた巨頭である、という考え方は、近年薄れつつあるように感じます。しかしだからこそ、同時代や後世の人々が彼の音楽に何を感じ何を見てとって特別視していたのかが、より明らかになりつつあるとも云えましょう。本講座では、Beethovenの個性が確立されるまでの時代の傑作であるOp.7及び13と、Beethovenの創作史の上でもドイツ語圏の精神史の上でも重要な年である1806年を過ぎて彼が真にピアノでしか言えない内容のみを書き記し始めた時期のOp.78,79,81aの計5曲を詳しく読み解きながら、彼のピアノソナタの魅力に迫ります。	
到達目標	なぜ数知れぬ程の人々がBeethovenについて考え、語り、そして弾いてきたのかを自分なりに諒解し、その諒解に則った演奏ができる。	
授業計画	45分×15回分（675分）を数次にわたる集中講義にて行う。 第1回 授業計画、内容についての説明 ・受講者ひとりひとりの、Beethovenの音楽に対する好悪の印象についてのディスカッション ・Beethovenの時代とその時代精神について ・後世の人々がBeethovenについて語って来たこと、そして演奏スタイルの変遷 第2回 各自準備した作品のレッスン 第3回 前回のレッスンを踏まえ各自で掘り下げた演奏に対するレッスン 第4回 最後にミニコンサート形式で演奏	
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 50% 授業内の演奏への準備と達成度 50%	
失格条件	出席時間が2/3に満たなかったもの	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	予習 ・楽譜を丁寧に読みこんで十分な練習を行う。 ・複数の版が出版されている場合は、版毎の差異や自分が使用している版の立ち位置を理解しておく。（予習10時間） 復習 ・（授業での）技術的注意を身体感覚として納得できるまで十分にさらいこむ。 ・（授業での）様式的・時代背景的示唆に対して、同一作曲家の他ジャンルの作品のスコアや歴史的演奏録音など参照しながら、学びを深める。（復習20時間）	
課題へのフィードバック	・各授業の中で、次の段階への留意事項を口頭で伝える。 ・2回目以降は併せて前回の留意事項に対する達成度を口頭で伝える。	
教科書	使用楽譜は、原典版 (urtext) 表記のある何れかの版。授業では、S.Gordon編纂の最近のalfred版を参照する。又、各自がこれまでに使用していた版があればそちらも持参の事。	
著者名		
出版社	使用楽譜は、G.HENLE VERLAG	
参考書		
その他		
備考		
科目生への開講	なし	

3-063

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	アンサンブル演習ⅡA		
英訳科目名	Ensemble Workshop ⅡA		
担当教員名	稲垣 聡、塩見 亮		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	演奏をする上で最も重要な「聴く」訓練と「良き耳」を育むことを目的に、他楽器とのアンサンブル実践を行う。正確なソルフェージュと、様々な時代・作曲家の音楽様式を学ぶ。 また、共演者の音楽性・音に興味を持ち「共に演奏すること」を学修する。		
到達目標	正確なソルフェージュ・時代様式をふまえたデュオアンサンブル演奏ができる。		
授業計画	<p>授業計画 後期15回の授業で、演奏助手(ヴァイオリン奏者)との共演を通し、ロマン派のデュオ アンサンブル作品を学ぶ。</p> <p>第1回 授業計画・課題について、担当教員と演奏助手(ヴァイオリン)の演奏と共に説明</p> <p>第2～9回 A.Dvorak : Sonatine op.100</p> <p>第10～15回 J.Brahms : Sonate Nr.1 op.78 G-dur, Nr.2 op.100 A-dur ①</p>		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 100%		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	課題については事前に提示し、同時に学習方法を説明するので、十分な準備・練習をした上で授業にのぞむこと。		
課題へのフィード バック	課題ごとに、授業内でコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	J.Brahms : Sonate は、G.HENLE VERLAG が望ましい。		
備考			
科目生への開講	なし		

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

3-064

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	アンサンブル演習ⅡB (アドヴァンス課程)		
英訳科目名	Ensemble Workshop ⅡB		
担当教員名	稲垣 聡、塩見 亮		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	演奏をする上で最も重要な「聴く」訓練と「良き耳」を育むことを目的に、他楽器とのアンサンブル実践を行う。正確なソルフェージュと、様々な時代・作曲家の音楽様式を学ぶ。 また、共演者の音楽性・音に興味を持ち「共に演奏すること」を学修する。		
到達目標	正確なソルフェージュ・時代様式をふまえたデュオアンサンブル演奏ができる。		
授業計画	授業計画 後期15回の授業で、演奏助手(ヴァイオリン奏者)との共演を通し、ロマン派のデュオ アンサンブル作品を学ぶ。 第1～2回 J.Brahms : Sonate Nr.1 op.78 G-dur, Nr.2 op.100 A-dur ② 第3～4回 C.Franck : Sonate 1楽章 第5～8回 C.Franck : Sonate 2楽章 第9～10回 C.Franck : Sonate 3楽章 第11～13回 C.Franck : Sonate 4楽章 第13～15回 J.Brahms : Scherzo		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 100%		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	課題については事前に提示し、同時に学習方法を説明するので、十分な準備・練習をした上で授業にのぞむこと。		
課題へのフィード バック	課題ごとに、授業内でコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	C.Franck : Sonate は、G.HENLE VERLAGが望ましい。		
備考			
科目生への開講	なし		

3-065

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	アンサンブル演習ⅢA (アドヴァンス課程)		
英訳科目名	Ensemble Workshop ⅢA		
担当教員名	井上 麻紀		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	演奏をする上で最も大切な「聴く」訓練の為に、歌曲伴奏、また協奏曲(2台のピアノで)の実践を行う。 正確なソルフェージュと、様々な時代・作曲家の音楽様式を学ぶ。 また、共演者の音楽性・音に興味を持ち「共に演奏すること」を学習する。		
到達目標	正確なソルフェージュ・時代様式をふまえたデュオアンサンブル、歌曲伴奏、協奏曲の演奏ができる。		
授業計画	15回の授業で、ロマン派の歌曲・協奏曲(Pfソロ・パート、オーケストラ・パート)を学ぶ。 演奏助手との共演で歌曲伴奏、また協奏曲を2台ピアノで演奏実践する。 第1回 授業計画・課題について、担当教員:井上麻紀の演奏と共に説明 第2～7回 ロマン派: ピアノ協奏曲 第8～12回 ロマン派歌曲 第13～15回 ロマン派: ピアノ協奏曲		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 100%		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	課題については事前に提示し、同時に学習方法を説明するので、十分な準備・練習をした上で授業にのぞむこと。		
課題へのフィード バック	課題ごとに、授業内でコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	アンサンブル演習ⅢB (アドヴァンス課程)		
英訳科目名	Ensemble Workshop ⅢB		
担当教員名	稲垣 聡		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	演奏をする上で最も重要な「聴く」訓練と「良き耳」を育むことを目的に、他楽器とのアンサンブルや歌曲伴奏の実践を行う。正確なソルフェージュと、様々な時代・作曲家の音楽様式を学ぶ。 また、共演者の音楽性・音に興味を持ち「共に演奏すること」を学修する。		
到達目標	正確なソルフェージュ・時代様式をふまえたデュオアンサンブル、歌曲伴奏、協奏曲の演奏ができる。		
授業計画	15回の授業で、フランス近代作曲家の作品を取り上げる。 演奏助手(Vn:ヴァイオリン奏者/M.Sop:阪上真知子)との共演でデュオ・アンサンブル、歌曲伴奏を実践的に学ぶ。 第1回 (1)授業計画・課題について、演奏助手の演奏と共に説明 (2)デュオ・アンサンブル、歌曲伴奏の形態とピアニストの役割について 第2回 20世紀初頭に活躍した作曲家たちと、Debussy晩年の作品について(室内楽曲・ピアノ曲) 第3～7回 C.Debussy: Sonate pour Violon et Piano 第8回 G.Faur?の歌曲 第9回 C.Debussyの歌曲 第10回 H.Duparcの歌曲 第11～15回 M.Ravel: Sonate pour Violon et Piano		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 100%		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	課題については事前に提示し、同時に学習方法を説明するので、十分な準備・練習をした上で授業にのぞむこと。		
課題へのフィード バック	課題ごとに、授業内でコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

3-067

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	アンサンブル演習ⅣA (アドヴァンス課程)		
英訳科目名	Ensemble Workshop ⅣA		
担当教員名	稲垣 聡		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	演奏をする上で最も大切な「聴く」訓練の為に、他楽器とのアンサンブルや歌曲伴奏の実践を行う。 正確なソルフェージュと、様々な時代・作曲家の音楽様式を学ぶ。 また、共演者の音楽性・音に興味を持ち「共に演奏すること」を学習する。		
到達目標	正確なソルフェージュ・時代様式をふまえたデュオアンサンブル・歌曲伴奏の演奏ができる。		
授業計画	前期15回の授業で、歌曲、オペラ・オラトリオ作品、ヴァイオリンとのデュオ作品を学ぶ。 演奏助手(Vn:ヴァイオリン奏者、M.Sop:阪上真知子)との共演でデュオ・アンサンブル、歌曲伴奏(オペラ・オラトリオ含む)を演奏実践する。 第1回 授業計画・課題について、担当教員：稲垣聡と演奏助手の演奏と共に説明 第2～3回 Tostiの歌曲について 第4～5回 Mozartの歌曲について 第6～7回 R.Straussの歌曲について 第8～9回 バロック・ソナタについて 第9～10回 ヴァイオリンの小品について 第11～12回 オーケストラ伴奏のヴァイオリン作品について 第13～15回 オペラ・オラトリオ作品について		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 100%		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	課題については事前に提示し、同時に学習方法を説明するので、十分な準備・練習をした上で授業にのぞむこと。		
課題へのフィード バック	課題ごとに、授業内でコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

3-068

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	アンサンブル演習ⅣB (アドヴァンス課程)		
英訳科目名	Ensemble Workshop ⅣB		
担当教員名	井上 麻紀		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	演奏をする上で最も大切な「聴く」訓練の為に、他楽器とのアンサンブルや歌曲伴奏の実践を行う。 正確なソルフェージュと、様々な時代・作曲家の音楽様式を学ぶ。 また、共演者の音楽性・音に興味を持ち「共に演奏すること」を学習する。		
到達目標	正確なソルフェージュ・時代様式をふまえたデュオアンサンブル・歌曲伴奏の演奏ができる。		
授業計画	後期15回の授業で、歌曲・他楽器などとのデュオ作品を学ぶ。 演奏助手との共演で歌曲伴奏、デュオ・アンサンブルを演奏実践する。 第1～2回 授業計画・課題について、担当教員:井上麻紀と演奏助手の演奏と共に説明 第3～4回 F.Schubertの歌曲について 第5回 J.Brahmsの歌曲について 第6～7回 R.Schumannの歌曲について 第8～10回 ロマン派の小品(Vl.& Pf.)について 第11～15回 ピアノ連弾・2台ピアノ作品について		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 100%		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	課題については事前に提示し、同時に学習方法を説明するので、十分な準備・練習をした上で授業にのぞむこと。		
課題へのフィード バック	課題ごとに、授業内でコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	期間	通年
授業科目名	指導基礎演習 (指導者課程)	
英訳科目名	Basic of Piano Teaching	
担当教員名	山本 英二、植田 味香子	
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2 <技能> -
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー4 <関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6
授業概要・ポイント	<p>ピアノ指導者として必要な基本的、全般的な知識、技術、表現力などをこの演習において習得し、その後のより専門的領域のための基礎力を養う。また、指導者として必要なグレードに関しても習得を目指す。</p> <p><ポイント></p> <p>(1) 将来の音楽教室での指導者としての基礎知識を得る。</p> <p>(2) 検定、グレード、また音楽教室などの情報を得る。</p> <p>(3) 各時代の主な作曲家、作品についての理解。</p> <p>(4) 検定、グレード取得に向けての演習。 など</p>	
到達目標	基礎知識、基礎技術を得て、2年次からのより専門的領域が理解できる。	
授業計画	<p>【山本英二】</p> <p>第1回 オリエンテーション</p> <p>第2回 指導者として何処で教えるか (個人、音楽教室、楽器店等)</p> <p>第3回 その為には何が 필요한のか (グレード、)</p> <p>第4回 その為には何が 필요한のか (資格、採用試験等)。</p> <p>第5回 各種ピアノコンクールの概要。 1</p> <p>第6回 各種ピアノコンクールの概要。 2</p> <p>第7回 バロック、古典派、ロマン、近現代の時代について</p> <p>第8回 バロックの作曲家と鍵盤作品。1</p> <p>第9回 バロックの作曲家と鍵盤作品。2</p> <p>第10回 古典派の作曲家</p> <p>第11回 古典派の鍵盤作品</p> <p>第12回 ロマン派の作曲家</p> <p>第13回 ロマン派のピアノ作品。</p> <p>第14回 近現代の作曲家とピアノ作品。</p> <p>第15回 前期到達度の確認</p> <p>【植田味香子】</p> <p>第16回 和音の構造と種類、和音記号とコードネーム及び一般形の意味</p> <p>第17回 カデンツ、和音の押さえ方</p> <p>第18回 演習課題</p> <p>第19回 補助音、経過音、3連符による変奏</p> <p>第20回 定型伴奏を伴った変奏</p> <p>第21回 演習課題</p> <p>第22回 簡略化された変奏</p> <p>第23回 和音奏、ユニゾンによる変奏</p> <p>第24回 演習課題</p> <p>第25回 モティーフのイメージ、和音の可能性</p> <p>第26回 魅力的なメロディーとコード進行</p> <p>第27回 モティーフの活用、要素の発展、拡大と縮小</p> <p>第28回 演習課題</p> <p>第29回 初見演奏、伴奏づけと移調奏</p> <p>第30回 演習課題</p>	
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 60% レポート提出 20% 演習課題 20%	
失格条件	出席日数が2/3に満たないもの。 レポートを提出しなかったもの。	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	初見視奏、伴奏付けなどは慣れが必要である。 日頃からの練習により身につけてくるので時間があれば 初見等の練習を欠かさないことです。	
課題へのフィード バック	課題に関しては 授業内で個別にもしくは全体にコメントします。 実技をともなったものには、コメントしながら進めていきます。	
教科書	不使用	
著者名		
出版社		
参考書		
その他		
備考		
科目生への開講	なし	

3-070

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	ピアノ教材研究 (指導者課程)		
英訳科目名	Materials for Teaching Piano		
担当教員名	釈迦郡 洋介		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> -
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	現在、多くのピアノ教本が出版されています。ピアノ指導者として教本を選ぶ事は大切な作業の一つです。導入からの全体の流れ、教材内容の目的と効果について理解し、学習者一人一人の進捗、目的にあった教材選びが出来るよう知識を深める事を目的とする。		
到達目標	各ピアノ教本の目的と効果を理解し、ピアノ指導者としての知識を深めることができる。		
授業計画	第1回 子供のためのピアノ教材について 第2～3回 幼児の導入期ピアノ教材について 第3～4回 技術を養う教材について 第5～6回 音楽性を養う教材について 第6～7回 バロック作品の教材について 第7～8回 古典派の作品への導入の教材について 第8～10回 ロマン派以降の教材について 第11回 発表会の為の選曲について 第12～13回 各コンクールの課題曲について 第14回 まとめ 第15回 レポート		
評価方法 (合計100%)	出席50% レポート50%		
失格条件	出席日数が2/3に満たないもの。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業で使用する教材についての次回までに調べておくこと。		
課題へのフィード バック	必要に応じて個別、もしくは全体にコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

3-071

ナンバリング	期間	後期
授業科目名	ピアノ指導法研究(指導者課程)	
英訳科目名	Methods for Teaching Piano	
担当教員名	宮本 聖子	
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2 <技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー4 <関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6
授業概要・ポイント	導入から中級にいたるまでに使用する教則本や練習曲集を題材に、それぞれの教材から得られる技術的な特徴と音楽性を検証し、具体的な指導法を考察、研究する。	
到達目標	ピアノ初心者(主に子ども)を指導する上での問題点を理解し、それぞれの教本、楽曲を通して技術的、音楽的に向上させる指導法を考案、習得することができる。	
授業計画	第1回 ピアノ指導の教育的意義、幼児、児童を指導するに当たっての問題点の考察 第2～4回 導入教材 第5～6回 ハノン(スケールとアルペジオを中心に)、バーナム ピアノテクニク 第7～8回 ブルグミュラー 25の練習曲 第9～10回 ソナチネアルバム 第11回 プレインヴェンション 第12～13回 バッハ インヴェンションとシンフォニア 第14回 模擬レッスンで指導する曲の分析と対策 第15回 模擬レッスン	
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 70% レポート提出 30%	
失格条件	出席日数が2/3に満たない者	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	指示された教材、課題に目を通し、練習しておくこと。(予習時間 3時間) 問題意識を持って授業に臨んでください。	
課題へのフィード バック	模擬レッスン後、取り組みに対して個別にコメントします。	
教科書	各回の授業で使用する教本を各自準備してください	
著者名		
出版社		
参考書		
その他	導入期の指導法を研究するにあたり、ピアノ教材研究の授業で取り扱った教本の中から使用したい教本を選び、第1回目の授業が始まるまでに通知してください。	
備考		
科目生への開講	なし	

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

ナンバリング		期間	通年
授業科目名	鍵盤楽器アンサンブル (指導者課程)		
英訳科目名	Keyboard Ensemble		
担当教員名	山本 英二、釈迦郡 洋介		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー-2	<技能>
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	<p>主に連弾を通してアンサンブルを行う。 連弾のピアノ重奏はソロとはまた違った要素とされる。基本的要素（相手と合わせる、互いの音を聞くこと）から、バランス・構成・表現など、作品を通して実践を伴いながら研究し、また演奏する楽しみを感じながら学ぶ。 研究発表の場を設ける。基本（互いの音を聞き、合わせること）から、演奏をよりよくするために構成・バランス・表現等にポイントをおく。</p>		
到達目標	上記に述べたポイント等を踏まえながら演奏できる。		
授業計画	<p>第1回 基本的要素の理解、課題曲の決定 第2回 課題曲の実技指導 1 譜読みの確認 第3回 課題曲の実技指導 1 バランス 第4回 課題曲の実技指導 1 表情・表現 第5回 課題曲の実技指導 1 より深い音楽表現を求めて 第6回 課題曲の仕上げと、次の課題曲決め 第7回 課題曲の実技指導 2 譜読みの確認 第8回 課題曲の実技指導 2 バランス 第9回 課題曲の実技指導 2 表情・表現 第10回 課題曲の実技指導 2 より深い音楽表現を求めて 第11回 課題曲の仕上げと、次の課題曲決め 第12回 課題曲の実技指導 3 譜読みの確認 第13回 課題曲の実技指導 3 バランス 第14回 課題曲の実技指導 3 表情・表現 第15回 課題曲の実技指導 3 より深い音楽表現を求めて 第16回 課題曲の仕上げと、次の課題曲決め 第17回 課題曲の実技指導 4 譜読みの確認 第18回 課題曲の実技指導 4 バランス 第19回 課題曲の実技指導 4 表情・表現 第20回 課題曲の実技指導 4 より深い音楽表現を求めて 第21回 課題曲の仕上げと、次の課題曲決め 第22回 課題曲の実技指導 5 譜読みの確認 第23回 課題曲の実技指導 5 バランス 第24回 課題曲の実技指導 5 表情・表現 第25回 課題曲の実技指導 5 より深い音楽表現を求めて 第26回 年度末の試験曲の決定 第27回 試験曲の実技指導 譜読みの確認 第28回 試験曲の実技指導 バランス 第29回 試験曲の実技指導 表情・表現 第30回 試験曲の実技指導 より深い音楽表現を求めて</p> <p>*進度により曲数が変わることがある</p>		
評価方法 (合計100%)	試験 90% 授業への参加態度 10%		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者、及び試験を受けなかったもの。		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	連弾は二人で音楽を作り上げていくものである。 日頃から十分な時間をとり個人練習（予習復習）、そして二人での練習（予習復習）が必要です。		
課題へのフィードバック	レッスン形式であるので、毎回授業の中で個別、グループ毎にコメントします。		
教科書	楽譜を使用するが、必要な時はその都度指示する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	CP407A01	期間	前期
授業科目名	専攻実技 I (創作演奏)		
英訳科目名	Applied Music (Composition Performance) I		
担当教員名	創作演奏部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>電子オルガンコース 既存の曲をアレンジして演奏する。一年間で演奏＝表現するということを極めていく。多様な音色、機能を使うことも電子オルガンの魅力であるが、シンプルな音で丁寧に演奏表現することの大切さ、フレージングの感じ方などを研究していく。前期では、ピアノ曲を題材にオーケストレーション、後期では任意の曲に取り組みます。</p> <p>ピアノコース 管弦楽作品をピアノに編曲。ピアノソロ作品の制作 ピアノ技術を磨くだけではなく、創造性のある音楽を作る力を学ぶ。</p> <p>両コースとも演奏技術の拡充、そして幅広いジャンルの音楽に親しむ機会を多く持ち、それぞれのペースで学んでいく。自分自身の表現能力の充実を図る。</p>		
到達目標	演奏技術を磨くだけではなく電子オルガン、ピアノともに自分の表現したい音楽を演奏できる。		
授業計画	<p>両コースともに基本的に生徒と進路について相談しながら進めていく。</p> <p>第1回 オリエンテーション、曲の選択など 第2回 曲の選択 第3回 音源鑑賞 第4回 テクニックの充実 第4回 課題曲の決定 第5回 大まかなアレンジについてまとめ 第6回 音色設定 第7回 データについて 第8回 他のアレンジについての研究 第9回 演奏の充実 第10回 全体のバランス 第11回 多くのジャンルの曲に接する 第12回 名アレンジを鑑賞 第13回 課題曲の仕上げ① 第14回 課題曲の仕上げ② 第15回 最終的な仕上げ</p>		
評価方法 (合計100%)	平常所見、提出作品50% 試験50%		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者 譜面、レポート等の不提出。楽器運搬、リハーサルなど試験設営の協力を怠る。 特別な事由のある場合は申し出ること。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	基礎練習と多くのスタンダード作品に触れる。 普段から多種多様な音楽を聴いて演奏に活かすように心掛ける。 レッスンごとに予習復習に2時間以上学修すること。		
課題へのフィードバック	毎回レッスン内で個別にコメントします。		
教科書	授業内で指示する		
著者名			
出版社			
参考書	必要に応じ、その都度指示する。		
その他	提出課題は所定の期日の提出すること。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	CP407A02	期間	後期
授業科目名	専攻実技Ⅱ (創作演奏)		
英訳科目名	Applied Music (Composition Performance) Ⅱ		
担当教員名	創作演奏部門		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	<p>既存のクラシック作品、ポピュラー音楽などから作品を取り上げ分析する。 電子オルガンコース、ピアノコース共にまずは演奏技術の向上を目指し、 その上で幅広い音楽創造分野に取り組んでいく。</p> <p>電子オルガンコース 後期では前期で学習したスタンダード作品などを参考に、自ら曲を作り、他の楽器と一緒に演奏する。他の専攻の協力により、生楽器（弦楽器、管楽器など）とのアンサンブルによってアレンジや演奏技術を磨いていく。</p> <p>ピアノコース 後期 前期で学習した管弦楽曲などを参考に自ら作曲する。 ピアノと任意の楽器でデュオ作品の制作実習</p>		
到達目標	演奏力を磨くことだけでなく、自ら編曲力をつけることにより、音楽ジャンルの幅を広げることができる。他の専攻者とのアンサンブルにより、ソロだけでは学習できない、演奏技術編曲技術を磨くことができる。		
授業計画	<p>電子オルガンコース 第1回 前期で学習したスタンダード形式を参考に自作曲に生かす 第2回 好きな楽器を選択し、楽器について学ぶ 第3回 自作曲のアレンジ 第4回 選択した楽器とのバランスについて研究する 第5回 楽器を決める 第6回 参考音源を捜す 第7回 楽器のついて研究する 第8回 自分の楽器とバランスを考える 第9回 アレンジ、作曲① 第10回 アレンジ、作曲② 第11回 アレンジ、作曲③ 第12回 アレンジ仕上げ 第13回 アレンジ仕上げ 第14回 演奏合わせ 第15回 自作曲の仕上げ 生楽器とのコラボレーションを楽しむ</p> <p>ピアノコース 基本的には、担当教官と生徒で相談して内容を定める。 一例として前期には、ドビュッシー前奏曲より、任意の曲をピアノと任意の楽器で編曲、演奏 後期 ピアノと任意の楽器のデュオ作品の作曲、演奏</p>		
評価方法 (合計100%)	平常所見、提出作品、50% 試験50%		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者 譜面、レポート等の不提出。楽器運搬、リハーサルなど試験設営の協力を怠る。 特別な事由のある場合は申し出ること。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	任意の楽器奏者とのコラボレーションを経験するので 電子オルガン、ピアノ以外の楽器について研究しておく。 レッスンごとに2時間以上予習復習をおこなうこと。		
課題へのフィード バック	毎回レッスン内で個別にコメントします。		
教科書	授業内で指示する		
著者名			
出版社			
参考書	必要に応じ、その都度指示する。		
その他	提出課題は所定の期日の提出すること。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	CP407A03	期間	前期
授業科目名	専攻実技Ⅲ (創作演奏)		
英訳科目名	Applied Music (Composition Performance) Ⅲ		
担当教員名	創作演奏部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>既存のクラシック作品、ポピュラー音楽などから作品を取り上げ分析する。 電子オルガンコース 既成曲の演奏、アレンジになるべく多くの時間を費やし、曲を覚える。</p> <p>ピアノコース 管弦楽曲の分析、編曲 管弦楽曲をピアノで演奏するテクニックを養う。</p>		
到達目標	電子オルガンコース、ピアノコース共にまずは演奏技術の向上を目指し、その上で幅広い音楽創造分野に取り組んでいくことができる。		
授業計画	<p>電子オルガンコース 第1回 創作演奏1回生時に学んだスタンダード作品について復習 第2回 音源でのスタンダード曲鑑賞 第3回 アレンジについて研究 第4回 自分自身のアレンジについて 第5回 楽譜を書き理解する 第6回 自分の目指すアレンジについて 第7回 音楽表現としての充実 第8回 楽譜を仕上げる 第9回 試験曲の決定 第10回 試験曲の実践① 第11回 試験曲の実践② 第12回 試験曲の実戦③ 第13回 音色の設定や、リズムについておおまかなスケッチをする 第14回 データの最終仕上げ 第15回 試験についてまとめる</p> <p>ピアノコース 基本的には、担当教官と生徒で相談して曲目等を決める。 一例として前期には、ドビュッシー前奏曲より任意の曲を選び、15回のレッスンを通してピアノと任意の楽器による組合せで編曲を進め、演奏を行う 生徒の進路状況により変更することもある。</p>		
評価方法 (合計100%)	平常所見、提出作品50% 試験50%		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者 譜面、レポート等の不提出。楽器運搬、リハーサルなど試験設営の協力を怠る。 特別な事由がある場合は申し出ること。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	幅広いジャンルにおいてのスタンダード作品に興味を持っておく。(電子オルガン) ピアノ曲から室内楽や小編成アンサンブルに編曲されている作品を鑑賞する。(ピアノ) レッスンごとに毎回予習復習に2時間以上、学修すること。		
課題へのフィード バック	毎回レッスン内で個別にコメントします。		
教科書	授業内で指示する。		
著者名			
出版社			
参考書	必要に応じ、その都度指示する。		
その他	提出課題は所定の期日の提出すること。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	CP407A04	期間	後期
授業科目名	専攻実技Ⅳ (創作演奏)		
英訳科目名	Applied Music (Composition Performance) Ⅳ		
担当教員名	創作演奏部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>電子オルガンコース ピアノコース共通</p> <p>創作演奏という新しい分野で3年間学んだことを経て、自分の目指す音楽をより詳しく追及する。その目指す音楽を演奏技術、作曲、編曲それぞれの分野で発揮できるよう研究を重ねる。</p> <p>電子オルガンコース、ピアノコース共に演奏技術の向上を図り、各界の演奏者の比較、編曲などCDなどで参考にしながら自分の音楽を構築する。</p> <p>卒業後の進路を考え、それに合った内容を一人一人決めていきたい。自ら作曲して、演奏するというこの専攻で必須な即興演奏についても追及して、極めて行きたい。希望者にはヤマハグレードについても実践する。</p> <p>電子オルガン、ピアノでのアンサンブルや、既成の観念にとらわれない音楽にも挑戦していきたい。</p>		
到達目標	<p>社会に向けて自分の音楽と向き合うことができる。</p> <p>将来の活動に応じた研究をすることができる。</p>		
授業計画	<p>電子オルガン、ピアノコース共通</p> <p>第1回 卒業作品について</p> <p>第2回 卒業作品制作準備</p> <p>第3回 アンサンブルを楽しむ時の各楽器について学ぶ</p> <p>第4回 作曲とアレンジについて 音源を聞いて研究する</p> <p>第5回 アナリーゼ①</p> <p>第6回 アナリーゼ②</p> <p>第7回 自作曲実施①</p> <p>第8回 自作曲実施②</p> <p>第9回 自作曲のアレンジ①</p> <p>第10回 自作曲のアレンジ②</p> <p>第11回 選択した楽器とのバランスについて研究する①</p> <p>第12回 選択した楽器とのバランスについて研究する②</p> <p>第13回 共演者との合わせ</p> <p>第14回 卒業作品についてのまとめ</p> <p>第15回 演奏の完成</p>		
評価方法 (合計100%)	平常所見、提出作品50%、 試験50%		
失格条件	<p>出席日数が2/3に満たない者</p> <p>譜面、レポート等の不提出。楽器運搬、リハーサルなど試験設営の協力を怠る。</p> <p>特別な事由がある場合は申し出ること。</p>		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>将来の活動に応じた研究目標を作る。</p> <p>レッスンに必要な音楽研究の時間を持ち、予習復習に2時間以上学修すること。</p>		
課題へのフィード バック	毎回レッスン内で個別にコメントします。		
教科書	授業内で指示する		
著者名			
出版社			
参考書	必要に応じ、その都度指示する。		
その他	提出課題は所定の期日の提出すること。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	CP407B01	期間	前期
授業科目名	専攻実技Ⅴ(創作演奏)		
英訳科目名	Applied Music (Composition Performance) Ⅴ		
担当教員名	創作演奏部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>電子オルガンコース 前期(専攻実技Ⅲ)で学習したスタンダード作品などを参考に、自ら曲を作り、他の楽器と一緒に演奏する。他の専攻の協力により、生楽器(弦楽器、管楽器など)とのアンサンブルによってアレンジや演奏技術を磨いていく。</p> <p>ピアノコース 前期(専攻実技Ⅲ)で学習した管弦楽曲などを参考に自ら作曲する。 ピアノと任意の楽器でデュオ作品の制作実習</p>		
到達目標	電子オルガンコース、ピアノコース共にまずは演奏技術の向上を目指し、その上で幅広い音楽創造分野に取り組んでいくことができる。		
授業計画	<p>電子オルガンコース 第1回 オリエンテーション 第2回 前期で学習したスタンダード形式を参考に自作曲に生かす 第3回 興味のあるジャンルについて研究する 第4回 好きな楽器を選択し、楽器について学ぶ 第5回 名アレンジについて研究 第6回 アレンジを聞き取る① 第7回 アレンジを聞き取る② 第8回 自作曲のアレンジについて 第9回 自作のアレンジの実施 第10回 選択した楽器とのバランスについて研究する 第11回 参考音源で確認 第12回 テクニックの充実 第13回 音色の確認 第14回 データの確認 第15回 自作曲の仕上げ 可能なら生楽器とのコラボレーションを楽しむ</p> <p>ピアノコース 基本的には、担当教官と生徒で相談して曲の内容等を決める。 15回のレッスンを通してピアノと任意の楽器のデュオ作品の作曲を進め、演奏を行う。 ピアノソロでは体験できないアンサンブルについて演奏技術を学んでいく。 各自進路状況にあり変更する場合もある。</p>		
評価方法 (合計100%)	平常所見、提出作品50% 試験50%		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者 譜面、レポート等の不提出。楽器運搬、リハーサル等試験設営の協力を怠る。 特別な事由のある場合は申し出ること。		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	色々なスタイルで編曲されているスタンダード作品を鑑賞しておく。(電子オルガン) 興味のある作曲家のピアノ曲や室内楽曲を聴いてアナリーゼする。(ピアノ) レッスンごとに予習復習を2時間以上学修すること。		
課題へのフィード バック	毎回レッスン内で個別にコメントします。		
教科書	授業内で指示する		
著者名			
出版社			
参考書	必要に応じ、その都度指示する。		
その他	提出課題は所定の期日の提出すること。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	CP407B02	期間	後期
授業科目名	専攻実技Ⅵ (創作演奏)		
英訳科目名	Applied Music (Composition Performance) Ⅵ		
担当教員名	創作演奏部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>電子オルガンコース ピアノコース共通</p> <p>創作演奏という新しい分野で3年間学んだことを経て、自分の目指す音楽をより詳しく追及する。その目指す音楽を演奏技術、作曲、編曲それぞれの分野で発揮できるよう研究を重ねる。</p> <p>電子オルガンコース、ピアノコース共に演奏技術の向上を図り、各界の演奏者の比較、編曲などCDなどで参考にしながら自分の音楽を構築する。</p> <p>卒業後の進路を考え、それに合った内容を一人一人決めていきたい。自ら作曲して、演奏するというこの専攻で必須な即興演奏についても追及して、極めて行きたい。希望者にはヤマハグレードについても実践する。</p> <p>電子オルガン、ピアノでのアンサンブルや、既成の観念にとらわれない音楽にも挑戦していきたい。</p>		
到達目標	<p>社会に向けて自分の音楽と向き合うことができる。</p> <p>将来の活動に応じた研究をすることができる。</p>		
授業計画	<p>電子オルガン、ピアノコース共通</p> <p>第1回 卒業作品について</p> <p>第2回 卒業作品についてのまとめ</p> <p>第3回 アンサンブルを楽しむ時の各楽器について学ぶ</p> <p>第4回 自作曲のアレンジ①</p> <p>第5回 自作曲のアレンジ②</p> <p>第6回 自作曲のアレンジ③</p> <p>第7回 作品の仕上げ①</p> <p>第8回 作品の仕上げ②</p> <p>第9回 作品の仕上げ③</p> <p>第10回 選択した楽器とのバランスについて研究する①</p> <p>第11回 選択した楽器とのバランスについて研究する②</p> <p>第12回 作品の最終仕上げ</p> <p>第13回 卒業作品についてのまとめ</p> <p>第14回 合わせ</p> <p>第15回 演奏の完成</p>		
評価方法 (合計100%)	平常所見、提出作品50%、 試験50%		
失格条件	<p>出席日数が2/3に満たない者</p> <p>譜面、レポート等の不提出。楽器運搬、リハーサルなど試験設営の協力を怠る。</p> <p>特別な事由がある場合は申し出ること。</p>		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	<p>将来の活動に応じた研究目標を作る。</p> <p>多彩な音楽と向き合う時間を作り、レッスンごとに予習復習2時間以上をとること。</p>		
課題へのフィードバック	毎回レッスン内で個別にコメントします。		
教科書	授業内で指示する		
著者名			
出版社			
参考書	必要に応じ、その都度指示する。		
その他	提出課題は所定の期日の提出すること。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	CP407C01	期間	前期
授業科目名	専攻実技Ⅶ (創作演奏)		
英訳科目名	Applied Music (Composition Performance) Ⅶ		
担当教員名	創作演奏部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>電子オルガンコース ピアノコース共通</p> <p>創作演奏という新しい分野で3年間学んだことを経て、自分の目指す音楽をより詳しく追及する。その目指す音楽を演奏技術、作曲、編曲それぞれの分野で発揮できるよう研究を重ねる。</p> <p>電子オルガンコース、ピアノコース共に演奏技術の向上を図り、各界の演奏者の比較、編曲などCDなどで参考にしながら自分の音楽を構築する。</p> <p>卒業後の進路を考え、それに合った内容を一人一人決めていきたい。自ら作曲して、演奏するというこの専攻で必須な即興演奏についても追及して、極めて行きたい。希望者にはヤマハグレードについても実践する。</p> <p>電子オルガン、ピアノでのアンサンブルや、既成の観念にとらわれない音楽にも挑戦していきたい。</p>		
到達目標	<p>社会に向けて自分の音楽と向き合うことができる。</p> <p>将来の活動に応じた研究をすることができる。</p>		
授業計画	<p>電子オルガン、ピアノコース共通</p> <p>第1回 卒業作品について</p> <p>第2回 卒業作品についてのまとめ</p> <p>第3回 アンサンブルを楽しむ時の各楽器について学ぶ</p> <p>第4回 自作曲のアレンジ①</p> <p>第5回 自作曲のアレンジ②</p> <p>第6回 自作曲のアレンジ③</p> <p>第7回 作品の仕上げ①</p> <p>第8回 作品の仕上げ②</p> <p>第9回 作品の仕上げ③</p> <p>第10回 選択した楽器とのバランスについて研究する①</p> <p>第11回 選択した楽器とのバランスについて研究する②</p> <p>第12回 作品の最終仕上げ</p> <p>第13回 卒業作品についてのまとめ</p> <p>第14回 合わせ</p> <p>第15回 演奏の完成</p>		
評価方法 (合計100%)	平常所見、提出作品50%、 試験50%		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者 譜面、レポート等の不提出。楽器運搬、リハーサルなど試験設営の協力を怠る。 特別な事由のある場合は申し出ること。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	将来の活動に応じた研究目標を作る。 レッスンごとに興味のある音楽に接する機会を持ちし 予習復習に2時間以上の学修をすること。		
課題へのフィード バック	毎回レッスン内で個別にコメントします。		
教科書	授業内で指示する		
著者名			
出版社			
参考書	必要に応じ、その都度指示する。		
その他	提出課題は所定の期日の提出すること。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	CP407C02	期間	後期
授業科目名	専攻実技Ⅷ (創作演奏)		
英訳科目名	Applied Music (Composition Performance) Ⅷ		
担当教員名	創作演奏部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>電子オルガンコース ピアノコース共通</p> <p>創作演奏という新しい分野で3年間学んだことを経て、自分の目指す音楽をより詳しく追及する。その目指す音楽を演奏技術、作曲、編曲それぞれの分野で発揮できるよう研究を重ねる。</p> <p>電子オルガンコース、ピアノコース共に演奏技術の向上を図り、各界の演奏者の比較、編曲などCDなどで参考にしながら自分の音楽を構築する。</p> <p>卒業後の進路を考え、それに合った内容を一人一人決めていきたい。自ら作曲して、演奏するというこの専攻で必須な即興演奏についても追及して、極めて行きたい。希望者にはヤマハグレードについても実践する。</p> <p>電子オルガン、ピアノでのアンサンブルや、既成の観念にとらわれない音楽にも挑戦していきたい。</p>		
到達目標	<p>社会に向けて自分の音楽と向き合うことができる。</p> <p>将来の活動に応じた研究をすることができる。</p>		
授業計画	<p>電子オルガン、ピアノコース共通</p> <p>第1回 卒業作品について</p> <p>第2回 卒業作品についてのまとめ</p> <p>第3回 アンサンブルを楽しむ時の各楽器について学ぶ</p> <p>第4回 自作曲のアレンジ①</p> <p>第5回 自作曲のアレンジ②</p> <p>第6回 自作曲のアレンジ③</p> <p>第7回 作品の仕上げ①</p> <p>第8回 作品の仕上げ②</p> <p>第9回 作品の仕上げ③</p> <p>第10回 選択した楽器とのバランスについて研究する①</p> <p>第11回 選択した楽器とのバランスについて研究する②</p> <p>第12回 作品の最終仕上げ</p> <p>第13回 卒業作品についてのまとめ</p> <p>第14回 合わせ</p> <p>第15回 演奏の完成</p>		
評価方法 (合計100%)	平常所見、提出作品50%、 試験50%		
失格条件	<p>出席日数が2/3に満たない者</p> <p>譜面、レポート等の不提出。楽器運搬、リハーサルなど試験設営の協力を怠る。</p> <p>特別な事由のある場合は申し出ること。</p>		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>将来の活動に応じた研究目標を作る。</p> <p>積極的に目指す音楽の研鑽を積み、 予習復習等2時間以上をとること。</p>		
課題へのフィード バック	毎回レッスン内で個別にコメントします。		
教科書	授業内で指示する		
著者名			
出版社			
参考書	必要に応じ、その都度指示する。		
その他	提出課題は所定の期日の提出すること。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	CP407A05	期間	前期
授業科目名	創作演奏基礎演習		
英訳科目名	Seminar on Composition Performance		
担当教員名	藤村 亘		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>ここではまず、音楽大学での学び方や、音楽を自ら生み出し演奏するいわゆる『創作演奏』できる喜び、また音楽表現で大切な事などの基本的姿勢を身につけることから始める。</p> <p>まず色々なジャンルの曲をたくさん弾き、楽曲の成り立ちを様々な角度から研究し、アナリーゼの必要性を学ぶ。</p> <p>さらに、様々な角度から創作する事・演奏する事の魅力を学習者指導者共に十分体感する中で、やはり根底には理論が大切である事を認識していく。</p> <p>音楽は受け身では何も身につかない、とにかく全身全霊で音楽とぶつかり、自分のものとしていく姿勢を築いていきたい。</p>		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・基本的音楽理論、コードネームの復習 ・楽式について理解できる ・名曲をたくさん知る ・アナリーゼする姿勢を身につける 		
授業計画	<p>第1回 オリエンテーション、課題テスト</p> <p>第2回 理論トレーニング</p> <p>第3回 理論と演奏を同時に感じよう</p> <p>第4回 音楽の貯金をしよう①クラシック作品</p> <p>第5回 音楽の貯金をしよう②ポピュラー作品</p> <p>第6回 コードトレーニング</p> <p>第7回 様々なオルガンを知る</p> <p>第8回 『創る』魅力について</p> <p>第9回 演奏表現する意味</p> <p>第10回 アナリーゼとは？～分析の導入</p> <p>第11回 クラシック作品もポピュラー作品も大切な事は同じ～アナリーゼを習慣化しよう</p> <p>第12回 ピアノ小品分析練習①貴婦人の乗馬</p> <p>第13回 ピアノ小品分析練習②クーラウソナチネ</p> <p>第14回 ポピュラースタANDARD曲分析練習</p> <p>第15回 まとめ、内容理解の確認</p>		
評価方法 (合計100%)	<ul style="list-style-type: none"> ・授業への参加態度(10%) ・授業内発表(20%) ・提出物(30%) ・課題内容の理解度(40%) 		
失格条件	<ol style="list-style-type: none"> 1・レポートなど提出物の期限を守らない 2・試験を受けない、また試験に専攻生として協力しない 3・欠席6回以上で失格とする 		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>一番必要なのは、自ら理解するんだという自発的で前向きな姿勢です。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・普段から小品やスタンダード作品など、エッセンスのある音楽をたくさん聴き、感じ、考える(予習時間 2時間) ・コードネームや和音記号の習得、理論のおさらいを欠かさず、そして音楽の魅力を感じる(復習時間 2時間) 		
課題へのフィード バック	<ul style="list-style-type: none"> ・実施する授業内テスト、又は課題は、実施後返却し、解説します ・実習の取り組みについては、各個別にその場で批評コメントします 		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書	授業内配布資料など		
その他	・講義計画は学生の様子、専攻の流れを見ながら柔軟に対応していく。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	CP407A06	期間	後期
授業科目名	制作演習 I		
英訳科目名	Seminar on Music Produce I		
担当教員名	藤村 亘		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	前期の基礎演習で身につけた内容を生かした上で、制作演習を実際に行ってゆく。まずは形式を検証していくが、主に三部形式を扱いジャンル問わずアナリーゼを積極的に行い、学習者自身でディスカッションを重ねる中で楽式論的側面を固めてゆく。そして、ジャンル不問の三部形式的作品制作につなげてゆく。根幹となるのはやはりクラシック作品に存在するエッセンスとなるが、発想を柔軟に、ここから新しい音楽を生み出していくんだという感覚を身につけてもらいたい。		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・常にアナリーゼを意識して楽譜と向き合う姿勢を養うことができる。 ・お互いの視点を理解するキャパシティを備えることができる。 ・メロディ創作、楽曲制作に慣れることができる。 ・自作自演の創作演奏の精神を身につけることができる。 		
授業計画	第1回 アナリーゼ実習 第2回 アナリーゼのまとめ 第3回 アナリーゼレポート発表 第4回 アナリーゼについてのディスカッション 第5回 作曲という行為について 第6回 作曲の題材探し 第7回 素材にこだわる～モチーフの決定 第8回 楽節への発展 第9回 素材の活かし方～既存の作品の検証 第10回 専攻楽器で表現する意味 第11回 作品制作指導 第12回 作品音色制作指導 第13回 作品演奏指導 第14回 作品の試演 第15回 まとめ及び即興トレーニング 後期試験・オリジナル作品を演奏発表		
評価方法 (合計100%)	<ul style="list-style-type: none"> ・授業への参加態度(20%) ・レポート及びアナリーゼ発表の内容(40%) ・提出作品の内容及び演奏表現力(40%) 		
失格条件	1・レポートなど提出物の期限を守らない 2・試験を受けない、また試験に専攻生として協力しない 3・欠席6回以上で失格とする		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<ul style="list-style-type: none"> ・前期に学んだ内容を常におさらいする。 ・メロディを生み出す思考を育む。 ・感性を磨きながら創作演奏する姿勢につなげる(予習時間 3時間) ・アナリーゼのアプローチやスタンダード曲のメロディ構成・コード進行などの復習(復習時間 1時間) 		
課題へのフィード バック	<ul style="list-style-type: none"> ・授業内で実施する課題は、その都度個別に批評コメントします ・試験に向けての作品制作は、毎時間個別に詳しく解説し、先の制作に繋げてゆく 		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書	授業内配布資料など		
その他	講義計画は学生の進捗を見ながら、柔軟に対応していく。		
備考			
科目生への開講	なし		

3-083

ナンバリング	CP407B03	期間	前期
授業科目名	アナリーゼ演習		
英訳科目名	Seminar on Analysis		
担当教員名	佐井 孝彰		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	音楽にはさまざまな「形式」が存在する。 それらの「形式」についての理解を深めるために、作品の分析や実際に作曲することを通して学んでいく。 特に「ソナタ形式」に重点を置き、モチーフの展開手法に注目しながら授業をすすめたい。		
到達目標	作品を完成させることができる。		
授業計画	第1～4回 ソナタ形式の基礎知識 第5～8回 様々なソナタの分析(主にベートーヴェン) 第9～15回 ソナタ形式による作品制作		
評価方法 (合計100%)	試験100%		
失格条件	譜面、レポート等の不提出。 試験に出席、協力しない。		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	授業で紹介した作品等について、各自聴き直し等の再確認をすること		
課題へのフィード バック	実技・実習の取り組みに対して個別にコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書	必要に応じ、その都度指示する		
その他	提出課題は所定の期日に提出すること		
備考			
科目生への開講	なし		

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

3-084

ナンバリング	CP407B04	期間	後期
授業科目名	制作演習Ⅱ		
英訳科目名	Seminar on Music Produce Ⅱ		
担当教員名	佐井 孝彰		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	音楽にはさまざまな「形式」が存在する。 それらの「形式」についての理解を深めるために、作品の分析や実際に作曲することを通して学んでいく。 特に「ソナタ形式」に重点を置き、モチーフの展開手法に注目しながら授業をすすめたい。		
到達目標	作品を完成させることができる。		
授業計画	第1～4回 自由なソナタ形式で書かれた作品の分析 第6～15回 自由なソナタ形式による作品制作		
評価方法 (合計100%)	試験100%		
失格条件	譜面、レポート等の不提出。 試験に出席、協力しない。		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	授業で紹介した作品等について、各自聴き直し等の再確認をすること		
課題へのフィード バック	実技・実習の取り組みに対して個別にコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書	必要に応じ、その都度指示する		
その他	提出課題は所定の期日に提出すること		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	CP407B05	期間	前期
授業科目名	サウンド制作演習		
英訳科目名	Seminar on Sound Production		
担当教員名	山田 夏		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	各自の専攻楽器での「創作+演奏する」といった普段のスタイルに、「DAWソフトウェア」という新たなアイテムを加えて創作する力をつけ、可能性を広げていくことができるようにDAWソフトを使用しての制作をします。		
到達目標	DAWソフトウェアの操作方法を習得し、今後の作品作り（作曲や編曲）に生かすことができる。インターネット音楽配信サービスなどの活用ができる知識を増やすことができる。		
授業計画	<p>第1回 オリエンテーション 第2回 PCとソフトウェアの基本操作 第3回 自作曲（2回生時に作曲したもの）の楽器編成等の再構築 第4～10回 Logicで各パートのMIDI入力 第11～12回 Audio録音 第13～15回 ミキシング、mp3データ作成と応用</p> <p>*DAW ソフトウェア、プラグイン音源、音楽配信サービスなどの最新状況（適宜更新） *DAW ソフトウェアなどが使われる現場状況 *シンセサイザーの歴史 *MIDIについて *エフェクターの基本について など扱います。</p>		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 50% 提出作品内容 50%		
失格条件	1.5回以上の欠席。 2.提出物の未提出。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	1、授業時間内に積極的にPC操作をすること。時間外での制作は不可。 2、疑問点はその都度クリアにすること。 3、各種コンテンツ、映像、ゲーム、などのBGMの使われ方など、少し注意して聴いてみてください。 4、フリーのアプリ、ソフトウェアなど授業中に紹介します。各自できる範囲で（ダウンロードは自己責任となります）DTMを活用して欲しいと思います。		
課題へのフィードバック	課題制作中は個別にコメントします。課題提出後、全体、また個人に向けてコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

3-086

ナンバリング	CP407B06	期間	後期
授業科目名	スコア制作演習		
英訳科目名	Seminar on Score Production		
担当教員名	佐井 孝彰		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	ピアノやオルガンなどの鍵盤楽器のために書かれた作品を管弦楽に編曲する技能の習得と室内楽曲の作曲を行なう。 オーケストラを編成する諸楽器の基礎知識への理解を深め、さまざまな楽器の組み合わせによる音色の変化や、その際に注意すべき事柄などを分析や編曲・作曲を通して学んでいく。		
到達目標	それぞれの楽器の特徴を生かした編曲・作曲ができる。		
授業計画	第1回 オーケストレーションの基礎知識、スコアの書き方 第2回 各楽器群の奏法・記譜法の研究 第3～12回 作品制作（室内楽曲の作曲） 第13～15回 小編成管弦楽曲の編曲		
評価方法 (合計100%)	平常所見、提出作品、試験等を総合的に評価する。		
失格条件	譜面、レポートの不提出 試験に出席・協力しない		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	日常的にたくさんの作品を聴き、それらの作品から学んだことを自らの作品に生かすこと。		
課題へのフィード バック	実技・実習の取り組みに対して個別にコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書	必要に応じ、その都度指示		
その他	提出課題は、所定の期日に提出すること		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	CP407C03	期間	前期
授業科目名	作品研究 I		
英訳科目名	Study of works I		
担当教員名	創作演奏部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>電子オルガンコース 前期（専攻実技Ⅲ）で学習したスタンダード作品などを参考に、自ら曲を作り、他の楽器と一緒に演奏する。他の専攻の協力により、生楽器（弦楽器、管楽器など）とのアンサンブルによってアレンジや演奏技術を磨いていく。</p> <p>ピアノコース 前期（専攻実技Ⅲ）で学習した管弦楽曲などを参考に自ら作曲する。 ピアノと任意の楽器でデュオ作品の制作実習</p>		
到達目標	電子オルガンコース、ピアノコース共にまずは演奏技術の向上を目指し、その上で幅広い音楽創造分野に取り組んでいくことができる。		
授業計画	<p>電子オルガンコース 第1回 オリエンテーション 第2回 前期で学習したスタンダード形式を参考に自作曲に生かす 第3回 興味のあるジャンルについて研究する 第4回 好きな楽器を選択し、楽器について学ぶ 第5回 名アレンジについて研究 第6回 アレンジを聞き取る① 第7回 アレンジを聞き取る② 第8回 自作曲のアレンジについて 第9回 自作のアレンジの実施 第10回 選択した楽器とのバランスについて研究する 第11回 参考音源で確認 第12回 テクニックの充実 第13回 音色の確認 第14回 データの確認 第15回 自作曲の仕上げ 可能なら生楽器とのコラボレーションを楽しむ</p> <p>ピアノコース 基本的には、担当教官と生徒で相談して曲の内容等を決める。 15レッスンを通してピアノと任意の楽器のデュオ作品の作曲を進め、演奏を行う。 ピアノソロでは体験できないアンサンブルについて演奏技術を学んでいく。 各自進路状況にあり変更する場合もある。</p>		
評価方法 (合計100%)	平常所見、提出作品50% 試験50%		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者 譜面、レポート等の不提出。楽器運搬、リハーサルなど試験設営に協力を怠る者。特別な事由があるときは申しでること。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	色々なスタイルで編曲されているスタンダード作品を鑑賞しておく。（電子オルガン） 興味のある作曲家のピアノ曲や室内楽曲を聴いてアナリゼする。（ピアノ）		
課題へのフィード バック	毎回レッスン時に参考資料や取り組みについて個別にコメントします。		
教科書	授業内で指示する		
著者名			
出版社			
参考書	必要に応じ、その都度指示する。		
その他	提出課題は所定の期日の提出すること。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	CP407C04	期間	後期
授業科目名	作品研究Ⅱ		
英訳科目名	Study of works Ⅱ		
担当教員名	創作演奏部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>電子オルガンコース 前期（専攻実技Ⅲ）で学習したスタンダード作品などを参考に、自ら曲を作り、他の楽器と一緒に演奏する。他の専攻の協力により、生楽器（弦楽器、管楽器など）とのアンサンブルによってアレンジや演奏技術を磨いていく。</p> <p>ピアノコース 前期（専攻実技Ⅲ）で学習した管弦楽曲などを参考に自ら作曲する。 ピアノと任意の楽器でデュオ作品の制作実習</p>		
到達目標	電子オルガンコース、ピアノコース共にまずは演奏技術の向上を目指し、その上で幅広い音楽創造分野に取り組むことができる。		
授業計画	<p>電子オルガンコース 第1回 オリエンテーション 第2回 前期で学習したスタンダード形式を参考に自作曲に生かす 第3回 興味のあるジャンルについて研究する 第4回 好きな楽器を選択し、楽器について学ぶ 第5回 名アレンジについて研究 第6回 アレンジを聞き取る① 第7回 アレンジを聞き取る② 第8回 自作曲のアレンジについて 第9回 自作のアレンジの実施 第10回 選択した楽器とのバランスについて研究する 第11回 参考音源で確認 第12回 テクニックの充実 第13回 音色の確認 第14回 データの確認 第15回 自作曲の仕上げ 可能なら生楽器とのコラボレーションを楽しむ</p> <p>ピアノコース 基本的には、担当教官と生徒で相談して曲の内容等を決める。 15回のレッスンを通してピアノと任意の楽器のデュオ作品の作曲を進め、演奏を行う。 ピアノソロでは体験できないアンサンブルについて演奏技術を学んでいく。 各自進路状況にあり変更する場合もある。</p>		
評価方法 (合計100%)	平常所見、提出作品50% 試験50%		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者 譜面、レポート等の不提出。楽器運搬、リハーサルなど試験設営の協力を怠る。 特別な事由のある場合は申し出ること。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	色々なスタイルで編曲されているスタンダード作品を鑑賞しておく。（電子オルガン） 興味のある作曲家のピアノ曲や室内楽曲を聴いてアナリーゼする。（ピアノ） 作品研究をレッスンごとに2時間以上の学修をすること。		
課題へのフィード バック	毎回レッスン内で個別にコメントします。		
教科書	授業内で指示する		
著者名			
出版社			
参考書	必要に応じ、その都度指示する。		
その他	提出課題は所定の期日の提出すること。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	CP407A07	期間	通年
授業科目名	副科実技 I		
英訳科目名	Secondary I		
担当教員名	創作演奏部門		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> -
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	<p>創作演奏専攻は自作自演で学習する専攻なので、複数の楽器の演奏技術を身につける事により、より確実にその目的を達成することが可能である。</p> <p>ピアノ・コースは電子オルガンの基礎的演奏技術をマスターする。</p> <p>各自学生のレベルに合った内容に応じる。</p> <p>ピアノ・コースでは、電子オルガンの市販楽譜を利用するだけでなく、学生の能力にあわせて、編曲も行う事がある。</p> <p>電子オルガン・コースはクラシックピアノの演奏法を学ぶことにより、よりの確なテクニックを身につけることにより、演奏技術の向上に充てることとする。</p> <p>又、普段あまり演奏することのない他ジャンルの作品に触れる機会となり、音楽的な視野が広がる。</p>		
到達目標	専門楽器以外の技術を磨くことによりテクニックの充実と、作編曲の表現向上に役に立つことができる。		
授業計画	<p>ピアノコースは電子オルガンの基礎知識、導入、簡単なアレンジなども行うこともある。</p> <p>各自の経験、能力により柔軟に対応する。</p> <p>電子オルガンコースは、ピアノのテクニックをつけクラシック作品を学ぶ。</p> <p>お互いに普段あまり接することのない音楽にも触れることにより、音楽的視野を広げることを目指す。</p> <p>第1回 オリエンテーション</p> <p>第2回 テクニックの充実、練習曲</p> <p>第3回 曲の実践①</p> <p>第4回 曲の実践②</p> <p>第5回 曲の実戦③</p> <p>第6回 課題曲の決定</p> <p>第7回 課題曲についての研究①</p> <p>第8回 課題曲についての研究②</p> <p>第9回 課題曲についての研究③</p> <p>第10回 音源の鑑賞</p> <p>第11回 課題曲の仕上げ①</p> <p>第12回 課題曲の仕上げ②</p> <p>第13回 課題曲の仕上げ③</p> <p>第14回 全体的なまとめ</p> <p>第15回 最終的な演奏仕上げ</p> <p>第16回 新しい分野の曲を体験</p> <p>第17回 曲のアナリーゼ①</p> <p>第18回 曲のアナリーゼ②</p> <p>第19回 アナリーゼと鑑賞①</p> <p>第20回 アナリーゼと鑑賞②</p> <p>第21回 テクニックの充実①</p> <p>第22回 テクニックの充実②</p> <p>第23回 課題曲についての作品研究①</p> <p>第24回 課題曲についての作品研究②</p> <p>第25回 作品のまとめ</p> <p>第26回 最終仕上げ①</p> <p>第27回 最終仕上げ②</p> <p>第28回 暗譜</p> <p>第29回 全体的なバランス調整</p> <p>第30回 演奏の完成</p> <p>生徒により内容を変更する場合がある。</p>		
評価方法 (合計100%)	平常所見、提出作品50% 試験50%		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者 譜面、レポート等の不提出。 試験のリハーサル、協力を怠る。 特別な事由のある場合は申し出ること。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	なるべくそれぞれ副科の楽器にふれて親しんでおく。 基礎テクニックの稽古をする。 レッスンごとに予習復習2時間以上は学修すること。		
課題へのフィード バック	毎回レッスン内で個別にコメントします。		
教科書	授業内で指示する		
著者名			
出版社			
参考書	必要に応じ、その都度指示する		
その他	提出課題は所定の期日に提出すること		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	CP407B07	期間	通年
授業科目名	副科実技Ⅱ		
英訳科目名	SecondaryⅡ		
担当教員名	創作演奏部門		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	<p>創作演奏専攻は自作自演で学習する専攻なので、複数の楽器の演奏技術を身につける事により、より確実にその目的を達成することが可能である。</p> <p>ピアノ・コースは電子オルガンの基礎的演奏技術をマスターする。</p> <p>各自学生のレベルに合った内容に応じる。</p> <p>ピアノ・コースでは、電子オルガンの市販楽譜を利用するだけでなく、学生の能力にあわせて、編曲も行う事がある。</p> <p>電子オルガン・コースはクラシックピアノの演奏法を学ぶことにより、よりの確かなテクニックを身につけることにより、演奏技術の向上に充てることとする。</p> <p>又、普段あまり演奏することのない他ジャンルの作品に触れる機会となり、音楽的な視野が広がる。</p>		
到達目標	電子オルガン、ピアノそれぞれお互いの楽器技術を磨くことによりテクニックの強化、表現力の向上に有効となる。		
授業計画	<p>ピアノコースは電子オルガンの基礎知識、導入、簡単なアレンジなども行うこともある。</p> <p>各自の経験、能力により柔軟に対応する。</p> <p>電子オルガンコースは、ピアノのテクニックをつけクラシック作品を学ぶ。</p> <p>お互いに普段あまり接することのない音楽にも触れることにより、音楽的視野を広げることを目指す。</p> <p>第1回 オリエンテーション</p> <p>第2回 テクニックの充実、練習曲①</p> <p>第3回 テクニックの充実、練習曲②</p> <p>第4回 テクニックの充実、練習曲③</p> <p>第5回 課題曲の決定</p> <p>第6回 課題曲の実施①</p> <p>第7回 課題曲の実施②</p> <p>第8回 課題曲の実施③</p> <p>第9回 課題曲の実施④</p> <p>第10回 鑑賞、編曲を経て課題曲の仕上げ①</p> <p>第11回 鑑賞、編曲を経て課題曲の仕上げ②</p> <p>第12回 鑑賞、編曲を経て課題曲の仕上げ③</p> <p>第13回 作品のまとめ。</p> <p>第14回 仕上げ</p> <p>第15回 最終仕上げ</p> <p>第16回 新しい分野の曲を体験</p> <p>第17回 新しい分野の曲を実践①</p> <p>第18回 新しい分野の曲を実践②</p> <p>第19回 新しい分野の曲を実践③</p> <p>第20回 課題曲について作品研究①</p> <p>第21回 課題曲について作品研究②</p> <p>第22回 課題曲について作品研究③</p> <p>第23回 課題曲について作品研究④</p> <p>第24回 鑑賞①</p> <p>第25回 鑑賞②</p> <p>第26回 課題曲の仕上げ①</p> <p>第27回 課題曲の仕上げ②</p> <p>第28回 課題曲の仕上げ③</p> <p>第29回 暗譜</p> <p>第30回 最終的な演奏仕上げ</p> <p>生徒各自により変更することもある。</p>		
評価方法 (合計100%)	平常所見、提出作品50%、 試験50%		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者 譜面、レポート等の不提出。 試験のリハーサル、協力を怠る。 特別な事由のある場合は申し出ること。		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	電子オルガン、ピアノそれぞれの楽器に触れる時間を作り 親しんでおくこと。 基礎テクニックをつける練習をすること。 毎回レッスンごとに予習復習2時間以上学修すること。		
課題へのフィード バック	毎回レッスン内で個別にコメントします。		
教科書	授業内で指示する		
著者名			
出版社			
参考書	必要に応じ、その都度指示する		
その他	提出課題は所定の期日に提出すること		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	CP408A03	期間	通年
授業科目名	副科学研究 I		
英訳科目名	Secondary I		
担当教員名	創作演奏部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>創作演奏専攻は自作自演で学習する専攻なので、複数の楽器の演奏技術を身につける事により、より確実にその目的を達成することが可能である。</p> <p>ピアノ・コースは電子オルガンの基礎的演奏技術をマスターする。 各自学生のレベルに合った内容に応じる。 ピアノ・コースでは、電子オルガンの市販楽譜を利用するだけでなく、学生の能力にあわせて、編曲も行う事がある。</p> <p>電子オルガン・コースはクラシックピアノの演奏法を学ぶことにより、よりの確かなテクニックを身につけることにより、演奏技術の向上に充てることとする。 又、普段あまり演奏することのない他ジャンルの作品に触れる機会となり、音楽的な視野が広がる。</p>		
到達目標	専門外の楽器にも親しんで、基礎的な技術を身に付けることができる。		
授業計画	<p>ピアノコースは電子オルガンの基礎知識、導入、簡単なアレンジなども行うこともある。 各自の経験、能力により柔軟に対応する。 電子オルガンコースは、ピアノのテクニックをつけクラシック作品を学ぶ。 お互いに普段あまり接することのない音楽にも触れることにより、音楽的視野を広げることを目指す。</p> <p>第1回 オリエンテーション 第2～5回 テクニックの充実、練習曲 第6～8回 課題曲決める。 第9～13回 鑑賞、編曲を経て課題曲の仕上げ 第14～15回 作品のまとめ。 第16～20回 新しい分野の曲を体験 第21～28回 課題曲について作品研究 第29～30回 作品のまとめ 学生によってレッスンの内容を決めていきます。</p>		
評価方法 (合計100%)	平常所見、提出作品50% 試験50%		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者 譜面、レポート等の不提出。 試験のリハーサル、協力を怠る。 特別な事由がある場合は申し出ること。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	それぞれの楽器でスケールカデンツ等 基礎的な稽古をしておく。 練習曲などでテクニックを磨く。 レッスンごとに予習復習に2時間以上学修すること。		
課題へのフィード バック	毎回レッスン内で個別にコメントします。		
教科書	各自に応じたものを指示する。		
著者名			
出版社			
参考書	必要に応じ、その都度指示する		
その他	提出課題は所定の期日に提出すること		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	CP408B03	期間	通年
授業科目名	副科学研究Ⅱ		
英訳科目名	Secondary Ⅱ		
担当教員名	創作演奏部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>創作演奏専攻は自作自演で学習する専攻なので、複数の楽器の演奏技術を身につける事により、より確実にその目的を達成することが可能である。</p> <p>ピアノ・コースは電子オルガンの基礎的演奏技術をマスターする。 各自学生のレベルに合った内容に応じる。 ピアノ・コースでは、電子オルガンの市販楽譜を利用するだけでなく、学生の能力にあわせて、編曲も行う事がある。</p> <p>電子オルガン・コースはクラシックピアノの演奏法を学ぶことにより、よりの確かなテクニックを身につけることにより、演奏技術の向上に充てることとする。 又、普段あまり演奏することのない他ジャンルの作品に触れる機会となり、音楽的な視野が広がる。</p>		
到達目標	専門外の楽器にも親しんで、基礎的な技術を身に付けることができる。		
授業計画	<p>ピアノコースは電子オルガンの基礎知識、導入、簡単なアレンジなども行うこともある。 各自の経験、能力により柔軟に対応する。 電子オルガンコースは、ピアノのテクニックをつけクラシック作品を学ぶ。 お互いに普段あまり接することのない音楽にも触れることにより、音楽的視野を広げることを目指す。</p> <p>第1回 オリエンテーション 第2～5回 テクニックの充実、練習曲 第6～8回 課題曲決める。 第9～13回 鑑賞、編曲を経て課題曲の仕上げ 第14～15回 作品のまとめ。 第16～20回 新しい分野の曲を体験 第21～28回 課題曲について作品研究 第29～30回 作品のまとめ</p>		
評価方法 (合計100%)	平常所見、提出作品50% 試験50%		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者 譜面、レポート等の不提出。 試験のリハーサル、協力を怠る。 特別な事由がある場合は申し出ること。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	それぞれの楽器でスケールカデンツ等 基礎的な稽古しておく。 練習曲などでテクニックを磨く。 レッスンごとに予習復習を2時間以上学修すること。		
課題へのフィード バック	毎回レッスン内で個別にコメントします。		
教科書	各自に応じたものを指示する。		
著者名			
出版社			
参考書	必要に応じ、その都度指示する		
その他	提出課題は所定の期日に提出すること		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	CP408A01	期間	前期
授業科目名	アンサンブル I A		
英訳科目名	Ensemble I A		
担当教員名	藤村 亘		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	授業名こそアンサンブルとなっているが、アンサンブルをただ実施するだけの従来の授業とは一線を画す。創作演奏で学び、音楽と向き合ってきた中で、今こそ、改めてスタンスを見つめてみてほしい。私達が音楽で、また専攻楽器を活かして何が出来るのかをも含めて、アンサンブルを通して考えていく。		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・アンサンブルのまとめ方、サウンド作りを理解することができる。 ・多彩なアーティストの楽曲に触れ、視野を広げることができる。 ・スコアの書式を知ることができる。 		
授業計画	第1回 オリエンテーション 第2回 過去のアンサンブルの課題 第3回 様々な状況での演奏ケース① ポピュラーの小編成からビッグバンドまで 第4回 様々な状況での演奏ケース② クラシックの室内楽編成 第5回 クラシック作品の扱い方 第6回 ポピュラー作品の扱い方 第7回 クラシック作品の実践① 譜読みとパート練習 第8回 クラシック作品の実践② 表現方法、まとめ方 第9回 ポピュラー作品の実践① リズム体のとらえ方 第10回 ポピュラー作品の実践② 各セクションのポイントを理解する 第11回 スコアの書式 第12回 スコアメイク リズムパート 第13回 スコアメイク ハーモニーの配置 第14回 スコアメイク 全体のバランス 第15回 演奏発表		
評価方法 (合計100%)	<ul style="list-style-type: none"> ・授業への参加態度(50%) ・リハーサル、試験当日の協力及び演奏内容(50%) 		
失格条件	<ul style="list-style-type: none"> ・提出期限を守らない ・リハーサル、試験前日当日に理由無く来ない ・欠席6回以上で失格とする 		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<ul style="list-style-type: none"> ・ジャンルの偏見無く色々な音楽をよく聴き込む習慣をつける(予習時間 2時間) ・授業で指摘を受けた部分の修整、奏法のおさらいなど音楽力向上に努める(復習時間 2時間) 		
課題へのフィード バック	<ul style="list-style-type: none"> ・授業内での演奏実践時は、その都度批評、コメントし、先の機会に役立てられるようにします ・試験終了後、全体又は個別にコメントします 		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書	授業内配布資料		
その他	・授業内容は、専攻全体の動きと履修者の状況を見ながら柔軟に対応する		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	CP408A02	期間	後期
授業科目名	アンサンブル I B		
英訳科目名	Ensemble I B		
担当教員名	藤村 亘		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	前期の経験や学習を踏まえ、後期は応用・実践を目指す。 演奏会やコンサート、ライブの企画立案なども含め、総合的な実践力・行動力を身につけることを目指す。		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・様々なコンサートを調べ、知識を深めることができる。 ・専攻楽器の長所と短所を掴むことができる。 ・積極的な企画能力、プレゼンテーション能力を養うことができる。 ・バンドメンバーとしての礼儀や対応、協調性を身につけることができる。 		
授業計画	第1回 オリエンテーション～前期に判明した課題など 第2回 アンサンブル実践演習① 選曲、その作品の概略について 第3回 アンサンブル実践演習② 音出し、ディスカッション 第4回 アンサンブル実践演習③ アレンジの修整法 第5回 アンサンブル実践演習④ 演奏表現のまとめ、仕上げ 第6回 電子オルガンの現状と課題 第7回 バンドメンバーとしての振る舞いとマナー 第8回 制作のプロセスを知る～レコーディングの実際 第9回 企画立案、プレゼンテーション 第10回 スコアメイク 第11回 サウンドメイク 第12回 経過報告 第13回 サウンド修整、確認 第14回 リハーサル 第15回 試演会 試験 アンサンブル作品含めたライブ制作		
評価方法 (合計100%)	<ul style="list-style-type: none"> ・授業への参加態度(50%) ・リハーサル、試験当日の協力及び演奏内容(50%) 		
失格条件	<ul style="list-style-type: none"> ・提出期限を守らない ・リハーサル、試験前日当日に理由無く来ない ・欠席6回以上で失格とする 		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<ul style="list-style-type: none"> ・ジャンルの偏見無く色々な音楽をよく聴き込む習慣をつける(予習時間 2時間) ・授業で指摘を受けた部分の修整、奏法のおさらいなど音楽力向上に努める(復習時間 2時間) 		
課題へのフィード バック	<ul style="list-style-type: none"> ・授業内での演奏実践時は、その都度批評、コメントします ・試験後の授業で全体または個別にコメントします 		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書	授業内配布資料		
その他	・授業内容は、専攻全体の動きと履修者の状況を見ながら柔軟に対応する		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	CP408B01	期間	前期
授業科目名	アンサンブルⅡA		
英訳科目名	EnsembleⅡA		
担当教員名	藤村 亘		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	【授業概要・ポイント】 アンサンブルⅡAは、前年度履修したアンサンブルⅠを継承した内容で、さらにレベルアップを図っていく。具体的には、既存のアンサンブルを、出来る限り短時間で仕上げていくポイントを学んだり、コード譜のみのパート譜からアンサンブルする応用力を身につける。同時に卒業試験に向けて準備すべきことをまとめてゆく。		
到達目標	【到達目標】 ・アンサンブルを短時間で仕上げるポイントを理解出来る。 ・コード譜のみからセッション出来る。 ・多彩なアーティストの楽曲に触れ、特徴やこだわりを学ぶ		
授業計画	【授業計画】 第1回 オリエンテーションと目標設定 第2回 アンサンブル作品の選定と計画策定 第3回 アンサンブル実習～その① 小編成のもの 第4回 アンサンブル実習～その② 大編成のもの 第5回 アンサンブル実習～その③ ポピュラー的楽曲 第6回 アンサンブル実習～その④ ジャズテイストの作品 第7回 セッション実習～その① コード譜のみの楽譜から読み取る 第8回 セッション実習～その② 他の音をよく聴き、そしてどう対応すべきか 第9回 セッション実習～その③ セッションから広げるアレンジ 第10回 アーティストのこだわり～音楽を組み立てていくということ 第11回 アンサンブル応用～① 演奏を仕上げる 第12回 アンサンブル応用～② サウンドバランスの確認 第13回 セッション応用～① スタンダード作品の扱い方 第14回 セッション応用～② 実際に挑戦 第15回 内容確認の理解～授業内試演会		
評価方法 (合計100%)	【評価方法】 ・授業への参加状況(20%) ・アンサンブル作品への意欲と取り組み(40%) ・アンサンブル演奏の仕上がりが(40%)		
失格条件	【失格条件】 ・欠席6回以上で失格とする ・アンサンブルへの協力姿勢が見られない ・提出物の期限が守れない		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	【予習・復讐の準備学習などのアドバイス】 ・普段からジャンルの偏見無く、色々な音楽をよく聴き込む(2時間～3時間) ・短時間で仕上げていく為の準備や練習を積み重ねていくこと(2～3時間)		
課題へのフィード バック	【課題へのフィードバック】 ・授業内での演奏実践時は、その都度批評、コメントし、先の機会に役立てられるようにします ・課題実施後の授業で全体にコメントします		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書	【参考書】 授業内配布資料、楽譜、スコア		
その他	【その他】 ・提出期限は厳守すること ・授業内容は、専攻全体の動きを見ながら柔軟に対応する		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	CP408B02	期間	後期
授業科目名	アンサンブルⅡB		
英訳科目名	EnsembleⅡB		
担当教員名	藤村 亘		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>【授業概要・ポイント】</p> <p>アンサンブルⅡBは、ⅡAで経験したことを確かなものにする為、実際にオリジナルアレンジによるアンサンブルスコアの作成・試演、さらには自作作曲をセッションしながら音楽を構築していく、そのいずれかを試験課題として取り組んでゆく。</p>		
到達目標	<p>【到達目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オリジナルアレンジによるアンサンブルスコアを作成出来る。 ・セッションしながらヘッドアレンジしていくプロセスを理解する ・多彩なアーティストの楽曲に触れ、アレンジのコンセプトを学習する 		
授業計画	<p>【授業計画】</p> <p>第1回 ディスカッション～前期に学んだことと見えた課題、後期のビジョン策定</p> <p>第2回 アーティストの作品からアレンジコンセプトを学ぶ</p> <p>第3回 セッションしながらアレンジを考える～その①・編成、リズムセクションの設定</p> <p>第4回 セッションしながらアレンジを考える～その②・具体的なアレンジアプローチについて</p> <p>第5回 ここまでのまとめ～試験課題について</p> <p>第6回 スコアメイク～その① 編成を決める、スコア作成のルール</p> <p>第7回 スコアメイク～その② オリジナリティをどこに求めるか</p> <p>第8回 スコアメイク～その③ 音出ししながら考える(ドラムパートの作成、サウンドバランスの留意点)</p> <p>第9回 セッションアレンジ試演</p> <p>第10回 修整ポイントの洗い出し、対策</p> <p>第11回 スコア及びサウンドの修整作業</p> <p>第12回 リハーサル</p> <p>第13回 リハーサルでの問題点の確認</p> <p>第14回 最終確認、トータルの表現の在り方について</p> <p>第15回 まとめと演奏試験</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>【評価方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業への参加状況(20%) ・提出作品(40%) ・試験に向けての協力性及び演奏表現(40%) 		
失格条件	<p>【失格条件】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スコアなどの提出期限を守らない ・試験に出席しない、また協力姿勢が見られない ・欠席6回以上で失格とする 		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	<p>【予習・復習の準備、学者などのアドバイス】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・普段から色々なジャンルや編成の音楽に触れ、自分なりに構成や特徴をまとめていくと良いでしょう(2時間) ・メンバーに迷惑かけないよう欠かさずパート練習すること(4時間) 		
課題へのフィード バック	<p>【課題へのフィードバック】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業内での演奏実践時は、その都度コメント、批評し、先の機会に役立てられるようにします ・試験実施後の授業で全体にコメントします 		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書	【参考書】 授業内配布資料、楽譜、スコア		
その他	<p>【その他】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・提出期限は厳守すること ・授業内容は、専攻の様子や学生の希望などを踏まえ柔軟に対応する 		
備考			
科目生への開講	なし		

3-097

ナンバリング	OR407A01	期間	前期
授業科目名	専攻実技 I (オルガン)		
英訳科目名	Applied Music (Organ) I		
担当教員名	山本 真希		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	基礎的なオルガン演奏技術の習得を目指す。ドイツバロック時代の作品、J.S.バッハの初期の自由作品に取り組む。		
到達目標	上記に述べたポイント等を理解しながら演奏できる。		
授業計画	第1～15回 17,18世紀北ドイツの作品、J.S.バッハの自由作品を中心に学び、バロック時代の様式、演奏基礎技術を習得する。		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度		
失格条件	出席日数が3分の2に満たないもの。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	レッスンで指摘されたことを充分確認すること。レッスンのため十分な準備を行うこと。		
課題へのフィード バック	課題の確認と改善		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

3-098

ナンバリング	OR407A02	期間	後期
授業科目名	専攻実技Ⅱ (オルガン)		
英訳科目名	Applied Music (Organ) II		
担当教員名	山本 真希		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	Iで習得した基礎演奏技術を発展させ、ドイツバロック時代、J.S.バッハの初期の自由作品、コラール作品を中心に学ぶ。		
到達目標	上記に述べたポイント等を理解しながら演奏できる。		
授業計画	第16～30回 バッハの自由作品、コラール作品を学ぶ。バロック時代の楽曲を通して演奏基礎技術および音楽語法を習得する。		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度30% 試験70%		
失格条件	出席日数が3分の2に満たないもの。試験を受けなかったもの。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	レッスンで指摘されたことを充分確認すること。レッスンのため充分な準備を行うこと。		
課題へのフィード バック	課題の確認と改善		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

3-099

ナンバリング	OR408A01	期間	前期
授業科目名	オルガン基礎理論 I A		
英訳科目名	Basic Theory of Organ Playing I A		
担当教員名	山本 真希		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> -
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	Iでは、オルガンの構造、レジストレーション、楽器の歴史について学ぶ。IIでは、オルガン音楽史を概観し、様々な様式について学ぶ。IIIでは、J.S.バッハの生涯とオルガン作品を学ぶ。IVでは、オルガン音楽の歴史的な演奏実践上の理論について研究し、演奏に反映させていく方法などを学ぶ。		
到達目標	上記に述べたことを踏まえ、くり返し学習し、演奏実践に役立てることができる。。		
授業計画	楽器の構造 第1～15回 楽器の発音原理と構造、ストップについて		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度30% 試験70%		
失格条件	出席日数が3分の2に満たないもの。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業内容を充分確認すること。		
課題へのフィード バック	課題の確認と改善		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

ナンバリング	OR408A02	期間	後期
授業科目名	オルガン基礎理論 I B		
英訳科目名	Basic Theory of Organ Playing I B		
担当教員名	山本 真希		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	I では、オルガンの構造、レジストレーション、楽器の歴史について学ぶ。II では、オルガン音楽史を概観し、様々な様式について学ぶ。III では、J.S.バッハの生涯とオルガン作品を学ぶ。IV では、オルガン音楽の歴史的な演奏実践上の理論について研究し、演奏に反映させていく方法などを学ぶ。		
到達目標	上記に述べたことを踏まえ、くり返し学習し、演奏実践に役立てることができる。。		
授業計画	第16～30回 基本的なレジストレーション、楽器の様式について		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度30% 試験70%		
失格条件	出席日数が3分の2に満たないもの。試験を受けなかったもの。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業内容を充分確認すること。		
課題へのフィード バック	課題の確認と改善		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	OM407A01	期間	前期
授業科目名	専攻実技 I (管弦打楽器)		
英訳科目名	Applied Music (Orchestral Instruments) I		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	基礎的な演奏技術を踏まえながら、古典より現代に至る幅広い作品に対する演奏能力を習得し、各人の個性を伸ばしつつ、様々な音楽的可能性を試み、音楽への積極的な姿勢を育てる。		
到達目標	地道な基礎練習を踏まえ、様々な事柄を通して音楽的要素を学び、演奏に結びつけることができる。		
授業計画	各自の演奏会のスケジュールに合わせて柔軟に対応しながら進めていく。		
評価方法 (合計100%)	全てを評価する。		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者、及び試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	将来演奏家を目指す者にとって必要な事柄は様々な分野に及ぶ。 担当教員と相談の上、計画を立てること。		
課題へのフィード バック	試験終了後、個別にコメントをわたします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

3-102

ナンバリング	OM407A02	期間	後期
授業科目名	専攻実技Ⅱ (管弦打楽器)		
英訳科目名	Applied Music (Orchestral Instruments) Ⅱ		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	基礎的な演奏技術を踏まえながら、古典より現代に至る幅広い作品に対する演奏能力を習得し、各人の個性を伸ばしつつ、様々な音楽的可能性を試み、音楽への積極的な姿勢を育てる。		
到達目標	地道な基礎練習を踏まえ、様々な事柄を通して音楽的要素を学び、演奏に結びつけることができる。		
授業計画	各自の演奏会のスケジュールに合わせて柔軟に対応しながら進めていく。		
評価方法 (合計100%)	全てを評価する。		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者、及び試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	将来演奏家を目指す者にとって必要な事柄は様々な分野に及ぶ。 担当教員と相談の上、計画を立てること。		
課題へのフィード バック	試験終了後、個別にコメントをわたします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	OM407A03	期間	前期
授業科目名	専攻実技Ⅲ (管弦打楽器)		
英訳科目名	Applied Music (Orchestral Instruments) Ⅲ		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	基礎的な演奏技術を踏まえながら、古典より現代に至る幅広い作品に対する演奏能力を習得し、各人の個性を伸ばしつつ、様々な音楽的可能性を試み、音楽への積極的な姿勢を育てる。		
到達目標	地道な基礎練習を踏まえ、様々な事柄を通して音楽的要素を学び、演奏に結びつけることができる。		
授業計画	各自の演奏会のスケジュールに合わせて柔軟に対応しながら進めていく。		
評価方法 (合計100%)	全てを評価する。		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者、及び試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	将来演奏家を目指す者にとって必要な事柄は様々な分野に及ぶ。 担当教員と相談の上、計画を立てること。		
課題へのフィード バック	試験終了後、個別にコメントをわたします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	OM407A04	期間	後期
授業科目名	専攻実技Ⅳ (管弦打楽器)		
英訳科目名	Applied Music (Orchestral Instruments) Ⅳ		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	基礎的な演奏技術を踏まえながら、古典より現代に至る幅広い作品に対する演奏能力を習得し、各人の個性を伸ばしつつ、様々な音楽的可能性を試み、音楽への積極的な姿勢を育てる。		
到達目標	地道な基礎練習を踏まえ、様々な事柄を通して音楽的要素を学び、演奏に結びつけることができる。		
授業計画	各自の演奏会のスケジュールに合わせて柔軟に対応しながら進めていく。		
評価方法 (合計100%)	全てを評価する。		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者、及び試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	将来演奏家を目指す者にとって必要な事柄は様々な分野に及ぶ。 担当教員と相談の上、計画を立てること。		
課題へのフィード バック	試験終了後、個別にコメントをわたします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	OM407B01	期間	前期
授業科目名	専攻実技Ⅴ (管弦打楽器)		
英訳科目名	Applied Music (Orchestral Instruments) Ⅴ		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	基礎的な演奏技術を踏まえながら、古典より現代に至る幅広い作品に対する演奏能力を習得し、各人の個性を伸ばしつつ、様々な音楽的可能性を試み、音楽への積極的な姿勢を育てる。		
到達目標	地道な基礎練習を踏まえ、様々な事柄を通して音楽的要素を学び、演奏に結びつけることができる。		
授業計画	各自の演奏会のスケジュールに合わせて柔軟に対応しながら進めていく。		
評価方法 (合計100%)	全てを評価する。		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者、及び試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	将来演奏家を目指す者にとって必要な事柄は様々な分野に及ぶ。 担当教員と相談の上、計画を立てること。		
課題へのフィード バック	試験終了後、個別にコメントをわたします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	OM407B02	期間	後期
授業科目名	専攻実技Ⅵ (管弦打楽器)		
英訳科目名	Applied Music (Orchestral Instruments) Ⅵ		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	基礎的な演奏技術を踏まえながら、古典より現代に至る幅広い作品に対する演奏能力を習得し、各人の個性を伸ばしつつ、様々な音楽的可能性を試み、音楽への積極的な姿勢を育てる。		
到達目標	地道な基礎練習を踏まえ、様々な事柄を通して音楽的要素を学び、演奏に結びつけることができる。		
授業計画	各自の演奏会のスケジュールに合わせて柔軟に対応しながら進めていく。		
評価方法 (合計100%)	全てを評価する。		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者、及び試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	将来演奏家を目指す者にとって必要な事柄は様々な分野に及ぶ。 担当教員と相談の上、計画を立てること。		
課題へのフィード バック	試験終了後、個別にコメントをわたします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	OM407C01	期間	前期
授業科目名	専攻実技Ⅶ(管弦打楽器)		
英訳科目名	Applied Music (Orchestral Instruments) Ⅶ		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	基礎的な演奏技術を踏まえながら、古典より現代に至る幅広い作品に対する演奏能力を習得し、各人の個性を伸ばしつつ、様々な音楽的可能性を試み、音楽への積極的な姿勢を育てる。		
到達目標	地道な基礎練習を踏まえ、様々な事柄を通して音楽的要素を学び、演奏に結びつけることができる。		
授業計画	各自の演奏会のスケジュールに合わせて柔軟に対応しながら進めていく。		
評価方法 (合計100%)	全てを評価する。		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者、及び試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	将来演奏家を目指す者にとって必要な事柄は様々な分野に及ぶ。 担当教員と相談の上、計画を立てること。		
課題へのフィード バック	試験終了後、個別にコメントをわたします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	OM407C02	期間	後期
授業科目名	専攻実技Ⅷ(管弦打楽器)		
英訳科目名	Applied Music (Orchestral Instruments) Ⅷ		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	基礎的な演奏技術を踏まえながら、古典より現代に至る幅広い作品に対する演奏能力を習得し、各人の個性を伸ばしつつ、様々な音楽的可能性を試み、音楽への積極的な姿勢を育てる。		
到達目標	地道な基礎練習を踏まえ、様々な事柄を通して音楽的要素を学び、演奏に結びつけることができる。		
授業計画	各自の演奏会のスケジュールに合わせて柔軟に対応しながら進めていく。		
評価方法 (合計100%)	全てを評価する。		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者、及び試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	将来演奏家を目指す者にとって必要な事柄は様々な分野に及ぶ。 担当教員と相談の上、計画を立てること。		
課題へのフィード バック	試験終了後、個別にコメントをわたします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	OM407A05	期間	前期
授業科目名	オーケストラA		
英訳科目名	Orchestra A		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> △	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ◎
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	合奏は管弦楽のオーケストラをはじめ、弦楽オーケストラ、ウインド・オーケストラ、及びその他の小編成のアンサンブルの合奏体を有し、学生はいずれかのグループに配属され、指揮の見方や多人数の中での音の響かせ方、ハーモニーの作り方を体得するという基本的な事柄をはじめ、スコアを通しての音楽像全体の把握、指揮者の音楽的要求の理解、全体の調和にいたるまでの合奏に必要な技術を体得する。		
到達目標	オーケストラ授業での分奏、合奏を通じ得たアンサンブル力を、演奏会で発揮出来る。		
授業計画	第1回 オリエンテーション 第2～3回 合奏 指揮者の音楽を感じ取る 第4～5回 細分奏 音程、ハーモニーの調和 第6～7回 分奏 各楽器間のアンサンブル 第8～10回 合奏 各楽器間のアンサンブル 第11回 自主分奏 各自の演奏技能の向上 第12回 鑑賞 CD, DVD等で研究 第13～14回 分奏 アーティキレーションの確認 第15回 合奏 音量、音程、ハーモニー、リズムの調和		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度、表現力、アンサンブル力等を考慮の上、評価する。		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	課題について事前に準備、練習し授業にのぞむ事		
課題へのフィード バック	前期授業終了後、全体に向けてコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	OM407A06	期間	後期
授業科目名	オーケストラB		
英訳科目名	Orchestra B		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> △	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ◎
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	合奏は管弦楽のオーケストラをはじめ、弦楽オーケストラ、ウインド・オーケストラ、及びその他の小編成のアンサンブルの合奏体を有し、学生はいずれかのグループに配属され、指揮の見方や多人数の中での音の響かせ方、ハーモニーの作り方を体得するという基本的な事柄をはじめ、スコアを通しての音楽像全体の把握、指揮者の音楽的要求の理解、全体の調和にいたるまでの合奏に必要な技術を体得する。		
到達目標	オーケストラ授業での分奏、合奏を通じ得たアンサンブル力を、演奏会で発揮出来る。		
授業計画	第16～17回 合奏 表現力の向上 第18回 演奏会 本番での対応力 第19回 反省会 後期オリエンテーション 第20回 合奏 指揮者、コンサートマスターとの、連携 第21～22回 分奏 各楽器間のアンサンブル 第23～24回 細分奏 音程、ハーモニーの調和 第25回 自主分奏 各自の演奏力の向上 第26回 鑑賞 CD, DVD等で研究 第27～29回 合奏 ソリストとの合わせ 第30回 演奏会 本番での対応		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度、表現力、アンサンブル力等を考慮の上、評価する。		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	課題について事前に準備、練習し授業にのぞむ事		
課題へのフィード バック	定期演奏会等の本番終了後の授業で、全体に向けてコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	OM407A07	期間	前期
授業科目名	オーケストラC		
英訳科目名	Orchestra C		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> △	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ◎
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	合奏は管弦楽のオーケストラをはじめ、弦楽オーケストラ、ウインド・オーケストラ、及びその他の小編成のアンサンブルの合奏体を有し、学生はいずれかのグループに配属され、指揮の見方や多人数の中での音の響かせ方、ハーモニーの作り方を体得するという基本的な事柄をはじめ、スコアを通しての音楽像全体の把握、指揮者の音楽的要求の理解、全体の調和にいたるまでの合奏に必要な技術を体得する。		
到達目標	オーケストラ授業での分奏、合奏を通じ得たアンサンブル力を、演奏会で発揮出来る。		
授業計画	第1回 オリエンテーション 第2～3回 合奏 指揮者の音楽を感じ取る 第4～5回 細分奏 音程、ハーモニーの調和 第6～7回 分奏 各楽器間のアンサンブル 第8～10回 合奏 各楽器間のアンサンブル 第11回 自主分奏 各自の演奏技能の向上 第12回 鑑賞 CD, DVD等で研究 第13～14回 分奏 アーティキレーションの確認 第15回 合奏 音量、音程、ハーモニー、リズムの調和		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度、表現力、アンサンブル力等を考慮の上、評価する。		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	課題について事前に準備、練習し授業にのぞむ事		
課題へのフィード バック	前期授業終了後、全体に向けてコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	OM407A08	期間	後期
授業科目名	オーケストラD		
英訳科目名	Orchestra D		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> △	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ◎
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	合奏は管弦楽のオーケストラをはじめ、弦楽オーケストラ、ウインド・オーケストラ、及びその他の小編成のアンサンブルの合奏体を有し、学生はいずれかのグループに配属され、指揮の見方や多人数の中での音の響かせ方、ハーモニーの作り方を体得するという基本的な事柄をはじめ、スコアを通しての音楽像全体の把握、指揮者の音楽的要求の理解、全体の調和にいたるまでの合奏に必要な技術を体得する。		
到達目標	オーケストラ授業での分奏、合奏を通じ得たアンサンブル力を、演奏会で発揮出来る。		
授業計画	第16～17回 合奏 表現力の向上 第18回 演奏会 本番での対応力 第19回 反省会 後期オリエンテーション 第20回 合奏 指揮者、コンサートマスターとの、連携 第21～22回 分奏 各楽器間のアンサンブル 第23～24回 細分奏 音程、ハーモニーの調和 第25回 自主分奏 各自の演奏力の向上 第26回 鑑賞 CD, DVD等で研究 第27～29回 合奏 ソリストとの合わせ 第30回 演奏会 本番での対応力		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度、表現力、アンサンブル力等を考慮の上、評価する。		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	課題について事前に準備、練習し授業にのぞむ事		
課題へのフィード バック	定期演奏会等の本番終了後の授業で、全体に向けてコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	OM407B03	期間	前期
授業科目名	オーケストラE		
英訳科目名	Orchestra E		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> △	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ◎
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	合奏は管弦楽のオーケストラをはじめ、弦楽オーケストラ、ウインド・オーケストラ、及びその他の小編成のアンサンブルの合奏体を有し、学生はいずれかのグループに配属され、指揮の見方や多人数の中での音の響かせ方、ハーモニーの作り方を体得するという基本的な事柄をはじめ、スコアを通しての音楽像全体の把握、指揮者の音楽的要求の理解、全体の調和にいたるまでの合奏に必要な技術を体得する。		
到達目標	オーケストラ授業での分奏、合奏を通じ得たアンサンブル力を、演奏会で発揮出来る。		
授業計画	第1回 オリエンテーション 第2～3回 合奏 指揮者の音楽を感じ取る 第4～5回 細分奏 音程、ハーモニーの調和 第6～7回 分奏 各楽器間のアンサンブル 第8～10回 合奏 各楽器間のアンサンブル 第11回 自主分奏 各自の演奏技能の向上 第12回 鑑賞 CD, DVD等で研究 第13～14回 分奏 アーティキレーションの確認 第15回 合奏 音量、音程、ハーモニー、リズムの調和		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度、表現力、アンサンブル力等を考慮の上、評価する。		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	課題について事前に準備、練習し授業にのぞむ事		
課題へのフィード バック	前期授業終了後、全体に向けてコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	OM407B04	期間	後期
授業科目名	オーケストラF		
英訳科目名	Orchestra F		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> △	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ◎
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	合奏は管弦楽のオーケストラをはじめ、弦楽オーケストラ、ウインド・オーケストラ、及びその他の小編成のアンサンブルの合奏体を有し、学生はいずれかのグループに配属され、指揮の見方や多人数の中での音の響かせ方、ハーモニーの作り方を体得するという基本的な事柄をはじめ、スコアを通しての音楽像全体の把握、指揮者の音楽的要求の理解、全体の調和にいたるまでの合奏に必要な技術を体得する。		
到達目標	オーケストラ授業での分奏、合奏を通じ得たアンサンブル力を、演奏会で発揮出来る。		
授業計画	第16～17回 合奏 表現力の向上 第18回 演奏会 本番での対応力 第19回 反省会 後期オリエンテーション 第20回 合奏 指揮者、コンサートマスターとの、連携 第21～22回 分奏 各楽器間のアンサンブル 第23～24回 細分奏 音程、ハーモニーの調和 第25回 自主分奏 各自の演奏力の向上 第26回 鑑賞 CD, DVD等で研究 第27～29回 合奏 ソリストとの合わせ 第30回 演奏会 本番での対応力		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度、表現力、アンサンブル力等を考慮の上、評価する。		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	課題について事前に準備、練習し授業にのぞむ事		
課題へのフィード バック	定期演奏会等の本番終了後の授業で、全体に向けてコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	OM407C05	期間	前期
授業科目名	オーケストラG		
英訳科目名	Orchestra G		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> △	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ◎
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	合奏は管弦楽のオーケストラをはじめ、弦楽オーケストラ、ウインド・オーケストラ、及びその他の小編成のアンサンブルの合奏体を有し、学生はいずれかのグループに配属され、指揮の見方や多人数の中での音の響かせ方、ハーモニーの作り方を体得するという基本的な事柄をはじめ、スコアを通しての音楽像全体の把握、指揮者の音楽的要求の理解、全体の調和にいたるまでの合奏に必要な技術を体得する。		
到達目標	オーケストラ授業での分奏、合奏を通じ得たアンサンブル力を、演奏会で発揮出来る。		
授業計画	第1回 オリエンテーション 第2～3回 合奏 指揮者の音楽を感じ取る 第4～5回 細分奏 音程、ハーモニーの調和 第6～7回 分奏 各楽器間のアンサンブル 第8～10回 合奏 各楽器間のアンサンブル 第11回 自主分奏 各自の演奏技能の向上 第12回 鑑賞 CD, DVD等で研究 第13～14回 分奏 アーティキレーションの確認 第15回 合奏 音量、音程、ハーモニー、リズムの調和		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度、表現力、アンサンブル力等を考慮の上、評価する。		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	課題について事前に準備、練習し授業にのぞむ事		
課題へのフィード バック	前期授業終了後、全体に向けてコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	OM407C06	期間	後期
授業科目名	オーケストラH		
英訳科目名	Orchestra H		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> △	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ◎
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	合奏は管弦楽のオーケストラをはじめ、弦楽オーケストラ、ウインド・オーケストラ、及びその他の小編成のアンサンブルの合奏体を有し、学生はいずれかのグループに配属され、指揮の見方や多人数の中での音の響かせ方、ハーモニーの作り方を体得するという基本的な事柄をはじめ、スコアを通しての音楽像全体の把握、指揮者の音楽的要求の理解、全体の調和にいたるまでの合奏に必要な技術を体得する。		
到達目標	オーケストラ授業での分奏、合奏を通じ得たアンサンブル力を、演奏会で発揮出来る。		
授業計画	第16～17回 合奏 表現力の向上 第18回 演奏会 本番での対応力 第19回 反省会 後期オリエンテーション 第20回 合奏 指揮者、コンサートマスターとの、連携 第21～22回 分奏 各楽器間のアンサンブル 第23～24回 細分奏 音程、ハーモニーの調和 第25回 自主分奏 各自の演奏力の向上 第26回 鑑賞 CD, DVD等で研究 第27～29回 合奏 ソリストとの合わせ 第30回 演奏会 本番での対応		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度、表現力、アンサンブル力等を考慮の上、評価する。		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	課題について事前に準備、練習し授業にのぞむ事		
課題へのフィード バック	定期演奏会等の本番終了後の授業で、全体に向けてコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	OM408A01	期間	前期
授業科目名	管弦打楽器アンサンブル演習 A		
英訳科目名	Ensemble A		
担当教員名	管弦打部門、近藤 孝司		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> △	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ◎
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	木管楽器、金管楽器、弦楽器、打楽器、などのグループに分かれて、アンサンブルでの基礎から実際に演奏するまでの過程を学ぶ。		
到達目標	同種から様々な編成のアンサンブルに対応する能力を身につけることができる。		
授業計画	学期初めに管楽器、弦楽器、打楽器などのグループごとに掲示をする。		
評価方法 (合計100%)	出席状況及び授業に対する積極性を加味して評価する。		
失格条件	出席日数が2/3に満たないもの。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	受講者は自発的に、課題とする楽曲の録音資料を参考にしながら、作品について学ぶことが望ましい。		
課題へのフィード バック	演奏会終了後、全体に向けてコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	OM408A02	期間	後期
授業科目名	管弦打楽器アンサンブル演習B		
英訳科目名	Ensemble B		
担当教員名	管弦打部門、近藤 孝司		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> △	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ◎
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	木管楽器、金管楽器、弦楽器、打楽器、などのグループに分かれて、アンサンブルでの基礎から実際に演奏するまでの過程を学ぶ。		
到達目標	同種から様々な編成のアンサンブルに対応する能力を身につけることができる。		
授業計画	学期初めに管楽器、弦楽器、打楽器などのグループごとに掲示をする。		
評価方法 (合計100%)	出席状況及び授業に対する積極性を加味して評価する。		
失格条件	出席日数が2/3に満たないもの		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	受講者は自発的に、課題とする楽曲の録音資料を参考にしながら、作品について学ぶことが望ましい。		
課題へのフィード バック	演奏会終了後、全体に向けてコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	OM408A03	期間	前期
授業科目名	管弦打楽器アンサンブル演習C		
英訳科目名	Ensemble C		
担当教員名	管弦打部門、近藤 孝司		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> △	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ◎
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	木管楽器、金管楽器、弦楽器、打楽器、などのグループに分かれて、アンサンブルでの基礎から実際に演奏するまでの過程を学ぶ。		
到達目標	同種から様々な編成のアンサンブルに対応する能力を身につけることができる。		
授業計画	学期初めに管楽器、弦楽器、打楽器などのグループごとに掲示をする。		
評価方法 (合計100%)	出席状況及び授業に対する積極性などを加味して評価する。		
失格条件	出席日数が2/3に満たないもの。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	受講者は自発的に、課題とする楽曲の録音資料を参考にしながら、作品について学ぶことが望ましい。		
課題へのフィード バック	演奏会終了後、全体に向けてコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	OM408A04	期間	後期
授業科目名	管弦打楽器アンサンブル演習D		
英訳科目名	Ensemble D		
担当教員名	管弦打部門、近藤 孝司		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> △	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ◎
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	木管楽器、金管楽器、弦楽器、打楽器、などのグループに分かれて、アンサンブルでの基礎から実際に演奏するまでの過程を学ぶ。		
到達目標	同種から様々な編成のアンサンブルに対応する能力を身につけることができる。		
授業計画	学期初めに管楽器、弦楽器、打楽器などのグループごとに掲示をする。		
評価方法 (合計100%)	出席状況及び授業に対する積極性を加味して評価する。		
失格条件	出席日数が2/3に満たないもの		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	受講者は自発的に、課題とする楽曲の録音資料を参考にしながら、作品について学ぶことが望ましい。		
課題へのフィード バック	演奏会終了後、全体に向けてコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	OM408B01	期間	前期
授業科目名	管弦打楽器アンサンブル演習E		
英訳科目名	Ensemble E		
担当教員名	管弦打部門、近藤 孝司		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> △	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ◎
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	木管楽器、金管楽器、弦楽器、打楽器、などのグループに分かれて、アンサンブルでの基礎から実際に演奏するまでの過程を学ぶ。		
到達目標	同種から様々な編成のアンサンブルに対応する能力を身につけることができる。		
授業計画	学期初めに管楽器、弦楽器、打楽器などのグループごとに掲示をする。		
評価方法 (合計100%)	出席状況及び授業に対する積極性を加味して評価する。		
失格条件	出席日数が2/3に満たないもの。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	受講者は自発的に、課題とする楽曲の録音資料を参考にしながら、作品について学ぶことが望ましい。		
課題へのフィード バック	演奏会終了後、全体に向けてコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	OM408B02	期間	後期
授業科目名	管弦打楽器アンサンブル演習 F		
英訳科目名	Ensemble F		
担当教員名	管弦打部門、近藤 孝司		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> △	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ◎
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	木管楽器、金管楽器、弦楽器、打楽器、などのグループに分かれて、アンサンブルでの基礎から実際に演奏するまでの過程を学ぶ。		
到達目標	同種から様々な編成のアンサンブルに対応する能力を身につけることができる。		
授業計画	学期初めに管楽器、弦楽器、打楽器などのグループごとに掲示をする。		
評価方法 (合計100%)	出席状況及び授業に対する積極性を加味して評価する。		
失格条件	出席日数が2/3に満たないもの		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	受講者は自発的に、課題とする楽曲の録音資料を参考にしながら、作品について学ぶことが望ましい。		
課題へのフィード バック	演奏会終了後、全体に向けてコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	OM408C01	期間	前期
授業科目名	管弦打楽器アンサンブル演習G		
英訳科目名	Ensemble G		
担当教員名	管弦打部門、近藤 孝司		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> △	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ◎
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	木管楽器、金管楽器、弦楽器、打楽器、などのグループに分かれて、アンサンブルでの基礎から実際に演奏するまでの過程を学ぶ。		
到達目標	同種から様々な編成のアンサンブルに対応する能力を身につけることができる。		
授業計画	学期初めに管楽器、弦楽器、打楽器などのグループごとに掲示をする。		
評価方法 (合計100%)	出席状況及び授業に対する積極性を加味して評価する。		
失格条件	出席日数が2/3に満たないもの。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	受講者は自発的に、課題とする楽曲の録音資料を参考にしながら、作品について学ぶことが望ましい。		
課題へのフィード バック	演奏会終了後、全体に向けてコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	OM408C02	期間	後期
授業科目名	管弦打楽器アンサンブル演習H		
英訳科目名	Ensemble H		
担当教員名	管弦打部門、近藤 孝司		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> △	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ◎
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	木管楽器、金管楽器、弦楽器、打楽器、などのグループに分かれて、アンサンブルでの基礎から実際に演奏するまでの過程を学ぶ。		
到達目標	同種から様々な編成のアンサンブルに対応する能力を身につけることができる。		
授業計画	学期初めに管楽器、弦楽器、打楽器などのグループごとに掲示をする。		
評価方法 (合計100%)	出席状況及び授業に対する積極性を加味して評価する。		
失格条件	出席日数が2/3に満たないもの		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	受講者は自発的に、課題とする楽曲の録音資料を参考にしながら、作品について学ぶことが望ましい。		
課題へのフィード バック	演奏会終了後、全体に向けてコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	管弦打楽器特別研究 I		
英訳科目名	Advanced Study in Orchestral Instruments I		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー2	<技能>
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	演奏家に必要とされる高度なテクニックを習得し、幅広く個性豊かな表現力を培う。 担当教員と相談の上、研究のテーマを決め、楽曲分析、演奏解釈をする。		
到達目標	上記に述べたポイント等を踏まえながら演奏できる。		
授業計画	第1回 研究テーマを決め、課題を決定 第2～14回 練習課題の実技指導 (この間、課題の仕上がり具合で随時課題を与える) 第15回 夏季休暇中の課題の決定 *個人の進捗により、曲数が変わることがある		
評価方法 (合計100%)	出席状況及び受講態度などを加味して評価する。		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	受講者は作品のアナリゼや作曲された時代背景などを事前に十分に把握しておくこと。		
課題へのフィード バック	演奏会や試験を通してその都度評価と反省の議論を通し、より高度な演奏水準を目指す。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	管弦打楽器特別研究Ⅱ		
英訳科目名	Advanced Study in Orchestral Instruments Ⅱ		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー2	<技能>
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	演奏家としての高度なテクニックと表現力を習得し、さらに高い水準の音楽をめざす。 個性を考え、テーマを決めて研究する。		
到達目標	上記に述べたポイント等を踏まえながら演奏できる。		
授業計画	第1回 研究テーマを決め、課題を決定 第2～15回 練習課題の実技指導 (この間、課題の仕上がり具合で随時課題を与える) *個人の進捗により、曲数が変わることがある		
評価方法 (合計100%)	実技試験の演奏を評価する。(100%)		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者、及び試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	受講者は作品のアナリゼや作曲された時代背景などを事前に十分に把握しておくこと。		
課題へのフィード バック	演奏会や試験を通してその都度評価と反省の議論を通し、より高度な演奏水準を目指す。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	試験の結果、特に優秀なものはⅢに進める。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	管弦打楽器特別研究Ⅲ		
英訳科目名	Advanced Study in Orchestral Instruments Ⅲ		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー2	<技能>
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	演奏家に必要とされる高度なテクニックを習得し、幅広く個性豊かな表現力を培う。 担当教員と相談の上、研究のテーマを決め、楽曲分析、演奏解釈をする。		
到達目標	上記に述べたポイント等を踏まえながら演奏できる。		
授業計画	第1回 研究テーマを決め、課題を決定 第2～14回 練習課題の実技指導 (この間、課題の仕上がり具合で随時課題を与える) 第15回 夏季休暇中の課題の決定 *個人の進捗により、曲数が変わることがある		
評価方法 (合計100%)	出席状況及び受講態度などを加味して評価する。		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	受講者は作品のアナリゼや作曲された時代背景などを事前に十分に把握しておくこと。		
課題へのフィード バック	演奏会や試験を通してその都度評価と反省の議論を通し、より高度な演奏水準を目指す。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	管弦打楽器特別研究Ⅳ		
英訳科目名	Advanced Study in Orchestral Instruments Ⅳ		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー2	<技能>
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	演奏家としての高度なテクニックと表現力を習得し、さらに高い水準の音楽をめざす。 個性を考え、テーマを決めて研究する。		
到達目標	上記に述べたポイント等を踏まえながら演奏できる。		
授業計画	第1回 研究テーマを決め、課題を決定 第2～15回 練習課題の実技指導 (この間、課題の仕上がり具合で随時課題を与える) *個人の進捗により、曲数が変わることがある		
評価方法 (合計100%)	実技試験の演奏を評価する。(100%)		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者、及び試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	受講者は作品のアナリゼや作曲された時代背景などを事前に十分に把握しておくこと。		
課題へのフィード バック	演奏会や試験を通してその都度評価と反省の議論を通し、より高度な演奏水準を目指す。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	通年集中
授業科目名	室内楽 I		
英訳科目名	Chamber Music I		
担当教員名	音楽学科教員		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>学内において、また将来社会人となって演奏の場を得る場合、他の演奏者（複数）と音楽を共有する機会が多々あると思われる。室内楽はそうした環境に円滑に対応すべく、室内楽に必要な技術、すなわち正しいタイミングによる合わせ方、楽器間のバランスの取り方、ハーモニーの調和能力などを学び、習得し、演奏者にとって必要とされる“耳の良さ”を培っていく。さらに、演奏者同士が気持ちをひとつにして相互に信頼関係を築き、より高い次元の音楽性を目指していく意識を育んでいくことを目標とする。</p>		
到達目標	コンサートで演奏できる。		
授業計画	<p>第1回 グループの編成と登録 第2回 学習する楽曲の設定および年間の学習計画 第3回 各人のパート練習とグループでの合わせ（練習） 第4回 レッスン受講（室内楽演奏に必要なとされる技術を習得）</p>		
評価方法 (合計100%)	学年末の試験を受け、その演奏を評価する。(100%)		
失格条件	受講時間数が、試験前の決められた期日までに12時間（45分×12）に充たなかった者、および試験を受けなかった者		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	各グループで計画性のある練習スケジュールを立て、和音感、和声進行、パート間の連携などを楽譜（スコア）から読み取り、効果的なリハーサルを重ねていく。予習・復習については、1回のレッスンのために180分（4時間）以上を必要とする。		
課題へのフィードバック	試験後に採点を行なった教員が、受験した室内楽グループ個別に講評をする。		
教科書	各グループが選んだ曲目のスコア、パート譜については、それぞれが手配する。		
著者名	（各グループにより異なる）		
出版社	（各グループにより異なる）		
参考書			
その他	授業のすすめ方については、グループ登録時に詳細を記した「室内楽実施要領」を配布する。また同時に内容を掲示する。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	通年集中
授業科目名	室内楽Ⅱ		
英訳科目名	Chamber Music Ⅱ		
担当教員名	音楽学科教員		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>「室内楽Ⅰ」で習得した技術、すなわち正しいタイミングによる合わせ方、楽器間のバランスの取り方、ハーモニーの調和能力などをもとに、さらに発展的な内容について錬磨していく。</p> <p>「室内楽Ⅰ」では基本的な合わせ方を主体にしたが、「室内楽Ⅱ」においては総譜(スコア)を綿密に読み、各パートがどのような関連性を持ちつつ、ひとつの音楽に収斂されるのか、自身がどのような役割を演じるのか、という理解を深めていくことを目的とする。</p>		
到達目標	コンサートで演奏できる。		
授業計画	<p>第1回 グループの編成と登録</p> <p>第2回 学習する楽曲の設定および年間の学習計画</p> <p>第3回 各人のパート練習とグループでの合わせ(練習)</p> <p>第4回 レッスン受講(室内楽演奏に必要とされる技術を習得)</p>		
評価方法 (合計100%)	学年末の試験を受け、その演奏を評価する。(100%)		
失格条件	受講時間数が、試験前の決められた期日までに12時間(45分×12)に充たなかった者、および試験を受けなかった者		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	各グループで計画性のある練習スケジュールを立て、和音感、和声進行、パート間の連携などを楽譜(スコア)から読み取り、効果的なリハーサルを重ねていく。予習・復習については、1回のレッスンのために180分(4時間)以上を必要とする。		
課題へのフィードバック	試験後に採点を行なった教員が、受験した室内楽グループ個別に講評をする。		
教科書	各グループが選んだ曲目のスコア、パート譜については、それぞれが手配する。		
著者名	(各グループにより異なる)		
出版社	(各グループにより異なる)		
参考書			
その他	授業のすすめ方については、グループ登録時に詳細を記した「室内楽実施要領」を配布する。また同時に内容を掲示する。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	通年集中
授業科目名	室内楽Ⅲ		
英訳科目名	Chamber Music Ⅲ		
担当教員名	音楽学科教員		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	「室内楽Ⅲ」においては「室内楽Ⅰ」および「室内楽Ⅱ」で学んだ内容をもとに、さらに次元の高いものにするを目的とする。ここまで蓄積した演奏技術を駆使して、レパートリーを広げ、室内楽各グループで選んだ室内楽曲の形式感、および時代様式に反映された演奏解釈を明確化していく。そのために楽曲分析、音楽史研究も視野にいたれた総合的な学びを必要とする。また室内楽は複数の演奏者とともにひとつの音楽を構築するので、相互の個性の理解、また何より心をひとつにする調和の精神を育てていく。		
到達目標	コンサートで演奏できる。		
授業計画	第1回 グループの編成と登録 第2回 学習する楽曲の設定および年間の学習計画 第3回 各人のパート練習とグループでの合わせ（練習） 第4回 レッスン受講（室内楽演奏に必要とされる技術を習得）		
評価方法 (合計100%)	学年末の試験を受け、その演奏を評価する。(100%)		
失格条件	受講時間数が、試験前の決められた期日までに12時間（45分×12）に満たなかった者、および試験を受けなかった者		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	各グループで計画性のある練習スケジュールを立て、和音感、和声進行、パート間の連携などを楽譜（スコア）から読み取り、効果的なリハーサルを重ねていく。予習・復習については、1回のレッスンのために180分（4時間）以上を必要とする。		
課題へのフィードバック	試験後に採点を行なった教員が、受験した室内楽グループ個別に講評をする。		
教科書	各グループが選んだ曲目のスコア、パート譜については、それぞれが手配する。		
著者名	（各グループにより異なる）		
出版社	（各グループにより異なる）		
参考書			
その他	授業のすすめ方については、グループ登録時に詳細を記した「室内楽実施要領」を配布する。また同時に内容を掲示する。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	OM408A05	期間	前期
授業科目名	弦楽器指導法A		
英訳科目名	Methods of String Teaching A		
担当教員名	斎藤 建寛、曾我部 千恵子、林 俊武		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ○
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> △	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	弦楽器専攻の学生のほとんどは、入学の時点で、奏法の基礎と主要な楽曲をすでに学習し習得しているものと考えられるが、それらを即、学習者に指導できるかという点、特に、初心者、初級者への指導においては、なかなかの困難を伴う。自分が学んできたことを振り返り、弦楽器、主にヴァイオリンの奏法について整理し、分析することにより、より良い指導法を考えていくものとする。合わせて、チェロ、コントラバスの入門指導についても簡単に学習する。		
到達目標	本授業を受講することにより正しい奏法を指導できるようになるとともに、指導を通してできる、教育的意義を見出すことができる。 さらに、指導法を学び、研究することにより自身の奏法などを見直し、より良い演奏スタイルの発見が期待できる。		
授業計画	第1回 音楽教育全般、情操教育、専門教育 それぞれにおけるヴァイオリン学習の意義 並びに音楽学習のあり方 第2回 導入における幼児心理、児童心理の理解。初歩指導における注意点。成人への指導における心得 保護者とのかかわり方 第3回 楽器の選択、及び その扱い方。楽器のメンテナンスについて。音楽的環境、練習環境の整え方 第4回 レッスンへの導入。姿勢 及び 楽器の構え方。読譜の進め方 第5回 弓の持ち方からボーイングへの指導 第6回 基本的なボーイングの種類と指導法 第7回 左手の基礎 第8回 ポジションの意義と奏法上の実際 第9回 重音奏法と音程 第10回 ヴィブラート、導入と発展 第11回 毎日の練習とスケール指導 第12回 テキストの種類と適切な選択 第13回 指導過程における楽曲の選択 及び 音楽的指導 第14回 チェロの楽器と指導について 第15回 コントラバスの楽器と指導について		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 50% (出席だけでなく、いかに積極的に問題意識をもって授業に臨んだかを評価する) レポート提出 50%		
失格条件	5回以上の欠席、ただし、欠席の場合は理由を明確にし、レポート等によってカバーすること。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	予定される授業内容について、自分なりにわかること、疑問点、質問事項を必ず用意すること。 講義においては実際に楽器を用いての説明や実践を行うので、毎回、各自、楽器を持参すること。 楽譜、参考資料についてはその都度準備するものを指示する。		
課題へのフィード バック	課題ごとに口頭及び文書等によって個々に伝える。		
教科書	[不使用] 講義内容のレジюмеを、毎回、事前に配布する		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	「特になし」		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	OM408A11	期間	後期
授業科目名	アンサンブル指導法実習		
英訳科目名	Teaching Ensemble workshop		
担当教員名	森田 玲子、池川 章子		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> 〇
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> △	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ◎
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	毎週土曜日の5:20~6:50、相愛ジュニアオーケストラの練習に参加し、その指導の実習を通してアンサンブルの指導法を学ぶ。 小学生の低学年を対象とした弦楽アンサンブルから、小学生の高学年から大学生を対象にしたフル編成のオーケストラまで、幅広いアンサンブルの指導実習です。		
到達目標	弦楽アンサンブルやオーケストラにおいて、基礎的なアンサンブル指導ができる。		
授業計画	第1回 小学生低学年への話し方について 第2回 小学生低学年のアンサンブル指導について 第3回 弦楽アンサンブル指導実習 第4回 弦楽アンサンブル指導実習 第5回 弦楽アンサンブル指導実習 第6回 弦楽アンサンブル指導実習 第7回 フル編成のオーケストラでの練習の進め方について 第8回 分奏の練習効果について 第9回 指揮者とコンサートマスターについて 第10回 スコアリーディングについて 第11回 オーケストラ指導実習 第12回 オーケストラ指導実習 第13回 オーケストラ指導実習 第14回 オーケストラ指導実習 第15回 総まとめと理解度確認		
評価方法 (合計100%)	本授業の意義を理解し、授業への参加態度、指導実習での話し方、指導内容などを含め、積極的に取り組んだかどうかを担当教員が総合的に評価する。		
失格条件	出席回数が3分の2以上に満たない場合には失格とする。 10分以上の遅刻は欠席とし、10分未満の遅刻は3回で1回の欠席とする。 指導実習をしなかった場合には失格とする。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	*練習曲のスコアをよく予習すること *練習曲の音源を聴くこと *各自の専攻楽器のパートを練習すること *練習10分前には出席し、セッティングなどに協力すること		
課題へのフィードバック	最終レポートを返却するときに、個別にコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	通年集中
授業科目名	オーケストラ特別研究 A		
英訳科目名	Orchestra Studies A		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> △	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ○
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ◎
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	履修者はオーディションにて選考される。 プロとして活躍する、オーケストラ奏者、アンサンブル奏者としての実践能力を身につけるために、国内外で活躍する、指揮者、演奏家の個人レッスン、や合奏指導のもと、実践力の充実を目指す。		
到達目標	プロの演奏家として将来必要となるテクニック、スコアリーディング等を研究し、実践を踏まえアンサンブルや協調性を養う。		
授業計画	第1回 スコアリーディング 古典から現代までの作品 第2回 オーケストラスタディ 古典から現代までの作品 第3回 映像や音源をもとに、作品の研究 第4回 オーケストラ研修、実習 第5回 オーケストラ鑑賞		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度、アンサンブル力、協調性などを考慮し、評価する。		
失格条件	なし		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	オーケストラスタディ、スコアリーディング等を事前の準備を充分に行っておく。		
課題へのフィード バック	実習中に個別に指導。 試験、本番の後に個別にアドバイス		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	通年集中
授業科目名	オーケストラ特別研究B		
英訳科目名	Orchestra Studies B		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> △	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ○
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ◎
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	履修者はオーディションにて選考される。 プロとして活躍する、オーケストラ奏者、アンサンブル奏者としての実践能力を身につけるために、国内外で活躍する、指揮者、演奏家の個人レッスン、や合奏指導のもと、実践力の充実を目指す。		
到達目標	プロの演奏家として将来必要となるテクニック、スコアリーディング等を研究し、実践を踏まえアンサンブルや協調性を養う。		
授業計画	第1回 スコアリーディング 古典から現代までの作品 第2回 オーケストラスタディ 古典から現代までの作品 第3回 映像や音源をもとに、作品の研究 第4回 オーケストラ研修、実習 第5回 オーケストラ鑑賞		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度、アンサンブル力、協調性などを考慮し、評価する。		
失格条件	なし		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	オーケストラスタディ、スコアリーディング等を事前の準備を充分に行っておく。		
課題へのフィード バック	実習中に個別に指導。 試験、本番後に個別にアドバイス		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	通年集中
授業科目名	オーケストラ特別実習 A		
英訳科目名	Orchestra Workshop A		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> △	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ○
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ◎
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	履修者はオーディションにて選考される。 プロとして活躍する、オーケストラ奏者、アンサンブル奏者としての実践能力を身につけるために、国内外で活躍する、指揮者、演奏家の個人レッスン、や合奏指導のもと、実践力の充実を目指す。		
到達目標	プロの演奏家として将来必要となるテクニック、スコアリーディング等を研究し、実践を踏まえアンサンブルや協調性を養う。		
授業計画	第1回 スコアリーディング 古典から現代までの作品 第2回 オーケストラスタディ 古典から現代までの作品 第3回 映像や音源をもとに、作品の研究 第4回 オーケストラ研修、実習 第5回 オーケストラ鑑賞		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度、アンサンブル力、協調性などを考慮し、評価する。		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	オーケストラスタディ、スコアリーディング等を事前の準備を充分に行っておく。		
課題へのフィード バック	実習中に個別に指導。 試験、本番の後に個別にアドバイス		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	通年集中
授業科目名	オーケストラ特別実習B		
英訳科目名	Orchestra Workshop B		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> △	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ○
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ◎
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	履修者はオーディションにて選考される。 プロとして活躍する、オーケストラ奏者、アンサンブル奏者としての実践能力を身につけるために、国内外で活躍する、指揮者、演奏家の個人レッスン、や合奏指導のもと、実践力の充実を目指す。		
到達目標	プロの演奏家として将来必要となるテクニック、スコアリーディング等を研究し、実践を踏まえアンサンブルや協調性を養う。		
授業計画	第1回 スコアリーディング 古典から現代までの作品 第2回 オーケストラスタディ 古典から現代までの作品 第3回 映像や音源をもとに、作品の研究 第4回 オーケストラ研修、実習 第5回 オーケストラ鑑賞		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度、アンサンブル力、協調性などを考慮し、評価する。		
失格条件	なし		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	オーケストラスタディ、スコアリーディング等を事前の準備を充分に行っておく。		
課題へのフィード バック	実習中に個別に指導 試験、本番の後に個別にアドバイス		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	OI407A01	期間	前期
授業科目名	専攻実技 I (古楽器)		
英訳科目名	Applied Music (Historical Instruments) I		
担当教員名	古楽器部門		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	楽器を自在に操るための技術とその習得法を学び、それと平行してルネサンス・バロック時代の音楽作品を中心にその演奏解釈を探求し、当時の演奏スタイルと表現法を学ぶ。		
到達目標	コンサートで、ルネサンス及びバロック作品を専攻の楽器で発表するためのレパートリーを増やすことができる。		
授業計画	第1～2回 基礎的技術の課題を整理し、1年間で取り組む作品を選曲する。 第3～15回 選曲したルネサンス・バロック時代の作品に取り組み、演奏に必要なテクニックと表現法を学ぶ。		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 20% 試験の演奏 80%		
失格条件	試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	日常の基礎練習を欠かさず、演奏技術の向上に努める。 国内外の演奏家のコンサートや録音を通じて様々な楽曲に触れて興味を広げる。		
課題へのフィード バック	実技試験終了後、個別にコメントします。		
教科書	各専攻の教員から与えられる教本・作品に取り組みます。図書館の利用も大に行ってください。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	内外の演奏会や講習会の情報をキャッチし、出来るだけそれに参加することが大切です。古楽関係のみではなく、他の分野の専攻生とも積極的に音楽について語り合い共演の機会を作って下さい。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	OI407A02	期間	後期
授業科目名	専攻実技Ⅱ (古楽器)		
英訳科目名	Applied Music (Historical Instruments) Ⅱ		
担当教員名	古楽器部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	楽器を自在に操るための技術とその習得法を学び、それと平行してルネサンス・バロック時代の音楽作品を中心にその演奏解釈を探究し、当時の演奏スタイルと表現法を学ぶ。		
到達目標	レパートリーの中から作品を選曲しコンサートで発表することができる。		
授業計画	第1回 コンサートで演奏する作品を選曲する。 第2～15回 ドイツ、フランス、イタリア、イギリスなど、各国（地域・地方）の作品の特徴や関連性にも興味を広げて作品の演奏に取り組み、レパートリーを充実させる。また通奏低音と合わせるなど、コンサートに向けて備える。		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 20% 試験の演奏 80%		
失格条件	試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	日常の基礎練習を欠かさず、演奏技術の向上に努める。 国内外の演奏家のコンサートや録音を通じて様々な楽曲に触れて興味を広げる。		
課題へのフィード バック	実技試験終了後、個別にコメントします。		
教科書	各専攻の教員から与えられる教本・作品に取り組みます。図書館の利用も大に行ってください。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	内外の演奏会や講習会の情報をキャッチし、出来るだけそれに参加することが大切です。古楽関係のみではなく、他の分野の専攻生とも積極的に音楽について語り合い共演の機会を作って下さい。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	OI407A05	期間	通年
授業科目名	鍵盤実技 I		
英訳科目名	Keyboard Playing I		
担当教員名	古楽器部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー2	<技能>
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	基礎楽器としての学習を目的とし、個人の能力に応じて、技術の基礎及び幅広い知識と表現力を養成する。エチュード、スケールと共にバロック時代・古典派・ロマン派・近代・現代の作品に接することのできるよう組み立てて演習する。		
到達目標	レベルに応じた作品の理解と表現ができる。 試験の課題がクリアできる。		
授業計画	個人其々のレベルに応じた作品を選び、丁寧に取り組む。		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 40% 試験 60%		
失格条件	試験を受けなかった者		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	CD・ICなどの録音物やコンサートで楽曲に親しむ。 作品の様式や参考資料等それぞれの疑問、質問に対処し、より良い作品演奏を目指す。 そのためにも、なるべく毎日一時間は予習復習をする事が望ましい。		
課題へのフィード バック	実技、実習の取り組みに対して個別にコメントします。		
教科書	特になし。レベル、進度による。		
著者名			
出版社			
参考書	特になし。レベル、個人の課題曲内容による。		
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	OI408A01	期間	前期
授業科目名	古楽器研究 I		
英訳科目名	Research in Historical Instruments I		
担当教員名	本年度未開講		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> -
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	バロック時代に活躍したリコーダーやヴィオラ・ダ・ガンバ等の演奏により、旋律と通奏低音との合奏を実体験すると共に、多くのバロック時代の作品に触れる。		
到達目標	バロック時代の音楽をより身近なものとして感じ、理解を深める。自分の専門分野でも、古楽器の演奏を通して得た古い時代への感覚を生かせるようになる。		
授業計画	<p>1. この授業に関する説明と、各自の受講楽器の選択（管楽器もしくは弦楽器）。2回目以降は管、弦、別クラスでの授業となります。 （以下は管楽器受講生用：中村洋彦担当）</p> <p>2. 資料配布。リコーダー及び同時代の管楽器に関する説明。楽器の構え方と基本奏法の概略。</p> <p>3. リコーダー（アルト・リコーダー）の基本奏法① 指使いの確認</p> <p>4. リコーダー（アルト・リコーダー）の基本奏法② タンギングについて</p> <p>5. リコーダー（アルト・リコーダー）の基本奏法③ 息のコントロールについて</p> <p>6-10. バロック時代の音楽による練習曲①～⑤</p> <p>11-14. 簡単なバロック時代の作品（ソナタまたはトリオソナタ）</p> <p>15. クラス内での発表演奏 演習曲より選択</p> <p>（以下は弦楽器受講生用：頼田麗担当）</p> <p>2. 資料配布、ヴィオラ・ダ・ガンバに関する説明 ガンバの割り当て、楽器の構え方、弓の持ち方等に関する説明</p> <p>3. 開放弦（3弦と4弦）の弾き方（押し弓と引き弓について）</p> <p>4. 開放弦（2弦から6弦）の弾き方（弓の持ち方の確認）</p> <p>5. 音階練習（ハ長調）と左腕、手、指の形についての確認</p> <p>6-10. カデンツの弾き方などの表現練習</p> <p>11-14. 簡単なバロック時代の作品（舞曲、ソナタなど）</p> <p>15. クラス内での発表演奏 演習曲より選択</p>		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度（参加状況） 50% 授業への取り組み姿勢 30% 発表演奏への参加 20%		
失格条件	演習、及び合奏を中心とした授業ですので、4回以上の欠席は失格。（公欠を除く）		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	バロック時代の音楽に関する本を読む。自分の受講選択楽器に関する資料や本を読む。受講生は、授業時間以外でも大学内に限り自分の選択楽器を借用する事が出来る。弦楽器受講生は楽器に触れていない時に、現在取り組んでいる演習曲の運指等をイメージトレーニングする。		
課題へのフィードバック	実技試験終了後、クラスごと及び個別にコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	OI408A02	期間	後期
授業科目名	古楽器研究Ⅱ		
英訳科目名	Research in Historical Instruments Ⅱ		
担当教員名	頼田 麗、中村 洋彦、青木 好美		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	バロック時代に活躍したリコーダーやヴィオラ・ダ・ガンバ等の演奏により、旋律と通奏低音との合奏を実体験すると共に、多くのバロック時代の作品に触れる。		
到達目標	バロック時代の音楽をより身近なものとして感じ、理解を深める。自分の専門分野でも、古楽器の演奏を通して得た古い時代への感覚を生かせるようになる。		
授業計画	<p>管楽器クラス（中村洋彦担当）</p> <p>第1回 リコーダー（アルトリコーダー）の基本奏法を確認。バロック時代のトリルについて。</p> <p>第1～6回 バロック時代のリコーダー・ソナタ ～J. B. レイエ, B. マルチェロらの作品</p> <p>第7～11回 バロック時代のリコーダー・ソナタ ～G. F. ヘンデルらの作品</p> <p>第12～14回 通奏低音との合わせ。</p> <p>第15回 管、弦クラス合同での発表演奏（授業教室内）</p> <p>弦楽器クラス（頼田麗担当）</p> <p>第1回 簡単な曲のハーモニー練習</p> <p>第2～6回 バロック時代のフランスの舞曲 ～M. マレの作品</p> <p>第7～11回 バロック時代のドイツのソナタ ～C.F.アーベルの作品</p> <p>第12～14回 通奏低音との合わせ</p> <p>第15回 管、弦クラス合同での発表演奏（授業教室内）</p>		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度（参加状況） 50% 授業への取り組み姿勢 30% 発表演奏への参加 20%		
失格条件	演習、及び合奏を中心とした授業ですので、4回以上の欠席は失格。（公欠を除く）		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	バロック時代の音楽に関する本を読む。自分の受講選択楽器に関する資料や本を読む。 受講生は、授業時間以外でも大学内に限り自分の選択楽器を借用する事が出来る。弦楽器受講生は楽器に触れていない時に、現在取り組んでいる演習曲の運指等をイメージトレーニングする。		
課題へのフィード バック	実技試験終了後、クラスごと及び個別にコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	期間	前期
授業科目名	コレギウム・ムジクムⅠA	
英訳科目名	Collegium Musicum ⅠA	
担当教員名	中村 洋彦、頼田 麗	
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> -	ディプロマ・ポリシー2 <技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー4 <関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー6
授業概要・ポイント	リコーダー、クルムホルン（管楽器）、ヴィオラ・ダ・ガンバ（弦楽器）等、古楽器の基礎演習技術を習得する。 初級の合奏曲（主にルネサンス音楽）を演習する。 演習曲を通して、音楽史におけるルネサンス音楽バロック音楽の位置と特徴を理解する。	
到達目標	古典派以前の西洋音楽を、古楽器の合奏により実体験出来る。 自分の専門分野以外の楽器の演奏が、ある程度出来る様に成る。	
授業計画	<p>第1回 この授業に関する説明と、各自の受講楽器の選択（管楽器もしくは弦楽器）。 2回目以降は管、弦、別クラスでの授業となります。 （以下は管楽器受講生用：中村洋彦担当）</p> <p>第2回 資料配布。リコーダーまたはクルムホルンに関する説明。（楽器の歴史を中心に） 楽器の割り当て（ソプラノ～バス）、楽器の構え方と基本奏法の概略。</p> <p>第3回 簡単なルネサンス合奏曲① 指使いの確認 第4回 簡単なルネサンス合奏曲② タンギングについて 第5回 簡単なルネサンス合奏曲③ 息のコントロールとハーモニー</p> <p>第6～7回 フランスの舞曲より 第8～9回 フランドルの舞曲より 第10～11回 ドイツの舞曲① 第12回 ドイツの歌曲より 第13～14回 ドイツの舞曲② 第15回 クラス内での発表演奏 演習曲より選択</p> <p>（以下は弦楽器受講生用：頼田麗担当）</p> <p>第2回 資料配布、ヴィオラ・ダ・ガンバに関する説明。 ガンバの割り当て、楽器の構え方、弓の持ち方等に関する説明。</p> <p>第3回 開放弦（3弦と4弦）の弾き方（押し弓と引き弓について） 第4回 開放弦（2弦から5弦）の弾き方（弓の持ち方の確認） 第5回 2～5弦の音階練習（ハ長調）同音2回つつ。左腕、手、指の形についての確認。 ガンバの指板上の音階の説明。</p> <p>第6回 簡単な曲の演習。 第7回 開放弦の弾き方（1弦から6弦まで）（押し弓と引き弓での弦の変換について） 第8回 全弦に亘る音階練習（ハ長調）。 第9回 各自による任意曲の演奏発表。（ガンバによる楽曲演奏へのアプローチ） 第10回 カデンツの弾き方 第11回 ドイツの器楽曲 第12回 イタリアの舞曲 第13回 フランスのシャンソン 第14回 イギリスの讃美歌より 第15回 クラス内での発表演奏 演習曲より選択</p>	
評価方法 (合計100%)	授業への参加状況と参加態度 50% クラス内での発表演奏 30% 発表演奏会への参加 20%	
失格条件	演習、及び合奏を中心とした授業ですので、4回以上の欠席（公欠は除く）は失格。	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	ルネサンスやバロック時代の音楽史に関する本を読む。 自分の受講選択楽器に関する資料や本を読む。 受講生は、授業時間以外でも大学内に限り自分の選択楽器を借用する事が出来る。 楽器に触れていない時に、現在取り組んでいる演習曲の運指等をイメージトレーニングする。	
課題へのフィード バック	発表演奏終了後、全体に向けてコメントします。	
教科書	不使用	
著者名		
出版社		
参考書	「中世・ルネサンスの社会と音楽」 今谷和徳著（音楽之友社） 「中世・ルネサンスの音楽」 皆川達夫著（講談社新書） 「新版古楽のすすめ」 金沢正剛著（音楽之友社）	
その他	始業前に楽器を準備、または授業終了時に楽器を片付ける必要があります。	
備考		
科目生への開講	なし	

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	コレギウム・ムジクム I B		
英訳科目名	Collegium Musicum I B		
担当教員名	中村 洋彦、頼田 麗		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	リコーダー、クルムホルン（管楽器）、ヴィオラ・ダ・ガンバ（弦楽器）等、古楽器の基礎演習技術を習得する。 初級の合奏曲（主にルネサンス音楽）を演習する。 演習曲を通して、音楽史におけるルネサンス音楽バロック音楽の位置と特徴を理解する。		
到達目標	古典派以前の西洋音楽を、古楽器の合奏により実体験出来る。 自分の専門分野以外の楽器の演奏が、ある程度出来る様に成る。		
授業計画	<p>管楽器クラス（中村洋彦担当）</p> <p>第1回 イギリスのルネサンスとバロックの音楽 ～旋法と調性の比較～ イギリスの器楽曲（バロック）より</p> <p>第2～3回 イギリスの器楽曲（ルネサンス）より</p> <p>第4～5回 イギリスのマドリガルより</p> <p>第6～8回 イタリアの声楽曲より</p> <p>第9～10回 イタリアの舞曲より</p> <p>第11～13回 イタリアの器楽曲より</p> <p>第14回 後期のまとめ。</p> <p>第15回 管、弦クラス合同での発表演奏（授業教室内）</p> <p>弦楽器クラス（頼田麗担当）</p> <p>第1回 簡単な曲のハーモニー演習</p> <p>第2～4回 バヴァーヌ、ガリヤルド</p> <p>第5～6回 アルマンド、クーラント、サラバンド</p> <p>第7～8回 イタリアのカンツォン</p> <p>第9～11回 イギリスのファンタジア</p> <p>第12～13回 イギリスの舞曲</p> <p>第14回 後期のまとめ。</p> <p>第15回 管、弦クラス合同での発表演奏（授業教室内）</p>		
評価方法 (合計100%)	授業への参加状況と参加態度 50% 授業内の発表演奏 30% 発表演奏会への参加 20%		
失格条件	演習、及び合奏を中心とした授業ですので、4回以上の欠席（公欠は除く）は失格。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	ルネサンスやバロック時代の音楽史に関する本を読む。 自分の受講選択楽器に関する資料や本を読む。 受講生は、授業時間以外でも大学内に限り自分の選択楽器を借用する事が出来る。 楽器に触れていない時に、現在取り組んでいる演習曲の運指等をイメージトレーニングする。		
課題へのフィード バック	発表演奏終了後、全体に向けてコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書	「中世・ルネサンスの社会と音楽」 今谷和徳著（音楽之友社） 「中世・ルネサンスの音楽」 皆川達夫著（講談社新書） 「新版古楽のすすめ」 金沢正剛著（音楽之友社）		
その他	始業前に楽器を準備、または授業終了時に楽器を片付ける必要があります。 このクラスを受講するにはコレギウム・ムジクム I A を修了している事が望ましい。 初めて受講する学生に対しては、コレギウム・ムジクム I B の授業計画に沿って進めるが 授業時間外での自主練習が必要な場合もある。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	コレギウム・ムジクムⅡA		
英訳科目名	Collegium Musicum ⅡA		
担当教員名	本年度未開講		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー2	<技能>
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	コレギウム・ムジクムⅠで習得した基本演習技術をさらに発展させ、中級技術をマスターすると同時に、中級合奏曲（ルネサンスとバロック音楽）も取り上げる。また演習曲を通して、音楽史におけるルネサンス及びバロック音楽の位置と特徴を理解する。		
到達目標	古典派以前の西洋音楽の流れを、古楽器の合奏により実体験出来る。自分の専門分野以外の楽器の演奏が、かなりの程度出来る様に成る。		
授業計画	<p>管楽器クラス（中村洋彦担当）</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 楽器の割り当て、基本技術の再確認。 2. フランドルの舞曲より ☆ロンド「恋の手習い」〈1551〉（T.スザート 1500頃1564頃） 3. ☆ロンド「恋の手習い」〈1551〉（T.スザート 1500頃1564頃） 4. ☆ロンド「恋の手習い」〈1551〉（T.スザート 1500頃1564頃） 5. ドイツの舞曲より ☆2つのクーラント〈1612〉（M. プレトリウス1571頃1621） 6. ☆2つのクーラント〈1612〉（M. プレトリウス1571頃1621） 7. ☆2つのクーラント〈1612〉（M. プレトリウス1571頃1621） 8. ☆2つのクーラント〈1612〉（M. プレトリウス1571頃1621） 9. イギリスのモテトより ☆アヴェ・ヴェルム・コルプス〈1605〉（W.バード 15431628） 10. ☆アヴェ・ヴェルム・コルプス〈1605〉（W.バード 15431628） 11. ☆アヴェ・ヴェルム・コルプス〈1605〉（W.バード 15431628） 12. イギリスの器楽曲より ☆ファンタジア〈1611〉（W.バード 15431628） 13. ☆ファンタジア〈1611〉（W.バード 15431628） 14. ☆ファンタジア〈1611〉（W.バード 15431628） 15. 前期のまとめ。管、弦合同での発表演奏（教室内）。 <p>弦楽器クラス（頼田麗担当）</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ヴィオラ・ダ・ガンバの特徴と役割の再確認（他の弦楽器と比較して） 2. ヴィオラ・ダ・ガンバの合奏曲のレパートリーについて。 3. ガンバの割り当て、楽器の構え方、ボーイング等の再確認。 4. フランドルのシャンソンより ☆王様ばんざい〈1500頃〉（J・デ・プレ 1440頃1521） 5. ☆王様ばんざい〈1500頃〉（J・デ・プレ 1440頃1521） 6. スペインのピリャンシーコより ☆何で顔を洗えばよいのか〈1556〉（J・バスケス 1500頃～1560頃） 7. ☆何で顔を洗えばよいのか〈1556〉（J・バスケス 1500頃～1560頃） 8. スペインの舞曲より ☆パバーナ〈1536〉（L・ミラン 1500頃～1561頃） 9. ☆パバーナ〈1536〉（L・ミラン 1500頃～1561頃） 10. イタリアの舞曲より ☆マントヴァーナ〈1645〉（G.ザネッティ ?～1626?） 11. ☆マントヴァーナ〈1645〉（G.ザネッティ ?～1626?） 12. スメタナの交響詩「ブルダヴァ=モルダウ」のテーマとの比較。 13. イタリアの器楽曲 ☆ラ・ビニャーニ〈1597〉（G・カヴァッチオ 1556頃～1626） 14. ☆ラ・ビニャーニ〈1597〉（G・カヴァッチオ 1556頃～1626） 15. イタリア器楽曲のまとめ。管、弦合同での発表演奏（教室内）。 <p>注 ☆は曲名 曲名のすぐ後の〈 〉内は曲の成立年代または出版年。 ()内は作曲者名と在世家間。</p>		
評価方法 (合計100%)	授業への参加状況と参加態度 50% 授業内の発表演奏 30% 発表演奏会への参加 20%		
失格条件	演習、及び合奏を中心とした授業ですので、4回以上の欠席（公欠は除く）は失格。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	ルネサンスやバロック時代の音楽史に関する本を読む。 自分の受講選択楽器に関する資料や本を読む。 楽器に触れていない時に、現在取り組んでいる演習曲の運指等をイメージトレーニングする。		
課題へのフィード バック	発表演奏終了後、全体に向けてコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書	「中世・ルネサンスの社会と音楽」今谷和徳著（音楽之友社） 「中世・ルネサンスの音楽」皆川達夫著（講談社新書） 「新版古楽のすすめ」金沢正剛著（音楽之友社）		
その他	このクラスを受講するには、コレギウム・ムジクムⅠAとⅠBの両方、もしくはそのどちらかを修了している必要がある。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	コレギウム・ムジクムⅡB		
英訳科目名	Collegium Musicum ⅡB		
担当教員名	中村 洋彦、頼田 麗		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー-2	<技能>
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	コレギウム・ムジクムⅠで習得した基本演習技術をさらに発展させ、中級技術をマスターすると同時に、中級合奏曲（ルネサンスとバロック音楽）も取り上げる。また演習曲を通して、音楽史におけるルネサンス及びバロック音楽の位置と特徴を理解する。		
到達目標	古典派以前の西洋音楽の流れを、古楽器の合奏により実体験出来る。自分の専門分野以外の楽器の演奏が、かなりの程度出来る様に成る。		
授業計画	<p>管楽器クラス（中村洋彦担当）</p> <p>第1回 ルネサンスの旋律とそれに基づく現代曲。 フランスの舞曲 ☆バヴァーヌ「私の心をとらえる人よ」（作者不詳、16世紀フランス） フランスの現代曲 ☆バヴァーヌ「私の心をとらえる人よ」（G.L.ギノー）</p> <p>第2回 フランスのシャンソンより ☆私のご亭主は〈1534〉（P.パスロー 150947に活躍）</p> <p>第3回 ☆私のご亭主は〈1534〉（P.パスロー 150947に活躍）</p> <p>第4回 ☆私のご亭主は〈1534〉（P.パスロー 150947に活躍）</p> <p>第5回 イタリアの器楽曲より ☆カンツォン 第2番〈1608〉（G. ガブリエリ1553頃1612）</p> <p>第6回 ☆カンツォン 第2番〈1608〉（G. ガブリエリ1553頃1612）</p> <p>第7回 ☆カンツォン 第2番〈1608〉（G. ガブリエリ1553頃1612）</p> <p>第8回 旋律装飾への試み イタリアの舞曲より ☆バット・アングレーゼ〈1578〉（G. マイネリオ1535頃1582）</p> <p>第9回 ☆バット・アングレーゼ〈1578〉（G. マイネリオ1535頃1582）</p> <p>第10回 弦楽器との合同クラスによる合奏（以後5回） ルネサンスの舞曲 ☆組曲～《音楽の饗宴》〈1617〉より（J. H.シャイン15861630）</p> <p>第11回 ☆組曲～《音楽の饗宴》〈1617〉より（J. H.シャイン15861630）</p> <p>第12回 ☆組曲～《音楽の饗宴》〈1617〉より（J. H.シャイン15861630）</p> <p>第13回 ☆組曲～《音楽の饗宴》〈1617〉より（J. H.シャイン15861630）</p> <p>第14回 ☆組曲～《音楽の饗宴》〈1617〉より（J. H.シャイン15861630）</p> <p>第15回 古楽器アンサンブル演奏会（南港ホール）</p> <p>弦楽器クラス（頼田麗担当）</p> <p>第1回 ドイツの舞曲 ☆ロッシェンケンの踊り〈1617〉（W・ブレード 1560～1630）</p> <p>第2回 ドイツの舞曲 ☆バレー〈1612〉（M・プレトリウス 1571頃～1621）</p> <p>第3回 ドイツの舞曲 ☆バヴァーナ「哀れな兵士」（M・L・ヘッセン 1572～1632）</p> <p>第4回 ☆バヴァーナ「哀れな兵士」（M・L・ヘッセン 1572～1632）</p> <p>第5回 声楽曲から器楽曲への移行及び転用について。</p> <p>第6回 フランスのシャンソンより ☆私の望み〈1543〉（P・サンドラン 1490頃～1561頃）</p> <p>第7回 シャンソンの器楽版 ☆私の望み〈1547〉（P・アテニャン 1490頃～1552）</p> <p>第8回 イギリスのガンバコンソート曲より ☆バヴァーン〈1670頃〉（J・ジェンキンス 1592～1678）</p> <p>第9回 ☆バヴァーン〈1670頃〉（J・ジェンキンス 1592～1678）</p> <p>第10回 管楽器との合同クラスによる合奏（以後5回） ルネサンスの舞曲 ☆組曲～《音楽の饗宴》〈1617〉より（J. H.シャイン15861630）</p> <p>第11回 ☆組曲～《音楽の饗宴》〈1617〉より（J. H.シャイン15861630）</p> <p>第12回 ☆組曲～《音楽の饗宴》〈1617〉より（J. H.シャイン15861630）</p> <p>第13回 ☆組曲～《音楽の饗宴》〈1617〉より（J. H.シャイン15861630）</p> <p>第14回 ☆組曲～《音楽の饗宴》〈1617〉より（J. H.シャイン15861630）</p> <p>第15回 古楽器アンサンブル演奏会（南港ホール）</p> <p>注 ☆は曲名 曲名のすぐ後の〈 〉内は曲の成立年代または出版年。 （ ）内は作曲者名と在世期間。</p>		
評価方法 (合計100%)	授業への参加状況と参加態度 50% 授業内の発表演奏 30% 発表演奏会への参加 20%		
失格条件	演習、及び合奏を中心とした授業ですので、4回以上の欠席（公欠は除く）は失格。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	ルネサンスやバロック時代の音楽史に関する本を読む。 自分の受講選択楽器に関する資料や本を読む。 楽器に触れていない時に、現在取り組んでいる演習曲の運指等をイメージトレーニングする。		
課題へのフィード バック	発表演奏終了後、全体に向けてコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書	「中世・ルネサンスの社会と音楽」今谷和徳著（音楽之友社） 「中世・ルネサンスの音楽」皆川達夫著（講談社新書） 「新版古楽のすすめ」金沢正剛著（音楽之友社）		
その他	このクラスを受講するには、コレギウム・ムジクムⅡAを修了している事が望ましい。 コレギウム・ムジクムⅡAを修了していない学生が受講する場合、授業時間外での 自主練習が必要な場合もある。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	専攻実技Ⅴ (作曲)		
英訳科目名	Applied Music (Composition) Ⅴ		
担当教員名	作曲部門		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー-2	<技能>
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	作曲専攻生を対象とした、第3年次の個人レッスンです。 課程ごとに各学生の個性または進捗状況にあわせて、添削や指導を行います。		
到達目標	・課程ごとに必要とされる知識を理解し、技術を習得できる。		
授業計画	第1回 作品の添削 (1) 第2回 作品の添削 (2) 第3回 作品の添削 (3) 第4回 作品の添削 (4) 第5回 作品の添削 (5) 第6回 作品の添削 (6) 第7回 作品の添削 (7) 第8回 作品の添削 (8) 第9回 作品の添削 (9) 第10回 作品の添削 (10) 第11回 作品の添削 (11) 第12回 作品の添削 (12) 第13回 作品の添削 (13) 第14回 作品の添削 (14) 第15回 まとめ		
評価方法 (合計100%)	授業中に与えた課題の到達度 100%		
失格条件	6回以上の欠席		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	作曲専攻の学生にとって、作曲は日常的なものです。 従って個人レッスン中に与えられた課題は、必ず精魂を込めて創作して下さい。 復習時間の目安は授業時間の3倍としますが、作曲は毎日して下さい。		
課題へのフィード バック	授業毎に与えた課題に対する添削および評価を行います。		
教科書	なし		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	専攻実技Ⅵ (作曲)		
英訳科目名	Applied Music (Composition) Ⅵ		
担当教員名	作曲部門		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー-2	<技能>
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	作曲専攻生を対象とした、第3年次の個人レッスンです。 課程ごとに各学生の個性または進捗状況にあわせて、添削や指導を行います。		
到達目標	・課程ごとに必要とされる知識を理解し、技術を習得できる。		
授業計画	第1回 作品の添削 (1) 第2回 作品の添削 (2) 第3回 作品の添削 (3) 第4回 作品の添削 (4) 第5回 作品の添削 (5) 第6回 作品の添削 (6) 第7回 作品の添削 (7) 第8回 作品の添削 (8) 第9回 作品の添削 (9) 第10回 作品の添削 (10) 第11回 作品の添削 (11) 第12回 作品の添削 (12) 第13回 作品の添削 (13) 第14回 作品の添削 (14) 第15回 まとめ		
評価方法 (合計100%)	提出された作品を作曲部門教員で審査を行う 100%		
失格条件	6回以上の欠席		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	作曲専攻の学生にとって、作曲は日常的なものです。 従って個人レッスン中に与えられた課題は、必ず精魂を込めて創作して下さい。 復習時間の目安は授業時間の3倍としますが、作曲は毎日して下さい。		
課題へのフィード バック	授業中に与えた課題に対する評価とコメント、また授業中の議論についてもコメントを伝えます。		
教科書	なし		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	音響学 A		
英訳科目名	Acoustics and Recording A		
担当教員名	能美 亮士		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー-2	<技能>
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	本講義では、音楽の視点から電気音響工学を概観するとともに、これらの技術を援用する際に生じるさまざまな現象や問題を論理的に解説する。		
到達目標	電気音響工学の基礎知識を広く学べるとともに、音や音楽に電気音響テクノロジーを援用する際、論理的に運用できる。		
授業計画	第1回 音楽と電気 第2回 モノフォニックとステレオフォニック 第3回 モノラルとバイノーラル 第4回 音の拡声とスピーカー（種類の解説） 第5回 音の拡声とスピーカー（動作原理の解説） 第6回 音の收音とマイクロフォン（種類の解説） 第7回 音の收音とマイクロフォン（動作原理の解説） 第8回 音の拡声とアンプリファイヤ（種類の解説） 第9回 音の拡声とアンプリファイヤ（動作原理の解説） 第10回 音声用ケーブル（種類の解説） 第11回 ミキシングコンソール 概論 第12回 ミキシングコンソール プリアンプ・イコライザー 第13回 ミキシングコンソール AUX・フェーダー・PAN 第14回 試験 - 内容理解の確認 - 第15回 まとめ		
評価方法 (合計100%)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業への参加態度 70% ・ 試験 30% 		
失格条件	4回以上の欠席		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<ul style="list-style-type: none"> ・ 講義で紹介する文献・資料に関して、事前に目を通しておくこと（予習2時間） ・ 講義で習得した技術について、学校や身の回りにある音響機器、およびソフトウェアなどを用いて熟知すること（復習2時間） 		
課題へのフィード バック	試験後の授業にて解答の解説を行う。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書	適時指示します。		
その他	特になし		
備考	音響エンジニアとしての実務経験をもとに、この授業を進めます。		
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	音響学B		
英訳科目名	Acoustics and Recording B		
担当教員名	能美 亮士		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー-2	<技能>
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	本講義では、音楽の視点から電気音響工学を概観するとともに、これらの技術を援用する際に生じるさまざまな現象や問題を論理的に解説する。		
到達目標	電気音響工学の基礎知識を広く学べるとともに、音や音楽に電気音響テクノロジーを援用する際、論理的に運用できる。		
授業計画	第1回 アナログ音声信号とデジタル音声信号 第2回 ビットとサンプリング周波数 第3回 音の解像度 ハイレゾリューションとローレゾリューション 第4回 音楽の複製 第5回 無線と有線 第6回 音の音色 第7回 ノイズと歪み 第8回 フィールド・レコーディングとスタジオ・レコーディング -音楽と空間- 第9回 音像定位 第10回 音声の圧縮 第11回 音量 Loudness War 第12回 マスタリングの役割 第13回 録音物のアーカイブとサウンド・リペア 第14回 試験 -内容理解の確認- 第15回 まとめ		
評価方法 (合計100%)	・授業への参加態度 70% ・試験 30%		
失格条件	4回以上の欠席		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	・講義で紹介する文献・資料に関して、事前に目を通しておくこと (予習2時間) ・講義で習得した技術について、学校や身の回りにある音響機器、およびソフトウェアなどを用いて熟知すること (復習2時間)		
課題へのフィード バック	試験後の授業にて解答の解説を行う。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書	適時指示します。		
その他	特になし		
備考	音響エンジニアとしての実務経験をもとに、この授業を進めます。		
科目生への開講	なし		

ナンバリング	CM408A07	期間	前期
授業科目名	現代音楽概説 I / 現代音楽概説 A		
英訳科目名	Survey of Modern Music A		
担当教員名	檜垣 智也		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ◎	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ◎
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	西洋芸術音楽の流れにある現代音楽を中心とした作曲技法や概念に親しむ。できるだけ多くの作品を視聴したい。また作品を分析したり、スケッチを試みたり、ワークショップを通じて実験をしたりしながら、現代音楽への教養を知的にも感性的にも深める。今年度は電子テクノロジーを切り口として、音楽への影響や他ジャンルとの接点などについて取り上げる。		
到達目標	現代音楽の作曲技法について理解を深め、自らの創作や演奏活動に活かすことができる。		
授業計画	第1回 電子テクノロジーと音楽 第2回 電子音響音楽 第3回 電子楽器 第4回 音色からのアプローチ 第5回 音響と空間 第6回 再生と演奏 第7回 ライブ・エレクトロニクス 第8回 コンピュータ音楽 第9回 計算とアルゴリズムの援用 第10回 確定と即興 第11回 リアルタイム音楽 第12回 視覚と音楽 第13回 ポピュラー音楽、機会音楽、パフォーマンス・アーツへの接続 第14回 話題提供～最近の音楽より 第15回 まとめ 上記のトピックから受講生の興味に従って、その比重を変えていきます。		
評価方法 (合計100%)	提出課題 100%		
失格条件	6回以上欠席した場合は失格とすることがある。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	現代音楽の演奏会にできるだけ足を運ぶこと。 楽譜をできるだけ読むこと。 音楽をできるだけ聴くこと。		
課題へのフィード バック	授業内でアドバイスします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書	やさしい現代音楽の作曲法 (木石岳編著、自由現代社、ISBN978-4-7982-2243-1)		
その他			
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	CM408A08	期間	後期
授業科目名	現代音楽概説Ⅱ/現代音楽概説B		
英訳科目名	Survey of Modern Music B		
担当教員名	山根 明季子		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	この時間は現代音楽、西洋芸術音楽における特に思想面を中心に学び、楽譜や音源を視聴しつつ知性を深める。つくることに対する自らの視点をより深く、より個々に根ざして各々が持てるようになることを目的とし、多様な作品を知り、先例に対する個々の感性と向き合う。		
到達目標	自身の価値観と既存作品との関係を自律的に築いていくためのより広く深い視点が獲得できる。		
授業計画	第1回 ガイダンス：日本の西洋音楽受容 第2回 トータルセリエリスム 第3回 ミュージックコンクレート、電子音楽 第4回 クラスター、多様式主義 第5回 統計音楽、引用 第6回 アメリカ実験音楽、偶然性、アレアトリー 第7回 フルクサス、即興 第8回 ドローン、ミニマル音楽 第9回 楽器の拡張、特殊奏法 第10回 ミュージックシアター 第11回 非西欧の語法 第12回 スペクトル学派 第13回 プログラミング、アルゴリズム音楽 第14回 コンセプチュアリズム 第15回 まとめ：課題発表		
評価方法 (合計100%)	毎回の提出物 50% 最終課題 50%		
失格条件	6回以上の提出物未提出。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業に興味を持った作家や作品があれば、楽譜、音源、実演、著作に触れ掘り下げていくと良いです。全てを詳しく調べる必要はなく、惹かれるもの、惹かれないもの、各々自身の創作との距離感をはかり関係を築く時間を作ると良いと思います。		
課題へのフィード バック	毎回の提出物は最終授業時にフィードバックをつけてお返しします。 また、毎回の授業時間でも随時、安全に議論ができる場をつくれます。 最終課題は個別にフィードバックを行います。		
教科書	不使用。毎回配布します。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	作曲専攻の演習ですが、現代音楽に関心のある全ての学生の受講を歓迎します。		
備考	作曲家としての実務経験をもとに、この授業を進めます。		
科目生への開講	あり（作曲専攻卒業生に限る）		

ナンバリング	CM408A09/MC408A07	期間	前期
授業科目名	ポピュラー・ミュージック概説 I /ポピュラー・ミュージック概説 A		
英訳科目名	Survey of Popular Music A		
担当教員名	藤村 亘		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ○
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>【授業概要・ポイント】</p> <ul style="list-style-type: none"> 一言でポピュラーミュージックと表すものが、一体どれくらいあるのか。そもそもどこからポピュラーミュージックの範疇なのか。ジャンル同士がどんどん乗り入れて見える現在の音楽シーン全体を見渡しながら、ポピュラーミュージックの背景や、混乱しているジャンルの存在意義などを考えてゆく。 音源や映像も用いながら、履修者の好みや探究心に応じたポピュラー音楽自体も積極的に題材として扱う 		
到達目標	<p>【到達目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> 常に世の中の動きを知る習慣をつけることができる。 音楽ジャンルに対して幅広く興味を持つことができる。 ポピュラーミュージックの大まかな定義を理解することができる。 		
授業計画	<p>【授業計画】</p> <p>第1回 オリエンテーション</p> <p>第2回 現在の音楽シーンに思うこと</p> <p>第3回 クラシックとポピュラー、境界線はどこから？</p> <p>第4回 ロックとポップス</p> <p>第5回 日本のポピュラー音楽と海外のポピュラー音楽</p> <p>第6回 ディスカッション～興味のあるジャンルを語り合う</p> <p>第7回 時代を遡る① ～2000年代</p> <p>第8回 時代を遡る② ～1990年代</p> <p>第9回 時代を遡る③ ～1980年代</p> <p>第10回 時代を遡る④ ～1970年代</p> <p>第11回 時代を遡る⑤ ～1960年代</p> <p>第12回 ジャズはポピュラーミュージックか？</p> <p>第13回 ジャズの誕生と現在のジャズ</p> <p>第14回 世の中との結び付きから考えるポピュラーミュージック</p> <p>第15回 まとめ</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>【評価方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> 授業への参加状況(20%) 提出物(40%) 課題内容の理解度(40%) 		
失格条件	<p>【失格条件】</p> <ul style="list-style-type: none"> 提出期限を守らない 欠席6回以上で失格とする 		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>【予習・復讐の準備学習などのアドバイス】</p> <ul style="list-style-type: none"> 音楽だけでなく世の中を知ることがポピュラーミュージックを知る手掛かりになる。日常のニュースや世界情勢なども話題にするので、興味を持って臨むこと。 各自興味ある音楽について深い思いを持ち、常に語れるくらいに考える(予習時間 1時間) 授業で扱った事柄、音楽を再度吟味し、知識の蓄えとしてゆく(復習時間 3時間) 		
課題へのフィード バック	<p>【課題へのフィードバック】</p> <ul style="list-style-type: none"> 授業時の課題提出物は、コメントを付けて返却します 試験又はレポート課題は、状況に応じて個別にコメントします 		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書	<p>【参考書】</p> <ul style="list-style-type: none"> 授業内配布資料、スコア、楽譜など 		
その他	<p>【その他】</p> <ul style="list-style-type: none"> 講義計画は学生の様子を見ながら柔軟に対応していく 五線譜をいつも持ってきておくこと 		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	CM408A10/MC408A08	期間	後期
授業科目名	ポピュラー・ミュージック概説Ⅱ/ポピュラー・ミュージック概説B		
英訳科目名	Survey of Popular Music B		
担当教員名	藤村 亘		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ○
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>【授業概要・ポイント】</p> <p>・前期のポピュラーミュージック概説Ⅰの内容を踏まえ、実際にポピュラー作品の制作演習を試みることで楽曲全体の構造を理解してゆく。</p> <p>楽曲の成り立ち、メロディと歌詞の関係、コード進行、リズムアレンジなどの要素がどう組み合わせれば、エッセンスのある魅力的な作品になるのか。多角的な視野に基づく見解を多数盛り込みながら、ポピュラーミュージックを真正面から味わい、作品制作へ繋げてゆく。</p>		
到達目標	<p>【到達目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・楽曲を分析する視点を理解することができる。 ・ポピュラーミュージックの魅力をそれぞれの視点で語るすることができる。 ・先の音楽シーンを予見する想像力または創造性を養い、視野を広げることができる。 		
授業計画	<p>【授業計画】</p> <p>第1回 オリエンテーション～前期授業のおさらい</p> <p>第2回 魅力をどこで感じているか？</p> <p>第3回 なぜヒットしたか？～ヒットするワケ</p> <p>第4回 ヒットした曲は音楽的に中身がある曲なのか？</p> <p>第5回 中身があるのにヒットしないワケ、中身がないのにヒットするワケ</p> <p>第6回 メロディを徹底的に味わう～楽曲の形式を理解する</p> <p>第7回 味付けの重要な役割～コード進行</p> <p>第8回 テンションコードの扱い方と実際</p> <p>第9回 リハモナイズ① 基本的考え方</p> <p>第10回 リハモナイズ② 様々なリハモナイズ例の分析</p> <p>第11回 音楽とファッションの関係</p> <p>第12回 ポピュラー音楽と芸術音楽の存在</p> <p>第13回 音楽大学でのポピュラー音楽の扱い</p> <p>第14回 ポピュラー音楽の未来を考える</p> <p>第15回 作品確認及びまとめ</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>【評価方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業への参加状況(30%) ・提出物(30%) ・課題内容の理解度(40%) 		
失格条件	<p>【失格条件】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・提出期限を守らない ・欠席6回以上で失格とする 		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	<p>【予習・復習の準備学習などのアドバイス】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・あえてクラシック音楽は一切扱わない。だからこそ普段学んでいるクラシック音楽に役立つポイントも見つかるはずである。柔軟な発想で臨んで欲しい。 ・音楽理論的側面、コードネームの理解、楽曲の鑑賞、考えをまとめる(予習時間 1時間) ・授業で扱った事柄を再度吟味し、知識の蓄えとしてゆく(復習時間 3時間) 		
課題へのフィード バック	<p>【課題へのフィードバック】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業時の課題提出物は、コメントを付けて返却します ・試験又はレポート課題は、状況に応じて個別にコメントします 		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書	<p>【参考書】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業内配布資料、楽譜など 		
その他	<p>【その他】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・講義計画は、学生の様子を見ながら柔軟に対応してゆく。 ・五線譜をいつも持ってきておくこと 		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	CM408A11/AP408A05	期間	前期
授業科目名	音楽情報処理入門/音楽情報処理A		
英訳科目名	Information Processing of Music A		
担当教員名	橋田 光代		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ○	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> △	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	今や音楽制作の多くのプロセスにおいてコンピュータが使われている。音を出す装置という点において、ピアノやギターなど見慣れた楽器もからくり機械と同じである。本科目では、音・映像の制作・演奏に用いられるプログラミングソフト「Max」を利用し、音の高さや音色に始まる音楽の諸要素を、コンピュータではどのように扱うのかを、実験を含みつつ概観する。		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・いわゆる音楽の三要素（リズム、メロディー、ハーモニー）に対する理解を深めることができる。 ・いわゆるコンピュータプログラミングの基礎的な作法を理解することができる。 ・みずから音色や音響そのものを作り出すことで、身近にある音楽や音の仕組みに対する興味・関心を深めることができる。 		
授業計画	<p>基本的に下記の流れで進めていくが、履修者の理解状況に応じて順番や配分・予定を変更する場合がある。</p> <p>第1回 オブジェクトを線でつなぐ、数値を操る 第2回 手入力と自動制御（キーボード、マウス、metro） 第3回 時間計測とリズム onset, tempo, delay/pipe, timer 第4回 数え上げと条件分岐 counter, selector, gate 第5回 MIDI (1) notein/out, makenote, pgmout 第6回 MIDI (2) 音価、和音、シーケンス 第7回 計算とグラフ math, expr, table 第8回 リアルタイム入出力 第9回 画面操作 1 第10回 画面操作 2 第11回 画像操作 第12回 動画・音声の利用 第13回 応用演習 1 第14回 応用演習 2 第15回 授業内試験</p>		
評価方法 (合計100%)	<ul style="list-style-type: none"> ・授業への参加態度： 50% ・授業内試験： 50% <p>授業を欠席すれば、「授業への参加態度」において1回あたり8%を減ずる。</p>		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>初歩的な数学・英語を扱います。不安がある人は、ポータルサイトのSSドリルや、中学・高校の参考書・問題集などで日々自習してください。</p> <p>本科目は、専用ソフトウェアを用いた演習が中心です。コツをつかむまではかなり「難しい」と感じると予想されます。授業時間以外も積極的に自習をしてください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業で示されたポイントの復習・応用練習 2時間 ・適宜示される課題の制作 2時間 		
課題へのフィード バック	毎週、簡単な課題が出ます。翌週のはじめにその振り返りを行います。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書	<p>「[Max]ではじめるサウンドプログラミング」 松村 誠一郎 著/工学社 ISBN978-4-7775-2021-3 C3004 1,900円</p> <p>「2061:Maxオデッセイー音楽と映像をダイナミックに創造する!最高の開発環境を徹底解説」 ノイマンピアノ 著/リットーミュージック ISBN: 978-4845613618 7,510円</p> <p>「Maxの教科書」 ノイマンピアノ 著/リットーミュージック ISBN: 978-4845617029 5,040円</p> <p>「はじめてのMax/MSP/Jitter」 大谷 安宏 著/ビー・エヌ・エヌ新社 ISBN: 978-4861006289 3,570円</p> <p>このほか、進行状況に合わせて適宜指示する。</p>		
その他	特になし		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	CM408A12/AP408A06	期間	後期
授業科目名	音楽情報処理/音楽情報処理B		
英訳科目名	Music Information Processing B		
担当教員名	橋田 光代		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ○	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> △	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	Maxプログラミングを通じて、インタラクティブなサウンド作品創作のための手法と音楽情報処理の仕組みを学ぶ。みずから表現者という立場を経験することで、作品に対する鑑賞力、作品をプロモートするのに必要な視点について理解を深める。		
到達目標	マルチメディアコンテンツ制作におけるワークフローを理解できる。 みずから音色や音響そのものを作り出すことで、身近にある音楽や音の仕組みに対する興味・関心を深めることができる。		
授業計画	<p>基本的に下記の流れで進めていくが、履修者の理解状況に応じて時間配分は調整する。</p> <p>第1回 Max入出力、基本文法の復習 第2回 録音、サウンドファイルの編集1 第3回 録音、サウンドファイルの編集2 第4回 音響処理：ピッチシフト、タイムストレッチ 第5回 音響処理：正弦波、周波数制御 第6回 音響処理：加算合成 第7回 音響処理；ノイズ 第8回 動画処理：カメラ、動画入力 第9回 動画処理：フィルター、タイムストレッチ 第10回 サウンド処理との連携 第11回 応用演習1 第12回 応用演習2 第13回 応用演習3 第14回 応用演習4 第15回 作品発表会</p>		
評価方法 (合計100%)	1. 授業への参加態度 50% 2. 研究成果のプレゼンテーション 50% 授業を欠席すれば、「授業への参加態度」において1回あたり8%を減ずる。		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	表現する側の視点に立って「この作品はどのように作られたのか」を常に観察する姿勢が求められます。授業時間に関わらず、随時教員と議論しにきてください。内容によっては、事前に資料を用意してください。		
課題へのフィードバック	毎週、簡単な課題が出ます。翌週の授業のはじめにその振り返りを行います。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書	「[Max]ではじめるサウンドプログラミング」 松村 誠一郎 著/工学社 ISBN978-4-7775-2021-3 C3004 1,900円 「2061:Maxオデッセイー音楽と映像をダイナミックに創造する!最高の開発環境を徹底解説」 ノイマンピアノ 著/リットーミュージック ISBN: 978-4845613618 7,510円 「Maxの教科書」 ノイマンピアノ 著/リットーミュージック ISBN: 978-4845617029 5,040円 「はじめてのMax/MSP/Jitter」 大谷 安宏 著/ピー・エヌ・エヌ新社 ISBN: 978-4861006289 3,570円 このほか、進行状況に合わせて適宜指示する。		
その他	初回授業時点で、下記のいずれかの経験・スキルを有していることを前提に進めます。 1. 「音楽情報処理A」を履修済である。 2. Maxを用いたプログラミングを自作したことがある。 3. C, Java, Scratch, C++ その他、何らかの言語・ツールによるプログラミングをある程度理解している。 いずれにも該当しない場合は、事前に担当教員の面談を受けてください。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	CM407A02	期間	後期
授業科目名	作曲演習Ⅱ		
英訳科目名	Practice in Composition Ⅱ		
担当教員名	檜垣 智也		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー2	<技能>
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	作曲指導		
到達目標	オリジナル作品の作曲ができる。		
授業計画	第1回 作曲課題の相談 第2回 リサーチ 1 第3回 リサーチ 2 第4回 個別指導1 第5回 個別指導2 第6回 発表の方法 第7回 発表の方法 第8回 個別指導3 第9回 個別指導4 第10回 個別指導5 第11回 個別指導6 第12回 個別指導7 第13回 個別指導8 第14回 個別指導9 第15回 個別指導10		
評価方法 (合計100%)	学年末の提出課題：100%		
失格条件	6回以上欠席した場合は失格とします。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	課題は授業外でやってください。授業では課題のアドバイスをしていきます。		
課題へのフィード バック	授業内でアドバイスします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	オリジナル作品の完成を目指して指導をします。作曲専攻の学内発表会に出品してください。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	CM407A03	期間	前期
授業科目名	作曲実技 I		
英訳科目名	Applied Music (Composition) I		
担当教員名	作曲部門		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> -
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	作曲専攻生を対象とした、第二年度の個人レッスンです。 各学生の個性または進捗状況にあわせて、添削や指導を行います。		
到達目標	・課程（芸術作曲・メディア作曲・コンピュータ作曲）別に望まれる作曲ができる。		
授業計画	第1回 ガイダンス 第2回 作品の添削（1） 第3回 作品の添削（2） 第4回 作品の添削（3） 第5回 作品の添削（4） 第6回 作品の添削（5） 第7回 作品の添削（6） 第8回 作品の添削（7） 第9回 作品の添削（8） 第10回 作品の添削（9） 第11回 作品の添削（10） 第12回 作品の添削（11） 第13回 作品の添削（12） 第14回 作品の添削（13） 第15回 まとめ、試演		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 100%		
失格条件	6回以上の欠席		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	作曲専攻の学生にとって、作曲は日常的なものです。 従って個人レッスン中に与えられた課題は、必ず精魂を込めて創作して下さい。 復習時間の目安は授業時間の3倍としますが、作曲は毎日して下さい。		
課題へのフィード バック	授業中に与えた課題に対する評価とコメント、また授業中の議論についてもコメントを伝えます。		
教科書	なし		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	CM407A04	期間	後期
授業科目名	作曲実技Ⅱ		
英訳科目名	Applied Music (Composition) Ⅱ		
担当教員名	作曲部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	作曲専攻生を対象とした、第二年度の個人レッスンです。 各学生の個性または進捗状況にあわせて、添削や指導を行います。		
到達目標	・課程（芸術作曲・メディア作曲・コンピュータ作曲）別に望まれる作曲ができる。		
授業計画	第1回 ガイダンス 第2回 作品の添削（1） 第3回 作品の添削（2） 第4回 作品の添削（3） 第5回 作品の添削（4） 第6回 作品の添削（5） 第7回 作品の添削（6） 第8回 作品の添削（7） 第9回 作品の添削（8） 第10回 作品の添削（9） 第11回 作品の添削（10） 第12回 作品の添削（11） 第13回 作品の添削（12） 第14回 作品の添削（13） 第15回 まとめ、試演		
評価方法 (合計100%)	年度末作品提出の審査 100%		
失格条件	6回以上の欠席		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	作曲専攻の学生にとって、作曲は日常的なものです。 従って個人レッスン中に与えられた課題は、必ず精魂を込めて創作して下さい。 復習時間の目安は授業時間の3倍としますが、作曲は毎日して下さい。		
課題へのフィード バック	授業中に与えた課題に対する評価とコメント、また授業中の議論についてもコメントを伝えます。		
教科書	なし		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	CM408A01	期間	前期
授業科目名	作曲理論 I		
英訳科目名	Composition theory I		
担当教員名	作曲部門		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	この科目では、音楽の理解そして作曲に必要な理論を習得するために、1/4コマ（1コマ90分）の個人レッスンを実施します。 主に「和声法」「対位法」を学びます。		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・レッスンで説明した範囲の理論を理解して、与えられた課題を実施できる。 ・実際の楽曲でどのように使用されているか、その例を聴いて、自身の作曲でも援用できる。 ・理論を学ぶことにより、感覚的にも聴き分けられ、また書き分けられることができる。 		
授業計画	第1回 和声学習の基礎知識と数字付き低音について 第2回 三和音①概説と鍵盤上での実施 第3回 三和音②課題の実施 第4回 属七の和音①概説と鍵盤上での実施 第5回 属七の和音②課題の実施 第6回 ドッペルドミナント①概説と鍵盤上での実施 第7回 ドッペルドミナント②課題の実施 第8回 同主短調からの借用 第9回 ドリア、ナポリ 第10回 属九、減七の和音①概説と鍵盤上での実施 第11回 属九、減七の和音②課題の実施 第12回 借用属七、属九の和音 第13回 転調概説、増6の和音 第14回 フォーレ終止、総合課題の実施 第15回 到達度の確認		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度30% 試験70%		
失格条件	欠席回数が6回以上の場合。 試験を受けなかった場合。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	復習時間中に必ずピアノを用いて実習した課題と、添削された後の状態を弾き比べること。 そのため授業時間の2倍は復習時間に、また予習時間も同程度は必要です。		
課題へのフィード バック	実習の取り組みに対して個別にコメントします。		
教科書	授業中に適宜プリントを配布します。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	授業計画は修得状況に応じて、柔軟に対応します。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	CM408A02	期間	後期
授業科目名	作曲理論Ⅱ		
英訳科目名	Composition theory II		
担当教員名	作曲部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	この科目では、音楽の理解そして作曲に必要な理論を習得するために、1/4コマ（1コマ90分）の個人レッスンを実施します。 作曲理論Ⅰの継続として、主に「和声法」「対位法」を学びます。		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・レッスンで説明した範囲の理論を理解して、与えられた課題を実施できる。 ・実際の楽曲でどのように使用されているか、その例を聴いて、自身の作曲でも援用できる。 ・理論を学ぶことにより、感覚的にも聴き分けられ、また書き分けられることができる。 		
授業計画	第1回 作曲理論Ⅰの復習、これまでの学修状況により、個別に与えた課題の添削 第2回 レッスン(1) H.Challan 380のバス課題とソプラノ課題 3巻の実施 第3回 レッスン(2) H.Challan 380のバス課題とソプラノ課題 3巻の実施 第4回 レッスン(3) H.Challan 380のバス課題とソプラノ課題 3巻の実施 第5回 レッスン(4) H.Challan 380のバス課題とソプラノ課題 3巻の実施 第6回 レッスン(5) H.Challan 380のバス課題とソプラノ課題 4巻の実施 第7回 レッスン(6) H.Challan 380のバス課題とソプラノ課題 4巻の実施 第8回 レッスン(7) H.Challan 380のバス課題とソプラノ課題 4巻の実施 第9回 レッスン(8) H.Challan 380のバス課題とソプラノ課題 4巻の実施 第10回 レッスン(9) H.Challan 380のバス課題とソプラノ課題 5巻の実施、二声対位法（全音符対2分音符） 第11回 レッスン(10) H.Challan 380のバス課題とソプラノ課題 5巻の実施、二声対位法（全音符対2分音符） 第12回 レッスン(11) H.Challan 380のバス課題とソプラノ課題 5巻の実施 二声対位法（全音符対4分音符） 第13回 レッスン(12) H.Challan 380のバス課題とソプラノ課題 5巻の実施 二声対位法（全音符対4分音符） 第14回 レッスン(13) H.Challan 380のバス課題とソプラノ課題 5巻の実施 二声対位法（全音符対4分音符） 第15回 到達度の確認		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度30% 試験70%		
失格条件	欠席回数が6回以上の場合。 試験を受けなかった場合。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	復習時間中に必ずピアノを用いて実習した課題と、添削された後の状態を弾き比べること。 そのため授業時間の2倍は復習時間に、また予習時間も同程度は必要です。		
課題へのフィード バック	実習の取り組みに対して個別にコメントします。		
教科書	授業中に適宜プリントを配布します。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	授業計画は修得状況に応じて、柔軟に対応します。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	CM408A03	期間	前期
授業科目名	作曲理論Ⅲ		
英訳科目名	Composition theory Ⅲ		
担当教員名	作曲部門		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	この科目では、音楽の理解そして作曲に必要な理論を習得するために、1/4コマ（1コマ90分）の個人レッスンを実施します。 作曲理論Ⅱの継続として、主に「和声法」「対位法」を学びます。		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・レッスンで説明した範囲の理論を理解して、与えられた課題を実施できる。 ・実際の楽曲でどのように使用されているか、その例を聴いて、自身の作曲でも援用できる。 ・理論を学ぶことにより、感覚的にも聴き分けられ、また書き分けられることができる。 		
授業計画	第1回 作曲理論Ⅱの復習、これまでの学修状況により、個別に与えた課題の添削 第2回 レッスン (1) 掛留音①、二声対位法 (移勢対旋律) 第3回 レッスン (2) 掛留音②、二声対位法 (移勢対旋律) 第4回 レッスン (3) 倚行音①、二声対位法 (移勢対旋律) 第5回 レッスン (4) 倚行音②、二声対位法 (移勢対旋律) 第6回 レッスン (5) 先行音、二声対位法 (移勢対旋律) 第7回 レッスン (6) 刺繍音①、二声対位法 (移勢対旋律) 第8回 レッスン (7) 刺繍音②、二声対位法 (華麗対旋律) 第9回 レッスン (8) 経過音①、二声対位法 (華麗対旋律) 第10回 レッスン (9) 経過音②、二声対位法 (華麗対旋律) 第11回 レッスン (10) 逸行音、二声対位法 (華麗対旋律) 第12回 レッスン (11) 保続音①、二声対位法 (華麗対旋律) 第13回 レッスン (12) 保続音②、二声対位法 (華麗対旋律) 第14回 レッスン (13) 偶成和音、二声対位法 (華麗対旋律) 第15回 到達度の確認		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度30% 試験70%		
失格条件	欠席回数が6回以上の場合。 試験を受けなかった場合。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	復習時間中に必ずピアノを用いて実習した課題と、添削された後の状態を弾き比べること。 そのため授業時間の2倍は復習時間に、また予習時間も同程度は必要です。		
課題へのフィード バック	実習の取り組みに対して個別にコメントします。		
教科書	授業中に適宜プリントを配布します。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	授業計画は修得状況に応じて、柔軟に対応します。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	CM408A04	期間	後期
授業科目名	作曲理論Ⅳ		
英訳科目名	Composition theory IV		
担当教員名	作曲部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	この科目では、音楽の理解そして作曲に必要な理論を習得するために、1/4コマ（1コマ90分）の個人レッスンを実施します。 作曲理論Ⅲの継続として、主に「和声法」「対位法」を学びます。		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・レッスンで説明した範囲の理論を理解して、与えられた課題を実施できる。 ・実際の楽曲でどのように使用されているか、その例を聴いて、自身の作曲でも援用できる。 ・理論を学ぶことにより、感覚的にも聴き分けられ、また書き分けられることができる。 		
授業計画	第1回 作曲理論Ⅲの復習、これまでの学修状況により、個別に与えた課題の添削 第2回 レッスン（1）H.Challan 380のバス課題とソプラノ課題 6巻の実施、三声対位法第1混合類 第3回 レッスン（2）H.Challan 380のバス課題とソプラノ課題 6巻の実施、三声対位法第1混合類 第4回 レッスン（3）H.Challan 380のバス課題とソプラノ課題 6巻の実施、三声対位法第1混合類 第5回 レッスン（4）H.Challan 380のバス課題とソプラノ課題 6巻の実施、三声対位法第2混合類 第6回 レッスン（5）H.Challan 380のバス課題とソプラノ課題 7巻の実施、三声対位法第2混合類 第7回 レッスン（6）H.Challan 380のバス課題とソプラノ課題 7巻の実施、三声対位法第2混合類 第8回 レッスン（7）H.Challan 380のバス課題とソプラノ課題 7巻の実施、三声対位法第3混合類 第9回 レッスン（8）H.Challan 380のバス課題とソプラノ課題 7巻の実施、三声対位法第3混合類 第10回 レッスン（9）H.Challan 380のバス課題とソプラノ課題 8巻の実施、三声対位法第3混合類 第11回 レッスン（10）H.Challan 380のバス課題とソプラノ課題 8巻の実施、三声対位法華麗対旋律 第12回 レッスン（11）H.Challan 380のバス課題とソプラノ課題 8巻の実施、三声対位法華麗対旋律 第13回 レッスン（12）H.Challan 380のバス課題とソプラノ課題 8巻の実施、三声対位法華麗対旋律 第14回 レッスン（13）H.Challan 380のバス課題とソプラノ課題 8巻の実施、三声対位法華麗対旋律 第15回 到達度の確認		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度30% 試験70%		
失格条件	欠席回数が6回以上の場合。 試験を受けなかった場合。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	復習時間中に必ずピアノを用いて実習した課題と、添削された後の状態を弾き比べること。 そのため授業時間の2倍は復習時間に、また予習時間も同程度は必要です。		
課題へのフィード バック	実習の取り組みに対して個別にコメントします。		
教科書	授業中に適宜プリントを配布します。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	授業計画は修得状況に応じて、柔軟に対応します。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	CM407A06	期間	後期
授業科目名	管弦楽法		
英訳科目名	Orchestration		
担当教員名	山根 明季子		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	管弦楽法（オーケストレーション）を取り扱う。 基本的な記譜法や、実演までの仕組みから、 今日に至るまでの管弦楽曲の技法と思想に触れて学ぶ。		
到達目標	管弦楽総譜を書く力を身につけることができる。		
授業計画	第1回 ガイダンス：オーケストラとは何か 第2回 組織と編成 第3回 ハイドンと実習 第4回 ムソルグスキーと実習 第5回 ストラヴィンスキーと実習 第6回 ウェーベルンと実習 第7回 ペンデレツキと実習 第8回 ジョン・ケージと実習 第9回 課題実習（1） 第10回 課題実習（2） 第11回 課題実習予備 第12回 パート譜制作 第13回 実演前のチェックと提出 第14回 試演実習 第15回 フィードバック		
評価方法 (合計100%)	課題の評価 100%		
失格条件	課題未提出の場合。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	ご自分に合った管弦楽法参考書を1冊は所有するのが良い。 また、興味を惹く作品があればスコアを自分の手で書き写すことがとても勉強になります。		
課題へのフィード バック	各授業で行うワークには個別にフィードバックをつけてお返しします。 最終課題は数回にわたって添削助言、意図と技法をめぐって議論を行います。		
教科書	不使用。必要に応じて配布します。		
著者名			
出版社			
参考書	ゴードン・ヤコブ（著）管弦楽技法 音楽之友社 伊福部昭（著）管弦楽法 音楽之友社		
その他	特になし。		
備考	作曲家としての実務経験をもとに、この授業を進めます。		
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	西洋音楽史演習 A		
英訳科目名	Seminar in History of Western Art Music A		
担当教員名	黒坂 俊昭		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> ◎	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> ○
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	この演習は、ヨーロッパ音楽をさまざまな方法で分析することを目的としている。主としてヨーロッパ音楽の個々の作品が歴史的に位置づけられるとはどのようなことであるのか、またそれを可能にするにはどうすればよいのかといった事柄を学びたい。可能なかぎり楽譜を前にし、それを解読・分析することから、その目的を達成したいと目論んでいる。		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 楽譜等を通してヨーロッパ音楽を把握できるようになる。 ・ ヨーロッパ音楽を歴史的並びに文化的に理解できるようになる。 		
授業計画	第1回 ヨーロッパ音楽の歴史的全体像 第2～3回 ネウマ譜の解読とグレゴリウス聖歌 第4～5回 初期多声音楽の発展（オルガヌムとモテトゥス） 第6～7回 定量記譜法による楽譜の解読とアルス・ノヴァ 第8回 トレチェントの音楽とランディーニ終止 第9回 ブルゴーニュ楽派の3度音 第10回 ミサとミサ曲 第11回 フランドル楽派の対位法（ア・カッペッラの音楽） 第12回 パレストリーナの書法 第13～14回 モンテヴェルディの和声（調性音楽の確立） 第15回（授業内容の理解の確認）		
評価方法 (合計100%)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業参加への積極性：50% ・ 提出レポートの内容：50% ・ 授業を欠席すれば、「授業参加への積極性」において1回あたり5%を減ずる。 		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<ul style="list-style-type: none"> ・ 内容については適宜、授業内で指示する。 ・ 次回の演習で使用する楽譜について考察しておくこと。（予習時間：3時間） ・ 演習で解説した事柄についてまとめておくこと。（復習時間：1時間） 		
課題へのフィード バック	楽譜を通してヨーロッパ音楽を歴史的並びに文化的に把握する。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	教材は、必要に応じて、レジュメ・コピーを配付する。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	MC408A05	期間	前期
授業科目名	音楽の歴史と文化A		
英訳科目名	History of Western Art Music and Culture A		
担当教員名	黒坂 俊昭		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ◎	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ○
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	この演習は、ヨーロッパ音楽を歴史的並びに文化的な方法で分析することを目的としている。主としてヨーロッパ音楽の個々の作品が歴史的に或いは文化的に位置づけられるとはどのようなことであるのか、またそれを可能にするにはどうすればよいのかといった事柄を学びたい。可能なかぎり楽譜を前にし、それを解説・分析することから、その目的を達成したいと目論んでいる。		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 楽譜等を通してヨーロッパ音楽を把握できるようになる。 ・ ヨーロッパ音楽を歴史的並びに文化的に理解できるようになる。 		
授業計画	第1回 ヨーロッパ音楽の歴史的全体像 第2～3回 ネウマ譜の解説とグレゴリウス聖歌 第4～5回 初期多声音楽の発展（オルガナムとモテトゥス） 第6～7回 定量記譜法による楽譜の解説とアルス・ノヴァ 第8回 トレチェントの音楽とランディーニ終止 第9回 ブルゴーニュ楽派の3度音 第10回 ミサとミサ曲 第11回 フランドル楽派の対位法（ア・カッペッラの音楽） 第12回 パレストリーナの書法 第13～14回 モンテヴェルディの和声（調性音楽の確立） 第15回（授業内容の理解の確認）		
評価方法 (合計100%)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業参加への積極性：50% ・ 提出レポートの内容：50% ・ 授業を欠席すれば、「授業参加への積極性」において1回あたり5%を減ずる。 		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<ul style="list-style-type: none"> ・ 内容については適宜、授業内で指示する。 ・ 次回の演習で使用する楽譜について考察しておくこと。（予習時間：3時間） ・ 演習で解説した事柄についてまとめておくこと。（復習時間：1時間） 		
課題へのフィード バック	楽譜を通してヨーロッパ音楽を歴史的並びに文化的に把握する。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	教材は、必要に応じて、レジュメ・コピーを配付する。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	MC407B01	期間	前期
授業科目名	音楽学演習 I A		
英訳科目名	Seminar in Musicology I A		
担当教員名	黒坂 俊昭		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> -
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	受講生各自がヨーロッパ音楽に関して自由にテーマを定め、自由に研究を繰り広げる。卒業研究に繋げる、繋げないにかかわらず、そのテーマに深く考察を及ぼし、論述における論理性及び独自性を習得する。本演習では、期間内に少なくとも1本のレポートを完成させなければならない。		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> 論文（またはレポート）を作成するための手順を理解できるようになる。 論述において、論理的な展開をすることができるようになる。 レポート（または論文）を完成させることができるようになる。 		
授業計画	第1～2回 レポートのテーマの設定 第3～4回 レポート作成に必要な事項の検討 第5～6回 レポートに関する文献研究 第7～8回 レポートの章構成 第9～10回 レポートの粗書き 第11～12回 レポートの作成 第13～14回 レポートの発表 第15回 レポート作成を振り返って		
評価方法 (合計100%)	<ul style="list-style-type: none"> 授業参加への積極性： 60% 提出レポートの内容： 40% 授業を欠席すれば、「授業参加への積極性」において1回あたり5%を減ずる。 		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<ul style="list-style-type: none"> 予習・復習の内容については、適宜、授業内で指示する。 演習に持参する事項について十分に考察しておくこと。（予習時間：3時間） 演習で検討した内容をしっかりまとめること。（復習時間：1時間） 		
課題へのフィード バック	次年度の卒業研究作成の足掛かりができる。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	MC407B02	期間	後期
授業科目名	音楽学演習 I B		
英訳科目名	Seminar in Musicology I B		
担当教員名	黒坂 俊昭		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	「音楽学研究 I A」(前期開講)に引き続き、受講生各自がヨーロッパ音楽に関して自由にテーマを定め、自由に研究を繰り広げる。可能なかぎり、卒業論文(或いは卒業レポート)に繋げるテーマに深く考察を及ぼし、論述における論理性及び独自性の重要性を習得する。本演習では、期間内に少なくとも1本のレポートを完成させなければならない。		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> 論文(またはレポート)を作成するための手順を理解できるようになる。 論述において、論理的な展開をすることができるようになる。 レポート(または論文)を完成させることができるようになる。 		
授業計画	第1～2回 レポートのテーマの設定 第3～4回 レポート作成に必要な事項の検討 第5～6回 レポートに関する文献研究 第7～8回 レポートの章構成 第9～10回 レポートの粗書き 第11～12回 レポートの作成 第13～14回 レポートの発表 第15回 発表レポートを踏まえた討論		
評価方法 (合計100%)	<ul style="list-style-type: none"> 授業参加への積極性：60% 提出レポートの内容：40% 授業を欠席すれば、「授業参加への積極性」において1回あたり5%を減ずる。 		
失格条件	なし		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	<ul style="list-style-type: none"> 予習・復習の内容については、適宜、授業内で指示する。 演習に持参する事項について十分に考察しておくこと。(予習時間：3時間) 演習で検討した内容をしっかりまとめること。(復習時間：1時間) 		
課題へのフィード バック	次年度の卒業論文等の基礎及び枠組みが完成する。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	期間	前期
授業科目名	音楽学研究 A	
英訳科目名	Study in Musicology A	
担当教員名	大谷 紀美子	
ディプロマ・ポリシー1	ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	世界諸民族、特にアジアの人々の音楽活動や音楽を中心に、それらの研究方法を考察し、学習する。また、多種多様な音楽を聴取、経験することにより、音楽的に広い視野がもてるようになること。	
到達目標	さまざまな社会において、音楽がどのように存在し、どのような意味をもっているかを理解できる。	
授業計画	第1回 はじめに。授業の進め方などを説明。 第2回 日本の音楽① 第3回 日本の音楽② 第4回 日本の音楽③ 第5回 アジアの音楽全般 第6回 中国の音楽① 第7回 中国の音楽② 第8回 インドネシア① 第9回 インドネシア② 第10回 インド① 第11回 インド② 第12回 共通点など 第13回 相違点など 第14回 それぞれの特徴など 第15回 まとめ	
評価方法 (合計100%)	授業への参加度 60% レポート作成 40%	
失格条件	欠席が30%を超える場合。	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業までに出された課題を調べておくこと。 予習に多くの時間をつかうこと。	
課題へのフィード バック	到達目標に掲げた内容が、達成されているかどうかを十分に検討する。 授業内容が理解できているかを授業中にも確認を行い、期末のレポートでチェックする。	
教科書	使用しない。ただし、図書館等を利用し、文献になれ親しむため、多くの読書が要求される。	
著者名		
出版社		
参考書		
その他		
備考		
科目生への開講	なし	

ナンバリング	期間	後期
授業科目名	音楽学研究 B	
英訳科目名	Study in Musicology B	
担当教員名	大谷 紀美子	
ディプロマ・ポリシー1	ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	文献資料・音響映像資料等を図書館やインターネットで検索し、活用すること。 資料の扱い方に習熟することが大きなポイントである。	
到達目標	音楽で表現されたものを言語化、あるいは言語で説明できるような能力を身につけることができる。	
授業計画	第1回 はじめに。授業の進め方等の説明。 第2回～第5回 文献資料の扱い方 第6回～第9回 音・映像資料の扱い方 第10回～第12回 音楽研究のレポートや論文の書き方 第13回～第14回 音楽研究の口頭発表の練習 第15回 まとめ	
評価方法 (合計100%)	授業への参加度（含む積極的な態度） 60% レポート作成 40%	
失格条件	欠席が30%を超える場合	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	自発的に資料を探し、授業で発表することが望まれる。また、資料を十分に読みこむ練習をすること。 資料の探し方について、授業以外でも図書館等の利用を奨励する。	
課題へのフィード バック	授業中での発表や発言を通し、また、提出されたレポートからどの程度理解が進み、言語による表現ができてい るかを、チェックする。	
教科書	不使用	
著者名		
出版社		
参考書		
その他		
備考		
科目生への開講	なし	

ナンバリング	MC408A03	期間	前期
授業科目名	楽書講読（英語） I / 楽書講読（英語） I A		
英訳科目名	Reading in Sources on Music(English) I / Reading in Sources on Music (English) I A		
担当教員名	黒坂 俊昭		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> △
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	ヨーロッパ音楽を演奏したり、ヨーロッパ音楽について思索を巡らせたりするとき、音楽学の論文を読むことによって一つの方向が示される場合が少なくない。そこで本演習では、英語によって書かれた古典派音楽或いはロマン派音楽に関する論文を精読し、その内容を詳細に検討した上で、ヨーロッパ音楽の一側面について考察していきたい。なお、このように本授業はただひたすらに英語の語学力の向上を目指すものではない。		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 英語による論文を読めるようになる。 ・ 論文の趣旨を理解することができるようになる。 ・ ヨーロッパ人の思考による音楽の把握を垣間見れるようになる。 		
授業計画	第1回 外国語文献を読む意味について 第2～3回 文献の背景となる音楽について 第4～7回 文献の講読（文章の概略把握） 第8～11回 文献講読と訳出 第12～14回 文献の講読と内容の検討 第15回（授業内容の理解の確認）		
評価方法 (合計100%)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業参加への積極性： 50% ・ 理解度の確認レポート： 50% ・ 授業を欠席すれば、1回あたり5%を減じる。 		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<ul style="list-style-type: none"> ・ 内容については、適宜、授業内で指示する。 ・ 講義で解説する事項について考察しておくこと。（予習時間：3時間） ・ 講義で検討した内容をまとめておくこと。（復習時間：1時間） 		
課題へのフィード バック	ヨーロッパの人々の思考によってヨーロッパ音楽を把握する。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	教材は、必要に応じてコピーを配付する。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	MC408A04	期間	後期
授業科目名	楽書講読（英語）Ⅱ/楽書講読（英語）ⅠB		
英訳科目名	Reading in Sources on Music(English) Ⅱ/Reading in Sources on Music (English) ⅠB		
担当教員名	黒坂 俊昭		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> △
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	ヨーロッパ音楽を演奏したり、ヨーロッパ音楽について思索を巡らせたりするとき、音楽学の論文を読むことによって一つの方向が示される場合が少なくない。そこで本演習では、「楽書講読（英語）ⅠA」（前期開講）に引き続き、英語によって書かれた古典派音楽或いはロマン派音楽に関する論文を精読し、その内容を詳細に検討した上で、ヨーロッパ音楽の一側面について考察していく。		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 英語による論文を読めるようになる。 ・ 論文の趣旨を理解することができるようになる。 ・ ヨーロッパ人の思考による音楽の把握を理解できるようになる。 		
授業計画	第1～5回 文献の講読と背景となる音楽史の考察 第6～10回 文献の講読と内容の音楽史的評価 第11～14回 文献の講読とその内容に対する受講生個人の評価 第15回 （後期授業内容の理解の確認）		
評価方法 (合計100%)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業参加への積極性： 50% ・ 理解度の確認レポート： 50% ・ 授業を欠席すれば、1回あたり5%を減じる。 		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<ul style="list-style-type: none"> ・ 内容については、適宜、授業内で指示する。 ・ 講義で解説する事項について考察しておくこと。（予習時間：3時間） ・ 講義で検討した内容をまとめておくこと。（復習時間：1時間） 		
課題へのフィード バック	ヨーロッパの人々の思考によってヨーロッパ音楽を把握する。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	教材は、必要に応じてコピーを配付する。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	MC407A01	期間	前期
授業科目名	音楽学概説 A		
英訳科目名	Survey of Musicology A		
担当教員名	黒坂 俊昭		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> -
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	音楽を理解するということは、一体どういうことであろうか？ それには、一方に歴史的な理解などがあり、他方に作品論的な理解や楽曲分析的な理解などがある。しかし、理解するということにおいては、いずれも理解する個人のみが理解するだけでは不十分であり、広く普遍性をもたなければならない。だからと言って、その理解が過度に普遍的であっても、音楽の本来の姿からかけ離れてしまいかねない。さまざまな例を取り上げ、音楽を理解することの意味と実際について考えてみる。音楽学概説 A では、特に歴史的な観点から考察したい。		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 音楽を理解する意味について理解できるようになる。 ・ 音楽を歴史的に位置づけ、考察できるようになる。 		
授業計画	<p>第1～3回 音楽を理解するということは。</p> <p>第4～5回 音楽を理解するさまざまな方法。</p> <p>第6～9回 音楽理解の実際Ⅰ … ヨーロッパ音楽の歴史的考察</p> <p>第10回 音楽理解の実際Ⅱ … 日本音楽の歴史的考察</p> <p>第11回 音楽理解の実際Ⅲ … 日本音楽の社会的考察</p> <p>第12～14回 音楽理解の実際Ⅳ … ヨーロッパ音楽の社会的考察</p> <p>第15回 (授業内容の理解の確認)</p>		
評価方法 (合計100%)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業参加への積極性： 50% ・ 提出レポートの内容： 50% ・ 授業を欠席すれば、「授業参加への積極性」において1回あたり5%を減ずる。 		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<ul style="list-style-type: none"> ・ 内容については、適宜、授業内で指示する。 ・ 講義で解説する事項について考察しておくこと。(予習時間：1時間) ・ 講義で検討した内容をまとめておくこと。(復習時間：3時間) 		
課題へのフィード バック	音楽の営み(鑑賞、演奏、創造)を歴史的に理解する。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	教材は、必要に応じて、レジュメ・コピーを配付する。 受講は音楽学専攻の学生に限る。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	MC407A02	期間	後期
授業科目名	音楽学概説B		
英訳科目名	Survey of Musicology B		
担当教員名	黒坂 俊昭		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	音楽を理解するということは、一体どういうことであろうか？ それには、一方に歴史的な理解などがあり、他方に作品論的な理解や楽曲分析的な理解などがある。しかし、理解するということにおいては、いずれも理解する個人のみが理解するだけでは不十分であり、広く普遍性をもたなければならない。だからと言って、その理解が過度に普遍的であっても、音楽の本来の姿からかけ離れてしまいかねない。さまざまな例を取り上げ、音楽を理解することの意味と実際について考えてみる。音楽学概説Bでは、特に美学的、社会学的、伝記的、楽曲分析的な観点から考察したい。		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 音楽を理解する上での普遍性について理解できるようになる。 ・ 音楽を社会的に考察できるようになる。 ・ 音楽を楽曲分析を通して理解できるようになる。 		
授業計画	第1回 音楽を理解するという意味に関する確認。 第2～5回 音楽理解の実際Ⅴ … 美学的考察。 第6～7回 音楽理解の実際Ⅵ … 音楽社会的考察 第8～9回 音楽理解の実際Ⅶ … 伝記的作曲家研究 第10～11回 音楽理解の実際Ⅷ … 楽曲分析による作品解釈 第12～14回 受講生個人の方法による音楽理解 第15回 (授業内容の理解の確認)		
評価方法 (合計100%)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業参加への積極性： 50% ・ 提出レポートの内容： 50% ・ 授業を欠席すれば、「授業参加への積極性」において1回あたり5%を減ずる。 		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<ul style="list-style-type: none"> ・ 内容については適宜、授業内で指示する。 ・ 講義で解説する事項について考察しておくこと。(予習時間：1時間) ・ 講義で検討したことをまとめておくこと。(復習時間：3時間) 		
課題へのフィード バック	音楽の営み(鑑賞、演奏、創造)を社会的・文化的側面から理解する。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	教材は、必要に応じて、レジュメ・コピーを配付する。 受講は音楽学専攻の学生に限る。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	MC408A01/MT407A09	期間	前期
授業科目名	音楽構造研究 I A		
英訳科目名	Study of Structure of Music I A		
担当教員名	三鬼 尚味		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> -
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>音楽とは、「音」を「楽しむ」ものである。だからこそ、その「音楽」は、聴き手に様々な感情を喚起させる。では、なぜ人々はそう感じるのか？そして、人々の心を揺り動かすメカニズムとは何なのか？本学部生にとってそのことは一番大切な事柄であり、また同時に興味深い疑問であろう。</p> <p>本講では、実際に様々な楽曲（ジャンルを問わず）を検証し、その楽曲の「構成要素」を、音楽的な基礎知識を用いながら分析・解説し、「人々が音楽に感動するシステム」とも言うべき「音楽構造」を明らかにする。</p>		
到達目標	作品分析（構造分析）が出来る。		
授業計画	<p>第1回 人間の感情を表すツールとしての音楽とは何か。</p> <p>第2回 音楽的知識の確認。</p> <p>第3回 音楽的知識の理解。</p> <p>第4～8回 実際の楽曲における感情表現の混沌くカオス>を分析し紐解く（ジャンルを問わず）。</p> <p>第9～14回 より深く楽曲分析するための、様々な知識とその活用方法について。</p> <p>第15回 前期で学んだことを踏まえ、分析発表。</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>①授業への参加態度 60%</p> <p>②提出物による評価 20%</p> <p>③分析発表による評価 20%</p> <p>以上の評価を総合的に判断する。</p>		
失格条件	<p>①授業への不参加</p> <p>②未提出</p> <p>③分析未発表</p>		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>予習として、本講では、作品分析を主に行うため、ある程度の基礎知識が必要となるので、本講を受講する前に、必ず楽典は一通り目を通しておくこと。</p> <p>また、作品分析を行う際、和声分析で遅れをとる学生に対して、予習として和声分析を事前に行うことが望ましい。</p> <p>復習としては、分析をスムーズに行えるよう、毎回のプリントにもう一度目を通し、より理解を深めることが望ましい。</p>		
課題へのフィード バック	<p>講義内容・課題について、理解出来るまで指導します。</p> <p>課題提出後、分かり易く丁寧にコメントを付けて個別に返却します。</p>		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	<p>講義内で取り扱う楽曲については、順次アンケートなどを用い、受講生の興味ある楽曲についても検証していく。</p> <p>授業のより深い理解に必要なため、楽典（出版社は問わず）を所持していることが望ましい。</p>		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	MC408A02/MT407A10	期間	後期
授業科目名	音楽構造研究 I B		
英訳科目名	Study of Structure of Music I B		
担当教員名	三鬼 尚味		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> -
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	音楽とは、「音」を「楽しむ」ものである。だからこそ、その「音楽」は、聴き手に様々な感情を喚起させる。では、なぜ人々はそう感じるのか？そして、人々の心を揺り動かすメカニズムとは何なのか？本学部生にとってそのことは一番大切な事柄であり、また同時に興味深い疑問であろう。 本講では、実際に様々な楽曲（ジャンルを問わず）を検証し、その楽曲の「構成要素」を、音楽的な基礎知識を用いながら分析・解説し、「人々が音楽に感動するシステム」とも言うべき「音楽構造」を明らかにする。		
到達目標	作品分析（構造分析）が出来る。		
授業計画	第1～4回 作曲家の時代背景、文化、様式など、作品を分析する上で必要とされることとを、様々な角度から検証する。実際の作品を取り上げる（クラシック作品）。 第5～13回 実際の楽曲における感情表現の混沌<カオス>を分析し、紐解く（クラシックに限る）。 第14～15回 音楽によって感動する「構造」の理解と結論。		
評価方法 (合計100%)	①授業への参加態度 60% ②提出物による評価 10% ③レポート提出による評価 30% 以上の評価を総合的に判断する。		
失格条件	①授業への不参加 ②未提出物 ③レポート未提出		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	作品分析を行う際、和声分析で遅れをとる学生に対して、予習として和声分析を事前に行うことが望ましい。復習としては、分析をスムーズに行えるよう、毎回のプリントにもう一度目を通し、より理解を深めることが望ましい。		
課題へのフィード バック	講義内容・課題について、理解出来るまで指導します。 課題提出後、分かり易く丁寧にコメントを付けて個別に返却します。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	講義内で取り扱う楽曲については、順次アンケートなどを用い、受講生の興味ある楽曲についても検証していく。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	MC408B01	期間	前期
授業科目名	音楽構造研究ⅡA		
英訳科目名	Study of Structure of MusicⅡA		
担当教員名	三鬼 尚味		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	音楽構造研究Ⅰに引き続き、「人々が音楽に感動するシステム」とも言うべき「音楽構造」を明らかにする。分析する作品は、編成を拡大し、室内楽からオーケストレーションにいたる楽曲を取り上げる。また、本講では、他メディア作品と音楽との関わりも検証し、オペラ、ミュージカル、映画音楽などに扱われる音楽についても分析作品として取り入れる。		
到達目標	楽曲分析により、作品の意図を証明することができる。		
授業計画	第1回 他メディアと音楽との関わりについて。 第2～6回 実際他メディア作品（映画音楽）を取り上げ、楽曲を分析しながら、他メディア作品における音楽の関わりについて検証する。 第7～9回 分析するために必要な知識の習得。 第10～14回 実際の楽曲における感情表現の混沌<カオス>を分析し、紐解く（室内楽）。 第15回 内容理解の確認（分析発表）。		
評価方法 (合計100%)	①授業への参加度 60% ②提出物による評価 20% ③内容理解の確認（分析発表） 20% 以上の評価を総合的に判断する。		
失格条件	①授業への不参加 ②未提出物 ③未発表		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	作品分析を行う際、和声分析で遅れをとる学生に対して、予習として和声分析を事前に行うことが望ましい。復習としては、分析をスムーズに行えるよう、毎回配布されるプリントにもう一度目を通し、より理解を深めることが望ましい。		
課題へのフィード バック	講義内容・課題について、理解出来るまで指導します。 課題提出後、分かり易く丁寧にコメントを付けて個別に返却します。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	講義内で取り扱う楽曲については、順次アンケートなどを用い、受講生の興味ある楽曲についても検証していく。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	MC408B02	期間	後期
授業科目名	音楽構造研究ⅡB		
英訳科目名	Study of Structure of Music ⅡB		
担当教員名	三鬼 尚味		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	音楽構造研究ⅡAに引き続き、「人々が音楽に感動するシステム」とも言うべき「音楽構造」を明らかにする。分析する作品は、編成を拡大し、室内楽からオーケストレーションにいたる楽曲を取り上げる。また、本講では、他メディア作品と音楽との関わりも検証し、オペラ、ミュージカル、映画音楽などに扱われる音楽についても分析作品として取り入れる。		
到達目標	楽曲分析により、作品の意図を証明することができる。		
授業計画	第1～2回 オペラ作品を取り上げ、オペラ音楽について検証する。 第3～8回 オペラ作品を分析する。 第9～15回 実際の楽曲における感情表現の混沌<カオス>を分析し、紐解く（オーケストラ作品）。		
評価方法 (合計100%)	①授業への参加度 60% ②提出物による評価 10% ③レポート提出による評価 30% 以上の評価を総合的に判断する。		
失格条件	①授業への不参加 ②未提出物 ③レポート未提出		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	作品分析を行う際、和声分析で遅れをとる学生に対して、予習として和声分析を事前に行うことが望ましい。復習としては、分析をスムーズに行えるよう、毎回配布されるプリントにもう一度目を通し、より理解を深めることが望ましい。		
課題へのフィード バック	講義内容・課題について、理解出来るまで指導します。 課題提出後、分かり易く丁寧にコメントを付けて個別に返却します。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	講義内で取り扱う楽曲については、順次アンケートなどを用い、受講生の興味ある楽曲についても検証していく。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	MC407A03	期間	前期
授業科目名	音楽学基礎研究 A		
英訳科目名	Basic Study of Musicology A		
担当教員名	黒坂 俊昭		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> -
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	音楽学専攻生は、3年次より卒業研究に向けて、音楽学専攻の演習科目を履修しなければならない。この基礎研究Aでは、音楽学のさまざまな分野についてそれぞれの著名な研究を紹介したり、その方法論を考察したりすると同時に、受講生の個人的研究が進められる。		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 音楽学分野にあるさまざまな領域（ヨーロッパ音楽史、日本音楽史、音楽美学、音楽社会学、音楽心理学、音楽教育論、民族音楽学など）に関する基本的理解を有するようになる。 ・ 音楽学的論理的思考について理解できるようになる。 		
授業計画	第1～4回 1年次に学んだ事項の整理と展開 第5～8回 音楽学の諸分野の把握 第9～10回 音楽学を研究する手順 第11～12回 音楽学を分析するさまざまな方法 第13～14回 個人の研究テーマの発表と検討 第15回 （授業内容の理解の確認）		
評価方法 (合計100%)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業参加への参加態度：50% ・ 提出レポートの内容：50% ・ 授業を欠席すれば、「授業参加への参加態度」において1回あたり5%を減ずる。 		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<ul style="list-style-type: none"> ・ 内容については、適宜、授業内で指示する。 ・ 講義で解説する事項について考察しておくこと。（予習時間：1時間） ・ 講義で検討した内容をまとめておくこと。（復習時間：3時間） 		
課題へのフィード バック	音楽を音楽学的論理的思考によって理解する。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	教材は、必要に応じて、レジュメ・コピーを配付する。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	MC407A04	期間	後期
授業科目名	音楽学基礎研究 B		
英訳科目名	Basic Study of Musicology B		
担当教員名	黒坂 俊昭		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	音楽学基礎研究Bは、前期の音楽学基礎研究Aで学んだ音楽学の諸分野の検討を基に、受講生の個人的研究が進められる。このように、この授業は3年次・4年次の演習へ向けてのいわゆる「ブレ・ゼミ」の性格を持つ演習的授業であり、個人研究の発表と共に、提示された諸テーマに関する討論によって進められていく。		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 音楽学的論理的思考を展開できるようになる。 ・ 論文作成のための文章力が養成される。 		
授業計画	第1～2回 夏期休暇中の課題の報告 第3～4回 個人の研究を推進するために必要な事項 第5～6回 個人の研究レポートの構成の検討 第7～8回 個人の研究レポートの第1稿の作成 第9～10回 個人の研究テーマの発表 第11～12回 個人の研究レポートの完成 第13～14回 完成レポートのプレゼンテーション 第15回 (授業内容の理解の確認)		
評価方法 (合計100%)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業参加への参加態度： 50% ・ 提出レポートの内容： 50% ・ 授業を欠席すれば、「授業参加への参加態度」において1回あたり8%を減ずる。 		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<ul style="list-style-type: none"> ・ 内容については、適宜、授業内で指示する。 ・ 講義で解説する事項について考察しておくこと。(予習時間： 1時間) ・ 講義で検討した内容をまとめておくこと。(復習時間： 3時間) 		
課題へのフィード バック	音楽を音楽学的論理的思考によって理解する。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	教材は、必要に応じて、レジュメ・コピーを配付する。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	CM408A09/MC408A07	期間	前期
授業科目名	ポピュラー・ミュージック概説A		
英訳科目名	Survey of Popular Music A		
担当教員名	藤村 亘		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ○
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>【授業概要・ポイント】</p> <ul style="list-style-type: none"> 一言でポピュラーミュージックと表すものが、一体どれくらいあるのか。そもそもどこからがポピュラーミュージックの範疇なのか。ジャンル同士がどんどん乗り入れて見える現在の音楽シーン全体を見渡しながら、ポピュラーミュージックの背景や、混乱しているジャンルの存在意義などを考えてゆく。 音源や映像も用いながら、履修者の好みや探究心に応じたポピュラー音楽自体も積極的に題材として扱う 		
到達目標	<p>【到達目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> 常に世の中の動きを知る習慣をつけることができる。 音楽ジャンルに対して幅広く興味を持つことができる。 ポピュラーミュージックの大まかな定義を理解することができる。 		
授業計画	<p>【授業計画】</p> <p>第1回 オリエンテーション</p> <p>第2回 現在の音楽シーンに思うこと</p> <p>第3回 クラシックとポピュラー、境界線はどこから？</p> <p>第4回 ロックとポップス</p> <p>第5回 日本のポピュラー音楽と海外のポピュラー音楽</p> <p>第6回 ディスカッション～興味のあるジャンルを語り合う</p> <p>第7回 時代を遡る① ～2000年代</p> <p>第8回 時代を遡る② ～1990年代</p> <p>第9回 時代を遡る③ ～1980年代</p> <p>第10回 時代を遡る④ ～1970年代</p> <p>第11回 時代を遡る⑤ ～1960年代</p> <p>第12回 ジャズはポピュラーミュージックか？</p> <p>第13回 ジャズの誕生と現在のジャズ</p> <p>第14回 世の中との結び付きから考えるポピュラーミュージック</p> <p>第15回 まとめ</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>【評価方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> 授業への参加状況(20%) 提出物(40%) 課題内容の理解度(40%) 		
失格条件	<p>【失格条件】</p> <ul style="list-style-type: none"> 提出期限を守らない 欠席6回以上で失格とする 		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>【予習・復讐の準備学習などのアドバイス】</p> <ul style="list-style-type: none"> 音楽だけでなく世の中を知ることがポピュラーミュージックを知る手掛かりになる。日常のニュースや世界情勢なども話題にするので、興味を持って臨むこと。 各自興味ある音楽について深い思いを持ち、常に語れるくらいに考える(予習時間 1時間) 授業で扱った事柄、音楽を再度吟味し、知識の蓄えとしてゆく(復習時間 3時間) 		
課題へのフィード バック	<p>【課題へのフィードバック】</p> <ul style="list-style-type: none"> 授業時の課題提出物は、コメントを付けて返却します 試験又はレポート課題は、状況に応じて個別にコメントします 		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書	<p>【参考書】</p> <ul style="list-style-type: none"> 授業内配布資料、スコア、楽譜など 		
その他	<p>【その他】</p> <ul style="list-style-type: none"> 講義計画は学生の様子を見ながら柔軟に対応していく 五線譜をいつも持ってきておくこと 		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	CM408A10/MC408A08	期間	後期
授業科目名	ポピュラー・ミュージック概説B		
英訳科目名	Survey of Popular Music B		
担当教員名	藤村 亘		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ○
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>【授業概要・ポイント】</p> <p>・前期のポピュラーミュージック概説Iの内容を踏まえ、実際にポピュラー作品の制作演習を試みることで楽曲全体の構造を理解してゆく。</p> <p>楽曲の成り立ち、メロディと歌詞の関係、コード進行、リズムアレンジなどの要素がどう組み合わせれば、エッセンスのある魅力的な作品になるのか。多角的な視野に基づく見解を多数盛り込みながら、ポピュラーミュージックを真正面から味わい、作品制作へ繋げてゆく。</p>		
到達目標	<p>【到達目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・楽曲を分析する視点を理解することができる。 ・ポピュラーミュージックの魅力をそれぞれの視点で語るすることができる。 ・先の音楽シーンを予見する想像力または創造性を養い、視野を広げることができる。 		
授業計画	<p>【授業計画】</p> <p>第1回 オリエンテーション～前期授業のおさらい</p> <p>第2回 魅力をどこで感じているか？</p> <p>第3回 なぜヒットしたか？～ヒットするワケ</p> <p>第4回 ヒットした曲は音楽的に中身がある曲なのか？</p> <p>第5回 中身があるのにヒットしないワケ、中身がないのにヒットするワケ</p> <p>第6回 メロディを徹底的に味わう～楽曲の形式を理解する</p> <p>第7回 味付けの重要な役割～コード進行</p> <p>第8回 テンションコードの扱い方と実際</p> <p>第9回 リハモナイズ① 基本的考え方</p> <p>第10回 リハモナイズ② 様々なリハモナイズ例の分析</p> <p>第11回 音楽とファッションの関係</p> <p>第12回 ポピュラー音楽と芸術音楽の存在</p> <p>第13回 音楽大学でのポピュラー音楽の扱い</p> <p>第14回 ポピュラー音楽の未来を考える</p> <p>第15回 作品確認及びまとめ</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>【評価方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業への参加状況(30%) ・提出物(30%) ・課題内容の理解度(40%) 		
失格条件	<p>【失格条件】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・提出期限を守らない ・欠席6回以上で失格とする 		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	<p>【予習・復習の準備学習などのアドバイス】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・あえてクラシック音楽は一切扱わない。だからこそ普段学んでいるクラシック音楽に役立つポイントも見つかるはずである。柔軟な発想で臨んで欲しい。 ・音楽理論的側面、コードネームの理解、楽曲の鑑賞、考えをまとめる(予習時間 1時間) ・授業で扱った事柄を再度吟味し、知識の蓄えとしてゆく(復習時間 3時間) 		
課題へのフィード バック	<p>【課題へのフィードバック】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業時の課題提出物は、コメントを付けて返却します ・試験又はレポート課題は、状況に応じて個別にコメントします 		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書	<p>【参考書】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業内配布資料、楽譜など 		
その他	<p>【その他】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・講義計画は、学生の様子を見ながら柔軟に対応してゆく。 ・五線譜をいつも持ってきておくこと 		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	MT407A01	期間	前期
授業科目名	音楽療法の基礎A		
英訳科目名	Division of Music Therapy A		
担当教員名	石村 真紀		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> △	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	音楽療法を専門に学ぶ上で必要な基礎的知識や理論、理念について学んでもらう。様々な実際のセッションの映像も見ながら、ディスカッションを交えて進める。 積極的な授業参加を期待する。		
到達目標	専門に関する基本事項・用語を自分の言葉で適切に説明することができる。 専門に関する関心を広げ、主体的に考えたことを口頭および文章にて表現できる。		
授業計画	第1回 音楽療法の基礎用語 第2回 音楽の心理的・社会的・生理的働きについて 第3回 音楽療法の歴史の変遷 第4回 子供の成長と音楽 (1) 胎児期～生後6か月 第5回 子供の成長と音楽 (2) 生後6か月～1歳 第6回 子供の成長と音楽 (3) 1歳～4歳 第7回 子供の成長と音楽 (4) 5歳～ 第8回 音楽療法の基礎的臨床理論 (受容と同質の原理) 第9回 音楽療法の基礎的臨床理論 (人間性心理学) 第10回 音楽療法の基礎的臨床理論 (セラピストの資質) 第11回 音楽療法の基礎的臨床理論 (山松方式) 第12回 対象者の理解と臨床(知的障害) 第13回 対象者の理解と臨床(自閉症スペクトラム①) 第14回 対象者の理解と臨床(自閉症スペクトラム②) 第15回 理解度の確認		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 20% 内容確認試験 60% レポートなど 20%		
失格条件	試験を受けなかった場合 3分の1以上の欠席		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	授業中に疑問に思ったこと、興味を持ったことは積極的に自分で調べるように。 また、授業中に紹介した参考図書やサイトなど言われたことは必ず目を通すように (予習・復習の学修時間の目安：4時間)		
課題へのフィード バック	課題提出、発表後に各自に授業時にコメントします。 試験終了後に全体へ向けてコメントします。人数によっては個別で対応します。		
教科書	授業時にプリント配布		
著者名			
出版社			
参考書	授業時に紹介する		
その他	なし		
備考	音楽療法士としての実務経験をもとに、この授業を進めます。		
科目生への開講	あり		

ナンバリング	MT407A02	期間	後期
授業科目名	音楽療法の基礎B		
英訳科目名	Division of Music Therapy B		
担当教員名	石村 真紀		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> △	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	音楽療法を専門に学ぶ上で必要な基礎的知識や理論、理念について学んでもらう。様々な実際のセッションの映像も見ながら、ディスカッションを交えて進める。 積極的な授業参加を期待する。		
到達目標	人と人を繋ぐ音楽の役割に関心を持ち、その可能性について考察することができる。 対象者について理解を深め、専門的基礎的事項を説明することができる。 音楽療法とは何であるか、を自分の言葉で説明できる。		
授業計画	第1回 対象者の理解と臨床（アスペルガー症候群） 第2回 対象者の理解と臨床（学習障害 AD／HD） 第3回 対象者の理解と臨床（ダウン症・脳性まひ） 第4回 対象者の理解と臨床（脳性まひ・失語症） 第5回 対象者の理解と臨床（精神疾患の診断分類） 第6回 対象者の理解と臨床（鬱） 第7回 対象者の理解と臨床（統合失調症） 第8回 対象者の理解と臨床（不安障害） 第9回 対象者の理解と臨床（PTSD） 第10回 記憶のシステムと認知症 第11回 対象者の理解と臨床（アルツハイマー型認知症・脳血管性認知症） 第12回 対象者の理解と臨床（その他の認知症） 第13回 研究発表会 第14回 まとめ 第15回 理解度の確認		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 20% 試験 60% レポートなど 20%		
失格条件	試験を受けなかった者 授業を3分の1以上欠席		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	授業中に疑問に思ったこと、興味を持ったことは積極的に自分で調べること。 また、授業中に紹介した参考図書やサイトなど言われたことは必ず目を通すこと。（1週間にかける予習・復習の学修時間：4時間）		
課題へのフィード バック	課題の提出、発表時、全体へ向けてコメントします。 試験終了後は全体へのコメントをしますが、人数によっては個別に対応します。		
教科書	授業時にプリント配布		
著者名			
出版社			
参考書	授業時に紹介		
その他	なし		
備考	音楽療法士としての実務経験をもとに、この授業を進めます。		
科目生への開講	あり		

ナンバリング	MT408A04	期間	前期
授業科目名	臨床即興 I		
英訳科目名	Clinical improvisation I		
担当教員名	石村 真紀		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ○	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	即興によるアンサンブルを中心にしながら、音楽療法士に必要な感性のトレーニングを主な目的とする。実際に楽器に触れて音作りをしながら、自己の内的経験を吟味してもらい、他者との交流を目指した音。音楽の在り方について検討・考察しながらすすめる。		
到達目標	それぞれの楽器の持つ特質を知る。 即興のための様々な基本的な旋法を理解し、一定の枠の中で旋法的応答ができる。 打楽器や声を使って即興的にコミュニケーション的な音楽を作ることができる。 自分が感じたことを口頭や文章で適切に表現できる。		
授業計画	第1回 小物楽器を使って即興コラボレーション 第2回 即興アンサンブル (ペンタトニック・民謡音階) 第3回 即興アンサンブル (ドリアン・イオニア) 第4回 即興アンサンブル (リディアン・フリギア・スパニッシュ) 第5回 即興アンサンブル (ミクソリディア・エオリア) 第6回 トーンチャイムを使ってのコンダクティング (ホールトーン) 第7回 ドラムサークル (リズムフリー・枠あり即興・コンダクティング) 第8回 ペア即興 第9回 自由即興 (無調整・セミトーン) 1 第10回 自由即興 2 第11回 メロディーベルの即興コンダクティング・既成曲コンダクティング 第12回 メロディーベルの即興コンダクティング・既成曲コンダクティング 続き 第13回 既成曲+即興 第14回 既成曲+即興 続き 第15回 まとめ		
評価方法 (合計100%)	授業参加態度50% 提出物 50%		
失格条件	課題の未提出 3分の1以上の欠席		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業で習ったスケールを含めてピアノ練習 (毎日最低90分) 授業時の内容をノートに記録しておく (次回の授業時にチェックします) (復習2時間) 出された実技課題は必ず練習して実践できるようにしておくこと。		
課題へのフィード バック	実践において指導 個別にレポート課題にコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書	授業時に紹介		
その他	鍵盤ハーモニカのパイプを各自用意すること		
備考	音楽療法士としての実務経験をもとに、この授業を進めます。		
科目生への開講	あり		

ナンバリング	MT408B05	期間	後期
授業科目名	臨床即興Ⅱ		
英訳科目名	Clinical improvisation Ⅱ		
担当教員名	石村 真紀		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ○	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	臨床即興Ⅰの応用編。 Nordoff-Robbinsの『こどものためのプレイソング』日本語版を用いてロールプレイを行う。 曲に込められた療法的意義や音・音楽の在り方、歌詞の内容などを考察しながら、臨床的に展開させつつ実践に必要な基礎的技術を習得することを目指す。さらに、既成曲を用いて、臨床用にアレンジする基本的な力も身につけていただく。		
到達目標	目的に合わせて創造的にプレイソングを使用できる。 目的に合わせて既成曲をアレンジし、独自の楽譜を作成できる。 セラピストとしての基本的臨床技術を使うことができる。		
授業計画	第1回 Nordoff-Robbinsの『子供のためのプレイソング』日本語版から、担当曲分担。 グリーティングソングの合同作曲 第2回 分担曲からロールプレイ 1 第3回 前回の仕上げ 第4回 分担曲からのロールプレイ 2 第5回 前回の仕上げ 第6回 分担曲からのロールプレイ 3 第7回 前回の仕上げ 第8回 分担曲からのロールプレイ 4 第9回 前回の仕上げ 第10回 分担曲からのロールプレイ 5 第11回 前回の仕上げ 第12回 既成曲のアレンジメント・ロールプレイ 1 第13回 前回の仕上げ 第14回 既成曲のアレンジメント・ロールプレイ 2 第15回 総仕上げ		
評価方法 (合計100%)	課題取り組み度 70% 授業参加態度 30%		
失格条件	作品の未提出 3分の1以上の欠席		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	ペアで進めるので、必ず互いに相談して合わせておくように ピアノが弾けていない場合は授業の進行に支障をきたすため、よく練習しておくように。 ピアノの練習毎日最低1時間 アドバイスを受けたところの修正、練習 (2時間) 新しい課題の準備 (2時間)		
課題へのフィード バック	実践において対応		
教科書	子どものためのプレイソング		
著者名	ノードフロビンス音楽療法士の会 訳		
出版社	音楽之友社		
参考書	なし		
その他			
備考	音楽療法士としての実務経験をもとに、この授業を進めます。		
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	臨床即興Ⅲ		
英訳科目名	Clinical improvisation Ⅲ		
担当教員名	石村 真紀		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> △	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	臨床即興Ⅱに引き続き、実践に必要な基礎的技術を習得することを目指す。		
到達目標	既成曲を目的に合わせてアレンジできる。 セラピーにおけるグループワークのための自作曲・アレンジメント曲を制作し楽譜にする。 セラピストに必要な基本的技能を使用することができる。		
授業計画	第1回 グリーティングソングの共同作曲 第2回 既成曲の臨床用アレンジメントとロールプレイ1 第3回 前回の仕上げ 第4回 既成曲の臨床用アレンジメントとロールプレイ2 第5回 前回の仕上げ 第6回 既成曲の臨床用アレンジメントとロールプレイ3 第7回 前回の仕上げ 第8回 既成曲の臨床用アレンジメントとロールプレイ4 第9回 前回の仕上げ 第10回 マイブレイソングの制作と発表 ロールプレイ1 第11回 マイブレイソングの制作と発表 ロールプレイ2 第12回 マイブレイソングの制作と発表 ロールプレイ3 第13回 セッションの組み立て1 第14回 セッションの組み立て2 第15回 セッションの組み立て3		
評価方法 (合計100%)	課題達成度 70% 授業参加態度 30%		
失格条件	作品の未提出 授業を3分の1以上欠席		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	ペアで進めるので、必ず互いに相談して合わせておくように。(1時間) ピアノが弾けていない場合、授業の進行に支障をきたすので伴奏はよく練習しておくこと。(毎日最低90分) 授業時に指導を受けた内容は必ず次のリプレイに反映できているように吟味考察練習しておくこと(4時間)		
課題へのフィード バック	個別に対応します		
教科書	授業時にプリント配布		
著者名			
出版社			
参考書	授業時に紹介		
その他	なし		
備考	音楽療法士としての実務経験をもとに、この授業を進めます。		
科目生への開講	なし		

ナンバリング	MT408C03	期間	後期
授業科目名	音楽療法演習		
英訳科目名	Music Thrapy seminar		
担当教員名	石村 真紀		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> △	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	平行して行われている音楽療法実習での学びと、これまでの授業での学びをリンクさせて、より現場と密接した実践的内容の指導を行う。また、履修者が関心を持つテーマに沿って研究発表を行う。		
到達目標	音楽療法の臨床における基礎的实践力を身に付け、知識と技法を発展させる。 専門における自分の興味や必要を自覚し、積極的にそれらを追及できる。		
授業計画	第1回 インテークセッションに向けて 第2回 グループワークの楽曲選び 第3回 グループワーク応用 1 第4回 グループワーク応用 2 第5回 現場における適用 1 第6回 現場における適用 2 第7回 セッションの言語化 第8回 プロセスの吟味 第9回 セラピストの自己吟味 1 第10回 セラピストの自己吟味 2 第11回 周辺領域の研究発表 第12回 周辺領域の研究発表と検討 第13回 実習の報告書の書き方 第14回 実習のまとめ 第15回 全体のまとめ		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 30% 課題取り組み度 50% レポート提出 20%		
失格条件	作品の未提出 3分の1以上の欠席		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業の始まるまでに、必ず楽器などの準備を整えておくこと。 出された課題は、次回までにきちんと練習し、ワークが滞りなく行えるよう努力すること。また、調べものは、納得するまでとことん調べるように。(3時間)		
課題へのフィード バック	全体へ向けてコメントします。		
教科書	プリント配布		
著者名			
出版社			
参考書	授業時の紹介		
その他	なし		
備考	音楽療法士としての実務経験をもとに、この授業を進めます。		
科目生への開講	なし		

ナンバリング	MT408C04	期間	通年
授業科目名	卒業研究		
英訳科目名	Graduation Research		
担当教員名	音楽療法部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> △	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ◎	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	音楽療法専攻に在籍した4年間の成果の集大成として、各学生が定めたそれぞれのテーマについて研究を進めていく。最終的には決められた様式に従って論文を作成する。		
到達目標	自分の研究内容を筋道を立てて論じ、自分なりの結論を出すことができる。		
授業計画	第1回 オリエンテーション 第2回 各テーマについて発表・討論 第3～26回 進行状況に合わせて 発表&討論 第27回 要旨指導 第28回 口頭試問の準備 第29回 卒業研究発表会の準備 第30回 総まとめ		
評価方法 (合計100%)	卒業研究の内容 80% 口頭試問 20%		
失格条件	提出期限を守らなかった場合失格とする		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	受け身ではなく、積極的に文献を探すように(4時間以上)		
課題へのフィード バック	個別に対応		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書	授業時に紹介		
その他	なし		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	MT408B01	期間	集中
授業科目名	音楽療法実習 I		
英訳科目名	Clinical Work I		
担当教員名	石村 真紀		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> ◎
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> △	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	将来、音楽療法の専門家として臨床に携わるに先立って必要な社会体験をテーマとする。 5日間終日実習。内容は業務の観察参与及び介護支援とする。		
到達目標	支援者としての行動や意識を自覚し、対象者への関心を広げ、さらなる学習意欲を持つことができる。		
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1 実習事前指導（前期授業開始時に連絡） 2 福祉関連施設における5日間の実習 3 実習事後指導（実習終了後に連絡） 4 レポート 		
評価方法 (合計100%)	実習出席 80% 実習レポート10% 実習先評価10%		
失格条件	実習実施期間3日以上欠席 レポートの未提出		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	高齢者領域に関する対人援助法などをよく復習してのぞむように（予習2時間） 実習終了後決められた期日までにレポートを提出。体験したことをよく吟味・考察して書くように（5時間）		
課題へのフィード バック	個別に対応します		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書	必要時に紹介する		
その他	なし		
備考	音楽療法士としての実務経験をもとに、この授業を進めます。		
科目生への開講	なし		

ナンバリング	MT408C01	期間	後期
授業科目名	音楽療法実習Ⅱ		
英訳科目名	Clinical WorkⅡ		
担当教員名	石村 真紀		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> ◎	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> ○
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> △	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	<p>高齢者施設にてグループセッションを継続的に行う。 また、実習生はセラピストとして決まったグループを各自担当する。Co-Thとしても同様である。 毎回セッション終了後に学内に戻り、検討会を行って報告書を作成し、次のセッションへの準備を行う。 2回に1度の割合で学内授業を行い、VTRの記録をもとに更に検討を深め吟味考察してもらう。</p>		
到達目標	<p>現場における体験を通して、音楽療法の対象者の理解を深めるとともに、臨床に必要な基礎的技術を習得する。 音楽療法で関わる際の観点を習得し、セッションの内容を自己吟味できる。 吟味・考察した結果を文章や口頭で適切に表現できる。</p>		
授業計画	<p>実習日程は9月に施設職員との打ち合わせ時に決定。 担当教員はスーパーバイザーとして毎回同行し、現場指導を行う。 場合によってはCo-Thとしても関わる。 第1回 クライアントとの顔合わせ、施設見学 第2回 実践 第3回 実践 第4回 学内検討、フィードバック 第5回 実践 第6回 実践 第7回 学内検討、フィードバック 第8回 実践 第9回 実践 第10回 学内検討、フィードバック 第11回 実践 第12回 実践 第13回 学内検討、フィードバック 第14回 実践 第15回 まとめ</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>授業・実習取り組み度 70% 提出物 30% *授業・実習取り組み度には記録作業の取り組み度が含まれる。</p>		
失格条件	実習を3回以上欠席		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>実習検討会では映像記録をもとに行うので、毎回必ずきちんと記録を見直してのぞむように。記録作成（2時間） 次のセッションの準備（3時間）</p>		
課題へのフィード バック	上記の通り検討会を行います		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書	授業時に紹介		
その他	なし		
備考	音楽療法士としての実務経験をもとに、この授業を進めます。		
科目生への開講	なし		

ナンバリング	MT408C02	期間	前期
授業科目名	音楽療法実習Ⅲ		
英訳科目名	Clinical Work Ⅲ		
担当教員名	石村 真紀		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> ◎	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> ○
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> △	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	<p>重度知的障害者施設にて個人セッションを継続的に行う。</p> <p>また、実習生は各自1人ずつ決まったクライアントを担当する。</p> <p>毎回セッション終了後に秒刻みのインデックス（記録）を作成し、それをもとに学内での検討を行う</p>		
到達目標	<p>現場における体験を通して、音楽療法の対象者の理解を深めるとともに、臨床に必要な基礎的技術を習得する。</p> <p>音楽療法で関わる際の観点を習得し、セッションの内容を自己吟味できる。</p> <p>吟味・考察した結果を文章や口頭で適切に表現できる。</p>		
授業計画	<p>実習日程は9月に施設職員との打ち合わせ時に決定。</p> <p>担当教員はスーパーバイザーとして毎回同行し、現場指導を行う。</p> <p>場合によってはCo-Thとしても関わる。</p> <p>第1回 クライアントとの顔合わせ、施設見学</p> <p>第2回 実践</p> <p>第3回 実践</p> <p>第4回 学内検討、フィードバック</p> <p>第5回 実践</p> <p>第6回 実践</p> <p>第7回 学内検討、フィードバック</p> <p>第8回 実践</p> <p>第9回 実践</p> <p>第10回 学内検討、フィードバック</p> <p>第11回 実践</p> <p>第12回 実践</p> <p>第13回 学内検討、フィードバック</p> <p>第14回 実践</p> <p>第15回 まとめ</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>授業・実習取り組み度 70%</p> <p>提出物 30%</p> <p>* 授業取り組み度とは、授業参加度のみならず、記録作業の取り組み度が含まれる。</p>		
失格条件	実習を3回以上欠席した場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>実習検討会では映像記録とインデックス・サマリーをもとに行うので、毎回必ずきちんと仕上げてのぞむように。記録作成（4時間）。なお、記録が取れていない場合は次回の現場実習に行けないこともある。</p> <p>次のセッションの準備（1時間）</p>		
課題へのフィードバック	個別に対応		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書	授業時に紹介		
その他	なし		
備考	音楽療法士としての実務経験をもとに、この授業を進めます。		
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	音楽構造研究 I A		
英訳科目名	Research in Structure of Music I A		
担当教員名	三鬼 尚味		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> -
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>音楽とは、「音」を「楽しむ」ものである。だからこそ、その「音楽」は、聴き手に様々な感情を喚起させる。では、なぜ人々はそう感じるのか？そして、人々の心を揺り動かすメカニズムとは何なのか？本学部生にとってそのことは一番大切な事柄であり、また同時に興味深い疑問であろう。</p> <p>本講では、実際に様々な楽曲（ジャンルを問わず）を検証し、その楽曲の「構成要素」を、音楽的な基礎知識を用いながら分析・解説し、「人々が音楽に感動するシステム」とも言うべき「音楽構造」を明らかにする。</p>		
到達目標	作品分析（構造分析）が出来る。		
授業計画	<p>第1回 人間の感情を表すツールとしての音楽とは何か。</p> <p>第2回 音楽的知識の確認。</p> <p>第3回 音楽的知識の理解。</p> <p>第4～8回 実際の楽曲における感情表現の混沌くカオス>を分析し紐解く（ジャンルを問わず）。</p> <p>第9～14回 より深く楽曲分析するための、様々な知識とその活用方法について。</p> <p>第15回 前期で学んだことを踏まえ、分析発表。</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>①授業への参加態度 60%</p> <p>②提出物による評価 20%</p> <p>③分析発表による評価 20%</p> <p>以上の評価を総合的に判断する。</p>		
失格条件	<p>①授業への不参加</p> <p>②未提出</p> <p>③分析未発表</p>		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>予習として、本講では、作品分析を主に行うため、ある程度の基礎知識が必要となるので、本講を受講する前に、必ず楽典は一通り目を通しておくこと。</p> <p>また、作品分析を行う際、和声分析で遅れをとる学生に対して、予習として和声分析を事前に行うことが望ましい。</p> <p>復習としては、分析をスムーズに行えるよう、毎回のプリントにもう一度目を通し、より理解を深めることが望ましい。</p>		
課題へのフィード バック	<p>講義内容・課題について、理解出来るまで指導します。</p> <p>課題提出後、分かり易く丁寧にコメントを付けて個別に返却します。</p>		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	<p>講義内で取り扱う楽曲については、順次アンケートなどを用い、受講生の興味ある楽曲についても検証していく。</p> <p>授業のより深い理解に必要なため、楽典（出版社は問わず）を所持していることが望ましい。</p>		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	期間	後期
授業科目名	音楽構造研究 I B	
英訳科目名	Research in Structure of Music I B	
担当教員名	三鬼 尚味	
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2 <技能> -
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー4 <関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー6
授業概要・ポイント	音楽とは、「音」を「楽しむ」ものである。だからこそ、その「音楽」は、聴き手に様々な感情を喚起させる。では、なぜ人々はそう感じるのか？そして、人々の心を揺り動かすメカニズムとは何なのか？本学部生にとってそのことは一番大切な事柄であり、また同時に興味深い疑問であろう。 本講では、実際に様々な楽曲（ジャンルを問わず）を検証し、その楽曲の「構成要素」を、音楽的な基礎知識を用いながら分析・解説し、「人々が音楽に感動するシステム」とも言うべき「音楽構造」を明らかにする。	
到達目標	作品分析（構造分析）が出来る。	
授業計画	第1～14回 作曲家の時代背景、文化、様式など、作品を分析する上で必要とされることとを、様々な角度から検証する。実際の作品を取り上げる（クラシック作品）。 第5～13回 実際の楽曲における感情表現の混沌<カオス>を分析し、紐解く（クラシックに限る）。 第14～15回 音楽によって感動する「構造」の理解と結論。	
評価方法 (合計100%)	①授業への参加態度 60% ②提出物による評価 10% ③レポート提出による評価 30% 以上の評価を総合的に判断する。	
失格条件	①授業への不参加 ②未提出物 ③レポート未提出	
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	作品分析を行う際、和声分析で遅れをとる学生に対して、予習として和声分析を事前に行うことが望ましい。復習としては、分析をスムーズに行えるよう、毎回のプリントにもう一度目を通し、より理解を深めることが望ましい。	
課題へのフィード バック	講義内容・課題について、理解出来るまで指導します。 課題提出後、分かり易く丁寧にコメントを付けて個別に返却します。	
教科書	不使用	
著者名		
出版社		
参考書		
その他	講義内で取り扱う楽曲については、順次アンケートなどを用い、受講生の興味ある楽曲についても検証していく。	
備考		
科目生への開講	なし	

ナンバリング	MT408A01	期間	前期
授業科目名	音楽療法概論		
英訳科目名	Outline of Music Therapy		
担当教員名	後藤 浩子		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> △	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>音楽療法を実践するにあたり、倫理観をもつことが必要とされる。</p> <p>それは、対象者・クライアントのプライバシーを守るといふことにとどまらず、セラピストの責任や技能・研究・公開に関して、さらに他の専門機関との関係まで幅広く求められる倫理である。</p> <p>この講義では、音楽療法の倫理を中心に学ぶが、広く、対人援助職の倫理・臨床心理士の倫理などからも学んでいく。</p> <p>また、具体的な事例を通して学んでいく。</p>		
到達目標	<p>音楽療法における倫理をしっかりと把握することができる。</p> <p>対人援助職としての倫理観をもてるように考えていくことができる。</p> <p>いろいろな場面での対応を考える素地をつくることことができる。</p>		
授業計画	<p>第1回 倫理とは何か なぜ、倫理的規範が必要か</p> <p>第2回 いろいろな音楽療法（1）音楽療法の種類</p> <p>第3回 いろいろな音楽療法（2）個人療法</p> <p>第4回 いろいろな音楽療法（3）集団療法</p> <p>第5回 音楽療法学会の倫理綱領（1）理解する</p> <p>第6回 音楽療法学会の倫理綱領（2）具体例を知る</p> <p>第7回 臨床心理士倫理綱領</p> <p>第8回 対人援助職の倫理</p> <p>第9回 具体的な事例を通して考える（1）児童の事例</p> <p>第10回 具体的な事例を通して考える（2）成人の事例</p> <p>第11回 具体的な事例を通して考える（3）高齢者の事例</p> <p>第12回 具体的な事例を通して考える（4）健康づくりとしての音楽療法の事例</p> <p>第13回 ロールプレイ</p> <p>第14回 ロールプレイまとめ</p> <p>第15回 内容理解の確認</p>		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度（30%）毎回のレポート提出（30%）及び最終授業時の内容理解の確認（40%）などで総合的に評価する		
失格条件	全授業の3分の1以上欠席したもの		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>参考文献や配布プリントを用いてすすめていくので、事前によく読んでおくこと</p> <p>また、授業内で理解したり、体験したことを理論と結びつけておくこと</p> <p>日常、生活している中で、音楽療法についての記事やニュースに目を向け、新聞などの切り抜きをして、興味や関心を具体化しておくことも望ましい。</p>		
課題へのフィードバック	毎回提出するレポートにコメントをつけて返却する。		
教科書	日本音楽療法学会倫理ハンドブック		
著者名	日本音楽療法学会 倫理ハンドブック編集委員会		
出版社	日本音楽療法学会 〒105-0013 東京都港区浜松町1-20-8 浜松町1丁目ビル6階 ☎電話 03-5777-6220 FAX 03-5401-0337		
参考書	<p>松本和雄監修・小原依子編著 『音楽療法士のための心理学』 朱鷺書房</p> <p>村本詔司 『心理臨床と倫理』 朱鷺書房</p> <p>山松賢文 『音楽療法へのアプローチ』 音楽之友社</p>		
その他	場合によっては、施設などに行き、実際に対象者と触れ合う機会をもつ。		
備考	音楽療法士としての実務経験をもとに、この授業を進めます。		
科目生への開講	あり		

ナンバリング	MT407B01	期間	前期
授業科目名	音楽療法各論A		
英訳科目名	Studies of Music Therapy A		
担当教員名	阿部 優里		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> △	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	障がい児（者）との音楽療法についての授業です。それぞれの経験も共有しながら、さまざまな障害の定義・症例について学びます。同時に音・声・楽器・歌を柔軟に活用して「遊ぶ・関わり合う・奏でる・話し合う」活動の演習をととして障がい児（者）と取り組みやすい音楽活動案を習得し、音楽の役割や意味とは何かについても考えます。終盤には専門的な音楽療法事例も取り上げます。		
到達目標	知的障害・自閉症・身体障害を伴う人たちのこと知る 楽器・歌などで「あそぶ」「関わり合う」ことを体験できる 障がい児（者）と取り組みやすい音楽活動について習得できる 障がい児（者）との専門的な音楽療法について理解できる		
授業計画	第1回 「障がい」とは何だろう／障害とともに生きる人達との経験を振り返る 第2回 輪になって歌ってみよう、楽器で遊んでみよう 第3回 「知的障害」について／家族の手記からも学ぶ 第4回 「知的障害」定義と症例 第5回 知的障がい児（者）との音楽活動 第6回 「自閉症」について／家族や本人の手記からも学ぶ 第7回 「自閉症」定義と症例 第8回 自閉症の人達の感覚例を知る／音感覚や独特な楽器の用い方など 第9回 「身体障害」について／家族や本人の手記からも学ぶ 第10回 「身体障害」定義と症例 第11回 身体障がい児（者）との音楽活動 第12回 中途障害としての身体障害／「音楽療法」の事例を学ぶ 第13回 障がい児（者）との専門的な「音楽療法」とは 第14回 レポート指導／資料の集め方・用い方 第15回 テスト／まとめ		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度30% 課題への取り組み30% 授業内小テスト20% レポート20%		
失格条件	次のいずれかに該当すれば失格となります。 3分の1以上の欠席（遅刻3回＝欠席1回／20分以上の遅刻＝欠席） 演習への著しい不参加 レポートの不提出		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	配布資料を読む（予習1時間） 授業で提示された課題に取り組む（復習1時間） さらに可能な範囲で、さまざまな施設の見学、ボランティア活動への参加等を通して、「障がい児（者）」とかわかる機会を持つこと		
課題へのフィードバック	1.コメント：授業内小レポートに書かれた感想や意見にはコメントをつけてお返しします。 2.レポート推敲：レポートは早目の初稿提出、その後ひとりずつ手直し・推敲の個別指導を経て仕上げる形を取っています。 3.繰返し演習：現場を想定した伴奏演習等では1度きりの発表で終わりません。視線の向け方、合図のしかた、演習者本人に合った伴奏アレンジ等のアドバイスを提供し、翌週以降に再発表してもらいます。		
教科書	不使用（プリント使用）		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	授業計画および内容は受講生の興味関心・知識・学習進度などにより変更する場合があります		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	MT407B02	期間	後期
授業科目名	音楽療法各論B		
英訳科目名	Music therapy studies B		
担当教員名	石原 興子		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> △	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	様々な状況下にある人の心理的苦痛について考えることから、精神保健領域での知識や対象者についての理解を深め、音楽療法における精神的援助について考察する。また、それらの臨床事例研究や即興演習などを通して音楽療法の役割について探究したいと考える。		
到達目標	精神保健領域の背景や対象者について理解しようとすることができる。音楽療法の理論的背景を理解し、演習やディスカッションを通して音楽療法の可能性を考えていくことができる。		
授業計画	第1回 心身の苦痛について考える 第2回 コミュニケーションと精神的援助1 第3回 コミュニケーションと精神的援助2 第4回 精神保健領域の背景 第5回 対象者の理解：主な精神疾患について (1) 統合失調症スペクトラム障害及び他の精神病性障害群 第6回 対象者の理解：主な精神疾患について (2) 双極性障害及び関連障害群・抑うつ障害群 第7回 対象者の理解：主な精神疾患について (3) 不安症群・強迫症及び関連症群・摂食障害群 第8回 音楽療法における音・音楽 第8回 臨床事例研究 第10回 臨床事例研究と理論背景 第11回 療法における音楽と言葉 第12回 音楽療法におけるプロセス 第13回 グループダイナミックス 第14回 音楽療法の役割 第15回 まとめ		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度20% 発表40% レポート40%		
失格条件	出席回数が全授業の3分の2以上満たない場合 発表の不参加 レポートの提出しなかった場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業内で紹介する文献を読む。(1時間) 授業内で出された課題について調べる。(3時間)		
課題へのフィード バック	課題提出後、個別および全体に向けコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書	適宜授業内に紹介		
その他	特になし		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	MT408A03	期間	前期
授業科目名	声楽演習 I		
英訳科目名	Vocal exercises I		
担当教員名	片桐 直樹		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ○
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	発声のメカニズムを学ぶ。 正確で安定した音程や、適切なディナーミク・アゴーギクによるフレージングを習得する。 歌唱と同様にピアノ伴奏の技術も習得する。		
到達目標	正しい発声で歌うことができる。 正確な音程や、的確なフレージングで歌唱することができる。 基礎的な歌曲やアンサンブル曲などの声楽曲を学習することにより、音楽的な歌唱ができる。 ピアノ伴奏による弾き語りの技術を習得する。		
授業計画	第1～15回 呼吸、発声練習。コールユーブンゲンによる正確な音価や音程の練習。コンコーネによるフレージングの学習。基礎的なイタリア歌曲やドイツ歌曲による歌唱学習。アンサンブル曲によるハーモニー作りの学習。簡単な唱歌などによる弾き語りの学習。		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 50% 毎回の課題の完成度 50%		
失格条件	1 / 3 以上欠席したもの。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	技術向上には日々の練習の積み重ねが重要。自分の歌声、伴奏を録音し反省材料にして向上してゆけば、必ず成果をあげることができます。		
課題へのフィード バック	実技の取り組みや、レッスンに対して個別にコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	MT408B03	期間	後期
授業科目名	声楽演習Ⅱ		
英訳科目名	Vocal exercises Ⅱ		
担当教員名	片桐 直樹		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ○
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	発声のメカニズムを学ぶ。 正確で安定した音程や、適切なディナーミク・アゴーギクによるフレージングを習得する。 歌唱と同様にピアノ伴奏の技術も習得する。		
到達目標	声楽演習Ⅰで習得した技術をさらに深めることができる。 正しい呼吸、発声で歌うことができる。 正確な音程や、的確なフレージングで歌唱することができる。 歌曲やアンサンブル曲などの声楽曲を学習することにより、音楽的な歌唱ができる。 ピアノ伴奏による弾き語りの技術を習得する。		
授業計画	第1～15回 呼吸、発声練習。コールユーブンゲンによる正確な音価や音程の練習。コンコーネによるフレージングの学習。基礎的なイタリア歌曲やドイツ歌曲による歌唱学習。アンサンブル曲によるハーモニー作りの学習。 簡単な唱歌などによる弾き語りの学習。		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 50% 毎回の課題の完成度 50%		
失格条件	1 / 3 以上欠席したもの。		
予習・復讐の準備	声楽演習Ⅰと同様、練習を積み重ねることが基本。加えてこの科目では応用が必要になってくるため、クラスメイトと共に練習することで完成度、向上心を高めることが重要。		
課題へのフィードバック	実技の取り組みや、レッスンに対して個別にコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

3-200

ナンバリング	MT408A02	期間	前期
授業科目名	臨床医学各論 I		
英訳科目名	Clinical Medicine I		
担当教員名	畠中 剛久		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ○	ディプロマ・ポリシー2	<技能> △
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> △	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ○
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	音楽療法を実践するにあたり必要な医学知識を学び、将来実践するにあたり臨床の場でその知識をどのように活かして行くべきか考えていきます。		
到達目標	音楽療法を実践する上で必要な基礎医学知識を習得し、臨床で役立てることができる。		
授業計画	①基礎的な医学知識 ②各種疾患の特性と音楽療法の応用		
評価方法 (合計100%)	授業への参加（参加状況）30% 期末に行うレポート評価70%		
失格条件	正当な理由なくして出席率60%未満の場合は失格とします。 前期・後期に評価として行うレポートの未提出の場合は失格とします。		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	日頃から社会問題や医学的問題に興味を持ち、積極的に授業に参加してください。		
課題へのフィード バック	レポート評価や講義など疑問の思うところは、必要に応じて個別もしくは全体にコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	特にありません。		
備考	医師としての実務経験をもとに、この授業を進めます。		
科目生への開講	なし		

ナンバリング	MT408B02	期間	後期
授業科目名	臨床医学各論Ⅱ		
英訳科目名	Clinical Medicine Ⅱ		
担当教員名	畠中 剛久		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ○	ディプロマ・ポリシー2	<技能> △
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ○
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	音楽療法を実践するにあたり必要な医学知識を学び、将来実践するにあたり臨床の場でその知識をどのように活かして行くべきか考えていきます。		
到達目標	音楽療法を実践する上で必要な基礎医学知識を習得し、臨床で役立てることができる。		
授業計画	①基礎的な医学知識 ②各種疾患の特性と音楽療法の応用		
評価方法 (合計100%)	授業への参加(参加状況) 30% 期末に行うレポート評価70%		
失格条件	正当な理由なくして出席率60%未満の場合は失格とします。 前期・後期に評価として行うレポートの未提出の場合は失格とします。		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	日頃から社会問題や医学的問題に興味を持ち、積極的に授業に参加してください。		
課題へのフィード バック	レポート評価や講義など疑問の思うところは、必要に応じて個別もしくは全体にコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	特にありません。		
備考	医師としての実務経験をもとに、この授業を進めます。		
科目生への開講	なし		

ナンバリング	MT407A04	期間	前期
授業科目名	臨床心理学 I		
英訳科目名	Clinical Psychology I		
担当教員名	後藤 浩子		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> △	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	音楽療法を行う際に活用できる視点、および種々の技法を学ぶ。 援助者として他者をより理解するための行動観察法や評価法を学ぶ。さらに、交流分析やコミュニケーション論を学ぶことにより、自分に向き合い、自分を知るという体験をする。 その過程で、自己理解の促進と他者を思いやる柔らかな感性を育成し、よき音楽療法士としての土台をつくる基礎となるように学ぶ。		
到達目標	心理臨床としての音楽療法を理解することができる。 交流分析の理解をすることができる。 エゴグラムを体験して、自分を理解することができる。 非言語コミュニケーションを理解することができる。		
授業計画	第1回 臨床心理学とは 第2回 臨床心理学の中での音楽療法の位置づけ 第3回 心理療法としての音楽療法 第4回 来談者中心療法について 第5回 交流分析について (1) 交流分析とは 第6回 交流分析について (2) エゴグラム 第7回 交流分析について (3) 自己理解・他者理解 第8回 交流分析について (4) 心の栄養について 第9回 カウンセリングについて (1) カウンセリングとは 第10回 カウンセリングについて (2) カウンセリング場面をみる 第11回 ストレスについて (1) ストレスとは 第12回 ストレスについて (2) ストレスマネジメント 第13回 コミュニケーション論 第14回 非言語コミュニケーションとしての音楽療法 第15回 まとめ マインドマップの作成		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 (30%) 毎回のレポート提出 (30%) 及び最終授業時まとめの作成 (40%) などで総合的に評価する		
失格条件	授業の3分の1以上欠席したもの		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	参考文献などを読む (1時間) 対象者について理解するための学習をする (1時間)		
課題へのフィード バック	毎回提出するレポートにコメントをつけて返却します。		
教科書	『音楽療法士のための心理学』		
著者名	松本和雄監修・小原依子編著		
出版社	朱鷺書房		
参考書	『TEG第2版』 金子書房 神谷美恵子 『こころの旅』 みすず書房 服部祥子 『精神科の子育て』 論』 新潮社		
その他	場合によっては、施設などに行き、実勢に対象者の様子を見て、倫理について体感する機会をもつ。		
備考	音楽療法士としての実務経験をもとに、この授業を進めます。		
科目生への開講	なし		

ナンバリング	MT407B04	期間	後期
授業科目名	臨床心理学Ⅱ		
英訳科目名	Clinical PsychologyⅡ		
担当教員名	後藤 浩子		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> △	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	音楽療法を行う時に有用な心理的援助技法を学ぶ。 実際に、アートセラピーやイメージ療法などを体験する。		
到達目標	アートセラピーを体験して、理解することができる。 音楽療法との共通点や相違点などを理解することができる。 心理的援助方法を音楽療法の実践にどのようにいかすか、事例をとおして考えることができる。		
授業計画	第1回 音楽療法を行う際に活用可能な心理療法を学ぶ 第2回 心理療法の理論とカウンセリング技法 第3回 カウンセリングの体験 第4回 アートセラピーについて（1）種類 第5回 アートセラピーについて（2）事例 第6回 絵画療法について 第7回 箱庭療法について 第8回 スクイグル法について 第9回 音楽療法における即興演奏について 第10回 風景構成法について 第11回 コラージュ療法について 第12回 リラクゼーションについて（1）統合リラクゼーションについて 第13回 リラクゼーションについて（2）調整的音楽療法について 第14回 音楽療法と絵画療法との共通点・相違点 第15回 内容理解の確認		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度（30%）毎回のレポート提出（30%）及び最終授業時の内容理解の確認（40%）などで総合的に評価する		
失格条件	授業の3分の1以上欠席したもの		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	さまざまな技法をみにつけられるよう、資料を読み、復習をする。（1時間） また、絵画療法に使うものを準備する。（1時間） 音楽療法とアートセラピーの共通点や相違点を感じられるように、体験を自分のものとして感じられるようにする。（2時間）		
課題へのフィード バック	毎回提出するレポートにコメントをつけて返却する。		
教科書	『音楽療法士のための心理学』（臨床心理学Ⅰで用いたもの）及び配布プリント		
著者名	松本和雄監修・小原依子編著		
出版社	朱鷺書房		
参考書	杉浦京子 『臨床心理学講義』 朱鷺書房		
その他			
備考	音楽療法士としての実務経験をもとに、この授業を進めます。		
科目生への開講	なし		

ナンバリング	MT407A05	期間	前期
授業科目名	社会福祉論		
英訳科目名	Studies of Social Welfare		
担当教員名	名和 月之介		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	社会福祉の基本的な考え方や用語を学び、その社会的な展開過程について知見を得る。さらに今日の社会福祉の直面する問題について現状を理解し、問題の要因や政策的対応について学ぶ。		
到達目標	社会福祉の基本的な考え方や用語を理解すると共に、その社会的な展開過程を踏まえて、現代の社会福祉について知見を得ることができる。		
授業計画	第1回 オリエンテーション—社会福祉とは何か 第2回 私たちの暮らしと社会福祉(1) 第3回 私たちの暮らしと社会福祉(2) 第4回 社会の制度としての社会福祉 第5回 社会福祉の考え方と目的(1) 第6回 社会福祉の考え方と目的(2) 第7回 日本の社会福祉の歴史(1) 第8回 日本の社会福祉の歴史(2) 第9回 市町村社会福祉行政とソーシャルアドミニストレーション 第10回 施設の社会化と在宅福祉サービス 第11回 在宅福祉サービスのあり方と保健・医療・福祉の連携 第12回 地域自立生活支援とソーシャルワーク 第13回 社会福祉におけるニーズの考え方とソーシャルワーク実践(1) 第14回 社会福祉におけるニーズの考え方とソーシャルワーク実践(2) 第15回 これまでの授業内容のまとめ		
評価方法 (合計100%)	期末レポート50% 出席等平常点50%		
失格条件	期末レポートを提出しなかった場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業受講にあたって、テキストの予習・復習が望ましい。		
課題へのフィード バック	レポート提出時授業において全員にコメントします。		
教科書	授業時にプリントを配布します。		
著者名			
出版社			
参考書	『改訂新版 社会福祉入門』 大橋謙策 発売元：NHK出版、発行所：放送大学教育振興会		
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	SO407C01	期間	前期
授業科目名	専攻実技Ⅶ(特演・管弦打)		
英訳科目名	Applied Music (Orchestral Instruments) Ⅶ		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	基礎的な演奏技術を踏まえながら、古典より現代に至る幅広い作品に対する演奏能力を習得し、各人の個性を伸ばしつつ、様々な音楽的可能性を試み、音楽への積極的な姿勢を育てる。		
到達目標	地道な基礎練習を踏まえ、様々な事柄を通して音楽的要素を学び、演奏に結びつけることができる。		
授業計画	各自の演奏会のスケジュールに合わせて柔軟に対応しながら進めていく		
評価方法 (合計100%)	全てを評価する。		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者、及び試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	将来演奏家を目指す者にとって必要な事柄は様々な分野に及ぶ。 担当教員と相談の上、計画を立てること。		
課題へのフィード バック	試験終了後、個別にコメントをわたします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	SO407C02	期間	後期
授業科目名	専攻実技Ⅷ(特演・管弦打)		
英訳科目名	Applied Music (Orchestral Instruments) Ⅷ		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	基礎的な演奏技術を踏まえながら、古典より現代に至る幅広い作品に対する演奏能力を習得し、各人の個性を伸ばしつつ、様々な音楽的可能性を試み、音楽への積極的な姿勢を育てる。		
到達目標	地道な基礎練習を踏まえ、様々な事柄を通して音楽的要素を学び、演奏に結びつけることができる。		
授業計画	各自の演奏会のスケジュールに合わせて柔軟に対応しながら進めていく。		
評価方法 (合計100%)	全てを評価する。		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者、及び試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	将来演奏家を目指す者にとって必要な事柄は様々な分野に及ぶ。 担当教員と相談の上、計画を立てること。		
課題へのフィード バック	試験終了後、個別にコメントをわたします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	SO408A01	期間	前期
授業科目名	管弦打楽器特別研究Ⅴ/特別演奏研究A		
英訳科目名	Advanced Study in Orchestral Instruments Ⅴ/Advanced performance study A		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	演奏家に必要とされる高度なテクニックを習得し、幅広く個性豊かな表現力を培う。 担当教員と相談の上、研究のテーマを決め、楽曲分析、演奏解釈をする。		
到達目標	上記に述べたポイント等を踏まえながら演奏できる。		
授業計画	第1回 研究テーマを決め、課題を決定 第2～14回 練習課題の実技指導 (この間、課題の仕上がり具合で随時課題を与える) 第15回 夏季休暇中の課題の決定 *個人の進度により、曲数が変わることがある		
評価方法 (合計100%)	出席状況及び受講態度などを加味して評価する。		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	受講者は自発的に、作曲された時代背景、社会状況などを、作品のアナリゼ以外に研究することが望ましい。 有意義なレッスンをを行うために、十分な練習が必要です。		
課題へのフィード バック	レッスン中に個別にコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	SO408A02	期間	後期
授業科目名	管弦打楽器特別研究Ⅵ/特別演奏研究B		
英訳科目名	Advanced Study in Orchestral Instruments Ⅵ/Advanced performance study B		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	演奏家としての高度なテクニックと表現力を習得し、さらに高い水準の音楽をめざす。 個性を考え、テーマを決めて研究する。		
到達目標	上記に述べたポイント等を踏まえながら演奏できる。		
授業計画	第1回 研究テーマを決め、課題を決定 第2～15回 練習課題の実技指導 (この間、課題の仕上がり具合で随時課題を与える) *個人の進捗により、曲数が変わることがある		
評価方法 (合計100%)	実技試験の演奏を評価する。(100%)		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者、及び試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	受講者は自発的に、作曲された時代背景、社会状況などを、作品のアナリゼ以外に研究することが望ましい。 有意義なレッスンをを行うために、十分な練習が必要です。		
課題へのフィード バック	試験終了後、個別に講評を渡します。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	試験の結果、特に優秀なものはCに進める。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	SO408B01	期間	前期
授業科目名	管弦打楽器特別研究Ⅶ/特別演奏研究C		
英訳科目名	Advanced Study in Orchestral Instruments Ⅶ/Advanced performance study C		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	演奏家に必要とされる高度なテクニックを習得し、幅広く個性豊かな表現力を培う。 担当教員と相談の上、研究のテーマを決め、楽曲分析、演奏解釈をする。		
到達目標	上記に述べたポイント等を踏まえながら演奏できる。		
授業計画	第1回 研究テーマを決め、課題を決定 第2～14回 練習課題の実技指導 (この間、課題の仕上がり具合で随時課題を与える) 第15回 夏季休暇中の課題の決定 *個人の進度により、曲数が変わることがある		
評価方法 (合計100%)	出席状況及び受講態度などを加味して評価する。		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	受講者は自発的に、作曲された時代背景、社会状況などを、作品のアナリゼ以外に研究することが望ましい。 有意義なレッスンをを行うために、十分な練習が必要です。		
課題へのフィード バック	レッスン中に個別にコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

3-210

ナンバリング	SO408B02	期間	後期
授業科目名	管弦打楽器特別研究Ⅷ/特別演奏研究D		
英訳科目名	Advanced Study in Orchestral Instruments Ⅷ/Advanced performance study D		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	演奏家としての高度なテクニックと表現力を習得し、さらに高い水準の音楽をめざす。 個性を考え、テーマを決めて研究する。		
到達目標	上記に述べたポイント等を踏まえながら演奏できる。		
授業計画	第1回 研究テーマを決め、課題を決定 第2～15回 練習課題の実技指導 (この間、課題の仕上がり具合で随時課題を与える) *個人の進捗により、曲数が変わることがある		
評価方法 (合計100%)	実技試験の演奏を評価する。(100%)		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者、及び試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	受講者は自発的に、作曲された時代背景、社会状況などを、作品のアナリゼ以外に研究することが望ましい。 有意義なレッスンをを行うために、十分な練習が必要です。		
課題へのフィード バック	試験終了後、個別に講評を渡します。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	試験の結果、特に優秀なものは特別研究 I Aに進める。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	SO408C03	期間	通年集中
授業科目名	特別演奏実習B		
英訳科目名	Advanced performance study B		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	学内外でのリサイタル・オーケストラとの協演・相当量の課題曲準備の必要のあるコンクール参加など、各分科会が認めた演奏を単位として認定する。		
到達目標	学内外の演奏現場において評価を得られる演奏準備の為に、本番までの長期的で入念な計画・準備を行うことができる。		
授業計画	1. プログラム案を検討する 2. プログラム曲の研究・練習 随時、担当教員が実技指導・研究指導を行う。		
評価方法 (合計100%)	準備段階での平常点 50% 本番での演奏評価 50%		
失格条件	・演奏活動、もしくはコンクール参加を行わなかった者 ・研究・準備・本番時間が45分×20回=900分(15時間)に満たなかった者		
予習・復習の準備	プログラム曲については担当教員と相談をして決め、十分な準備・練習をした上で実技・研究指導を受講すること。		
課題へのフィードバック	コンクールの場合は、結果を報告する。 演奏会の場合は、新聞・雑誌等の評論が出た時は報告し、また観客の感想・意見を求める。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	SO408C04	期間	通年集中
授業科目名	特別演奏実習C		
英訳科目名	Advanced performance study C		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	学内外でのリサイタル・オーケストラとの協演・相当量の課題曲準備の必要のあるコンクール参加など、各分科会が認めた演奏を単位として認定する。		
到達目標	学内外の演奏現場において評価を得られる演奏準備の為に、本番までの長期的で入念な計画・準備を行うことができる。		
授業計画	1. プログラム案を検討する 2. プログラム曲の研究・練習 随時、担当教員が実技指導・研究指導を行う。		
評価方法 (合計100%)	準備段階での平常点 50% 本番での演奏評価 50%		
失格条件	・演奏活動、もしくはコンクール参加を行わなかった者 ・研究・準備・本番時間が45分×20回=900分(15時間)に満たなかった者		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	プログラム曲については担当教員と相談をして決め、十分な準備・練習をした上で実技・研究指導を受講すること。		
課題へのフィード バック	コンクールの場合は、結果を報告する。 演奏会の場合は、新聞・雑誌等の評論が出た時は報告し、また観客の感想・意見を求める。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	SO408C05	期間	通年集中
授業科目名	卒業演奏		
英訳科目名	Senior Recital		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	演奏家としての資質・能力を磨くため、演奏本番(リサイタル)を行う。 プログラミングからはじまり、演奏会準備全般を自ら実践し、南港ホール・本町講堂・アンサンブルスタジオなどで演奏会(リサイタル)を行う。		
到達目標	計画的な準備・研究・練習をし、聴衆に納得してもらえる演奏会(リサイタル)を行う。		
授業計画	1. 演奏会プログラム案の検討 2. プログラム曲の研究(プログラム・ノート作成・楽曲分析などの研究) 3. プログラム曲の練習 4. 演奏会(リサイタル)開催に必要な事務的準備 随時、複数の担当教員が実技指導・研究指導を行う。		
評価方法 (合計100%)	南港ホール・本町講堂・アンサンブルスタジオなどで、演奏会(リサイタル)を行い、その演奏内容で100%評価をする。		
失格条件	規定の演奏会(リサイタル)準備のための実技指導・研究指導を受講しなかった者、及び規定の演奏会(リサイタル)を行わなかった者。		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	プログラム曲については担当教員と相談をして決め、十分な準備・練習をした上で実技・研究指導を受講すること。		
課題へのフィード バック	演奏会終了後、個別にコメントする。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	SO408C06	期間	通年集中
授業科目名	オーケストラG		
英訳科目名	Orchestra G		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> △	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ◎
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	合奏は管弦楽のオーケストラをはじめ、弦楽オーケストラ、ウインド・オーケストラ、及びその他の小編成のアンサンブルの合奏体を有し、学生はいずれかのグループに配属され、指揮の見方や多人数の中での音の響かせ方、ハーモニーの作り方を体得するという基本的な事柄をはじめ、スコアを通しての音楽像全体の把握、指揮者の音楽的要求の理解、全体の調和にいたるまでの合奏に必要な技術を体得する。		
到達目標	オーケストラ授業での分奏、合奏を通じ得たアンサンブル力を、演奏会で発揮出来る。		
授業計画	第1回 オリエンテーション 第2～3回 合奏 指揮者の音楽を感じ取る 第4～5回 細分奏 音程、ハーモニーの調和 第6～7回 分奏 各楽器間のアンサンブル 第8～10回 合奏 各楽器間のアンサンブル 第11回 自主分奏 各自の演奏技能の向上 第12回 鑑賞 CD, DVD等で研究 第13～14回 分奏 アーティキレーションの確認 第15回 合奏 音量、音程、ハーモニー、リズムの調和		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度、表現力、アンサンブル力等を考慮の上、評価する。		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	課題について事前に準備、練習し授業にのぞむ事		
課題へのフィード バック	前期授業終了後、全体に向けてコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	SO408C07	期間	通年集中
授業科目名	オーケストラH		
英訳科目名	Orchestra H		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> △	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ◎
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	合奏は管弦楽のオーケストラをはじめ、弦楽オーケストラ、ウインド・オーケストラ、及びその他の小編成のアンサンブルの合奏体を有し、学生はいずれかのグループに配属され、指揮の見方や多人数の中での音の響かせ方、ハーモニーの作り方を体得するという基本的な事柄をはじめ、スコアを通しての音楽像全体の把握、指揮者の音楽的要求の理解、全体の調和にいたるまでの合奏に必要な技術を体得する。		
到達目標	オーケストラ授業での分奏、合奏を通じ得たアンサンブル力を、演奏会で発揮出来る。		
授業計画	第16～17回 合奏 表現力の向上 第18回 演奏会 本番での対応力 第19回 反省会 後期オリエンテーション 第20回 合奏 指揮者、コンサートマスターとの、連携 第21～22回 分奏 各楽器間のアンサンブル 第23～24回 細分奏 音程、ハーモニーの調和 第25回 自主分奏 各自の演奏力の向上 第26回 鑑賞 CD, DVD等で研究 第27～29回 合奏 ソリストとの合わせ 第30回 演奏会 本番での対応		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度、表現力、アンサンブル力等を考慮の上、評価する。		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	課題について事前に準備、練習し授業にのぞむ事		
課題へのフィード バック	定期演奏会等の本番終了後の授業で、全体に向けてコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	SO408C08	期間	通年集中
授業科目名	管弦打楽器アンサンブル演習G		
英訳科目名	Ensemble G		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> △	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ◎
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	木管楽器、金管楽器、弦楽器、打楽器、などのグループに分かれて、アンサンブルでの基礎から実際に演奏するまでの過程を学ぶ。		
到達目標	同種から様々な編成のアンサンブルに対応する能力を身につけることができる。		
授業計画	学期初めに管楽器、弦楽器、打楽器などのグループごとに掲示をする。		
評価方法 (合計100%)	出席状況及び授業に対する積極性を加味して評価する。		
失格条件	出席日数が2/3に満たないもの。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	受講者は自発的に、課題とする楽曲の録音資料を参考にしながら、作品について学ぶことが望ましい。		
課題へのフィード バック	演奏会終了後、全体に向けてコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	SO408C09	期間	通年集中
授業科目名	管弦打楽器アンサンブル演習H		
英訳科目名	Ensemble H		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> △	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ◎
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	木管楽器、金管楽器、弦楽器、打楽器、などのグループに分かれて、アンサンブルでの基礎から実際に演奏するまでの過程を学ぶ。		
到達目標	同種から様々な編成のアンサンブルに対応する能力を身につけることができる。		
授業計画	学期初めに管楽器、弦楽器、打楽器などのグループごとに掲示をする。		
評価方法 (合計100%)	出席状況及び授業に対する積極性などを加味して評価する。		
失格条件	出席日数が2/3に満たないもの		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	受講者は自発的に、課題とする楽曲の録音資料を参考にしながら、作品について学ぶことが望ましい。		
課題へのフィード バック	演奏会終了後、全体に向けてコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	通年集中
授業科目名	室内楽Ⅱ		
英訳科目名	Chamber Music Ⅱ		
担当教員名	音楽学科教員		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー2	<技能>
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>「室内楽Ⅰ」で習得した技術、すなわち正しいタイミングによる合わせ方、楽器間のバランスの取り方、ハーモニーの調和能力などをもとに、さらに発展的な内容について錬磨していく。</p> <p>「室内楽Ⅰ」では基本的な合わせ方を主体にしたが、「室内楽Ⅱ」においては総譜(スコア)を綿密に読み、各パートがどのような関連性を持ちつつ、ひとつの音楽に収斂されるのか、自身がどのような役割を演じるのか、という理解を深めていくことを目的とする。</p>		
到達目標	コンサートで演奏できる。		
授業計画	<p>第1回 グループの編成と登録</p> <p>第2回 学習する楽曲の設定および年間の学習計画</p> <p>第3回 各人のパート練習とグループでの合わせ(練習)</p> <p>第4回 レッスン受講(室内楽演奏に必要とされる技術を習得)</p>		
評価方法 (合計100%)	学年末の試験を受け、その演奏を評価する。(100%)		
失格条件	受講時間数が、試験前の決められた期日までに12時間(45分×12)に充たなかった者、および試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	各グループで計画性のある練習スケジュールを立て、和音感、和声進行、パート間の連携などを楽譜(スコア)から読み取り、効果的なリハーサルを重ねていく。予習・復習については、1回のレッスンのために180分(4時間)以上を必要とする。		
課題へのフィードバック	試験後に採点を行なった教員が、受験した室内楽グループ個別に講評をする。		
教科書	各グループが選んだ曲目のスコア、パート譜については、それぞれが手配する。		
著者名	(各グループにより異なる)		
出版社	(各グループにより異なる)		
参考書			
その他	授業のすすめ方については、グループ登録時に詳細を記した「室内楽実施要領」を配布する。また同時に内容を掲示する。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	通年集中
授業科目名	室内楽Ⅲ		
英訳科目名	Chamber Music Ⅲ		
担当教員名	音楽学科教員		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー2	<技能>
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>「室内楽Ⅰ」で習得した技術、すなわち正しいタイミングによる合わせ方、楽器間のバランスの取り方、ハーモニーの調和能力などをもとに、さらに発展的な内容について錬磨していく。</p> <p>「室内楽Ⅰ」では基本的な合わせ方を主体にしたが、「室内楽Ⅱ」においては総譜(スコア)を綿密に読み、各パートがどのような関連性を持ちつつ、ひとつの音楽に収斂されるのか、自身がどのような役割を演じるのか、という理解を深めていくことを目的とする。</p>		
到達目標	コンサートで演奏できる。		
授業計画	<p>第1回 グループの編成と登録</p> <p>第2回 学習する楽曲の設定および年間の学習計画</p> <p>第3回 各人のパート練習とグループでの合わせ(練習)</p> <p>第4回 レッスン受講(室内楽演奏に必要とされる技術を習得)</p>		
評価方法 (合計100%)	学年末の試験を受け、その演奏を評価する。(100%)		
失格条件	受講時間数が、試験前の決められた期日までに12時間(45分×12)に充たなかった者、および試験を受けなかった者		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	各グループで計画性のある練習スケジュールを立て、和音感、和声進行、パート間の連携などを楽譜(スコア)から読み取り、効果的なリハーサルを重ねていく。予習・復習については、1回のレッスンのために180分(4時間)以上を必要とする。		
課題へのフィード バック	試験後に採点を行なった教員が、受験した室内楽グループ個別に講評をする。		
教科書	各グループが選んだ曲目のスコア、パート譜については、それぞれが手配する。		
著者名	(各グループにより異なる)		
出版社	(各グループにより異なる)		
参考書			
その他	授業のすすめ方については、グループ登録時に詳細を記した「室内楽実施要領」を配布する。また同時に内容を掲示する。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	SO408A13	期間	前期
授業科目名	弦楽器指導法A		
英訳科目名	Methods of String Teaching A		
担当教員名	斎藤 建寛、曾我部 千恵子、林 俊武		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ○
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> △	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	弦楽器専攻の学生のほとんどは、入学の時点で、奏法の基礎と主要な楽曲をすでに学習し習得しているものと考えられるが、それらを即、学習者に指導できるかという点、特に、初心者、初級者への指導においては、なかなかの困難を伴う。自分が学んできたことを振り返り、弦楽器、主にヴァイオリンの奏法について整理し、分析することにより、より良い指導法を考えていくものとする。合わせて、チェロ、コントラバスの入門指導についても簡単に学習する。		
到達目標	本授業を受講することにより正しい奏法を指導できるようになるとともに、指導を通してできる、教育的意義を見出すことができる。 さらに、指導法を学び、研究することにより自身の奏法などを見直し、より良い演奏スタイルの発見が期待できる。		
授業計画	第1回 音楽教育全般、情操教育、専門教育 それぞれにおけるヴァイオリン学習の意義 並びに音楽学習のあり方 第2回 導入における幼児心理、児童心理の理解。初歩指導における注意点。成人への指導における心得 保護者とのかかわり方 第3回 楽器の選択、及び その扱い方。楽器のメンテナンスについて。音楽的環境、練習環境の整え方 第4回 レッスンへの導入。姿勢 及び 楽器の構え方。読譜の進め方 第5回 弓の持ち方からボーイングへの指導 第6回 基本的なボーイングの種類と指導法 第7回 左手の基礎 第8回 ポジションの意義と奏法上の実際 第9回 重音奏法と音程 第10回 ヴィブラート、導入と発展 第11回 毎日の練習とスケール指導 第12回 テキストの種類と適切な選択 第13回 指導過程における楽曲の選択 及び 音楽的指導 第14回 チェロの楽器と指導について 第15回 コントラバスの楽器と指導について		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 50% (出席だけでなく、いかに積極的に問題意識をもって授業に臨んだかを評価する) レポート提出 50%		
失格条件	5回以上の欠席、ただし、欠席の場合は理由を明確にし、レポート等によってカバーすること。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	予定される授業内容について、自分なりにわかること、疑問点、質問事項を必ず用意すること。 講義においては実際に楽器を用いての説明や実践を行うので、毎回、各自、楽器を持参すること。 楽譜、参考資料についてはその都度準備するものを指示する。		
課題へのフィード バック	課題ごとに口頭及び文書等によって個々に伝える。		
教科書	「不使用」 講義内容のレジユメを、毎回、事前に配布する		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	「特になし」		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	SO408C10	期間	通年集中
授業科目名	オーケストラ特別研究 A		
英訳科目名	Orchestra Studies A		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> △	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ○
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ◎
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	履修者はオーディションにて選考される。 プロとして活躍する、オーケストラ奏者、アンサンブル奏者としての実践能力を身につけるために、国内外で活躍する、指揮者、演奏家の個人レッスン、や合奏指導のもと、実践力の充実を目指す。		
到達目標	履修者はオーディションにて選考される。 プロとして活躍する、オーケストラ奏者、アンサンブル奏者としての実践能力を身につけるために、国内外で活躍する、指揮者、演奏家の個人レッスン、や合奏指導のもと、実践力の充実を目指す。		
授業計画	第1回 スコアリーディング 古典から現代までの作品 第2回 オーケストラスタディ 古典から現代までの作品 第3回 映像や音源をもとに、作品の研究 第4回 オーケストラ研修、実習 第5回 オーケストラ鑑賞		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度、アンサンブル力、協調性などを考慮し、評価する。		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	オーケストラスタディ、スコアリーディング等を事前の準備を充分に行っておく。		
課題へのフィード バック	実習中に個別に指導 試験、本番の後に個別にアドバイス		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	SO408C11	期間	通年集中
授業科目名	オーケストラ特別研究B		
英訳科目名	Orchestra Studies B		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> △	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ○
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ◎
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	履修者はオーディションにて選考される。 プロとして活躍する、オーケストラ奏者、アンサンブル奏者としての実践能力を身につけるために、国内外で活躍する、指揮者、演奏家の個人レッスン、や合奏指導のもと、実践力の充実を目指す。		
到達目標	プロの演奏家として将来必要となるテクニック、スコアリーディング等を研究し、実践を踏まえアンサンブルや協調性を養う。		
授業計画	第1回 スコアリーディング 古典から現代までの作品 第2回 オーケストラスタディ 古典から現代までの作品 第3回 映像や音源をもとに、作品の研究 第4回 オーケストラ研修、実習 第5回 オーケストラ鑑賞		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度、アンサンブル力、協調性などを考慮し、評価する。		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	オーケストラスタディ、スコアリーディング等を事前の準備を充分に行っておく。		
課題へのフィード バック	実習中に個別に指導 試験、本番の後に個別にアドバイス		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	通年集中
授業科目名	オーケストラ特別実習 A		
英訳科目名	Orchestra Workshop A		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> △	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ○
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ◎
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	履修者はオーディションにて選考される。 プロとして活躍する、オーケストラ奏者、アンサンブル奏者としての実践能力を身につけるために、国内外で活躍する、指揮者、演奏家の個人レッスン、や合奏指導のもと、実践力の充実を目指す。		
到達目標	プロの演奏家として将来必要となるテクニック、スコアリーディング等を研究し、実践を踏まえアンサンブルや協調性を養う。		
授業計画	第1回 スコアリーディング 古典から現代までの作品 第2回 オーケストラスタディ 古典から現代までの作品 第3回 映像や音源をもとに、作品の研究 第4回 オーケストラ研修、実習 第5回 オーケストラ鑑賞		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度、アンサンブル力、協調性などを考慮し、評価する。		
失格条件	なし		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	オーケストラスタディ、スコアリーディング等を事前の準備を充分に行っておく。		
課題へのフィード バック	実習中に個別に指導 試験、本番の後に個別にアドバイス		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	通年集中
授業科目名	オーケストラ特別実習B		
英訳科目名	Orchestra Workshop B		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> △	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ○
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ◎
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	履修者はオーディションにて選考される。 プロとして活躍する、オーケストラ奏者、アンサンブル奏者としての実践能力を身につけるために、国内外で活躍する、指揮者、演奏家の個人レッスン、や合奏指導のもと、実践力の充実を目指す。		
到達目標	プロの演奏家として将来必要となるテクニック、スコアリーディング等を研究し、実践を踏まえアンサンブルや協調性を養う。		
授業計画	第1回 スコアリーディング 古典から現代までの作品 第2回 オーケストラスタディ 古典から現代までの作品 第3回 映像や音源をもとに、作品の研究 第4回 オーケストラ研修、実習 第5回 オーケストラ鑑賞		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度、アンサンブル力、協調性などを考慮し、評価する。		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	オーケストラスタディ、スコアリーディング等を事前の準備を充分に行っておく。		
課題へのフィード バック	実習中に個別に指導 試験、本番の後に個別にアドバイス		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	SO407A01	期間	前期
授業科目名	専攻実技 I (特演・管弦打)		
英訳科目名	Applied Music (Orchestral Instruments) I		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	基礎的な演奏技術を踏まえながら、古典より現代に至る幅広い作品に対する演奏能力を習得し、各人の個性を伸ばしつつ、様々な音楽的可能性を試み、音楽への積極的な姿勢を育てる。		
到達目標	地道な基礎練習を踏まえ、様々な事柄を通して音楽的要素を学び、演奏に結びつけることができる。		
授業計画	各自の演奏会のスケジュールに合わせて柔軟に対応しながら進めていく。		
評価方法 (合計100%)	全てを評価する。		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者、及び試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	将来演奏家を目指す者にとって必要な事柄は様々な分野に及ぶ。 担当教員と相談の上、計画を立てること。		
課題へのフィード バック	試験終了後、個別にコメントをわたします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	SO407A02	期間	後期
授業科目名	専攻実技Ⅱ (特演・管弦打)		
英訳科目名	Applied Music (Orchestral Instruments) Ⅱ		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	基礎的な演奏技術を踏まえながら、古典より現代に至る幅広い作品に対する演奏能力を習得し、各人の個性を伸ばしつつ、様々な音楽的可能性を試み、音楽への積極的な姿勢を育てる。		
到達目標	地道な基礎練習を踏まえ、様々な事柄を通して音楽的要素を学び、演奏に結びつけることができる。		
授業計画	各自の演奏会のスケジュールに合わせて柔軟に対応しながら進めていく。		
評価方法 (合計100%)	全てを評価する。		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者、及び試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	将来演奏家を目指す者にとって必要な事柄は様々な分野に及ぶ。 担当教員と相談の上、計画を立てること。		
課題へのフィード バック	試験終了後、個別にコメントをわたします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	SO407A03	期間	前期
授業科目名	専攻実技Ⅲ (特演・管弦打)		
英訳科目名	Applied Music (Orchestral Instruments) Ⅲ		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	基礎的な演奏技術を踏まえながら、古典より現代に至る幅広い作品に対する演奏能力を習得し、各人の個性を伸ばしつつ、様々な音楽的可能性を試み、音楽への積極的な姿勢を育てる。		
到達目標	地道な基礎練習を踏まえ、様々な事柄を通して音楽的要素を学び、演奏に結びつけることができる。		
授業計画	各自の演奏会のスケジュールに合わせて柔軟に対応しながら進めていく		
評価方法 (合計100%)	全てを評価する。		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者、及び試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	将来演奏家を目指す者にとって必要な事柄は様々な分野に及ぶ。 担当教員と相談の上、計画を立てること。		
課題へのフィード バック	試験終了後、個別にコメントをわたします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講			

ナンバリング	SO407A04	期間	後期
授業科目名	専攻実技Ⅳ (特演・管弦打)		
英訳科目名	Applied Music (Orchestral Instruments) Ⅳ		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	基礎的な演奏技術を踏まえながら、古典より現代に至る幅広い作品に対する演奏能力を習得し、各人の個性を伸ばしつつ、様々な音楽的可能性を試み、音楽への積極的な姿勢を育てる。		
到達目標	地道な基礎練習を踏まえ、様々な事柄を通して音楽的要素を学び、演奏に結びつけることができる。		
授業計画	各自の演奏会のスケジュールに合わせて柔軟に対応しながら進めていく。		
評価方法 (合計100%)	全てを評価する。		
失格条件	出席日数が2/3に満たない者、及び試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	将来演奏家を目指す者にとって必要な事柄は様々な分野に及ぶ。 担当教員と相談の上、計画を立てること。		
課題へのフィード バック	試験終了後、個別にコメントをわたします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	SO408C01	期間	通年集中
授業科目名	演奏会演習		
英訳科目名	Student Recital		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ○	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ◎	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> △	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	演奏家としての資質・能力を磨くため、演奏本番(リサイタル)を行う。 プログラミングからはじまり、演奏会準備全般を自ら実践し、南港ホール・本町講堂・アンサンブルスタジオなどで約50分のリサイタルを行う。		
到達目標	計画的な準備・研究・練習をし、聴衆に納得してもらえる演奏会(リサイタル)を南港ホール・本町講堂・アンサンブルスタジオなどで行うことができる。		
授業計画	南港ホール・本町講堂・アンサンブルスタジオなどで、演奏会形式(公開)約50分プログラム リサイタルを行う。		
評価方法 (合計100%)	南港ホール・本町講堂・アンサンブルスタジオなどで、演奏会形式(公開)約50分プログラム リサイタルを行い、その演奏内容で100%評価をする。		
失格条件	規定のリサイタル準備のための実技指導・研究指導を受講しなかった者、及び規定のリサイタルを行わなかった者。		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	プログラム曲については担当教員と相談をして決め、十分な準備・練習をした上で実技・研究指導を受講すること。		
課題へのフィード バック	試験終了後、個別にコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	SO408C02	期間	通年集中
授業科目名	特別演奏実習 A		
英訳科目名	Advanced performance study A		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	学内外でのリサイタル・オーケストラとの協演・相当量の課題曲準備の必要のあるコンクール参加など、各分科会が認めた演奏を単位として認定する。		
到達目標	学内外の演奏現場において評価を得られる演奏準備の為に、本番までの長期的で入念な計画・準備を行うことができる。		
授業計画	1. プログラム案を検討する 2. プログラム曲の研究・練習 随時、担当教員が実技指導・研究指導を行う。		
評価方法 (合計100%)	準備段階での平常点 50% 本番での演奏評価 50%		
失格条件	・演奏活動、もしくはコンクール参加を行わなかった者 ・研究・準備・本番時間が45分×20回=900分(15時間)に満たなかった者		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	プログラム曲については担当教員と相談をして決め、十分な準備・練習をした上で実技・研究指導を受講すること。		
課題へのフィード バック	コンクールの場合は、結果を報告する。 演奏会の場合は、新聞・雑誌等の評論が出た時は報告し、また観客の感想・意見を求める。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	SO407A05	期間	通年集中
授業科目名	重奏研究A		
英訳科目名	Ensemble (Duo) A		
担当教員名	音楽学科教員		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> △
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	演奏家として不可欠な重奏(デュオ)の分野を実践を通し学ぶ。 教員とデュオを組むこともある。 演奏会で通用するレベルの重奏演奏を目指すことが目的である。		
到達目標	演奏会で通用するレベルの重奏演奏ができる。		
授業計画	学生の準備が出来た時に随時教員が演奏を聴くか、又は共演をし、ステージでの演奏に必要な具体的アドバイスをします。		
評価方法 (合計100%)	演奏会形式(公開)の試験を行う。 準備段階での平常点 50% 演奏会形式試験演奏評価 50%		
失格条件	受講時間が、90分×5回=450分(7時間30分)に満たなかった者、及び試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	課題については事前に相談して決めるので、十分な準備・練習をしたうえで授業に(レッスン)にのぞむこと。		
課題へのフィード バック	試験終了後、個別に講評を渡します。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

3-232

ナンバリング	SO407A06	期間	通年集中
授業科目名	重奏研究B		
英訳科目名	Ensemble (Duo) B		
担当教員名	音楽学科教員		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> △
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	演奏家として不可欠な重奏(デュオ)の分野を 実践を通し学ぶ。 教員とデュオを組む可能性もある。 演奏会で通用するレベルの重奏演奏を目指すことが目的である。		
到達目標	演奏会で通用するレベルの重奏演奏ができる。		
授業計画	学生の準備が出来た時に随時教員が演奏を聴くか、又は共演をし、ステージでの演奏に必要な具体的アドバイスをします。		
評価方法 (合計100%)	演奏会形式(公開)の試験を行う。 準備段階での平常点 50% 演奏会形式試験演奏評価 50%		
失格条件	受講時間が、90分×5回=450分(7時間30分)に満たなかった者、及び試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	課題については事前に相談して決めるので、十分な準備・練習をしたうえで授業に(レッスン)にのぞむこと。		
課題へのフィード バック	試験終了後、個別に講評を渡します。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	SO407A07	期間	通年集中
授業科目名	重奏研究C		
英訳科目名	Ensemble (Duo) C		
担当教員名	音楽学科教員		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> △
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	演奏家として不可欠な重奏(デュオ)の分野を 実践を通し学ぶ。 教員とデュオを組むこともある。 演奏会で通用するレベルの重奏演奏を目指すことが目的である。		
到達目標	演奏会で通用するレベルの重奏演奏ができる。		
授業計画	学生の準備が出来た時に随時教員が演奏を聴くか、又は共演をし、ステージでの演奏に必要な具体的アドバイスをします。		
評価方法 (合計100%)	演奏会形式(公開)の試験を行う。 準備段階での平常点 50% 演奏会形式試験演奏評価 50%		
失格条件	受講時間が、90分×5回=450分(7時間30分)に満たなかった者、及び試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	課題については事前に相談して決めるので、十分な準備・練習をしたうえで授業に(レッスン)にのぞむこと。		
課題へのフィード バック	試験終了後、個別に講評を渡します。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	SO407A08	期間	通年集中
授業科目名	重奏研究D		
英訳科目名	Ensemble (Duo) D		
担当教員名	音楽学科教員		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> △
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	演奏家として不可欠な重奏(デュオ)の分野を 実践を通し学ぶ。 教員とデュオを組むこともある。 演奏会で通用するレベルの重奏演奏を目指すことが目的である。		
到達目標	演奏会で通用するレベルの重奏演奏ができる。		
授業計画	学生の準備が出来た時に随時教員が演奏を聴くか、又は共演をし、ステージでの演奏に必要な具体的アドバイスを スをする。		
評価方法 (合計100%)	演奏会形式(公開)の試験を行う。 準備段階での平常点 50% 演奏会形式試験演奏評価 50%		
失格条件	受講時間が、90分×5回=450分(7時間30分)に満たなかった者、及び試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	課題については事前に相談して決めるので、十分な準備・練習をしたうえで授業に(レッスン)にのぞむこと。		
課題へのフィード バック	試験終了後、個別に講評を渡します。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	SO407A09	期間	前期
授業科目名	オーケストラ A		
英訳科目名	Orchestra A		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> △	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ◎
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	合奏は管弦楽のオーケストラをはじめ、弦楽オーケストラ、ウインド・オーケストラ、及びその他の小編成のアンサンブルの合奏体を有し、学生はいずれかのグループに配属され、指揮の見方や多人数の中での音の響かせ方、ハーモニーの作り方を体得するという基本的な事柄をはじめ、スコアを通しての音楽像全体の把握、指揮者の音楽的要求の理解、全体の調和にいたるまでの合奏に必要な技術を体得する。		
到達目標	オーケストラ授業での分奏、合奏を通じ得たアンサンブル力を、演奏会で発揮出来る。		
授業計画	第1回 オリエンテーション 第2～3回 合奏 指揮者の音楽を感じ取る 第4～5回 細分奏 音程、ハーモニーの調和 第6～7回 分奏 各楽器間のアンサンブル 第8～10回 合奏 各楽器間のアンサンブル 第11回 自主分奏 各自の演奏技能の向上 第12回 鑑賞 CD, DVD等で研究 第13～14回 分奏 アーティキレーションの確認 第15回 合奏 音量、音程、ハーモニー、リズムの調和		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度、表現力、アンサンブル力等を考慮の上、評価する。		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	課題について事前に準備、練習し授業にのぞむ事		
課題へのフィード バック	前期授業終了後、全体に向けてコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	SO407A10	期間	後期
授業科目名	オーケストラB		
英訳科目名	Orchestra B		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> △	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ◎
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	合奏は管弦楽のオーケストラをはじめ、弦楽オーケストラ、ウインド・オーケストラ、及びその他の小編成のアンサンブルの合奏体を有し、学生はいずれかのグループに配属され、指揮の見方や多人数の中での音の響かせ方、ハーモニーの作り方を体得するという基本的な事柄をはじめ、スコアを通しての音楽像全体の把握、指揮者の音楽的要求の理解、全体の調和にいたるまでの合奏に必要な技術を体得する。		
到達目標	オーケストラ授業での分奏、合奏を通じ得たアンサンブル力を、演奏会で発揮出来る。		
授業計画	第16～17回 合奏 表現力の向上 第18回 演奏会 本番での対応力 第19回 反省会 後期オリエンテーション 第20回 合奏 指揮者、コンサートマスターとの、連携 第21～22回 分奏 各楽器間のアンサンブル 第23～24回 細分奏 音程、ハーモニーの調和 第25回 自主分奏 各自の演奏力の向上 第26回 鑑賞 CD, DVD等で研究 第27～29回 合奏 ソリストとの合わせ 第30回 演奏会 本番での対応		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度、表現力、アンサンブル力等を考慮の上、評価する。		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	課題について事前に準備、練習し授業にのぞむ事		
課題へのフィード バック	定期演奏会等の本番終了後の授業で、全体に向けてコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	SO407A11	期間	前期
授業科目名	オーケストラC		
英訳科目名	Orchestra C		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> △	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ◎
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	合奏は管弦楽のオーケストラをはじめ、弦楽オーケストラ、ウインド・オーケストラ、及びその他の小編成のアンサンブルの合奏体を有し、学生はいずれかのグループに配属され、指揮の見方や多人数の中での音の響かせ方、ハーモニーの作り方を体得するという基本的な事柄をはじめ、スコアを通しての音楽像全体の把握、指揮者の音楽的要求の理解、全体の調和にいたるまでの合奏に必要な技術を体得する。		
到達目標	オーケストラ授業での分奏、合奏を通じ得たアンサンブル力を、演奏会で発揮出来る。		
授業計画	第1回 オリエンテーション 第2～3回 合奏 指揮者の音楽を感じ取る 第4～5回 細分奏 音程、ハーモニーの調和 第6～7回 分奏 各楽器間のアンサンブル 第8～10回 合奏 各楽器間のアンサンブル 第11回 自主分奏 各自の演奏技能の向上 第12回 鑑賞 CD, DVD等で研究 第13～14回 分奏 アーティキレーションの確認 第15回 合奏 音量、音程、ハーモニー、リズムの調和		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度、表現力、アンサンブル力等を考慮の上、評価する。		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	課題について事前に準備、練習し授業にのぞむ事		
課題へのフィード バック	前期授業終了後、全体に向けてコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	SO407A12	期間	後期
授業科目名	オーケストラD		
英訳科目名	Orchestra D		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> △	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> ◎
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	合奏は管弦楽のオーケストラをはじめ、弦楽オーケストラ、ウインド・オーケストラ、及びその他の小編成のアンサンブルの合奏体を有し、学生はいずれかのグループに配属され、指揮の見方や多人数の中での音の響かせ方、ハーモニーの作り方を体得するという基本的な事柄をはじめ、スコアを通しての音楽像全体の把握、指揮者の音楽的要求の理解、全体の調和にいたるまでの合奏に必要な技術を体得する。		
到達目標	オーケストラ授業での分奏、合奏を通じ得たアンサンブル力を、演奏会で発揮出来る。		
授業計画	第16～17回 合奏 表現力の向上 第18回 演奏会 本番での対応力 第19回 反省会 後期オリエンテーション 第20回 合奏 指揮者、コンサートマスターとの、連携 第21～22回 分奏 各楽器間のアンサンブル 第23～24回 細分奏 音程、ハーモニーの調和 第25回 自主分奏 各自の演奏力の向上 第26回 鑑賞 CD, DVD等で研究 第27～29回 合奏 ソリストとの合わせ 第30回 演奏会 本番での対応		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度、表現力、アンサンブル力等を考慮の上、評価する。		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	課題について事前に準備、練習し授業にのぞむ事		
課題へのフィード バック	定期演奏会等の本番終了後の授業で、全体に向けてコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	SO408A09	期間	前期
授業科目名	管弦打楽器アンサンブル演習 A		
英訳科目名	Ensemble A		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> △	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ◎
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	木管楽器、金管楽器、弦楽器、打楽器、などのグループに分かれて、アンサンブルでの基礎から実際に演奏するまでの過程を学ぶ。		
到達目標	同種から様々な編成のアンサンブルに対応する能力を身につけることができる。		
授業計画	学期初めに管楽器、弦楽器、打楽器などのグループごとに掲示をする。		
評価方法 (合計100%)	出席状況及び授業に対する積極性などを加味して評価する。		
失格条件	出席日数が2/3に満たないもの。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	受講者は自発的に、課題とする楽曲の録音資料を参考にしながら、作品について学ぶことが望ましい。		
課題へのフィード バック	演奏会終了後、全体に向けてコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	SO408A10	期間	後期
授業科目名	管弦打楽器アンサンブル演習B		
英訳科目名	Ensemble B		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> △	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ◎
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	木管楽器、金管楽器、弦楽器、打楽器、などのグループに分かれて、アンサンブルでの基礎から実際に演奏するまでの過程を学ぶ。		
到達目標	同種から様々な編成のアンサンブルに対応する能力を身につけることができる。		
授業計画	学期初めに管楽器、弦楽器、打楽器などのグループごとに掲示をする。		
評価方法 (合計100%)	出席状況及び授業に対する積極性を加味して評価する。		
失格条件	出席日数が2/3に満たないもの		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	受講者は自発的に、課題とする楽曲の録音資料を参考にしながら、作品について学ぶことが望ましい。		
課題へのフィード バック	演奏会終了後、全体に向けてコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	SO408A11	期間	前期
授業科目名	管弦打楽器アンサンブル演習C		
英訳科目名	Ensemble C		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> △	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ◎
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	木管楽器、金管楽器、弦楽器、打楽器、などのグループに分かれて、アンサンブルでの基礎から実際に演奏するまでの過程を学ぶ。		
到達目標	同種から様々な編成のアンサンブルに対応する能力を身につけることができる。		
授業計画	学期初めに管楽器、弦楽器、打楽器などのグループごとに掲示をする。		
評価方法 (合計100%)	出席状況及び授業に対する積極性などを加味して評価する。		
失格条件	出席日数が2/3に満たないもの。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	受講者は自発的に、課題とする楽曲の録音資料を参考にしながら、作品について学ぶことが望ましい。		
課題へのフィード バック	演奏会終了後、全体に向けてコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

3-242

ナンバリング	SO408A12	期間	後期
授業科目名	管弦打楽器アンサンブル演習D		
英訳科目名	Ensemble D		
担当教員名	管弦打部門		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> △	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ◎
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	木管楽器、金管楽器、弦楽器、打楽器、などのグループに分かれて、アンサンブルでの基礎から実際に演奏するまでの過程を学ぶ。		
到達目標	同種から様々な編成のアンサンブルに対応する能力を身につけることができる。		
授業計画	学期初めに管楽器、弦楽器、打楽器などのグループごとに掲示をする。		
評価方法 (合計100%)	出席状況及び授業に対する積極性などを加味して評価する。		
失格条件	出席日数が2/3に満たないもの		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	受講者は自発的に、課題とする楽曲の録音資料を参考にしながら、作品について学ぶことが望ましい。		
課題へのフィード バック	演奏会終了後、全体に向けてコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	期間	前期
授業科目名	音楽基礎演習 A	
英訳科目名		
担当教員名	石井 尚子	
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2 <技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4 <関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6
授業概要・ポイント	音楽を学ぶものにとって、楽譜を正しく「読む」「書く」ということは必要不可欠なことである。この講義では、これらの事柄がスムーズに行えるように、最も基本的な理論の習得を中心に、様々な時代の作品に触れ、実際の音と結びつけながら幅広い知識を養う。	
到達目標	基本的な理論を習得することにより楽譜を読み取る力を養い、楽曲を総合的に分析できる。	
授業計画	第1回 オリエンテーション/譜表・日本音名 第2回 ドイツ音名/変化記号/音符と休符 第3回 連符/リズムと拍子 第4回 音程(1)単音程 幹音による音程 第5回 音程(2)単音程 幹音による音程の復習/転回音程/複音程 第6回 音程(3)単音程 派生音による音程 第7回 音程(4)単音程 派生音による音程の復習・複音程・異名同音の音程 第8回 音階(1)長音階・調号 第9回 音階(2)自然短音階・調号 第10回 音階(3)和声短音階 第11回 音階(4)旋律短音階 第12回 調(1)近親調 第13回 調(2)調関係 第14回 音階と調の総合的まとめ 第15回 到達度の確認	
評価方法 (合計100%)	・授業への参加態度 20% ・提出物/小テスト 20% ・定期試験 60%	
失格条件	授業を4回以上欠席した者、及び定期試験を受けなかった者。	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	予習 毎授業時の最後に次回授業の予告をするので、教科書に目を通しておく。(予習時間1時間) 復習 教科書の課題及びプリント等を宿題にするので、必ずそれらを実施し理解しておく。(復習時間3時間)	
課題へのフィード バック	・提出物及び小テストは返却時に個別にコメントし、その後全体に解説します。 ・定期試験については、試験終了後、全体に向けてコメントします。	
教科書	楽典問題集	
著者名	赤石敏夫、石井尚子、小西円子、中野佳代子、丹羽あゆみ	
出版社	相愛大学刊	
参考書		
その他	毎回の授業終了後、必ず復習し課題を実施しておくこと	
備考		
科目生への開講	あり	

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	音楽基礎演習B		
英訳科目名			
担当教員名	石井 尚子		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	〔音楽基礎演習A〕で習得した基本的な知識をもとに、引き続き幅広い理論の習得を目指すとともに、色々な視点から楽譜を読み取る力を養い、「楽譜」についてより深く総合的に考察する。		
到達目標	〔音楽基礎演習A〕で習得した知識を、より充実発展させ実際の音楽活動に役立てることができる。		
授業計画	第1回 オリエンテーション／和音の概要 第2回 和音 (1) 三和音の種類 第3回 和音 (2) 七の和音の種類 第4回 和音 (3) 三和音の転回形 第5回 和音 (4) 七の和音の転回形 第6回 和音 (5) 三和音の所属調 第7回 和音 (6) 七の和音の所属調 / コードネーム 第8回 和音のまとめ 第9回 調判定／和音外音 第10回 調判定の実践 第11回 移調 第12回 移調楽器 第13回 記号・その他の事柄 第14回 楽曲分析 第15回 到達度の確認		
評価方法 (合計100%)	・ 授業への参加態度 20% ・ 提出物／小テスト 20% ・ 定期試験 60%		
失格条件	授業を4回以上欠席した者、及び定期試験を受けなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	予習 毎授業時の最後に次回授業の予告をするので教科書に目を通しておく。(予習時間1時間) 復習 教科書の課題、及びプリント等を宿題にするので、必ず、それらを実施し理解しておく。(復習時間3時間)		
課題へのフィード バック	・ 提出物及び小テストは返却時に個別にコメントし、その後全体に解説します。 ・ 定期試験については、試験終了後、全体に向けてコメントします。		
教科書	楽典問題集		
著者名	赤石敏夫、石井尚子、小西円子、中野佳代子、丹羽あゆみ		
出版社	相愛大学刊		
参考書			
その他	毎回の授業終了後、必ず復習し課題を実施しておくこと。		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	合唱		
英訳科目名			
担当教員名	田末 勝志		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー-2	<技能>
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	合唱という科目は歌唱によるアンサンブルであるので、発声法をしっかり理解し表現できるようにしたい。また練習した数曲の演奏法（内容とプログラム作成）も思考し実践して、結果検討したい。		
到達目標	演奏をする為に、どれだけの過程を行っているかを理解できる。また、アンサンブルによる音楽の広がりを実感できる。		
授業計画	<p>第1回 発声の基礎を説明、練習。</p> <p>第2回 作品を使用しユニゾンの練習Ⅰ 音程理解</p> <p>第3回 作品を使用しユニゾンの練習Ⅱ リズム理解</p> <p>第4回 ただしい音程を表現し、アンサンブルⅠ 少人数での表現</p> <p>第5回 ただしい音程を表現し、アンサンブルⅡ 全員での表現</p> <p>第6回 作品の内容、表現方法の理解、実践Ⅰ 背景の理解</p> <p>第7回 作品の内容、表現方法の理解、実践Ⅱ 歌詞の理解</p> <p>第8回 複数の作品を使用し実践Ⅰ 曲の表現</p> <p>第9回 複数の作品を使用し実践Ⅱ 指揮を加えて</p> <p>第10回 複数の作品と別課題曲の自主練習Ⅰ 音程理解</p> <p>第11回 複数の作品と別課題曲の自主練習Ⅱ リズム理解</p> <p>第12回 複数の作品と別課題曲の自主練習Ⅲ 歌詞の理解</p> <p>第13回 複数の作品と別課題曲の自主練習Ⅳ 指揮を加えて</p> <p>第14回 練習曲のプログラムを検討し発表</p> <p>第15回 作品の内容、プログラムについて自主評価</p>		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 70% 発表の内容評価 30%		
失格条件	4回以上欠席した場合。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	楽譜を使用するので、毎回の授業の楽譜を整理準備してください。 正しい音程の予習、予告箇所の予習を欠かさないように。（予習時間90分） 前回の注意点、音程リズムの復習。（復習時間90分）		
課題へのフィード バック	1課題（1曲）練習終了ごとに、注意点を楽譜上で再確認する。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	諸民族の音楽		
英訳科目名	Basics for Ethnic Music		
担当教員名	由比 邦子		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー2	<技能>
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>さまざまな地域・民族における音楽のあり方について論じながら、それぞれの音楽（音現象）を当該文化の担い手および文化外の者の目がどうとらえているのかについて考察する。諸民族の音楽に関する普遍的な研究方法の諸例を紹介しつつ、ある一つの地域そしてそこに居住する民族の歴史的・文化的背景をふまえた音楽慣習の事例として、インドネシアの音楽と上演芸術を取り上げる。本講義を通じて、私たちがどのような音現象を自明の理として「音楽」と認識しているのか、学生諸君に考えてもらいたい。</p>		
到達目標	<p>学生は、場合によってはカルチャーショックともなりうるさまざまな音楽文化の習得を通じて、異文化理解とは何かを考える能力と同時に、文化相対主義的な思考を身につけることができる。</p>		
授業計画	<p>第1回 音・音楽の認識 第2回 音の組織化 第3回 音階と旋法 第4回 リズムの考え方 第5回 リズムの組み合わせ 第6回 音の視覚化の方法 第7回 民族楽器とその分類 第8回 東南アジアの代表的な器楽合奏（インドネシアのガムラン） 第9回 ガムランの音楽構造と独自の時間感覚 第10回 インドネシアの上演芸術 第11回 宗教儀礼と音楽 第12回 職能としての音楽 第13回 部外者の目がもたらす伝統の変容 第14回 世相を反映する音楽 第15回 内容理解の確認</p>		
評価方法 (合計100%)	学期末に実施する試験	70%	
	授業時に不定期に計5回課すミニテスト	30%	
失格条件	<p>次のいずれかに該当すれば失格となる。 (1) 学期末に実施する試験を受験しなかった場合 (2) 授業時に課すミニテスト提出数が3回に満たない場合</p>		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p><予習> 授業ノートを読み返し、次回の授業に備える。（予習時間 1時間） <復習> 授業で取り上げる音楽芸能の映像視聴は、授業内では短時間に限られるので、図書館所蔵資料やネットを使ってさらに映像を確認する。（復習時間 3時間）</p>		
課題へのフィードバック	<p>(1) ミニテストについて 実施した回の次の授業で正解を発表する。また、第14回授業時に総得点を各個人に告知する。 (2) 試験について 最終授業時に実施後、その場で模範解答を提示し、解説を行なう。</p>		
教科書	特に使用しないが、必要に応じてプリントを配布する。		
著者名			
出版社			
参考書	授業時に適宜紹介する。		
その他	特になし。		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	音楽と社会		
英訳科目名	Music and Society		
担当教員名	角家 千恵		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー2	<技能>
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>社会の中で音楽がどのように受容されているかを学びます。</p> <p>その理解に必須である隣接芸術と音楽の関係、テクノロジーと音楽の関係を論じ、歴史における事象を考察します。</p> <p>授業は各人が毎回発表する形式をとります。</p>		
到達目標	音楽以外の事象を知り、広い視野を持つことにより、客観的に「音楽と社会」を把握できる。		
授業計画	<p>第1回 ガイダンス</p> <p>第2回 ロックン・ロール創成期 ブルース、ロックンロールの誕生</p> <p>第3回 1960年代 その1 ブリティッシュインヴェイジョン</p> <p>第4回 1960年代 その2 ウェストコースト、ホワイトブルース、サザンロック</p> <p>第5回 1960年代 その3 フォークロック、ウッドストック</p> <p>第6回 1960～1970年代 ソウル、ブラックミュージック、ファンク</p> <p>第7回 1970年代 その1 ハードロック</p> <p>第8回 1970年代 その2 プログレッシヴ・ロック、グラムロック、パンクロック</p> <p>第9回 1980年代 その1 ニューウェーブ、MTVの開始、ダンスミュージック</p> <p>第10回 1980年代 その2 AOR、フュージョン、クロスオーバー</p> <p>第11回 1980年代 その3 ハードロック、ヘヴィメタル</p> <p>第12回 1990年代以降 ヒップホップ、コンピューターミュージック</p> <p>第13回 日本における音楽の歴史と発展 その1 1950～1970年代</p> <p>第14回 日本における音楽の歴史と発展 その2 1980年以降</p> <p>第15回 総復習</p>		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 100%		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	幅広い知見を持ち、自身の言葉で音楽を語れることが望まれます。そのためには授業時間外での復習、予習が必要です（目安時間：3時間）。		
課題へのフィード バック	授業中に毎回各人が発表後、個別にコメントをします。		
教科書	参考書籍、インターネットのURLなどは授業時間内に指示します。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	コード・プログレッション		
英訳科目名	Chord Progression		
担当教員名	柏木 玲子		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー2	<技能>
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>音楽の基礎である音階と和音をより親しみやすく学び、ハーモニーをコードで表すことを学習する。基本のコード表記から、さらに既存の音楽のコード進行の研究、そして自分自身でコードが付けられるように「使えるコードプログレッション」を目指します。</p> <p>履修者全員電子ピアノを使用して授業を進めていくため、ピアノ、キーボードの経験者、簡単な譜面が読める受講者が望ましい。</p>		
到達目標	<p>基本的なコードが書けるようになる。</p> <p>簡単なメロディーに、コード付けができる。</p> <p>楽器などの演奏ができる人は各自伴奏を付けて演奏することができるようになる。</p> <p>ギター、電子ピアノで各自が選択した曲がメロディーとコードネームで演奏可能となる。</p>		
授業計画	<p>第1回 基礎知識 オリエンテーション</p> <p>第2回 メジャーコードとマイナーコード</p> <p>第3回 コードプログレッションの基礎</p> <p>第4回 アレンジとアドリブ</p> <p>第5回 セブンスコード</p> <p>第6回 コードプログレッション実例①</p> <p>第7回 コードプログレッション実例②</p> <p>第8回 コードプログレッション実例③</p> <p>第9回 コードプログレッション実例④</p> <p>第10回 テンションノートについて</p> <p>第11回 ディミニッシュコードについて</p> <p>第12回 簡単なメロディーにコード付け</p> <p>第13回 自身で課題曲を選択して実践する</p> <p>第14回 可能な場合 作曲をしてコードを付ける</p> <p>第15回 テスト まとめ</p> <p>各学生に合わせて課題を変える場合があります。</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>授業参加態度50%</p> <p>試験50%</p>		
失格条件	<p>出席が2/3に満たない者</p> <p>提出物などの不備</p>		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>鍵盤経験(ピアノ 電子オルガンなど)のある受講者は、和声記号と照らし合わせてコードネームに親しんでください。</p> <p>ギター経験などのある受講者は、より高度な技術を磨くテクニック、アドリブなどを研究することを期待します。</p> <p>コード未経験の受講者は、普段聞いている音楽(歌の譜面など)のメロディーを見て簡単なコードネームを確認する習慣を持ってください。</p> <p>毎回授業の度に復習予習2時間ずつ学修してください。</p>		
課題へのフィードバック	<p>それぞれの学生について個別にアドバイスしてコードネームについて勉強する。</p>		
教科書	<p>授業内で指示する。</p>		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	和声学		
英訳科目名	Harmony		
担当教員名	赤石 敏夫		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能>
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	和音の連結を学ぶ演習。 コードネームで和音を表しその組み合わせを学ぶのがコード・プログレッション。それに対して、その調の度数（ディグリー・ネーム）で捉えるのが和声学。そのことによりその調の中での機能についても理解する。演習は4声体（ソプラノ・アルト・テノール・バス）で行い(4 Voice Harmony)、必要最低限の音での書式について理解できるようにする。		
到達目標	基本位置～転回形、七の和音などを使って和音の連結ができる。		
授業計画	主に「バス課題」で演習する。時には旋律も取り扱う。 第1回 和音の基礎知識の確認。和音の配置「密集」と「開離」 第2回 主要三和音の連結 「配分一致」「共通音の保留」 第3回 II-V、V-VIの連結 第4回 各種の調 (1) 長調、短調 第5回 各種の調 (2) 機能について 第6回 基本位置まとめ小テスト 第7回 まとめ小テストの解説と和声聴音で響きを聴く、基本位置の確認 第8回 第1転回位置 (1) 設定と連結 第9回 第1転回位置 (2) 「連続」「並達」 第10回 第1転回位置まとめテスト 第11回 第2転回位置 (1) 配置と定型 第12回 第2転回位置 (2) 設定、属七の和音 (1) 第13回 属七の和音 (2)、ここまで（「2転」「属七」含む）のまとめ小テスト 第14回 「2転」「属七」小テスト解説及び総まとめ 第15回 期末試験		
評価方法 (合計100%)	開講期間中に試験を行う。 試験50%、授業への参加態度50%。		
失格条件	失格条件 6回（1/3）以上欠席した場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業での説明は必ず理解して帰ること。その後必ずノートを見直し、できれば課題を鍵盤で弾いてみること。 次の授業までに予習1時間、復習3時間程度を取る。		
課題へのフィード バック	授業内において行われる小テストは、授業時間内または次の時間に解説します。		
教科書	市販の教材は特に使わない。必要に応じてプリントを配布する。		
著者名			
出版社			
参考書	和声～理論と実習 I（音楽之友社）		
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	作・編曲法基礎		
英訳科目名	Basic Composition		
担当教員名	吉澤 ゆかり		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー-2	<技能>
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	1回生から積み重ねてきた音楽の知識や経験を総動員して実際に音楽を制作してみます。自分で作ってみることでさまざまなことが見えてきます。この授業を選択するには「音楽基礎演習」「ソルフェージュ」(必修)に加えて「和声学」「コード・プログレッション」を履修していることが望ましい。		
到達目標	和声的に裏付けられた旋律の作曲が出来る。またピアノ曲やピアノと単一楽器の簡単な楽曲が作曲できる。		
授業計画	第1回 授業ガイダンス+作曲“ワークショップ”基礎編 第2回 メロディと和声 (1) 和声付け 和音構成音 和声学ソプラノ課題 第3回 メロディと和声 (2) 和声付け 和音構成音と和音外音 第4回 メロディと和声 (3) 旋律に和音記号またはコードネームを付ける 第5回 メロディの作曲 (1) 旋律の仕組み 動機と楽節、和声の組み合わせ 第6回 メロディの作曲 (2) 大楽節8小節の作曲 第7回 メロディの作曲 (3) 二部形式 楽曲研究 和声付き旋律の作曲 第8回 メロディの作曲 (4) 三部形式 楽曲研究 和声付き旋律の作曲 第9回 メロディの作曲まとめ (和声付き) Cメロ譜 第10回 メロディと伴奏 (1) ピアノ小品の作曲 作例研究 第11回 メロディと伴奏 (2) ピアノ小品の作曲 さまざまな伴奏形 8～16、24小節程度 第12回 ピアノ小品まとめ&発表会 (自作自演が望ましい) 第13回 メロディと伴奏 (3) ピアノと単一楽器による楽曲 作例研究 第14回 メロディと伴奏 (4) ピアノと単一楽器による楽曲 8～16、24小節程度 第15回 ピアノと単一楽器による楽曲発表会		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度40% 作品提出60%		
失格条件	6回以上欠席した場合、作品提出がない場合。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業内で制作するのは難しいので自宅での作業時間を確保すること。毎回の課題に対して次の授業までに3時間程度。また、シラバスの内容をみて次の授業までに文献やインターネットで1時間程度の予習をすること。		
課題へのフィード バック	各時間の課題について、必要に応じてコメントします。作成した課題は提出してもらい、添削し返却・解説します。		
教科書	必要に応じて授業内でプリントなどを配布する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	作・編曲法応用		
英訳科目名	Applied Composition		
担当教員名	吉澤 ゆかり		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー2	<技能>
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>「作・編曲法基礎」を受講してから受けるのが望ましい。 「歌」を作る。またさまざまな編曲について学ぶ。PCでのエディットの授業とも関連し音楽をさまざまな面から研究し制作してみる。</p>		
到達目標	<p>オリジナルの「歌」を作ることができる。 また、さまざまな編曲が出来る。</p>		
授業計画	<p>第1回 授業ガイダンス+作曲“ワークショップ” 応用編 第2回 「歌」の作曲 (1) 簡単な歌曲の研究 さまざまな“うた” 第3回 「歌」の作曲 (2) 歌の作り方 詩の分析 言葉のアクセント・リズム→メロディ・ラインの構想 第4回 「歌」の作曲 (3) 歌のメロディの作曲-1 詩の選定 第5回 「歌」の作曲 (4) 歌のメロディの作曲-2 和声付きの歌 第6回 「歌」の作曲 (5) 歌の作曲 +伴奏の作曲 (ピアノ・ギター他) その1 第7回 「歌」の作曲 (6) 歌の作曲 +伴奏の作曲 (ピアノ・ギター他) その2 第8回 「歌」の作曲 (7) 個別指導と作品提出 第9回 「歌」の作品発表会 第10回 編曲の手順と実際 (1) 「対旋律」「オブリガート」「カノン」など 第11回 編曲の手順と実際 (2) 編曲 (=アレンジ) とは? 作例研究。既存曲の編曲 楽器編成・音楽ジャンル・音楽スタイルなど 第12回 編曲の手順と実際 (3) 編曲作品の構想 第13回 編曲の手順と実際 (4) 作品制作 第14回 編曲の手順と実際 (5) 個別指導、楽譜の仕上げ、作品提出 第15回 作品発表会 楽器編成の大きなものはPCでの音だし可</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>授業への参加態度40% 作品提出60%</p>		
失格条件	6回以上欠席した場合、作品提出がない場合。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>授業内で制作するのは難しいので自宅での作業時間を確保すること。毎回の課題に対して次の授業までに3時間程度。 また、シラバスの内容をみて次の授業までに文献やインターネットで1時間程度の予習をすること。 PCでの楽譜浄書、音だし等工夫すること。</p>		
課題へのフィード バック	<p>各時間に取り組んだ課題について、個別にコメントします。 作成した楽譜を提出してもらい、添削したのち返却・解説します。</p>		
教科書	必要に応じて授業内でプリントなどを配布する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	楽器学		
英訳科目名			
担当教員名	檜垣 智也		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー-2	<技能>
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	<p>本授業ではクラシック音楽で使われる楽器の特徴と音楽ジャンルを扱います。 映像資料を多用し、楽器の特徴、演奏家、作品についての知識をえます。 音源を聞きながら楽譜を読む訓練をします。 楽器の特徴を活かした編曲に挑戦します。</p>		
到達目標	<p>クラシック音楽でよく使われる楽器の音色や奏法、特徴、代表的な作品を知ることができる。 音源を聞きながら、楽譜をおえることができる。 楽器の特徴を活かした編曲について理解することができる。</p>		
授業計画	<p>第1回 ガイダンス 第2回 クラシック音楽の楽器 (1) 木管楽器、金管楽器 第3回 クラシック音楽の楽器 (2) 弦楽器 第4回 クラシック音楽の楽器 (3) 鍵盤楽器、ハープ 第5回 クラシック音楽の楽器 (4) 打楽器 第6回 クラシック音楽の楽器 (5) そのほか 第7回 ピアノ・スコア、室内楽のスコア 第8回 話題提供 第9回 オーケストラのスコア、声楽のスコア 第10回 楽器の演奏方法 第11回 楽器の特徴を活かした編曲 第12回 クラシック音楽の楽器を用いた編曲の指導1 第13回 クラシック音楽の楽器を用いた編曲の指導2 第14回 クラシック音楽の楽器を用いた編曲の指導3 第15回 編曲作品の合評会 授業計画はあくまでも取り上げるトピックに過ぎません。その時々々の旬の話題を織り交ぜて授業展開していきます。</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>小課題 10% 最終課題 90%</p>		
失格条件	6回以上欠席の場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	音楽会に通い「生の音」を体験しておくことが大切です。		
課題へのフィード バック	授業内にアドバイスします。		
教科書	エッセンシャル・ディクショナリー 楽器の音域・音質・奏法		
著者名	トム・ゲルー (著), デイヴ・ブラック (著), 八木澤 教司 (監修), 元井 夏彦 (翻訳)		
出版社	ヤマハミュージックメディア		
参考書	楽器 (編者 ダイアグラムグループ、監修 皆川達夫、出版 マール社、ISBN4-8373-0710-8)		
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	楽曲分析		
英訳科目名			
担当教員名	橋田 光代		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー2	<技能>
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	音楽全般の歴史や成り立ちを踏まえつつ、楽曲を構成する旋律の特徴や各楽器・演奏者の役割などについて理解することを試みる。		
到達目標	「音楽」の時系列的構造を知ることにより、耳で聴こえたものを手早く理解し、かつその内容を説明できる。楽譜や関連する音楽関係資料を読み解き、その文化的背景を理解できる。		
授業計画	第1回 イン트로ダクション：「聴く」ことへの意識 第2回 西洋音楽の歴史：楽譜の成り立ち 第3回 西洋音楽の歴史：和声の確立 第4回 西洋音楽の歴史：「クラシック」の確立 第5回 西洋音楽の歴史：近代 第6回 西洋音楽の歴史：戦後 第7回 テクノロジーと音楽 第8回 劇場、劇伴音楽 第9回 聴覚の仕組みと音楽の認知 第10回 フレージングとアーティキュレーション 第11回 還元（Reduction）ー大局構造の理解 第12回 歌詞と旋律：世代で歌える歌、歌えない歌 第13回 リズムとグルーヴ 第14回 口伝と耳コピ 第15回 まとめ、レポート提出		
評価方法 (合計100%)	1. 積極的な授業への参加 50% 2. 期末レポート 50% 授業を欠席すれば、「積極的な授業への参加」において1回あたり8%を減ずる。		
失格条件	出席回数が2/3に満たない場合（6回以上の欠席）は、失格とします。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	表現する側の視点に立って「この作品はどのように作られたのか」を常に観察する姿勢が求められます。特に時間を決めて予習・復習する必要はありませんが、普段耳にする音楽を「分析的に聴く」ことを常に意識してください。		
課題へのフィードバック	授業中に適宜課題の出ることがあります。期間を決めて、授業内でのフィードバックを行います。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	授業に関する質問や相談などがある場合は、授業終了後に質問するか、メールで質問してください。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	音楽演習ⅡA		
英訳科目名			
担当教員名	山本 英二・中川 亨		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	グループ演習。「ピアノ」「声楽」「ギター」の中から選択しグループでレッスンをを行う。 音楽演習ⅠBから引き続き楽器の演奏法や声楽を学ぶことができる。		
到達目標	楽器又は声楽の演奏が何かしらできる。		
授業計画	<p>個人の経験度および能力を見て個別のカリキュラムを作成する。楽器の演奏技術の指導計画は、受講者の能力によって異なる。従ってここに全15回の内容を明記することはできない。</p> <p>第1回 面談と授業計画の検討 第2～14回 集団個人型グループ演習により、個別指導を含めた演奏法の授業を行う。 第15回 まとめ</p>		
評価方法 (合計100%)	与えられた課題の演奏により評価する。 演奏実技50% 授業への参加態度50%。		
失格条件	出席が授業日数の3分の2に満たない場合。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	楽器の技術習得は練習量と比例する。従って毎日の積み重ねが重要である。 次の授業までに予習・復習として、のべ4時間程度を取ることを。		
課題へのフィード バック	練習してきた課題は個別に評価し、指導する。		
教科書	楽器や声楽によりそれぞれ指定する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	同じ種類の楽器の希望者が4人以下の場合は開講しない。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	期間	後期
授業科目名	音楽演習ⅡB	
英訳科目名		
担当教員名	山本 英二・中川 亨	
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー2 <技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー4 <関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー6
授業概要・ポイント	グループ演習。「ピアノ」「声楽」「ギター」の中から選択しグループでレッスンをを行う。 音楽演習ⅡAから引き続き楽器の演奏法を学ぶことができる。	
到達目標	楽器又は声楽の演奏が何かしらできる。	
授業計画	個人の経験度および能力を見て個別のカリキュラムを作成する。楽器の演奏技術の指導計画は、受講者の能力によって異なる。従ってここに全15回の内容を明記することはできない。 第1回 面談と授業計画の検討 第2～14回 集団個人型グループ演習により、個別指導を含めた演奏法の授業を行う。 第15回 まとめ	
評価方法 (合計100%)	与えられた課題の演奏により評価する。 演奏実技50% 授業への参加態度50%	
失格条件	出席が授業日数の3分の2に満たない場合。	
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	楽器の技術習得は練習量と比例する。従って毎日の積み重ねが重要である。 次の授業までに予習・復習として、のべ4時間程度を取ること。 必修はこれで終わるが、引き続き音楽演習Ⅲも受講することを推奨する。	
課題へのフィード バック	練習してきた課題は個別に評価し、指導する。	
教科書	楽器や声楽によりそれぞれ指定する。	
著者名		
出版社		
参考書		
その他	同じ種類の楽器の希望者が4人以下の場合は開講しない。	
備考		
科目生への開講	なし	

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	音楽演習ⅢA		
英訳科目名	Music Performance ⅢA		
担当教員名	山本 英二・中川 亨		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	グループ演習。「ピアノ」「声楽」「ギター」の中から選択しグループでレッスンをを行う。 音楽演習ⅡBから引き続き楽器の演奏法を学ぶことができる。		
到達目標	楽器又は声楽の演奏が何かしらできる。		
授業計画	個人の経験度および能力を見て個別のカリキュラムを作成する。楽器の演奏技術の指導計画は、受講者の能力によって異なる。従ってここに全15回の内容を明記することはできない。 第1回 面談と授業計画の検討 第2～14回 集団個人型グループ演習により、個別指導を含めた演奏法の授業を行う。 第15回 まとめ		
評価方法 (合計100%)	与えられた課題の演奏により評価する 演奏実技50% 授業への参加態度50%。		
失格条件	出席が授業日数の3分の2に満たない場合。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	楽器の技術習得は練習量と比例する。従って毎日の積み重ねが重要である。 3年目となるので効率の良い練習方法を考えて臨むこと。 次の授業までに予習・復習として、のべ4時間程度を取ること。		
課題へのフィード バック	練習してきた課題は個別に評価し、指導する。		
教科書	楽器や声楽によりそれぞれ指定する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	同じ種類の楽器の希望者が4人以下の場合は開講しない。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	期間	後期
授業科目名	音楽演習ⅢB	
英訳科目名	Music Performance ⅢB	
担当教員名	山本 英二・中川 亨	
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー2 <技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー4 <関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー6
授業概要・ポイント	グループ演習。「ピアノ」「声楽」「ギター」の中から選択しグループでレッスンをを行う。 音楽演習ⅢAから引き続き楽器の演奏法を学ぶことができる。	
到達目標	楽器又は声楽の演奏が何かしらできる。	
授業計画	個人の経験度および能力を見て個別のカリキュラムを作成する。楽器の演奏技術の指導計画は、受講者の能力によって異なる。従ってここに全15回の内容を明記することはできない。 第1回 面談と授業計画の検討 第2～14回 集団個人型グループ演習により、個別指導を含めた演奏法の授業を行う。 第15回 まとめ	
評価方法 (合計100%)	与えられた課題の演奏により評価する。 演奏実技50% 授業への参加態度50%。	
失格条件	出席が授業日数の3分の2に満たない場合。	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	楽器の技術習得は練習量と比例する。従って毎日の積み重ねが重要である。 3年目となるので効率の良い練習方法を考えて臨むこと。 次の授業までに予習・復習として、のべ4時間程度を取ること。	
課題へのフィード バック	練習してきた課題は個別に評価し、指導する。	
教科書	楽器や声楽によりそれぞれ指定する。	
著者名		
出版社		
参考書		
その他	同じ種類の楽器の希望者が4人以下の場合は開講しない。	
備考		
科目生への開講	なし	

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	音楽演習ⅣA		
英訳科目名	Music Performance ⅣA		
担当教員名	山本 英二・中川 亨		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	グループ演習。「ピアノ」「声楽」「ギター」の中から選択しグループでレッスンをを行う。 音楽演習ⅢBから引き続き楽器の演奏法を学ぶことができる。		
到達目標	楽器又は声楽の演奏が何かしらできる。		
授業計画	個人の経験度および能力を見て個別のカリキュラムを作成する。楽器の演奏技術の指導計画は、受講者の能力によって異なる。従ってここに全15回の内容を明記することはできない。 第1回 面談と授業計画の検討 第2～14回 集団個人型グループ演習により、個別指導を含めた演奏法の授業を行う。 第15回 まとめ		
評価方法 (合計100%)	与えられた課題の演奏により評価する。 演奏実技50% 授業への参加態度50%		
失格条件	出席が授業日数の3分の2に満たない場合。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	楽器の技術習得は練習量と比例する。従って毎日の積み重ねが重要である。 3年目となるので効率の良い練習方法を考えて臨むこと。 次の授業までに予習・復習として、のべ4時間程度を取ること。		
課題へのフィード バック	練習してきた課題は個別に評価し、指導する。		
教科書	楽器や声楽によりそれぞれ指定する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	同じ種類の楽器の希望者が4人以下の場合は開講しない。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	音楽演習ⅣB		
英訳科目名	Music Performance ⅣB		
担当教員名	山本 英二・中川 亨		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	グループ演習。「ピアノ」「声楽」「ギター」の中から選択しグループでレッスンをを行う。 音楽演習ⅣAから引き続き楽器の演奏法を学ぶことができる。		
到達目標	楽器又は声楽の演奏が何かしらできる。		
授業計画	個人の経験度および能力を見て個別のカリキュラムを作成する。楽器の演奏技術の指導計画は、受講者の能力によって異なる。従ってここに全15回の内容を明記することはできない。 第1回 面談と授業計画の検討 第2～14回 集団個人型グループ演習により、個別指導を含めた演奏法の授業を行う。 第15回 まとめ		
評価方法 (合計100%)	与えられた課題の演奏により評価する。 演奏実技50% 授業への参加態度50%		
失格条件	出席が授業日数の3分の2に満たない場合。		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	楽器の技術習得は練習量と比例する。従って毎日の積み重ねが重要である。 3年目となるので効率の良い練習方法を考えて臨むこと。 次の授業までに予習・復習として、のべ4時間程度を取ること。		
課題へのフィード バック	練習してきた課題は個別に評価し、指導する。		
教科書	楽器や声楽によりそれぞれ指定する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	同じ種類の楽器の希望者が4人以下の場合は開講しない。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	合奏 I A		
英訳科目名	Ensemble I A		
担当教員名	角家 千恵、平尾 多美納		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>器楽アンサンブル（木管アンサンブル・金管アンサンブル・軽音楽バンド）の編成の中から選択し合奏の授業を行う。</p> <p>最初は演奏能力のバランスを見ながら平易な楽曲で行う。</p> <p>音楽活動における「合奏」についての研究も重要な内容の一つである。</p>		
到達目標	演奏経験を通して合奏、アンサンブルとはどういうものか知ることができる。		
授業計画	<p>履修登録後に楽器編成が決まるのでその編成によって15回分の授業計画を提示する。</p> <p>第1回 ガイダンスと今後の進め方についての確認</p> <p>第2～14回 楽曲毎のパート練習を含め合奏を仕上げていく。</p> <p>また、合奏の様々なスタイルを研究する。</p> <p>第15回 演奏発表会</p>		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度、積極性などで判断する。		
失格条件	出席が授業日数の3分の2に満たない場合。		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	<p>楽器の練習は日々の努力しかない。毎日少しずつ練習すること。</p> <p>次の授業までに予習・復習として、のべ4時間程度を取ること。</p>		
課題へのフィード バック	練習してきた課題、合奏の練習の結果は評価し、指導する。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	<p>希望者が4人以下の場合は開講しない。</p> <p>軽音楽の場合、ヴォーカルを含む場合がある。</p>		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	合奏 I B		
英訳科目名	Ensemble I B		
担当教員名	角家 千恵、平尾 多美納		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>器楽アンサンブル（木管アンサンブル・金管アンサンブル・軽音楽バンド）の編成の中から選択し合奏の授業を行う。</p> <p>「合奏 I A」に引き続き平易な楽曲を中心に学ぶ。 編成によっては他のグループとの合同授業も行う。 また、音楽活動における「合奏」についての研究も I Aに引き続き重要な内容の一つである。</p>		
到達目標	演奏経験を通して合奏、アンサンブルとはどういうものか知ることができる。		
授業計画	<p>履修登録後に楽器編成が決まるのでその編成によって15回分の授業計画を提示する。</p> <p>第1回 ガイダンスと今後の進め方についての確認 第2～14回 楽曲毎のパート練習を含め合奏を仕上げていく。 また、合奏の様々なスタイルを研究する。 第15回 演奏発表会</p>		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度、積極性などで判断する。		
失格条件	出席が授業日数の3分の2に満たない場合。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>楽器の練習は日々の努力しかない。毎日少しずつ練習すること。</p> <p>次の授業までに予習・復習として、のべ4時間程度を取ること。</p>		
課題へのフィード バック	練習してきた課題、合奏の練習の結果は評価し、指導する。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	<p>希望者が4人以下の場合は開講しない。</p> <p>軽音楽の場合、ヴォーカルを含む場合がある。</p>		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	期間	前期
授業科目名	合奏ⅡA	
英訳科目名	EnsembleⅡA	
担当教員名	角家 千恵、平尾 多美納	
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー2 <技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー4 <関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー6
授業概要・ポイント	I A・I Bに引き続き合奏について理解するために行う。 器楽アンサンブル（木管アンサンブル・金管アンサンブル・軽音楽バンド）の編成の中から選択する。 様々な音楽作品の研究も行う。	
到達目標	演奏経験を通して合奏、アンサンブルとはどういうものか知ることができる。	
授業計画	履修登録後に楽器編成が決まるのでその編成によって15回分の授業計画を提示する。 第1回 ガイダンスと今後の進め方についての確認 第2～14回 楽曲毎のパート練習を含め合奏を仕上げていく。 また、合奏の様々なスタイルを研究する。 第15回 演奏発表会	
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度、積極性などで判断する。	
失格条件	出席が授業日数の3分の2に満たない場合。	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	楽器の練習は日々の努力しかない。毎日少しずつ練習すること。 次の授業までに予習・復習として、のべ4時間程度を取ること。	
課題へのフィード バック	練習してきた課題、合奏の練習の結果は評価し、指導する。	
教科書	不使用	
著者名		
出版社		
参考書		
その他	希望者が4人以下の場合は開講しない。 軽音楽の場合、ヴォーカルを含む場合がある。 2年目なので1年生の準備も手伝うこと。	
備考		
科目生への開講	なし	

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	合奏ⅡB		
英訳科目名	EnsembleⅡB		
担当教員名	角家 千恵、平尾 多美納		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>器楽アンサンブル（木管アンサンブル・金管アンサンブル・軽音楽バンド）の編成の中から選択し合奏の授業を行う。</p> <p>徐々に高度な楽曲も取り上げる。</p> <p>編成によっては他のグループとの合同授業も行う。</p> <p>また、様々な合奏についての研究もⅡAに引き続き実施する。</p>		
到達目標	演奏経験を通して合奏、アンサンブルとはどういうものか知ることができる。		
授業計画	<p>履修登録後に楽器編成が決まるのでその編成によって15回分の授業計画を提示する。</p> <p>第1回 ガイダンスと今後の進め方についての確認</p> <p>第2～14回 楽曲毎のパート練習を含め合奏を仕上げていく。</p> <p>また、合奏の様々なスタイルを研究する。</p> <p>第15回 演奏発表会</p>		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度、積極性などで判断する。		
失格条件	出席が授業日数の3分の2に満たない場合。		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	<p>楽器の練習は日々の努力しかない。毎日少しずつ練習すること。</p> <p>また、様々な演奏を聴いたりそのスタイルを研究したりすること。</p> <p>次の授業までに予習・復習として、のべ4時間程度を取ること。</p>		
課題へのフィード バック	練習してきた課題、合奏の練習の結果は評価し、指導する。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	<p>希望者が4人以下の場合は開講しない。</p> <p>軽音楽の場合、ヴォーカルを含む場合がある。</p> <p>2年目なので1年目の学生の面倒をみること。</p>		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	合奏Ⅲ A		
英訳科目名	Ensemble Ⅲ A		
担当教員名	角家 千恵、平尾 多美納		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>器楽アンサンブル（木管アンサンブル・金管アンサンブル・軽音楽バンド）の編成の中から選択し合奏の授業を行う。</p> <p>徐々に高度な楽曲も取り上げる。</p> <p>編成によっては他のグループとの合同授業も行う。</p> <p>また、様々な合奏についての研究もⅡBに引き続き実施する。</p>		
到達目標	演奏経験を通して合奏、アンサンブルとはどういうものか知ることができる。		
授業計画	<p>履修登録後に楽器編成が決まるのでその編成によって15回分の授業計画を提示する。</p> <p>第1回 ガイダンスと今後の進め方についての確認</p> <p>第2～14回 楽曲毎のパート練習を含め合奏を仕上げていく。</p> <p>また、合奏の様々なスタイルを研究する。</p> <p>第15回 演奏発表会</p>		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度、積極性などで判断する。		
失格条件	出席が授業日数の3分の2に満たない場合。		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	<p>楽器の練習は日々の努力しかない。毎日少しずつ練習すること。</p> <p>また、様々な演奏を聴いたりそのスタイルを研究したりすること。</p> <p>次の授業までに予習・復習として、のべ4時間程度を取ること。</p>		
課題へのフィード バック	練習してきた課題、合奏の練習の結果は評価し、指導する。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	<p>希望者が4人以下の場合は開講しない。</p> <p>軽音楽の場合、ヴォーカルを含む場合がある。</p> <p>3年目なので1年目・2年目の学生の面倒をみること。</p>		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	合奏ⅢB		
英訳科目名	Ensemble ⅢB		
担当教員名	角家 千恵、平尾 多美納		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>器楽アンサンブル（木管アンサンブル・金管アンサンブル・軽音楽バンド）の編成の中から選択し合奏の授業を行う。</p> <p>徐々に高度な楽曲も取り上げる。</p> <p>編成によっては他のグループとの合同授業も行う。</p> <p>また、様々な合奏についての研究もⅢAに引き続き実施する。</p>		
到達目標	演奏経験を通して合奏、アンサンブルとはどういうものか知ることができる。		
授業計画	<p>履修登録後に楽器編成が決まるのでその編成によって15回分の授業計画を提示する。</p> <p>第1回 ガイダンスと今後の進め方についての確認</p> <p>第2～14回 楽曲毎のパート練習を含め合奏を仕上げていく。</p> <p>また、合奏の様々なスタイルを研究する。</p> <p>第15回 演奏発表会</p>		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度、積極性などで判断する。		
失格条件	出席が授業日数の3分の2に満たない場合。		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	<p>楽器の練習は日々の努力しかない。毎日少しずつ練習すること。</p> <p>また、様々な演奏を聴いたりそのスタイルを研究したりすること。</p> <p>次の授業までに予習・復習として、のべ4時間程度を取ること。</p>		
課題へのフィード バック	練習してきた課題、合奏の練習の結果は評価し、指導する。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	<p>希望者が4人以下の場合は開講しない。</p> <p>軽音楽の場合、ヴォーカルを含む場合がある。</p> <p>3年目なので1年目・2年目の学生の面倒をみること。</p>		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	合奏ⅣA		
英訳科目名	Ensemble ⅣA		
担当教員名	角家 千恵、平尾 多美納		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>器楽アンサンブル（木管アンサンブル・金管アンサンブル・軽音楽バンド）の編成の中から選択し合奏の授業を行う。</p> <p>徐々に高度な楽曲も取り上げる。</p> <p>編成によっては他のグループとの合同授業も行う。</p> <p>また、様々な合奏についての研究もⅢBに引き続き実施する。</p>		
到達目標	演奏経験を通して合奏、アンサンブルとはどういうものか知ることができる。		
授業計画	<p>履修登録後に楽器編成が決まるのでその編成によって15回分の授業計画を提示する。</p> <p>第1回 ガイダンスと今後の進め方についての確認</p> <p>第2～14回 楽曲毎のパート練習を含め合奏を仕上げていく。</p> <p>また、合奏の様々なスタイルを研究する。</p> <p>第15回 演奏発表会</p>		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度、積極性などで判断する。		
失格条件	出席が授業日数の3分の2に満たない場合。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>楽器の練習は日々の努力しかない。毎日少しずつ練習すること。</p> <p>また、様々な演奏を聴いたりそのスタイルを研究したりすること。</p>		
課題へのフィード バック	練習してきた課題、合奏の練習の結果は評価し、指導する。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	<p>希望者が4人以下の場合は開講しない。</p> <p>軽音楽の場合、ヴォーカルを含む場合がある。</p> <p>4年目なので1年目・2年目・3年目の学生の面倒をみること。</p>		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	合奏ⅣB		
英訳科目名	Ensemble ⅣB		
担当教員名	角家 千恵、平尾 多美納		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>器楽アンサンブル（木管アンサンブル・金管アンサンブル・軽音楽バンド）の編成の中から選択し合奏の授業を行う。</p> <p>徐々に高度な楽曲も取り上げる。</p> <p>編成によっては他のグループとの合同授業も行う。</p> <p>また、様々な合奏についての研究もⅣAに引き続き実施する。</p>		
到達目標	演奏経験を通して合奏、アンサンブルとはどういうものか知ることができる。		
授業計画	<p>履修登録後に楽器編成が決まるのでその編成によって15回分の授業計画を提示する。</p> <p>第1回 ガイダンスと今後の進め方についての確認</p> <p>第2～14回 楽曲毎のパート練習を含め合奏を仕上げていく。</p> <p>また、合奏の様々なスタイルを研究する。</p> <p>第15回 演奏発表会</p>		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度、積極性などで判断する。		
失格条件	出席が授業日数の3分の2に満たない場合。		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	<p>楽器の練習は日々の努力しかない。毎日少しずつ練習すること。</p> <p>また、様々な演奏を聴いたりそのスタイルを研究したりすること。</p> <p>次の授業までに予習・復習として、のべ4時間程度を取ること。</p>		
課題へのフィード バック	練習してきた課題、合奏の練習の結果は評価し、指導する。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	<p>希望者が4人以下の場合は開講しない。</p> <p>軽音楽の場合、ヴォーカルを含む場合がある。</p> <p>4年目なので1年目・2年目・3年目の学生の面倒をみること。</p>		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	期間	後期
授業科目名	歌唱法	
英訳科目名	Basic Singing	
担当教員名	萬田 一樹	
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー-2 <技能>
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー-4 <関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー-6
授業概要・ポイント	言葉を発音することを手掛かりに歌うことに結び付ける実践的な授業。	
到達目標	言葉を発音するイメージが歌唱へと繋がっていくことを個々に実感することができる。	
授業計画	日本語の歌詞の曲を1時間で2曲ずつ学ぶ。 第1～5回 テキストの朗読に重点を置く。 第6～10回 朗読のポイントがどのようにメロディに反映されているかを学ぶ。 第11～15回 朗読の発声が歌の発声にどう繋がるかを学ぶ。	
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 80% 授業に対する取り組み度 20%	
失格条件	出席が3分の2に満たない場合。	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	コンコーネの予習。 毎回、曲を指定。	
課題へのフィード バック	<ul style="list-style-type: none"> ・試験終了後、全体に向けてコメントします。 ・課題提出後、コメントをつけて個別に返却します。 ・課題提出後の授業で、全体に向けコメントします。 ・実技、実習の取り組みに対して個別にコメントします。 	
教科書	楽譜の配布。 コンコーネ配布。	
著者名		
出版社		
参考書		
その他		
備考		
科目生への開講	なし	

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	コンテンツ制作概論A		
英訳科目名	Overview of Design and Creation A		
担当教員名	橋田 光代		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> △	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> △	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	音楽をはじめとするクリエイティブな仕事に必要なコンテンツ制作手法の基礎を学ぶ。パソコンやスマートフォン、あるいは道具を用いて、手頃な手段で気軽に取り組めるコンテンツ制作スキルを身につける。前期は主にグラフィック編集ソフトを用いた制作の基礎を学ぶ。		
到達目標	コンテンツ制作における、音や映像に対する意識を広げられる。 グラフィック編集ソフトによる制作の一連のプロセスを理解できる。		
授業計画	<p>基本的に下記の流れで進めていくが、順番や内容は履修生の理解度・進行状況に応じて柔軟に調整する。</p> <p>第1回 オリエンテーション：Mac基本操作，授業環境整備</p> <p>第2回 グラフィック制作1：ペイント，レイヤー，補正，トリミング</p> <p>第3回 グラフィック制作2：名刺作成</p> <p>第4回 Photoshop 1: 写真加工：カラーリング</p> <p>第5回 Photoshop 2: 香水瓶</p> <p>第6回 Photoshop 3: グラデーション，フィルタ</p> <p>第7回 Photoshop 4: ミニ制作</p> <p>第8回 Illustrator 1: 図形の組み合わせ，ピクトグラム</p> <p>第9回 Illustrator 2：パス，曲線</p> <p>第10回 Illustrator 3: テクスチャ</p> <p>第11回 Illustrator 4: タイポグラフィ</p> <p>第12回 Illustrator 5: レイアウト，ポスターデザイン</p> <p>第13回 応用：ポスターデザイン1</p> <p>第14回 応用：ポスターデザイン2</p> <p>第15回 作品発表会</p>		
評価方法 (合計100%)	<ul style="list-style-type: none"> ・授業への参加態度：50% ・提出課題の内容：50% 授業を欠席すれば、「授業への参加態度」において1回あたり8%を減ずる。		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>コンテンツ制作における様々なアイデアは、授業を聞いているだけで身に付くものではなく、普段から、モノが視覚的・聴覚的にどう映るかを研究して、「見る目」を自分で育てることで浮かぶようになります。インターネット、企画展、書籍などに常に目を通し、あらゆる分野にアンテナを張ってください。</p> <p>以下は授業に関する自習例／週です。時期に応じて組み合わせつつ、参考にしてください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・インターネットの記事を収集・分類する 1時間 ・書店で書籍を探す（試し読みを含む） 2時間 ・音のなる道具で試作品を作る 3時間 ・好きな音楽を耳コピする 4時間 		
課題へのフィードバック	毎週の課題については授業の中で個別にフィードバックします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書	随時紹介するが、グラフィックデザインやソフトウェア関係書籍には日頃から目を通すこと。		
その他	特になし		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	コンテンツ制作概論B		
英訳科目名	Overview of Design and Creation B		
担当教員名	橋田 光代		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	音楽をはじめとするクリエイティブな仕事に必要なコンテンツ制作手法の基礎を学ぶ。パソコンやスマートフォン、あるいは道具を用いて、手頃な手段で気軽に取り組めるコンテンツ制作スキルを身につける。モノづくりにおいて、対象物に対する見方や捉え方の可能性を試行し、制作現場に求められる心構え、意識、取り組み方について学ぶ。		
到達目標	コンテンツ制作における、音や映像に対する意識を広げられる。 スマートフォンやパソコンを用いて、手軽に音楽・映像作品を制作できる。		
授業計画	<p>基本的に下記の流れで進めていくが、順番や内容は履修生の理解度・進行状況に応じて柔軟に調整する。</p> <p>第1回 授業でのコンピュータ利用：基本操作等 第2回 プロジェクト・スケジュール管理 第3回 タッチタイピング 第4回 Webアプリケーション1 第5回 Webアプリケーション2 第6回 スマートフォン：文房具 第7回 スマートフォン：サウンド 第8回 スマートフォン：画像・動画 第9回 スマートフォン：PCや複数アプリでの連携 第10回 SNS、コミュニケーションツール1 第11回 SNS、コミュニケーションツール2 第12回 Webコンテンツ企画 第13回 コンテンツ制作1 第14回 コンテンツ制作2 第15回 コンテンツ完成・公開</p>		
評価方法 (合計100%)	<ul style="list-style-type: none"> ・授業への参加態度： 50% ・提出課題の内容： 50% <p>授業を欠席すれば、「授業への参加態度」において1回あたり8%を減ずる。</p>		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>コンテンツ制作における様々なアイデアは、授業を聞いているだけで身に付くものではなく、普段から、モノが視覚的・聴覚的にどう映るかを研究して、「見る目」を自分で育てることで浮かぶようになります。インターネット、企画展、書籍などに常に目を通し、あらゆる分野にアンテナを張ってください。</p> <p>以下は授業に関する自習例／週です。時期に応じて組み合わせつつ、参考にしてください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・インターネットの記事を収集・分類する 1時間 ・書店で書籍を探す（試し読みを含む） 2時間 ・音のなる道具で試作品を作る 3時間 ・好きな音楽を耳コピする 4時間 		
課題へのフィードバック	授業内で簡単な課題の出ることがあります。適宜、個別または次の授業時にフィードバックを行います。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書	随時紹介するが、グラフィックデザインやソフトウェア関係書籍には日頃から目を通すこと。		
その他	特になし		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	webデザイン		
英訳科目名	Web Design		
担当教員名	甲斐 隆浩		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー2	<技能>
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>今日の社会において、不可欠な情報発信メディアとなったWebサイトについて、その制作における基礎知識を習得します。</p> <p>「Web標準」に基づいたWebブラウザの互換性問題に影響されないWebサイトが求められています。そのポイントを、HTMLとCSSの基礎からの制作実習で確認しながら修得を目指します。</p> <p>制作では表現力が強化されたHTML5を用い、より強力な表現ツールとしてWebを活用し発信力を高めます。</p> <p>※Webクリエイター能力認定試験(HTML5)スタンダード{http://www.sikaku.gr.jp/web/wc/exam/content/}の合格レベルまで学習します。</p>		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・HTMLとCSSの基礎知識を習得し、標準的なWebサイトが制作できる。 ・Webページのソースコードを読み、内容を理解し、適切に追記や修正ができる。 ・情報を適切に整理し、閲覧者にとって理解しやすいWebサイト構造を計画できる。 		
授業計画	<p>第1回 Webサイトの基礎知識</p> <p>第2回 Webページ制作環境の確認【小課題制作実習1】</p> <p>第3回 HTMLの基礎知識</p> <p>第4回 CSSの基礎知識</p> <p>第5回 CSSでのテキスト装飾機能</p> <p>第6回 Web用写真画像素材の加工</p> <p>第7回 Webページの制作【小課題制作実習2】</p> <p>第8回 リンクの設定</p> <p>第9回 画像の表示とテキストの回り込み</p> <p>第10回 ボックス</p> <p>第11回 テーブル</p> <p>第12回 フォーム</p> <p>第13回 ページのレイアウトとナビゲーション</p> <p>第14回 Webサイトの制作【総合課題制作実習】</p> <p>第15回 レスポンシブWebデザイン</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>授業への参加態度 30%</p> <p>提出課題 70% (小課題20%×2本+総合課題30%)</p>		
失格条件	<p>課題の提出率が100%に満たない場合は失格とする。</p> <p>出席回数が全体の3分の2に満たない場合は失格とする。</p> <p>20分以上の遅刻は欠席とみなす。20分未満の遅刻は3回で欠席1回とみなす。</p>		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>授業時間外の実習でWebサイトを完成させます。授業時にしっかりと実習のポイントを確認することが重要であり、これに基づく実習でWebサイト制作を理解します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業で指示するWebサイト制作作業を完了させること。(復習時間 3時間) ・次回の講義テーマについて教科書を読んでおくこと。(予習時間 1時間) 		
課題へのフィードバック	<p>作品提出毎に、全体に向けて良い点・改善点を解説します。</p>		
教科書	<p>いちばんよくわかるHTML5&CSS3デザインきちんと入門{http://www.sbcr.jp/products/4797388541.html}</p>		
著者名	狩野 祐東		
出版社	SBクリエイティブ		
参考書	<p>Webクリエイター能力認定試験 HTML5対応 スタンダード 公式テキスト{http://www.fom.fujitsu.com/goods/webcreator/fpt1417.html}</p> <p>著者名：富士通エフ・オー・エム株式会社</p> <p>出版社：FOM出版</p> <p>ISBN-10: 4865101918 ISBN-13: 978-4865101911</p>		
その他	<p>実習において、パソコンでのドキュメント制作を行います。各自でのデータ保存と管理のため、USBメモリ等の記録メディアが必要です。</p>		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	CGプログラミング		
英訳科目名	Basic Computer Graphic Programming		
担当教員名	甲斐 隆浩		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー2	<技能>
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	今日のメディア表現において不可欠なCGについて、プログラムを加えた発展的な作品制作の手法を修得します。 アニメーション表現の基礎知識を学び、アプリケーションを用いて動作や変化を計画および設定し、アニメーションするコンテンツを制作します。さらに図形の描画と動作について、コード（HTML5+CSS3+JavaScript）で記述する手法を学び、インタラクティブに動作するコンテンツを制作します。		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・Webページに組み込むアニメーションコンテンツが制作できる。 ・HTML5,CSS3,JavaScriptを組み合わせたコンテンツが制作できる。 ・言語に限らないプログラミングの概念を習得する。 		
授業計画	フレームアニメーション 第1回 コマ撮りアニメーション（フレームの計画設定） 第2回 アニメート 仮現運動 中割り（キーフレームの計画設定） 第3回 アニメーションの基礎 1 1 技法（キーフレームの計画設定） キーポイントアニメーション 第4回 キーフレーム法 トウイン（キーフレームの計画設定） 第5回 イーズイン・イーズアウト（動作の計画設定） 第6回 ワーピング（変形の計画設定） コードによる描画（DHTML：HTML5 CSS3 JavaScript） 第7回 コードで基本図形を描く 第8回 CGアニメーションをWebページへ組み込む 第9回 コードでの図形描画応用 コードによるアニメーション 第10回 コードで図形を動かす（変数の活用） 第11回 音に応じたグラフの表示（グラフィックイコライザー表示） インタラクティブバナー 第12回 マルチメディアコンテンツ 第13回 イベント対応 第14回 Webバナー 第15回 総合課題実習		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 30% 提出課題の評価累積 70%		
失格条件	課題の提出率が100%に満たない場合は失格とする。 出席回数が全体の3分の2に満たない場合は失格とする。 20分以上の遅刻は欠席とみなす。20分未満の遅刻は3回で欠席1回とみなす。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業時間外の実習でCG作品を完成させます。授業時にしっかりと実習のポイントを確認することが重要であり、これに基づく実習によってCG作品制作の手法を習得できます。 ・授業で指示する作品を完成させること。（復習時間 4時間）		
課題へのフィード バック	作品提出毎に、全体に向けて良い点・改善点を解説します。		
教科書	web creators特別号 HTML5完全読本—実践テクニックとWebデザインの最新動向{ http://www.mdn.co.jp/di/book/3213302006/ }		
著者名	web creators編集部		
出版社	エムディエヌコーポレーション		
参考書	JavaScriptの新しい教科書 基礎から覚える、深く理解できる。{ http://www.mdn.co.jp/di/book/3213303015/ } (出版社：エムディエヌコーポレーション ISBNコード 978-4-8443-6388-0)		
その他	実習において、パソコンでの作品制作を行います。各自でのデータ保存と管理のため、USBメモリ等の記録メディアが必要です。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	国際文化関係論		
英訳科目名	International Relationship of Culture		
担当教員名	藤岡 巧		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー2	<技能>
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>「創造」のほぼすべては、無から生まれるものではなく、既存の何か、異なるものどうしの「化学反応」によって生まれるものである。(A×B=C)</p> <p>このことは、個別の創造行為だけでなく、「国家、民族単位の文化」というマクロの事象においても、同様の構造を見ることができる。</p> <p>「グローバル」というキーワードが頻繁に使われるようになって久しいが、だが依然国境は存在し、国家、民族ごとに異なる文化圏は存在し続けている。</p> <p>そうした中で、今日現在も毎秒毎秒、文化は混じり合い、あるいはときに拒絶し合いながら、新しい文化が創造され続けている。</p> <p>このようなマクロの「構造」を学び、知ることは、転じて自らの創造行為の「質」を高めることに役立つと考えている。</p>		
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 「構造的に捉える」基礎能力が身についている。 2. 自分で考え、調べ、まとめる、ことの基礎能力が身についている。 3. 多様性を受容し、創造に活かす基礎能力がついている。 		
授業計画	<p>第1回 オリエンテーション／「国際文化関係」を論じる目的とは？（何が得られるのか？）</p> <p>第2回 「文明」と「文化」を定義する</p> <p>第3回 多様性を理解する01 「拒絶」と「受容」のメカニズム</p> <p>第4回 多様性を理解する02 「曖昧」を「具体化」する技術</p> <p>第5回 多様性を理解する03 「多様性」を「創造の糧」とする技術</p> <p>第6回 過去から学べるものとは？01 文化の衝突</p> <p>第7回 過去から学べるものとは？02 文化の融合</p> <p>第8回 過去から学べるものとは？03 多文化主義</p> <p>第9回 異文化との接触と創造 事例研究01</p> <p>第10回 異文化との接触と創造 事例研究02</p> <p>第11回 異文化との接触と創造 事例研究03</p> <p>第12回 公共政策の影響を知る</p> <p>第13回 コンテンツ産業の未来を予測する01 可能性の探究</p> <p>第14回 コンテンツ産業の未来を予測する02 制約条件を見極める</p> <p>第15回 コンテンツ産業の未来を予測する03 企画としてまとめる</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>授業への参加度 30%</p> <p>課題の提出 40%</p> <p>レポート提出 30%</p>		
失格条件	5回以上の欠席		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<ol style="list-style-type: none"> 1. 学んだことを活かしながら「自分で」考える 2. 必要な情報を根気よく調べ、「必ず」入手する 3. 読み手（聞き手）の理解とインパクトを意識してまとめる（＝レポート化） 4. （発表の場合は）事前にプレゼンテーションを練習する <p>上記4点を常に意識して宿題に臨んでください。</p>		
課題へのフィードバック	<p>次回の授業時に、個別または全体にコメントします。 （テーマにもよるので、都度、臨機応変時対応します。）</p>		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	<p>この授業では、原則、毎回、簡単な宿題（短いレポート作成等）が出ます。 学んだことを素材に、「自分で考え、調べ、まとめる」ことを求めます。</p>		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	音楽とライブラリ構築		
英訳科目名	Music and Library Construction		
担当教員名	谷村 要		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> -
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>本講義の目的は、近年のデジタルコンテンツをめぐるアーカイブ化の動きの高まりの中での音楽産業ならびに音楽・映像コンテンツのあり方について考えるものである。</p> <p>従来、ある情報ならびにその媒体を記録・保存・管理する「ライブラリー」という考え方は、「図書館」や「美術館」、「博物館」に代表されるように国家的な政策やプロジェクトに基づくかたちで発展してきた。しかし、デジタル技術の大衆化とインターネット空間の日常化により、現在「ライブラリー」もしくは「アーカイブ」という言葉の定義は「iTunes」などのデジタルコンテンツの配信ビジネスにまでその範囲は広がっている。また他方では、「YouTube」や「ニコニコ動画」といった送り手／受け手の境界が曖昧なネット空間において生み出される様々なコンテンツの登場により、「ライブラリー」や「アーカイブ」の意味そのものまで再度問い直される時代にきている。</p> <p>本講義ではこうした近年の音楽産業において進行しているネット空間を通じたコンテンツのライブラリー化・アーカイブ化について、旧来のアナログメディアのテクノロジーとの比較を踏まえながらその産業的特徴を考えていく。</p>		
到達目標	<p>本講義の到達目標は大きく次の二点である。</p> <p>(1) 現在の音楽・映像コンテンツ生産の特徴とそのビジネスモデルについて、旧来のアナログな音楽用記録媒体の保存・蓄積・管理の考え方（思想）との違いを意識しつつ、現在の「デジタル・アーカイブ」という視点からそれらを説明できる。</p> <p>(2) デジタルライブラリー・アーカイブがどのようなネット技術特有の情報管理の思想に基づいて設計・構築されているのかを理解したうえで、現在のデジタル音楽コンテンツが抱える産業的課題について独自の意見を提起できる。</p> <p>その目標の到達のため、アクティブ・ラーニング的な授業が展開されるが、それを了解の上で授業に臨んでもらいたい。</p>		
授業計画	<p>第1回 イントロダクション…音楽にとってのライブラリー、アーカイブとは？</p> <p>第2回 デジタルコンテンツとしての映像・音楽</p> <p>第3回 フレームワーク…マクルーハンのメディア論</p> <p>第4回 音楽用記録媒体の歴史（1）…近代社会と録音技術の社会史</p> <p>第5回 音楽用記録媒体の歴史（2）…大衆消費社会の到来と記録媒体の変容</p> <p>第6回 アナログメディアの思想（1）…「複製技術」をめぐるT.アドルノの見解</p> <p>第7回 アナログメディアの思想（2）…「複製技術」をめぐるW.ベンヤミンの見解</p> <p>第8回 デジタルメディアと社会の変容…「オリジナル無きコピー」の著作権と倫理</p> <p>第9回 「ライブラリーサイト」のビジネスモデル（1）…「お布施の論理」</p> <p>第10回 「ライブラリーサイト」のビジネスモデル（2）…フリーミアムとその課題</p> <p>第11回 n次創作文化の意義と課題（1）…MAD動画、初音ミク再考</p> <p>第12回 n次創作文化の意義と課題（2）…KADOKAWAの戦略とその落とし穴</p> <p>第13回 ネットワーク・ミュージッキング…「所有」から「参照」へ移行する聴取</p> <p>第14回 ユビキタス化／レイヤー化するセカイの「ライブラリー」</p> <p>第15回 まとめ～メディア・コンバージェンス時代の「ライブラリー」</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>講義期間中に提出する2回の課題レポート（期末準備レポートと期末レポートの計2点で80%）と毎講義の最後に課すコメントシートを通じた授業への参加態度（20%）で評価する。</p> <p>コメントシートに関しては単なる感想を述べるのではなく、各講義の内容を適切に踏まえて独自の意見を提起しているものを高く評価する。</p>		
失格条件	欠席が5回以上になった場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>本講義の課題レポートならびに毎回のコメントシートを充実させるためにも、授業外で実際に他の機関のデジタルライブラリー、アーカイブ、ネット配信サイトに積極的に接することを通じて講義内容の理解を深めていくことが重要である。ただし、その場合にも各自が法令を順守し、自己および他者のプライバシーや著作権には自己の責任で留意しなければならない。また、必要に応じて、予習課題を要請することがあるので、留意すること。</p>		
課題へのフィード バック	<p>期末準備レポートに関しては、授業中にコメントし、適宜修正を指示することがある。</p> <p>期末レポートに関しては、メール等で修正を指示することがある。</p>		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書	各講義において適宜紹介する。		
その他	本講義の後半では、常に現状の「音楽とアーカイブ」に関して疑問を投げかけながら、今後のデジタルコンテンツ（音楽）ビジネスについて受講者が考えることを志向する。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	音楽出版と広告メディア論		
英訳科目名	Publishing and Advertizement of Musical Media		
担当教員名	川崎 弘二		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	現在のわたしたちの生活は、あらゆる局面でテクノロジーが介入し、また、人々のさまざまなレベルのコミュニケーションにおいてもメディアの存在が必須となっています。音楽も例外ではなく、楽譜の出版、CDの流通、インターネットによる音楽配信などもそれ自体がメディアであり、そして、ロックフェスやコンサートなどもメディア・イベントとして捉えることが可能でしょう。本科目では音楽とメディアの関わりについて、その歴史と現在についての知識を高めることを目的としています。また、多彩なメディアを介した、印刷物の出版、音楽流通、イベント企画、広告などについての実践について学びます。		
到達目標	音楽とメディアの関係について自分の言葉で説明できる。メディアを介した情報発信ができる。		
授業計画	第1回 メディアとは何か? 「音楽」の側面を中心に 第2回 メディアと音楽文化 ①楽譜というメディア 第3回 メディアと音楽文化 ②音楽著作権と音楽の商業化 第4回 メディアと音楽文化 ③音楽の芸術化、音楽のメディア化 第5回 メディアと音楽文化 ④音楽産業のグローバル化 第6回 メディアと音楽文化 ⑤アコースティック録音とメディア 第7回 メディアと音楽文化 ⑥電気録音とメディア 第8回 メディアと音楽文化 ⑦デジタル録音とメディア 第9回 音楽メディアとテクノロジーの歴史 ①アーリー・インストゥルメント 第10回 音楽メディアとテクノロジーの歴史 ②映画のサウンドトラック 第11回 音楽メディアとテクノロジーの歴史 ③ラジオ放送というマスメディア 第12回 音楽メディアとテクノロジーの歴史 ④ミュージック・コンクレート 第13回 音楽メディアとテクノロジーの歴史 ⑤電子音楽、コンピュータ、インターネット 第14回 実践としてのメディア ①インタビューの方法、書籍出版のプロセス、CDリリースの手段 第15回 実践としてのメディア ②演奏会・展覧会の企画、コマーシャルの技術 講義期間中に1回、美術館や演奏会など学外での研修を行う場合があります。		
評価方法 (合計100%)	レポート 50% 授業への参加態度 50%		
失格条件	レポートを提出しなかった者		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	・講義で紹介する文献や資料について、目を通しておくようにしてください。(予習時間 1時間) ・授業で紹介した文献などを读んだうえで、授業内容をまとめておくようにしてください。(復習時間 3時間)		
課題へのフィード バック	・毎回の講義でコメントカードを提出していただき、次回の講義で回答します。 ・課題提出後の講義で、全体に向けてコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書	講義中に紹介します。		
その他	特になし。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	ゲーム・ミュージック文化論		
英訳科目名			
担当教員名	尾鼻 崇		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー2	<技能>
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	20世紀末に誕生した新しい音楽文化であるゲーム・ミュージックの歴史と内容を概観する。本講義では、テレビゲームの技術的側面と、テレビゲームのメディア的特性であるインタラクティビティ、そして当時の文化的背景を踏まえつつ、ゲーム・ミュージックとはどのようなものか、また、我々はゲーム・ミュージックをどのように受容しているのかを、通史的解説と主要作品の視聴を交えて考察したい。なお、受講人数次第で参加型（ディスカッション）を取り入れる。		
到達目標	(1)ゲーム・ミュージックにおける音楽や音に関する基礎知識を取得できる (2)ゲーム・ミュージックというジャンルの固有性についての理解ができる (3)テクノロジーの発展とメディア表現の変容について説明ができる		
授業計画	第1回 ゲーム・ミュージックの誕生 第2回 テクノロジーの進歩とゲーム・ミュージック①—ファミコン以前 第3回 テクノロジーの進歩とゲーム・ミュージック②—ファミコン 第4回 テクノロジーの進歩とゲーム・ミュージック③—スーパーファミコン 第5回 テクノロジーの進歩とゲーム・ミュージック④—プレイステーション 第6回 テクノロジーの進歩とゲーム・ミュージック⑤—現在 第7回 インタラクティビティとゲーム・ミュージック 第8回 ゲーム・ミュージックと物語①—『ドラゴンクエスト』の音楽分析 第9回 ゲーム・ミュージックと物語②—『ファイナルファンタジー』の音楽分析 第10回 ゲーム・ミュージックの聴取体験 第11回 「オタク文化」としてのゲーム・ミュージック 第12回 ゲーム・ミュージックの産業分析 第13回 ゲーム・ミュージックのマルチメディア展開 第14回 ゲーム・ミュージックの制作現場 第15回 ゲーム・ミュージックの未来形		
評価方法 (合計100%)	毎回の講義内レポート (50%) 学期末レポート (50%) 上記から、達成目標で挙げた点に従って評価する。		
失格条件	出席回数が全体の三分の二に満たない場合、失格とする。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	毎回講義ごとに授業内容に関するインタラクティブシートを配布するので、その内容に沿って、復習および予習を行うこと。		
課題へのフィード バック	フィードバックは添削や講評によって行う。		
教科書	特に指定しない。		
著者名			
出版社			
参考書	尾鼻崇 (2016) 『映画音楽からゲームオーディオへ：映像音響研究の地平』 晃洋書房		
その他	可能な限り視聴覚資料を用いて講義を進行する。 また受講生の関心に応じてシラバスを変更する可能性もある。 必要に応じてゲスト講師を招聘する。		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	映像と音楽と放送		
英訳科目名	Broadcasting of Video and Music		
担当教員名	畑 祥雄、畑 由美子		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>「音楽が表現する映画の心理描写」 ～映画は音楽と合わせ総合芸術となる～</p> <p>音楽は映像や放送に不可欠なものです。映像教育の中では音楽は本格的に教えていない現実があります。また、音楽教育の中でも映画や放送からネット時代への映像表現を教える機会は少ない。しかし、現実には制作系のプロダクション現場ではどんどんと音楽と映像系の制作の統融合が進んでいます。これからは、コンピューターで音楽制作と映像制作の両方ができる才能が求められ、基本知識として音楽と映画の歴史的な関係を知ることが大切です。</p> <p>優れた映画監督はどのように映画音楽を誰に依頼してきたのか、どのような映画がどのような音楽を選んだのか、その理由や逸話などを紐解いていくと、そこからは音楽と映像界をつなぐ新しいプロデュースの道が見えます。同時に、現在の映像制作の現場やネット時代の優れた映像と音楽の作品を視聴し、グループディスカッションを深め、各自の研究テーマを決め、音楽～映像の観点から小論文を書きます。音楽が社会の中でどのように活用されているのかを考え、音楽と映像や放送のメディア産業が近未来どのように発展していくのか、各学生が自らの音楽映像論を持てることをめざします。</p>		
到達目標	音楽が社会の中でいかに有用か、その成功事例を学び、音楽リードによる映像などのプロデュース技法を修得することができる。		
授業計画	<p>第1回 オリエンテーション、カリキュラム説明、学生自己紹介、先生自己紹介、個別面談等。</p> <p>第2回 「ファンタジア」 制作：ディズニー、音楽：エルガー、ガーシュイン他、1940年 & 2000年、アメリカ。</p> <p>第3回 「英国王のスピーチ」 監督：トム・フーパー、音楽：アレクサンドル・デスプラ、ベートーベン他、イギリス。</p> <p>第4回 「ゴジラ」 監督：本多 猪四郎、音楽：伊福部 昭、1954年、日本。</p> <p>第5回 「コーラス」 監督：クリストフ・バラティエ、音楽：ブリュノ・クーレ他、2004年、フランス。</p> <p>第6回 「2001年宇宙の旅」 監督：スタンリー・キューブリック、音楽：リチャード・シュトラウス他、1968年、アメリカ。</p> <p>第7回 「この世界の片隅で」 監督：片淵 須直、音楽：コトリング、2016年、日本。</p> <p>第8回 「クレイマー、クレイマー」 監督：ロバート・ベントン、音楽：ヴィヴァルディ、パーセル他、1979年、アメリカ。</p> <p>第9回 「タイタニック」 監督：ジェームズ・キャメロン、音楽：ジェームズ・ホーマー、1997年、アメリカ。</p> <p>第10回 「ダンケルク」 監督：クリストファー・ノーラン、音楽：ハンス・ジマー、2017年、イギリス、アメリカ、フランス、オランダ。</p> <p>第11回 「マイノリティ・レポート」 監督：スピルバーグ、音楽：ジョン・ウィリアムズ他、2002年、アメリカ。</p> <p>第12回 「ラストエンペラー」 監督：ベルナルド・ベルトルッチ、音楽：坂本龍一、1987年、イタリア・中国・イギリス。</p> <p>第13回 「戦場のピアニスト」 監督：ロマン・ポランスキー、音楽：ショパン、バッハ、ベートーベン他、2002年、フランス。</p> <p>第14回 「乱」 監督：黒澤 明、音楽：武満 徹 他、1985年、日本。</p> <p>第15回 「スピーチからレポートへの発表会」</p>		
評価方法 (合計100%)	レポートの提出30% 授業後のコメント20% 発表スピーチ20% 授業への参加態度30%		
失格条件	レポートの未提出、4回以上の欠席。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	音楽系大学で学ぶマネージメントの一環として、音楽の社会活用の眼差しを養うことをめざします。		
課題へのフィード バック	1、講義中にコメントする。 2、課題へのアドバイスをメールで対応する。 3、課題を添削して学生に返却する。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書	参考書、映画、DVDなどは授業の進展に合わせてその都度指定。		
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	集中
授業科目名	マンガ・アニメ音楽文化論		
英訳科目名			
担当教員名	江崎 慎平		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ◎	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	この授業では商業アニメーションがどう制作されてゆくか、作り手がどのような問題意識をもっているか、といった内容を入力に、多種多様な世界のアニメーション表現について触れる。その表現の豊かさ、可能性を考察することで、日本の「アニメ」がジャンルに過ぎないことが見えてくるはずだ。 又、実写等、映像作品一般についても取り上げる。中でも、特に音楽と映像との関係について考える。たくさんの映像作品を鑑賞することになるが、積極的・能動的思考をしてもらいたい。		
到達目標	この授業では、映像に対する豊かな視野を獲得することをめざし、次の項目を達成目標とする。 ①商業アニメーションの制作についての工程や考え方の知識を身につけることができる。 ②高畑勲作品の特徴について、基本的な知識を得ることができる。 ③造詣を深め、ジャンルへの可能性を考えることができる。 ④特に音楽と映像の関係について考え、両者がどのような効果を持っているかという知識を身につけることができる。		
授業計画	<p>第1回 はじめに。授業ガイダンス。 ・アニメーションを演出する、とはどういうことなのか。</p> <p>第2回 高畑勲研究 ・アニメーション作品における音の力の実際。 ・主観的映像と客観的映像。その音楽について。</p> <p>第3回 多彩なアニメーション表現 ・各国のアニメーションと日本のアニメーションの違い</p> <p>第4回 音楽が先行する映像、「ミュージッククリップ」というジャンルから ・ミシェル・ゴンドリー ・アニメーションのミュージッククリップ</p> <p>第5回 ドキュメンタリー研究 ・原一男（知らないことを知る作品） ・森達也（知っていることに新たな視点を与える作品）</p> <p>第6回 実写作品研究「息子の部屋」 ・映画において、「音や音楽の処理が優れている」とはどういうことか。</p>		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度50% レポート提出50%		
失格条件	出席時数が開講時数の3分の2に達しない場合。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	アニメーション、並びに映画等映像作品に興味がある生徒が望ましい。		
課題へのフィード バック	毎時のレスポンスシートについては、必要に応じて個別もしくは全体にコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考	アニメーション監督としての実務経験をもとに、この授業を進めます。		
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	コミュニケーションと交渉術		
英訳科目名			
担当教員名	神殿 織江		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ◎
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>コミュニケーションは2人以上関わる場面では必ず必要となる。コミュニケーションをいかにとるかで、良好な人間関係を築くことができるだけでなく、ビジネスの世界でも成果に結びつく。企業において新卒者の採用時に最も重視する力として「コミュニケーション力」がトップに挙げられている。</p> <p>本講は、コミュニケーションの基本を学び、社会で求められているコミュニケーション力とは何かを学ぶ。グループディスカッション、プレゼンテーションを繰り返し、情報収集から論理的思考、発信力を高め、交渉力につなげる。人前で発表するのが苦手な学生も得意な学生も自己向上を目指す。</p>		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションの基本 : 相手の立場を考えながらバーバル・ノンバーバルを意識したコミュニケーションを図ることができる。 ・実践力 : コミュニケーション能力を社会で求められるレベルにまで引き上げるには、学習したことを毎日の生活で意識して実践することが重要であると理解できる。 ・交渉力 : 情報の収集・蓄積と社会の流れを理解することが、一層質の高いコミュニケーションに繋がり、win-winの交渉が意識できる。 ・発表力 : 自分の考えを整理し、論理的に述べることができる。 <p>これらを実践していくことが、大学生活において人との交流を深め、豊かな大学生活に繋がることを理解できる。</p>		
授業計画	<p>第1回 オリエンテーション コミュニケーションの学びについて理解する 第2回 コミュニケーションとは ささまざまな場面で求められるコミュニケーション 第3回 コミュニケーションの基本 第4回 分かりやすく伝える 相手の立場に立つ、効果的に伝える 第5回 立場の違う人と話す 求められるマナー 第6回 意見を主張する 要求と提案 win-win 第7回 頼む、断る 第8回 意見を集約する 第9回 交渉ゲーム 第10回 グループディスカッション 第11回 ディベートに挑戦 (情報の重要性) 第12回 グループでプレゼンテーション (テーマ設定) 第13回 グループでプレゼンテーション (準備・作成) 第14回 グループでプレゼンテーション (発表) 第15回 振り返り</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>授業への参加態度 50% レポート提出 20%(提出課題は、授業中に提示) グループプレゼンテーション 30%</p>		
失格条件	<p>次のいずれかに該当する場合失格となる。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 出席回数が3分の2以上満たない場合 (授業開始時間以降の入室は遅刻とし、遅刻3回で欠席1回とする。30分以上の遅刻は欠席とする) 2. 授業中に指示した課題を提出しなかった場合 		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>授業で習ったことを毎日の生活で意識して実践していくこと</p>		
課題へのフィードバック	<p>グループ参画度、発言は、良かった点や課題があればその都度フィードバックする。 特に優秀なワークや提出課題に関しては、授業時に紹介する。</p>		
教科書	各授業時にプリントを配布		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	講義予定は、受講生の人数、及び、習得状況を見ながら柔軟に進めたい。積極的な取組みを期待している。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	自己の探求		
英訳科目名			
担当教員名	神殿 織江		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ◎	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>自分のキャリアをつくっていく上で、大学生からキャリア概念を形成する取り組みは決定的に重要である。責任ある仕事を継続的に体験することがない学生には、自らの判断と創造が要求されるリアルな社会をイメージしづらい。目の前の非常に狭い世界で物事をとらえ、体験的な知識も積み上げにくい。自分の広く大きな可能性に思い至る機会も見逃しがちである。この講義では、そうした課題に学生自らが気づき、これからの可能性を広げるエネルギーを持てる内容にしたい。</p> <p>大学卒業を控えた選職活動に絶大な威力を発揮するのは「大学でどんな行動を起こし、何を掴んだのか」ということを堂々と自分の言葉で語れることである。そこに至る基本的な「考え方」と「知識」を学生のうちに学ぶことには大きな意味がある。自分のキャリアをつくっていく上で、何故、そうした「考え方」や「知識」が必要であり、これから皆さんが自分でつくる学生生活を自分の言葉で語ることが重要なのかを体験的・理論的に伝えたい。</p>		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の学生生活を自己責任でつくっていく大切さを知ることが「キャリア形成」の第一歩であることを学び、実践できる。 ・キャリア形成の基本となる「考え方」を習得し、日常生活で実践的に活用できる。 		
授業計画	<p>第1回 オリエンテーション いろいろな考え方を知る</p> <p>第2回 自己紹介の意味を考えよう</p> <p>第3回 何のために大学にきたのか考えよう(目的)</p> <p>第4回 大学生活がこうなればいいな (目標)</p> <p>第5回 コミュニケーションとは</p> <p>第6回 自分を表現しよう</p> <p>第7回 協調性について考えよう</p> <p>第8回好きなことから世の中に関わろう</p> <p>第9回 失敗の意味</p> <p>第10回 キャリアマインドをもとう</p> <p>第11回 ディスカッションの大切さを学ぼう</p> <p>第12回 勉強・仕事の土台を考える</p> <p>第13回 プレゼンテーションにチャレンジ</p> <p>第14回 Willから始まる大学生活</p> <p>第15回 発表、まとめ</p> <p>習得状況を見ながら柔軟に進める。</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>授業への参加態度50%、指示されたワークシート提出50%(提出課題は、授業中に提示)</p> <p>社会で必要とされる「あたりまえのこと」をしっかりと身につける為に、遅刻・早退・課題忘れは減点対象。</p>		
失格条件	<p>次のいずれかに該当する場合失格となる。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 出席回数が3分の2以上満たない場合 (授業開始時間以降の入室は遅刻とし、遅刻3回で欠席1回とする。30分以上の遅刻は欠席とする) 2. 授業中に指示した課題を提出しなかった場合 		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>授業で習ったことを毎日の生活で意識して実践していくこと</p>		
課題へのフィード バック	<p>グループ参画度、発言は、良かった点や課題があればその都度フィードバックする。 特に優秀なワークや提出課題に関しては、授業時に紹介する。</p>		
教科書	新自分デザイン・ブックI		
著者名	東田晋三		
出版社	株式会社ドリームシップI		
参考書	授業中に紹介		
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	プレゼンテーション		
英訳科目名			
担当教員名	甲斐 隆浩		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ◎
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>自分の提案を相手に受け入れて貰えるプレゼンテーションを、効率的に行う手法を学びます。ターゲットの抱える課題のヒアリング方法から、課題解決の提案を解りやすく伝えるプレゼンテーションの構成方法までを、実習を踏まえて修得を目指します。</p> <p>その為に、インターネットを活用した情報収集、画像編集ソフトでのビジュアル素材の加工、PowerPointでのスライドショーの制作、配布資料の制作について実習します。また、情報の整理手法、レイアウトとデザインの基礎手法、図解手法などの基礎知識と、プレゼンテーションの運営について学習します。</p>		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の提案を、より良く相手に受け入れてもらえるプレゼンテーションができる。 ・提案内容に適したプレゼンテーションの、企画・設計と評価ができる。 ・パソコン・ソフト・インターネット等を活用し、効率的に情報を収集・加工・編集し、相手を納得させるコンテンツが制作できる。 		
授業計画	<p>第1回 <準備>プレゼンの目的 問題解決 降ってくるプレゼン</p> <p>第2回 スライド制作実習 【基礎技能の評価】</p> <p>第3回 <準備>自分発信プレゼン Win-Winプレゼン</p> <p>第4回 <準備>ブラッシュアップ</p> <p>第5回 <シナリオ>課題解決シート作成 (課題と未来の対応)</p> <p>第6回 <シナリオ>起承転結シート作成 (ストーリーの組み立て)</p> <p>第7回 <スライド>素材の収集 取材とネット活用</p> <p>第8回 <スライド>論理図解</p> <p>第9回 <スライド>素材の収集 取材とネット活用</p> <p>第10回 プレゼン実践 【達成度の評価】</p> <p>第11回 <練習>つかみ ジェスチャー 質疑応答準備</p> <p>第12回 <練習>リハーサル 表情 アガリ対策</p> <p>第13回 <本番>コンディションの確認 運営テクニック</p> <p>第14回 プレゼン実践 【達成度の評価】</p> <p>第15回 <フォロー>担当者を自分のファンにする</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>授業への参加態度 30%</p> <p>提出課題 40%</p> <p>プレゼンテーション 30%</p>		
失格条件	<p>課題の提出率が100%に満たない場合は失格とする。</p> <p>出席回数が全体の3分の2に満たない場合は失格とする。</p> <p>20分以上の遅刻は欠席とみなす。20分以内の遅刻は3回で欠席1回とみなす。</p>		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>授業時間外の実習でプレゼンテーションを完成させます。授業時にしっかりと実習のポイントを確認することが重要であり、これに基づく実習によってプレゼン技能がマスターできます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業で指示するプレゼンテーション制作作業を完了させること。(復習時間 3時間) ・次回の講義テーマについて教科書を読んでおくこと。(予習時間 1時間) 		
課題へのフィードバック	<p>受講生をターゲットとしてプレゼンテーションを行い、その良い点・改善点を、その時点で解説します。</p>		
教科書	改訂版 小室淑恵の即効プレゼン術{ http://hon.gakken.jp/book/1340614400 }		
著者名	小室淑恵		
出版社	学研パブリッシング		
参考書	<p>パワポで極める常勝プレゼン{http://asciimw.jp/search/mode/item/cd/A1118490} (アスキー・メディアワークス)</p> <p>Microsoft Office Specialist Microsoft PowerPoint 2010 対策テキスト& 問題集 {http://www.fom.fujitsu.com/goods/officespecialist/fpt1104.html}(FOM出版)</p>		
その他	<p>実習において、パソコンでのドキュメント制作を行います。各自でのデータ保存と管理のため、USBメモリ等の記録メディアが必要です。</p>		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	期間	前期
授業科目名	インターンシップ実習	
英訳科目名		
担当教員名	橋田 光代、志村 聖子	
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー-2 <技能> ー
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー-4 <関心・意欲・態度> △
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ◎	ディプロマ・ポリシー-6
授業概要・ポイント	企業や団体などにおいて、就業体験を行う事により、実社会の厳しさを学び、社会人としての心構えを身につける。	
到達目標	1. インターンシップを通して、実社会の現状を把握することができる 2. インターンシップ終了後、自らの経験をまとめ、報告書としてまとめることができる	
授業計画	第1回 オリエンテーション 第2回 インターンシップ先の検討・選定 第3回 インターンシップ申込 第4回 インターンシップ採用選考・結果通知 第5回 事前準備 第6～13回 現場実習 第14回 報告書作成 第15回 報告書作成・提出 ※初回のオリエンテーション以外は、個別対応とする。	
評価方法 (合計100%)	インターンシップ実施状況（企業団体評価を含む）60% インターンシップ報告書提出 40%	
失格条件	インターンシップに行かなかった場合、インターンシップ報告書未提出の場合は失格とする	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	新聞を1面だけでも良いので毎日読み、時事トピックスについて話ができるようにしておくこと。 実施期間中は社会人と同じ時間管理能力が必要になります。日頃から自分の生活ペースや習慣には気を配り、体調管理につとめること。	
課題へのフィードバック	適宜、進捗状況を報告してもらいます。フィードバックは個別に行います。	
教科書	なし	
著者名		
出版社		
参考書		
その他	可能な限り、2週間程度のインターンシップに行くこと	
備考		
科目生への開講	なし	

ナンバリング	期間	後期
授業科目名	インターンシップ研究	
英訳科目名		
担当教員名	松谷 葉子	
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー-2 <技能>
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー-4 <関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー-6
授業概要・ポイント	インターンシップ実習として実際の企業や組織で就業体験する前に、社会人としてのマナーを学び、企業研究・業界研究を行い職業に関する知識を習得する。 昨今、就職採用試験にて避けては通れないSPIについて体験し、SPIに対応できる力を付ける準備を行う。	
到達目標	1. 社会人として働くため、一般的なビジネスマナーが身についている 2. 業界や企業について調査し、自己分析をした上で、卒業後のキャリアビジョンを描くことができる 3. 就職活動に必要なことが理解でき、準備活動を始めることができる	
授業計画	第1回 オリエンテーション・インターンシップガイダンス 第2回 SPI対策講座1（非言語分野模擬テスト1） 第3回 SPI対策講座2（言語分野模擬テスト2） 第4回 ビジネスマナー研修1 第5回 ビジネスマナー研修2 第6回 ビジネスマナー研修3 第7回 企業研究・業界研究1（外部講師をお招きして話を聞きます） 第8回 企業研究・業界研究2（外部講師をお招きして話を聞きます） 第9回 模擬面接 第10回 SPI対策講座3（非言語分野復習1） 第11回 SPI対策講座4（非言語分野復習2） 第12回 SPI対策講座5（非言語分野復習3） 第13回 SPI対策講座6（言語分野復習） 第14回 SPI模擬テスト（webテスト） 第15回 企業研究・業界研究発表報告会	
評価方法 (合計100%)	・ビジネスマナーテスト 25% ・模擬面接結果 20% ・SPI模擬テスト 25% ・企業研究・業界研究報告書および報告会 30%	
失格条件	ビジネスマナーテスト、模擬面接、SPI模擬テストを受けなかった者 企業研究・業界研究報告書を提出しなかった者	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	インターネットなどで興味のある業界や企業の調査をすることを日頃から心がけること	
課題へのフィード バック	それぞれのテストに対してコメントを返します。	
教科書	不使用	
著者名		
出版社		
参考書	大内孝夫（2015）『「音大卒」は武器になる』株式会社ヤマハミュージックメディア	
その他		
備考		
科目生への開講	なし	

ナンバリング	期間	後期
授業科目名	音楽マネジメント演習A	
英訳科目名		
担当教員名	橋田 光代	
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2 <技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ◎	ディプロマ・ポリシー4 <関心・意欲・態度> ○
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6
授業概要・ポイント	大学における「研究」の仕方についての初歩をまなぶ。 Word、Excelをはじめとする各種ソフトウェアを用いて、自分の見たもの、調べたことを文書で表現するためのスキルの基礎の修得を目的とする。	
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・文書作成ソフトにおける書式体裁を整えることができる ・表計算ソフトを用いた図表作成ができる ・書籍・インターネット等を経て得られた調査資料を電子データで集積・分類できる 	
授業計画	<p>基本的に下記の流れで進めていくが、履修生の理解度や進行状況に応じて、順番や配分・予定を変更する場合があります。</p> <p>第1回 研究・学術論文とは 第2回 研究用ツール整備 第3回 ゼミ紹介 第4回 文書を書く：書式設定・レイアウト 第5回 論文複写1 第6回 論文複写2 第7回 データ集積・分析1 第8回 データ集積・分析2 第9回 図表・グラフ 第10回 画像編集 第11回 ロジックシンキング1 第12回 ロジックシンキング2 第13回 文書体裁 第14回 論文執筆演習1 第15回 論文執筆演習2</p>	
評価方法 (合計100%)	1. 授業への参加態度 50% 2. 提出課題の内容 50% 授業を欠席すれば、「授業への参加態度」において1回あたり8%を減ずる。	
失格条件	なし	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	見たもの、聞いたものを「文章で表現する」ことを常日頃意識しておくこと。 文章読解・執筆のスピードを上げるには、週に1冊以上の読書（分野はなんでもよい）をすすめます。	
課題へのフィード バック	毎回の各自課題については必要に応じて個別もしくは全体にコメントします。	
教科書	不使用	
著者名		
出版社		
参考書	適宜紹介する	
その他	特になし	
備考		
科目生への開講	なし	

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	音楽マネジメント演習B		
英訳科目名			
担当教員名	橋田 光代		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー2	<技能>
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	担当教員の協力・指導のもと、各学生がそれぞれ個別テーマの研究を計画的に進める。また、教員との対話を通じて思考力、洞察力を高め、さらに資料分析力を養っていく。		
到達目標	研究活動を通じて、自他共の研究アイデアにおける独創性・面白さ・実現方法を見極めることができる。論文の執筆を通じて、論理的思考、文章構成力、作文能力、語彙選択力を身につけることができる。発表を通じて、プレゼンテーション能力や自己の意見や主張をわかりやすく表現し他者に伝える力を身につけることができる。		
授業計画	<p>履修者別に研究テーマを決め、それに従い研究計画を立て、実施する。 テーマに関しては、(1) 教員側から提示するテーマから選ぶか、(2) 学生側から主体的な計画を提出してもらい、その計画の実行可能性が認められれば自由とする。</p> <p>大まかに下記の流れで進めていくが、順番や配分・予定は履修生と相談の上変更することがある。</p> <p>第1回 テーマ相談、研究用ツール整備 第2回 資料検索・収集・管理 第3回 ディスカッション：論文・書籍紹介 [1] 第4回 ディスカッション：論文・書籍紹介 [2] 第5回 ディスカッション：論文・書籍紹介 [3] 第6回 ディスカッション：論文・書籍紹介 [4] 第7回 個別・グループ研究1：計画と設計 第8回 個別・グループ研究2：調査1 第9回 個別・グループ研究3：調査2 第10回 個別・グループ研究4：執筆 第11回 個別・グループ研究5：中間報告発表 第12回 研究紹介：Webコンテンツ企画 第13回 研究紹介：コンテンツ制作1 第14回 研究紹介：コンテンツ推敲 第15回 研究紹介：コンテンツ完成・公開</p>		
評価方法 (合計100%)	1. 授業への参加態度 50% 2. 提出課題の内容 50% ゼミ・個別ミーティングを欠席すれば、「授業への参加態度」において1回あたり8%を減ずる。		
失格条件	成果物を発表・提出しなかった場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>「考え、計画し、実行し、確かめる」を繰り返すのが研究（制作）です。一人で「考える」だけでは研究は進んだことになりません。日頃から、</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 図書館・書店・インターネット・美術館・企画イベントなどに積極的に赴くこと、 2) 他学生・教員とブレインストーミングを交わすこと、 3) とにかく作って誰か（おもにゼミ）に見せること、 4) やってみた結果がどうだったかを記録し、議論すること、 <p>が大切です。これらを確実に遂行するため、毎週必ずの進捗報告と、研究テーマに関する調査発表・ディスカッションを個別に行います。このほか、学年共通のゼミ（研究室）活動をいくつか実施する予定です。積極的に参加してください。</p> <p>以下、研究遂行例と、それぞれにかかる最低限の時間／週の目安です。進捗時期に合わせて配分してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・進捗報告のための資料を作成する 0.5時間 ・持ち回りの調査発表・ディスカッション資料を作成する 4時間 ・先行研究の論文1本（A4版2段組6頁相当）を読み込み、要点をまとめる 2時間 ・考えたコンセプトに基づく試作品を作る 4時間 		
課題へのフィードバック	毎週のミーティングを通して個別にフィードバックを行います。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書	適宜紹介する		
その他	毎回必ず、打合せ・報告のための資料を用意すること。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	音楽マネジメント演習B		
英訳科目名			
担当教員名	志村 聖子		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー-2	<技能>
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	クラシック音楽のコンサート制作を念頭におきながら、企画立案と制作の各プロセスに必要な基礎知識、考え方、手順を習得する。一定の制約条件や環境のもとで、企画を立案するための基礎力を養う。		
到達目標	①様々なニーズを理解した上で、企画書を作成できる。 ②企画の概要についてプレゼンテーションできる。		
授業計画	第1回 オリエンテーション 第2回 マーケティング①：聴衆はどこにいるのか 第3回 マーケティング②：地域や施設のニーズを知る 第4回 マーケティング③：聴衆の「体験価値」を考える 第5回 企画の立案①：情報収集 第6回 企画の立案②：テーマ等の方針、ビジョン 第7回 企画の立案③：諸条件の調整 第8回 企画の立案④：出演交渉 第9回 制作①：プログラミング 第10回 制作②：公演に必要な諸条件の確認 第11回 制作③：スケジュール管理、人員体制 第12回 制作③：制作業務の具体事例 第13回 企画書の検討①： 第14回 企画書の検討②： 第15回 プレゼンテーション		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度60% 企画書およびプレゼンテーションの評価40%		
失格条件	企画書を提出せず、かつプレゼンテーションを行わなかった場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	日頃から様々な舞台公演や関連情報に接し、その企画の背景や意義等について考えを巡らせるよう、心がけて欲しい。		
課題へのフィード バック	演習での取り組みに関して、適宜、全体または個別にコメントする。		
教科書	クラシック・コンサート制作の基礎知識		
著者名	社団法人 日本クラシック音楽事業協会		
出版社	株式会社 ヤマハミュージックメディア		
参考書			
その他	本授業は、主として演習方式で行います。ディスカッションやグループワークを行いますので、積極的に参加、発言してください。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	音楽マネジメント演習B		
英訳科目名			
担当教員名	松谷 葉子		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>1. 大阪市中央区などの自治体や企業団体様のご協力のもと、「音楽マネジメント演習A」にて企画したイベントを実施いたします。事前準備から広報、会計、当日の運営まですべての実務を行い、企画終了後は、実施報告書を作成し、関係各所へ配布します。場合によっては、実施報告会を行います。</p> <p>2. 研究活動を行い、各種研究発表会にて発表していただきます。</p>		
到達目標	<p>1. 企画に則って準備段階から当日の運営まで、実施計画を立て、企画を実施し、全体の運営管理、マネジメントができる。</p> <p>2. 研究成果をまとめ、研究報告を作成し、研究成果をプレゼンテーションすることができる。</p>		
授業計画	<p>第1回 オリエンテーション／企画発表／チーム分け</p> <p>第2回 音楽マネジメント演習Aで策定した企画の練り直し</p> <p>第3回 企画実施のための年間計画策定、関係各所への交渉</p> <p>第4回 研究発表テーマの策定</p> <p>第5回 研究計画の策定</p> <p>第6回 調査研究進捗確認 1</p> <p>第7回 調査研究進捗確認 2</p> <p>第8回 企画進捗確認 1</p> <p>第9回 調査研究進捗確認 3</p> <p>第10回 調査研究進捗確認 4</p> <p>第11回 企画進捗確認 2</p> <p>第12回 調査研究進捗確認 5</p> <p>第13回 調査研究進捗確認 6</p> <p>第14回 企画進捗状況確認 3 および発表</p> <p>第15回 研究成果（経過）報告会</p>		
評価方法 (合計100%)	<ul style="list-style-type: none"> ・企画への参加度 30% ・調査研究への参加度 30% ・企画進捗状況発表 20% ・研究成果（経過）報告 20% 		
失格条件	企画発表、研究成果報告を怠った場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	日頃から、いろいろな事柄に興味を持ち、良い面は盗み、自分たちの企画、研究に活かせるよう、日々観察してください		
課題へのフィード バック	都度、進捗状況を確認し、フィードバックいたします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	音楽マネジメント演習C		
英訳科目名			
担当教員名	橋田 光代		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ◎	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> △
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	ゼミ担当教員の指導のもと、各学生がそれぞれ個別またはグループでテーマを定め、発表とディスカッションを通じて研究を計画的に進める。また、教員・ゼミ内での対話を通じて思考力、洞察力を高め、さらに資料分析力を養っていく。		
到達目標	音楽マネジメント研究におけるコンピュータ技術の全体像および最新動向をつかむことができる。 専門分野に関する論文や資料を検索・収集・整理することができる。 調べた資料に対し、要点をまとめ、自分の意見を述べるができる。		
授業計画	基本的に下記の流れで進めていくが、履修者の理解状況に応じて順番や配分・予定を変更する場合がある。演習題材については、個別に研究テーマを定める。 第1回 夏休みの研究成果報告・研究計画 第2回 卒業研究紹介 第3回 ゼミ紹介 第4回 研究紹介：Webコンテンツ企画 第5回 研究紹介：コンテンツ制作 1 第6回 研究紹介：コンテンツ推敲 第7回 研究紹介：コンテンツ完成・公開 第8回 研究課題の整理 第9回 個別・グループ研究 1：計画と設計 第10回 個別・グループ研究 2：調査 1 第11回 個別・グループ研究 3：調査 2 第12回 個別・グループ研究 4：執筆 第13回 個別・グループ研究 5：中間報告発表 第14回 論文執筆演習 1 第15回 論文執筆演習 2		
評価方法 (合計100%)	1. 授業への参加態度 50% 2. 提出課題の内容 50% 授業を欠席すれば、「授業への参加態度」において1回あたり8%を減ずる。		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	日頃から、図書館・書店・インターネット・美術館・企画イベントなどに積極的に赴き、他学生・教員とブレインストーミングを交わすこと。また、見聞きしたもののことは徹底的に記録やメモをつけること。 なお、文書・データ作成の作業が多くなるため、できるだけノートパソコンを持参してください。スマートフォンはあくまで補助ツールとしての利用に留めておくこと。 以下、本科目での論文調査・グループディスカッションを円滑に進める最低限の時間/週の目安です。時期によって課題が異なるので、適宜配分すること。 ・論文1本(A4版2段組6頁相当)を読み込み、要点をまとめる 2時間 ・資料を作成する 2時間		
課題へのフィードバック	毎回のミーティング時に個別にフィードバックを返します。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書	適宜紹介する		
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	音楽マネジメント演習C		
英訳科目名			
担当教員名	志村 聖子		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー-2	<技能>
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	音楽マネジメント演習B（前期）で学んだことを土台として、公演の実施に向けたプロセスに必要な基礎知識、考え方、手順を習得する。		
到達目標	①企画から公演実施までの大きな流れを把握し、必要な作業について理解を深めることができる。 ②チームの一員として、他者とコミュニケーションをとりつつ主体的に業務を進められることができる。		
授業計画	第1回 広報・宣伝①：コンセプトと対象 第2回 広報・宣伝②：様々な媒体・ツールの活用 第3回 広報・宣伝③：プレスリリース 第4回 公演に向けて①：当日のタイムテーブル、スタッフ配置 第5回 公演に向けて②：プログラム（曲目解説）制作 第6回 公演に向けて③：スケジュール管理 第7回 公演の運営①：フロント業務 第8回 公演の運営②：バックステージ業務 第9回 公演の運営③：リスクマネジメント 第10回 事業の評価①：各種データ集計の方法 第11回 事業の評価②：決算 第12回 事業の評価③：事業報告書、今後の企画制作にどう生かすか 第13回 制作演習① 第14回 制作演習② 第15回 プレゼンテーション		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度60% レポートの評価40%		
失格条件	レポートを提出しなかった場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	復習として、これまでに習得してきた事柄を振り返り、自分なりに説明できるよう理解を深めた上で、次回の授業に臨んで欲しい。 日頃から様々な舞台公演や関連情報に接し、その企画の背景や意義等について考えを巡らせるよう、心がけて欲しい。		
課題へのフィードバック	演習での取り組みに関して、適宜、全体または個別にコメントする。		
教科書	クラシック・コンサート制作の基礎知識		
著者名	社団法人 日本クラシック音楽事業協会		
出版社	株式会社 ヤマハミュージックメディア		
参考書			
その他	可能な限り特定の会場等と連携し、現場で実際に公演を運営することを目指している。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	期間	後期
授業科目名	音楽マネジメント演習C	
英訳科目名		
担当教員名	松谷 葉子	
ディプロマ・ポリシー1	ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3	ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>この講義は、ゼミナール形式で行います。以下2点を同時進行で行います。</p> <p>1. 大阪市中央区などの自治体や企業団体様のご協力のもと、「音楽マネジメント演習A」にて企画したイベントを実施いたします。事前準備から広報、会計、当日の運営まですべての実務を行い、企画終了後は、実施報告書を作成し、関係各所へ配布します。場合によっては、実施報告会を行います。</p> <p>2. 研究活動を行い、各種研究発表会にて発表していただきます。</p>	
到達目標	<p>1. 企画に則って準備段階から当日の運営まで、実施計画を立て、企画を実施し、全体の運営管理、マネジメントができる。</p> <p>2. 研究報告を作成し、研究成果をプレゼンテーションすることができる。</p>	
授業計画	<p>第1回 オリエンテーション／企画進捗状況確認1？</p> <p>第2回 調査研究進捗確認1？</p> <p>第3回 調査研究進捗確認2？</p> <p>第4回 企画進捗確認2??</p> <p>第5回 調査研究進捗確認3？</p> <p>第6回 調査研究進捗確認4？</p> <p>第7回 企画進捗確認3??</p> <p>第8回 企画実施報告書について？</p> <p>第9回 調査研究進捗確認5？</p> <p>第10回 調査研究進捗確認6？</p> <p>第11回 調査研究進捗確認7？</p> <p>第12回 調査研究進捗確認8？</p> <p>第13回 調査研究進捗確認9</p> <p>第14回 企画実施報告会??</p> <p>第15回 研究調査報告会</p>	
評価方法 (合計100%)	<ul style="list-style-type: none"> ・企画への参加度?30% ・調査研究への参加度 30% ・企画実施報告 20% ・研究調査報告 20% 	
失格条件	企画実施報告書、研究調査報告書未提出の場合、企画実施報告、研究成果報告を怠った場合	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	日頃から、いろいろな事柄に興味を持ち、良い面は盗み、自分たちの企画、研究に活かせるよう、日々観察してください	
課題へのフィード バック	都度確認し、フィードバックを行う	
教科書	不使用	
著者名		
出版社		
参考書		
その他		
備考		
科目生への開講	なし	

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	卒業研究A		
英訳科目名			
担当教員名	松谷 葉子		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー2	<技能>
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	大学生生活の集大成である卒業研究に向けて、研究計画書の作成、そして中間報告に向けた準備ができるために、個別指導を行う。		
到達目標	研究計画書が作成できる 研究計画書に則って、卒業研究を進め、中間発表ができる。		
授業計画	<p>毎回、次のような時間配分で進めていく</p> <p>① 輪講およびディスカッション あらかじめ定めた担当者が次週のテーマを決め、当該時間にはディスカッションできるように各自が予習する</p> <p>② 卒業研究の進捗状況を報告する</p> <p>③ 個別指導</p> <p>4月末日までに研究計画書を提出、 8月には、中間発表会を行う</p>		
評価方法 (合計100%)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業（輪講）の参加度、取り組みの熱心さ 50% ・ 中間報告 50% 		
失格条件	原則3分の2以上の出席を満たさない上、前期終了段階での報告をしない場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業時間にかかわらず、各自アポイントをとって個別指導を受けること		
課題へのフィード バック	毎回読む論文を事前に決めてもらい、テーマに則ってディスカッションします。 論文の登録は、Facebook上で行い、毎回のゼミでディスカッションした上でコメントを返します。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	ゼミ内ではFacebookの非公開グループを使って連絡をとります。 必ず各自Facebookアカウントを用意しておくこと。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	期間	前期
授業科目名	卒業研究A	
英訳科目名		
担当教員名	橋田 光代	
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> △	ディプロマ・ポリシー2 <技能> △
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ◎	ディプロマ・ポリシー4 <関心・意欲・態度> ○
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6
授業概要・ポイント	ゼミ担当教員の指導のもと、卒業論文執筆と関連させながら、各学生がそれぞれ個別テーマの研究を計画的に進める。また、教員との対話を通じて思考力、洞察力を高め、さらに資料分析力を養っていく。	
到達目標	研究活動を通じて、自他共の研究アイデアにおける独創性・面白さ・実現方法を見極めることができる。論文の執筆を通じて、論理的思考、文章構成力、作文能力、語彙選択力を身につけることができる。発表を通じて、プレゼンテーション能力や自己の意見や主張をわかりやすく表現し他者に伝える力を身につけることができる。	
授業計画	履修者別に研究テーマを決め、それに従い個別に研究計画を立て、実施する。 テーマに関しては、(1) 教員側から提示するテーマから選ぶか、(2) 学生側から主体的な計画を提出してもらい、その計画の実行可能性が認められれば自由とする。 おおむね下記の流れで進めていくが、履修生の進捗状況に応じて、順番や配分・予定は変更することがある。 第1回 テーマ相談、研究用ツール整備 第2回 論文執筆ガイダンス 第3回 模擬演習1：研究計画と設計 第4回 模擬演習2：調査 第5回 模擬演習3：執筆 第6回 模擬演習4：提出 第7回 研究紹介：Webコンテンツ企画 第8回 研究紹介：コンテンツ制作・調査 第9回 研究紹介：コンテンツ制作・調査 第10回 研究紹介：コンテンツ完成・公開 第11回 研究課題の整理 第12回 研究調査1 第13回 研究調査2 第14回 中間発表準備：スライド作成 第15回 中間発表準備：口頭プレゼンテーション練習	
評価方法 (合計100%)	1. 授業への参加態度、取り組みの熱心さ 50% 2. 学科中間報告会での内容 50%	
失格条件	原則3分の2以上の出席を満たさない上、前期終了段階での報告をしない場合	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	「考え、計画し、実行し、確かめる」を繰り返すのが研究（制作）です。一人で「考える」だけでは研究は進んだことになりません。日頃から、 1) 図書館・書店・インターネット・美術館・企画イベントなどに積極的に赴くこと、 2) 他学生・教員とブレインストーミングを交わすこと、 3) とにかく作って誰か（おもにゼミ）に見せること、 4) やってみた結果がどうだったかを記録し、議論すること、 が大切です。これらを確実に遂行するため、毎週必ずの進捗報告と、研究テーマに関する調査発表・ディスカッションを個別に行います。このほか、学年共通のゼミ（研究室）活動をいくつか実施する予定です。積極的に参加してください。 以下、研究遂行例と、それぞれにかかる最低限の時間／週の日安です。進捗時期に合わせて配分してください。 ・進捗報告のための資料を作成する 0.5時間 ・持ち回りの調査発表・ディスカッション資料を作成する 4時間 ・先行研究の論文1本（A4版2段組6頁相当）を読み込み、要点をまとめる 2時間 ・考えたコンセプトに基づく試作品を作る 4時間	
課題へのフィードバック	毎週の課題は個別に設定し、そのフィードバックも個別に行います。	
教科書	不使用	
著者名		
出版社		
参考書	適宜紹介する。	
その他	本科目は、後期「卒業研究B」と連続してのテーマ設定・研究遂行を前提とする。 毎回の個別指導の際は必ず、打合せ・報告のための資料を用意すること。	
備考		
科目生への開講	なし	

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	卒業研究A		
英訳科目名			
担当教員名	志村 聖子		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー-2	<技能>
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	学部の最終段階として、これまで学んできたことを基に、学生各自が研究テーマを設定し、卒業論文の執筆を行う。 前期では、各自の研究テーマ及び計画に基づいて調査（文献調査、実地調査等）を進め、中間発表を行う。		
到達目標	①研究テーマに基づき、一定期間内で調査を遂行できる。 ②先行研究や調査結果について、ゼミでの意見交換などを踏まえて、自ら分析できる。 ③自らの研究内容や考えについて、論理的に表現できる。		
授業計画	第1回 研究テーマの確認 第2回 調査・研究方法の基礎知識① 第3回 調査・研究方法の基礎知識② 第4回 研究計画書の立案① 第5回 研究計画書の立案② 第6回 資料収集と調査① 第7回 資料収集と調査② 第8回 資料収集と調査③ 第9回 資料収集と調査④ 第10回 分析の方法① 第11回 分析の方法② 第12回 現状報告とディスカッション① 第13回 現状報告とディスカッション② 第14回 中間発表会のリハーサル① 第15回 中間発表会のリハーサル②		
評価方法 (合計100%)	ゼミへの参加度、取り組みの熱心さ 50% 中間報告 50%		
失格条件	原則3分の2以上の出席を満たさない上、前期終了段階での報告をしない場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	これまでのゼミで各自作成してきた文献リスト等をもとにして、前期の早い段階で研究テーマを確定しましょう。 そして余裕をもって調査にあたるように、研究計画書を立案しましょう。 調査を進める上では、事前にある程度の知識（インプット）の量があることが重要です。日頃から研究テーマに関連する事柄については、新聞等を通じて積極的に情報収集するよう心がけてください。		
課題へのフィード バック	進捗状況に合わせ、個別にコメントします。		
教科書	各自の研究テーマに合わせて随時指示する。		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	卒業研究のペースメーカーとして定期的にゼミを行います。積極的に発表、意見交換し、相互に学び合ひましょう。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	卒業研究B		
英訳科目名			
担当教員名	松谷 葉子		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー2	<技能>
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	卒業研究を仕上げるため、個別指導を行う		
到達目標	卒業研究を進め、卒業論文が書け、卒業研究内容に関する発表ができる。		
授業計画	<p>毎回、次のような時間配分で進めていく</p> <p>①輪講およびディスカッション あらかじめ定めた担当者が次週のテーマを決め、当該時間にはディスカッションできるように各自が予習する</p> <p>②卒業研究の進捗状況を報告する</p> <p>③個別指導</p> <p>卒業論文を仕上げさせていただきます。</p>		
評価方法 (合計100%)	<ul style="list-style-type: none"> ・卒業研究審査会結果 70% ・授業（輪講）の参加度、取り組みの熱心さ 30% <p>※ただし、取り組みの熱心さには、発表会の内容を含む</p>		
失格条件	原則3分の2以上の出席を満たさない、または論文提出しない場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業時間にかかわらず、各自アポイントをとって個別指導を受けること		
課題へのフィード バック	毎回テーマに則ってディスカッションし、コメントを返します。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	期間	後期
授業科目名	卒業研究B	
英訳科目名		
担当教員名	橋田 光代	
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> △	ディプロマ・ポリシー-2 <技能> △
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> ◎	ディプロマ・ポリシー-4 <関心・意欲・態度> ○
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー-6
授業概要・ポイント	各学生がそれぞれ研究テーマを定め、作品・イベント・研究論文のいずれか（複数可）の形式で発表する。	
到達目標	研究テーマに沿って、自分の考えを、イベント・作品・論文いずれかによって形にし、その意図を筋道を立てて言葉で説明することができる。	
授業計画	履修者別に、前期に定めた研究テーマに沿って実施する。 なお、前期の進捗状況によっては、研究テーマを変更する場合もある。 第1回 論文書式の設定 第2回 研究目的と意義 第3回 先行研究・関連研究のリストアップ 第4回 先行研究・関連研究の精査 第5回 調査・実験の計画・立案 第6回 調査・実験の日程調整、予備テスト 第7～8回 調査・実験 第9回 結果データの集積 第10回 調査結果の分析 第11回 考察 第12回 結論・要旨 第13回 付録の整理 第14回 論文添削 第15回 論文添削・論文提出	
評価方法 (合計100%)	・卒業研究審査会ならびに発表会 60% ・授業期間中の進捗状況 40%	
失格条件	以下のいずれかに該当すると失格となる。 1. 作品・論文の提出なし または イベントの実施なし 2. 審査会・発表会での発表なし	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	参考資料については、各自の研究テーマや進捗状況に応じて適宜案内しますが、一番良いのは、自分で常日頃から図書館・書店・インターネット・美術館・企画イベントなどに積極的に赴き、考えを深めていくことです。また、一人で考えるばかりでなく、他学生・教員とブレインストーミングをすることも大切です。	
課題へのフィードバック	毎週の個別ミーティングを通じて課題の設定とフィードバックを行います。	
教科書	不使用	
著者名		
出版社		
参考書		
その他		
備考		
科目生への開講	なし	

ナンバリング	期間	後期
授業科目名	卒業研究B	
英訳科目名		
担当教員名	志村 聖子	
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー2 <技能>
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー4 <関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー6
授業概要・ポイント	各自の研究計画に基づいて卒業論文の執筆を進める。これまでの調査結果をもとに分析・考察を行い、研究成果を論文としてまとめる。	
到達目標	①調査結果を掘り下げ、考察できる ②研究の一連の流れを論理的な文章で表現できる	
授業計画	第1回 研究の進捗報告と研究計画の再確認 第2回 論文の構成案の作成 第3回 論文執筆作業① 第4回 論文執筆作業② 第5回 論文執筆作業③ 第6回 論文執筆作業④ 第7回 論文執筆作業⑤ 第8回 論文執筆作業⑥ 第9回 論文執筆作業⑦ 第10回 論文執筆作業⑧ 第11回 論文の体裁・書式の確認① 第12回 論文の体裁・書式の確認② 第13回 卒業研究審査会の準備 第14回 卒業研究審査会のリハーサル① 第15回 卒業研究審査会のリハーサル②	
評価方法 (合計100%)	卒業論文審査会結果 70% ゼミへの参加態度 30%	
失格条件	原則3分の2以上の出席を満たさない、または論文提出しない場合	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	ゼミでのディスカッションやアドバイスを踏まえて、着実に論文執筆作業を進めていくこと。	
課題へのフィード バック	進捗状況に応じて、個別にコメントします。	
教科書	各自の研究テーマに合わせて随時指示する。	
著者名		
出版社		
参考書		
その他	論文執筆のペースメーカーとして定期的にゼミを行います。積極的に発表し、他者の分析・考察方法等に接して、相互に学び合ひましょう。	
備考		
科目生への開講	なし	

ナンバリング	AP408A02	期間	集中
授業科目名	舞台スタッフ演習		
英訳科目名	Practice of Stage Management		
担当教員名	衣川 絵里子		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー2	<技能>
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>舞台芸術公演に関わる様々なプロセスを疑似体験しながら、アートマネージャーや舞台技術スタッフの仕事を学ぶ。特に、アートマネージャーは現場で非常に多くの知識と多種多様なスキルが必要とされる特殊な職業である。本番を迎えるまでに経た多くのプロセスは座学を通して学び、公演本番を通じて「ナマモノ」である舞台芸術の現場に触れる。</p> <p>この授業では2019年8月に西宮市フレンテホールで開催される「クラシック音楽謎解きミステリー“音楽探偵パッハの事件録”」の本番を、スタッフとして疑似体験する演習形式の授業である。</p>		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・舞台芸術公演を通して、その企画・制作・運営のプロセスを知ること ・舞台芸術公演における舞台の企画・設計、道具製作、照明・音響技術や衣装など、プロフェッショナルの仕事に触れて各分野の仕事を知ること ・公立文化施設において地域に開かれた劇場を目指す舞台芸術公演の在り方を理解すること ・公演の目的を理解し、戦略的な制作着眼点に基づくアートマネージャーの仕事を知ること 		
授業計画	<p>*この授業はすべて西宮市フレンテホールで開講する（開講場所までの交通費は自己負担） *授業日時については設定の日時と変更になるため、履修者には5月末までに開講日時を連絡する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オリエンテーション ・公立文化施設のミッション～劇場法を軸に～ ・企画の考え方～目的と戦略をもって～ ・アーティストとの関わり ・予算の考え方 ・資金調達 ・広報 ・チケット販売と集客 ・著作権 ・舞台技術 ・レセプション ・運営～タイムマネジメントとスケジュール～ ・本公演の開催 ・ふりかえり 		
評価方法 (合計100%)	<p>授業への参加度（参加状況と発言）60% 最終レポート 40%</p>		
失格条件	<ul style="list-style-type: none"> ・出席回数が3分の2以上に満たない場合 ・最終レポートを提出しない場合 		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>課題は特に出さないが、様々な舞台芸術公演へ積極的に出かけ、どういった目的で開催されているかを自分なりに掘り下げ、理解を深めることを望む（授業時間の2倍程度）</p>		
課題へのフィード バック	<p>最終レポートについては、ポータルサイト等を通じて、全体に向けてコメントする</p>		
教科書	授業毎にプリント配布		
著者名			
出版社			
参考書	必要に応じて適宜紹介		
その他	授業の進捗具合によって、シラバスを変更する可能性がある		
備考	文化施設スタッフとしての実務経験をもとに、この授業を進めます。		
科目生への開講	あり		

ナンバリング	AP408A03	期間	後期
授業科目名	文化政策		
英訳科目名	Cultural Policy		
担当教員名	志村 聖子		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> -	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	国および自治体の文化政策について、歴史的経緯を踏まえつつ、現状と課題を概観する。後半では特に文化政策の新たな領域（文化的景観の保護、文化観光、コンテンツ産業など）について取り上げ、今後の文化政策のあり方について具体的に考えることとする。		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・文化政策の歴史を理解し、現代の文化政策の背後にある原則について説明できる。 ・公共と民間、非営利と営利の性質の違いについて説明できる。 ・国および自治体における文化政策の特性について説明できる。 		
授業計画	第1回 文化政策の歴史と原則 第2回 文化政策の対象領域と機能 第3回 文化に関わる法制度と予算 第4回 文化政策の主体①国の役割と限界 第5回 文化政策の主体②自治体の文化政策 第6回 文化政策の主体③企業メセナ、アートNPO 第7回 芸術文化への公的支援①：支援の根拠 第8回 芸術文化への公的支援②：助成制度、アーツカウンシル 第9回 芸術文化への公的支援③：公立文化施設の現状 第10回 文化政策の新領域①：まちづくりから景観保護へ 第11回 文化政策の新領域②：文化的景観 第12回 文化政策の新領域③：観光と文化 第13回 文化政策の新領域④：訪日外国人観光者の状況と施策 第14回 文化政策の新領域⑤：コンテンツ産業 第15回 文化政策の新領域⑥：日本文化の海外発信		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度50% 授業内提出物 30% 最終レポート 20%		
失格条件	出席回数が3分の2以上に満たない場合 最終レポートを提出しない場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	・予習：あらかじめ文献（教科書、プリント）の指定部分について目を通しておくこと（予習時間：1時間）。 ・復習：毎回の講義の内容を大まかに説明できるよう、自分なりに理解を深めること（復習時間：3時間）。		
課題へのフィード バック	課題提出後、個別にコメントします。 （コメントシートの形でお返しし、提出されたレポートは返却しません）		
教科書	文化政策学入門		
著者名	根木 昭		
出版社	水曜社		
参考書			
その他	日頃より、新聞などを通して、広く日本の社会や地方自治体を取り巻く状況について関心を持つよう、心がけて欲しい。		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	AP408A04	期間	前期
授業科目名	舞台芸術と法律/アートと法律		
英訳科目名	Performing Arts and Law		
担当教員名	志村 聖子		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	舞台芸術の世界で活動し、特に舞台芸術のマネジメントに関わっていく上で理解しておくべき法律の体系と概念を習得する。		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・芸術と社会との関係を、法的な観点から理解することができる ・法律に親しみ、重要な条文や概念については自ら検索・引用できるようにする 		
授業計画	第1回 法律を学ぶ意義とは 第2回 法律の体系①：憲法と法律 第3回 法律の体系②：公法と私法 第4回 表現の自由①：思想・芸術と国家をめぐる歴史的背景 第5回 表現の自由②：保障の内容と制約原理（プライバシー権との関係） 第6回 表現の自由③：具体事例 第7回 契約関係①：音楽マネジメントにおけるアクター 第8回 契約関係②：契約の種類と内容 第9回 契約関係③：契約履行上の問題 第10回 著作権①：知的財産権の全体像 第11回 著作権②：著作者の権利と制限 第12回 著作権③：音楽マネジメントにおける諸手続 第13回 文化芸術基本法：法の趣旨と構造 第14回 劇場法：法の趣旨と構造 第15回 芸術文化振興条例：全国の自治体の動向		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度50% 授業内提出物 30% 最終レポート 20%		
失格条件	出席回数が3分の2以上に満たない場合 最終レポートを提出しない場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	・予習：あらかじめ文献（教科書、プリント）の指定部分について目を通しておくこと（予習時間：1時間）。 ・復習：毎回の講義の内容を大まかに説明できるよう、自分なりに理解を深めること（復習時間：3時間）。		
課題へのフィード バック	課題提出後、個別にコメントします。 （コメントシートの形でお返しし、提出されたレポートは返却しません）		
教科書	伊藤真の憲法入門		
著者名	伊藤 真		
出版社	日本評論社		
参考書			
その他	日頃より新聞等を通して社会の動きを把握し、芸術文化がおかれている状況について自分なりに考える習慣をつけるよう、心がけて欲しい。		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	AP407A03	期間	後期
授業科目名	舞台芸術概論		
英訳科目名	Survey in Performing Arts		
担当教員名	衣川 絵里子		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ○	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<ul style="list-style-type: none"> ・舞台芸術の歴史や日本と海外における舞台芸術について理解を深めること ・舞台芸術をとりまく環境について理解を深めること ・舞台芸術の可能性について自ら考えること <p>以上を目的とする。</p> <p>学内での授業は講義だけでなく、グループワークも取り入れるので、授業内での積極的な発言を求める。また、学外でのフィールドワークにおいて、現場視察や公演鑑賞の機会を設けるので、積極的に参加するように。</p>		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・舞台芸術の歴史や日本と海外における舞台芸術について理解を深めること ・舞台芸術をとりまく環境について理解を深めること ・舞台芸術の可能性について自ら考えること ・自分から積極的に舞台芸術を鑑賞すること（特に個人の趣向外のジャンル） 		
授業計画	<p>*フィールドワークの訪問先はオリエンテーションで発表する *視察先への交通費や入場料などは自己負担とする *フィールドワークは2時間続けて実施するため、オリエンテーションで時間調整をする</p> <p>第1回 オリエンテーション 第2回 舞台芸術とは 第3回 舞台芸術の歴史①日本からアジアを中心に 第4回 舞台芸術の歴史②欧米を中心に 第5回 日本の舞台芸術①江戸時代以前 第6回 日本の舞台芸術②明治維新以後 第7回 海外の舞台芸術 第8回 舞台芸術をとりまく環境①劇場 第9回 舞台芸術をとりまく環境②制作 第10回 フィールドワークに向けて 第11回 フィールドワーク① 第12回 フィールドワーク② 第13回 フィールドワーク③ 第14回 フィールドワーク④ 第15回 舞台芸術の未来</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>授業への参加度（参加状況） 50%</p> <p>授業内提出物 20%</p> <p>最終レポート 30%</p>		
失格条件	<ul style="list-style-type: none"> ・出席回数が3分の2以上に満たない場合（30分を越える遅刻は欠席、遅刻3回で1回の欠席とする） ・最終レポートを提出しない場合 		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>普段から様々な公演へ積極的に出かけ、授業で学んだことを掘り下げ、理解を深めることを望む また、フィールドワークの下準備として事前に課題を与えるので、取り組んだ上で授業に参加することを望む（授業時間の2倍程度）</p>		
課題へのフィード バック	<p>授業内提出物については、必要に応じて全体にコメントする</p>		
教科書	授業毎にプリント配布		
著者名			
出版社			
参考書	必要に応じて適宜紹介		
その他	授業の進捗度合いによって、シラバスを変更する可能性がある		
備考	文化施設スタッフとしての実務経験をもとに、この授業を進めます。		
科目生への開講	あり		

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	創造産業論		
英訳科目名			
担当教員名	松谷 葉子		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー-2	<技能>
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	音楽の楽しみ方も様々な方法が存在する。 スマホで映画も音楽もゲームも・・・いつでもどこでも楽しむ事ができる。 このような現代社会でのコンテンツビジネスの実態を音楽に限らず、様々な角度から考察する。		
到達目標	コンテンツビジネスの課題について、少なくとも二次情報による調査はできる。 調査結果、自分の考え、他者の考えを総合し、論理的にまとめることができる。		
授業計画	第1回 オリエンテーション／コンテンツとは何か 第2回 情報とは何か 第3回 規模の経済とロングテール 第4回 コンテンツ産業の構造 第5回 コンテンツ産業の市場 第6回 日本型コンテンツ産業システム 第7回 映画産業 第8回 広告産業 第9回 テレビ放送産業 第10回 通信・放送・配信産業 第11回 音楽産業 第12回 マンガ関連産業 第13回 文字産業 第14回 ゲーム産業 第15回 これからのコンテンツ産業		
評価方法 (合計100%)	各回の課題評価 80% 最終レポート評価 20%		
失格条件	レポート課題提出率が6割を切る者は失格とします。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	毎回出されるレポート課題に対して、自分なりに調査し、自分自身の考えをまとめてきてください。		
課題へのフィード バック	毎回提出していただくレポートを元に、ディスカッションをしていただきます。 その中で、コメントを返します。		
教科書	『コンテンツ産業論 混淆と伝播の日本型モデル』		
著者名	出口弘、田中秀幸、小山友介		
出版社	東京大学出版会		
参考書	・梅棹忠夫『情報の文明学』中公文庫 ・依田高典『次世代インターネットの経済学』岩波新書 ・河島伸子『コンテンツ産業論 文化創造の経済・法・マネジメント』ミネルヴァ書房		
その他	この授業では、ほぼ毎回レポート課題を提出していただきます。 音楽だけでなく、映画、漫画、ゲームなど、 ちまたに溢れるコンテンツを実際に体験し、遊んでください。 そして、何がオモシロイのか、自分が楽しめるものは何か、何が楽しいのかを考えてください。		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	芸術環境論		
英訳科目名			
担当教員名	志村 聖子		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー-2	<技能>
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	近年、各地の自治体でアートプロジェクトや社会包摂事業が開催されるなど、芸術の社会的機能に対する注目が高まっている。今後、コンサートや舞台公演を企画立案していく前提として、芸術と人々、都市との関わりについて学びを深め、これからの音楽イベントの可能性を検討する。		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・芸術 (art) がおかれてきた歴史や文脈についての理解を深めることができる。 ・芸術や都市の発展と「人間らしい生き方」との関わりについて、自分なりに考察できる。 		
授業計画	第1回 文化的な生活環境とは 第2回 都市における文化遺産 第3回 都市のサウンドスケープ 第4回 クリエイティブ・シティ 第5回 地域におけるアートプロジェクト 第6回 都市における劇場①：西洋の文脈 第7回 都市における劇場②：日本の文脈 第8回 都市における劇場③：これからの劇場に求められるもの 第9回 アート・イベントを企画する①：場の特性を見極める 第10回 アート・イベントを企画する②：対象者の属性とニーズを見極める 第11回 アート・イベントを企画する③：プログラム、台本の検討 第12回 アート・イベントを企画する④：言語表現の工夫 第13回 アート・イベントを企画する⑤：身体表現の可能性 第14回 アート・イベントの実施・運営 第15回 振り返り		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度50% 授業内提出物30% 最終レポート20%		
失格条件	出席回数が3分の2以上に満たない場合 最終レポートを提出しない場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	・日頃より新聞等を通して、広く社会を取り巻く状況について考えるよう、心がけて欲しい。 ・授業の進行に応じて、学外視察に行くことも検討したい。		
課題へのフィード バック	課題提出後、個別にコメントします。 (コメントシートの形でお返しし、提出されたレポートは返却しません)		
教科書	舞台芸術マネジメント論-聴衆との共創を目指して-		
著者名	志村 聖子		
出版社	九州大学出版会		
参考書	上記のほか、必要に応じてプリントを配布する。		
その他	本授業は、4年次の卒業研究に向けて、芸術 (art) に関する視野を広げ、芸術と文化に関する身近な事象を多角的に考えるための契機となることをも目指しています。 後半は演習形式で (イベントの立案と運営) 進めますので、主体的に関与し、授業に貢献するよう心がけてください。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	アーティスト論		
英訳科目名	Theory of Artists		
担当教員名	志村 聖子		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー-2	<技能>
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	<p>今後、アーティストとして活動し、あるいはアーティストをマネジメントしていくための前提として、これまでの歴史における「アーティスト」像の変遷や、現代の社会におけるアーティストの多様なあり方や存在意義を概観し、人々や社会と関わりながら活動を展開していく方策を考える。</p> <p>前半ではヨーロッパにおけるパトロンとアーティストとの関係に焦点を当て、後半では現代アートや舞踊、音楽などのジャンルを通して活動するアーティストを取り上げる。</p>		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・現代社会におけるアーティストの活動の意義を、具体的事例に基づいて考察することができる。 ・アーティストと社会の関わりについて理解を深めるとともに、自らの社会参加について考えを述べることができる。 		
授業計画	<p>第1回 アーティストとは誰か</p> <p>第2回 パトロンと芸術家①：ルネサンスのパトロン達</p> <p>第3回 パトロンと芸術家②：「職人」から「芸術家」へ</p> <p>第4回 パトロンと芸術家③：バロックのパトロン達</p> <p>第5回 パトロンと芸術家④：ロマン主義時代の「芸術家」像</p> <p>第6回 パトロンと芸術家⑤：ボヘミアン化する芸術家たち</p> <p>第7回 パトロンと芸術家⑥：劇場制度とアーティスト</p> <p>第8回 パトロンと芸術家⑦：自由市場におけるアーティスト</p> <p>第9回 現代アートの世界①：作品の価値とは</p> <p>第10回 現代アートの世界②：新しい表現形態とアーティスト</p> <p>第11回 バレエの世界①：身体芸術の特性</p> <p>第12回 バレエの世界②：現代の演出とダンサー</p> <p>第13回 オペラの世界①：プロダクションに関わる人々</p> <p>第14回 オペラの世界②：現代の演出と歌い手</p> <p>第15回 総括</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>授業への参加態度50%</p> <p>授業内提出物 30%</p> <p>最終レポート 20%</p>		
失格条件	<ul style="list-style-type: none"> ・出席回数が3分の2以上に満たない場合 ・最終レポートを提出しない場合 		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<ul style="list-style-type: none"> ・予習：講義で紹介する文献を次回講義までに読んでおくこと（予習時間：1時間）。 ・復習：毎回の講義の内容について自分なりに理解を深め、指定したテーマについてレポートを作成すること（復習時間：3時間）。 		
課題へのフィード バック	<p>課題提出後、個別にコメントします。 (コメントシートの形でお返しし、提出されたレポートは返却しません)</p>		
教科書	必要に応じてプリントを配布する		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	特になし		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	期間	後期
授業科目名	アートマネジメント・インターンシップ研究	
英訳科目名		
担当教員名	松谷 葉子	
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー2 <技能>
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー4 <関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー6
授業概要・ポイント	インターンシップ実習として実際の企業や組織で就業体験する前に、社会人としてのマナーを学び、企業研究・業界研究を行い職業に関する知識を習得する。 昨今、就職採用試験にて避けては通れないSPIについて体験し、SPIに対応できる力を付ける準備を行う。	
到達目標	1. 社会人として働くため、一般的なビジネスマナーが身についている 2. 業界や企業について調査し、自己分析をした上で、卒業後のキャリアビジョンを描くことができる 3. 就職活動に必要なことが理解でき、準備活動を始めることができる	
授業計画	第1回 オリエンテーション・インターンシップガイダンス 第2回 SPI対策講座1（非言語分野模擬テスト1） 第3回 SPI対策講座2（言語分野模擬テスト2） 第4回 ビジネスマナー研修1 第5回 ビジネスマナー研修2 第6回 ビジネスマナー研修3 第7回 企業研究・業界研究1（外部講師をお招きして話を聞きます） 第8回 企業研究・業界研究2（外部講師をお招きして話を聞きます） 第9回 模擬面接 第10回 SPI対策講座3（非言語分野復習1） 第11回 SPI対策講座4（非言語分野復習2） 第12回 SPI対策講座5（非言語分野復習3） 第13回 SPI対策講座6（言語分野復習） 第14回 SPI模擬テスト（webテスト） 第15回 企業研究・業界研究発表報告会	
評価方法 (合計100%)	・ビジネスマナーテスト 25% ・模擬面接結果 20% ・SPI模擬テスト 25% ・企業研究・業界研究報告書および報告会 30%	
失格条件	ビジネスマナーテスト、模擬面接、SPI模擬テストを受けなかった者 企業研究・業界研究報告書を提出しなかった者	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	インターネットなどで興味のある業界や企業の調査をすることを日頃から心がけること	
課題へのフィード バック	毎回のテストに対してコメントを返します	
教科書	不使用	
著者名		
出版社		
参考書	大内孝夫（2015）『「音大卒」は武器になる』株式会社ヤマハミュージックメディア	
その他		
備考		
科目生への開講	なし	

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	アートマネジメント・インターンシップ実習		
英訳科目名			
担当教員名	志村 聖子、橋田 光代		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー2	<技能>
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	公立文化施設や民間ホール、アートNPO（例：オーケストラ、劇団、フェスティバル運営団体）等において、運営・制作業務などアートマネジメントの現場を経験することにより、実社会の厳しさを学び、社会人としての心構えを身につける。		
到達目標	1. インターンシップを通して、アートマネジメントの現場を実際に体感し把握することができる 2. インターンシップ終了後、自らの経験をまとめ、報告書としてまとめることができる		
授業計画	第1回 オリエンテーション 第2～14回 インターンシップの実施 第15回 報告書提出 ※初回のオリエンテーション以外は、個別対応とする。		
評価方法 (合計100%)	インターンシップ実施状況（企業団体評価を含む）60% インターンシップ報告書提出 40%		
失格条件	インターンシップに行かなかった場合、インターンシップ報告書未提出の場合は失格とする		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	日頃より新聞に目を通し、時事トピックスについて話ができるようにしておくこと。		
課題へのフィード バック	報告書提出後、個別にコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	可能な限り、2週間程度のインターンシップに行くこと		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	アートマネジメント研究		
英訳科目名			
担当教員名	衣川 絵里子		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー2	<技能>
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	ゼミ形式とフィールドワークを併用しながら、関西を中心とするアートマネジメントの「今」を掘り下げていく。アートマネジメントを、成熟した社会を実現するために芸術と社会の関係を探求していくことだと考える場合、その方法論は「時間」「場所」「人」によって大きく変化する。この授業では「教育普及」「社会包摂」を中心に、アートマネジメントの現場に触れながら調査・分析・考察し、それぞれの方法論に迫りたい。		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・アートマネジメントの現場を訪れ、その実態を知ること ・現場視察をもとに分析・考察し、現在のアートマネジメントに関する理解を深めること 		
授業計画	<p>*フィールドワークの訪問先はオリエンテーションで発表する *視察先への交通費や入場料などは自己負担とする *フィールドワークは2時間続けて実施するため、オリエンテーションで時間調整をする</p> <p>第1回 オリエンテーション 第2回 アートマネジメントとは 第3回 教育普及型アートマネジメントとは 第4回 フィールドワーク① 第5回 フィールドワーク② 第6回 フィールドワーク①②のふりかえり 第7回 社会包摂型アートマネジメントとは① 第8回 社会包摂型アートマネジメントとは② 第9回 フィールドワーク③ 第10回 フィールドワーク④ 第11回 フィールドワーク③④のふりかえり 第12回 フィールドワーク⑤ 第13回 フィールドワーク⑥ 第14回 フィールドワーク⑤⑥のふりかえり 第15回 アートマネジメントの可能性と課題</p>		
評価方法 (合計100%)	授業への参加度（参加状況） 50% 授業内提出物 20% 最終レポート 30%		
失格条件	<ul style="list-style-type: none"> ・出席回数が3分の2以上に満たない場合（30分を越える遅刻は欠席、遅刻3回で1回の欠席とする） ・最終レポートを提出しない場合 		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	現地視察の下準備として事前に課題を与えるので、取り組んだ上で授業に参加することを望む (授業時間の2倍程度)		
課題へのフィード バック	授業内提出物については、必要に応じて全体にコメントする		
教科書	授業毎にプリント配布		
著者名			
出版社			
参考書	必要に応じて適宜紹介		
その他	授業の進捗度合いによって、シラバスを変更する可能性がある		
備考	文化施設スタッフとしての実務経験をもとに、この授業を進めます。		
科目生への開講	なし		

ナンバリング	AP408A12	期間	前期
授業科目名	電子回路の基礎		
英訳科目名	Basic of Electronic Circuit		
担当教員名	森本 雅和		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	電子回路実験キットを使って、実際に回路を組みながら、将来音響機器を扱う上で必要な電気回路の基礎を学びます。		
到達目標	舞台機構調整技能検定2級の学科試験範囲「3. 電気」レベルの問題が3分の2以上解くことができる		
授業計画	第1回 オリエンテーション／電気の世界 第2回 静電気と電流／電圧、抵抗 第3回 コイルと電磁誘導 第4回 電子回路実験 1 第5回 電子回路実験 2 第6回 電気回路で使う数学 第7回 コンデンサ 第8回 直流回路 1 第9回 直流回路 2 第10回 電子回路実験 3 第11回 電子回路実験 4 第12回 半導体、ダイオード 第13回 NPN型トランジスタ 第14回 電子回路実験 5 第15回 まとめ		
評価方法 (合計100%)	小テスト 60% 実験レポート 20% 最終試験 20%		
失格条件	なし		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	ほぼ毎回小テストを行いますので、指示する範囲のテスト勉強を行ってください。 また、小テストの結果を基に復習も行ってください。 実験レポートは、実験ごとに課題を出しますので、自分で考えてレポートしてください。 本講義では、小テストおよび最終試験にて理解度を確認し、 実験レポートにて、考える力、考察力を確認します。		
課題へのフィード バック	課題を添削して学生に返却する		
教科書	『キットで遊ぼう電子回路シリーズNO.1 基礎編vol.1』		
著者名	キットで遊ぼう電子回路研究委員会編		
出版社	株式会社アドウィン		
参考書	武原春輝『これでなっとく！電気回路超入門』オーム社 『舞台機構調整技能検定3級試験問題集』兼六館出版 『舞台機構調整技能検定2級試験問題集』兼六館出版 『舞台音響技術概論 改訂版』兼六館出版		
その他	この講義では、ほぼ毎回小テストを行います。 実際に電子回路を組み立てる回路実験を行いますので、実験をする日は汚れても良い服装で受講してください。 舞台機構調整技能士資格取得希望者は必ず受講してください。 実験時には、半田ごてを貸し出します。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	AP407A06	期間	前期
授業科目名	舞台組織機構概論		
英訳科目名	Stage Operations and Technical Management		
担当教員名	長野 武		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ー	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>我が国には、劇場やホールが2,000館以上存在し、現在も各都市において優れた音響性能と設備を有する施設が続々と建設されている。上演回数はいまや欧米をしのぐまでになっている。また海外アーティストの来日公演も頻繁に開催され、都市部においては一流の芸術作品を身近に親しむ機会も多い。</p> <p>そのような状況のなか、演奏家や役者志望者の増加はもちろん、舞台芸術制作や劇場運営に職を求める人が増加し、制作現場においては男女を問わず個々の能力や感性をいかんなく発揮できる職場が用意されている。</p> <p>本講義では、劇場やコンサートホールで舞台芸術を上演するにあたり、制作者として知っておくべき様々な専門分野（劇場・舞台美術・舞台技術、録音・照明・音響、関連法規等）の知識を学ぶ。</p> <p>華やかなステージの感動をつくりあげる舞台芸術制作の仕組みを体系的に学習し理解を深めていく。</p>		
到達目標	<p>国家資格「舞台機構調整技能士（音響調整技能士）」3級の資格取得をめざし、主に筆記試験に必要な知識が習得できる。3級の試験は毎年7月から8月にかけて行われ、8月末に合否が発表される。合格した場合はその合格証を持って、その年の9月末からの受験申請募集で、翌年の1月から2月にかけて行われる2級の受験申請を行うことができる。在学中に2級まで取得して就活を有利にすすめる学生が増えている。</p>		
授業計画	<p>第1回 オリエンテーション/舞台機構調整技能士について</p> <p>第2回 劇場・美術概論①</p> <p>第3回 劇場・美術概論②</p> <p>第4回 劇場・舞台技術概論①</p> <p>第5回 劇場・舞台技術概論②/舞台芸術創造の過程</p> <p>第6回 舞台音響①</p> <p>第7回 舞台音響②</p> <p>第8回 舞台音響③/建築音響</p> <p>第9回 舞台照明①</p> <p>第10回 舞台照明②</p> <p>第11回 映像・放送</p> <p>第12回 電気回路試験対策</p> <p>第13回 ホール・劇場法規</p> <p>第14回 まとめ、内容理解の確認、舞台機構調整技能士試験対策</p> <p>第15回 まとめ、到達度確認</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>定期試験40%</p> <p>授業への参加態度40%</p> <p>小テスト等20%</p>		
失格条件	評価総合60%以下のもの		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>本講義では劇場・ホールの運営、公演の実際を解説する。授業以外でも積極的に舞台芸術（演劇、コンサート等）に触れる時間を設けて欲しい。講義への理解がより深まることだろう。また毎回国家試験の出題傾向を説明する。1講義あたり約1時間の予・復習を行うこと。</p>		
課題へのフィード バック	<ul style="list-style-type: none"> ・国家試験問題の理解を深めるため世界のホールの動画や民族楽器の音色等を試聴します。 ・小テスト後、国家試験出題内容に即して解説を行います。 ・ホール設計の実務者としてのホール技術とホール業界の最新情報を提供します。 		
教科書	舞台音響技術概論 改訂版		
著者名	監修：半田健一		
出版社	兼六館出版株式会社		
参考書	<p>□舞台技術の共通基礎 公演に携わるすべての人々に 劇場等演出空間運用基準協議会 ●B5判 231頁 定価2,500円+税 ISBN978-4-904894-18-7 株式会社フリックスタジオ</p> <p>□舞台機構調整技能検定3級試験問題集改訂増補版 ●A5判 127頁 定価1,600円+税 ISBN978-4-87462-074-8 兼六館出版株式会社</p>		
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	AP407A07	期間	前期
授業科目名	録音の技術と表現/レコーディング・エディットA		
英訳科目名	Recording & Editing A		
担当教員名	能美 亮士		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ○	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	音楽に電気音響テクノロジーが援用されるようになり1世紀以上が経過している。本講義では、録音の基礎的な技術を習得するとともに表現手段としての可能性を考察する。		
到達目標	録音音楽の基礎技術である「録音」と「再生」を深く理解するとともに、録音・再生・編集・検聴それぞれの工程で必要となる基礎知識を身につけることができる。		
授業計画	第1回 音楽と録音技術の歴史 第2回 録音音楽の再生 - モノフォニックとステレオフォニック - 第3回 ポータブル・レコーダー - 機能・名称・用語の解説 - 第4回 ポータブル・レコーダー - 録音（楽器） - 第5回 ポータブル・レコーダー - 録音（環境音） - 第6回 ポータブル・レコーダー - 編集 - 第7回 検聴 第8回 DAW（Digital Audio Workstation） - レコーディング・システムの解説 - 第9回 DAW（Digital Audio Workstation） - トラックリング - 第10回 DAW（Digital Audio Workstation） - マイクキング - 第11回 DAW（Digital Audio Workstation） - 編集 - 第12回 DAW（Digital Audio Workstation） - ミキシング - 第13回 DAW（Digital Audio Workstation） - マスタリング - 第14回 試験 - 内容理解の確認 - 第15回 まとめ		
評価方法 (合計100%)	・授業への参加態度 70% ・試験 30%		
失格条件	4回以上の欠席		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	・講義で紹介する文献・資料に関して、事前に目を通しておくこと（予習2時間） ・講義で習得した技術について、学校や身の回りにある音響機器、およびソフトウェアなどを用いて熟知すること（復習2時間）		
課題へのフィード バック	試験後の授業にて、全体に向けてコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書	適時指示します。		
その他	特になし		
備考	音響エンジニアとしての実務経験をもとに、この授業を進めます。		
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	音響学A		
英訳科目名			
担当教員名	能美 亮士		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー-2	<技能>
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	本講義では、音楽の視点から電気音響工学を概観するとともに、これらの技術を援用する際に生じるさまざまな現象や問題を論理的に解説する。		
到達目標	電気音響工学の基礎知識を広く学べるとともに、音や音楽に電気音響テクノロジーを援用する際、論理的に運用できる。		
授業計画	第1回 音楽と電気 第2回 モノフォニックとステレオフォニック 第3回 モノラルとバイノーラル 第4回 音の拡声とスピーカー（種類の解説） 第5回 音の拡声とスピーカー（動作原理の解説） 第6回 音の收音とマイクロフォン（種類の解説） 第7回 音の收音とマイクロフォン（動作原理の解説） 第8回 音の拡声とアンプリファイヤ（種類の解説） 第9回 音の拡声とアンプリファイヤ（動作原理の解説） 第10回 音声用ケーブル（種類の解説） 第11回 ミキシングコンソール 概論 第12回 ミキシングコンソール プリアンプ・イコライザー 第13回 ミキシングコンソール AUX・フェーダー・PAN 第14回 試験 - 内容理解の確認 - 第15回 まとめ		
評価方法 (合計100%)	<ul style="list-style-type: none"> ・授業への参加態度 70% ・試験 30% 		
失格条件	4回以上の欠席		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<ul style="list-style-type: none"> ・講義で紹介する文献・資料に関して、事前に目を通しておくこと（予習2時間） ・講義で習得した技術について、学校や身の回りにある音響機器、およびソフトウェアなどを用いて熟知すること（復習2時間） 		
課題へのフィード バック	試験後の授業にて解答の解説を行う。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書	適時指示します。		
その他	特になし		
備考	音響エンジニアとしての実務経験をもとに、この授業を進めます。		
科目生への開講	なし		

ナンバリング	期間		後期
授業科目名	音響学B		
英訳科目名			
担当教員名	能美 亮士		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー-2	<技能>
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	本講義では、音楽の視点から電気音響工学を概観するとともに、これらの技術を援用する際に生じるさまざまな現象や問題を論理的に解説する。		
到達目標	電気音響工学の基礎知識を広く学べるとともに、音や音楽に電気音響テクノロジーを援用する際、論理的に運用できる。		
授業計画	第1回 アナログ音声信号とデジタル音声信号 第2回 ビットとサンプリング周波数 第3回 音の解像度 ハイレゾリューションとローレゾリューション 第4回 音楽の複製 第5回 無線と有線 第6回 音の音色 第7回 ノイズと歪み 第8回 フィールド・レコーディングとスタジオ・レコーディング -音楽と空間- 第9回 音像定位 第10回 音声の圧縮 第11回 音量 Loudness War 第12回 マスタリングの役割 第13回 録音物のアーカイブとサウンド・リペア 第14回 試験 - 内容理解の確認 - 第15回 まとめ		
評価方法 (合計100%)	・授業への参加態度 70% ・試験 30%		
失格条件	4回以上の欠席		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	・講義で紹介する文献・資料に関して、事前に目を通しておくこと (予習2時間) ・講義で習得した技術について、学校や身の回りにある音響機器、およびソフトウェアなどを用いて熟知すること (復習2時間)		
課題へのフィード バック	試験後の授業にて解答の解説を行う。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書	適時指示します。		
その他	特になし		
備考	音響エンジニアとしての実務経験をもとに、この授業を進めます。		
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	サウンド・リインフォースメント		
英訳科目名			
担当教員名	能美 亮士		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー2	<技能>
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	音楽に電気音響テクノロジーが援用されるようになり1世紀以上が経過している。 本講義では、電気音響テクノロジーによる音声の拡声原理や音響機器の操作方法を学ぶとともに、これらの技術を概観する。また、舞台機構調整技能士3級 実技試験の試験対策を兼ねた内容となる。		
到達目標	マイクロフォン、アンプ、スピーカー、ミキサーといった音響機器を用い、音や音楽を拡声する基礎技術を取得できる。		
授業計画	第1回 音楽と電気技術の歴史 第2回 システム セットアップ - 基礎システム - 第3回 音の拡声とスピーカーの解説 第4回 音の收音とマイクロフォンの解説 第5回 システム セットアップ - 簡易システム - 第6回 音声ケーブルの解説 第7回 ライブ・コンソールの解説 - 基礎編 - 第8回 ライブ・コンソールの解説 - 応用編 - 第9回 システム セットアップ - 音楽システム - 第10回 音の拡声とアンプリファイアの解説 第11回 オーディオ・プロセッサとモニターシステムの解説 第12回 ブロックダイアグラムの作成 第13回 タイムスケジュールとオペレーティング 第14回 試験 - 内容理解の確認 - 第15回 まとめ		
評価方法 (合計100%)	<ul style="list-style-type: none"> ・授業への参加態度 70% ・試験 30% 		
失格条件	4回以上の欠席		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<ul style="list-style-type: none"> ・講義で紹介する文献・資料に関して、事前に目を通しておくこと（予習2時間） ・講義で習得した技術について、学校や身の回りにある音響機器、およびソフトウェアなどを用いて熟知すること（復習2時間） 		
課題へのフィード バック	試験後の授業にて、全体に向けてコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書	適時指示します。		
その他	特になし		
備考	音響エンジニアとしての実務経験をもとに、この授業を進めます。		
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	集中
授業科目名	プログラミング I A		
英訳科目名			
担当教員名	小橋 昌司		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー-2	<技能>
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	<p>プログラミングとは、与えられた問題を計算する手順（アルゴリズムとよぶ）を明らかにし、それをプログラム言語で記述することで行える。本講義では、プログラミングの考え方、アルゴリズム構築法Scratchを題材に行い、次に、プログラム作成環境及び具体的なプログラミングの講義をopen frameworksを用いて行う。</p> <p>プログラミングの初めの一步として、プログラミングの考え方、楽しさ、面白さを理解するのが本授業の一番のポイントである。</p>		
到達目標	<p>アプリケーション開発の流れを理解し、プログラム環境の操作習得、プログラミングの基礎を習得できる。簡単なインタラクティブな動作を行うアプリケーションを構築できる。</p>		
授業計画	<p>第1回 プログラミング概略. Scratchの紹介 第2回 Scratchでのプログラミングの仕方 第3回 プログラミングの流れと繰り返し 第3回 座標系 第4回 変数 第5回 条件分岐 第6回 入出力 第7回 課題演習 第8回 open frameworksによるプログラミング環境 第9回 コンピュータグラフィックス 第10回 数値計算 第11回 コンピュータアニメーション 第12回 条件分岐制御 第13回 入出力インターフェース 第14回 コンピュータサウンド 第15回 課題演習</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>授業への参加態度 40% 課題 60%</p>		
失格条件	<p>出席回数が3分の2以上に満たない場合は失格とします。 最終課題を未提出の場合は失格とします。</p>		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>予習として、教科書のサンプルコードをあらかじめダウンロードし、教科書記述の手順に従い実行して下さい。 授業では、予習済みとして進行します。パソコン室以外にも各自私有のパソコン(windows, macOSなど)でも同じ開発環境を構築できます。</p>		
課題へのフィード バック	<p>講義中にコメントする</p>		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	集中
授業科目名	プログラミングⅡA		
英訳科目名			
担当教員名	小橋 昌司		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー2	<技能>
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	本講義では、マルチメディアアプリケーションの開発に必要な、プログラミングの開発手順、アルゴリズム構築、プログラム言語（C++）の講義を行う。		
到達目標	アプリケーション開発の流れを理解し、プログラム環境の操作習得、プログラミング言語を習得できる。簡単なインタラクティブな動作を行うマルチメディアアプリケーションを構築できる。		
授業計画	第1回 マルチメディアアプリケーション概略 第2回 マルチメディア指定課題の構想 第3回 マルチメディア指定課題の実装 1 第4回 マルチメディア指定課題の実装 2 第5回 マルチメディア指定課題の実装 3 第6回 マルチメディア指定課題の実装 4 第7回 マルチメディア指定課題の実装 5 第8回 マルチメディア自由課題の構想 第9回 マルチメディア自由課題の実装 1 第10回 マルチメディア自由課題の実装 2 第11回 マルチメディア自由課題の実装 3 第12回 マルチメディア自由課題の実装 4 第13回 マルチメディア自由課題の実装 5 第14回 マルチメディア自由課題の実装 6 第15回 自由課題アプリケーションコンテスト		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 40% 課題 60%		
失格条件	出席回数が3分の2以上に満たない場合は失格とします。 最終課題を未提出の場合は失格とします。		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	予習として、教科書のサンプルコードをあらかじめダウンロードし、教科書記述の手順に従い実行して下さい。 授業では、予習済みとして進行します。パソコン室以外にも各自私有のパソコン(windows, macOSなど)でも同じ開発環境を構築できます。		
課題へのフィード バック	講義中にコメントする		
教科書	授業にて配布		
著者名			
出版社			
参考書	Beyond Interaction [改訂第2版] クリエイティブ・コーディングのためのopenFrameworks実践ガイド 田所 淳、齋藤あきこ ビー・エヌ・エヌ新社 978-4-86100-869-6		
その他	授業にてUSBメモリを使用しますので、毎回持参ください。空き容量16GB以上必要、高速読み書き可能なものが望ましい。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	プログラミング I B		
英訳科目名			
担当教員名	森本 雅和		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー-2	<技能>
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	<p>プログラミングIAで習得したプログラミング開発の基礎を元に、実際にプログラムを動作させながらその原理を学ぶとともに、プログラミング技術を身につける事を目的とする。</p> <p>本講義では、アプリケーションとしてコンピュータグラフィックス、コンピュータミュージックを題材に、プログラミングの開発手順、アルゴリズム構築、プログラム言語（C++）の講義を行う。</p>		
到達目標	<p>アプリケーション開発の流れを理解し、プログラム環境の操作習得、プログラミング言語を習得できる。簡単なインタラクティブな動作を行うコンピュータグラフィックス・ミュージックアプリケーションを構築できる。</p>		
授業計画	<p>第1回 プログラミング概略。開発環境の構築と使い方 第2回 プログラミング入門（入力とコンパイル、実行手順） 第3回 画像の描画 第4回 コンピュータグラフィックス 第5回 計算機での数値表現 第6回 プログラムの制御 第7回 配列と乱数 第8回 コンピュータミュージック 第9回 アニメーション 第10回 条件式 第11回 インタラクションの基礎：マウスで操作する 第12回 自由課題アプリケーション構想 第13回 自由課題アプリケーション開発 第14回 自由課題アプリケーション開発 第15回 最終課題アプリケーション発表</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>授業への参加態度 (40%) 課題の提出 (60%)</p>		
失格条件	出席回数が3分の2以上に満たない場合は失格とする。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	各自の私有パソコンでも、すべて無料でプログラム開発環境を構築できる。自宅でプログラミングできる環境を整え、予習・復習することが望ましい。		
課題へのフィード バック	講義中にコメントする		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書	「Beyond Interaction [改訂第2版] クリエイティブ・コーディングのためのopenFrameworks実践ガイド」田所淳, 齋藤あきこ, ビー・エヌ・エヌ新社		
その他	空き容量8GB以上のUSBメモリを用意すること。高速タイプ（USB3.0）であることが望ましい。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	プログラミングⅡB		
英訳科目名			
担当教員名	森本 雅和		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー-2	<技能>
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	これまでに習得してきたプログラミングの基礎を元に、音楽や映像、コンピュータグラフィックスをプログラムで扱う方法について学ぶ。 オリジナルの音楽・映像・CGアプリケーションを作成する。		
到達目標	映像や音楽、コンピュータグラフィックスを活かしたアプリケーションを作成できる。		
授業計画	第1回 「コンピュータグラフィックスの基礎」 第2回 「GUIの利用法」 第3回 「音楽ファイルの操作」 第4回 「音の周波数解析」 第5回 「三次元座標と回転」 第6回 「回転を利用したアニメーション」 第7回 「テクスチャマッピング」 第8回 「プロジェクションマッピング」 第9回 「3DCGのカメラワーク」 第10回 「3DCGにおけるマウスの利用」 第11回 「オリジナルアプリケーション開発の企画書作成」 第12回 「オリジナルアプリケーションの制作その1」 第13回 「オリジナルアプリケーションの制作その2」 第14回 「オリジナルアプリケーションのプレゼンテーション資料作成」 第15回 「オリジナルアプリケーションの発表会」		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 (40%) 課題の提出 (60%)		
失格条件	出席回数が3分の2以上に満たない場合は失格とする。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	各自の私有パソコンでも、すべて無料でアプリケーション開発環境を構築できる。 自宅でプログラミングできる環境を整え、予習・復習することが望ましい。		
課題へのフィード バック	講義中にコメントする		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書	「Beyond Interaction [改訂第2版] クリエイティブ・コーディングのためのopenFrameworks実践ガイド」 田所 淳、齋藤あきこ、ビー・エヌ・エヌ新社		
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	コンテンツデザイン研究A		
英訳科目名			
担当教員名	片寄 晴弘		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー2	<技能>
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	本科目では、音楽系コンテンツの制作を通じて、コンテンツ制作に携る際に必要となる知識、スキルを習得していくことを目的とする。制作実習については、マルチメディアオーサリングソフトMAXの利用を基本とするが、制作物の内容によってはその限りではない。		
到達目標	コンテンツ制作における企画・計画の策定技術、MAXによるプログラミングスキルの習得することができる。		
授業計画	第1回 ガイダンス, ラミング基礎 (その1) 第3回 MAXプログラミング基礎 (その2) 第4回 作品の企画・計画の策定 (その1) 第5回 作品の企画・計画の策定 (その2) 第6回 作品の企画・計画の策定 (その3) 第7回 作品制作 (その1) 第8回 作品制作 (その2) 第9回 作品制作 (その3) 第10回 中間評価 第11回 作品制作 (その4) 第12回 作品制作 (その5) 第13回 作品制作 (その6) 第14回 合評準備 第15回 作品合評		
評価方法 (合計100%)	作品およびそのプレゼンテーション 80% 最終レポート 20%		
失格条件	上記、評価方法であげた項目の不提出ならびに不実施があれば、欠格とする。また、欠席回数が全授業回数の1/3を上回った場合に欠格とする。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	作品制作には多くの時間を要する。講義(演習)時間以外も含めた真摯な取り組みを求める。(課外制作4時間)		
課題へのフィード バック	第15週: 作品合評 にて、個々の作品の改善事項等について教示する。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他	作品合評において優秀と認められた作品については、学生コンテストへの応募に向け、別途、サポートを行う。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	コンテンツデザイン研究B		
英訳科目名			
担当教員名	橋田 光代		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ○	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> △	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ○
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> △	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	演奏データベースの制作をテーマとして、涉外、楽譜制作、録音・編集、録音物のデータ整理、インタビュー（アンケート調査）など、音楽の研究や仕事における種々の実作業を複合的かつ総合的に実践する。これらの作業を通じて、音楽シーンの現状や人間の音楽に対する捉え方について、音楽情報学的アプローチに基づくデジタルコンテンツ制作の各種手法を身につける。		
到達目標	音楽におけるデジタルコンテンツの制作を行うことができる。 音楽制作プロダクションに関する手法を全体的に見通すことができる。 楽譜や録音物などのデータ管理について、一通り扱うことができる。		
授業計画	<p>アマチュアからプロまで各分野の演奏者の協力を得ながらの演奏収録実習と、収録データを用いた事例分析のワークを主軸とする。分析のテーマは各自で決め、個人またはグループ単位で研究・制作発表・ディスカッションを行う。</p> <p>基本的に下記の流れで進めていくが、履修生の進捗状況に応じて、順番や配分・予定は変更することがある。</p> <p>第1回 収録・編集ツール整備 第2回 ピアノ録音実習 第3回 事例研究：演奏表情データベースPEDBプロジェクト 第4回 収録テーマ企画・立案 第5回 収録1：涉外、楽譜準備、アンケート用紙制作 第6回 収録1：演奏収録、演奏者インタビュー 第7回 収録1：演奏データ編集 第8回 収録2：涉外、楽譜準備、アンケート用紙制作 第9回 収録2：演奏収録、演奏者インタビュー 第10回 収録2：演奏データ編集 第11回 収録3：涉外、楽譜準備、アンケート用紙制作 第12回 収録3：演奏収録、演奏者インタビュー 第13回 収録3：演奏データ編集 第14回 事例研究：演奏分析1 第15回 事例研究：演奏分析2 第16回 まとめ、研究発表</p>		
評価方法 (合計100%)	授業への積極的な参加 100% 個別ミーティングを欠席すれば、1において1回あたり8%を減ずる。		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>収録日（授業日）だけ参加すればいいというものではなく、収録当日を円滑に進めるための事前準備、収録物を有効活用するための事後処理がセットになって初めて企画の意義や全体像が把握できます。そのための第一段階として、収録機器や音楽編集ソフトについては毎日でも使いこなすことが重要です。</p> <p>以下、本科目を円滑に進める最低限の時間／週の目安です。時期によって課題が異なるので、適宜配分すること。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・チームメンバー（履修生）や教員、演奏者と密に話し合う 2時間 ・収録用楽譜を作成する 3時間 ・収録した演奏データを改めて聴き込む 4時間 		
課題へのフィードバック	毎週の授業を通して、各自の進捗状況を確認、フィードバックを適宜行います。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書	進捗に合わせて適宜指示する。		
その他	演奏収録に最低限必要な機材は用意しますが、個人でいつでも作業できるよう、自分専用のノートパソコンや音楽ソフトをできるだけ用意してください。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	CM408A11/AP408A05	期間	前期
授業科目名	音楽情報処理入門/音楽情報処理A		
英訳科目名	Information Processing of Music A		
担当教員名	橋田 光代		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ○	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> △	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	今や音楽制作の多くのプロセスにおいてコンピュータが使われている。音を出す装置という点において、ピアノやギターなど見慣れた楽器もからくり機械と同じである。本科目では、音・映像の制作・演奏に用いられるプログラミングソフト「Max」を利用し、音の高さや音色に始まる音楽の諸要素を、コンピュータではどのように扱うのかを、実験を含みつつ概観する。		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・いわゆる音楽の三要素（リズム、メロディー、ハーモニー）に対する理解を深めることができる。 ・いわゆるコンピュータプログラミングの基礎的な作法を理解することができる。 ・みずから音色や音響そのものを作り出すことで、身近にある音楽や音の仕組みに対する興味・関心を深めることができる。 		
授業計画	<p>基本的に下記の流れで進めていくが、履修者の理解状況に応じて順番や配分・予定を変更する場合がある。</p> <p>第1回 オブジェクトを線でつなぐ、数値を操る 第2回 手入力と自動制御（キーボード、マウス、metro） 第3回 時間計測とリズム onset, tempo, delay/pipe, timer 第4回 数え上げと条件分岐 counter, selector, gate 第5回 MIDI (1) notein/out, makenote, pgmout 第6回 MIDI (2) 音価、和音、シーケンス 第7回 計算とグラフ math, expr, table 第8回 リアルタイム入出力 第9回 画面操作 1 第10回 画面操作 2 第11回 画像操作 第12回 動画・音声の利用 第13回 応用演習 1 第14回 応用演習 2 第15回 授業内試験</p>		
評価方法 (合計100%)	<ul style="list-style-type: none"> ・授業への参加態度： 50% ・授業内試験： 50% <p>授業を欠席すれば、「授業への参加態度」において1回あたり8%を減ずる。</p>		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<p>初歩的な数学・英語を扱います。不安がある人は、ポータルサイトのSSドリルや、中学・高校の参考書・問題集などで日々自習してください。</p> <p>本科目は、専用ソフトウェアを用いた演習が中心です。コツをつかむまではかなり「難しい」と感じると予想されます。授業時間以外も積極的に自習をしてください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業で示されたポイントの復習・応用練習 2時間 ・適宜示される課題の制作 2時間 		
課題へのフィード バック	毎週、簡単な課題が出ます。翌週のはじめにその振り返りを行います。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書	<p>「[Max]ではじめるサウンドプログラミング」 松村 誠一郎 著/工学社 ISBN978-4-7775-2021-3 C3004 1,900円</p> <p>「2061:Maxオデッセイー音楽と映像をダイナミックに創造する!最高の開発環境を徹底解説」 ノイマンピアノ 著/リットーミュージック ISBN: 978-4845613618 7,510円</p> <p>「Maxの教科書」 ノイマンピアノ 著/リットーミュージック ISBN: 978-4845617029 5,040円</p> <p>「はじめてのMax/MSP/Jitter」 大谷 安宏 著/ビー・エヌ・エヌ新社 ISBN: 978-4861006289 3,570円</p> <p>このほか、進行状況に合わせて適宜指示する。</p>		
その他	特になし		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	CM408A12/AP408A06	期間	後期
授業科目名	音楽情報処理/音楽情報処理B		
英訳科目名	Music Information Processing B		
担当教員名	橋田 光代		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ○	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> △	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> ー
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ー	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	Maxプログラミングを通じて、インタラクティブなサウンド作品創作のための手法と音楽情報処理の仕組みを学ぶ。みずからが表現者という立場を経験することで、作品に対する鑑賞力、作品をプロモートするのに必要な視点について理解を深める。		
到達目標	マルチメディアコンテンツ制作におけるワークフローを理解できる。 みずから音色や音響そのものを作り出すことで、身近にある音楽や音の仕組みに対する興味・関心を深めることができる。		
授業計画	<p>基本的に下記の流れで進めていくが、履修者の理解状況に応じて時間配分は調整する。</p> <p>第1回 Max入出力、基本文法の復習 第2回 録音、サウンドファイルの編集1 第3回 録音、サウンドファイルの編集2 第4回 音響処理：ピッチシフト、タイムストレッチ 第5回 音響処理：正弦波、周波数制御 第6回 音響処理：加算合成 第7回 音響処理；ノイズ 第8回 動画処理：カメラ、動画入力 第9回 動画処理：フィルター、タイムストレッチ 第10回 サウンド処理との連携 第11回 応用演習1 第12回 応用演習2 第13回 応用演習3 第14回 応用演習4 第15回 作品発表会</p>		
評価方法 (合計100%)	1. 授業への参加態度 50% 2. 研究成果のプレゼンテーション 50% 授業を欠席すれば、「授業への参加態度」において1回あたり8%を減ずる。		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	表現する側の視点に立って「この作品はどのように作られたのか」を常に観察する姿勢が求められます。授業時間に関わらず、随時教員と議論しにきてください。内容によっては、事前に資料を用意してください。		
課題へのフィード バック	毎週、簡単な課題が出ます。翌週の授業のはじめにその振り返りを行います。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書	「[Max]ではじめるサウンドプログラミング」 松村 誠一郎 著/工学社 ISBN978-4-7775-2021-3 C3004 1,900円 「2061:Maxオデッセイー音楽と映像をダイナミックに創造する!最高の開発環境を徹底解説」 ノイマンピアノ 著/リットーミュージック ISBN: 978-4845613618 7,510円 「Maxの教科書」 ノイマンピアノ 著/リットーミュージック ISBN: 978-4845617029 5,040円 「はじめてのMax/MSP/Jitter」 大谷 安宏 著/ピー・エヌ・エヌ新社 ISBN: 978-4861006289 3,570円 このほか、進行状況に合わせて適宜指示する。		
その他	初回授業時点で、下記のいずれかの経験・スキルを有していることを前提に進めます。 1. 「音楽情報処理A」を履修済である。 2. Maxを用いたプログラミングを自作したことがある。 3. C, Java, Scratch, C++ その他、何らかの言語・ツールによるプログラミングをある程度理解している。 いずれにも該当しない場合は、事前に担当教員の面談を受けてください。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	I T 音楽産業概論		
英訳科目名			
担当教員名	森本 雅和		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー2	<技能>
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	<p>インターネットはその歴史を1950年代のコンピュータネットワークの誕生に遡るが、いまや社会の経済・生活の基盤（ベース・インフラ）としてWebと共にすっかり定着している。また、近年の通信システムの高速化やスマートフォンの普及と共に、音楽配信、クラウドコンピューティング、さらにはSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）の出現により、音楽産業もCDを中心とした古い流通・利権中心のビジネスモデルの崩壊が進み、新しいビジネスが創出されつつある。</p> <p>本講義では、こうした変貌する音楽産業について現状と問題点、および将来展望を学ぶ。</p>		
到達目標	<p>「音楽マネジメント学科」の各種科目における基本科目として、後年の履修科目への知識ベースとなるものを身につける。</p> <p>インターネットの歴史や仕組み、その代表的なサービスなどについて知識を得ると共に、音楽のデジタル化が音楽産業に与えてきた影響について理解を深める。最新の音楽ビジネスの動向について知識を得る。</p>		
授業計画	<p>第1回 「クラス概要」</p> <p>第2回 「インターネットの歴史と仕組み」 IPアドレスとドメイン名</p> <p>第3回 「インターネットの接続方式と通信速度」 インターネットプロバイダ、無線データ通信方式、MVNO</p> <p>第4回 「SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）」 Line, Twitter, facebook, YouTube</p> <p>第5回 「クラウドコンピューティング」 オンラインストレージ、クラウドと音楽、クラウドソーシング</p> <p>第6回 「音楽のデジタル化と圧縮方式」 サンプリング、MP3、ハイレゾ</p> <p>第7回 「日本の音楽産業の現状」</p> <p>第8回 「インターネット上の音楽産業」 音楽のダウンロード販売、音楽配信サービス</p> <p>第9回 「音楽と著作権」 著作権、著作隣接権、フェアユース、私的複製</p> <p>第10回 「日本音楽著作権協会JASRAC」</p> <p>第11回 「デジタル著作権管理技術」 コピーガード、DRM、</p> <p>第12回 「動画共有サイトと個人配信」 Youtube、ニコニコ動画、Ustream</p> <p>第13回 「VOCALOID」</p> <p>第14回 「ソーシャルメディア時代の音楽産業」</p> <p>第15回 「履修内容のまとめ」</p>		
評価方法 (合計100%)	<p>授業への参加態度 30% (クラスでの質問、教員や他学生とのコミュニケーションも含む)</p> <p>小テスト・レポート 30% (3回程度レポート課題を提出)</p> <p>期末レポート 40%</p>		
失格条件	出席回数が3分の2以上に満たない場合は失格とする。		
予習・復習の準備 学習などのアドバイス	日頃から最新の音楽業界の動向や新しいIT技術について、情報収集を心がけること。		
課題へのフィード バック	レポートにコメントを付けて返却しますので、どのような点に注意すればよいか理解を深めてください。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書	<p>「ソーシャル時代に音楽を“売る”7つの戦略 “音楽人”が切り拓く新世紀音楽ビジネス」 山口哲一、松本拓也、殿木達郎、高野修平 著</p> <p>「音楽配信はどこへ向かう？ アップル、ソニー、グーグルの先へ…ユーザーオリエンテッドな音楽配信ビジネスとは？」 小野島大 著</p> <p>「始まりを告げる〈世界標準〉音楽マーケティング」 高野修平 著</p>		
その他			
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング	期間	前期
授業科目名	メディア情報学	
英訳科目名		
担当教員名	片寄 晴弘	
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー2 <技能>
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー4 <関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー6
授業概要・ポイント	本講義科目では、メディア情報を計算機上で表現・操作する際の起点ともいべきモノの見え方、聞こえ方に関する基本事項、物理・心理・プログラミングとの関係について解説を行う。また、インターネットの仕組み、CGと楽音合成の基礎、データ圧縮の原理について説明する。現在、ITツールとして、スマートフォンやパーソナルコンピュータが必携となっているが、それらを支えている技術や考え方を理解することを目指す。	
到達目標	メディア情報をコンピュータで扱うための仕組み、ネットワーク(LAN)構成のための基礎知識の習得することができる。	
授業計画	第1回 ガイダンス 第2回 メディア技術の最前線 第3回 音と聴覚 第4回 光と視覚 第5回 CGの数理（モデリング） 第6回 CGの数理（レンダリング） 第7回 メディア情報の計算機への入力 第8回 メディア情報の計算機上での表現と操作 第9回 インターネットの仕組み 第10回 インターネット設定と応用 第11回 HTML入門 第12回 メディア情報の圧縮技術 第13回 メディア情報の評価（心理学実験、生理計測） 第14回 ヒューマン・コンピュータ・インタラクション 第15回 総合復習	
評価方法 (合計100%)	授業中に課す数回のレポートの内容 100%	
失格条件	欠席回数が全授業回数の1/3を上回る、もしくは、レポートの提出が行われなかった場合に欠格とする。	
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	普段からIT系のニュースに目を通す習慣をつけておくこと。（予習2時間） レポート課題の準備をすること（復習2時間） ノートパソコンを購入し、自身で管理する準備をしておくことが望ましい。	
課題へのフィード バック	授業中に適宜課すレポートについて、改善点についての指導を実施する。	
教科書	不使用	
著者名		
出版社		
参考書		
その他	特になし	
備考		
科目生への開講	なし	

ナンバリング		期間	後期
授業科目名	ビジネス会計学		
英訳科目名			
担当教員名	松谷 葉子		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー-2	<技能>
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	ビジネス会計検定試験3級相当の財務諸表に関する知識を身につけ、実在する日本企業を事例に、財務諸表から経営分析を行う。		
到達目標	1. ビジネス会計検定試験3級に合格できる知識を身につける 2. 事例企業の有価証券報告書などの開示データから企業戦略を考察し、経営分析ができる		
授業計画	第1回 オリエンテーション／財務諸表とは何か 第2回 貸借対照表の構造と読み方① 第3回 貸借対照表の構造と読み方② 第4回 貸借対照表の構造と読み方③ 第5回 損益計算書の構造と読み方① 第6回 損益計算書の構造と読み方② 第7回 キャッシュ・フロー計算書の構造と読み方① 第8回 キャッシュ・フロー計算書の構造と読み方② 第9回 財務諸表分析 ① 百分比財務諸表分析 第10回 財務諸表分析 ② 成長性分析、安全性分析 第11回 財務諸表分析 ③ 収益性分析 第12回 財務諸表分析 ④ 株価 第13回 財務諸表分析 ⑤ 労働効率 第14回 最終試験① →小テストのまとめ試験 第15回 最終試験② →ビジネス会計検定試験の模試のようなもの		
評価方法 (合計100%)	小テスト 70% レポート課題 10% 最終試験 20%		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	毎回の小テストは都度復習し、わからなかったところはすぐに解決できるようにしてください。		
課題へのフィード バック	毎回小テストを行い、その結果に対して、都度コメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書	大阪商工会議所『ビジネス会計検定試験公式テキスト3級 第3版』中央経済社 大阪商工会議所『ビジネス会計検定試験公式過去問題集3級 第3版』中央経済社 EDINET（有価証券報告書等の開示書類閲覧サイト）		
その他	毎回小テストを課します。 最終試験とレポート課題で最終判定します。 経営学系の大学院受験を考えている方は、できるだけ受講してください。		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング		期間	集中
授業科目名	経営戦略論		
英訳科目名			
担当教員名	松谷 葉子		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー-2	<技能>
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	経営戦略論、組織論を学び、企業の事例研究を行う		
到達目標	1. 先行研究の調査ができる 2. 事例研究を通じて、自分自身の考えをまとめ、報告することができる		
授業計画	第1回 オリエンテーション／戦略要因分析 第2回 外部環境① 第3回 外部環境② 第4回 内部組織① 第5回 内部組織② 第6回 事業戦略 第7回 敵対的競合関係と競争のダイナミクス 第8回 企業戦略 第9回 企業合併と買収 (M & A) 戦略 第10回 事例研究① 第11回 国際戦略・協調戦略 第12回 事例研究② 第13回 コーポレートガバナンス／組織構造とコントロール 第14回 事例研究③ 第15回 最終試験		
評価方法 (合計100%)	レポート課題 80% 最終試験 20%		
失格条件	なし		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	毎回次回までに調べなければならない課題を出します。 理論を元に、事例研究することで、自分自身の考えを報告していただきます。 ほぼ毎回レポート課題を出します。 最終試験では、講義の中で培った自身の考えを述べていただく小論文形式の試験を行います。		
課題へのフィード バック	毎回の課題に関してディスカッションを行い、その中でコメントを返します。		
教科書	戦略経営論 ―競争力とグローバリゼーション― 改訂新版		
著者名	Michael A. Hitt, R. Duane Ireland, Robert E. Hoskisson 久原正治、横山寛美 監訳		
出版社	センゲージラーニング株式会社		
参考書	Jay B. Barney 岡田正大訳 (2003) 『企業戦略論 【競争優位の構築と持続】 基本編』 ダイヤモンド社		
その他	経営学系の大学院受験を考えている方は、できるだけ受講してください。		
備考			
科目生への開講	あり		

ナンバリング		期間	集中
授業科目名	マーケティング論		
英訳科目名			
担当教員名	日置 弘一郎		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー2	<技能>
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	マーケティングの基礎知識を与え、現在マーケティングの理論が低迷している状況とその原因を説明する。さらに、商品として音楽を捉えたときに、最先端のビジネスモデル論が妥当することを論じる。		
到達目標	身の回りの商品や音楽がいかにして商品となっ散るかを理解することができる。		
授業計画	<p>第1回 マーケティングの意味 歴史的にマーケティングが必要となった経緯を探る。大量生産ー大量販売という枠組みの中で考える。</p> <p>第2回 流通の形態を考える。市から始まる不特定の相手に販売する行為が行われる。見込み生産や在庫を持つなど、現在の当たり前は逸成立したのか。</p> <p>第3回 広告の開始。広告媒体が成立して、広告が有効となる。雑誌や新聞がその媒体であったが、ビラなどの小規模媒体も考慮しなければならない。</p> <p>第4回 量販店という形態による変化。対面販売によらない販売が可能となるためには消費者が商品知識を持っていることが必要であるが、それをどこから得ているのか。</p> <p>第5回 大量宣伝による大量販売の成立。しかし、このときに誰にお売れるという枠組みが成立しないことが明らかになる。市場分割と市場標的の設定。</p> <p>第6回 マスマーケティングの成立。市場の有効な分割により、大きな成果を上げることができたのは1970年代までである。</p> <p>第7回 マスマーケティングの行き詰まり。消費者の多様化、豊かさの上昇により、同じものを大量にという商品がほとんどなくなった。市場を細分化しても有効ではない。</p> <p>第8回 消費行動の現状。属性により消費が決まるという前提が崩れている。全く自由に消費を決定できる状況に対応するマーケティング理論は存在しない。</p> <p>第9回 音楽を売る。最も早い音楽の商業科は音楽科による演奏の提供である。これは即時性によって制約され、生産と同時に消費され、ストックができないという性格を持つ。</p> <p>第10回 媒体による音楽商品の成立。最も早い形態は楽譜であった。楽譜による音楽の再現が普及した。このときに作曲家が自ら採譜するとは限らない。</p> <p>第11回 レコードの発明と音楽商品の普及。媒体は徐々に発達、多様化し、ライブよりもAV視聴二より重点を置く消費者も現れる。</p> <p>第12回 ネットダウンロードの発達。音楽商品が媒体抜きで販売される。このことでレコード・CDなどパッケージで売られていた商品が曲ごとに単独で売られることになった。</p> <p>第13回 現在の音楽状況。歴史的には社会階層ごとに好まれる音楽が異なっていて、国民全部が聴く音楽は存在しなかった。それが変化する。</p> <p>第14回 使い捨てとしてのポップス。音楽ではなく、付帯サービス(投票権、握手権など)を売る。多様な音楽ビジネスのビジネスモデルへ。</p> <p>第15回 講義のまとめ。</p>		
評価方法 (合計100%)	講義への参加態度	30%	
	レポート	70%	
失格条件	おおむね過半の出席		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	講義の進行とともに、様々な論点への言及が必要となるので、主体的に講義に関わるようにしてほしい。		
課題へのフィード バック	講義中のディスカッションによる		
教科書	なし		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	集中
授業科目名	事業創成論		
英訳科目名			
担当教員名	松谷 葉子		
ディプロマ・ポリシー1		ディプロマ・ポリシー2	
ディプロマ・ポリシー3		ディプロマ・ポリシー4	
ディプロマ・ポリシー5		ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	実際に起業した企業を事例に、事業を創るとはどのようなことなのかを学び、ビジネスプランを策定します。		
到達目標	1. ビジネスプランを書くことができる 2. 策定したビジネスプランをプレゼンテーションできる 3. 既存企業のビジネスプランに対し、自分なりの考えを述べるができる		
授業計画	第1回 オリエンテーション 第2回 事業領域とアイデア発想 第3回 マーケティング 第4回 外部リソースの使い方 第5回 資金調達 第6回 事業機会を分析する 第7回 財務戦略 第8回 製造業とは 第9回 技術経営戦略 第10回 技術マーケティング 第11回 ビジネスの成功とは？ 第12回 ビジネスプラン研究1 第13回 ビジネスプラン研究2 第14回 ビジネスプランの策定 第15回 プレゼンテーション		
評価方法 (合計100%)	レポート課題 80% プレゼンテーション評価 20%		
失格条件	ビジネスプランを提出しなかった者は失格とする		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	毎回出す課題をこなしてください。 ひとつずつ積み上げていく形の課題となりますので、欠席した場合も毎回の課題だけはこなすように努力してください。		
課題へのフィード バック	毎回の課題について、授業中にコメントします。		
教科書	ケースで学ぶ実践起業塾		
著者名	木谷哲夫		
出版社	日本経済新聞出版社		
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング		期間	前期
授業科目名	統計学		
英訳科目名			
担当教員名	甲斐 隆浩		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解>	ディプロマ・ポリシー2	<技能>
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力>	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度>
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度>	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	調査・収集したデータを、表計算ソフトを活用して解析する手法を学びます。 インターネット等を利用してデータの収集及び整理を行います。このデータをMicrosoft Excelの関数式やグラフ機能を利用して、様々な統計解析の結果を効率的に得るための手法の習得を目指します。		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・インターネット等を活用して基礎データを収集し、活用できる。 ・表計算ソフトを活用して統計資料を制作できる。 ・卒業研究における調査分析のための基礎的なデータ解析ができる。 		
授業計画	<p>※基本的に以下の流れを予定するが、履修生の修得状況に応じて講義内容を調整することがある。</p> <p>第1回 表計算とグラフの基礎 第2回 相対参照と絶対参照・関数の利用 第3回 平均値・中央値・最頻値 第4回 標準偏差・区間推定 第5回 正規分布・標準正規分布 第6回 累積確率・パレート図 第7回 小課題実習1（基礎～パレート分析） 第8回 Z検定 第9回 t検定 第10回 単回帰分析 第11回 重回帰分析 第12回 小課題実習2（検定～回帰分析） 第13回 相関係数・相関行列 第14回 損益分岐点 第15回 総合課題実習（統計資料の制作）</p>		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 30% 提出課題 70%（小課題20%×2本+総合課題30%）		
失格条件	課題の提出率が100%に満たない場合は失格とする。 出席回数が全体の3分の2に満たない場合は失格とする。 20分以上の遅刻は欠席とみなす。20分以内の遅刻は3回で欠席1回とみなす。		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	授業時にしっかりと実習のポイントを確認することが重要であり、これに基づいて統計分析ドキュメントを制作することで、統計分析技能がマスターできます。 ・授業で指示する統計分析ドキュメントを完成させること。（復習時間3時間） ・前回授業での学習内容を次の授業直前に見直しておくこと。（予習時間1時間）		
課題へのフィードバック	作品提出毎に、全体に向けて良い点・改善点を解説します。		
教科書	ビジネスで本当に使える 超 統計学		
著者名	村上知也 矢本成恒		
出版社	秀和システム		
参考書			
その他	実習において、パソコンでのExcelドキュメント制作を行います。各自でのデータ保存と管理のため、USBメモリ等の記録メディアが必要です。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	AP407A01	期間	後期
授業科目名	アートプロデュース演習 I		
英訳科目名	Art Produce Seminar I		
担当教員名	志村 聖子、橋田 光代		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ー	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ー
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> ◎	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> △
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> ○	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	音楽・舞台公演の制作を念頭におきながら、企画立案と制作の各プロセスに必要な基礎知識、考え方、手順を習得する。一定の制約条件や環境のもとで、企画を立案、実施するための基礎力を養う。		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽・舞台公演の制作、実施に必要な作業や目的について理解することができる。 ・具体的な制作業務にかかわりながら、基礎的なITスキルを身につけ、業務に応用することができる。 		
授業計画	第1回 公演制作の基礎知識（オリエンテーション） 第2回 公演制作の基礎知識（事業の目的・趣旨、ニーズを考える） 第3回 公演制作の基礎知識（企画立案に向けた課題、IT環境について） 第4回 公演制作の基礎知識（企画検討） 第5回 公演制作の基礎知識（プレゼンテーション） 第6回 音楽・舞台公演の制作（運営組織） 第7回 音楽・舞台公演の制作（予算、資金調達） 第8回 音楽・舞台公演の制作（広報） 第9回 音楽・舞台公演の制作（聴衆との関係を考える） 第10回 音楽・舞台公演の制作（プログラム、曲目解説） 第11回 公演の準備（進行確認） 第12回 公演の準備（リハーサル①） 第13回 公演の準備（リハーサル②） 第14回 公演の実施 第15回 振り返り		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度60% プレゼンテーション、レポートの評価40%		
失格条件	プレゼンテーションを実施しない、もしくはレポートを提出しない場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	日頃から様々な舞台公演や関連情報に接し、その企画の背景や意義等について考えを巡らせるよう、心がけて欲しい。		
課題へのフィード バック	演習での取り組みに関して、適宜、全体または個別にコメントする。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書			
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	AP407A02	期間	前期
授業科目名	アートプロデュース概説		
英訳科目名	Survey in Art Produce		
担当教員名	志村 聖子		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> -	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	アートプロデュースを学習する上で基盤となるアートマネジメントを入門編として学ぶ。 さまざまな芸術活動が実際の現場においてどのようなミッションのもとで運営されているのかを、具体例を通して学ぶ。		
到達目標	日本におけるアートマネジメントの担い手（実演団体、公立文化施設、推進支援組織）について具体例を取り上げながら、各団体のマネジメントの実際や課題について理解を深める。 単体の企画をプロデュースするにとどまらず、芸術活動を行う組織の運営のあり方を概観できる。		
授業計画	第1回 アートプロデュースとアートマネジメントの関係 第2回 アートマネジメントの歴史 第3回 非営利組織の特性 第4回 芸術文化に対する公的支援の根拠 第5回 実演団体におけるマネジメント①：オーケストラの現状 第6回 実演団体におけるマネジメント②：オペラ団体の現状 第7回 公立文化施設におけるマネジメント①：劇場・音楽ホール of 存在意義 第8回 公立文化施設におけるマネジメント②：劇場・音楽ホール of 役割と業務 第9回 公立文化施設におけるマネジメント③：指定管理者制度の問題点 第10回 推進支援組織とマネジメント①：アートNPOの現状 第11回 推進支援組織とマネジメント②：企業メセナの現状 第12回 アートマネジメントの課題①社会包摂 第13回 アートマネジメントの課題②文化的多様性 第14回 事例発表① 第15回 事例発表②		
評価方法 (合計100%)	授業への参加態度 50% 授業内提出物 30% 最終レポート 20%		
失格条件	出席回数が3分の2に満たない場合 最終レポートを提出しない場合		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	・予習：講義で紹介する文献を次回講義までに読んでおくこと（予習時間：1時間）。 ・当日：毎回の講義で理解度を確認するため、簡単なレポートを実施する。 ・復習：講義の内容について理解を深めるため、指定したテーマについて情報収集やレポート作成を行うこと（復習時間：3時間）。		
課題へのフィードバック	授業内に各発表についてコメントし、全体で共有します。		
教科書	アーツ・マネジメント概論		
著者名	伊藤裕夫、片山泰輔、小林真理 ほか		
出版社	水曜社		
参考書			
その他	日頃より公演や作品に対する情報を収集し、実際に鑑賞するなど、自分の目と耳で体験するよう心がけて欲しい。		
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	CM408A05/AP407A04	期間	前期
授業科目名	音響学 A		
英訳科目名	Acoustics and Recording A		
担当教員名	永松 ゆか		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ○	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	音を科学の視点から捉え、その基本的な性質や仕組みについて学ぶ。 本講義では、テクノロジーを用いた音楽を理解する際に有用な音響学の基礎項目を主なものとして扱う。		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> 音の基本的な性質や仕組みについて理解することができる。 音とテクノロジーの関係について理解を深めることができる。 		
授業計画	第1回 イン트로ダクション 第2回 音の高さ 第3回 音の大きさ 第4回 音色 第5回 音の性質 第6回 サイン波（純音） 第7回 サイン波（重ね合わせ） 第8回 周波数分析 第9回 サンプリング 第10回 可聴範囲 第11回 両耳聴効果 第12回 聴覚による知覚 第13回 音の記録 第14回 音の再生 第15回 まとめ - 到達度の確認 -		
評価方法 (合計100%)	<ul style="list-style-type: none"> 授業への参加態度 50% 授業内提出物 20% 最終試験30% 		
失格条件	5回以上の欠席（30分を越える遅刻は欠席、遅刻3回で1回の欠席とする。）		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<ul style="list-style-type: none"> 講義で紹介する文献・資料を読む 予習2時間 授業で教わった内容を改めて自分で理解する 復習2時間 		
課題へのフィード バック	授業内の提出物については、必要に応じて個別もしくは全体にコメントします。 最終試験については、必要に応じてポータルサイトにて解答・解説を加えます。		
教科書	適宜資料を配布します。		
著者名			
出版社			
参考書	適宜紹介します。		
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	CM408A06/AP407A05	期間	後期
授業科目名	音響学B		
英訳科目名	Acoustics and Recording B		
担当教員名	永松 ゆか		
ディプロマ・ポリシー-1	<知識・理解> ○	ディプロマ・ポリシー-2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー-3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー-4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー-5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー-6	
授業概要・ポイント	音響学Aの応用として、「音」の世界を科学、心理、社会、芸術など様々な角度・分野から包括的に学ぶ。また、身近にある音に対する興味・関心を広げ、分析・考察する力を養う。		
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・暮らしを取り巻く音について理解を深めることができる。 ・身の周りの音について自らの興味や疑問を持ち、分析・考察することができる。 		
授業計画	第1回 イン트로ダクション 第2回 アナログとデジタル 第3回 楽器の音（アナログ） 第4回 楽器の音（デジタル） 第5回 環境音（サウンドスケープ） 第6回 環境音（騒音） 第7回 音と空間（ホール） 第8回 音と空間（野外・都市） 第9回 音と空間（スピーカー） 第10回 音響機材 第11回 テクノロジーを用いた音楽制作 第12回 音のデザイン（製品） 第13回 音のデザイン（サウンドスケープ・デザイン） 第14回 音のデザイン（音楽） 第15回 最終レポート - 到達度の確認 -		
評価方法 (合計100%)	<ul style="list-style-type: none"> ・授業への参加態度 50% ・授業内提出物 20% ・最終レポート 30% 		
失格条件	5回以上の欠席（30分を越える遅刻は欠席、遅刻3回で1回の欠席とする。）		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	<ul style="list-style-type: none"> ・講義で紹介する文献・資料を読む 予習 1時間 ・授業で教わった内容を改めて自分で理解する 復習 1時間 ・身の回りの音について興味関心を持ち、気になったことはメモ、分析・考察する。 自習 2時間 		
課題へのフィード バック	授業内の提出物については、必要に応じて個別もしくは全体にコメントします。レポートについては、必要に応じてポータルサイトにて解答・解説を加えます。		
教科書	適宜資料を配布します。		
著者名			
出版社			
参考書	適宜紹介します。		
その他			
備考			
科目生への開講	なし		

ナンバリング	AP407A08	期間	後期
授業科目名	レコーディング・エディットB		
英訳科目名	Recording & Editing B		
担当教員名	能美 亮士		
ディプロマ・ポリシー1	<知識・理解> ○	ディプロマ・ポリシー2	<技能> ◎
ディプロマ・ポリシー3	<思考力・判断力・表現力> -	ディプロマ・ポリシー4	<関心・意欲・態度> -
ディプロマ・ポリシー5	<関心・意欲・態度> -	ディプロマ・ポリシー6	
授業概要・ポイント	音楽に電気音響テクノロジーが援用されるようになり1世紀以上が経過している。 本講義では、電気音響テクノロジーによる音声の拡声原理や音響機器の操作方法を学ぶとともに、これらの技術を概観する。また、舞台機構調整技能士3級 実技試験の試験対策を兼ねた内容となる。		
到達目標	マイクロフォン、アンプ、スピーカー、ミキサーといった音響機器を用い、音や音楽を拡声する基礎技術を取得できる。		
授業計画	第1回 音楽と電気技術の歴史 第2回 システム セットアップ - 基礎システム - 第3回 音の拡声とスピーカーの解説 第4回 音の收音とマイクロフォンの解説 第5回 システム セットアップ - 簡易システム - 第6回 音声ケーブルの解説 第7回 ライブ・コンソールの解説 - 基礎編 - 第8回 ライブ・コンソールの解説 - 応用編 - 第9回 システム セットアップ - 音楽システム - 第10回 音の拡声とアンプリファイアの解説 第11回 オーディオ・プロセッサとモニターシステムの解説 第12回 ブロックダイアグラムの作成 第13回 タイムスケジュールとオペレーティング 第14回 試験 - 内容理解の確認 - 第15回 まとめ		
評価方法 (合計100%)	・授業への参加態度 70% ・試験 30%		
失格条件	4回以上の欠席		
予習・復讐の準備 学習などのアドバイス	・講義で紹介する文献・資料に関して、事前に目を通しておくこと（予習2時間） ・講義で習得した技術について、学校や身の回りにある音響機器、およびソフトウェアなどを用いて熟知すること（復習2時間）		
課題へのフィード バック	試験後の授業にて、全体に向けてコメントします。		
教科書	不使用		
著者名			
出版社			
参考書	適時指示します。		
その他	特になし		
備考	音響エンジニアとしての実務経験をもとに、この授業を進めます。		
科目生への開講	なし		